

Dreamer of Drummer

ソウソウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼の名前は「山吹蒼真」。現在、ドラマーとしてバンド活動中の現役高校生。

ふとした時から蒼真は五人のドラマー少女達と関わることになっていく。

パン屋の娘。イケメン女子。クラゲ大好き少女。中二病ツインテール。機材オタク。これから綴られる物語は彼と彼女達との淡い恋模様の日常を描いたものである。

注意）目次に表記してある*↑これ。

例えば、

—1の1—『ドラマーの集い』*↑その話の投稿状態が完結済みを示しています。

※主にドラママーの子達を焦点に当てた小説の予定です。とは言え、他の子達も普通に
出てきますのでご安心を。

目次

全員編

— 1の1 — 『ドラママーの集い』*

1

— 1の2 — 10

— 3の1 — 『エキサイティングな学祭』

*

— * — 26

— 3の2 — 42

— 3の3 — 54

— 4の1 — 『アークラの日常』*

78

— 4の2 — 88

— 5の1 — 『ライブハウスで対決』

98

— 5の2 —

— 5の3 —

— 5の4 —

山吹沙綾編

— 1の1 — 『師弟関係』*

— 1の2 —

— 2の1 — 『強制連行』*

— 2の2 —

— 3の1 — 『緊急看病』*

— 3の2 —

— 3の3 —

— 4の1 — 『温泉旅行』*

137 126 112

241 231 216 204 191 175 162 149

4 の 1	『本音魂』	398
3 の 3		384
3 の 2		369
3 の 1	『遊園地』 *	355
2 の 2		338
2 の 1	『対決色』 *	327
1 の 3		315
1 の 2		302
1 の 1	『和太鼓』 *	291
宇田川巴編		
5 の 1	『絶対領域』	281
4 の 3		271
4 の 2		256

3 の 3		505
3 の 2		493
483		
3 の 1	『疑惑のシスター』 *	470
2 の 2		
458		
2 の 1	『狩猟のゲーム』 *	
1 の 3		445
1 の 2		434
421		
1 の 1	『最強のドラム』 *	
宇田川あこ編		
4 の 2		409

3の1 | 『consultatio』
 2の3 |
 2の2 |

594 583

573

2の1 | 『Shopping』*
 1の3 |
 1の2 |

561 549

537

1の1 | 『Aquarium』*

*

松原花音編

4の2 |

528

519

4の1 | 『真夏のラバー』*

*

2の1 | 『ドラム図鑑』*
 1の2 |
 1の1 | 『モデル撮影』*

734 720 711

大和麻弥編

5の3 |
 5の2 |
 5の1 | 『Proof』*
 4の4 |
 4の3 |
 4の2 |

700 682 675 659 645 632

618

4の1 | 『Breaker』*

*

n | 『*』
 608

— 2の2 —	744
— 2の3 —	753
— 3の1 — 『レッツ密着!』*	766
— 3の2 —	779
— 3の3 —	794
— 4の1 — 『デート作戦』*	806
— 4の2 —	816
— 4の3 —	827
— 5の1 — 『ハート内閣』	841
— 5の2 —	850
二葉つくし編	
— 1の1 — 「もしかして初心者の子	

— 1の2 — 「私にドラムを教えてください」	859
— さい!! —	870
— 1の3 — 「あ、あの!! 師匠!」	880
特別編	
— 沙綾大人編 — 1 — 『同棲生活』	893
— 沙綾大人編 — 2 — 『早朝対戦』	907
— 巴大人編 — 1 — 『誕生日』	919
— あこ大人編 — 1 — 『努力のフィナーレ』	934

あこ大人編―2―『会見のマーチ』

949

花音大人編―1―『Misunder

standing』

961

麻弥大人編―1―『ライブ報告』

975

麻弥大人編―2―『ライブ配信』

987

麻弥大人編―3―『ストーリーカー事件』

1003

コラボ編―1―『Rhodanthé』

1023

コラボ編―2―『有咲の受難』

1043

短編集―1―

1058

全員編

――1の1――『ドラマーの集い』*



――1〔Drummer〕――

バンドにおいて軸となりうるパートの担当者。ベースと合わせて、リズム体と呼ばれるドラムは他のパートが演奏しやすいように安定したリズムを刻むことが求められる。ついでに音だけは目立つ。またスペースを多くとってしまふ為、ステージの後ろに配置されるのが定番となっており、ドラムはある意味メンバーの背中也観客の姿もくつきり観れる超お得な指定席でもある。

が、ドラマー自体の絶対数は比較的少ない方と言える。原因は数多く挙げられるが、特に殆んどのドラマー達が直面してしまふのが――

練習場所どうしよう……である。

配置スペースの確保問題、騒音問題。その他色々。

大抵の人は近くのスタジオまで赴き、ドラム専用部屋で練習することが多い。とは言えギターやベースとは違い、家で触ることすら出来ない。上達には時間がかかる。

それでは何故、ドラマーは存在するのか。

—— 勿論、叩くのが楽しいからだ。

自分の全身で刻むビートにギターやベースの音色が付き、そこにボーカルや観客のコールで一気に押さえきれない感情が昂つてしまう。一度味わってしまったら忘れることの出来ないその感覚を求めて、またドラマーと言うのはドラムを叩き初めてしまう生き物なのだ。

「——ウ君。山吹蒼真くん？」

……うん。現実逃避はここまでか。

「なあああにかあなあ？」

「超不満げな返事だね」

隣に座る彼女に苦笑された。

彼女の名前は、山吹沙綾。この集まったメンバーの中で唯一と言って良い、俺の友達である。後の人達は初対面、いや正確にはライブの時に顔を拝見済みだから違うか。

「もう皆揃ったから始まるよ？」

「何が」

「えっと……ほら、自己紹介的な？」

「それもそうやな」

顔見知りとは言え、互いに名前すら知らない状況なので自己紹介は必須と言える。

ただ俺が最も気にしているのは自分のいるテーブルを囲んでいるのが――

「これで……全員？」

「そうだよ？」

沙綾に確認を恐る恐る取ると、それが何か？と言いたげな返事をされた。君もその内の一人だから分からないだろうね。

自分を除いて、席に座るのは計五人。

まあテーブルも大きめだからスペース的には平気。

問題は……五人とも女性だということ。若干一名イケメン風がいるので断定しにくい。

なんともまあオーラがやんわりと……的な感想を抱いている俺はガールズトークに巻き込まれた少年のような居心地の悪さにより、既に思考放棄しそうになっていた。

元々、予想はしていた。だって、ライブの時も控え室にいた男が俺らのバンドメンバーだけだったからだ。後から知ったけどどうやらガールズバンドのイベントにメンズゲストとして呼ばれたのが俺らのバンドだったよう。そういうの先に言おうよ。

沙綾経由に誘われた今回の集いもまさかあの時のライブに出たドラマー達が集まる

のかな？とはうつすらと感じていたが……………。

「んじゃあ、始めるか」

一人が立ち上がり、全員の視線がそちらへ集まる。俺の隣の人なので、ちよつと視線の場所が困る。

うん、イケメンだ。女性にこんなこと言うのは違うかもしれないけど彼女に対しての第一印象はそんな感じ。

「各々忙しいと思うけど今日は集まってくれてありがとう。まずはそうだな……………自己紹介も兼ねて自分の名前と学校、それに折角だから一言付け加えても構わない」

え、なに言おう。

「まずはアタシから」

言い出しつぺの法則からなのか、イケメンさんから始まるようだ。

「名前は巴。宇田川巴。羽丘女子学園高等部一年。」 Aftergrow ”のドラムをします。ドラムは中学の頃からずっと。よろしく願います」

” Aftergrow ”ってバンドは確か曲がロック調だったりポップ調だったり、と多彩な音色が印象的だったバンドだ。

パチパチ、と拍手音が飛び出る。

ん？……………一年生!?

「時計回りにいくと次はジブンスね」

続いて席を立ったのは眼鏡をかけた少女。

「羽丘女子学園2年生、後ろから読んでもやまとまや。大和麻弥と言います。”Pastel*Palette”でのドラムをさせて貰ってます。一応プロのスタジオミュージシャンでもありますが……この前のライブで皆さんのドラミングを見せてもらってまだまだ未熟者と痛感しました！また、こうして同じドラマー同士が集まるのもジブンは初めてなので少し緊張しますが今日はよろしくお願いします！」

”Pastel*Palette”は確かテレビでもアイドル達が立ち上げたとして話題になっていいるバンドだ。結成当初のライブでは色々問題も引き起こしていたようだが、この前のライブを見た感じでは十分彼女らの曲を楽しめるほど演奏技術は高いと感じていた。

大和さんのドラムは、徹底的にメンバーを支える、そんな雰囲気ドラムであったと感じた。流石、プロ。

「……………わ、私の番……………」

次は水髪のサイドテール少女。

「初めまして、松原花音と言います……………」

おどおどとした態度の少女。ちらちらとこつちを見てくるんだが、そんなに俺が珍し

いのだろうか。

「えつと……………花咲川女子学園高校二年生で”ハロー、ハッピーワールド”のドラム担当です。よろしくお願ひします……………」

”ハロー、ハッピーワールド!”。

初見だったが、彼女らの演奏は個性の塊であった、と思わざるを得なかった。そもそもメンバーにDJが居るだけでもインパクトが強いのにそのDJがぬいぐるみで登場したもんだから違和感が凄かった。

が、実際は演奏が始まると全員の個性が混ざりあつて奏でられ、一つの曲が成り立つのだ。世の中不思議なものだ。

「ふふふ……………ようやくか」

ちよつと痛そうな予感。

「わらわは羽丘女子学園中等部三年、宇田川あこ、なるぞ!!私の属する”Roselia”では曲の魂を四肢を使い刻んでおる!!それから!!……………それから……………えつとおくん?あれ、台詞が止まった。

と思つたら宇田川さんの方にその視線が流れていき——

「お姉ちゃ〜ん、何言えばいいんだっけえ〜」

「はあ……………あ……………」

「はっ！闇に飲まれよ！……………だったかなあ……………？」

「恥ずかしながらアタシの妹でもあるのであこ共々よろしく願います」

「……………よろしく願います」

姉の呆れた様子を悟ったのか、丁寧にお辞儀までして挨拶した妹。うん、良い判断だ。根は素直でいい子そう。ドラムも上手いし。

とは言え、“Roselia”はガールズバンドの中でも特に注目度がトップの実力派のバンドだ。特徴的なボーカルに負けず劣らずの楽器陣の演奏力の高さ。どれも取っても引けを見せない彼女達のライブは既にプロレベルに達していると言っても過言ではないだろう。

てか、まさかあの二人がドラム好き姉妹だとは。よくよく見てみれば、似てる部分も確かにあるかも。

「えつと……………」

おっと、次はちゃんと聞かないと。どんな目に遭うのかは知りたくもない。なんか彼女がチラツとこつち見たのは気のせい。

「山吹沙綾です。”popin, party”のドラムを担当させてもらってます。山吹ベーカー共々こ鼻頂のほど、よろしく願いますね」

「ちやつかり宣伝してる……………」

「何か言った？」

「いえ、何も」

もう完全に商売人の域じゃないですか。

そんな感想も隣の視線が怖いので静かに心の棚へそつと仕舞う。

「あ、花咲川女子学園高校一年生ですのでお気軽に話しかけてください」

最後に付け足して、沙綾は着席した。

そして一気に浴びるのは女子ドラマー達の視線。

ついにやってきたのだ。俺の出番が。

「……………ふう」

一呼吸して立ち上がる。

「山吹蒼真です。あ、先に言っておくと隣のこの野郎は従妹です」

「野郎じゃないから！」

「……………そこ？……………高校二年生でドラム歴は四年ちよい。今回、唯一の男性というこ

とでどうか手柔らかにお願いします」

「あ、すみません。質問良いでしょうか？」

「うん？大和さんだっけ？どうぞ」

「麻弥で良いですよ。それで質問なんです、山吹さんのバンドつてもしかしてこの

前——」

「あくその話は後でも良いかな？」

「えっ？あ、はいっす」

彼女には悪いけど、仕方ない。

勿論、理由があつて今話すとややこしくなってしまう。

「自己紹介はこれで全員かな………んじゃ、皆さん。グラスを」

イケメンさんの合図に皆が各自注文しておいた飲み物が入ったグラスを手取る。

「では………合同ライブの成功とドラマーの新たな出会いを祝つて、乾杯！」

おお、粋なことを言うね。

無論、後続く全員の言葉も自然と揃う。

「」「」「乾杯！」「」「」

——1の2——へ続く

— 1 の 2 —



山吹沙綾の場合。

「もう帰ろうや……………」

「早い早い。まだ始まったばっかだよ?」

そうは言うが、とばかりに睨む蒼真。

もう想像以上に精神面がガリガリと削られるのだ。相手が女の子だらけ、というのもあるが全員が美少女で緊張してしまうのも理由の一つである。

今は乾杯を終えて、各自で相手を見つけて会話をこなす時間帯。中には食事に集中している子もいる。

全体を軽く見回した蒼真は一言。

「さーちゃんが居てくれて良かった」

「え?……………急にどうしたの?」

「んにゃ、こうやってみると、知っとる人がおって気持ち的に楽やから」

「……………ああ、そういうこと。確かにここにいる皆、綺麗だもんね」

「あれ？怒っとる？」

「ん？怒ってないよ？」

「いやいや、怒ってますやん。」

とも言えずじまいの臆病者、蒼真に沙綾はじつと見つめていた。

「因みにどの子がタイプ？」

「……………さーちゃん？何を聞いてるのかな？」

「今すぐ答えること。さもないと、私、ここから離れて他の子と話に行くよ？」

「それは……………あれやん。ちよつとタンマ」

「さあて誰を選ぶのかなあ？」

沙綾は悪魔の笑みで脅す。

蒼真にとって、此処は唯一の居場所。無くす訳にはいかない。でも、答えようによつちや、彼女の中の爆弾を着火させる可能性もあり迂闊に答えられない。

背筋が凍る感覚に遭いながらも蒼真は慎重に動く。

「妹キャラ……………いや、癒し系か？それとも姉御さん枠か……………オタク系も捨てがたいな……………」

「真面目に考え出したよ……………」

じつと黙考に入つた蒼真。沙綾もここまでするとは思わず、つい心の本音が漏れてし

まっていた。

「決めた」

「お？」

「さーちゃんかな」

「おお………わ、私!？」

またしても沙綾にとってこれは想定外の返答。

たまらず沙綾が取った行動は言葉に出してしまい、慌てて口元を抑えることであつた。

そんな沙綾の苦悩も露知らず、蒼真は理由を話し出す。

「やっぱ隣にいて安心するからやな。さーちゃんは昔からの親友の付き合いやし」

「親友………親友だよ、うん………」

「ん？流石に、これじゃ駄目よなつてー」

蒼真の自問自答の最中、沙綾は唐突にその場を立ち上がる。

「ううん！全然！ありがとね！」

そして、沙綾は彼の元を逃げるように去っていった。

恥ずかしかった。が、それ以上に沙綾はそこに悔しい気持ちも紛れ込んでいたのを感じてしまった。

親友。それ以上でも以下でもない言葉。

選ばれたとは言え、それは幼馴染みが理由であって蒼真が本当に異性のタイプとして選んだかは定かではない。

それでも、それでもだ。沙綾にとっては嬉しいことに変わりはない。

結果的に本人には悪いが、沙綾は蒼真と顔を合わせる余裕を一瞬でなくしてしまった。

ポツンと一人取り残された蒼真。

「……………結局、行くんかい……………」

質問の結末はどっちにしろ同じ。

蒼真の儂い突っ込みは誰にも届くことはなかった。

◇

宇田川巴の場合。

「隣良いですか？」

「どうぞ」

淡く飲み物を嗜んでる蒼真に一人の女性が話し掛ける。

”宇田川巴”の名前を持つ彼女は先程まで沙綾が座っていた席に腰かけた。

「ぶはあゝ……………うめえな」

「お茶……………ですよね？」

「そりゃあね。未成年やし」

完全に酒飲みの態度を目撃した巴。

思わず分かっていると見え、確認をとるぐらい、彼の仕草は様になっていた。

「合同ライブお疲れさまです」

「お疲れ様です」

「あたし、後輩なので敬語はなしで良いですよ？」

「お、なら遠慮なく」

やっぱりイケメンタイプだあ。

以上が現在の蒼真の脳内思考の様子。

「宇田川さんはあれかい？ライブを見たら相当ドラムに慣れてた感じやけど、相当個人で練習するタイプ？」

「そうですね……………暇があれば叩いてます」

「やと思った」

「そう言う山吹先輩も結構やってるんじゃないですか？」

「まあ……………人並みかな」

彼女のドラマスタイルを観た蒼真が第一に感じたのは基礎がしっかりしているということだ。

リズムも曲を通して比較的安定していた。これはドラマーにとって大事な要素のひとつだ。

「とうるか……………山吹先輩ってちょっと複雑ですね……………」

「ん？そうか。さーちゃんと同い年か。確かにややこしいな」

「さーちゃん？」

「あ、沙綾の事ね。なんなら俺の事は名前呼びでも全然構わんからお好きにどうぞ」

「なら、あたしも巴と呼んでくれた方がありがたいです。妹のあこと交ざってしまうんで」

「了解」

年長者的な立ち位置の二人。

案外、お互いに通じる物があるのかもしれない。

やがて、話題は巴のバンドについて。蒼真が気になっていたことを切り出した。

「Aftergrowってさ……あ、気に触ったらごめんな。なんか、王道ロックを突っ走ってるよな？」

「あくそれはですね、ウチのボーカルがそういう曲が大好きなせいですね。お陰様で」

「へえ……赤いメツシュの子か」

「そうです、そうです。蘭って言います」

「そやな……たまには路線を替えてみるのも面白いよって言っておいて」

「え？あ、はい。分かりました」

「正直、あの子にはあんまり意味分かんと思うんやけど……」

巴はどうしてなのか分からなかった。

自身のバンドの方針を否定するような言い草だが、そこに悪意はなくただ単に親切心でアドバイスしてくれているのだけは伝わっていたので彼の助言を大人しく聞いていた。

蒼真は不敵な笑みを浮かべる。

「一応、念のため……ね」



宇田川あこの場合。

「ふふふ、いぎ、妾と嗜好の宴を合わせるのだ」

いつかこの子と相對するとは思っていた。

私、いかにも中二病だ、な台詞を現在進行形で吐き散らかすこの少女はこの集いで最年少のドラマーさん。

” 宇田川あこ”。 巴の妹。

「はい、乾杯ね。 かんぱい」

蒼真は通常モードで彼女の持つオレンジジュース入りグラスに自らのメロンソーダ入りのグラスを当てて。

コツン、と響く音。 なんの編鉄もない一連の動作のはずだが、あこは停止したまま機能しない。

「わ、分かるんですか……?!?」

「分かるって何が?……ああ、その話し方ね」

「まさか、先輩も世界裏の住人……!?」

「違うね。うん、違うから」

実は半分、正解でもある。

今は違えど、中二病は男の誰もが一度は通る道だと思っている蒼真にとって、あこの話す言葉の解釈など朝飯前だ。

あこにとって蒼真はりりんりに続く、共鳴者であることをこの時、悟る。

「その調子やとゲーム好き?」

「はい!もしかして先輩もですか?」

「……NFO」

「っ!?それは!!」

蒼真のその一言が、あこの目をキラキラと輝かせる。

「今のイベント、結構きつない?」

「ですよね!?分かります!!」

「素材が全然落ちん」

「うんうん!!」

あこが彼に気を許した瞬間である。

「蒼真先輩!! っってお呼びしてもよろしいでしょうか!!」

「良いぞ。——あこちゃん」

「私の名前……前世から覚えてくれてたんですね……」

「いやいやいや、さつき君のお姉ちゃんから聞いただけやから」

「なあ〜んだ〜。そうですか〜」

そこまで残念がらなくても、な落ち込みぶりを見せるあこに蒼真もつい自分が悪いのかどうか惑わされてくる。

「今度一緒にゲームやろうか」

「そうですね。あ、もし良ければですけど、あこの友達も誘って良いですか?」

「そうやね。予定が合えばその子ともやろう」

「はいー!」

根は素直で良い子。

それが蒼真があこに対しての第一印象であった。

◇ 松原花音の場合。

「……………」

「……………」

静寂が訪れる。

静かな空間に慣れていく蒼真でさえ、この状況に焦りを感じていた。

「初めまして。蒼真です」

「は、初めまして……………松原花音……………です」

明らかに怯えられている。

そう感じた蒼真は優しく接することを心掛けるようになる。

「うくん……………男は苦手？」

「そんなことはない……………です。あまり話す機会がなくて、それで……………」

「緊張してしまおう？」

「……………はい」

なら、と蒼真はある話題を。

「松原さんだっけ？」

「え？あ、はい」

「松原さんはどうしてあのバンドに？」

「ハロハピですか？」

「そうそう。ああいうバンドは滅多に見ないからね。そこに松原さんが入る経緯が気になって」

「やつぱり……………私じゃ果たせないですよね……………」

「ん？……………ん!？」

やばい方向に話が進んでる。そんな気がしてならない蒼真。

「そんなことはないと思う」

「え?」

「あの奇想天外なメンバーの中で松原さんは個性を失わずにちゃんと一員としてドラマーとしてっているんやから。そんな自信なさげにするんじゃないやなくて、ちゃんと誇るべきやぞ」

「あ、ありがとうございます……………」

蒼真は本心から言っている。

花音は彼の表情、言葉から伝わってくる真剣さ。そして、相手から誉め慣れていない

のでこういう耐性がまったくない。

以上の理由から、思わず顔を伏せてしまうほどの照れようを見せてしまう。

「それで切っ掛けの話の話を聞いてもいいかな？」

「はい！ハロハピに入るきっかけはこころちゃん……あ！ボーカルの子が誘ってくれたお陰ですね。私、一度ドラム自体を辞めようとしてた時期がありまして、その時に――」

緊張を解すのには、その子が話しやすい話題を提供するのがセオリー。

過去に学んだ教訓を蒼真は無事活かすことが出来た。



大和麻弥の場合。

「それでですね！蒼真さん」

「ん？何？」

集会も終盤にかかる頃。

蒼真は大和麻弥と言う少女と会話をしていた。

「蒼真さん、ドラムお上手ですね！合同ライブの際にお手並みを拝見させて貰いましたけど流石です！」

「いやあくありがとやわ〜」

「ジブン、実はずっと前からお会いしたかったんです」

「そうなん？」

「はい！蒼真さんの叩いた動画を偶然なんですけど見させてもらって、動画越しに分かります!!蒼真さんのあの繊細な技術!!」

「ありがとな。あく……………あれね。あれかあ〜」

昔の企画の中に、それぞれのパートの演奏動画を四分割した画面に当てはめて動画にする物があった。そこに蒼真も参加した記憶があった。

ただ、超ノリノリでドラムを叩いているので今でも見直すのが怖い蒼真の苦い思い出。

「蒼真さんって機材は何を持ってるんですか？」

「機材？ちよつと待ってね……………」

「あつ……………ジブン、質問ばかりで申し訳ないです……………」

「それは良いんやけど……むしろ嬉しいくらいやぞ。あつたあつた」
蒼真はスマホの画面を麻弥に見せる。

「おっ!!これは!!」

「むっちや高かった」

画面に蒼真が購入したスネアの写真があつた。

「なら、ジブンもこちらを……」

と、麻弥も対抗心からなのか彼に写真を提示。

「これは……っ!!」

「他にもありますよ。最近ではそうですね……スプラッシュとか増えました!」

「えー!これ、俺が欲しかったやつやん!」

「ですよね!?!残響音が良いんですよ、これ!」

「ふふふ……俺も買ったんだよ、チャイナ。これだ!どうだ!」

「なんですとお!?!流石です、蒼真さん……」

——もう端から見れば二人が何なのか分からない。

「同士!」

「はい、同士!」

がっちり握手した二人を見れば、誰だっけとそう思うだろう。

全員編——『ドラママの集い』終

— 3の1 — 『エキサイティングな学祭』 ＊

◇◇◇

山吹ベーカー。]

「え？ソウ君の学校の学祭があるの？」

沙綾の耳にその情報が飛び込んだのは夕刻頃にお店に訪ねていた蒼真本人からの口によるものだ。

そう言えば、蒼真の通う高校をあまり知らないと思いついた沙綾。この際なので、直接行ってみたいという気持ちが高ぶってくる。

「そりゃあるよ。時期はちよつと違うけど」

「いつ？」

「確か………来週の金、土やな。金曜が生徒だけの学園祭で、土曜は外部からの招待客も来るそうなんやって」

「来週かく。ライブとかもあるの？」

「あるね。土曜は俺らがトリをする」

「え!?トリ!?凄い!!」

金曜は沙綾にも学校がある。でも、土曜の予定は今の所無し。バンド練習などが入ってくるかもしれないが沙綾は特に問題ないと判断した。

最悪、香澄達に蒼真の学園祭へ行こうと誘えば良いからだ。最大の難関の有咲もライブの参考に一緒に観に行こうと誘えば文句の眩きは免れないが、ちゃんと付いてきてくれるはず。

「まさか、さーちゃん、来んの……………」

「え……………何、その言い方」

「まあ……………大丈夫か」

「何?え?何?」

含みのある蒼真の頷きに沙綾は問い詰める。

「とは言え、彼がこれごときで白状するとは思えない。大抵、話をそらしたりして言い逃れる。」

「来てくれても良いよ。ただ、俺当日は忙しいから案内は出来んけど」

「あ、それなら全然大丈夫。ソウ君の学園祭観に行くね」

「はいはい。これの会計お願い」

「もう、適当なんだから。合計で480円だよ」

「ま、でも、さーちゃんが来るんなら全力でドラムはやるよ」

「ふふふ、それは楽しみだね。はい、お釣り」

「んじゃ、また」

「うん、またね」

購入したパンが入った袋をぶら下げ、蒼真は店の扉を開ける。

学園祭まで後、10日。



C i R C L E。受付前。

「ありがとうございまーす」

バンドの子達がバイバイと手を降って来るので小さく微笑んで手を振り返す蒼真。

はい。蒼真、只今バイト中です。

久しぶりの業務。長期休暇をくれたオーナーに感謝をしつつ、忘れかけていた仕事をどうにかこなしていた蒼真はやがて、先程の子達が見えなくなると一息つく。

「ふう〜」

「あ、ソウマじゃない！」

「その声は……………!!」

入れ違いに入ってきたのはハロハピの子達。

中でも筆頭して受付前まで突撃してきたはボーカルの”弦巻こころ”であった。他の子達も歩いて近づいてきてはいるが、こころの相手だけで手一杯だ。

「こんな所で会うとは珍しいわね！ソウマ、ここで働いてるの？」

「まあね。最近復活したばかりやけど」

「ソウマ……………聞いたことがある名だ」

「薫さん。山吹さんとは合同ライブで共演しましたけど、覚えてないですか？」

「はぐみは覚えてるよ!!」

「はいはい。はぐみさん、騒ぐのはスタジオ入ってからね〜」

目まぐるしいほど個性揃いのメンバーを軽くあしらっていく一人の女の子の存在が目立つ。

その女の子——”奥沢美咲”はハロハピではピンク色の熊のようなキャラ”ミツシエル”の着ぐるみを着て、DJを担当する器用な子だ。

他にもこころ、薫、はぐみの暴走を抑制する大切なストッパーでもある。

「大事な事を私、思い出したわ、ソウマ！」

「ハロハピは今日Aスタジオだぞ」

「今度、ソウマの学校で文化祭があるんでしょ？」

「おおっと、完全無視ですね、はい。ん？どこで聞いたんだ？そんな情報」

「うーん………どこだったかしら？とにかく！私達もライブ観に行くことにしたわ！」

もう止められないこころに蒼真は無心になる。

一部始終を見ていた美咲は静かに彼にご迷惑をおかけしますと両手を合わせていた。

「さて、Aスタジオね！皆、行くわよ！」

「………そこは聞いてたんか」

蒼真の突っ込みは勿論、スルー。

「私は予言する。今日の練習でまた一段と私は儂き存在へと変貌するだろう、と」

「はぐみも頑張っちゃうよ！」

「おーい。二人ともまだ楽器を持つのは早いですよー」

通称、三バカトリオは今日も通常運転である。美咲もお疲れ様である。

そして、嵐のあとの静けさ張りに静寂を感じる蒼真であったが忘れていないことだであった。

「花音ちゃんが行かんの？」

「えっ……あつ、うん。蒼真君に聞きたいことがあつて……」

「俺に？」

今までずっと一番後ろを陣取っていた花音も一人だけとなったので蒼真の元へ近付いてきていた。

どこか他人行儀な花音に蒼真も不思議そうに彼女の言葉を待つ。

「学園祭に蒼真君のバンドも出るの？」

「二日目のトリでね。存分に暴れる予定やで」

「なら、私！絶対に観に行くから！」

「お、おう」

「あつ……じゃあ私、皆待つてるから、もう……」

急な宣言に驚いた蒼真。

花音も自身の予想以上の声の大きさに恥ずかしくなってしまった。その場から逃げようにスタジオへと早足で去ってしまう。

その花音の後ろ姿を何となく目で追っていた蒼真。かと思えば、花音が引き返して

戻ってきているのが視界に映る。

やがて、蒼真の前へと戻ってきた花音は気まずそうに顔をあげる。

「あの、蒼真君の学校って……どこかな？」

学園祭まで後、8日。



C i R C L E。受付前。

「おっ、蒼真先輩じゃないですか」

ハロハピがスタジオ練習に来た日とはまた別の日。今度はアフロのメンバーの子達

が姿を見せる。

全員が自分の楽器を背負っており、まさにバンドマンのオーラを醸し出していた。

一人の少女が一步前へ出てきた。

「お久しぶりです!」

「えつと……ひまわりちゃん!」

「おしい! ひまりです!」

「わーほんとだー」

蒼真は名前を覚えのが苦手。

「後は分かるぞ。青葉に蘭ちゃんに巴、それと……」

最後の一人、つぐの瞳がキラキラと光る。

「珈琲の看板娘やな」

「合ってるけどなんか違う! つぐみ、ですう! 蒼真君、よくお店に来てくださってるじゃないですか!」

「流石蒼真さん、つぐってる」

「モカちゃん!? それ、どういう意味!?!」

すまない、羽沢珈琲店の娘。

「それはそうと一人だけ名字呼びなのは人一倍優しいモカちゃんでもショック」

「はいはい……………今度からね」

「むう〜しようがないなく許してあげよう」

「モカ、誰目線で話してんの」

これとは別にまた独特の喋りを放つモカの不満に蒼真は適当にあしらう。彼女達は気にしないとは言え、蒼真はバイト真つ最中だ。態度を柔らかくし過ぎる訳にはいかない。

「山吹さん、この前はどうも。来週のライブ観に行くことにしたから。生半可な演奏したら文句つけるから覚悟して」

「……………やたら当たりが強い」

一方でボーカルの蘭は蒼真に敵対心剥き出しだ。原因は蒼真が巴に告げた蘭宛の伝言を巴本人がちよつと尾びれを付けて、蘭に話してしまっていた為。

勿論、蒼真が知る由がないので永遠の謎に包まれたままである。

「てか、誰からライブがあるって聞いたんよ」

「巴」

「いやあく沙綾からメールが来てな。つい」

「さーちゃんか。ただ、別に隠してるわけではないから良いんやけど……………あんまり来て欲しくないというかなんというか……………」

「ん？」

区切れが悪い蒼真に巴は少し違和感を覚える。

「一先ず、この話はお前らの練習が終わってからでも良いやろ。因みにアフロは今日A
スタジオやな」

「蒼真先輩、二時間後もいるんですか？」

「今日一日は俺担当やからね。居るよ」

「やった！延長できる！」

ひまりが跳ねる。

「おい、こら。どういうことやねん」

「教えません！ほら、皆、行くよ！」

「あつ待つてよく！」

去らば、と逃げるひまりと追いかけるつぐみ。

「それじゃ私達も行きませるか」

「そうだな。蘭、行くぞ」

「……………逃げるなんて考えないでよね」

最後にそう蘭に告げられた。

「むっちゃ目の敵にされてるやん、俺」

学祭まで後、7日。

◇◇◇

ファミレス店内。

「あこ、怒ってますー！」

ぶんぶん、と鼻息を荒くするあこ。

仁王立ちするあこを向かいの席に座ってただ眺めている蒼真。

異様な光景なのは最早普通。

「取り敢えず座ろうね、あこちゃん」

「あっはい。すみません」

とは言え、店にも迷惑をかける訳にもいかなないので大人しくあこは蒼真の指示に従う。

「お姉ちゃんから聞いたんです！今度、蒼真先輩の学祭があるって！」

「うん、あるね」

Roselia全員のバンド練習帰りの寄り道にCiRCLEのバイト終わりであつた蒼真も連行されていた。

「何で私には言つてくれないんですか！」

「言おうとしたよ？でも、あこちゃん。直ぐにどつかに行つちやうんだからタイミングがなかつたんだつて」

「ぐぬぬ……それなら仕方ないですね」

だが、どうしてか現在にはあここと蒼真の二人席。他の四人はまた別のテーブル席に案内されていた。

別の席、と言えどあこの背後に居るが。

「でも、ぜえええつ対に行きますから！」

「うん、ありがと。ただ俺、当日は忙しいから案内は出来んよ？」

「ええ!？」

「……………してもらつつもりやったんか」

見え見えな態度のあこに蒼真はたまらず苦笑する。

「あこちゃん、悪いけど俺もう行くね」

「そんなあゝ。もうちよつと喋りましようよゝ」

「ごめんね。俺も今日はこれから練習があつて、機材を取りに帰りたいんよ」
「練習ですか………むう」

これは本当だ。

練習内容も勿論、学祭に向けてであり、メンバー全員が気合いを持って挑んでいる。
あこも食い下がる訳にはいかないことは承知していたのでテンションは下がっていないが蒼真を見送ることに。

蒼真はテーブルを一望。注文したものの、まだ完食しきれていない品があつた。

「お詫び代わりにこのポテト、Rosealiaで食べてくれ」

「はあくい、分かりました」

この会話にある人が大喜びしていたとか。

蒼真の耳に入ることはないが、その人は心の中で感謝していたという。

学祭まで後、6日。

◇◇◇

羽沢珈琲店。

「今日は来てくれてありがとう、麻弥ちゃん」

店内の窓側席で相對している二人の少年少女。蒼真と麻弥の姿がそこにあった。

用件は打ち合わせである。

「いえいえ、蒼真さんの頼みとあらば全然つすよ」

「まさか、依頼を受けてもらえるとは思ってなかったから俺がこの担当になったもうちやけど……………ちようど良かった」

「そうですね。蒼真さんじゃなければ、ジブン達も断つてたかもしれません」

「おお……………それは怖い」

蒼真の依頼。それは“Pasttles*Palettes”に学祭の出演をしてほしい、との内容だ。

有名人を高校の学祭へ招待して、ライブ等をしてもらう、のが毎年恒例らしい。特に今年は軽音部の人手不足によるバンド部門が著しく規模が小さくなっていたので、バンド関連の有名人に来て貰おうと生徒会が決定を下した。

と言いつつ、生徒会内ではそんな宛は一切出てこない。なので、軽音部のリーダー格でもある蒼真にこの話が回ってきたのだ。蒼真が真つ先に候補に上げたのが他でもな

いパスパレであった。

「でも、ホントにありがたいお誘いです。パスパレも少しずつ人気は出てきたとは思っているのですが、ライブの経験は数えるほどで……特に同世代の子達がたくさん観客にいるとなると良い刺激になりますから」

「まあ俺らも人気のパスパレが来てくれるってことで集客もしやすくなるからお互い様だな」

「はい、そして何より同士の頼みです。断るわけにはいきませんよ」

「同士……っ!!」

「っ!!」

がっちり握手を交わす。

そこに単なるドラマーの友情を越えた何かが生まれた。

「これが……闘いで芽生える友情、ですか!……」

「イブさん!どうされました?」

「そうでした!コーヒーをお持ちしました!」

パスパレのメンバーかつ羽沢珈琲店でアルバイトをしているイブはどこか一風変わった少女、というのが蒼真の認識である。

「ありがとうございます、イブさん」

「うん、ありがとうな」

「いえいえ。ところでなんの話をされてたのでしょうか？」

「ん？何なら聞いてく？」

「えつと………良いんですか？」

「良いも何も君も当事者の一人やからね。居てもらった方がありがたいかな」

「少し待ってください！聞いてきます！」

店内も客は疎ら故の蒼真の提案。それに対して、イブは許可を貰いに店の奥へと走っていく。

「先にちよつと始めますか」

「そうですね」

「んじゃ、早速、学祭についてやけど——」

学祭まで後、5日。

—3の2— へ続く。

— 3の2 —

◇◇◇

○○高校。本校舎前。

「スッゴい賑わってるね〜」

本日、学園祭二日目。

巨大なアーチの展示を潜り、学校内へと入り込んだポピパのメンバーは全員がその賑わいに視線をあちこち巡らせていた。

中でも、香澄はキラキラと目を光らせて校舎に吊られている“ようこそ！我らの楽園へ！”と書かれたタペストリーを見ていた。

「これは……まじか」

「どうしたの？有咲？」

「どうしたじゃねえだろ！？人が集まりすぎだ!!」

「うん、そうだよね。私もちよつと……」

その他は人の混み具合に気が参っていた。

生徒の関係者以外にも地域の方々や誰かの知り合いとかも集まって来ているらしい。

朝の段階ではまだまだ全然人はいない、と私——沙綾は事前に蒼真から聞いていたことをこの時思い出していた。

「パスパレも今日、ゲストで来ているからね。もっと人は集まるよ」

「もう嫌だ。帰る」

「え!?有咲、帰るの!?!先輩達のライブ観に行こうよ!!」

「だあー!!引っ付くな!!」

加えて、パスパレが二日目のオープニングアクトを担う事も結構、SNSで話題になっており、それもこの大盛況の一環を携えている理由に加えられる。

「さて、これからどうしよつか?」

私はそう提案した。

パスパレの演奏も予定時刻まで、まだ時間がある。それまでは何処かで時間を潰しておきたい。

「私、お店回りたい」

「うん。私もかな」

たえの意見にりみが同意の意を示す。

「そういえば、さーや」

「うん?何?」

「ソウ君のクラスの出し物って何？」

「……………そういや、聞いてない」

香澄の質問に私は今更に気付いた。

学祭ではステージの出し物とは別にクラスでも何らかの展示をしているはず。すっかりそれを聞き出しておくのを忘れていた。

「沙綾ちゃん、蒼真君のクラスも分からないの？」

「……………」

「すごい表情になってるぞ」

そう言えば、蒼真は何組だろう。唯一判明しているのは二年生だと言うこと。でも、この学校で二年生を見分ける基準は不明。

情報が少なすぎる。

昔ながらの幼馴染と言いながら、全然彼のことを知らない事実を肌で感じてしまった私。

「それじゃあ、ソウ君を探しにレッツゴー!!」

「ゴー」

「あつ、待つてよ。香澄ちゃんにおたえちゃん」

目的が決まった以上、香澄にとって動かない理由は最早ない。それに悪のりしている

たえと軽く悲鳴を上げながら追いかけていくりみ。

「……………行くぞ」

有咲に肩をポンと叩かれ、ハツとする。

いつの間にか、先行していた三人の姿が見えなくなっていたのだ。

——と、その瞬間。

「どうした？」

「……………今、あそこにソウ君が見えた気がしたんだけど……………」

「あそこ？どこだ？……………」

見えたのは、人混みの中のほんの一瞬。

つられて有咲も確認しているが、もう既に蒼真らしき人物の気配はない。

「おーい！きーや！有咲ー！行くよー！」

向こうから香澄の呼ぶ声。

「有咲、行こー！」

「お、おう……………」

有咲の手を引っ張り、私は校舎の方へと走り出す。

——学祭ラストライブまで後、六時間。

◇◇◇
体育館。ステージ側。

「もうすぐ本番ね」

千聖のその一言に緊張が高まる。

”Pasttle*Palettes”は今回、学祭二日目のオープニングアクトを担当する。二日目とは言え、一発目。これからの雰囲気や会場の盛り上がり方、その全てがこのライブで決定すると言っても過言ではない。

「楽しみです！」

「おおく人がいっぱいいるよ〜」

「ちよつと日菜ちゃん!?緊張するから言わないで〜!!」

メンバーは既にリハーサルを通して機材のチェックは確認済み。各々、調整は完了して後は本番を迎えるのみ。

現在、ジブン——麻弥達が待機しているのは体育館ステージ側のスペース。日菜はフロアへと繋がる扉から覗いている。

本番まで後、少し。

「あつ、本番まで十分切りましたよ」

「っ〜!!」

「彩ちゃんの緊張が限界を超えそうね……………」

ぶるぶると震えている彩。

文化祭や学祭でジブン達の演奏を披露するのは初の試み。何時もと違うステージに緊張が収まらないのも無理はない。

ジブンも少し緊張しているようで、手汗が気になってきた。まだ早い。

「そう言えば、蒼真君をまだ見てないわね。彼なら一言挨拶くらい来ると思っていたのだけだ」

「言われてみれば……………確かに今日はまだ会ってませんね」

千聖に指摘され、ふと思う。

パスパレ招待の件の責任者は蒼真のはず。でも、本番当日では未だに彼の姿はない。

此処まで案内や準備をしてくれたのも彼と同じ軽音部の後輩達だった。

「ワタシは見ました！」

「え？ イヴちゃん、蒼真君と会ったの？」

「いえ、直接話してはないですけど……でも、確かにあの人は蒼真さんでした！」
「ん？ ちよつと気になる言い方だね〜」

イヴはまだ彼と知り合ったばかり。

遠目に見たととなれば、確信は持てないはずだ。

「蒼真さんは何か準備でもあつて忙しいんです、きつと」

「麻弥ちゃんの言う通りかも。この学祭でも相当、皆から頼られているみたいだもんね」

「ちよつと……蒼真君を責めてるわけでは無いのよ？ あくまで気になっただけで」

「あつ」

「どうしました？ 日菜さん」

千聖の弁明を他所に日菜は平常運転。

「お姉ちゃんがいた!!」

「あー……紗夜さん来てくださってるんですね」

「というより、日菜ちゃん!! バレるから覗いちゃ駄目だよ!!」

話はこれで終わり。

スタッフの軽音部の子達から準備をしてください、との声がかけられる。

「それじゃあ、皆、行くよ！」

——学祭ラストライブまで、後、五時間。

◇◇◇

○○高校。北校舎。

「え？居ないんですか？」

A f t e r g r o wの一同は蒼真に会いにクラスの展示がされてある教室へと顔を出しに来ていた。

どうやら此処は喫茶店をしているらしく、代表としてアタシ——巴が蒼真のクラスメイトかつ店員さんと話をつけていた。

事情をまだ知らない四人は兎も角、ここに来れば蒼真と会えると踏んでいたアタシにとつてこれは痛手であった。

「どうだったの？」

「駄目だ。どうやら蒼真先輩、この学祭で結構高い位に居るらしくて、クラスの人も何処に居るのか分からないらしい」

つぐみに報告をしつつも、アタシは考える。

彼の居場所の宛が消えた今、何が得策かと言えば――

「そもそも会う必要があるの？」

「あるでしょ!! 蒼真先輩のお陰で最前列でライブが見れるんだからね!!」

「まさか、チケットがあるなんて聞いてなかったからね」

ひまりの言う通りだ。

事前に調べておけば、些細な問題だが当日になってその事実が判明するとは思っても居なかった。

学校内の出入りは自由。だが、ライブ会場でもある体育館は人数整理の為にある程度整理番号を配布しているそうだ。

「それじゃあ、なんでこれ貰えたの？」

蘭の疑問はその手に握られた一枚の紙。

「蒼真先輩が予め用意してくれてたみたいだね」

「ただ………チケットつて言うが、あくまで優先的に入らせてもらえるつてだけらしい。さつき店員さんにどうぞつて渡された時にそう説明された」

応対してくれた店員はアフロのことを承知済みだったらしく、あれやこれやとアタシが話しているうちにチケットを五枚渡されたのだ。

そのお礼もかねて、蒼真とは会っておきたいのだが、どうも雲行きが怪しくなってきた。

「ところで………」

つぐみが区切りをつけるかのごとく告げる。

「モカちゃんはどこ？」

「え？」

「あ、ホントだ。いない」

「モカ!？」

青葉モカの姿がない。今、気付いた。

あのマイペースのんびり少女はこんな混雑している所で姿を眩ませてしまうとまた見つけるのが困難。

しかし、時は既に遅く、モカは何処にも見当たらない。

「取り敢えず！ライブまで時間はあるんだから、モカちゃんを探しにレッツゴー!!」
「……………」

「誰も反応しない!!」

——学祭ラストライブまで後、三時間。



軽音部部室。

「おっ、やっと帰ってきた」

扉が開くと、藍斗の声が伝わる。

開いた主、蒼真は部屋に設置されたテーブルへと足を運ぶ。

「ちよつとな。これを買いに」

蒼真の手には屋台で販売してる焼きそば。

「蒼真さ、よく出れるよな」

「案外、周りからは気にされんもんよ」

「へえ、そうなのか」

「だとしても、藍斗は止めとけよ」

「……………だよな。はあく腹へつたな」

— 3の3 — へ続く。

— 3の3 —

◇◇◇

体育館。

「凄い人集り……………」

「花音さん！そっちに行っちゃうと！」

「あつ……………ありがとう、美咲ちゃん」

人集りの波に流されそうになる私を美咲ちゃんはどうか私の腕を引っ張ってくれて、引き寄せてくれた。

アークラの予定ライブ開始時刻まで残り30分を切りつつある。体育館の中への入場許可も出され、ライブを楽しみに待つ多くの生徒はアークラを間近で見たいらしく、我先に早歩きで進んでしまう。

そうなる、私は何も出来ない。美咲ちゃんに助けて貰ったことで、ほっとした私は全身で安心の息を吐いた。

「にしても、あの三バカはほんと……………」

「美咲ちゃん？」

「こころちゃん。はぐみちゃん。薫君。」

三人とも学祭に入るなり、姿を眩ましてしまった。本人達に悪気がないのが余計にたち悪い。

無駄に目立つから直ぐに発見できると考えていた私と美咲ちゃん。ところが、この学祭では小規模なイベントがあちこちであり、探す基準である人溜まりが全然宛にならない事態に。

時間が迫っていたのでライブ後に探すことになったけど、正直何をしでかしているのか不安で仕方がない。今、この瞬間にも誰かに迷惑をかけてなければ良いのだけど。

先程からずっと観客の流れを観察していた様子の美咲ちゃん。つま先立ちで頑張っているのが何とも微笑ましい。

それも一段落満足したのか、美咲ちゃんはちらつとこちらへ話し掛けてくる。

「それですね、花音さん」

「うん? どうしたの?」

「ここからだどステージが見えにくいと思うんで移動しません?」

「へ?」

現在位置は体育館真ん中辺り。

確かにステージを覗こうとするには背伸びをしないと視界が遮られる。

「私は遠慮したいかな。また美咲ちゃんとはぐれちゃうかもしれないし……」

「此処だと、蒼真さん、全然見えなさそうですね」

「ななな何で急に蒼真君が出てくるの!?!」

「この前、練習始める前に蒼真さんに直接行くって言ってたじゃないですか」

「み、見てたんだ……」

知りたくない事実であった。

「それじゃ、行きましょう」

「美咲ちゃん!?!——あつ」

美咲が私を握る片手とは逆に持つタオル。

うろ覚えだが見たことがある。確か、そのデザインはアークラが試作品として数少な

く販売された経歴を持っていたはずでは。

私はふと思った。

——もしかして、美咲ちゃんが前で観たいだけでは……と。

◇◇◇
体育館。ステージ前。
「こっちだよー!!」

私、沙綾の目にバツチリ映るのは香澄の左右に元気よく動く掌。分かったから、それ以上は目立たないで。周りの視線が恥ずかしいから。

アークラのライブまで残り数分。沢山の混みに飲み込まれながらも、どうにか私は香澄達の元へ合流した。

どうやら今回のライブでは観客全員が立って観るスタイルみたい。

他にも各自の指定席に座ってのんびり観るライブもある。しっかり演者の音を聴きたい人にお薦めのライブスタイル。

「それにしても……タオルばっかだな」

「ホントだね」

有咲の呟きは私も同意する。

ここの学校の制服を着た生徒を筆頭に、数多くの人が各々拵えたマイタオルを首にかけたり、腰のズボンに挟んだりしている。

全体的にタオルは青を基調として統一しているようだ。

人気バンドだとは知っていたが、想像以上のファンの準備のバツチリ具合に少々驚いている私。

と、待つ間にポピパの皆は会話に花を咲かせる。照明が豪華だったり、他のガルパの人達を見つけたりしたなど。

その時は一瞬で来た――

「あっ」

おたえの声。

同時に真つ暗闇に照明が落とされた。観客が一気にステージ側へ詰め寄る。

SE――開始。

会場のボルテージが上昇。

ゆっくり流れたデジタル音が徐々に増加し、組み合わせる。やがて、一つのテンポを創設する。

大音量で支配する会場からは自然とテンポに合わせ、手拍子が発生していた。
「わああああああ!!」

隣にいる香澄の絶叫など耳に入らず。

ライブの虜の渦に一瞬で巻き込まれた私は全てをステージに持っていかれていく。
会場の期待も頂点に登ろうとしたその瞬間にまたしても一部から甲高い声が上がった。

ステージ袖から一人誰かが出てきたのだ。

「ソウくくく………ん?」

隣の香澄もまた同じく。

けれど、その反応は何処か中途半端に終わってしまう。私も周りの熱気に負けずとステージを見てみるとそこには、

——女の子がいた。

自分の目をばちくりした。

女子の制服に身を包んだ一人の女の子。アークラに女子メンバーはいない。

なら、何故?

「あの人………沙綾ちゃんに似てないかな?」

「え?!?りみりん?………嘘?!?さーやがいるよ!!」

「黒髪な時点で似てるわけ……………似てるな」

「沙綾、実は双子だったり？」

残念。私は双子の片割れではない。

よく目を細めて、焦点を合わせてみる。

黒髪ロングに整った女性の顔つき。スタイルも羨ましいほどしつかり細い。

でも私にはあの顔に既視感を覚えてしまつて……………。

——つて、ソウ君!?

よく見ると、隣に人が居ないので比較しようがないが、あの背の高さは間違いなく男性並みだ。

ステージすれすれに来た偽ソウ君は軽くお辞儀をしただけ。自分の持ち場であるドラムへ向かった。

間違いない。あれはソウ君だ。少しウォーミングアップでドラムを一回り叩いたがあの簡単そうに気楽にやるフレーズは彼本来の癖から出る物。

となると、次はアークラ恒例のあれが始まる。

ソウ君のドラムソロが——

◇

MC1回目。

「あーあー聞こえとるかー」

ぺちぺちと俺はマイクを叩く。

しっかり音が反響している様子を耳に捉えた俺はマイクをスタンドから放し、手に持つ。

座ったまま話すと向こうから見えにくそうなので俺は立ち上がった。ちらほら名前を呼ばれるので適当に手を振って返す。

あー、スカートの中がスースーする。

「お前らのご希望通りにドラムソロから続けざまに一曲目を早速やったわけですが………これでご満足ですかー!？」

『イエーイー!!』

「スツゴい声量………さてと」

マイクを持ち、ボーカルの藍斗の元へ。

「やっぱ似合わんよな、これ」

「違和感しかねえ」

スカートの裾を掴んでみる。

ギターのルーズが焦ったように己のマイクを掴む。

「ちよっ?!それ以上捲し上げるの禁止!!」

「ん?そうか。あ、皆さん、俺達正真正銘の男ですが、今回の文化祭はこんな風になっちゃいました」

俺を含めて、アークラ全員ただいま女装中。それが今年のサプライズ。

まさかの展開に登場初めは戸惑いの声が多かったが、こうやって改めて説明されると主旨を理解くれたらしく色んな声援が飛んでくる。

中には、似合ってるや可愛いだったり。素直に受け入れられるかは別として感想をく

れるのは嬉しい。

「まあ毎年の伝統なんでね。ウチの生徒なら分かっているとは思うけど、他から来てくれた人達は特に勘違いしないで欲しいです。俺は健全な男なんで」

「お？自分だけ逃れようとしてんぞ？」

「……………後はよろしく」

「逃げましたね」

「ずっる」

ギターとベースから非難染みた言葉を浴びつつ、俺はドラムへと逃げた。

MCはボーカルの藍斗にバトンパス。

「んじゃあ！お前ら、次の曲に行くか!!」

『イエーイ!!』

「あれ？こんなに人がいるのにこんなもん？学祭エンジョイしたいはずよな!?!もう一回だけ行くぞ!!行・け・ま・す・か!!」

『イエーイ!!!!』

「よっしゃあ!!付いてくれる奴はとことん掛かってこい!!他の奴らも自分だけの楽しみ方で俺達の音楽を楽しんでくれたら良い!!俺達の英雄を!!」

—— 3 曲目 ” 英雄 ”。



MC 2 回目。

『そこはな………あれよ。どうにかやっちゃえば！スカートをこんな風に！』
『ダメでしょ！』

全4曲を演奏して、観客の盛り上がりも中々に。ライブの定番でもあるメンバーでのMCタイムに再び突入していた。実はアタシ、巴もまたこの時間がちよつとした楽しみでもある。

ボーカルとギターの即興芝居にそこそこの笑い声も溢れつつ、自分も楽しみたいところ

ではあるが、残念なことにアタシの意識は別に向いていないといけない。

「モカはいたか？」

「それが……全然」

「モカじゃなくて、巴か蘭だったら見つけやすいんだけどな」

「ちよつと、ひまり。それ、どういうこと？」

モカがずつと行方不明のままなのだ。

ライブが始まる前もあちこち探し回るが見つからず。無性にも刻々と時間が過ぎていくだけ。

ただ、折角の蒼真先輩からのチケットも無下にする訳にはいかないので、モカの搜索は途中で断念せざるを得なかった。

「モカちゃんだし、ちゃっかり見てそう」

「それはそれでどうかな……？」

半分放棄のひまりと心配性のつぐみ。

「今はライブに専念。やらかしたら、後で文句を言わないと」

本当はモカを一番に心配してるのに態度にはまったく出さないツンデレ蘭。

「はあ……ほんと、どこに行っただよ」

勿論、先輩達のライブは凄いの一言。

蒼真先輩のドラムソロから始まり、やがて四人全員が楽器を通じて放つ音の圧は聴く者全ての心の奥底にも響く勢い。

会場の隅々までアークラの虜にするカリスマぶりに音響や照明が一子乱れぬ演出を施し、より彼らの演奏のクオリティを上げていく。

かつて対バンした時よりも確実に今回は全力で音楽を楽しむ。そんな心意気がガンガン伝わってきていた。

女装してるままなので何とも言えないが。

『そっういえば………』

ん？とアタシの視線がそちらに。

ボーカルのその言葉にアタシは不思議な引力を感じた。他のメンバーもそれまでの余談話を急に止め、ステージを覗いていた。

『ゲストがいたわ』

『えー!!』

ギター君が観客の声を代弁している。

完全に忘れていたような台詞を放つボーカルの彼だが、このアークラのライブでゲスト出演は初の試みかもしれないのだ。

会場全体では、ゲストは誰なのかをあちこちで勝手に予想している。軽音部の先輩

だったり、アークラの元ギタリスト再登場!と期待に胸を膨らませる人もいる。

「ゲストさん、誰だろうね?」

「格好いい人かな!」

「それもどうだろう……?」

「なあ蘭……」

「何?」

「……嫌な予感がする」

「私も」

普通なら胸を踊らせるこの瞬間。

でも、この時のアタシは自然と気持ちが高ぶることはなかった。

モカならやりかねない。

観客の反応はステージ側にも伝わる。ボーカルの彼はその反応を汲み取る行動に出る。

『そんなに楽しみならとつと呼んでみるか!では!ゲストちゃん、カモン!!』

そして、アタシは——目を疑った。

「「モカ!」」

青いギターを担いで、のんびりとした足運びでステージに入ってきた一人の少女。

偽物の少女ではなく、ちゃんとした本物の少女だと断言できるのはその顔が見覚え有りまくりの人物であるからだ。

『どうも〜どうも〜。正真正銘JKのモカちゃんだよ〜』

きやーと歓喜の悲鳴が飛び出る。

アフロのギターリストと分かっている人もちらほらいる。自分のバンドが有名になった現象に、なんだか無性にむず痒い。

『本物だよ〜。最後まで楽しく見てね〜。本日はよろしく〜！キリッ』

自分で効果音付けるとは。

余裕綽々のその態度にアタシはまあモカだしな、と一人勝手に納得する。

でも、誰もがそうとは行かず。

「モカ……………っ!!」

「蘭ちゃん!」

「どうどう!!落ち着いて!?!ね?」

「……………私、犬じゃないから」

良かった。至って、蘭は冷静なようだ。

あの怒気のオーラは錯覚だったみたいで、止めに回ったつぐとひまりも一安心で。

「後で——」

今のは聞かなかったことにしよう。

『それじゃ、とつと次の曲行こうや!』

『いえーい』

『折角来てくれたモカちゃんに敬意を評してモカちゃんのバンド”Aftergrow”から一曲やつちやう?』

『というより、その予定だね』

『やったー』

ステージ上ではやり取りが続いていた。

アタシ達の曲をアークラがカバーする。バンドマンにとって自身の曲を他の誰かに歌ってもらうのは誇りだ。

それがましてや、あの蒼真先輩率いるバンドがしてくれるなんて——

『よし、蒼真、カウントよろしく』

『はいはい』

『Aftergrowより一曲!』

5曲目——”Scarlet Sky”。

◇◇◇
体育館、外。

「あっ、ソウ君!!」

無事にライブは大盛況で終了。

俺は残りの片付けに勤しんでいるクラスメイトの元へ向かった。だけど、ライブ後だから休んどけと逆に全員から言われ、渋々とベンチに座り、缶ジュースを飲んでいた。

そこに駆け付けてきたのはポピパの香澄。

遅れて他のメンバーも到着する。

「ライブ!!かっこ良かった!!とっっても!!」

「お、おう………そりゃあ良かった」

香澄の顔が近い。

「にしても、近くで見てもほんと沙綾そっくり」

「まだその姿でいるんですね」

「それは誉めてんのかな？」

未だに女装中の俺に感想を述べるおたえと有咲。

「兄妹で似ているのはよく見るけど、従兄同士でもこれほど似るんだ………」

一方で、遺伝子に感動してるりみちゃん。

そして——

「さーちゃん？」

「………ソウ君が可愛いとか。何か許せない」

「え？」

沙綾からは理不尽な制裁を貰った俺であった。



体育館、外。

「おつ、いたいた。みんなく居たよ〜」

声が聞こえ、視線を上げると。

ギヤルがいた。俺の学校では絶滅危惧並にレアな存在。

「ん？なんだ、リサちゃんか……………」

「あれ？もしかして、さっきのライブでお疲れ様？」

「まあ……………そんなとこ」

「ふーん」

嘘とバレてそう。まさか。

先程の沙綾の制裁予告宣言に、今、随分と気が参ってるなんて死んでも口に出せない。

「一人だけか？」

「ううん。Roseliaの皆と来たけ——」

「蒼真先輩!!」

「ぐはっ!!」

背中辺りに来た衝撃に肺の空気が漏れる。

この声からして、犯人はあこちゃんだ。

「おー! あこー! 大胆だね〜」

「えっ!?!」

このまま首を絞められるかと覚悟したが即座に解放された。

「ごめんなさあーい、蒼真先輩」

「いや、別に構わんけど……………」

何度も上下するツインテール。

と、あこの背後から遅れてきたメンバーが到着する。

「ソウ? ほんとにソウ?」

「あなた……………ええ?」

「近くで見ても凄くお似合いです……………っ!!」

ん?と一瞬何の事やらと不思議に思うが、自身の格好を続けて思い出す。

「男としてはあんまり嬉しくないお言葉やねんけどね……………」

「でも、ノリノリでライブしてたでしょ」

「それはやな…………やるからには全力投球！」

リサの追求にガッツポーズで返答。

あこはあこで別にしたいことがあるらしく一歩前に出てくると。

「蒼真先輩…………あの、もう一回しても良いですか？」

「してもって…………さっきの？」

「はい!!」

あこは俺の正面に今いる。

背後から許可なしに抱き付いたから駄目、なら正面から堂々と行けば良しと解釈して
るようだが、根本的にそういうことではない。

歳の差があるとは言え、男女が無闇に公共の場で抱き合うなんて行為はあまり誉められた物ではないのだから。

「破廉恥です」

紗夜のきつい視線がつらい。

「駄目…………ですか？」

上目遣い。不安そうに揺れる瞳。

「少しだけやったらね。ほら、おいで」

「やった!!ありがとうございます!!」

即断だった。即断過ぎて、友希那や燐子が戸惑うことすら忘れてしまう程の速度である。

はっ、と何かを取り戻した友希那。

「あこ、こんな所でそれは駄目——」

「まあまあ友希那！端からは只の女の子同士仲良くしてるだけにしか見えないから」

「……………そういう問題かしら？」

二人が謎の会話をしている最中、あこはゆっくりと俺の胸元へ入ってくる。

その姿が俺には妹のように思えてきて、自然と俺は彼女の頭を撫でていた。

「っん……………」

あこの気持ち良さそうな声が漏れる。

「はわわ……………!!」

「燐子!? 落ち着いて!」

外野が騒がしい。

何となく視線を上げると、偶然にも友希那と目があつた。

「ふん」

そして、外された。

因みに紗夜は呆れたらしく一歩離れた所から見守る立ち位置を確保していた。

——さてさて。

学祭のライブは大盛況で幕を下ろせたようで一安心。また一つ、俺はあの忘れられない景色を見れた。

”Ex isting is us!!”なんてスローガンを今年の生徒会が掲げた時には、生徒会が血迷ったとばかり思っていたがいざ終わってみれば案外、この生徒にはびつたりの目標だった。

アークラのライブも無事に大成功。ゲスト登場も含めて、全体的になかなかの高評価。これを機に味をしめて、他のバンドマンをライブに呼んでみるのも面白いかもしれない。

あ、忘れない内に明言しておく。

——俺、ライブで女装したとは言え、あれはあくまで余興の一環。そっちの世界の人間ではないことだけは声を大にして言いたい——と。

全員編—3—『エキサイティングな学祭』 終

—4の1— 『アークラの日常』 ＊



○○高校。第一音楽室。

「おっ………全然いない」

放課後終わり。今週の掃除当番も問題なく終わらした俺は部活動をするために足を運んでいた。

扉を開き、中を覗くと一人ギターを弄る姿が確認できたがそれだけ。てつきり、他のメンバーも既に揃っていたと思っていたがそうではないらしい。

「蒼真く、弦張り替えるの手伝って」

「自分でやれ」

「ケチ。スティック折れてしまえ」

「聞こえてんぞ」

そいつは俺に手伝う意志がないと判断すると中断していた作業へとまた戻った。なんやかんや言いながら結局は自分一人でやるのが恒例。

中へと入った俺はポツンと置かれたドラムへと向かう。

部活動名義のこのドラムは部員のドラマーが共有して使っている。なので、自分の持ち込み機材は他の人が邪魔にならない場所に置いておくのが通例だ。

壁際に無造作に置かれたシンバル群をドラムの近くへ持ち運ぶ。

前の人のセッティングがある程度残っているので、俺はあの後輩が前に使ったのかな、と思いつつも自分も自分に叩きやすい高さへとシンバルやスネアのスタンドを調節する。

「他の二人は？」

「知らんよ」

「だとすると、二人とも曰直かな……」

彼の名は「吉宮ルーズ」。

イギリス人と日本人、一対三のクォーターらしいが正真正銘日本育ちの純日本人。親の教育の賜物なのか英語が人一倍得意ぐらいが取り柄の少年。

身長は男子では低い。背の高い順で前から数えた方が早い。これは本人に言うところねられる。

バンド内ではギターを担当。と言いつつ、楽器の練習歴がメンバーでは一番浅く、技術面ではどうしても一歩劣ってしまうのがここ最近の本人の悩みらしい。

それでもアークラのギターを担えるのはこの無邪気な性格と観る人達を己のライブ

へ巻き込む天性を兼ね備えているからだ。

—— 閑話休題。

ドラムで軽く体を解していると扉が開く。

入ってきたのは放課後になっても寝癖が未だに付いているあほ野郎だった。

「お？光はまだ？」

「Yes。アイトと一緒に来ると思ってたよ」

「そっか」

” 秋野藍斗”。

我らのボーカリスト。観客を熱狂的に惑わせる歌声を武器にステージを駆け走る。

二代目となったアークラでもその歌声は勢いを増すばかりであり、周りからの期待も何かと高い。

一方で、プライベートでは残念な性格の持ち主でもある。肝心な部分で言葉足らずに突き通し、問題を引き起こすことも多々。

でも何故か彼女持ちという一番のリア充でもある。藍斗の彼女についての詳細はまた後日。

「因みに何してたん？」

「ん？……あー、あれだ。宿題をちよいとな」

「出してなかったんかい」

彼の成績は下から数えた方が良さげ。

俺の場合では安定の中の上、上の下辺りを維持している。無難であることが大切。

「あーあーあーあああ」

喉の調子を確認していく藍斗。

ボーカルは体力の消費が特に激しい。喉も油断していると一気にやられるそう。

「まずは何からやる〜？」

「んー？曲か？」

「イエッサー」

「めんどいし、いつもので良いんやない？」

「ニルヴァーナのあれ？」

「それ」

了承の返事はぼちぼちに。ルーズはチューニングへと移行する。

と、ここでようやく最後のメンバーが姿を見せた。

「遅れてすみません」

「んー。光、最初はウォーミングアップがてらにいつものやるから準備よろしくな」

「了解です」

ベースを背負った少年”桐山光”。

彼とは中学の頃からの長年の付き合い。ベース一筋で頑張ってきたピュアな少年。

基本に忠実かつ土台を重視する演奏スタイルを実行する。なので、初心者の後輩達には人気。

どこでも誰でも丁寧な口調で話す。

勉強も出来て、教師陣からの信頼も厚い。生徒会長に推薦された噂もあったぐらい。結局、辞退しようだが。

——突如、ジャン！と部屋中に鳴り響く。

チューニングを完了したルーズが意気揚々と愛用ギターを弾いたのだ。

「さて……………Everybody!! Are you ready!」

「ノリノリだな」

「いつでもいけます」

「んじゃあ、行こうか」

この四人が現段階の”アークラ”。

今回はこんな高校生男子どもの何の変哲もない日常の一角を切り取っていいこうではないか。

……………需要あるか?これ。



第一音楽室。

「次のライブのセトリ、どうすんの？」

藍斗がそう提案した。

近々アークラが出演予定のライブとなると、とある大学主催の学祭にゲスト出演として呼ばれたライブだろうか。

高校生代表として俺達は大学生に喧嘩を売りに行くことになる。

仲良くして行こうじゃないか。

「その前に一つ。今回はオリジナルよりカバーメインで行くべきかと」

「え？どうして？」

「他のバンドに合わせて、ですよ。先日、ライブ当日の詳細と一緒に出演バンド一覧も送られてきましたけど、どれもプロのバンドを文字ったバンドだらけのようですし」

「まさか、藍斗……………一番年下の俺達がオリジナルをやって目立つわけにはいかんやろ」
「ソウマのオリジナルを披露したら、誰であろうと勝つちやうから仕方無しに止めてあげよう感が凄い」

「おい、ルーズ。そんなつもりは……………あらへんよ？」

「Oh……………yeah……………」

「では、どうします？文化祭の曲を幾つか引つ張つて来ます？」

うーん。悩み所だ。

「なら、俺“ヤーヤー”やりたい」

「あ……………あれか。とやると、そっち路線で固めるのも有りやな」

藍斗の言う曲は一言で言うなら、短い。

全体的に流れが早く、気づけばあつという間にサビを通り越して終わりを迎えてしまう疾走感が楽しい曲だ。

「なら、僕は“Back”で!!」

正式名称がちやんとあるのだがめんどくさいのかちやつかり曲名を省略しちゃう

ルーズ。

コール&レスポンスがある曲で基本的に全パートで難易度はそれほど高くはない。ただただ、サンプルにカッコいいかつ楽しい。

「となれば、余裕もありそうですし、前々から固めていた”ガツデム”もいけそうですね」

「——っ?!?!?」

「どうしました? ルーズ」

「……………No! ボクが一番しんどいパターンになっちゃうよ!!」

「んなこと言っても、逃げてばっかだと上手くならんぞ。練習あるのみ!!」

「アイトゥ。ぐぬぬぬ……………」

”ガツデム”は難易度が格段に上がる。

特にギターはソロが激ムズ。

各自で練習するようにと通達されていた曲の一つだが、ここでようやく解禁となる訳だ。

「後、一曲は欲しいですね」

「蒼真から、何かないのか?」

「……………一曲ぐらいは客受けするのは欲しいよな」

「確かに……：……：……：そうですが」

”おっぱ——「

「うわあああああああ!!」

「どどどうしたの!?!」

「マジでその曲だけは止めてくれ!!」

藍斗の奇声にルーズが驚嘆。

恋人がいる癖に藍斗は下ネタに弱いので敏感なセンサーが感知すると即座に逃走の姿勢を見せる。

「おーけー。止めよう」

「む?」

「代わりに”疑疑”で」

「客受けするか微妙なラインですね」

「もう……：……：……：どうでもいいわ」

「さいですか」

イントロがひたすらカッコいい。

その曲を象徴する一文だ。加えて、サビのボーカルも耳に残り易いリズムが特徴的だろうか。

「一先ず、これ以上は持ち時間次第やからここまでやね」

「ですね。特にルーズはちゃんと練習してこないと……死にますよ?」

「ひえええ……」

ルーズよ、グッドラックだ。

—4の2— へ続く。

— 4 の 2 —



スタジオ” Square Road”。

「んで、ここにでさっきのコード進行に戻って……え？ムズくない？」

ルーズは唸る。

確認すれば、よくよく考えてみれば自分担当の難易度が意外と高い事に気付きさえしなれば。

オリジナル楽曲の作製に取り掛かる真つ最中の話である。

「何でこんなフレーズになるんだあ!!」

「蒼真に聞け」

叫ぶルーズに冷たい藍斗。

歌詞一覽を眺めて暗記中の藍斗にルーズの相手をする暇はない。

誰からも相手にされず、渋々。ルーズはギターを掻き鳴らした。

「——そこから再びサビに？」

「んや、Bメロ」

「あ、確かに。そうなりますか……それにしても、今回の曲、蒼真にしては珍しく複雑な構成になってますよね」

「知らん内にそうなってもうたからな……これでも後悔はしとるんよ?」

「なるほど。反省はしてないと……」

蒼真と光は新曲の構成確認をしている。

蒼真が持ち込んだデモはアークラ歴代のオリジナルと比べても、五本の指に入る難易度の高さであった。

事実、いつもは苦労しない光でさえ、手子摺っている。

「ソウマ〜!!無理〜!!」

「練習しとけ。大学祭終わったら、すぐオーディションあるんやから」

「分かっているけど〜!!」

練習を毛嫌いする傾向のルーズ。

ライブでは問題なく弾きこなす彼だが、その背景には蒼真や光による練習催促の成果がある。

一度、ルーズよりも上手いギタリストに協力して貰って、プレッシャーをかけるドツキリを仕掛けてやろうかと企んだ。

「……………あつ、この前の日曜日にソウマ、駅前に住なかつた?」

「露骨に話を逸らしてききましたね」

「なんやろな……………こうなれば、本格的にルーズを改革せねばならまい」

「二人とも……………？顔が怖いよ……………」

ぴくぴくと怯えるルーズ。

その姿は小動物を連想させる。

「んで？さつき、何て言ったん？」

「先週の日曜日に蒼真が駅前に誰かと居たかつて話です」

「日曜……………あー、居たね」

ピコン。ルーズの癖毛が反応した。

……………その反撃とばかりにルーズは蒼真へ詰め寄った。

「夕方頃に女の子といたよね!？」

「なんでそんなに必死なのかはさておいて……………居たけど、それがどうしたん？」

「コウ、こつち」

「あ、はい」

ルーズが光を手招き。

場をスタジオの隅っこへ変えると、こそこそと内緒話を始めた。

除け者にされ、すぐに興味を無くした蒼真はスネアのチューニングでもするかと立ち

上がる。

慌ててルーズが押さえに掛かった。

「待って!!ボク達の非リア同盟はどうなったんだ!!」

「なんじやい、それ。そんなの初めて聞いたんやけど」

「アイトが彼女持ちって判明した時に言ったじゃん!!ボク達は無難に非リア充でバンドを樂しもうって!!」

「ルーズ〜?呼んだか〜?」

「呼んでない!!」

「あっ……………そう」

「んなの、入学した頃の話やん。そんな前のは覚えてないよ」

「ぐぬぬ……………!!」

余程、不満らしい。

ルーズにしてみれば、蒼真が女子と二人きりで外を歩く行為だけですら協定違反になる判決だそう。

確かに蒼真はモテる。ルーズは思う。

身長も高い。顔付きも程好いし、二重まぶたもくつきり、目も綺麗。

性格面も普段はクールで優しい気遣いはお手の物。だが、ライブでは一変して、熱血

的なドラミングを披露する。彼の仕掛けるギャップの罠に落とされる女子が居ても不思議ではない。

「因みにこれだけは尋ねておこう」

「いきなりキャラ変わるな」

「一緒に居た子はどういう子なんだ？」

「それも続くのね。あれだ、この前の合同ライブで出てたドラマーの子」

「え？バンドマン？」

「花音ちゃん。ハロハピのドラマー。夕方頃だとすれば、ルーズは買い物帰りに目撃したんとちゃうかな？」

多分、合つてると蒼真は確信する。

「水色の髪をした女の子やろ？」

「うん、遠目に見た感じでは多分」

「その子ども朝に偶然、駅で会つてな。行き先も同じなら一緒に行こうって話になつただけやし。確か、藍斗もその現場にいた筈……………」

「おう？それって、俺が松原さんを困らしたやつか？」

「ほら、証言もついたぞ」

「……………羨ましい、なんて言わないからな!!」

「本音、だだ漏れですな」

「なっ!? そういうコウもボクと一緒に音沙汰すら無いでしょ!! あつたら、それはそれでボクが泣くけどね!!」

「自慢げに張り合う事じゃないでしょうに」

只の苦しい言い訳にしか聞こえない。

光は大きく溜め息を吐いた。

無理して、競争するような分野で無いのに一体何がルーズの闘争心を煽り続けているのだろうか。

すると、三人の会話から離れていた藍斗が顔を向けて口を開けた。

「光はこの前、ファンの女の子と二人で近所の喫茶店にでも行つてなかったか?」

「藍斗……………? 余計なことを言わないでくれますか……………!!」

「コウちゃん……………? 嘘だよな?」

「今のルーズの台詞、不倫がバレた時の嫁みたいな言動だよな」

「蒼真も冷静に例えてないで、とつと助けてください」

「OK。ルーズよ、その子、キーボードが出来るぞ」

「……………判決、死刑だああ!!」

「止めなさいなあああ!!」

ルーズが凶暴化した。

全てを白状せよと、光にまわりつく様子は狼のよう。

しばらくは休憩だな、と蒼真。

特に考えずに蒼真は藍斗の隣の席へ腰を下ろした。

「んで、花音ちゃんとはどうなんだ？」

藍斗はギターを弄りながら尋ねた。

「これまた予想外だ、と蒼真は驚きの表情を見せていた。

「藍斗がそういう事、聞くんや」

「なんだーい。一応俺の方が恋に関しては先輩だぞ？」

「へえ、偉そうに。助けてやらねえぞ」

「うん、嘘です。助けてください」

威厳なんてはなっからない。

「花音ちゃんとは上々。ドラマー同士、仲の良い付き合いはさせてもらっとな」

「……………なんか違うな。俺の想像してた感じと」

「何が？」

「もやっとしてハッキリとは言えんけどさ……………まさかな」

「ん？」

「蒼真さ。もしかして……………他にも松原さんみたいな奴が他にいたりするか？」

「ドラマー繋がりがりってことなら結構居るぞ。前の打ち上げがあったときにだいぶ知り合ったんやから」

「そつか……………何人？」

「ばっさりと来るな。女の子だと五人」

藍斗がばっ、と振り向いた。

「多くね!？」

「俺しか男が居れへんかったから」

「はく……………なら、そうなっちまうな。オレだとそもそも行かんぞ」

「彼女さんに怒られるもんな」

「いや、普通に喋られないってだけ。行くって言っても多分、あっそう……………ぐらいにしか言わないと思う」

話題は藍斗の恋愛事情へ。

「日頃からそんなもん？」

「ん……………あんまし二人で出掛けることも無いな。俺も向こうも普段から忙しそうだから、お互い無理な詮索はしない感じになってる」

「よくそれで長続きするよな」

「何て言うかなあ……ライバル？うん、ライバル。互いのライブで歌の練習した成果を見せ合う関係に近いぞ。なんやかんやで、ライブの夜は電話して反省会するし」

「へえ〜……つて、なんで俺がこんなこと聞いてんの？」

「知らねー」

光とルーズはまだやりあつてる。

蒼真は立ち上がった。ドラムの元へと戻る為だ。

「ほら、光とルーズ、一回合わせてみんぞ。出来る所まででええから」

「ぶー………OKだけど、そんなに覚えてないよ」

「覚えてないならアドリブと気合いでやり遂げなさい」

「光が無茶ぶりしてきた!!」

取り敢えず今回はここまで。

ぐだぐだとした日常。けれど、掛け替えのない仲間だ。時たま、白い目で見ることもあるが。

なんやかんやこの馬鹿達と一緒に乗り越えて、駆け上がって、”アークラ”が成り立っているのだ。

では、また。会うその日まで。

—4—
『アークラの日常』
終

—5の1—『ライブハウスで対決』



CIRCLE。ロビー。

「「挑戦状?」」

唐突に集められた三つのバンドの代表者。

「其々が此処」CIRCLEのスタッフ、まりなから急遽集められた説明を受けていた真つ最中であつた。

”Poppin’ Party”から”戸山香澄”。

”Rosellia”から”湊友希那”。

”Pasttle*Palettes”から”丸山彩”。

——以上、三名。

「うん。まず前提としてウチの”CIRCLE”と同じライブハウスが他にあるのは知ってるかな?」

「知らないです!!」

「正直でよろしい」

真つ先に挙手をした香澄。

「うつつすらと存在は聞いたことはあるけど、名前までは知らないわね……………」

「ええつと……………私もこれで」

彩は両手でバツテン印を作る。

まりなはこの時、この挑戦状の相手に対して謎の優越感に浸っていた。

——知名度はこつちが上だぞ、と。

同業者。ライバル。

表現する言葉は多数あれど、どれも懐にしつくりと来ない関係性をあちらとは築いている。故に、相手方に少しでも優位に立ちたいとせがむのは本能に近い行為だろう。

まりなは渋々、そう、渋々と説明を簡潔な進行にする為という理由を名目に彼女達へと教えることにした。

「そこはね、ライブハウス”Square Road”って名前なんだけど——」
まりな曰く。

此処”CIRCLE”と同等の機材がある音楽施設。

場所の関係により、向こうではまた別の高校生やバンドマンが普段から利用している。

「簡単に例えたとしたら、そうだね……………案外、”CIRCLE”と”Square Ro

ad”はこの町では太陽と月のような関係かもしれない」
「どういうことですか？」

彩が尋ねる。

「それは——」

「私達が此処を利用するように、Square Roadにもまた私達の知らないバンドマンの子達が利用している………つてことね？」

「え？——う、うん。友希那ちゃん、よく分かったね………」

相容れぬ存在。それは決して交差しない。

前提として。バンドに携わる人材は星の数ほどいると言われている。

ポピアやアフロ、ロゼリアがCIRCLEを本拠地に構えたように、また別のライブハウスを本拠地に構えるバンドが存在するのは必然。

「つまり、先程話に出た挑戦状、と言うはそのライブハウスから来たのかしら？」

「その通り。つて言っても、このライブは毎年の恒例行事みたいな感じだから、そこまで深く考えなくても良いよ。それに——」

「私、出たいです!!キラキラドキドキが見たいです!!」

「せめて最後まで聞いてくれないかな？」

名乗り出る問題児。

まりなは冷静に彼女に最後まで落ち着くようにと、指示を出した。

「因みに参考までに言っておくね。これまでの過去の戦績は三勝三敗三引き分け」
「想像以上に互いの実力が均衡してるわね」

「そ、そうだね……………私の場合、いざ出るってなると緊張しちゃうかも……………」
余計な情報だったかもしれない。

「もう分かっていると思うけど、皆には今回のライブハウス対抗ライブにCiRCLE代表バンドとして出場して欲しい……………無理にとは言わないけど、大丈夫かな？」

「問題ないわ。Roseliaはどんな場所でライブをしようと頂点を目指すのみよ」
「うん。私達パスパレも大丈夫かな〜と思います。最終判断はメンバーに相談次第ですけど……………少なくとも日時は問題無いはずかと」

「ありがとう、二人とも。今回の勝負は貰ったと言っても過言では無い!!」

「まりなさん!! 私には聞かないんですかー!!」

「え? だって、ポピパは初めから出てくれるんでしょ?」

「そうですけど、私にも何か言わせてくださいよ〜」

「まあまあ香澄ちゃん。ライブ、一緒に頑張ろうね」

ぶーぶーと文句を垂れる香澄に話をそらそうとする彩。傍観を決めた友希那。

”CiRCLE”は現最高戦力と呼べるバンドを味方に引き入れた。

まりなにとってそれは最優先事項でもあったので安堵の表情を浮かべる。年に一度の頻度で行われるこのイベント。

出場する彼女達は知らないと思うが、前回のイベントでの“CIRCLE”は驚くことになんと大敗を喫していた。

だが、この三バンドで対抗すれば、前回と同じ道を辿ることはもうないはず。

二の舞は踏まない。

「相手さんのバンドはもう決まってるのかな？」

「そうね……確かに気にはなるわ」

「まりなさん！どうなんですか？」

彼女達の興味はやがてライバルへ。

同じライブハウス代表の身としては敵の内を早めに知っておきたい。

その気持ちは大いに理解できる。

故にまりなは懐からメモらしき紙を一つ取り出した。

「それは……」

”SquareRoad”の代表に選ばれると思われる有力候補バンドの一覧だよ”

注がれる香澄のキラキラビーム。

「わ、分かった。今から教えるから………ね？でも、あくまで予想というか、私の個人的

な調査による結果であって絶対に出場するという保証はないから」

「分かりました!!」

「ちよ、調査……?しても良かったのかな?」

やる気が暴走し、つい相手の内部事情を探ってしまった件については後悔していない。
い。

反省はしてます。

「まず、絶対に出場してくるバンドが一つだけあるのだけど、これは皆も知っているバンドだよ」

「私達全員が……知っている?」

「香澄ちゃん?分からない?」

「彩先輩は分かったんですか!?!」

「うん。正直、そこまで自信はないけどね……」

「因みに友希那ちゃんは?」

「勿論、心当たりはあるわ」

ふむ、とまりなは一つ合間を置く。

実は当の本人が幾度か口になっている。香澄に教えても弊害は発生しない。

「蒼真君のいるバンド、”アークラ”」

「ああ!!確かにソウ君が練習は別の場所でよくしてると言っていました!!」
「うん。きつとそれが”Square Road”だろうね」

通称、絶対王者”アークラ”。

メンバーの一人とは個人的な付き合いもあるバンドである一方、”CIRCLE”には少し苦しい思いがあるバンドでもある。

前回のイベントでの話。

勿論、CIRCLEサイドも当時の最強メンバーを引き連れて勝負に挑んだ。僅差になるかもしれないが勝利の女神は此方に微笑むと当初は自信もあった。

なのに、現実は違った。アークラが”CIRCLE”の敵名義で出場したのだ。

ライブでの臨場感を瞬時に総営め。他者を圧倒する完成された音の芸術。一切の隙がないまま彼等のライブは幕を閉じた。

加えて、ライブの順番が最後。トリであるがゆえ、観客達の心は意図もあつさりとアークラに持っていかれた。

「これは……油断できないわね」

「うん。私達のバンド、その真髓が試されるって感じだね」

「楽しみです!!」

だが、少なくとも。

彼女達がアークラのライブを観て、臆する事はない。それだけでも十分、勝負として土台に立てるだけの条件はクリアする。

残念なことに問題は更に続くのだが。

「ここからが大事だよ。私もこれを読んでいる途中で驚いたけど……候補に上がったバンドが皆と同じガールズバンドかもしれない。それも二つ!!」

「おおー」

「時間がなかったから、多少は勘弁してね」

ペラペラとページを捲るまりな。

その光景に彩は密かに尊敬を抱く。自分もあれぐらい事前調査出来る能力が欲しい。「バンド名は“ガルドモ”。注意すべき点はクールビューティーと小悪魔キューティーのツインボーカル……だって」

「クールビューティー?」

「小悪魔キューティー?」

二人は揃って首を傾げた。

多少、変な解釈があるかもしれないが、時間の都合上、こうなってしまったのだ。

「活動期間は長いけど、ここ最近メキメキと実力を伸ばしてきたお陰で候補入りしたのかな。切っ掛けは新メンバーの加入。その子と本来のボーカルとの異色の組み合わせ

が凄いらしい」

「想像がつかない……ね。私達のバンドでもツインボーカルはなかなか居ないし」

「コーラスとはまた別物と考えるべきね」

「さて。肝心のボーカルの名前だけど……」
「岩沢」さん？かな。カリスマ性が強く、同じ女の子のファンも沢山いるらしいよ」

「まりなさん、もう一人は？」

「う〜ん……そこは情報不足。存在自体だけ明記されてて、後はメモに書かれてないのよね」

「ざんね〜んです〜」

がつつり崩れ落ちる香澄。

もう一人のボーカリスト。恐らく一番の重大要素が未知なのは不安だが、情報がないのは仕方がない。

気を取り直して、次だよ次。

「今度は大丈夫だから！」

「はい！期待してます！まりなさん！」

「……………」

香澄の純粹に注がれる視線。

まりなにとって、それは逆にハードルをぐいぐいと急上昇させていく。

「バンド名は“H T T”……………略称かな？」

まりなはメモを急速に読み進める。

「重要な点は三つ。

一つ。こちらもツインボーカルスタイルを採用している事。

二つ。曲によって、人や歌い方を変幻自在に変えたりする事。

三つ。同じ高校の軽音部所属ならではの一体感満載の演奏。

——以上——

「おお!!」

聞いた限りでは。

実力もあり、オリジナル性にも富んでいる。強敵として立ち塞がるのは確定。

だが、メモを読むまりなに限ってはどうも不思議そうな視線を文章に向けていた。

「うん? だけど、個人レベルの技術になるとそれほどでも? ……って書いてあるけど」

「と言うことは……………それほど凄くはないバンドなのかな?」

彩のピンポイントな指摘。

「例えば、そうね……………」

「友希那ちゃん?」

「二人一人のレベルが其処まででも、バンドとなると桁違いの演奏をするグループは私の知る限りでも沢山いるわ。ソウ達と同じ候補に上がるぐらいなのだから、恐らくそのバンドもそんなタイプなのでしょうね」

「な、成る程……………」

友希那の解説に唸る彩。

「友希那先輩!!ポピパはどうなんですか!?!」

「唐突過ぎじゃないかしら?あなた達の話はしてないわよ」

「分かっていますよ?でも、折角ですし!!言ってくれても良いじゃないですか?」

「徐々に近づくのは止めなさい。目が怖いわ」

「パスパレの評価も……………気になる」

「……………自由だね、皆」

ライブまで……………もうすぐ。



とある音楽室。

「おーい、ライブの誘いが来てるぞー」

「ホント?どこでやるのかしら?」

「これは……………スクエアからだな。うん?……………アークラも出るのか……………」

「濡先輩?どうしました?」

「あずさ……………気にしないでくれ」

「そ、そうですか……………」

「他のライブハウスの子達と対バンだつて!!面白そうだよね!!ねえ!!皆、出ようよ!!

ギー太も出たいよねー」

「でしたら、紅茶セットは持っていつでも良いかしら?」

「止めとけ」



とある教室。

「せんばあああいいいい!!大変でえええすううう!!」

「ユイ!うるさいぞ!」

「ご、ごめんなさい……!!でも、大ニユースがあるんですって!!」

「大ニユース?何?」

「岩沢先輩!ライブですよ!ラ・イ・ブ!」

「え?何々?面白い話?」

「どうしたの?」

「皆さん!ちようにど勢揃いですね!言いますよ!言っちゃいますよ!アタシ達、ガルデモに“Square Road”代表として出場するライブの依頼がついに来ました!」
「おお!!マジか!!よくやったぞ、ユイ!!」

「えへへ、ひさ子先輩に褒められた」

「ユイ」

「は、はい？」

「アークラも出るのか？」

「も、勿論ですけど……」

「よし。出よう」

「「えっ？」」

—5の2— へ続く。

— 5の2 —



ライブハウス” Square Road”。

「うわあ……………早く着き過ぎちゃった」

” Poppin Party” ドラム担当。 山吹沙綾。

彼女は目の前の建物に立ち、スマホで現在時刻を確認していた。

いつもとは違うライブハウスへの訪問。

その理由の解明はもう一人、沙綾の隣で息を切らす人物に託された。

「早い……………!!香澄の奴、いつも、いつも走りすぎだ……………!!」

「まあまあ有咲。お陰様で待ち合わせ時間までまだ少しあるし、それまでは体力を回復

させたらっ…」

「……………そうする」

” Poppin Party” キーボード担当。 市ヶ谷有咲。

彼女に至ってはしんどそうに何度も呼吸を繰り返している。

それもそのはず。有咲と沙綾はつい先程まで全力ダッシュをしていたのだから。

「ありさー!!さーやー!!中で待つても良いって!!」

元凶はこいつ。

ライブハウスの自動ドアから顔をひよっこり出した猫耳の髪少女。

”Poppin Party” ボーカル担当。戸山香澄。

遠目から目的地であるライブハウスを視認するなり、猛スピードで駆け出した彼女の後ろ姿に有咲は慌てて追いかけてしまう。

その弊害として、この体力の異常消費。

だがしかし。有咲は呼吸を整えつつ思う。香澄は論外だとして、どうして同走していた沙綾まで平気そうにしているのか疑問にあった。

相当な距離を走ったと自負するのだが。

「みたいだね。有咲、私も先に行っておくよ?じゃー!」

「お、おい!勝手に置いてく……って、あれ?沙綾、やけに機嫌が良いな……」
歩く足元が若干浮わつき気味の沙綾。なんならスキップと変わりない動き。

その後ろ姿に有咲はふとデジャブを覚えてしまった。それもつい最近の出来事に。

以前に感じたのは確か——

「……………なるほど」

——山吹蒼真と沙綾が会話してた時だ。

有咲は建物の看板を見る。

このライブハウス”Square Road”は彼の所属するバンドの拠点地。言い替えば、彼の愛用する大切な場所。

故に、有咲は全てを理解してしまった。

まだ己の知らない彼の世界へ踏み入る瞬間を沙綾は密かに堪能していたに違いない。

これは……黙っておくべきか。

「有咲〜? どうしたの〜?」

「いやー何でもない!! すぐ行く!!」

これをネタに彼女をからかう選択肢もある。

が、有咲は賢明である。そうすれば、結局は立場が逆転して恥ずかしい目に遭うのは自分だと分かっていた。

どちらにせよ、乙女の秘密は苦勞案件に間違いはない。

◇

スクエア。待合室。

「さて。今日の予定も終わったし、これからどうする？」

あれから一時間後。

訪問した用事、次回イベントの打ち合わせも難なく終了となり手持無沙汰となった三人。

彼女達にライブイベントの説明を担当したのは此処のオーナーであった。どうやら細かい所は完全放置の面白そうなら何でも組み入れるタイプの人らしい。

その性格もあつてか、想定していたよりも幾分か予定に空白が空いてしまった。

このまま帰宅するのも有咲的に大賛成だが、沙綾がわざわざ尋ねたのだからそうは問屋が下ろさない。

有咲の目にはウキウキとする香澄。それに悪巧みしている悪大官にしか見えない沙

綾。

「見学しよ!!」

「言うと思った……けど、いきなり見学なんてしたらスタッフさんどころか他のバンドにも迷惑だろうが」

香澄の暴走が特に懸念される。

他のライブハウスまで来て、醜態を晒す事態にだけは絶対に避けたい有咲。悪い噂は耳に届きやすいと言われるし、ポピパにマイナスイメージが定着するのだけは何かあるうと回避推奨。

デメリットは思い付くだけでも、沢山。

自身のライブで全力が出しづらい。今回の対抗ライブイベントでポピパが足を引く張る。またポピパの利用しているC i R C L Eにまで悪影響が広がるかもしれないのだ。

と、説得するはずの有咲。虚しくもこんな香澄の理解度では難解な解答をすんなり聞くはずもなく、反論が跳ね返る。

「でも、私達といっしょに出るバンドがどんなバンドか気になるもん!!」

ふむ、香澄は情報収集をしたいとの事。

実質、その意見は一理ある。敵バンドの詳細を知ったから、とこちらが対策を準備す

るのはまたちよつと路線がずれるけども。というか、その行為自体にあまり意味自体はない。

只——知っているのと知っていない。

たったそれだけの差異でもライブへの心構えは案外と変化してしまう。その方角は良い方だったり、悪い方だったりと様々だ。

「てか、そもそもその人達が今日、此処に練習に来てるとは限らんだろ」

「はっ………!!」

「今、気付いたのか」

手掛かりは一切なし。

香澄は探すバンドの大体の人物像を事前に聞いているらしいが正直宛にならない可能性が大。

実質、ゼロからの搜索となる。

と、有咲の案がうちに採用されるまで浮上してきたタイミングでいつの間にか姿を消していた沙綾が登場する。

「香澄、良いもの貰ってきたよ」

「さーや!!何を?」

「じゃーん。見学用のパス」

「おお!!」

「お、おまつ……………!!」

「これである程度は回つても大丈夫らしいって。流石に個人スタジオの中とか覗いちやうのは駄目だけど」

奈落へ滑り落ちた有咲の希望。

沙綾の華麗な裏切りにより、絶対窮地に追い込まれた。このままでは香澄と沙綾とで見学パターン。

懸念材料に対し、沙綾が付いてると言えど、対処仕切れる自信が有咲には既がない。

「何処から回ろうか? スタッフさんのお勧めは奥のライブスペースらしいよ」

「やっぱり構造とかは”C i R C L E”と似てるのかな?」

「どうだろ? 今丁度バンドが演奏中でご自由に中に入って観ても良いらしいし。確かめに行つてみる?」

「行く!!」

香澄の弾んだ返事。

大きく有咲は息を吐いた。もう過去の事例から彼女は学んでいる。既に手遅れかつ自身は香澄の暴走から逃げようのない事実。

目的地はライブスペース。”C i R C L E”にあるライブスペースと似たような空

間らしい。

「よーし!!……どつち?」

「こつちだよ」

「レッツラゴー!!」

沙綾からパスを受け取り、有咲はそれを首にかけた。

元氣底無しの後を追うように三人は歩を進める。

そんな中、今日はまた一段と意図の読めない沙綾の背中を追い掛ける有咲であったが、唐突にその沙綾が振り向く。

「ど、どうした?」

「有咲、無理だけは駄目だからね」

「は?し、してねえから!!」

「そっか。香澄は暫くあのままだろうし……何かあったら私に言ってね」

そう言い残した沙綾。

そして再び前へ視線を戻し、有咲は何も言い返せないままポツンと歩き続けていた。

香澄に手を貸したり、有咲に心配の言葉をかけたり。普段の沙綾と比較すれば、不思議な行動が目立つ。

この場所の影響なのか。はたまたは、恋の前には頭が真っ白ってやつなのか。

「着いた!!」

そして——数十秒もせずして。

防音扉が塞ぐ一つの巨大なスペースが眼前に広がるであろう廊下の先端まで来た。

有咲は何となく耳を澄ませてみる。奥から微かにだがアンプを通したギターの音色が聴こえてきた。

「練習………本当にしてるみたいだな」

「流石に直接、中に入ってみたいとどんな人達なのかまでは分からないね」

「だったら!!行くよー!!」

「ちよっ?!ゆっくり開けろよ!」

「そりゃあ!!」

——バーン!!

有咲の忠告も虚しく。

香澄の元氣一杯までに解き放たれた扉は会心の衝撃音をお見舞いした。

沙綾よ、笑ってる場合ではない。

中の様子を確認。扉付近からすぐ右は壁。どうやら自分達は部屋の隅辺りに出たようだ。

逆に左に目をやれば、人が沢山入れる空間がそこにあつた。観客の為に用意された場

所という見解で間違いはなさそう。

そして、メインのステージ。部屋の一番禺に一段土台が上がった場所がある。

ドラムセット。ギターアンプにベースアンプ。キーボードやスタンド台。恐らく、此処がステージであり、尚且つ本番で曲を演奏する場所。

「あれは？」

「香澄？」

何かを見つけた様子。

「居た！」

指差す香澄に有咲はその先を見つめると、ステージに辿り着く。そして、五人の少女達の姿もあつた。

「お？どうした？悪魔の襲来か？」

「へ、変な事言うな!!」

「見学の方………でしょうか。首にパスがかけてありますし」

「あらあら。珍しいこともあるものね」

ステージの上で輪を囲む彼女達。

各自、飲み物を片手に握っており、練習の合間にある雑談中であつた様子。

よく見れば、紅茶のカップを各々持っている。

ロングヘアーの黒髪の少女がぼそつ、と。

「待て……いや、この状況見られたら不味くないか？」

そして――

はつ、と彼女達は此方三人と顔を見合せた。

静寂に包まれたまま、数秒が経過する。

動き始めたのはステージ上の一人、ツイントールの女の子がギターの弦を軽く弾いた時。

「さあ！練習するぞ!!」

「はい!!しましよ!!全力で!!」

慌てて立ち上がる二人。

シヨートヘアーの子にツイントールの子。

まるで蛇に睨まれた蛙のようにぎこちない動きで楽器のある定位置へ配置に付いた。

「おい！唯！起きろ！」

ベースを抱える黒髪少女が懸命に呼ぶ。

肝心の相手は愛用しているギターを抱えたまま地べたに座り込んで微動だにしない。

お昼寝タイム真っ最中であつた。

「ふえ？な、なに!？」

ようやく起きた。

「曲を演奏するので、今すぐ準備してください!」

「は、はい!!な、なんかごめんね………あずにゃん」

少女はぺこぺこ頭を下げつつ。

また随分と癖のあるギターを使うんだな、と有咲の意識がそちらに向く。

どこか香澄と共通点が多そうな茶色ボブカット少女。急かされるせいで準備する手元が覚束無い。

「演奏聴かせてくれるのかな?」

「楽しみだね、有咲!」

「分かったから。演奏中は黙って聴いてろよ」

「勿論!」

関心の力は大きい。

あの香澄も素直に大人しく清聴に従事してくれるらしい。

「で、では!聞いてください!!ふわふわ時間!!」

寝起き少女はボーカルを担当。

曲名を宣言しつつ、彼女はギターのフレットにピックを当て、鳴らそうとした。

——その時だった。

「あつ……………」

ギターの弦がぷつぷつり断線。

ただ、ギタリストにとつてはよくある光景だ。弦も使い方が悪いとすぐに使い物にならなくなる。

兎も角、これではギターのリフが弾けない。

他のメンバーの不安そうな視線を集めたボーカルの彼女。

「唯先輩？」

「え？唯？弦が切れちゃったのか？」

——うるうるうる。

「これは……………ある意味、才能かも」

俯いた瞳に潤みを帯びて。

沙綾の冷静な解説を片耳に、有咲は何だか不吉な感覚に背筋を凍らす。

そして、彼女の悲しみに満ちた声が会場を木霊する。

「ギー太あああああああ!!」

この時、有咲は悟った。

——この謎の出会いはい絶対に大波乱を起こす前兆になるのではないのか、と。

—
5
の
3
—
へ
続
く。

— 5の3 —



スクエア。ライブスペース。

「はい、唯先輩。直りましたよ」

「ギター太く!!」

数分後。

黒髪ツインテール少女がギターをボーカル少女に引き渡す。

ずずつ、と鼻水を啜った彼女は高級な物を慎重に取り扱うかの如く丁寧にギターを抱き抱える。

黒髪ツインテ少女が香澄達の方へと体を向けた。

「ありがとうございます。弦の予備を此方で用意していませんでしたので本当に助かりました」

「ううん!!全然、気にしてないから!!」

ギターに張り替えられた弦。

他でもない香澄が日頃から所持していた予備の物を使用している。替えの弦がなく、

困っていた彼女達に香澄自ら立候補した結果となった。

「ほら、唯先輩もお礼を言ってください」

「ありがとうー!!」

ぶんぶん、と手を振ってきた。

あまりの勢いにギターを落としそうになりつつ、誠心誠意見せるその姿に香澄も誇らしい顔つきだ。

ふんす、と鼻を鳴らした彼女は気を取り直して演奏を再開するようだ。

「じゃあ、今度こそいくよ!!」^タふわふわ時——」

弦に手が触れたその時——

「緊急事態であります!!唯どの!!」

「な!?今度は何〜!?!」

「練習が終わる時間だ!!」

「時間?………うわっ!!」

ドラムとベースが間髪なく告げた。

ボーカルの彼女が時刻を確認すれば、顔色を徐々に青く染めていく。規定時刻の五分前には撤収完了していないとヤバイ。

「ご、ごめんね!!今日は演奏見せられないかも!!」

「大丈夫です!! 気にしないでください!!」

バタバタと慌ただしいステージ上。

演奏を断念せざるを得ない事態に香澄の残念そうな表情は浮かべず、意外な事に元気よく返事をした。

「残念だったね、香澄」

「ううん、そんなことはないよ? あの人達の演奏自体はライブ本番になったら聴けるから」

「は? …… ってことは、この人達が香澄の言ってたバンドなのか?」

「多分!!」

「多分かよ!!」

「ポピパよりもなかなか癖の強そうなバンドだよね」

三人で会話をしつつ見守る。

先に片付けを完了させたであろう、一人の少女がその三人へと近寄っていく。キーボードを担当していた金髪のお嬢様風な女の子だ。

軽く会釈をした彼女はとある物を手元へと出した。

「お詫びと言ってはあれですけど……… お茶でも如何ですか?」

「え? 良いんですか?」

「はい!! 私達も色んな人とティータイムを過ごせるのは嬉しいですから」

粹なお誘いだな、と有咲は思った。

「どうする? 有咲」

「……………行くしかねえだろ」

有咲の視線の先は恒例の香澄。

まだティータイムが始まってすらいなのに、キーボードの少女と既に談笑している。

今更、誘いを断れる状況ではないのだ。

そして、沙綾もまたそれに気付いている。

「だね」

——余談だが。

有咲が彼女の手を持つカップを下手をすれば高校生が払える額ではない代物だと気付くのは数秒、先の話であった。

◇◇◇

スクエア。休憩スペース。

「ではでは!!自己紹介タイムと行くぞー!!」

円形テーブルに囲んだ少女達。

緊張で顔色が悪そうな者、若干二名。期待感でキラキラしてる者、若干三名。面倒ごとに巻き込まれたまま手遅れと悟った者、若干二名。なんだかんだ付き合いの良
者、若干一名。

計、八名がその場にいた。

先陣を切ったのは他でもない、おでこが可愛らしい勝ち気な性格を誇るドラムに座つていた者だ。

「はい!!戸山香澄、行きます!!」

「おお!!元氣のある返事!!よろしい!!許可を出そう!!」

「……………テンション高っ」

「今の律は明らかにドラムの叩き不足から来る消化不良って感じかもしれない」

「ちゃんと練習しましょうって言いましたよ、私」

同じテーブルでも派閥が見事に分離。

香澄を筆頭に元気いっぱいには振り撒く組も入れれば、有咲のように冷静沈着に物事を捉える組もまたいる。

沙綾はどちらにも属さない。第三者目線で行方を見守るつもりであった。

「紅茶はいかが？」

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ」

「で、では……………美味しいです！」

「あら。ありがとうね」

同じ存在がもう一人居た、と沙綾は知る。

金髪にくつきりとした顔付き。丸っこい眉毛。おっとりとした雰囲気。

「私、”琴吹紬”って言います。ムギって呼んでくださいな。よろしくね」

”山吹沙綾”です。こちらこそよろしくお願います」

「ふふ、沙綾ちゃんね。名字も一文字同じでまさかの”吹”違いだなんて」

自然と交わされる自己紹介。

ムギ、と名乗ったその少女は慣れた手付きでメンバーの手元にカップを並べていく。因みにさつきのやり取りを見逃さない者がいた。

「さーやー!! ずるいー!!」

「そうだよ!! ムギちゃんも!! 何で先に仲良くなってるの!!」

ぶーぶーと騒ぐ似た者同士。

「はいはい。香澄から先にどうぞ」

「むう………まっいつか。」 Popin, Party ”ボーカルの戸山香澄と言います

!! ドキドキキラキラを探して歌ってます!!」

「ポツピンパーティー?」

「………唯、” ○□ライブイベ ” の対バン相手にいるバンドだ」

「おお〜」

物珍しげに眺める唯と呼ばれた少女。

どこか気の抜けた天然っ毛のある性格をしているようだ。

「○□ライブ?」

「ん? 今度あるスクエアとサークルの合同ライブの対バンライブの企画名をそう言うんだぞ」

「そうだったんですね！」

「アタシは”田井中律”。さっきの見たるから分かると思うが、ドラム担当だ。よろしくな！戸山さん！」

「香澄で良いです！」

「おう！そっか、香澄！アタシの事も好きに呼んでくれたまえ！」

「な、なら！りっちゃん！」

「りっちゃんだつて。私とおそろだね」

「唯も名乗れ！」

「はい。」平沢唯”です。ボーカルとギターをしてるのでよろしくね」

怒濤の連鎖で繋がる会話。

そこに入る余地がなく、取り零された者達もまた自然と交わされる。

「三人寄れば文殊の知恵ならぬ混沌の嵐だな」

「ご迷惑かけてすみません……」

「あ、いや……そんなこと……ないです……むしろ此方こそご迷惑では無いかと……」

「え……あ……うん」

「滯先輩？どうしました？」

有咲はコミュ障である。

故に初対面の人と会話は苦手な部類に入るが、まさかの同族が向こう側にもいた。

「もう、しつかりしてください」

仲介役は黒髪ツインテールに任命された。

「えつと……………」 中川梓 ”と言います。パートはギターです。よろしくお願いします」

「ど、どうも……………」

「それとこちらの方が” 秋山滯 ”先輩です。ほら、残りぐらいは自分で言ってください」

「……………ベース担当です。よろしく……………です」

梓も一苦勞である。

そして、有咲に危機的状況が襲来する。自分の出番が回ってきたのだ。

と、ここで女神的存在の登場。

「有咲？ 顔色悪いけど……………大丈夫？」

「沙綾!! 助けてくれ!!」

「えっ!? 何!? —— ああ、大体は分かったけど」

希望は彼女に託された。

パツと沙綾は状況把握を試みて、これまで培って来た経験を活かして行動へと移す。

「香澄と同じポピパのドラムを担当してます、” 山吹沙綾 ”です。それとキーボード担

当の”市ヶ谷有咲”です。同じバンド仲間同士、よろしくお願いしますね」

「はい！なかなか軽音繋がりで友達は出来なかったので嬉しいです！」

梓の負担も半減された様子。

コミュ力抜群の沙綾が早速切り込んでいく。

「あの、皆さんはどういうバンドですか？」

”放課後ティータイム”って名前で普段からのんびりしてるバンド……かな？

「残念ながら、はい、そうですね」

放課後ティータイム。

本人達も自負する程のお気楽な雰囲気醸し出すバンドと言うが、果たしてそうなのだろうか。

「ポピパの皆さんはどういう？」

「私達、まだ組んでからそれほど経ってなくて……でも、音楽を楽しむって点では負けません」

「だそうですよ、濤先輩」

「つて、言われてもなあ……」

有咲がその時、気付いた。

「ふと気になったのですけど……先輩って……」

「あ、私以外全員二年生ですよ」

「えっ………てつきり一年生かと………」

”放課後ティータイム”。通称”HTT”。

まさかの——先輩バンドでした。

—5の4—へ続く。

—5の4—



CIRCLE.

「次回までに先程述べた反省点を各自修正するようにしてください。では——」
練習終了です、と一人の女性が告げる。

”Roselia”ギター担当。氷川紗夜。

水髪ロングにキリツとした目。背中にギターケースを背負う美人さん。

「はくい、分かりました〜」

「宇田川さん？」

「はい！了解であります！」

”Roselia”ドラム担当。宇田川あこ。

気の抜けた返事に紗夜の威圧が仕向けられるが、どうにか難を逃れる。

「ライブまで後少しだし、次は最後の仕上げって感じかな」

”Roselia”ベース担当。今井リサ。

バンドにおいて母親的存在を務める頑張り屋のギャル風な女の子。家庭的なものな

ら全般的に得意。

「は、はい……想像するだけで緊張します……」

”Roselia” キーボード担当。白金燐子。

奥手で控えめな性格の少女。キーボードの腕は確かであり、メロディーの要とされている。

「今回の対バン相手は私達”Roselia”にとつてかつてない強敵になることは間違いないわ。入念に確認しておいて損はないはずよ」

そして、最後の一人。リーダー。

”Roselia” ボーカル担当。湊友希那。

彼女は大好きな音楽に対し、猛烈な熱意を秘めながらも、ストイックな姿勢を顕著に示す。只、最近ではメンバーに優しさを見せる面も増えつつある。

——”○□対決ライブ”。

それが現在、彼女達が目指すもの。

二つのライブハウスから代表バンドをそれぞれ三つ選出。己のプライドを掲げ、バンド演奏でぶつかり合うライブだ。

今回、”Roselia”はCiRCLE代表としての初出場となる。故に、本番がどういう雰囲気を迎えるのか未だに想像がつかない。

何しろ、相手が相手だけに。生半可な完成度で挑む行為自体が恐ろしいと感じてしま
う。

——絶対王者“アークラ”を筆頭として。

“ダークホースバンド”“H T T”に魅惑のツインボーカルバンド“ガルデモ”が敵と
して立ち塞がるのだ。

“こちらもまた”“ポピパ”に“パスパレ”と波に乗りつつあるガールズバンドで対抗
する。どちらも味方として頼りになるバンド。だが、友希那にとって今回のライブ、勝
利の旗がどちらに上がるのか、微妙なラインであった。

「この後、どうする？ レストランで反省会でもしようか？」

「はい！ あこもリサ姉の意見に賛成です！」

元氣よく挙手したあこ。

他の皆も特に反論を示す様子もなさそうかなと、確認したりサ。

「じゃあ、時間もそろそろだしスタジオ出よっか」

「ええ」

「えっ？ リサ姉！ 片付けるのが早い!!」

「何を言ってるのですか、宇田川さん。終わってないのは貴女だけです」

「なん……………だど!？」

紗夜の痛烈な指摘。

確かに、荷物の少ない友希那は愚か、キーボードの燐子も既に支度は済ませてあつた。そそくさとあこは機材をケースに戻す作業へ。

「そういえば、友希那」

「何かしら？」

「対バンの相手はどんなスタイルのバンドなのか聞いている？」

「私も気になってはいました。湊さんも一目置いているとのことなので」

「そうね。私達“Roselia”はCiRCLEの代表バンドの一つとして出るわ。対して、迎え撃つのはライブハウス“SquareRoad”。まりなさんの話によれば、今年は特に粒揃いみたいよ」

「そのライブハウスって確か……………ソウの？」

「……………ええ、アークラも出るわ。今回は真正正銘、私達の敵よ」

「それは……………一筋縄ではいけませんね」

絶対王者、アークラ。

圧倒的な演奏とパフォーマンスの融合したライブは観た者の心全てを掴む。

一度、虜になってしまえば、後戻りは不可能なギター。身体全身を骨の髄から震えさせるベース。全てを喰らいにかかる迫力のドラム。聴いた者の魂を轟かせるボーカル。

そんな定評のあるバンドが今回の対戦相手として立ち塞がる。弱音を吐きそうになるのも無理はない。

「ソウ先輩も出るんだ！湊さん、他に出るバンドはどういうバンドなんですか？」

「あれ？あこ、片付けは終わったの？」

「うん！」

「なら、まずはここを出ましょ。話はそれからよ」

スタジオから完全撤収。

廊下を抜け、受付に練習を終えた趣旨とスタジオ料の会計をリサが代表して済ませた。

施設の自動ドアを潜り抜け、カフェテリアが広がるエリアに到着した。

「それで、湊さん。話の続きをお願いします」

「紗夜く？紗夜も案外気になってるんだね」

「別におかしな事ではありませんよ？情報収集は大切です」

楽器を背負い、一団は歩いていく。

前列にリサ、友希那、紗夜。後列にあこ、燐子と並んでいる。

「そうね……………話すと言っても私も直接知ってるわけではないわ」

「へえー。つてことはあれ？誰かから聞いた感じ？」

「まりなさんからよ。それによると、今回ライブに出場するバンドはアークラ以外も油断できないわ」

「友希那がそこまで言うなんて……ちよつと楽しみになつてきたかも」

「あまり調子には乗らないように、リサ。冗談で言つてる訳じゃないのよ。私達が頂点を目指す上で——」

「まあまあまあ!!友希那の言いたいことは分かつてるから!!今は落ち着いて?ね?」

熱が入りそうになる友希那を瞬時に見分け、冷静に対処していくリサ。ここで話の路線がずれてしまうのは不味い。

「……………話を戻すわ。出場するバンドはC i R C L E」

と同じ計三つ。一つ目がアークラだと言うのはさつき言つたわね」

「うん」

「二つはそうね……………あくまで噂に過ぎないのだけれど、ガールズバンドにも関わらず、男女共に人気を剥奪するバンドが一つ」

「男女両方となると、様々な技術等が要求されますが……………」

Roseliaのファンは女性優勢。

クールを重点的に青薔薇の骨頂を大いに振り撒くその背中は主に女性の目を虜にしてきた。

逆に言えば、男性への反応は薄い。

「バンド名は——”Girls Dead Monster”。ファンの人はガルデモと略すようね」

「うわあ……………気迫ある名前ですね。でも、カッコいい……………!!」

「少女、死、怪物……………私の勝手な想像だと、いかにもロックなバンドってイメージかな」

「ええ。リサの予想通り、王道ロックを貫いてるわ。ただ、そのバンドにはある特徴があるの」

「ある特徴……………とは？」

紗夜が尋ねる。

「ツインボーカルを採用してるのよ」

「それは……………確かにCiRCLE内では全然見かけないかも……………ポピパがギリギリ該当するぐらいかな？」

「戸山さんと花園さんですね。ですが、あれはあくまでコーラスという枠組みに収まってしまいます。ツインボーカルの枠組みに収まるとなると少々物足りないかと」

「因みにガルデモのツインボーカル、どちらもボーカルとしての実力は高いそうよ」

折角なので休憩をする事に。

適当に空いていたテーブル席を一つ確保したので、軽めの飲み物をオーダーをしに行く。

「皆、何する？」

「今井さん、付き添います」

「ありがとう、紗夜。助かるよ」

その場の流れからリサと紗夜に決まる。

友希那はいつもの、あこはオレンジ、燐子はココアと要望は予め聞き出しておく。

「あれ……………」

びたり、と燐子の動きが止まった。

「りんりん？」

真つ先に気付いたのはあこ。

彼女に声をかけたあこ。だが、彼女の視線がとある一点を見つめたまま微動だにしない。

「綺麗……………」

「どうかしました？」

「二人ともどうしたの？何か他に欲しいものでもあるの？」

リサと紗夜も異変に気付く。

一方で、あこが隣子の視線の先を辿っていた。一見、普通な日常の光景。違和感な点は皆無だ。

やがて、ある場所に視点が定まる。

「あれは………弾き語り？」

テラスのオーブンスペース。

小さな子供達が円を囲むように座り込んでいた。その中心には誰かがギターと一緒に店の椅子に座っている。

足を組み、ギターを持つ少女。

真つ赤なショートヘアに季節外れのサングラスを装備。如何にも怪しい格好の人物を醸し出している。

下手をすれば、通報案件。

だが、しかし——

「お姉ちゃん!!もつと!!」

「次は何を歌うの〜?」

意気揚々と楽しそうな子供達。

保護者と思わしき人物も各々、自分の座るテーブル席から微笑ましく見守っている。

肝心の張本人は満更でもなさそうに頬を緩めるとギターのネックを一撫でした。

「困ったな……ちよつとあいつらを待ってただけなのに、こうなるとは……」
「歌つてくれないの？」

「……よし。一曲、アンコールだ」

幼き歓声が巻き起こる。

純真な子供の上目遣いに敗北していた。

と、顔を上げたその少女。離れた場所から見ているこちらの存在に気付いてしまう。

「……呼んでますね」

少女の右手がくいくい動いている。

「え？ 私達の事？」

「恐らく……私達、いえ。もしかすれば、”Roselia”自体をご存じなのかと」
「紗夜の言う通りかもしれないわね。ここは大人しく従いましょう」

無駄な抵抗はせず、接近する。

声が届く距離にまで近付けば、少女はその場を立ち上がった。

子供達も何かを感じ取ったのか、残念そうな表情を浮かべながらも保護者の元へ散らばっていく。

「もしかして……アンタ達、Roseliaってバンドのメンバー？」

「そうですけど……」

リサが答える。

「いや、急にすまない。只、個人的に確認したいだけだったから今のは気にしないでくれ」

「はあ……………」

「そういう貴方こそ何者なの？さっきの歌声といい、ただ者じゃないのは分かるわ」「ちよつと友希那!?!なんでそんなに喧嘩腰なの!?!」

リサが友希那の敵意ある瞳を捕捉。

初対面に対してのあるまじき行為に慌てて対処しようとしてしまう。

ところが、その少女が友希那の態度に気にした様子はない。むしろ、笑っていた。

「全然良いよ。名前を尋ねる前にこちらから名乗っておくべきだった」

彼女はサンングラスを外す。

真つ直ぐ揺らぎない瞳を持つ少女が一寸も怯む事なく友希那の前へと並び立つ。

「あたしは『岩沢まさみ』だ。って、名前だけ言ってもあれか……………そうだな、次の○□ライブに『Square Road』の代表バンドとして出させてもらうガルデモのボーカルでもあるって言えば分かるか？同じバンドマンとして、よろしく頼むよ」

ガルデモ。正式名称は——

「ガルデモ……………？はっ!?!え!?!この人がさっき話してたツインボーカルの内の一人!?!」

「あつ！ホントだ!!」

「おっ？アタシの噂でもしてたのか？そうなのか？」

——”Girls Dead Monster”。

——5の5——に続く。

山吹沙綾編

— 1 の 1 — 『師弟関係』 *



カフェテリア。

「え？ 私のドラムを始めた切っ掛け？」

ふとした会話中に漏れたそんな問い。

うん、と思考に浸り始めた沙綾は左手に持っていたカップをテーブルへと置く。しばらく何かを迷っているのか唸る。

そんな状態へ沙綾を追い込んだ張本人の香澄はさらに追い打ちをかけていく。

「うん、さーやはどうやってドラムに出会ったのかなあ？ って思ってた」

「確かに。私達が出会う前から沙綾はバンドしてたから沙綾のドラムの秘訣は知らないね」

仲良く頷く香澄とたえ。

今更だけどバンド練習を終えたまま休憩がてらにこちらに移動してきた為、” pop pin, party ” のメンバー五人は勢揃いしている。

つまりは残り二人もいるわけで。

「二人も気になるよね？」

「まあ……………」

「ちよつと……………ね」

有咲とりみもあちら側に回ってしまふ。

りみからはこつそり「ごめんね…」とアイコンタクト。

「教えるのは良いけど、なんで私だけなの？」

どうにか悪足掻きをしようとするが。

「私はほら！キラキラしてたから！」

「私の場合は偶然出会った人がギターしてたからかな」

「私は……………お姉ちゃんの影響かなあ」

「小さい時、習ってた」

うん、皆すぐに説明終わっちゃった。

「私達の場合と違ってドラムって手をつけにくいでしょ？だから、さーやだと何をきつかけにしたのかな〜って」

「まあ、すぐにドラム始めるってのは確かに難しいかもね」

香澄の言う通り、ドラムは色々とめんどろな楽器でもあることは承知の事実だ。

教えてもらうにも、そもそも人とか場所が殆どない。それに家で本物で練習すると近所迷惑という難癖をつけられやすい楽器の代表でもあると想像つく。

「話長くなるけどいい?」

同時に頷く四人。

「そう来られると逆に緊張しちゃうな……………よし、そうだね……………私がドラムを始めたのはある人が影響してるかな」

「ある人?」

香澄が代表して声を出した。

「えつくと……………そうだ!この前、私達が出た合同ライブに男の子のバンドがゲスト枠として来てたでしょ?」

「うん、男子のバンドなかなか見ないから新鮮な感じがしたね」

「あ、お姉ちゃんが彼らは全体を見ても演奏レベルが高かったって言ってたけど……………」

「やたらあの時は盛り上がりすぎてたな」

「私の言うある人ってのはそのバンドのドラムの人」

「……………え?」

香澄、りみ、有咲の動きが一致した。

唯一の例外、たえは少し考えた様子を見せるとまさかの——

「蒼真君？」

「せ、正解……………」

これには沙綾も驚いた様子を見せる。

「蒼真君？おたえ、その人知ってるの？」

「うん、CIRCLEでバイトしてた」

「ん？でも、働いてるとこ見たことねえけど？」

「うん、私も気になってけど、最近はあまりシフトが入ってなかったみたい」

ふーん、と有咲の興味なさげな態度。

実際、ないのだろう。

一方で、香澄は席を立ち上がりー

「まだ蒼真君とはちゃんと喋ったことないから、今度聞いてみようよ!!」

「パス」

「香澄ちゃん、初対面で急に質問されても困るだけじゃあ……………」

「あはは……………」

彼の知らない所で、ちよつとした災難が生まれたが沙綾は苦笑いした。彼なら適当に香澄の相手をするだろうからフォローはしない。

「で、沙綾は蒼真君の何？」

「な、何って……………」

たえの真つ直ぐな視線に沙綾は思わずたじろいだ。他の三人もいつの間にか黙ってこちらに耳を傾けている。

なんと言つても聞き方がいやらしい。天然おたえのことだ。無意識に出た言葉に違いない。憎めない。

「彼女？」

——刹那、ぼっ！と香澄の方に振り向くりみと有咲。

乙女に恋話は大好物。ましてや、沙綾にそんな噂は一つも無かった為、より一層二人の興味が右肩上がりしていく。

お互いに意志疎通したのか、頷き合う。

「「で、どうなの!？」」

再び、ぼっ！と振り向いた三人。

「う……………私が……………か、彼女……………」

三人は目撃した沙綾の顔はトマト以上に真つ赤になっていた。俯いたその表情はまさに恋する乙女と言えた。

これは……………手応え有り？

「照れてる〜」

「写真パシヤリ」

「さーやちゃん……………可愛い……………」

「まさか……………」

にやにや。

「っ!!」

生緩い視線に気づいた沙綾、とつさに顔をぶるぶる横に振りまくる。

「今は蒼真とはそんな関係じゃないから!」

「今は?」

「おおっ!!」

「えっ、あっ……………そうじゃないからあく……………」

火照る頬を抑え、沙綾は懸命に否定する。がその返答に、いつもの彼女らしさはなく、

萎むかのように薄れていく。

沙綾の失われた元気さは他のメンバーが回収していた。具体的には香澄とたえ。

「もうそのぐらいにしておかないと沙綾ちゃんが……………」

「ええ〜」

「見てるこつちが恥ずかしいわ!!」

止めに入るりみと叫ぶ有咲。

香澄が抗議するが、受理される様子はない。

「もう……………話すよ」

既に疲労困憊の沙綾。

彼女の口から語られるのはドラムを通しての彼との思い出話であった。

◇◇◇

中学校。

「バンドやらない?」

放課後の下駄箱。偶然訪れた二人きりの空間で持ちかけられた話は予想外の勧誘であつた。

彼女の名前は“海野夏希”。

それほど親好が深いわけでもない、単なる同級生という認識だった。誘われる理由が

ぱっと思いつかなかった。

「えつと………私か？」

「うん」

「どうして？」

「山吹さん、リズム感良さそうな気がするから」

「そんな理由で………」

しかもあの顔は勘で選んだ顔だ。

夏希は断れる可能性はないと見ているのか、それはもうキラキラな瞳を浴びせてきている。

やったことがない未知の世界。バンド。

躊躇していると夏希が、何を思ったのか。

「試しにやってみるだけで良いから。お願い!! 私達のバンド入ってくれない？」

両手をぎゅつと握られる。

この頃から、自分でも頼み事は断れない性格を理解していた私。勿論、この状況でも例外な手段を取れる訳ではなく………。

「分かった。分かったから」

「ほんと!! やったあ!! 沙綾、ドラム得意そうだもんね!!」

「ド、ドラム……………?」

一応知っているが実物を触るところかどうという仕組みで音を鳴らすかさえ知らない。
というか、音楽自体が無縁の存在。

「私がボーカルとギター。で、沙綾にはドラムをお願いしたいんだけど」
「やったことない……………」

「あ、それは大丈夫。ドラム経験者が教えてくれるって話つけてあるから」
「えっ、あつ、展開が早い。ちよつと待って」

ドラム。ドラムかあ……………。

楽器初心者なので誰かは分からないが教えてもらえる、とのこと。

試すだけならまだ良いかも。

「あ、急にごめんね」

「大丈夫。整理はついたから」

「加えて早速で悪いんだけど、明日の放課後大丈夫?」

「明日?時間はとれるけど……………」

まさか。

「じゃあ明日のこの時間にここ集合でよろしくね」

「……………やっぱり、一つ良い?」

「何？」

「その……教えてくれる人って……」

「あー！そういえば言ってなかったね」

ドラムを教えてくださいるのはありがたい、とは言え、まだ相手の事を一切合切知らないのは不安になる。

「山吹さんが一番知ってる人だよ？」

「えっ？」

そして、名前を彼女は口にした。

「ドラムを教えてくださいるのは蒼真先輩。」 山吹蒼真君

「……え？あの”蒼真”？」

◇

次の日の放課後。

「あ、来た、おーい!!」

授業中、うやむやな気持ちと格闘した後の私の足取りは軽いとは言えなかった。

ただ約束をむやみやたらに破るわけもいかなかったので渋々向かったのだが、見えた矢先の私の初感想として、あのテンションに慣れるのには時間がかかりそうだなあと心がそう諦めている。

そんな私の心情は露知らず、夏希はこちらへ駆け寄ってきた。

「じゃ、早速行くよー!」

「えっ、あつ、ちよつと!」

整理する間もなく、私は夏希に腕を掴まれて引つ張られる。

「……………」

外に行くのかと思っていたが意外にもそうではないらしい。というのも、現在の私達は校舎の階段を上っている最中であるからだ。

やがて四階に辿り着くと、夏希は先々と廊下へと歩き出す。既に腕の拘束は解除されていた私も後へと続く。

この校舎の四階と言えば。

そんなことを考えていると、夏希は一つの扉の前で振り向く。教室を確認すると私の予想通りの場所であった。

”第二音楽室”。

「入るよ〜」

コンコン、と部屋をノック。返事を待たずして夏希は室内へ入る。少し慌てて私も扉が締め切る前に室内へ。

「いや、まだ何も言っていないんやけど」

「えー、良いじゃないですか〜」

「……………うん、見た目通りの性格やな」

「それ、どういう意味です？」

「気にすんな」

第二音楽室の内部は至って普通。

ピアノがあり、授業で生徒が座る椅子が並べてあったりと。

ただ私が違和感を感じたのは教室の後ろ部分にボン、と置かれた楽器。

そう”ドラム”である。

夏希が話している相手はそのドラムに隠れて座っているからなのか、はつきりと姿を確認できないが、声の感じから男子なのは判断がつく。

「それはそうと、先輩、連れてきました」

「ん？……………あゝあれね。ん？もう見つけたのか」

「こう見えても結構私は本気なんです！」

未だ扉から数歩の位置にいる私。

ドラムの近くへと移動した夏希に手招きをされて、私もそこへ向かう。

初めてドラムを意識して間近で見た。

——ドラム。私が演奏する……。

刹那、彼が突然立ち上がった。その動きについつれられた私と彼の目が合う。

ゆっくりと彼は口を開いた。

「久し振り……さーちゃん」

「うん、久し振りだね、ソウ君」

これが、私と蒼真とドラムの出会い。

小学校以来の再会であった。

——1の2——へ続く。

— 1 の 2 —

◇◇◇

帰り道。

「こうして一緒に帰るのもいつ以来？」

「そうやな……………二、三年ぶりかな」

「そんなに？」

時刻はもう最終下校時刻を過ぎた頃。

夕焼けに染まった赤空の下を歩く私と蒼真。懐かしい感情を抱く二人の間の距離は少し遠い。

「まあ……………学校が別々になってから喋らんくなつたな」

「それは一年だけでしょ？実のところソウ君が私の事、避けてたからじゃない？」

「俺が？それはない。ないな！」

「ほんと？」

「俺はさーちゃんを嫌いにはならない。絶対」

「……………仕方ないから、許してあげる」

そつぽを向いた私。

彼はそんな素振りの私に微塵も興味を示す様子はない。分かつてはいるが、不意打ち擬きの彼の返答につい照れてしまった私を見られたくはなかった。

”ソウ君、あの頃と変わってないなあ”

小学生の頃は毎日のように彼と登下校を共にしていた。その時の私にとって何故かそれが当たり前で安心できる時間であつたのは確かだと思ひ出せる。

中学に入り、成り行きで私は本格的に店の手伝いを初めた。彼も何かしらの都合があつたりしたはず。色んな要因が重なつた結果、彼と過ごす時間は自然消滅してしまつていた。

「折角だし、さーちゃん家まで送るから」

「え？あ、ありがとう」

「パンも妹の為にもついでに買つてこ」

さーちゃん。私の渾名。

つい最近まで耳にして来なかつたその言葉につい変な反応が出てしまう。

パンを買うと言う彼の発言だが、私の実家はパン屋を営んでいるのだ。彼はその事を知っているからこそ、出た発言。

「叔父さんにも挨拶しときたいし」

「なら、私も叔母さんに挨拶しておいた方が良いかな?」

「それは大丈夫でしょ。俺の母さんはそういうの気にする人ではないし」

唐突だが、私と蒼真は幼馴染み以前にいとこの関係でもある。

蒼真の父親と私の父親が実の兄妹であるのだ。その繋がりから家族ぐるみの付き合いがあり、必然的に蒼真とは子供の頃から一緒に遊び出していた。渾名同士で呼び出したのもその頃。

そして蒼真の母親、私の叔母に当たる人はどこか天然な性格を持っていると私の記憶にあった。

「それでだ」

「うん?」

「ドラムの触った初感想は?」

彼とこうして一緒に帰るのもそれまで一緒にドラムの練習をしていたからであって、一段落した今に改めて聞かれるとはある程度予想はついていた。

そう言えば、夏希はというと、練習途中で姿を眩ました。彼いわく、楽器の音を聴いてあいつもギターが触りたくなっただらうとのこと。

「正直………難しいかな」

「どいらいへん?」

「なんかこう……：……右手とか足とか釣られちゃうんだよね」

「ふむ。初心者はそんなもんやな」

「ソウ君はどうなの？」

「俺？俺はもうだいぶやつとるからな。あんまり意識せずに自然と動く。あ、今思えば、俺がちょうどドラムを始めた時ぐらいからさーちゃんとは会わなくなったな」

「え〜！昨日ソウ君がドラムを教えてくれるって聞いたときはびっくりしたんだから！」

彼が忙しくなったのもドラムが原因だと判明した瞬間であった。しかも軽音部所属だと今知った。

「いや、俺だつて教える相手がさーちゃんやとは知らなかったからびっくりしたし」

「お互い様だね」

向こうも向こうで何かしらあつたらしい。

「ところで、どうしてソウ君がドラム教えてくれることになったの？」

「あーそれ？まあ……：……海野が今度のライブに俺らを誘うって条件と引き替えで受けたから」

「ラ、ライブ……：……そうだよね……：……」

「そりゃあライブはバンドやるからにはすんぞ？」

「日程とか聞いてないけど……………」

「まだ決まってるないんやろな。お前ら、一曲も仕上げないんやし」

「そ、そうだよね……………」

ふー、と一呼吸。

まだ未定の話だが、謎の緊張感が襲ってきた。

「それまでにさーちゃん最低限のドラムが出来るようにしとくから。覚悟しとくんやぞー！」

彼はそう言った。

私の緊張する姿を見て、こんなこと言ったんだろうなあ。

「ふふ。うん、分かった」

彼の言葉にどこかほっとした私。

案外、成り行きで始めることになったドラムもなんだか上手くいきそう、そんな感じがした。



第二音楽室。

「……………ん。一応、合格範囲内やな」

ドラムを始めて早一ヶ月。

私は今も変わらず順調にドラムの練習を進めていた。

基本的な事ーーステイクの持ち方や叩き方、バスドラの踏み方など。他にも初心者でも簡単なエイトビートを蒼真から教わった。

あの日以来、蒼真とは頻繁に連絡を取り合うようになった。空いた期間を埋めるかのよう。

もう一ヶ月経つけど、蒼真は未だに指導をしてきている。ありがたいけど、たまに嘲笑ってくるのが腹立つ。それも言葉ではなく、行動で。つまり、ドラムを叩いて。

因みに夏希にこの前、この事を話してみると驚いた表情をしていた。蒼真に教えてもらえるのも精々二週間程度だと思っっていたらしい。

「ふう……………やつとだね」

「連打のばらつきとかリズム感のブレがまだ気になるんやけど……………まあ初ライブではどうにでもなるか」

「まあだそんなこと言ってる。これでも結構直したつもりなのに」

「一番ミスが目立つ楽器やからな。そりやあ嚴重に行くに決まってる」
後ろで回る椅子に座る彼が言う。

こう見えて歳はひとつ上の彼。私からは先輩という立ち位置なんだけど、ずっとため口で喋っている。

ドラムに関しても彼の技術は飛び出していると実際にやってみて分かった。少なくとも中学生のレベルは優位に越えている。

全ての面において私は彼の背中を追いかけているとなる。うん………どうしてか釈然としない。

蒼真は一安心の溜め息を吐いた。

「初ライブまでにはなんとか間に合ったな」

「地元の小さなイベントだけだね」

夏希からついこの前、ライブの知らせを受けた。そんなガチの物ではなく、地元の公園で開催して近くのお爺さんやお婆さんが集まる、そんな規模のライブだ。

あいにく蒼真とは、彼を含めたバンドメンバーの都合が合わないらしく共演は次に見送りとなった。残念。

「ソウ君のバンドも見てみたいね」

「あーどうやら。対バン出来れば、一番良いんやけどね。メンバーの学校が違うから時

間はかかるかしれん」

「対バンって、私達と？」

「ん？当たり前やろ、何を今更」

「へ、へ………」

彼は首を傾ける。

蒼真に対等な相手として見られている。

その事実が分かると段々嬉しくなる。

「後のドラムは自分で頑張れよ？」

「え？う、うん」

「ここからは完全に自分スタイルでドラムと向き合っていくことになるから。最後に決めるのは己自身。それを忘れずに」

真面目な顔で彼は告げる。

久しぶりに見た。一番最後に見たのは確か、私が小学校の時にクラスの男の子達と軽い口喧嘩になった時………だったかな。

それにしても。

始めた頃は何も動かない両手両足がこう自在に動いてスネアだったり、シンバルをかき鳴らして体全体でビートを刻むのは何て言うかこう………“楽しい”。

言葉足らずで申し訳ない気分だけど、蒼真もきつとこの感触を味わって、ドラムを好きになったってことだけは分かる。

「さーちゃん」

彼が改めて私を呼ぶ。

「何？」

「ドラムは楽しいか？」

「勿論、楽しいよ？」

「なら良かった。本来ならライブ後に言うべきなんやろうけど………初ライブ用事があつて観に行けへんから今言うわ」

これが私の出会い。

ここから物語が始まっていくんだ。

「ようこそ、さーちゃん。ドラマーの世界へ」

◇◇◇
カフエテリア。

「……で、話は終わりなんだけど……」

「……」

「あ、あれ？皆？」

おかしい。誰も反応しない。

自分の昔話がそんなに悪かったのだろうか、と沙綾は不安になっていく。

「後は皆も知ってる通りなんだけど……」

「さーや」

「か、香澄？」

両手をテーブルにつけ、立ち上がる香澄。かと思えば、沙綾の方へと歩み寄っていく。その顔は切ない雰囲気醸し出す。

やがて、沙綾を見下ろす所まで来ると、香澄はゆつくりと沙綾を抱き締めた。

「……………急にどうしたの？」

「私、さーや以外絶対認めない。ポピパのドラムは一生さーやだから」

「え？あ、ありがと……………？」

事情を理解できない沙綾。

「沙綾ちゃん、これからも頑張ろうね」

「ポピパはずっとポピパだから」

「……………私も香澄とおんなじだからな」

他のメンバーも一言ずつ添えられる。

彼女達は知っていた。沙綾のそこから先の過去を。

あの後、夏希達とのバンドもやむ無き沙綾の決断で脱退、その後も苦悩の日々を過ごしていったことを。

「皆……………ありがとね」

良いメンバーに恵まれた。

改めて沙綾は実感した。これもあの日彼にドラムを教わったお陰である。

「ところで、さーやー！」

おっと背筋に悪寒が走った。

そんな沙綾の予想を確実にするかのようには香澄が沙綾から離れて、笑顔になる。

「今度の休みにでも良いから、私も蒼真君と会ってみたいな〜」

「え？」

「あ、私も」

「おたえ!？」

「……………男の人は緊張するけど少し興味はあるかな……………」

「りみまで!？」

「なら、ミニライブしようよ！」

「……………どこで？」

「うーん、蔵?……………あ!蔵イブ!蔵イブならいける!有咲〜良いでしょ〜?」

「ああもう!!引っ付くな!!婆ちゃんに許可もらえたらな!!」

「ありがと〜!!有咲〜!!」

「ぎやあああ!!」

「香澄ちゃん……………」

「沙綾は蒼真君に連絡お願いね」

「もう決定事項なんだ……………」

いつも通りの喧騒に戻った皆。

今日も、またバンドの絆が一段と深まった一日であった。

「ふふ………」

そして沙綾は彼へ連絡する為にスマホに手を伸ばすのであった。

山吹沙綾編——1——『師弟関係』終

— 2の1 — 『強制連行』*

◇◇◇

とある地下。

「っ……………」

目を覚ました。

ぼんやりとした記憶が蘇る最中、俺は辺りを見回した。

そして、意識がくつきり覚醒する。

「……………なんやこれ」

部屋だ。

ただ窓がない。そういう設計なのか、もしくは地下なのか。時間が分からん。あ、時計ある。まだ十時か。

部屋の中央で椅子に座っているのが俺。

足が動かない。ということ、今の俺の状態は所謂監禁なのだろうが、監禁部屋にしては部屋の内部はいかにも普通。ド普通。

一風変わっているのはキーボードにギターケースやアンプ、果てには電子ドラムも置

いてある。てか、広くないか？この部屋。

「あ、起きた？」

誰かが階段を下りてきたような気配。

ちよほど背後なので見えない。

「起きた」

隣に来た誰かを確認。沙綾だ。

「皆、後ちよつとで来るよ」

「皆？」

「さつき言ったでしょ？私のバンドメンバーを今日紹介するって」

「あー思い出した。てか、俺寝てた？」

「寝てたみたいだね」

監禁ではなく、単なる睡眠不足でした。

よくよく考えてみれば、足が動かんのも変な体制で寝たせいで痺れているだけだ。両手は普通に動く。茶番すぎた。

さてー今朝の話だ。

一夜漬けのせいであまり寝れてないのにも関わらず、いきなり沙綾に呼び出された。愚痴を溢しつつ、指定された場所にいけば沙綾に付いて来てと言われ大人しく付いてい

く。いつの間にか古風な一軒家の玄関に案内されたかと思えば、沙綾が入っていったのは家ではなく蔵。扉になんか『蔵イブ』とか書いた表札つぼいのがあったけど。

階段降りた先で沙綾に「ここで待つて」と言われたのが今いる場所。蔵の地下部屋。今日の目的は沙綾の現バンドメンバーの紹介らしいが、どういう成り行きで決定したのか、詳しい事情は話してくれなかった。

「てか、何？その服」

「あ、ようやく気づいた。どう？今度のライブで着る衣装だよ」

くるり、と一回転する沙綾。

全体的に青を基調とした服装。パーカーにミニスカートと格好いい女の子らしい仕上げりとなっている。

俺は自然と口を開いていた。

「良いやん」

「ほんと？」

「いつもと違う沙綾つぼさが出てて、なんか……新鮮に感じるわ」

「うんうん、ありがとね」

沙綾は満足そうに頷く。

正直に見惚れていたなんて男のプライドとして口には出せないがこれは映像保存級

だ。

元々、世間体で見れば沙綾は美少女の類いに入るだろう。加えて、最近の沙綾は成長して大人っぽさも無意識に取り込んでいるせいか、彼女の醸し出す美しさは格段と上がっている。

「あ、来た」

沙綾の視線が背後の階段へ。

もう既に痺れも取れたので俺も振り向いた。

「お待たせ〜」

「おまたー」

「香澄ちゃん！ 転げるから走らないで〜！」

「……………はあく〜」

順に降りてきた少女達。

彼女達もまた沙綾と同じ型の衣装を身に纏って登場した。てか、明らかに最後に降りてきた子、面倒くさそうに溜め息ついてる。きつと俺と似たような待遇にあつたんだろうな。

さてと、俺からしてみれば、初見の子の方が多いが、見た感じ全体的に賑やかなメンバーが揃ってるようだ。

「ああ、どもども」

「蒼真君、今日は来てくれてありがとね」

「どういたしまして」

猫耳の髪型をした少女が代表して言う。

その間に他のメンバーは各々、自分の担当の楽器の元へと移動していく。あ、やつぱりあの電子ドラムは沙綾のなんだ。

「正直、あんまり事情は把握してないんやけどね」

「うん、だから、蒼真君には特別にこれから私達”Poppin’ party”の演奏を練習がてらになるんだけど見てもらって良いかな？」

「観客は俺だけ？」

「うん。今回だけ！」

おお。特等席、というわけか。

なら、折角だし堪能させてもらおうではないか。沙綾の属するバンド”Poppin’ party”の現段階での実力を。

「じゃあ行くよ。ワン、ツー、——」

沙綾のカウントでライブが始まる。

◇◇◇
有咲家、蔵の地下。

「ありがとうございます!!」

香澄の声が響く。

合同ライブの時にも感じたが、彼女達のバンドの魅力は単なる演奏力ではなく、そこから垣間見れる、人を惹き付ける音楽性だ。

実力で言えば、RoseliaやAfterglowの方が上。それでも、Poppin', Partyが他のバンドに比べて色褪せないのは彼女達が全身で音楽を楽しみ、その楽しさを全力で観客に魅せてくれるからである。

「簡単に思えて実は極悪難易度な所業をポピパはこなしていると言える。これだからバンドは面白い。」

「あれ？お前らってそんな曲すんの？」

「ううん。こういうダークな感じなのは初めて！」

普段からのイメージだと明るくポップ調の曲がメインなのだが、先程披露されたのはダークロックな雰囲気を放つ曲だったので少し驚いた。

「やんな。前と全然違うからびつくりしたわ」

”ティアドロップス”って曲!!」

「なるほど。良い曲やと思うよ」

「やったね！」

ガッツポーズをとる香澄。

「香澄、そろそろポピパの事を……………ね」

「あ……………ごめんね、さーや」

「ううん、全然平気」

盛り上がってる俺と香澄。

これは区切りをつけないと、と勘づいた幼馴染みの沙綾が優しく次へ行くようにと香澄へ言う。

「それでは、蒼真君！私達ポピパの紹介タイムへと入りたいと思いますーす！」

わあー！と香澄さん、ハイテンション。

ばしつ、とばかりに香澄がまず狙いをつけたのはベースを持つ女の子。

「まず！ベースのりみりん！」

「お、お願います………」

「よろしく〜」

「りみりんはチヨココロネが大好きだよ」

「か、香澄ちゃん!？」

「そうなん？もしかしたら、山吹ベーカリーの常連さんかな？」

「は、はい！」

「だとしたら、俺と昔会ってるかもしれないね。俺もたまに店番してた時もあったから」

「あ、そうかもしれないです」

ひとまず挨拶はここまで。

次に香澄が向かったのはキーボードの子。俺と同じ境遇で此処にいと予想される金髪のツインテール。

「次は有咲！私達が練習に使ってるここも有咲のお陰で出来てるんだよ！」

「お、おい。余計なことは言うんじゃないー」

「後！蒼真君のバンドの大ファンだよ！」

「うわあああああ!!!香澄いいいいいい!!!」

有咲の悲鳴を合図に鬼ごっこな開始。

キーボードなので手ぶらな有咲はついさつきギターを置いた香澄を懲らしめようとしている。

ファン、と聞いて嬉しくないミュージシャンはいない。そうかそうか。暫くして喧騒が静かになった。かと思えば、二人の姿はない。

「どうする？二人ともどっか行っちゃった」

「勝手に進めても良いかな？」

残されたメンバーも何事もなかったかのように事を進める。慣れる。これが普段のポピパなのだ。

沙綾は既に承知しているので最後の一人はリードギターの子だ。

「私のことは覚えてる？」

「……………え？会ったことあんの？」

だとしたら、どこでだ。

俺の返答に彼女のとった行動は顔を両手で隠す仕草であった。

そして、悲しそうに——

「そんなあ……………私としたあれはお遊びだったのね……………」

「おたえ!？」

「おたえちゃん!？」

「まじ何したんや俺!？」

怖い怖い。マジ、記憶がないぞ。

「つていうのは冗談で」

「はあ……………良かったな、俺」

「蒼真君と会ったことがあるのは本当だよ」

「……………」

ここれは真か嘘か。

「リードギター担当の”花園たえ”。C i R C L E のバイトの件でお世話になった女の子です」

「C i R C L E ……………花園……………ああ!!思いだしたわ!いたな!てか、俺、がつつり教え
たな!」

「その花園!」

バイトの後輩に花園という子にP A の基本を教えた覚えはある。これは冗談でも幻
覚でもない。

「名前……………今初めて聞いたな。たえって言うんか」

「そう言えば言っでなかったね。たえでもおたえでもお好きなように呼んでね」

「今、ハートマーク飛んできた」

「えええ。飛ばしてないよ」

っ!?これは……………。

「沙綾ちゃん? どうしたの?」

「何でもないよ、大丈夫」

「それなら良いんだけど……………」

無言の圧力、強し。

「最近、全然バイト入ってないけど大丈夫?」

「流石にヤバイよな……………まあ近々戻るから言っておいてくれ」

「うん、分かった」

そんなこんなでポピパの紹介タイムは幕を下ろした。



有咲家の蔵。地下部屋。

「ねえねえ」

「ん、なに？」

つんつん、と香澄に肩をつつかれる。

香澄は先程まで行方を眩ましていたのだが飲み物を入れたコップを入れて、さつき戻ってきた。なんでも有咲のお婆ちゃんの違いを入れること。ありがたい。

それはそうと、俺の瞳に映るのは興味津々とばかりの香澄のみ。

「蒼真君の喋り方、それって関西弁？」

そんなことを聞かれた。

ここは東京である。関西とはほど遠い地域である。

だが、しかし。

「そうやね」

「おお!!」

「母親が根っからの関西人。それに俺が生まれてちよつとまでは関西に住んでたらしいし、その名残で俺もちよつと関西弁っぽくなつてもうたみたい」

普段とか初対面とかでは標準語で話す。

が、完全に油断してたり、リラックスしてたりするときには自然と関西弁も混じった話し方になってるらしい。

らしい、というのも俺自身あまり意識してないから何とも言えないのが現状。

「それからはずつとこつち住んでるせいかな、関西弁と標準語がこつちや混ぜになってる」

「おお、カッコいい……………」

「そうか？」

目を光らせる香澄に怯えを感じる。

「香澄、忘れてるんだろうけど……………」

「何？さーや？」

話の一部始終を聞いていた紗綾は会話に入るために近寄ってきた。相変わらず俺は座ったままだけだ。

「ソウ君、先輩だよ？」

「ソウ君？」

「うん、どうしてそつちに興味が行つちやうんだろうね……………香澄らしいと言えばそうなんだけど……………」

「さーや、蒼真君のこと、呼び捨てで呼んでなかった？」

「あれはだね……………その方が伝わりやすいって思つて」

「じいー」

「もう………今はそれよりも！」

先輩よりも渾名の方に食い付いた香澄。

正直に俺から言えば、分らんこともない。沙綾には悪いが。

「取り敢えず、これでも先輩だからね！皆！」

「先輩？………だど？」

「言われてみればそう見えるね」

「おたえちゃん………それは失礼だよ」

「何だろうな………俺」

もう俺の立ち位置が絶賛迷子中。

有咲は完全に疑い深く、たえは然り気無く酷いことを言う。心がずたボロですわ、

唯一の癒しはりみちゃん。

「蒼真君はさーやの事、なんて呼んでるの？」

「さーちゃん」

また外野が騒がしくなってくる。

「へえ〜。あの沙綾がねえ〜」

「さーちゃん、さーちゃん」

「仲が良いんだね」

そこ、静かに。と嚴重注意ばりの視線を向ける沙綾。

「改めて言われると……恥ずかしいね」

「俺はそんなに。他の奴等にもたまにソウ君って呼ばれるし」

「えっ……ソウ君、後で覚えといてね」

「なんでえ……」

何故か一気に不機嫌へと変貌した沙綾。

あまりの剣幕に俺は否定という概念を失っていた。

「決めた！」

と、ここで香澄が声を大にして言う。

短い付き合いの俺でも分かる。これはただ事では終わらない幕開けの合図だとい

うことを。

「蒼真君！あ、じゃなかった。ソウ君！私達にも付けてよ、渾名!!」

— 2
の
2 —
へ
続
く。

— 2の2 —



蔵。地下部屋。

「渾名？」
あだな

俺はそう聞き返す。

確かに沙綾の事をさーちゃんと呼ぶのは渾名の類いに入るだろうが何もそこまで対抗しなくても。

だが、香澄の事だ。邪心は一切なく単純に俺と沙綾の関係が羨ましく思っただけかもしれない。

「うん！そうしたら、蒼真君……じゃない！蒼君と仲良くなれると思うから！」

「香澄、さつきから間違えそうになってばっかだな」

「それは今まで私が蒼真君を蒼真君だと思っていたからだよ？有咲！」

「意味わかんねえよ！」

おっと鋭い突っ込み。

お手の物とばかりの歴戦並なやり取りを目撃してしまった俺は感嘆の拍手を送る。

「……………な、なに……………気持ち悪……………」

ほとんど彼女に距離を取られる俺。

彼女からの信用を勝ち取るのはまだまだ先の話のようだ。

「そういうことで蒼君には私達に渾名で呼んで欲しい！」

「か、香澄ちゃん、流石にいきなりお願いするのは迷惑じゃないかな——」

「構わんけど」

「え？」

「あ、良いんだ」

りみちゃんがびつくりしてる。

こちらとしても、渾名を通して彼女たちと仲良くなれたら嬉しいのでむしろ大歓迎。

「さて。早速、渾名を付けるとしてまずは……………」

誰にしようかな。

各々の様子を窺うように俺は視線を移していく。香澄は私を選べと言わんばかりの

キラキラ瞳。うん、スルーやな。

途中に見えた沙綾の不機嫌そうな態度が気になる。とは言え、ここでそれに触れるほ

ど俺の度胸は残念ながら不搭載。

視線はやがて一人の少女に定まる。

「たえちゃんかな〜」

「私が初めてだね」

「うん、さつきから怖い発言ばっかやな」

故意か、無意識か。

たえの発言には正直、俺の警戒心が最大まで跳ね上がっている。

「渾名は………おたえ、で良くね？」

「それだと、あんまり新鮮な感じがしない」

「お前は渾名に何を求めているの？」

「でも仕方ないから、おたえ、で良いよ♪」

「そりやどうも………」

もう突っ込む気力もないわ。次だ、次。

続けざまに俺の視線はベースを抱えているりみへと移行する。

「牛込さんは………りみりん？」

「はわわ………!!」

「ええ!!私が考えたのに!!」

何故か香澄から反論が返ってきた。

肝心の本人は俺、というよりは男に名前を呼ばれた事に戸惑いを覚えているみたい

な反応をした。

「あつ!!私に別………良いかな?」

「りみりん?」

「山吹さん——あ、沙綾ちゃんと一緒………」

「俺のことは名前でも渾名でもお好きに」

「あ、ありがとうございます。ソウ………さんは沙綾ちゃんの従兄で会うまでは怖かったですけど、実際に会ってみてば、思ってた通り、沙綾ちゃんと同じ優しい人で………それに私もここ臆病な性格を直したいのもあつて………」

「その最初の切っ掛けとして、ソウ君には渾名で呼ばれても良いってこと?」

「………うん」

沙綾の問いにりみは小さく頷く。

彼女の喋っている間、メンバーは黙って耳を傾けていた。いつも奥手な彼女にとつて、これは勇氣を持つての発言なのだろう。

とまあ、隣にいた香澄は心打たれたらしく、唐突に手をピシッと敬礼のごとく上げる。

「蒼君!特別にりみりんをりみりんと呼ぶ許可を授与します!代表、戸山香澄!」

「香澄ちゃん?」

「おおー表彰式だー」

「あざっすー！」

「……………有咲の出番だよ？」

「いや、いちいち突っ込んでたら私の精神が持たないから」

「その二人が止めとけオーラを出してる。気にしないのが一番。」

俺はギリギリと視線を香澄に向ける。

「次は……………君だ」

「わ、私?!……………なんだとっ!!」

「もう何も言わないからな」

ちよつとした芝居も突っ込みが不在。

というより香澄ちゃんは見ただ目通りにノリが良い。こういうショートコントもちやんとやってくれる。

「て言ってもなあ……………皆から呼ばれてるのってあんの？」

「香澄は香澄だね」

「ええー」

「かすみん？」

「おたえ、それ完全にりみりん」

「そう言えば、香澄ちゃんを渾名で呼ぶ人、私見たことないかも……………」

「ぶーぶー!!」

香澄による一人ブーイングが発動。

ある意味、これは重大責任になってしまったぞ、と俺は何となく感じている。

「よし、発表行くぞい」

「わくわく」

「かーちゃん」

「母親じゃねえか!!」

「有咲？」

「はっ!!……………つい」

「沙綾ちゃんタイプかな？」

「うーん、駄目!!」

ぶつぶぶー、と香澄は両腕でバツテン印を作る。

「駄目か……………なら、かーくん」

「かーくん……………あっ!!はぐにそう呼ばれてるよ!!」

「誰だ？」

「はぐみのこと。ほら、商店街にある北沢精肉店の娘」

「あー、あの子か」

沙綾に説明されて納得する俺。

香澄とはぐみ。完全にボケがツツコミの容量をオーバーしてしまう異次元な組み合わせである。

「なら、かーくん、で決定やね」

「ありがとうございます!! 蒼君!!」

順調に決定していく渾名。

沙綾は既に決まってるとして、最後まで残ってしまったのは有咲だ。

「ついに来たか……………」

「蒼君、どのように致しましょうか」

「ふふふ……………動かないでね、有咲」

「あ、あ、有咲ちゃん!!」

「何するつもりだ!?! やめろお!!」

楽しそうだね、君達。

もはや有咲は香澄とたえの玩具にされている状況を俺は第三者視点で見ている。

とつとと本題に入ろう。

「んじゃ、行くよ……………ありちゃん」

「虫じゃねえ!!」

「ありやん」

「さつきより酷い!!」

「あーちゃん」

「あ、私の妹だ」

「有咲X」

「秘密結社!!」

「ア、リーサ」

「外国人風に言ってるだけ!!」

「何を言っても無駄だ!!」

無駄なのはこのハイテンションぶりである。

「有咲だけソウ君から名前呼びになるけどいいの?」

「そ、それは……………」

沙綾の問いに有咲の返答が詰まる。

「ああ見えて有咲って実は寂しがりなんだよ」

「へえ……………」

沙綾の耳打ちに俺は感嘆を漏らす。

有咲は自分だけが仲間外れ、そんな感覚を覚えてしまったのだろうか。彼女の内面で

は寂しがり屋な節があるということ。

仲間のちよっとした部分も沙綾は昔から見抜くのが得意であったことを俺は思い出す。

「あ……………あーりん、とかは？」

「そ、それなら何とか……………」

「なら、それでよろしくやね、あーりん」

「う、うん……………」

こうして、どうにか全員の渾名が決まった。



帰り道。

「随分と今日は賑やかやったな」

蒼真と沙綾は並んで歩く。

有咲の蔵から二人の家までは途中まで一緒。二人揃って帰らない理由もないので、雑談と共に二人は歩いていく。

話題はずっとポピパの話。

「普段からあんな感じだよ？今日はソウ君が居たから香澄とかおたえが特に騒がしかったけど」

「楽しそうで何より」

「うん……………そうだね」

バンドをやる上で互いの関係が気不味いと演奏にもそれが影響される。言わずとも、悪い方向で。

ポピパがライブで魅せるあのパワフルさも普段から彼女達が楽しい関係を育んでいく積み重ねの結果で成就しているのだ。

「そう言えば」

沙綾がそう切り出した。

「このソウ君って呼び方、他の皆も呼んでるの？」

「他の皆の定義によつて変わるんやけど……そやね。基本的にバンドではソウで通してゐるから自然と」

「へえー」

嫌みのあるため息。

「私だけかと思つてたのに……」

「ん？」

「ううん、気にしないで。それよりもさ、これからソウ君じゃなくて、どう呼ぼうか？」
「……さーちゃん、なんで俺の呼び方を変えようとしてんだ？」

「え？」

「今では結構な頻度でソウって渾名で呼ばれるけど、さーちゃんが切つ掛けて俺はソウって名乗ることにしたんやから」

「私が切つ掛け？」

沙綾にとつて意外な事実が判明した。

よくよく考えてみれば、そういうことになるのは必然である。

「そりゃあね。小さい頃からの付き合ひやし、さーちゃんには色々世話になつてよ？」

「あ……へ、へえ〜」

「顔真つ赤やな」

「つ!? そういうことは言わないのが正解!!」

理不尽に怒られた蒼真。でも、彼は無邪気に笑顔を浮かべていた。

ここで、山吹ベーカーリーの看板が目に入る。

「な、なら……………ソウ君!」

「なんよ、急に改まって」

「何でもなくいい。呼んでみただけ」

「はいはい、そですか……………ほら、着いたよ」

彼の家はまだ先。ここで今日はお別れ。

「それじゃ、またね、ソウ君」

「ああまたね、さーちゃん」

手を振りながら蒼真は去っていく。

そんな彼の背中を見つめながら、沙綾は考えていた。

—— 変わらない関係……………。

幼い頃から随分と大人びた二人。それでもなお昔から続くこの渾名で呼び会う秘密の関係は誰のものでもない、自分と彼だけのもの。

「ふふ」

ふと零れた笑み。

端から見ればデレデレの沙綾。当の本人がそれに気付くことは今後を通してなかった。

……因みに沙綾の妹や弟には目撃されたらしい。

山吹沙綾編 | 2 | 『強制連行』終

— 3の1 — 『緊急看病』 *

◇◇◇

山吹ベーカーリー。

「おっす」

気だるそう声と凜とした鈴の音。

店の扉を抜けた俺は店内を一望した後、パンを選ぶために近くへと歩み寄る。相変わらず食欲を刺激する良い匂いが俺の嗅覚をガンガン襲ってくる。

——ん？

俺は何らかの違和感を感じ、頭をあげた。

特に店内に可笑しな様子はないし、朝のピークを過ぎたので人の気配もない。パンの数もあと少し、と言った所だ。

気のせいか、と俺はまたパン選びへと意識を向けることにする。

「あつ、来てたんだ」

「ん？さーちゃんか。おはよ」

「おはよー、ソウ君」

店の奥から顔を出した幼馴染。

俺は彼女の姿を一瞥すると直ぐに視線をパンへと移す。

と、ここで先程の正体が判明した。

——あ、店に入った時に誰も居なかったのが違和感の原因か。

さて、気掛かりもさっぱり消滅したのだ。とつとつとパンを選んでしまえますか、と俺はトレーにご馳走をどンドン載せていく。

沙綾はというと、レジの操作確認でもしているようだ。

「これ、よろしく」

「——うん？あ、うん」

レジの隣のスペースにトレーを置く。

沙綾が俺の買うパンを見て、計算を始めてレジに打ち込んでいく。いつもの光景だ。

「合計で……………780円だよ」

「……………え？」

「え？」

お互いに顔を合わせる。

「880円じゃなくて？」

「ほんと？……………あつ……………ホントだ。間違えてた」

「さーちゃん、大丈夫かいな？」

俺が冗談めいた風に言う。

「ごめんねー」

沙綾もそれは分かってる為、気さくな謝罪が返ってくる。

支払いの為に財布に手をかけ、小銭を幾つか丁度分になるほどに取り出す。

そして、小銭を渡そうと俺は手を伸ばした。ここで俺の視線はある一点に留まることになる。

「さーちゃん」

「んー何？」

「熱あるだろ」

「っ!？」

一瞬、面を喰らった素振りを見せた沙綾。

「な、ないよ? ご覧の通り、元気だけど?」

「嘘つけ。ご覧した結果なんだから。さーちゃん、今日の予定は?」

「よ、予定? えつと……午後からバンドの練習が……」

「休め。俺が連絡しとくから」

「ソウ君? さっきから言ってるけど、私、全然大丈夫だから!」

頑なに沙綾は肯定の意を示さない。

こうなれば最終手段を取らざるを得ないと判断した俺は顔を彼女の近くに寄せていく。

「ソ、ソウ君……………!?!」

俺が近寄ると、仰け反る沙綾。頬も徐々に赤らめていく。

キリがない。俺は右手を彼女の頭後ろへと回し、その頭を掴む。そして引き寄せる。

—— おでことおでこを合わせるのだ。

「っ?!?!」

俺がこの一連のやり取りで確認したいのは熱の計測ではない。

沙綾のリアクションである。

「やっぱ熱あるな……………」

「ど、どういう理屈……………」

「知らん? さーちゃん、昔から何かしら病気で弱つてると全然抵抗しなくなる」

「そんなこと……………え? 何それ?」

今だつてそうだ。

通常時にやれば、沙綾はあつさり避ける。もう何やってんのと蔑んだ視線付きで避けられる。

「ほら、行くぞ」

「ま、待って!!」

沙綾のいる側へと回り、彼女の手を掴んで半強制的に俺は山吹ベーカーリーの居住スペースへと連れていく。

よく沙綾の一家とは家族ぐるみでお世話になる。互いの家で軽くパーティーもするぐらい。故に沙綾の家の中はある程度把握済み。

「ほら、部屋行くぞ」

「へ、部屋!? 私、片付けしたかな……………」

「そんなの知らん。てか、散らかってる時のも見てるし、今更そんなの気にしても遅い」

「っ!? ソウ君のバカっ!!」

「いった!」

理不尽にお腹を殴られた。

病人のくせに一段と拳に重さがあるとは。女の子とは理解できない生き物だ。

「二人のチビ共はどうした?」

「こんな時間だし、まだ寝てるかな……………」

休日とは言え、もう9時だぞ。

……………俺も昼までよく寝てるな。

俺の言う二人とは沙綾の妹と弟・沙南と純の事である。

「取り敢えず今日は寝てろ」

「でも、まだ店番が……………」

「俺がやつとくから」

沙綾の部屋の扉を開ける。

多少の家具の配置に記憶の誤差は覚えつつも幼少期の頃となんら変わりはない。

「おやつさんは下？」

「下……………だと思……………」

沙綾の親父さんにも報告しないと。

偶然にも今日の俺に急ぐ用事はないのだ。とことん付き合わせさせて貰う。

未だにぐずずってる沙綾をベッドへと放り込み、俺は部屋を出ようとドアノブを掴む。

「さーちゃん、寝間着に着替えてから寝ろよ？」

「それは分かったけど……………ホントに大丈夫なの？」

「平気やから。さーちゃんは熱を下げる事だけを考えてろ」

ここまで来て、ようやく観念したのか沙綾は小さく頷きを見せた。やはり、本人にも多少の自覚はあったようだ。

そして、俺は部屋を後にするのであった。



沙綾の部屋。

「もう………ソウ君。強引なんだから………」

ベッドに足を伸ばして座る私。ぎゅつと毛布の端を握り締める。

混雑する時間を避けて来訪してきたソウ君。そして会計の時に私の顔を見て、一言、熱があると。

足元がふらふらして、思考がぼやける程度だけど、私に自覚症状があるのは認識していた。でも、この程度一日なら乗り切れると見越して、黙っていた。

その筈だったのに、ソウ君に一目で見破られてしまった。

あの時はやけに距離が近かった。なので、彼の顔が最接近した時にはつい別の意味で体温が上がってしまったけども。心拍数も格段と上昇した。

——着替えないと………。

私服のまま就寝すると皺が出来てしまう。私はダンスからお気に入りのパジャマを取り出して、ベッドに置いておく。

私は服を脱ごうと手で掴み、捲った。

——その時、部屋の扉が開く。

「きゃっ!?!」

「あつ……………すまんな」

そして閉まる扉。

部屋に入るのはまだいい。幼い頃から、彼は私の部屋の内装を知ってるから高校生の今でも抵抗は全然ない。

けど、最低のマナーとしてノックぐらいはすべきだ。

「……………どうぞ」

私はそそくさと着替えた。

ソウ君は悪びれた様子もなく、普段通りのまま部屋に入ってくる。

「体温計ね、これ」

「あ、ありがと」

体温計を手渡せる。

これを取りに、わざわざソウ君は一階へ行ってきたようだ。申し訳無い気持ちだが芽生

えてくる。

「とうより、ソウ君」

「ん？なんや？」

「……………見た？」

私も一応女子なのだ。裸や下着を見られるととても恥ずかしい。さつきも完全に上を脱いではいなかったものの、胸元まで服を掴む手は上がっていた。

肝心のソウ君は頭上にポカンとクエスチョンマークを浮かべるように首を傾げている。

ちよつとイラツと来た。

「んや、変なもんは見てへんよ」

「変なもんって……………」

もう少し他の言い方もあるでしょ。

「取り敢えず、熱を測って」

「分かったけど……………」

「ん？」

「あつち向いて！」

「へいへい」

羞恥心からつい彼に指図を出してしまう。ソウ君はあつさり私とは反対の方へ視線を向ける。

私は左脇へ体温計を挟んだ。

「あ、おやつさんには言つといたから」

「うん。何か言つてた？」

「娘を頼むつて言われたな」

——お父さん!? それ、どういう意味なの!?

十中八九、看病つて意味合いだろうけど娘の結婚相手に告げる台詞でもあるので、本物の娘としての私は複雑な心境でもあった。

——ソウ君が私の夫……………。

「顔、だいぶ赤いぞ?」

「だ、大丈夫だから!!」

「そか? なら、いいんやけど」

「というより! まだ振り向かないで!」

「おっとそれはソーリー」

危ない、危ない。

つい妄想が入ってしまった。幼馴染としてのソウ君が今の私の当たり前。だけど、恋

人としての、夫としてのソウ君も満足してそうな自分が心の何処かに潜んでいた。

「おつ、もう分かった？」

「ちよつとうるさい。37.8度だつて」

「完全にアウトだな。てか、もう振り向いて良い？」

「待つて……………良いよ」

布団に隠れた私。体温計をソウ君に渡してすぐにその手を引つ込む。

「んじゃ、何かあつたらスマホとかで呼んでな」

「うん」

「遠慮して我慢してたりしたら……………ね？」

「わ、分かったから……………」

念を押すかのようにソウ君は言う。

考えを見抜かれて、一瞬ドキツとしてしまったが彼に気付かれてしまったかどうか不安だ。

「おやすみ、さーちゃん」

ソウ君は部屋を後にした。

一人になり、静寂となった部屋。と思えば、下の階から微かに喧騒が聞こえてくる。

「ふふ……………」

きつとソウ君と弟達がやらかしてる。

そんなことを思いながら、頭を枕にそつと乗せた私は天井をじつと見つめる。

——はあ………ソウ君………。

私はそつと目を瞑った。

— 3の2 — へ続く。

— 3の2 —

◇◇◇

山吹ベーカーリー。店内。

「おっはよー!!」

颯爽と扉を開け、入ってきたのは猫耳の髪型をした少女である。俺、というより全国共通では、おっと嵐が来たぞ、という認識でよろしいかと。

嵐の目”戸山香澄”はてつきり沙綾が店番してると思っていたらしく、俺と目が合うと動きが一旦停止してしまう。

「あれ? ソウ君?」

「ソウ君でっせ」

「さーやは?」

「上で寝てるぞ。熱出てるから静かにな」

「えっ!?!」

香澄は芸人並のリアクションを見せる。

友人想いの人一倍強い彼女は友達が熱で倒れていると聞いてしまうとその場でじっ

として居られないタイプだ。

つまり——こうなる。

「さーやああ!!」

「待てやい」

「ぐへえ」

居住スペースに続く扉へ向かっていく香澄が隣を通る瞬間を見計らって、彼女の服の首元を掴み取る。

女の子から出ては不味い声が出たが沙綾の安静の為にもお構い無しである。

「さつき寝たばかりやから起こす訳にはいかんのだ」

「ぶー」

渋々感全開で香澄は引き下がる。

「てか、ギターケースまで持って何しに来た？」

「さーやを誘いに!」

「……………これは災難やな」

あまりにも行動力が強すぎる友達を持ってしまった沙綾の身の将来を少し不安に思ってしまった。

と、香澄は俺の言葉を沙綾と遊べない事と解釈したのか、背負っていたギターケース

を床へと立てた。

「ソウ君、私の自慢のギター見てみる？」

「……………まあ見ては見たいかな」

店内には香澄以外客はいない。朝と昼の境目の時間帯に客足は殆んど無いので、ギターを出しても迷惑にはならないだろう。

香澄はギターケースのファスナーを一気に下ろした。ちらりと中のギターの赤色がうつすらと見える。

「じゃーん!!」

香澄が取り出したギター。それは全身赤色に染められた星形の癖の強い種類であった。

——名を「ランダムスター」と言う。

「……………前にも思ってたけど、それ……………」

「それ？」

「変態が使うやつ……………」

「私、変態じゃないよ?」

うん、知ってるけども。

それを使ってるギタリストが揃って変態扱いされる人ばかり、と俺は自分のバンドの

ギターリストから聞かされていた。

「でも、そのギター高かったやろ？」

「有咲に譲って貰った！」

「へえ〜」

「あ、それでね。私がバンド始めようと思ったのもこのランダムスターと出会ったお陰です！というのも——」

ここから香澄によるポピパ結成までの歩みを存分に語られる事になった。俺は話を遮るタイミングを完全に逃したのでひたすら聞くに徹する。

香澄の話のお陰でその頃の沙綾の様子もある程度知れて良かったけども、一体香澄は何をしに来たのか。

——数分後。

「じゃあまたね！ソウ君！」

ポピパの話をすっかり語り尽くした香澄はパンを買ってからあつけらかんと帰っていった。

俺は視線を横に。ふと思った。

——いや、ギターケース置きっぱやん。

◇◇◇

夕方頃。

「ほい、純。お疲れ」

「あ、ありがと」

俺は店番をしていた純に劳いのジューズを渡す。

昼頃では多少客が混雑してしまい、その接客のせいで純や紗南にも随分と苦劳をかけたからそのご褒美として、だ。

その際に地元のマダムの方々には何かと沙綾との関係を尋ねられたが、正直訳がわからん。

「後は俺がやっつくよ。純は晩飯の準備手伝ってこい」

「分かった！」

元気良さげに奥へと駆け出して行った純の後ろ姿に、俺はつい子供との体力の格差を痛感してしまう。

と、その時であった。

——チャリン、と扉の鈴が鳴る。

「……………あの」

顔を出したのはベース少女。

というのも、彼女の背中に体格に似合わぬ大きなベースケースを背負っているのが目に入ったからだ。

「おっ、いらっしやい」

「お、お邪魔します……………」

その少女はまるで他人の家に入るかのように丁寧に丁寧に挨拶をして店内へと入ってくる。

——”牛込りみ”。ポピパのベース。

そう言えば、前回の時に彼女はこの山吹ベーカリーの常連だったのを俺は思い出す。

確か、彼女の大好物は——

「チョココロネ、まだあるよ？」

「えっ？ありがとうございます！」

「うん、どうも」

何故かお礼を言われた。

りみりんも自分の行動に疑問を持ったらしく、これじゃないと首を横に振りまくり始める。

「あ、あのっ！沙綾ちゃんは……………」

「さーちゃん？んー今は寝てんのかな？もう大分落ち着いてきたから明日には大丈夫やと思うよ」

お見舞いに来てくれたようだ。

あまりにも良い子過ぎて、健気を守りたくなってくる。

「そ、そうなんですか……………」

「ん？」

何かが引つ掛かった。

「あつ、私……………関西出身なんです」

「マジで？」

「はい。普段は出ないようにしてるんですけど……………油断したりしてると出ちゃうみたいで……………」

「ならば、俺の言い回しもある程度理解出来んの？」

「ええつと……………はい」

「おおう」

ちよつと感激した。

周りに関西人がいない俺は時折、意味が分からない言い回しをしてしまう事がある。なのだが、俺は特に意識せず話すために相手に指摘されるまでそれが分からないのだ。

りみりんが関西出身だと知った今、勝手ながら彼女に親近感を覚えてしまった。

「ソウさん、ずっとその……………関西弁で話してるんですか？」

「そやねー。もう癖やから、治せない」

「凄いですね……………」

りみりんはりみりんて訳有りのようだ。

「私……………仲間外れになりたくないばっかりに関西弁は目立つから標準語で話すようになつたんです。ソウさんは周りの目を気にせず自分の進む道を突き進んでいて……………」

「確かに最初は学校で関西弁使うと避けられる感じもしたな」

「そうなんですか？」

「珍獣……………とまでは行かないけど、やっぱり珍しいらしくて。逆に怖いイメージが付

くこともあつたね」

「怖い？」

「大阪出身の人とかは特に喋り方が攻撃的に聞こえちゃうから。テレビとかでそんなイメージが付いちやつたんやろうな」

まだ世間知らずの子供。

自分の知らない未知の存在には恐れ、拒絶したい気持ちが一概にあつたとは理解できなくもない。

でも、これでも個性の一つだ。俺が選んだのは止めないと言う選択であつた。

「まあでもそのせいで友達の良い奴ばっか集まつたな。今のバンドもそうやし」

幼い頃から関西弁を使い続けた俺が手にしたのはそんな個性ぐらい気にしない懐の深い友達であつた。

「りみりんちゃんもそうやる？」

「はい……………香澄ちゃんに有咲ちゃん、おたえちゃんに沙綾ちゃん……………」

青春やね。

ここで彼女には悪いがイタズラ心が芽生えてしまった。

「折角やし、りみりんちゃんの関西弁聞いてみたいな？」

「えっ……………は、恥ずかしいです……………」

「そこは適当で良いから。では、”違う”を関西弁でお願いします」
「あつ！ええく」

「3……………」

「そ、そんなあ……………」

「2……………1……………どぞ！」

りみりんは決死の覚悟で口にした。

「ちや……………ちやうねん!!」



沙綾の部屋。

「んっ……………」

寝起きの沙綾。眠気に誘われ、目を擦ってから軽く頭を振る。

壁時計を見て、時刻を確認。

ちようど晩御飯前。ということは四、五時間は睡眠をしていたようだ。

「お、グッドタイムミングかな」

と、ゆつくりと扉が開き、蒼真がそこから顔を出す。手元にはお盆と器が一つ。

彼は沙綾の部屋に入ると、沙綾のいるベッドの隣に腰を下ろした。

「熱の調子はどう？」

「少しマシになったかな……………」

「食欲はありそう？」

「うん、大丈夫」

彼は丁寧に器を持ち上げる。

どうやら中身はお粥だと推測される。彼が作ってくれたのだろうか。

「紗南が作ったお粥やぞ」

「えっ？紗南が？」

「そ。熱が移ると不味いから俺が代わりに持ってきた」

妹にも随分と心配をかけてしまった。

「でも、ソウ君にも……………」

「俺は別に沙綾のが移って熱出しても、すぐに治るし問題ないわな」

「そういう問題……………」

論点が少しずれてるような。

そんな沙綾の思考はお構い無しに蒼真は持つてきたスプーンを器に添える。

「ほれ」

「……………」

「まさか……………自分で食べれるよな？」

「……………」

沙綾は顔が真っ赤になった。

自然な流れでつい蒼真が食べさせてくれると考えてしまっていたからだ。彼に指摘

されて、ようやく気付いた。

「あ、ありがと……………」

どうにか彼からお粥を受け取る。

器を持つ掌に、それほど熱さは伝わらない。事前にお粥の熱は冷ませておいてくれて

いたようだ。

試しに一口。スプーンでお粥を掬い、口元へ。

「あ、熱……………」

とは言え、熱いものは熱い。

舌に一気にお粥が触れてしまい、思わず声が漏れてしまう。

「一応、冷ましてあるけど気を付けてくれ」

「先に言つてよ……………」

「すまんの」

そして、彼は立ち上がる。

「もう行くの?」

「店番してる純が心配やからな。そろそろ戻るわ」

「そうなんだ……………」

沙綾の表情が曇る。

「あ、食べ終わったら皿は適当に置いてくれ」

「うん」

「んじや、また来るから——」

「ソウ君!!」

「な、何や……………?」

「あつ……………」

想定よりも大声が。

それに驚いた蒼真を見てしまい、本人の沙綾は何となく気不味いと感じてしまう。

でも、彼を呼び止めたからには後戻りは今更出来ない。

「もう少しだけ……居て……」

彼は何も言わない。

「その……ずつと独りだと……寂しいから……」

視線を下に向ける。

沙綾の視界には自分の被っている毛布しか映っていないかった。ぎゅつと握り締める。

彼に今の言葉はどういう風に解釈されたのか。気になるが、訊ねる余裕など既にな
い。きつと熱のせいであんなお願いが出ってしまったのだ。

——と、頭を撫でられる感覚が。

「珍しいな……」

顔を上げると、其処には彼の顔が。

蒼真はそつと沙綾の頭を、髪を撫でていく。久し振りに感じる懐かしい気持ちに心が
包まれていく。

「沙綾の我が儘とか久し振りに聞いた」

「言わないで……」

されるがままに沙綾はじつとしたまま。

再び彼から顔を隠した自分の顔がどうなっているか。沙綾は知りたくもなかった。

「まあ何かあつたら向こうが呼んでくるよな……」

「え？」

「分かった。もう少し付き合つてやるよ」

「あ、ありがと……」

彼は優しく笑った。

— 3 の 3 — へ続く。

— 3の3 —

◇◇◇

山吹ベーカー。

「もうそろそろ終わりかな」

太陽は既に沈み、外は真つ暗。

店内から様子を伺うも人の通る頻度は少ない。この時間帯でわざわざパン屋に顔を
 だす客は相当のパン好きに他ならないだろう。

沙綾の親父さんに焼いてもらった今日の品物も残り僅か。余ったら沙綾の看病の
 お礼の一つに自由に持って帰ってくれ、と伝言も預かっている。

ご飯と一緒に食べに来た妹は自宅に帰る際には俺だけパンを持って帰ると拗ねるの
 で忘れないようにしとかなないと。

「参じよう!!」

—— ふふ。よし、今の声は幻聴だ。

「あれ〜? 蒼真先ば〜い?」

のんびりとした声。扉付近からガンガンと来る視線の圧力。間違いなくこやつに俺

は心当たりがあった。

—— ”青葉モカ”。

Aftergrowのリードギター担当。

その癖のある口調にのんびりとした性格の彼女が弾くギターの正確さは見た目に反して侮れないほどとなる。

ギターを背負っている。バンド練習の帰りにでも寄ったのだろうか。

「何をしに来たんだ？」

「何って、パンを買いに来たに決まってるじゃないですか」

「他にも何かやりそうやから、てつきり」

「それはモカちゃん、ちよつとシヨック」

得体の知れないギタリスト。

それが俺の持つ彼女に対しての印象だ。こうなってしまう最大の理由が全くもつて、こいつの行動パターンが予測不可能な点が上げられる。

「さて、お客さん、どうされます？」

「えつとね、パンください」

「自分で選んでくださいえ」

「蒼真先輩のお薦めでお願いまーす」

「あーはいはい。そゆことね」

とは言え、閉店間近。

パンの残数があまりないので自然と選択するパンも限られてくる。

「これとかどう?」

「この前、食べました。絶品でした」

「……………なら、こっちは?」

「超最高」

「お前、逆に何食べてないんや?」

「全て食べ尽くすのは山吹ベーカー常連のアタシに任せれば、当然ですよ」

——なんで聞いたんや、こいつ。

通常運転過ぎて、むしろ安心してくる。

そんな変なやり取りをしていながらもモカは何気にトレーにパンを乗せている。数が半端ないのは見なかったことに。

在庫のパンは山吹家の胃袋へと収まるので、パンにとって絶世の美少女の腹に消化されるのはある意味本望でもあろうと思っておく。

「これでお願いしまーす」

「結局自分で選ぶんやね」

「アタシにパンを見逃すことは出来ないのです」

「はいはい……………」

彼女のトレーに乗せたパンを計算するので、ひたすらレジに打ち込んでいく。今日一番の大買い物になるぞ、これは。

「所で、蒼真先輩」

「ん、何や？話しかけても今、計算中やからある程度までしか答えられんぞ」

「さーやはどうしたんですか？」

「ああそつか。熱出して寝てる。でも、もうだいぶ下がってるやろうし心配することはない」

「もしかして……………まだ寝てます？」

「その筈やけど……………まさか変な事企んどらんよな？」

俺は顔をモカへ向ける。

「そんな。まさかこのまさかですよ」

「もうイヤだ。この子」

「蒼真先輩に聞きたいことがあったんですって」

「怖いな」

警戒レベル最大の俺にモカはまったく怯む様子はない。

「蒼真先輩ってさーやの事、好きですか？」

「好きだよ」

「あ、あれれ？アタシ的にはもうちよつと反応が欲しかったのに……よろろー」

「ははは、残念やったな」

「でも、それってさーやを恋人にしたいって事ですか？」

「……………それは——」

——ガタン。

「何かの音がしましたね」

「んー誰かが物でも落としたんやろうか」

店の奥から物音。

振り向いた俺と首を伸ばしたモカが確認したけど、特に異常は見られない。

専ら、俺の妹や純辺りがやらかしたのだらう。

「それでですねー結局、蒼真先輩はどっちの意味で好きなんですか？」

「家族としてだよ」

「むー。その答えは女の子としては複雑なんですよ？蒼真先輩」

「分かってるつもりではいるよ。ただ……………」

「ただ？」

「さーちゃんは――」

あ、モカの支払い金額は各自のご想像に任せる。

◇◇◇

蔵。地下。

「はあ……………」

ふと吐き出した溜息。

沙綾に幸せが逃げてしまう迷信などこの際、どうでも良かった。

脳裏に浮かぶのはつい数日前にモカとの会話の流れで彼が口にしたあの台詞。

『さーちゃんはな、山吹沙綾は我慢強く、わがまま、それに加えて頑固な一面もあるめんどくさい女の子だ。でも、一度壊れるともう元には戻せない……まるで宝石みたいに脆く強い女の子でもある。だからこそ俺はさーちゃんの側にはいれど、それ以上中入れしてはいけないんだ』

——そういう風に考えてたなんて、私、知らなかった。

『俺は………また壊してしまうからね』

全てを理解するのは出来なかった。

蒼真が一体何を指して、その言葉を選んだのか。その意図はどういう物なのか。

沙綾には鍵が掛けられた扉の如く、彼の中を覗くことは不可能であった。

「沙綾が溜め息つくなんて珍しいな」

「有咲………何でもないよ」

「何でもない訳ないだろ。じゃないと溜め息なんて出ないし」

ポピパで蔵練習する為、一足先に蔵にいた沙綾と有咲。

会話が一切ない事よりも沙綾の落ち込みように有咲は気不味さを感じていた。

「私で良かったら話ぐらい聞くけど？」

「ふふ、あの有咲が相談に乗ってくれるの？」

「な、なんだよ……………」

言葉に詰まる有咲。

折角の有咲らしくない決断に沙綾はからかいと言う返答を返してきた。

「でも大丈夫。大丈夫だから。ありがとね、有咲」

にっこりと笑う沙綾。

沙綾とは短い付き合いながらも流石に有咲にも感じ取れた事がひとつあった。

「大丈夫な訳ないだろ」

「え？」

「今の沙綾、笑えてないぞ」

「う、嘘!？」

「ほら。私の嘘も見抜けないなんていつもの沙綾じゃない」

「……………」

そして、両者とも黙りこんでしまった。

「私で無理ならせめてポピパの誰でも良いから相談だけはしてくれ。沙綾が一人で抱え

込む必要はないんだって」

「分かってる。それに有咲が駄目って訳じゃなくて……………」

「それにソウさんだって沙綾の力になると……………マジか」

蒼真の名前を出した刹那にはつきりと沙綾は視線を逸らした。

確実に蒼真に関する何かを隠していると、この時の有咲は確信した。

「ソウさんが沙綾に何かしたのか？」

「ううん………してない」

「なら、してないのが不満？」

「ど、どういうこと？」

謎の質問について沙綾は聞き返す。

「沙綾がソウさんを好きだったのはポピパの皆、知ってるぞ」

「っ!? わ、私がソウ君を好きだなんて………」

「悩んでる時点でアウトだろ」

有咲のカミングアウトに沙綾はここ一番の衝撃を受けた。

「何ー!? 二人で何の話してるのー!?」

「香澄ちゃん!! 走ると駆けちやうよ!!」

「蒼真さんが聞こえたけど、どういう話？」

—— 結局、沙綾は洗いざらい皆の前で喋ることになった。

沙綾編—3—『緊急看病』終

—4の1—『温泉旅行』*



——なんか温泉旅行に行くらしい。

とまあ、唐突に言われても理解が追いつかないのが普通だ。よし、ゆっくりと最初から整理しよう。

『なんか旅行券が商店街のくじで当たったから行くわよ』

数日前、俺の母親が晩飯中にそんなことを言った。相変わらず、破天荒というか前振りが無いというか。兎に角、突然出現したその話題に俺と妹の反応は最早適当に返事を返すぐらい。

その日は偶然、帰宅していた父親が口数少なく、母親に言葉を返す。それを待つてましたとばかりに——

『温泉よ!!お・ん・せ・ん!!山吹家総一同揃って行くわよ!!』

勿論、下つ端の俺らに拒否権はなかった。

言い忘れていたが、今日はその温泉旅行の初日である。

現在の様子はというと、旅行の荷物を忘れ物がないか確認して家族愛用の自家自動車

に丁度積み終えた所だ。

「んじや、行くわよ〜」

母親の合図で車が走る。運転は親父が担当。

後部座席に座った俺。隣には同じ被害者でもある妹も座っており、退屈そうにスマホを弄っている。

という俺もやることはない。

イヤホンを耳に当てて、曲でも聴いて時間を潰すことにした。

——数分後。

「ん?」

車の揺れがなくなった。

到着にしては時間が早すぎる。事前の情報では目的地までは数時間単位での移動のはず。スマホの時刻を再確認して、明らかに着いたにはおかしいと俺は判断する。

外を見てみないと。俺は座席を倒して、寝かしていた上半身を起こす。そこから俺は窓をちらつと覗いた。

——”山吹ベーカー”。

ん?、と目を疑った俺。まず第一に考えたのは此所でパンでも買って長距離移動のお供にでもする可能性だ。

きつとそうに違いない。早朝からの出発でもあるので朝食の事も考えての行動だろう。

「ちよつと待つとつてね」

母親が車から降りて、店内へと入って行く。一方で俺はまた音楽鑑賞を再開した。

ドラマー妹のあこから新曲のフレーズを一緒に考えて欲しいと言われていた俺は早速その曲のデモを聞き流していく。

全体を見越して、ぱつと思いつくままにドラムのフレーズを叩く自分を想像。

これは俗に”イメージトレイニング”だ。

略して”イメトレ”。楽器が殆んど手元のないドラマーがよくする恒例の練習方法でもある。

「あつ、悠希ちゃん!!今日はよろしくね!」

「うん、そうやね。よろしく。純も今日は楽しもう」

「お、おう……………」

ちらりと俺は横目に確かめる。

どう見ても、従弟の純と紗南だ。二人とも体格に覚束無い荷物を車へと引き揚げようとしている。

「え?なんでおんの?」

「あつ、ソウ兄！おはよー！荷物手伝つて！」

「あ、ああ……………」

紗南の隙間ない言葉攻撃に俺は反撃の余地なく手を伸ばした。車の背後にいた紗南は意気揚々と渡してきた。

恐らく、純と紗南の荷物が詰め込まれた二人には似合わぬ大きさの荷物。それを車の後ろ部分へ引き入れた。

「お前らも来んの？」

「兄さん、聞いてなかった？皆、来るよ」

「……………あつそうなのね」

「悠希ちゃん一緒に座ろく？」

「行くから引つ張らないで」

初耳であった。

俺はてつきり四人だけの旅行かと決めつけていた。確かに山吹家一同となると二つの山吹家族が一緒に旅行に行く意味にもなる。

純と紗南は俺の後ろにある座席へと乗り込む。妹の悠希も紗南に引つ張れるように席を移動する。

この二人が来るとなるともう一人の存在も俺の脳内をちらつき出す。

「今日はこんな私が保護者代わりやけど、よろしくね〜」

「いえいえ。お陰で安心して旅行に行けますから」

山吹ベーカーリーから出てきたのは二人。

一人は俺の母親。片手にパンが入ったと思わしき袋を持つ。

そして、もう一人は山吹家の最長女である沙綾だ。彼女もやはり旅行を醸し出す重そうな荷物をローラーで運んでいる。

「おはよう、ソウ君」

「おう。おはよう」

んしょつ、と荷物を車に乗せた沙綾はそのドアを閉めた。俺とは反対側の方から車に乗り込み、座椅子に座ると自分が入ったドアもしつかり閉める。

俺の隣に座った沙綾。ふとその様子を特に意味もなく眺めていた俺と目があつた。

「どうしたの?」

「……………んや、気にすんな」

そして――

母親の「レッツゴー!!」と共に父親が車を発進。目的地までの快適なドライブが開始された。



——数時間後。温泉街。

「着いたあー!!」

「着いたー」

シスターズが騒いでいる。

車での移動もまちまちと。山吹家一同は無事、温泉のある旅館へと辿り着いた。相当な長時間の移動で疲労が貯まったちびどもははち切れんないばかりの元気ぶりを周囲に振り撒く。

辺りを見渡すと今日が休日なのか、活気溢れる町並みに多くの家族が歩いてきた。硫黄の匂いも微かに感じる。

「さて、ここからどうしようつか？」

「予定ないの？」

「勿論、ないわよ？」

妹の問いにがつつり答えた母親。

と、ここで純が元氣よく挙手をする。

「俺、お土産見たい！」

「私も!!」

「なら、私も」

「んじゃあ、お土産でも見に行きましようか。蒼真と沙綾ちゃんは自由行動で良いわよ。

高校生なんだから大丈夫でしょ」

見ての通り、母親は自由奔放な性格。

親父も特に反論はなく、黙って付いていくようだ。

俺の隣に立つ沙綾も困り顔でいる。

そんな沙綾の気持ちも余所に、弟&妹二人を引き連れた母親は俺と沙綾を意識の外に出してしまったのか躊躇なくその場を離れていった。

——もう姿が見えへんな……………」

「一瞬で置いてけぼりか……………」どうすつかな」

「それなら、ほら、二人でここのお店回らない？」

「うん。それは良いんやけど……………」

「何々？私と居るのが嫌ってこと々々？」

沙綾、そうなに不機嫌っぽい言い草はしないでくれ。俺だつてこんな可愛い美少女と温泉街を歩ける事に不満があるなんて思つてない。

どちらかと言えば、そのせいで生じる弊害に俺は不安を抱きつつある。

「なんか……………」デートみたいやなつて思つてさ」

「でーと？……………」デ、デート!？」

「ど、どうした？」

焦つた。急に大声出されては驚く。

「確かにそうだよね……………」よくよく考えれば、今この状況では私とソウ君しかないんだ……………」

「さーちゃん？」

「……………」チャンス？他の皆には悪いけど折角の機会であるわけだし……………」

「あつちに足湯あるな」

「…………ソ、ソウ君!! 私達もデートとやらにでも行こうよ!!……………ってあれ? いない?」
独り言の沙綾は触れぬが吉。

既に俺は近場の足湯らしきエリアに足を踏み入れようとしていた。

「さーちゃん!! こっち!!」

そう呼び掛けると、はっ! と沙綾の視線がこちらへ。駆け足かそれ未満、曖昧な速度で駆け寄ってくる。

「何で先行くの!?!」

「ほら、ここ足湯やってるからつい」

「足湯?」

俺は早速片足を爪先からそつと入れる。

「ああ……………良い湯加減」

「ホント?——あ、ホントだ」

両足を浸けて、木の板の上に腰を下ろす。沙綾も俺の隣に座り、足湯を堪能している。俺の視線は少し下に。

彼女の左手との距離が俺の右手と届きそうな何とも言えない絶妙なこの距離感。まあ良いか。

「……………」

何より、この静寂感がむしろ心地よいぐらい。

「ソウ君は……………」

無言の中、沙綾は言う。

「私のことどう見てるの？」

「なんやつて？……………唐突に聞くね」

「さつき変なこと言うから」

「これデートみたいやなつてくだり？」

静かに沙綾は頷く。

むろん、あれは冗談のつもり。特に他意などは含まれていない。

「家族であつて、従妹であり……………俺のドラマーの弟子であつて……………そんな感じやね」

「女の子としては……………見てない？」

ふと横を見ると、沙綾と視線が合う。

気恥ずかしいその空気にたまらず俺は視線を前へ逃がした。

「見てないわけ無いだろ……………じゃなきや、こうして今もデートしてるなんて思わないだろうし」

「……………うん、ありがとう」

いつもと違う彼女の仕草に俺は戸惑う一方だ。ここまで奥深くまで俺の恋愛観を沙

綾が掘り下げてくるなんてこと、人生一度もなかった。

「俺からも質問良い？」

「うん？なあに？」

「なんでさっきのを俺に聞いた？普段のさーちゃんなら言わないと思うんやけど」

「そうかな？私、いつも通りだと思うけど……あえて理由を上げるなら、そうだね……」

俺は覚えている。この時、沙綾は笑った。

ただ俺にはその沙綾の笑顔をすんなり受け入れない自分がいたことをはつきり自覚していた。どこか苦しそうで、悲しそうな情景が彼女の笑顔の裏に感じたからかもしれない。

正直に彼女へ告げれば良かったかどうかは今も昔もそして未来も分からないだろう。

何故か。それは俺はこれから沙綾の言う言葉に何も言い返せないことに未来永劫変わりはないのだから。

「私に好きな人が出来たから……かもしれないね」



宿泊先の旅館。受付。

「はあ？なんやて？」

母親からのその一言に俺は耳を疑かった。

それほどまでに俺は先程の言葉を一度で理解できる程、思考が動いていなかったからだ。

因みにあの後、暫くしてから母親から集合を旨とする連絡が来たので合流して、宿泊予定の宿へ赴いたのがついさっきの話になる。

「だーかーらー、蒼真は沙綾ちゃんと一緒の部屋ね」

「あー同室ってことね。いやいやいや!!おかしいやろ!!」

沙綾は従姉だ。でも、思春期真っ盛りの高校生だ。女の子と大人女子の狭間。

常識からしてみれば、二人の高校生の異性を同じ部屋にするなど有り得ない。

「しようがないんですよ。元々当たった旅行券は大人四人まで。子供は二人で大人一人扱いね。そうなると必然的に私とお父さん、悠希に純君に紗南ちゃん দিয়ে っぱいって訳」

「父さんと沙綾を入れ換えればいいやろ」

「もう一部屋………：ついうっかり恋人部屋の予約で取っちゃったよ」

「……………」

殺意が芽生えた瞬間。

「沙綾ちゃんからは事前にOKもらつとるよ?」

「さーちゃん、マジで言うてんの?」

俺の背後で見守る沙綾に問い掛ける。

この時の台詞に若干の怒気が混じっていたことは否定しない。

「うん。子供達だけで同じ部屋になるよりも最年長の私達が別部屋になった方が問題が起きたとしても直ぐに対応出来るかと思つて」

理解は出来る。出来るけど。

「俺、男子高校生ね」

「知ってる」

「さーちゃん、現役女子高校生」

「そうだね」

「泊まる部屋が一緒になる」

「うん。それがなに？」

「……………」

まさか、危惧してないのだろうか。

そもそも俺が男として認識されているかどうかすら疑惑に上がるレベルだぞ。

「……」は最終手段。脅迫紛いになるが致し方ない。

「俺、襲っちゃうかもよ？」

「ソウ君ならそんなことしないの分かってるし。それに……………」

「それに……………」

沙綾は唐突に頬を赤く染める。

「な、何でもないっ!! 兎も角、もう後戻り出来ないんだから覚悟しなさいってこと!!」

「へ……………」

一蹴されて、俺は逃げ場を無くす。

少しだけ姿を消していた母親が俺達の所へ戻ってきた。そして、掴んだ俺の腕を持ち

上げ、掌に何かを乗せた。

「ほら、これが鍵ね」

「やたら用意が早い」

「元からあんたに断る権利はないのよ」

「そうですかい。はいもー！、分かりましたよ！」

——荷物置いたら、さつさと温泉に入るんや。それするしか選択肢がないな、これ。俺は全てを投げ出す勢いで沙綾と一緒に部屋に泊まるのを決意したのであった。

—4の2— へ続く。

— 4 の 2 —

◇◇◇

とある客室。

「……………」

—— 氣不味いな……………」

旅館の人に案内され、俺と沙綾は客室へと足を踏み入れた。和室を趣向に置いた室内は普段の俺ならその雰囲気にも飲まれるだろうが、今回は例外。

同じく部屋へ入ったのは沙綾。

彼女は部屋全体を見渡しながら、のんびりした態度で畳を踏み越えていく。挙げ句の果てには、ん？と俺に向けて首を傾げてくる余裕ぶり。

完全に意識してしまっている俺とは正反対に沙綾は普段と変わらない姿をみせていた。

「ソウ君、見てみて。景色が綺麗だよ」

窓際に立つ沙綾からお声がかかる。

ここは立地的に恵まれた部屋らしい。窓からは温泉街やその奥に聳える山々を一望

できる贅沢な景色がそこにあつた。

「……………綺麗だな」

「綺麗だね……………」

二人揃つてじつと眺める。

「あ、さつき浴衣があるつて言つてたけど」

「あーそれやつたら、確かテーブルに置いてあるつて言つてたな」

案内してくれた人の説明の中にあつた。

温泉施設なので、基本的に旅館内の移動はその浴衣姿となる。

さつき案内されると同時に俺達用の浴衣のサイズも尋ねられたのでサイズが合わなくて着れないなんて事態はないはず。

ただ、別に問題がまたあつて——

「あつたよ。こつちがソウ君のかな」

「ん。あんがと」

「それでこつちが私」

「……………」

「……………ソウ君、何処で着替える?」

「そうだ。」

これから着替えなさいといけないのだ。

「俺、洗面所で着替えるわ」

「うん、分かった」

浴衣を回収。そそくさと洗面所に避難。

さてと、鏡の前で一息つく俺であったがこのまま何も動きたくない衝動を抑えつつ、浴衣姿へと着替えることに。

そして俺は気付いてしまう。

「……………帯が、ねえな」

緊急事態だ。

浴衣に必要な不可欠な帯。それが無いと最早只の下着姿丸出しな変態となってしまう。

「さーちゃん、帯そこにな……………いい」

扉を開けて、顔を出そうとした俺であったがここでさらに失態を。

俺の視線はぼつちしある一点にがっちり固まってしまう。

「えっ!?今はちよつと!!」

「……………すまん」

「……………っ?!?!」

下着姿の沙綾がいた。

まさかテーブルに脱いだ服を置いて着替えていたなんて思っていなかった。言い分としてはあれだ。もう少し隠してくれ。

不幸中の幸いと言うべきだろうか。沙綾はこちらに背中を向けていた。でも、それで全てを赦される訳ではない。

「もう!!これが良い!?!」

浴衣を片手で握り締め体を隠し、もう片方の手で俺の浴衣色に合わせた帯が投げつけられた。

無心で俺はそれをキャッチ。

「なんか……………うん、ごめん」

「早く閉ーめーる!!」

がちやり、と扉を閉めた。

脳裏にはつきりと描写された彼女の姿、女の子のその生々しい姿。おい、それは違うと思われるかもしれないが、俺はただただ気になってしまった点が一つだけあった。

「なんで黒やねん……………」



—— 数分後。

「もう良いよ」

二度目のあの間違いは人生終了の合図。

そう学習していた俺は扉をノックして沙綾に合図を出す手段に出ていた。彼女もその意図を汲み取ってくれたのか、ちゃんと扉越しからお声がかかる。

扉をゆっくり開いて、洗面所を出る。

俺と沙綾はお互いに浴衣を披露タイムとばかりに立ち姿で向き合った。

「むう………」

ご機嫌斜めな様子の沙綾。

無理もない。自分の恥ずかしい姿を油断していたのもあるが従兄の俺に目撃されてしまったのだ。

「今からでも遅くないからさ、母さんと変わってこようか？」

偶然が招いた。確かにそれもある。

つまり、今後たりともまたその偶然が再発しないとは言い切れないのがぶつちやけ想像するだけで恐れ多い。そう危惧した俺は沙綾に提案することに。

ところがどっこい、この一言が逆効果のようで沙綾の表情が益々不機嫌さを増している。

「さっきの言い訳はそれ？」

「その件は俺が悪かった……うん、すまん。この通りです」

「其処まで素直に謝られるとね……私も考え事してたせいでもあるし……」

「考え事？」

「ん？ 気にしないで？」

沙綾の笑顔の裏に俺は無言に頷く。

「それと部屋を変えるなんてこともないから。今更、変更だなんて叔母さんにも迷惑かけちゃうし」

「俺には良いんかいな……」

「何か文句でもあるの？」

「んや、ないよ」

ギロリ、と沙綾の圧が飛ぶ。

「これでこの話は終わり！にしてもソウ君、浴衣姿が意外と似合うね」

「そうかい？自分では全くやねんけど……折角やし、今度のライブ衣装にでもしたろっかな」

「ライブ衣装？ふふ。案外、いけるかもね」

「マジ？今度、光に言ってみるか」

「楽しみだね——あ、ちよつとだけ、じつとしてて」

沙綾がすぐ目の前に接近。

黄土色をベースに花柄模様を鮮やかにした浴衣姿の沙綾。普段見ない彼女のギャツプに俺の脳内がレッツツフル回転。

俺の浴衣の襟が気になった様子の子の沙綾。両手を俺の首もとへと伸ばしてきた。

「ふっ………と。これでよし」

「あ、ありがと………」

「どう致しまして」

彼女はにつこりと微笑む。

と完全に二人の世界に入る次の瞬間、第三者の声に沙綾が思わず跳ね上がる。

「終わった？」

「えっ!? 悠希ちゃん!? いつからそこに!?!」

「ついさっき」

「全部見られていた……………!?!」

部屋の扉には妹の悠希がポツンといた。

俺も悠希の気配には全く気付いていないので驚いている。この子、いつの間に。

ついさつきまで俺と沙綾のくだりも黙って見ていたらしい悠希も勿論、赤をベースとした浴衣姿である。

「悠希、どうした?」

「父さんが温泉行こうって。だから来た」

「分かった。準備するから少し待ってとってくれ」

「了解。廊下にいるから」

そう言い残し悠希は部屋を出ていく。

バスタオルは確か各部屋に置かれているはず。記憶を頼りに俺は温泉へ行く準備をすることに。

一方で、沙綾は悠希出現が相当ショックだったのか両手で顔を隠してテーブルに俯せている。表情が全く伺えない状態だ。

「さーちゃん」

「……………なに？」

「温泉行くぞ」

「うん」

それでも沙綾は動かない。

これを俺はあれを言えそうな唯一のチャンスだと感じ、攻めることにする。

「あー、さつき言い逃したけど……………」

びくり、と沙綾の肩が動いた。

「さーちゃんの浴衣も似合ってる。可愛いよ」

「……………うん」

この時、沙綾がどういう反応をしたかは俺には分からない。照れ隠しで顔を隠したままなのか、聞き流してそのままなのか。はたまたは別の理由なのか。

ただ一つ、沙綾の耳は赤く染まっていた。それだけで、俺は何となく分かっていた。

◇◇◇

露天風呂。

「ふう〜」

私は深く、それはもう深く息を吐いた。

温泉に浸かれば、温泉独特の気持ちよさが全身にぞわつと染み渡ってくる。この感覚がなんとも言えない快感。

ミニタオルを頭に乗せた私はこの旅館の中でも特に人気と推している露天風呂へと来ていた。

どうやら温泉を出入りする人波のちようど境目に來たらしく、他に女性の姿は見当たらない。ラッキーだと私は存分に独り占めすることに。

『さーちゃんの浴衣も似合ってる。可愛いよ』

刹那にザブン、と水飛沫の音が。

勿論、これは私が勢いよく顔をお湯に入れたせいだ。直ぐにひよつこりと顔を水面か

ら出し、プクプクと口から気泡を漏らす。

——何で今思い出しちゃうの!?!私!!ソウ君、あれだけはホントに反則だつて………。

彼と相部屋になる。実は出発前に彼の母親から密告を貰っていたので、己の覚悟を決める時間は十分あった。

着替えを彼に覗かれた。これは想定外。私の思考がその時、これからの彼との二人きりの時間にどう対処していこうかに費やしてしまっていたのだ。先より今を考えるべき。

次に彼の妹に一部始終を見られた。もう完全にキャパシティオーバーとなった。あんなに恥ずかしい姿を身内の人に公開されていたなんて………知らない方がよっぽどマシ。

そして、止めの彼の一言。あの時、顔を隠していた私、ファインプレーだと今、振り返ってさらに痛感している。

あんな照れて真っ赤になった私の顔など誰にも見せられない。

「沙綾ねえ」

「ふわあ!?!ゆ、悠希ちゃん………」

背後からの声にまた驚いてしまった。

そこに居たのは裸にタオルで胸元から下を隠した彼の妹、悠希ちゃんであった。

スタイルが良い彼女。中学生にも関わらずタオル越しに胸が少し出ており、くびれもすっかりある。さらに白く透き通る肌を持つ悠希ちゃんはこの温泉はまさに最強のクラブだと私は思う。

「隣良い?」

「うん、おいで」

悠希ちゃんは私の隣に座り、温泉に入る。

普段から物静かな性格の女の子である悠希ちゃん。私の家の姉妹には居ないタイプでもあるが、十分私にとっても可愛い妹。

「一つ聞いても良い?」

「うくん?何?」

悠希ちゃんから質問かあ、珍しいこともあるんだね、とこの時の私は思っていた。

「沙綾ねえはお兄のことが好き?」

「……………な、なんのことでしょう?」

「誤魔化しても駄目。さつきも、お兄と話す沙綾ねえ、とってもニヤニヤしてた」

鋭い指摘に私はたまらず唸った。

反論したい。したいが、彼女の正論の前にはぐうの音も出ない。

「答えないと駄目かな？」

「お兄に言う」

「それはちよつと不味いかな……………」

「なら、教えて」

必要以上に迫る悠希。

答えたい気持ちはあるが、言葉に出す恥ずかしさもまた劣るに至らず私の判決に迷いを与えていた。

「私はソウ君のこと……………」

ちらつと見る。

悠希は真つ直ぐした瞳でこちらを見つめていた。

「……………好き。うん、好きだよ」

——言ってしまった。

「沙綾ねえの気持ちは分かった。私も沙綾ねえが本当のお姉さんになってくれるのは嬉しう」

「えっ？あ、ありがとう……………」

素直な悠希の言葉について反射的に返してしまう。あまりにもあつさりした幕開けにぼつかりと開いた虚無感を覚えた。

と、思ったのもつかの間。ここからが本番とばかりに悠希の目が変わった。

「でも、そう簡単には行かないと思う。お兄は今もまだ引き摺ってるままだから」

「それってどういう……?」

「あれ? 沙綾ねえは知らない? お兄に昔、彼女がいたこと」

「えっ、か、彼女? ……し、知らない……昔、噂程度で聞いたことはあるけど……」

そして後に私は決断を迫られることとなる。

この気持ちに心の嘘をつかず、誰一人として懺悔だけはしないように。彼を好きになつてしまったこの私だけの恋を大切にする為にも。

「私、もう上がる」

そう言つて悠希はその場を立ち上がる。

「悠希ちゃん!? ちょっと待って!! 私、聞きたいことがまだあつて——」

「沙綾ねえ」

「へ?」

「後で部屋に来て。私の知ってること話すから」

「う、うん……」

「沙綾ねえだから話すんだよ。取り敢えず、他の人には絶対に死んでも話さない内容を沙綾ねえに話すつて事だけは先に言つとく」

「……………ならどうして悠希ちゃんは私には話してくれるの？」

室内への扉に手をかけた悠希。

外気で冷えた体を振り返し、はつきりと告げた。

「今のお兄を救えるのは沙綾ねえだけだから。私では無理だった……………でも、沙綾ねえ
だったらお兄を救ってくれるって……………信じてる」

沙綾編―4の3―へ続く。

—4の3—

◇◇◇

悠希ちゃんから蒼君の過去の顛末を語られた。

当事者の第三者に近い悠希ちゃんは詳しい事情をあまり知らない。それでも、悠希ちゃんが知ってる限りの全てをちゃんと話してくれた。

蒼君が中学三年生の頃に恋人が出来たこと。その子は家によく遊びに来て、悠希ちゃんとも交流があったこと。そして、中学を卒業する前に病気で亡くなり、既にこの世には居ないこと。

全てを聞き終えた、私の芽生えた感情はただ一つ。

——後悔であつた。

中学に入学したての頃の私と彼との当時の関係は殆ど無縁に近い。歳が違うせいでバラバラな時期に中学に入り、それまで仲が良かったのに自然と連絡すら取り合わなくなつた。

私がドラムを始める。それが切っ掛けで彼との交流が復活したものの、以前までとは行かずじまい。

やがて私がバンドに対して様々な事情で焦りを感じてしまった時期と平行して、彼は彼で私とはまた違う困難に心を痛めていたのだ。

過去は永遠に変えれない。そう理解していても、あの時の自分に文句を付けて変えてほしかった。

兎も角、ここまでの全ての話をしてくれた悠希ちゃんに感謝の気持ちを。

「ありがとうね、悠希ちゃん」

「ううん。沙綾ねえには知ってもらいたかったから」

「悠希ちゃん……………」

その蒼君の元カノさんとも沢山話をしたことがある悠希ちゃん。当時はまだ小学生であった悠希ちゃんは細かいところまでは流石に、だそう。

でも、実の兄が悲しそうにしていた。それだけは印象的に覚えていたそうだ。

「沙綾ねえはどうなの？」

「え？どうって？」

「兄さんへの気持ちは変わった？」

彼女はそう尋ねる。

ふと私の視線は下へ。座る膝に添えた手が震えていた。

悠希ちゃんが私のどうという返答に対して怯えているかは想像がつく。

——蒼君を見捨てることだ。

私は彼女の手を優しく握った。

「大丈夫、悠希ちゃん。私が蒼君を見捨てたりするなんてことしないから」

「……………本当？」

「ホント。こんな可愛い妹を放つたらかしにするぐらい、ダメダメなお兄さんの面倒は私が見てあげないとね？」

「沙綾ねえ……………ハグしてもいい？」

「うん……………おいで」

ぎゅつと小さい彼女を抱き締める。

彼女にとって、今日と言う日までずっと誰にも言えず、抱え込んできたその思いがようやく解放されたのも同然。その安心感にはきつと計り知れないものと成りうる。

だとしても、こうして悠希ちゃんの背中をそつと擦り、安心させてあげることぐらいなら私にも出来るはず。

「……………後は任せて」

私の中で何かが変わった。



——外に出た。

「思ったよりも寒いね」

凍える、とは違う。この体がゾツとする絶妙な気温に思わず両手を身体に抱えてしまった沙綾。

夏とは言え、山の夜は肌寒い。

何故外にいるかと言うと、沙綾が部屋に戻ってくるなり、部屋で寛いでいた蒼真に景色が綺麗だから外の散歩をしようと提案したのだ。初めは戸惑いの様子を見せた彼も直ぐに同意を示し、二人は揃って旅館の外へと出たのである。

「上着貸そうか？」

「……………ううん、大丈夫」

純粹に沙綾の体調を心配した蒼真。これが裏目に。

変なものを見る目をした沙綾は恐る恐る尋ね返した。

「まさか……………他の女の子にもそんなことしてないよね？」

「他の女の子ってなんだよ」

「それは……………ドラマーの子達とか」

「最近会うことは増えたけど、いつも通りやし。さーちゃんの言うのに該当はしないと
思うけど」

「そう？なら、いいけど……………」

沢山の竹に彩られた道を歩く。

「最近のバンドの調子はどう？」

「さーちゃんが俺のバンドを気にするなんて唐突だな。まあ……………特になし。相変わら
ず馬鹿ばっかやっとする」

「だと思った」

「そういうさーちゃんの方はどうなん？」

「こつちも相変わらず、香澄がはしゃいで、おたえが天然を発動して、りみりんが慌てて、

有咲が苦勞してゐる、ぐらゐかな」

「ご愁傷さまやね」

人の気配は一切ない。夏の夜に相応しいゆったりとした雰圍氣を味わいながら、二人は並んで歩く。

「さーちゃん」

彼がそう呼ぶ。

「何？」

沙綾はふと彼の横顔を見る。

「今日のさーちゃん……いや、正確には今のさーちゃんか。何かおかしい」

「おかしい？」

「正直、言葉にしづらいんやけど……他人行儀というか、今になってさーちゃんとの距離感が急に掴めなくなった」

「あはは。ソウ君の気のせいだって。勘違いも程ほどに……」

蒼真の真剣な眼差し。

沙綾は言葉を詰まらせる。

「はあ……なんで蒼君はすぐに気付いちやうのかな……もう」

「え？なんやて？」

「蒼君の昔の話、さつき悠希ちゃんから聞いたよ」

「は？俺の話？悠希から？」

沙綾の大胆に近い告白に蒼真の動きが止まる。やがて、驚きよりも焦りに近い表情へと変貌する。

「あんまり聞いても、面白くないやろ、俺の過去の話なんて」

「うん、そうだね。でも、ソウ君の事は全部知りたかったから」

「……………懐かしいな」

彼は遠い目で虚空を見つめる。

きつと脳裏にはあの頃の思い出が蘇っているのだろう。

「ソウ君は今でも、その……………彼女さんのことが好きなの？」

「どうやろね。当時も好きかどうかは分からんままやったし」

「でも、家にはよく招待してたんでしょ？」

「なんでそんなことまで……………ああ、悠希か。確かに家にはよく居たね。連絡なしでいきなり突撃してくる奴やったから追い返す訳にもいかんし」

「へえ。私も会いたかったな」

「それは……………俺が困る」

「どうして？」

「迷いなしに動く奴やったから、きつとさーちゃんの存在を知ったら、すぐに会おうとしてたはず。となると、絶対に俺にまで被害が及んでくるのは目に見えてる」

「聞いてる感じだと、蒼君の彼女さんって香澄みたいな子かな？」

「あいつらで例えるなら、そうやな。かーくんとハロハピのボーカルの子を合わせて半分で割ったようなもんだね」

「……………羨ましい」

「ん？何が羨ましいって？」

「え〜？私、そんなこと言っていないよ〜？」

「……………」

「……………って、過去の私ならきつとこんな風に言うんだろうね」

「……………マジでどうした？頭打った？」

「蒼君、今の私、嫉妬してるよ」

「へ？」

「蒼君に彼女が出来たときに教えてくれなかったこともそうだし、何より私に黙って可愛い女の子と付き合ってたって事実が一番ムカつく」

「落ち着いて……………な？な？」

「何である時、言ってくれなかったの!？」

「何でって、聞かれなかったし……自分から言う内容じゃ無いやろうし」

「それはそうだけど……でもく!!」

「そこまで食い付かれてもさ、俺の元カノが沙綾とどう関係あるんだ?」

「大有りだよ!!さつきだつてつい意識しちゃって、そのせいで直ぐに蒼君にバレるし」

「人の元カノぐらいで緊張しちゃう幼馴染のことぐらいいは何でも分かるけど?」

「もう!!変なことは言わないの!!昔から思ってたけど、蒼君ってまさか……天然たら
し?」

「それはない。初めて言われた」

「……」

「あれ?さーちゃん?」

急に黙りこんでしまった沙綾。

「………だつたらこれなら分かる?——」

沙綾は前へと大きく一歩出た。

くるり、と後ろへ振り返ると彼の顔が月明かりに照らされ沙綾視点からよく見える。
ずっと前から秘めていたこの恋心に今、沙綾は最後のけじめを付けようとしていた。
小さく沙綾の口元が動く。

「………すき」

——そよ風がふらつと舞った。

「山吹蒼真君……貴方が好きな女の子が目の前に居るってこと」

—4— 『温泉旅行』 終

—5の1— 『絶対領域』

◇◇◇

蔵。地下。

「……………沙綾ちゃん。もう一度だけ……………良い？」

再度、聞き返してしまう。

りみにとってそれぐらい一度では理解し難い話が飛び出した。

「ええ……………。次で最後だからちゃんと聞いてよね。ソウ君に……………告白した。あくま

で、その場の流れで勢いに任せた結果がこうなっただけの話だけ……………」

「それってあれだよな……………男女が恋人となる前に行うやつ……………」

有咲の唇が微かに震える。

「それでソウの返事は？」

「おたえちゃん!？」

「あれ？聞いたら不味かった？」

本日もおたえランド営業中。

だが、完全に沙綾のプライベートを挟り込む質問をするのは不味い。親しき仲にも礼

儀あり。

たえを庇いながら、りみは肝心の沙綾をそつと様子見する。おたえは変わってないなあと眺める彼女の表情に一先ずりみは安堵した。

「う〜ん…………断られた訳でもないし、OKを貰った訳でもないからね。何とも言えないかな」

「え？返事は保留にされたのか？」

「つてことになるの？分かんない」

有咲の質問に沙綾は曖昧に返す。

その重要なシーンは当事者二人のみしか知らず、その内の一人がこうして悩ましている。

有咲は思考を巡らせた。

恋沙汰に経験は皆無の有咲だが、小説やネット、テレビで培った知識で対抗するしか道はない。

だけど、友達を悲しませたくはない。

心の片隅で密かに決意を固める有咲であった。

恋と言え、失恋と勝手に繋げている時点で既に思い込みが発生しているとは誰も指摘してくれない。

「ソウさんからは具体的に何て言われたの？」

「薄々感じてはいたけど、今は答えられない……………つて感じだったはず。パニック状態だったから、細かい部分までは記憶にないけど」

「うわっ。一番困るやつ」

「有咲？……………有咲も言われたことあるの？」

「なんでそういう結論に至った!？」

男気がないと断言せざるを得ない。

女の子の告白した勇氣にけじめを付けないなど断固反対な重大案件である。

りみが冷静に考えた判断を告げる。

「だとしたら、今は返事待ちってことになるのかな？」

「それもどうかと……………そもそもソウ君が私の気持ちにちゃんと気付いてるかどうかも怪しいし……………」

「は？告白したんだろ？」

「告白してよりも……………好きな人が目の前にいたら、貴方はどうするって曖昧な感じに言っちゃって……………」

「沙綾って意外と奥手だよね」

「だな。今回はおたえの意見が正しい。肝心の所を最後までやりきらないのは沙綾らし

く無いんじゃないか？」

「は………」

有咲の淡白な断言に沙綾は反対出来ず。

告白という恋愛のメインたる場面で普段の沙綾とは売って違うこの姿。恋する乙女の羞恥心に沙綾は負けてしまった。

だが——まだ完全敗北ではない。

一筋の希望が残されている。

重要視される彼の気持ちは一旦置いておくとして、沙綾が失恋としたと認定するのはまだ早いのだ。

そもそも、沙綾の思い人の蒼真は沙綾が告げた告白をどう受け止めたのか。鍵となるのはそこ。

純粹に沙綾の好きの気持ちとしてなのか。それとも、幼馴染としての単なる冗談としてなのか。

本人のみぞ知る事実。

「やっぱり問題は沙綾の気持ちをソウがどう受け止めたのか分からない所だな」
「本人に直接聞くのも出来ないし………」

打開策はない。

根本的な解決策して必要な情報が不足している。

「そう言えば、香澄は？」

「あれ？確かに全然話に入ってこないけど……………」

地下室を見渡した。

楽器の置いたスペースが部屋の奥に存在する。

そこにギターを抱えながら、スマホを片耳に当てて楽しそうに笑顔を浮かべる香澄がいた。

「電話中」

「誰と話してるのかな？」

「香澄の好きそうな話題なのに、やけに大人しいと思ってたら……………電話……………電話……………まさか!？」

有咲に一つの考えがよぎる。

「ええー!?来てくださってもいいじゃないですか!!……………練習?なら、仕方ないですけど……………え?良いんですか!!わかりました!!……………はーい!!」

渋い形相をした有咲。

通話を終えた香澄の背後へと近寄った有咲は恐る恐る彼女の肩をつつく。

「おい、香澄」

「ふわあへ？有咲？」

「誰と話してたんだ？」

「ソウ君だよ？」

離れて様子を見守る沙綾の頬が赤くなる。

「……………やっぱりか。一応聞くけど、香澄からかけたのか？」

「うん！皆、ソウ君の気持ちを知りたいって言うから。直接聞いた方が早いでしょ？」

「香澄!?それとこれとは話が違うってさっき言った——」

「でも、さーや。さーやだってこのままソウ君の気持ちを知らないままなのは嫌でしょ？」

「う、うん……………」

まさかの沙綾が撃沈。

それほどに香澄の言い分も一理あるのだ。手っ取り早い手段は本人にとつとと尋ねること。

とは言え、それが出来ないから問題という形で浮上している。香澄だから選べる手段である事実を忘れてはならない。

「うん、そうだ。聞く。聞けば良い。わざわざ私が悩む必要なんて……………というか、なんで私が？こんな気持ち、私だけだなんて不憫だよ。ソウ君にも味あわせて……………」

「待て、沙綾。正気を取り戻せ。流星に私でも分かる。それだけは不味い」
冷静に止めに入る有咲。

そんな光景が繰り広げられてる横で、おたえは香澄の方へと近付いていた。

「香澄、ソウとは何を話してたの？」

「えっとね、私達の練習に来てくれないかなって誘ってたんだ。でも、今日はバンドの用事が忙しくて来れないって」

「それは残念」

「ある意味、それで正解かも……………」

りみの視線の先は沙綾。

有咲と会話しているが、ずっとそわそわ状態。肝心の意識の先は全く別の方へと向いている様子。

話題に上がるだけでこれだ。

さらにご本人登場となれば、沙綾が無事に意識を保てるかどうかすら怪しくなってくる。

「バンドの用事って事は向こうのライブハウスにいるって事かな？」

「ど、どうだろう……………？ソウさんの個人的な用事かもしれないし」

「会いに行くだけ行ってみようよ！」

「だ、駄目だつてば!!」

三人の会話に聞き耳を立てた沙綾。

まさかの意外な展開にたまらず入ってしまった。心の準備は大切なのである。

「どうして?」

おたえが首をかしげる。

「どうしてつて……急に押し掛けたら、迷惑だし」

「私達が行くのだったら、全然問題無いつて言つてたよ。むしろ、感想が欲しいんだつて」

「ぐぬっ……だとしても、そうだ!練習はどうするの?今日はその為に集まったんだし」

「今のままでと、沙綾が練習に全然集中出来ないだろ。兎に角、ここまで来たのなら一度直接会つて話さないと駄目だ」

「有咲!?……そうだけどお」

香澄、有咲の正論。

成すすべなく外壁が固められつつあるこの状況に沙綾はぐったりと項垂れた。

「りみりんも大丈夫?」

「うん、大丈夫だよ。バンド練習の見学は私もしてみたいと思つてたから」

「やった!!なら、決定!!」

「いえーい」

「あつ。ソウさんに差し入れとか持っていていった方がいいのかな……………」

「お前ら、他人に迷惑だけは絶対にかけるなよ」

「香澄。ギターはどうする？」

「持っていく!!」

話は無情にも進む。

沙綾を除いた四人が外出の準備を始めた。ギター、ベース組は楽器をケースにしまい、背中に背負う。

取り残されつつある沙綾、覚醒。

「ま、待って!!」

全員の視線が沙綾へ集まった。

「沙綾。まだ何かあるの？」

「あのね……………ソウ君に会う前に一つ解決しておくべき必要な事があって、それが私にとっての本題なんだけど……………」

「うわっ……………これはやべえ」

「沙綾ちゃん……………!!可愛い……………!!」

ほっこりと顔を赤らめ、俯いた沙綾。

あまりにも可憐なその仕草にりみは無性にも何故か自分にも羞恥心が芽生えてしまった。

「これから行くにしても、その、ソウ君と……………どういう顔して会えば良いのかなって……………」

——絶対^{沙綾}にこの乙女を守ろう。

有咲とりみはこの時、決意したという。

—5の2— へ続く。

宇田川巴編

— 1 の 1 — 『和太鼓』*



蒼真の部屋。

「もつすもす?」

電話がかかってきた。

折角やし、ちよつとしたボケを入れてみた。さて、どう来るか。

因みに電話相手はしつかり確認済み。

『何ですか? それ』

「……………気にすんな」

おっと、完全に外した。これは失態。

よくよく考えてみれば、俺がこれに答えろと言われても似たような展開になるだろう。

「珍しいやん。電話で来るの」

『珍しいとかですね……………先輩にかけるのは初めてですね』

「んで、何用？」

電話主は「宇田川巴」。

”Aftergrow”という王道ロックバンドのドラム担当。どうやらバンドメンバー全員が幼馴染みで集まって結成して出来たバンドらしい。

あの騒がしい妹と違って、姉御肌の持ち主でもある彼女は周りから頼れる存在として重宝されている。

でも、俺からしたら巴は後輩という立ち位置になってしまう。忘れがちだが、俺は高校二年生だ。現役のな。

『それが先輩に手伝って欲しいことがありまして』

「うんうん、何？」

『先輩って太鼓出来ます？』

「太鼓？ドラムやなくて？」

『はい、太鼓です』

太鼓か。和楽器の一つ。祭りなどでよく見掛ける。あの重厚な音圧がより会場を盛り上げるのだが、やってる側はとて大変である。

「一度なら叩いたことあるな」

『え!?!ホントですか!?!』

「中学の文化祭の時ね、生徒会で和楽器演奏するのが本校の伝統とか何とからしくて、そのせいで触ったことはある」

『丁度良かったです。先輩、来月の祭りで和太鼓演奏あるの知ってます?』

「……………まさか?」

『はい。そのまさかです』

俺がそこで和太鼓、叩けど?

無茶に感じる巴の要求。それは経験者でもある彼女自身も分かっているはずだ。

地元の祭りで一際盛り上がるのが、今話に上がっている和太鼓演奏だ。恐らく、巴はこれに出て欲しいと言っている。過去に何度か演奏自体を観てはいるが、それを俺が代わりに披露して欲しいと。

「……………いや、普通にヤだよ」

『町内の皆でやってるんですけど、その内の一人が怪我で入院しちゃってどうしても空きが出てしまうんです!』

「だからってなんで俺に……………」

『太鼓を初めてやるにしても女子にはちよつとキツイかな、と考えまして……………なら、男の人でリズム感ある方と言えば、先輩しか候補がいなかった訳で……………』

「いや、お前だって女子だろ」

『っ!?……………私は普段から慣れてるんで大丈夫ですから』

「そういうもんか。そういえば、他にも大人の人達がいるんやない?」

『それが……………当日は店の準備に追われるらしくて、誰も時間が取れないみたいで……………』

「はあ……………分かった。日程とかの詳細は?」

電話越しに伝わる不安感。

祭りでの成功を掲げる彼女にとって、和太鼓の人員不足は甚大かつ想定外の問題であつたはず。それでも中止ではなく続行の意思を示す彼女から、祭りに対しての覚悟は見える。

しかも頼れる相手が俺しかない、と。

『ありがとうございます!!ちよつと待つててください!!』

喜ぶ声が聞こえた。

と、微かにスマホの奥から別の声が漏れてくる。

——お姉ちゃん?どうしたの?

——あこ!?何でもないから!!

——えええ。明らかに嬉しそうに叫んでたよ?

——分かった、分かった。後で話すから今はちよつと向こうに行つてくれ。

ーーむうー。

予想するに、妹かな。魔王ちゃん。

その後はしばらくした静寂があり、ようやくして、もしもし、とスマホが向こうの音を拾う。

『明後日は大丈夫ですか?』

「ああ。放課後は空いとるよ」

『なら、早速ですけど、その時に一緒に出る方達と会って貰います。その際に練習期間とか詳細も決めていくつもりでーー』

「なあ、今更で悪いんやけど」

『あ、はい』

「敬語じゃなくても良いで?」

『えっ?』

「なんかもう聴いてる方が面倒くさいし普通にタメ語でも構わんよ」

『分かりまし……分かった』

これでやりやすくなるだろう。

元々、俺は相手から敬語で話しかけられるのはあまり好きではない。

『集合場所と時間は後でメールで送るから』

「了解した」

『太鼓の件、引き受けてくれて、ありがとう。よろしく頼む』

「ごっちこそよろしく」

これを最後に俺は電話を切断。

太鼓の練習で予定がかさ張るかもしれないが、これも経験の一環として考えてみれば良い機会ではないだろうか。

そうポジティブに捉えることにして、俺は先程から放置していた作曲作業へと没頭していった。



とある体育館。

「ローということで、今回緊急参戦させて頂くことになりました。山吹蒼真です。よろしく願います」

「ここで丁寧にお辞儀。」

今日、巴に呼び出されてここに来てみれば、早速と言わんばかりに俺を紹介し出した。思わず言ってしまったが”緊急参戦”って何やねん、俺。

取り敢えずだ。現在、集まっている人達が祭りで披露する和太鼓のメンバーらしい。この人達のお陰で毎年の祭りが盛り上がっていると云っても過言ではない。ないはず。……うん、やっぱり年齢層が高いな。

「おう！よろしくな、兄ちゃん！」

「巴ちゃんの紹介なら今年の祭りも成功確実やな！」

「これは若いもんに負けやらへんなあ！」

四十、五十代（憶測）の方達が闘志を燃やした。

巴の普段からの信頼感のせいかな、俺のハードルが上がっているような気もするが当の本人は別のメンバーと会話をしている。

と、俺の視線に気付いた巴。そうそうに会話を切り上げ、こちらへと接近してきた。

「調子はどう？ いけそうか？」

「いや、まだ何もしてないんやけども」

「あ……………それもそうだな……………」

「もうボケる年か？ それとも？」

「忘れてくれ……………」

視線を反らしまくる巴。

太鼓の空きが埋まったことがそんなに嬉しいのだろうか。

「太鼓と言つても、俺がやるのはどれになるん？」

「私の隣、と言えば分かるか？」

「へえ………めつちや目立つ奴やん！」

まさか、殆ど主役というポジション。

これは思ったよりも本気で行かないと不味いことに気付く。

下手な演技ほど本番で目立つのはバンドにおいて嫌というほど味わっている。加えて、そんなことになれば巴にも迷惑をかけることになってしまう。

それだけは避けるべきだ。

「蒼真先輩なら平気だつて。期待してる」

「お前に言われてもな………」

「なあ、ちよつといいか？」

一気に不安が襲つて来た。

そんな俺を余所に太鼓メンバーの一人が話に入ってきた。高齢組が大半を占めるなかで珍しく若者の部類に入っている人、という俺の認識であった。

「お前らつてもしかして」

その人は一拍置くと——

「付き合ってたんの？」

そんなことを聞かれた。

「いや、全然。そんなことない」

二人して顔を会わせる。

台詞が一字一句被ったことに対しての文句を一つ言おうとしたが、その行動すらも一致してしまう。

気恥ずかしいので黙って、視線を戻す。

「こいつはただの後輩ですよ」

「ただの」ってのは心外だけど、まあそんな所だ」

「……………あつそう」

それを最後に踵を返してその人は帰っていった。

俺はその背中を見ながらふと気になったことを巴に問う。

「あの人は？」

「ん？ ああ。去年から入ったばつかの新入りだ。とは言っても、あたしより年上だぜ？ 噂程度だけど、浪人中らしいし」

ということとは二つ、三つ年が上だな。

「の割には、ため口だな」

「それはこのチームのルールでもあるからだな。一心同体で太鼓を演奏する上で、敬語は邪魔にしなければならないし」

「……………成る程ね」

だから、さっきの人も巴の言葉使いに対して何も口出ししないのか。

全員の協力関係が必要不可欠な太鼓演奏。それ故に、信頼を築こうと様々なルールを設けるのは何ら不思議ではない。

「まあ……………いいか」

「ん？どうした？」

「何でもない」

「なら、こつちに来てくれ。今後の予定について話す」

奴には何かがある。

とは言っても、今の俺にはこれ以上分かりようがない。探ろうにも手がかりが無さすぎる。

なので俺は大人しく巴の説明でも聞いておくことにしたのであった。

ー
1
の
2
ー
へ
続
く。

— 1 の 2 —



体育館、地下スペース。

「練習、お疲れさま」

ようやく今日の練習が終わった、と一息ついたその時に巴がやって来た。

巴の右手にはスポーツドリンクが握られている。それを巴は俺の方へ差し出した。

「ほい、これ」

「ああ、ありがと」

「どうも」

太鼓の練習も、八月に入り本番間近なので練習の量も時間も佳境に入っていた。

こうしてメンバー一員となつて判明したが、平均的に高齢な方が多いはずなのに凄く迫力のある演奏をこなす。ドラムとまた違う打楽器真髓の胸に響き渡る打音というか、なんというか。表現できん。

それに追い付くには一苦勞した。現状はだいぶマシとなつているはず。

「にしても暑いな……………」

練習があるのは日が沈んだ後。各自の用事も考慮しての集合しやすい時間帯。

夏の時期には有り難いがそれでも暑いものは暑い。特に激しい運動をすれば、夜でも発汗量は馬鹿にならないぐらい出てくる。

俺は首に巻いてたタオルで汗を拭う。

頭や顔から順に拭いていくが、背中や腹辺りまで来ると巴の視線がちよろちよろと動き出す。

「どうした？」

「あ……………」

「予備のタオル使うか？」

「いや、大丈夫。持ってきてるから」

巴は腰にあったタオルを出した。

んじゃあ、何をそんな挙動不審にしてるのだろうか。

「なら、どうしたんよ？」

「……………何でもないから」

本人はそう誤魔化す。

気になる。気になるが、巴は答えてくれそうにもない。仕方ないので、大人しく諦め

る。

「それよりもさ！蒼真先輩は祭りの時に予定つてあるのか？」

「予定？そやな……………今のところはこれぐらい。悲しい人生ですよ」

「そ、そこまでは聞いてない……………」

これ、とは太鼓演奏を指す。

生憎とそんなに交遊関係が広いわけでもなく、また舞台に出ると言っちゃってるので遠慮してなのか誰も誘ってくれない。

「なら、あたしと一緒に回らないか？」

「巴ちゃんど？」

「巴ちゃん……………!？」

「あ、巴ど？」

「な、何なんだ……………今のは……………」

不味ったか。

想像外の巴のリアクションについて即行で訂正してしまった。案外、ちゃん付けでは呼ばれなれてないのかな。

折角だ。巴の珍しい表情も見てみたいし攻めてみよう。

「んで、わざわざ誘うって事はそんなに俺と祭りを回りたいのか？」

「ウチのあこがな……蒼真先輩と行きたいって五月蠅くて」

「お、おう………」

「なんか………すまん」

「いやいや。全然構わんよ、うん」

また予想を越えた返答が。

俺の態度に巴は何を思ったのか申し訳なさげに謝ってくる。

あこ、とは巴の妹。あこもまたドラマーであり、俺の事を慕ってくれている可愛い墮

天使後輩。

「待ち合わせの時間とかはスマホで送ればいいか？」

「そうやね。そうしてくれ。今日は疲れたし、俺はさつきと帰ることにするわ」

「おう。本番頑張ろうな」

「ああ」

太鼓演奏の本番も近い。体調管理には気を付けていないとな、と俺は頭の隅において

巴の元を去ったのであった。



町内祭。当日。

「蒼真先ばああーい!!」

待ち合わせ場所に直進するのは妹のあこ。大声は人目を集めると幾度となく注意したのだが、お察しの通り効果はない。

まだ待ち合わせ時間まで少しあるのだが、彼は律儀に早く来ていたようだ。

「あこちゃん。この前のスタジオぶりやね」

「はい！それにしても先輩………浴衣なんですわね！」

「従妹に無理矢理着ろって言われてな………」

「だとしても、お似合いじゃないですか」

「ありがと。あこちゃんもその浴衣、可愛いよ」

「ありがとうございます！」

妹と仲良く話す蒼真。

その姿はまるで兄妹と言われても疑問どころか納得してしまうレベル。

「巴もいつにも増してお似合いやね」

「え？そ、そうか？」

自然な流れで彼のお褒め言葉を受けとる。

普段から言われ慣れないので、どうしても反応に照れが混じってしまう。

「あー！お姉ちゃん、照れてる〜」

「ああああ〜おとおお!!」

あこがまた余計なことを。

こころぞとばかりにアタシはあこにお灸を据える決定を下す。

いやーん、助けてー！と棒読みの叫び声を上げたあこは蒼真の背中へと隠れる。

「仲がよろしいことで」

「はい！私の自慢のお姉ちゃんです！」

「……………まあ姉妹仲は悪くはないな」

「蒼真先輩になら、お姉ちゃん盗られても良いかな。どうです？先輩？」

「お、おい！あこ!?!」

やはり口を塞がないと。

何を言い出すか、姉として不安しかない。

「あこちゃんにそれを答えるのはまだ早いかな。ほら、混雑してきたしもうそろそろ行こうや」

「はーい」

あつさりと流した蒼真。

それがなんだかアタシにとつては微妙な感覚。それもすぐに消えてしまったのでアタシは忘れることに。

「お姉ちゃーん!!行くよー!!早くー!!」

「分かったー!!」

人混みへと突撃する二人。

その背中を追いかけて、アタシは駆け出すのであった。



町内祭。本会場通り。

「にしても祭りってこんな賑やかやねんな」

俺達が歩くのは祭りで最も屋台が並ぶ通りである。恒例の焼きそばだったり林檎飴の屋台があつたり、挙げ句の果てには滅多に見ない屋台もちらほら見掛ける。

……唐揚げ、上手そうやな。

「年に一回だからな。地元の人達も相当力を入れてるらしいぞ」

「蒼真先輩、あまり来ないんですか？」

「そやね。人が多いとあんまり行きたくないから」

「ええ。それは勿体無いですよ」

「ライブはそうはいかないと思うけど」

「巴よ、分かっておらん。ライブの人混みは飛び込むもの。だがしかし！」

「お、おう……」

「こういうイベントの人混みは邪魔でしかない！そうであろう？」

「そ、そうだな……」

俺の渾身の力説も手応えなし。

分からないか。ライブでの周りとの一体感は一度味わってしまったと忘れられない。

「あつ！蒼真先輩！」

「おつと………あこちゃん。急に引つ張らんとしてくれへん？びつくりするから」

「すみませくん。でも、面白いものありましたよ！」

あことははぐれないように手を繋いでいるので彼女の動きとは無意識にある程度連動してしまう。

なので、唐突な行動にはなかなか反応が出来ない。

しかし、あこの無邪気にはしやぎ、幼さが残る姿を見ると、どうしても妹を思い出してしまう。

今日は友達と祭りを堪能すると聞いたが、迷子にならないことだけを祈っておく。

「これは………」

あこが示した屋台を見る。

「くじ引きか。おっ？」

祭りの定番と言えば、定番。

恐らくあこが見せたかったのはこの屋台の景品一覧と俺は予想した。

確かにこれはあまり並ぶ所を見ない。

「ステイック………珍しいな」

「ですよね!? あこも初めて見ました!」

そりやそうだ。需要が無さすぎる。

ドラマーにとつては必需品。でも、残念ながらドラマー以外の人が多いのがこの世界。人数全体で見れば、欲しがる人など希少種レベル。

「これ、あれだ。蒼真先輩の欲しいって言ってたやつ限定モデルだぞ」

「え? それ、マジなん?」

隣から顔を出した巴が言う。

それが事実なら、話は変わる。限定モデルだと生産は既に終了済み。なら入手手段も普通では到底不可。

運命とは時に残酷となるのか。

ちらり、と手前に置かれた紙を一見。

「ぐぬぬ……………」

三等。その結果、ステイック。

待て。三等って何や。微妙すぎるラインに置かれているという何ともない屈辱感はどうするべきなんだろう。

もう、この際だ。それは気にしないものとする。

「蒼真先輩、どうするですか?」

「待つて。考えるわ」

——くじ引き。一回、五百円。

正直、地味に痛い出費だ。つい最近に別の機材を勢いでネット注文してしまい、手持ちも寂しい中でのこれだ。バイト代もそもそもシフトをそれほどこなしてないので期待できないし、それ以前にまだ先だ。

ここで逃してしまえば、俺は生涯こいつをお目にかかれないうちかもしれない。でも、やれば当たるなんて幸運を持ち合わせている自信もない。

究極の二択を迫られていた。

「ん？電話か。誰からだ？……」

巴が動いた気配を片隅に留めつつ、俺の思考はどんどん渦に巻き込まれていく。

——とんとん、と俺の肩がつつかれる。

「巴？どした？」

「どうやら思ったよりメイン会場のスケジュールが巻いてるらしいぞ」

スマホを片耳に当てた巴がそう言う。

「おいおい……俺に今、それを言うということはやね……」

「お察しの通り、念を持って今から集合だつてさ。行くぞ」

「そんなあああ」

襟元を掴まれ、巴に連行される。

去らば、限定モデル。お前のことは未来永劫忘れない。

「お姉ちゃん、あこは？」

「あこも付いてきてくれ。蘭達も既に居るらしいから」

「はい」

きらり、と舞った滴。

それが地面へと届くことはきつとないだろう。そいつは儼く空へと昇っていくだけだ。

「巴さん？自分で歩けるから引つ張らんとしてくれへん？」

「あつ……………それはすまん」

「なら、お姉ちゃんと蒼真先輩、手を繋いだら？そしたら全力で走れるよ！」

「あこ!？」

「え？あこ、変なこと言った？」

「ぐっ……………」

「お姉ちゃん、しないの？なら、あこは蒼真先輩と繋ぐ♪やった！」

「——はっ!?!今はどっちでも良いから！ほら、二人とも急ぐぞ！」

「はあーい」

「あいさー」

姉妹仲は良好で大変よろしいです。

— 3 の 3 — へ 続 く。

—1の3—

◇◇◇

祭り、メイン会場。

「緊張してんの？」

特設ステージ裏のとある一角で俺は巴を見つけた。巴は着物姿から一変、演奏用の法被を身に纏っていた。

今、この場に入るのとは和太鼓メンバーと祭りの運営に走るスタッフのみ。

「蒼真先輩……：……：そうかもしれない」

「そか。巴は案外、本番前は緊張するタイプやったんか」

「バンドではあれだ。アタシ以上に緊張する子が居るんで見ててホツとしているというか」

「よくある」

「蒼真先輩は平気そうに見えるけど」

「まあね。俺は本番前になると逆にワクワクが抑えきれなくなんのよ」

つい色んな妄想をしてしまうのだ。

「ズルくない？それ」

「俺の特性だ。諦めろとしか言えない」

「分かってるけど……………」

巴は立ち上がる。肩をほぐしたいのか片腕をぐるぐる回し始めた。

「お？蒼真先輩のお陰で少し緊張が解けた……………」

「マジか？なら、良かった」

と、ぴったりのタイミングで俺の耳にステージにいる司会者の声がスピーカーを通して反響してきた。

——では、次に参ります!!

「皆さん、準備をお願いします！」

スタッフの一人が大声で呼び掛ける。

いよいよ次の番が和太鼓メンバーによる迫力満点の演奏。

全員が予定通りにステージ裏の段差近くに並ぶ。巴が先頭を切り、その後ろに俺が居て、後列に他のメンバーも連なる。

列に並び、何となく後ろを振り向いた俺とあの度々話題に上がる若者の目があった。

おっと。すぐに視線を逸られた。

「蒼真先輩、頑張っているよう」

「ああ」

——本番、存分に楽しんで行こう。

◇◇◇

和太鼓演奏。本番。

「せいやつ!!」

——奴の第一印象は特にない。

ただ和太鼓メンバーに欠員が出てしまい、その補充として、宇田川から代役を任命され連れてこられたのがあの男。

”山吹蒼真”。高校二年生。

オレからは年下である。ぶつちやけ太鼓する上で年齢はどうでも良いけど。

どうやらドラムはしているみたいだが、和太鼓の経験はあまり無いそうさ。初めての練習を見ても確かにバチを持つあいっは恐る恐るな感じで太鼓の練習をしていた。

——正直、オレは奴を舐めていた。

どんなに頑張ろうとどうせ代役止まり。演奏をこなす上で下手に目立たなければ、何でも良かった。奴には次の機会がないから無難なレベルで満足するだろうかと思っていた。

でも、現実とは違っていた。

オレが直にこれを痛感したのは今だ。こうして本番を迎えて、奴の斜め後ろで叩いているオレですら感じているぐらい。きっと奴の前から観ている客はそれ以上だ

——奴の出すオーラを。

和太鼓が上手い？ 答えは否。

良くて、中の上。ドラムをやってるお陰でリズム感のセンスは抜群であるが和太鼓奏者独特の腕の動きや太鼓の音出しは流石に再現するに至っていない。

とは言え、これはあくまでアマチュア、プロ視線からの場合であり、素人からは未知の領域。なので観客には細かい違いなど分からないだろう。

となれば、和太鼓を同時に数人演奏開始すれば観る方の視線は誰に注目しようかと迷い、自然と右往左往するのが普通。でも、オレが客側をちらり視線を向けても誰とも目

が合わない。

それもそうだ。全員の視線を独占しているのはセンターを確立している奴と宇田川のダブル締太鼓なのだから。

——ドンドンドンドンドン。

シンクロした打音はまるで鼓膜を突き進み、心臓へと直接震動させる錯覚を覚える。まさに太鼓の真の迫力はこれだ。

宇田川がこのレベルまで達しているのはまだ分かる。あいつもそれなりに努力して今の地位へと立っているのだから。

でも、奴は絶対に違う。練習も期間は一ヶ月ぐらい。それも初心者スタート。オレとの練習時間は雲泥の差だ。

——なら、どうして？

答えはすぐに出た。

きつと奴は世間体では「天才」の一種だと扱われる。楽器の天才ではない。何でも出来るタイプの天才でもない。

——「魅せる」天才だ。

特に優れているのは「音」。人を魅了する音の出し方を奴は無意識に実行している。ただ演奏が上手いだけではきつと奴の演奏とはまた違った物になる。それぐらい、明確

な違いがオレには見て感じ取れた。

誰も真似が出来ないその奴だけの持つ技量に観客はひたすら奴の動きの隅々まで見ているようになっているのがその証拠。

ただ、奴の才能を羨ましいなんてオレは思えなかった。あんな危険で賭けに等しい代物、オレごときの凡才が扱える訳がない。

「ふう………」

どうにか曲が終わり、一呼吸。

夕暮れに近い時間帯とは言え、炎天下の昼間の影響で体感気温はとても高い。

オレも既に全身汗びっしょりなのだ。前の二人は相当の熱を全身に浴びていることだろう。

——次の曲の合図が出た。

バチを構える。これがラスト。

演奏が始まる直前、奴の背中を無意識にオレは見てしまう。遠目から見ても髪の毛がびしょびしょであった。

オレはまだ奴の真髄を知らない。だからなのか、現段階で既に魅せる才能の頭角を出しているが、恐ろしいことにそれさえも氷山の一角にさえ思えてくる程に奴の背中はずかしいと感じた。

——あいつ、本当に高校生かよ。

曲が披露される度、増える拍手。

歩く足を止めて、視線をステージへと向ける者がステージ上のオレから段々と目立つようになる。

これら全てが奴と巴の成せる業であるのなら妬みを越えて尊敬の意を示したいぐら
いだ。

——ドドン！……………。

楽器の演奏なんて本人からすればあつという間だ。勿論、楽器の括りには太鼓も含ま
れる。

「ありがとうございます!!」

センターの二人が代表して一礼。

これまでにない沢山の拍手喝采が二人に送られた。中には相当感動したのか席から
立ち上がり拍手する者さえ見掛ける。

兎に角、オレは思った。

——山吹蒼真。奴は将来、化け物になると。

◆◆◆
本番、終了後。

「巴……………お疲れ」

汗びっしょりになり、タオルを首にかけながらも俺は会場のスタッフから支給されたスポーツドリンクを片手に巴の元へと向かう。

巴は和太鼓演奏でくたくたに体力を消費したらしく、ベンチに腰を下ろしていた。

「ああ……………ありがとうございませす」

少し頭を下げ、巴はドリンクを受け取る。

キャップを開けたそれをイッキ飲みの勢いで巴はどんどん飲み干していく。

「あんまりいきなり飲み過ぎると逆に体に悪いんやぞ」

「蒼真先輩……………随分と余裕ですね」

「そんなことあない。俺だつて立つてられるのもやつとやし」

実際にやつてみて分かるが、和太鼓演奏は体力の消費が半端ない。ごつそりと体力を奪い取られたかのようなようだ。

「てか、敬語に戻つてゐるぞ?」

「もう本番は終わりましたから。先輩にタメ口は恐れ多いです」

「気にせんでええのに」

本人のこだわりなら仕方ない。

「それで、初演奏はどうでした?」

「そやね。バンドの時と同じでこう………巴と何処かで繋がって一緒に太鼓を叩いたみたいで楽しかったな」

今となるとその繋がる感覚は思い出せない。

でも、確かにあの時の俺は隣にいた巴の動きを見なくても理解していた。太鼓の音を通じて彼女の魂が伝わってきたのかもしれないし俺の単なる勘違いの可能性だってある。

拳を握りしめ、じつと見つめてると巴はふと言った。

「確かにアタシも蒼真先輩と繋がった気がします」

そして、彼女は軽く笑った。

その満足そうな彼女の笑顔を俺は初めて見た。

可愛いや綺麗とはまた違う、その笑顔に俺は一瞬とは言え見惚れてしまった。

「巴は普段から笑ってる方がいいな」

「えっ!?!それはどういう……」

「ん?聞こえた?今の忘れてくれ」

「いやいや、ぼっちし聞こえましたけど……」

あー知らん顔。

「ちよつと良いか」

声をかけられそちらへ向く。

そこにはかつての練習終わりで俺と巴の関係を聞いてきた年上の若者がいた。

「演奏、良かった」

「えっ?あ……どうも」

「また機会があればやろう」

それだけ、と彼は背中を向けて去った。

俺は訳が分からずに、出来たのは彼の背中をじつと見つめているだけ。ともかく褒められたのだけは理解できた。

「なんや?」

「あんなこと言う人だとは……………」

巴にもお初にかかる光景だったらしい。

と、ここでズボンのポケットが軽く震える。スマホに連絡が来た知らせだ。

「巴」

「どうかしました？」

「妹が呼んでるから俺もう行くわな」

「妹が……………仕方ないですね。お疲れ様です。代役とは言え、蒼真先輩と一緒に出来て楽しかったです。ありがとうございました」

「俺こそ良い経験になったよ。んじや、またライブハウスとかで会えたら良いな。あこちゃんにもよろしく言っといてくれ」

巴とその場で別れ、俺は指定された場所へと向かうことにした。

—— 祭りはまだまだ続く。

巴編—1—『和太鼓』
終

— 2の1 — 『対決色』*

◇◇◇

CIRCLE。練習スタジオ。

「な!? 蘭、それは本当か!？」

—— ”Aftergrow”。

それがアタシの属するバンド名。幼馴染で結成されたそれはアタシにとって居心地のよい場所でもあった。

そして、現在。バンドの練習も終わり、一段落。気持ちも落ち着くはずなのにアタシは蘭からの言葉に耳を疑っていた。

「ほんと。今度、対バンするから」

「蘭にしては急な話だね」

「うん。まさか蘭ちゃんからそんな話が出るなんて」

「因みにだ、蘭」

「ん?」

「……………どのバンドと?」

「アークラ」

「アークラ!?」

蘭がメンバー全員に事後報告でライブ要件を持ってきた事も問題だが、それ以上に確かめるべき言葉がアタシの鼓膜を通過した。

—— ”アークラ”。

此処等 一帯を活動拠点としているバンドマンが共通して共演するのに覚悟がいるバンドはどれ? と聞かれると揃ってその名が候補に上がるとされるバンド。

彼等の演奏に自身の姿を重ね、比べてしまえば堪らず多くの人がつい彼等の演奏の完成度の前にナイーブになってしまうからだ。

そして、彼等が出たオーディションは全て我が物になっている。負け知らずの最強バンドと噂が立つ、と言えばある程度は想像がつくだろう。

アタシとつぐみが揃って驚いていた。

「蘭ちゃん、それは本当なの!?!」

「つぐみ?」

「はっ!!……………わ、忘れてね?」

紅潮させた頬を隠すつぐみ。

まさかとは思うが、つぐみはアークラとの共演を嬉しく思っている側なのだろうか。

アタシは正直……乗り気ではない。

「アークラと正々堂々勝負するから」

「それっていつもの対バンみたいなもの？」

「ひまりの言う通り、大半はそう。だけど、最後に観に来てくれた人にどのバンドが良かったか投票して貰って、票の多いバンドが勝ちっていう所がいつもと違う」

「おお。ガチガチのガチだね」

「結構本気で勝負するんだ。ちよつと私、ワクワクしてきたかも！」

ひまりのテンションが上昇。

対バンは一般的に同じライブで順番に演奏を披露することを指す。ところが蘭が言うにはそこに投票制を導入することのこと。

つまり、どちらのバンドが良かったのか数字としてくつきりと勝敗が提示されるという意味になる。

アークラは四人で構成されるバンド。

全員が男子と言うこともあり、全体的に会場一体を激しく盛り上げるライブが主体。その点では一般的なボーイズバンドとほぼ変わりがない。

ただアークラはここから別次元のスタイルへ移行していくのだ。アタシはついこの前に合同ライブで間近にそれを目撃したから分かる。

——あれはヤバイ、と。

「蘭……………本当に勝てると思ってるのか？」

「巴？どうしたの？普段の巴よりだいぶ弱気だけど……………」

「確かに今のアタシは弱気かもしれない。ひまり、前のアークラのライブは観たか？」

「合同ライブの時？その時は私達の出番が次だったから見れずじまいだけど」

「巴ちゃん。ここに居る皆、ひまりちゃんと同じ感じだと思うけど……………」

つぐみの質問にアタシを除く四人は頷く。

合同ライブではアークラの次の出番に控えたアタシ達。本番に向けて準備があるので前の出番のバンドの演奏はあまり意識しないことが多い。

ただ、アタシはアークラの序盤だけライブを観ていた。

「蒼真先輩だけでもあのレベルなんだよ……………くつ。四人全員が合わさったとなれば……………あああ!!」

「ともちんが壊れた〜!」

「巴ちゃん、何を観たんだろ……………」

「さ、さあ?」

思い出すだけでも鳥肌が立つ。

ともかく現段階のアタシ達の実力ではアークラに勝つなど到底不可能とだけは分か

る。下手をすれば、手足も全く出ない無惨な結果に陥ることだって。

「でも、らーん。何で急にアークラさんと対バンすることになったの〜?」

「それは向こうが悪い」

「え?」

「アタシ達の音楽を馬鹿にしてきたから。つい頭に来て、ライブで見せてやるって言ったらこうなった」

「要するにアークラの誰かと喧嘩しちゃって、その決着を付けよう?」

「……………そう」

——動機があまりにも不憫だ。

蘭はプライドが高い。特に音楽に関しては人一倍高く、何か少しでも汚されると即座に反発するぐらい。

記憶に新しいのだと Roseelia のボーカリスト、湊さんと衝突して口喧嘩をしていた。周りのメンバーは冷や汗だらけの中で。

歳上だろうが、歳下だろうが誰とも構わず蘭は自らのプライドの元に行動する。

「正直、不安だらけだ……………」

「いつも通りのアタシ達ならいける」

「そうだよ! 巴ちゃん、頑張ろうね!」

「ワクワク〜」

「よし、この調子でどんどん行くよ！えいえいおー！」

「……………」

唐突に静けさが到来。

ぐすつ、と鼻を嚼る音がやけに響く。

「……………分かってたもんね!!」

◇◇◇

電話中。

『——って話が出まして、蒼真先輩の方はどんな感じですか？』

巴からの電話。

何事かと思えば、対バンライブでの打ち合わせだそう。手っ取り早く連絡を取れるのが俺しか居なかったみたい。

巴の話すこの企画イベントは随分と短い準備期間で本番を迎える。と言うのも、これをやる動機が対バン相手のボーカル・蘭ちゃんがアークラに対してバチバチの火花を散らしたのが原因だと一昨日訊いたからだ。

「こっちはいつも通りやねんけどなあ……………」

基本的にライブや練習のスケジュール管理はベースの光が担っている。先程も光からライブ決定の連絡が某アプリで伝わって来た。

A f t e r g r o w と対バン形式でライブをすると。会場はアークラの拠点であるライブハウスだそう。

『いつも通り……………アークラはよく投票でバンド対決とかやってるんですか?』

「やるね。数回に一回って頻度やけどね」

『因みにこれまでの戦歴は……………』

「あんまし覚えてへんな……………あ〜一回負けたのは覚えてるんやけど……………うーん」

『で、ですよね……………』

なんか巴に納得された。

勝負に其処まで拘る性格ではない俺。勝ちだろうが、負けだろうがその瞬間が心の底から楽しければ、十分勝ち組だろう。

にしても、先程から巴の消極的に捉えられる態度が如何せん気になって仕方がない。

「巴はあんまり乗り気ではない？」

『普通のライブならまだしも今回は勝敗がくつきりと出ますから……蘭が特に心配です。』

「なるほど」

巴のバンドのボーカルちゃんか。

巴とその子は昔からの幼馴染なのでお互いの事は嫌と言う程、分かりきっているはず。それでもなお巴がこうしてボーカルちゃんではなく、俺に心配事を明かしたのはきつとボーカルちゃんは巴の助言のみでは今更止まらない信念の持ち主を示唆しているのではないかと予想される。

ここで俺は溜め息をひとつ。

生憎、どのバンドでもメンバー周りを見るのが多い人種の大半はドラマード。曲の基本軸を司り、自然と他の楽器にも意識が向く。

逆にボーカルは暴走してしまうイメージが俺の中である。勿論、良い意味で。

ぱっと思いつくのは、我らのボーカルでもある藍斗にポピパの香澄。そして災厄の異

端倪、ハロハピのころ。

——結構………いるね。

「ドラマーは黙って見守っておけばいいさ」

『そうですかね?』

「俺達は一番後ろで気楽に叩くだけで十分やろう。巴もそのボーカルちゃんが心配だろうけど、悪いようにはならないから。俺が保証する」

『………はい。分かりました』

「なら、よろしい」

『でも、具体的には何を?』

「待てよ。今、考えっから」

『分かりました』

さつきよりも随分と辛辣な返事だ。

目標はあれだ。アフロのボーカルちゃんのプライドを折らないようにしつつ——

——何やったっけ?

「え? 巴が心配なのはそのボーカルちゃんが勝ち負けでずたぼろになってしまう可能性があるってこと?」

『いや、それはないです』

「じゃあ、何が不安なん？」

『…………アタシ、何で迷っていたんですかね？』

「知らねー」

要はいつも通りで良い。

『あ、蘭がアークラのボーカルに馬鹿にされて怒って対バンになったから、収集が着くかどうかだけは不安です』

「藍斗に馬鹿にされた？……………ん？」

『蒼真先輩？どうされました？』

対バンライブの切っ掛けを俺は知らない。

てつきり、主催の誰かがアフロを誘ったとばかり思っていたが、事態は予想外の方向へ走っているみたいだ。

藍斗がボーカルちゃんを罵倒した、と言葉を鵜呑みするとそんな解釈になるが多分ちがう。きつと何処かで発生した勘違いが原因だ。藍斗は肝心な時に言葉足らずな性格をしているので、それもまた今回の件を悪い方へ助長する手助けになってしまったのだろう。

「巴、そのやる切っ掛けになった話を詳しく」

『あ、はい』

——ひとまず、あいつは事情聴取決定だ。

——2の2——へ続く

— 2 の 2 —



楽屋。

「んで、藍斗」

時は飛び、ライブ当日。

ライブ会場へと現場入りした俺達は楽屋で各自リハーサルに向けた準備をしていた。
対バン相手のアフロは現在、リハーサルの真つ最中である。

「おー。なにやー?」

「お前、また何かやらかしたやろ?」

「……………マジで?なんかしたのか?俺」

「心当たりはない……………」

気苦労が絶えないとはまさにこれ。

打ち合わせはベースの光が担当しており、こいつの事情の後始末は正直どうでもよい。ただ、相手が相手だけに互いの思いを不明瞭に流すのは少し不味い。

「向こうのメンバーから聞いたけど、お前、ボーカルに喧嘩みたいなの売ったらしいね」

「……………いつ?」

「少なくともこのライブをやるって決まる直前にはその話をしたんやない?」

「あれか?でも、あいつとはただ単に歌が上手いなって話しただけやぞ?」

「どんな風に言ったか覚えとる?」

「確かなあ……………」 お前の声は鋭く刺さって心苦しくなる” って言った気がしたな……………お?違うか?」

「藍斗、それさ」

「おう」

「悪口にしか聞こえねーぞ」

「マジか!」

やっぱり、そうだ。

藍斗の言葉足らずのややこしい表現にきつと蘭は解釈を間違えてしまい、結果的にこの対バンライブが企画されてしまった。

藍斗が言いたいのは多分こう。

「俺やったら……………声が特徴的に伸びていてちゃんと芯もすっかりしてる。同じボーカルとしては羨ましく感じてしまう……………ってニュアンスだと思ってるがどう?」

「おうおう、まさにそんな感じ……………って、まさか!?アフロのボーカルちゃんは蒼真の

言った通りに思っていないのか!？」

「誰がいきなりそんな風に解釈すんねん!!俺や光ならまだしも、まだ仲が良くない奴等には無理」

「そうなのか……………」

「兎も角、リハーサルが終わったらちちゃんと謝ってこい」

「分かった」

ふう。これ以後はライブだけに集中できるぞ。

リハーサル中の巴に後で確認してもらえるようにスマホで連絡を残しておき、俺はライブ前の精神統一に取り掛かるのであった。



” Square Road ”。楽屋。

「蘭〜？大丈夫〜？」

ステージ衣装に着替えたアタシ達。

いつもとは一味違う空気感に気持ちちが飲まれそうになりつつ、ライブに向けて精神統一をしていた。

モカが部屋の隅にいた蘭の元へ寄る。

「大丈夫」

「そうかい、そうかい」

淡白な返しにモカは何故かおぼちゃん口調。

マイペースな彼女に緊張という概念はないらしい。正直、羨ましい限りだ。

会話に参加しようとひまりが来た。

「にしても、蘭」

「何？ひまり」

モカがニヤニヤと笑みを浮かべる。

「さっきの何をすれば良いのか分からない蘭、可愛かったよ!!」

「……………うるさい」

「あー照れてるー」

「うるさい、二人とも」

ひまりの台詞は数分前を差す。

リハーサルを終えて、楽屋に戻ろうとしたアタシ達を待ち構えていたのはアークラのボーカル、藍斗さんだった。

蘭が警戒心ありありで睨み付けるもんだから、つぐみとアタシでどうにか落ち着かせる。

と、藍斗さんは一步蘭の目の前で来ると、アタシ達の予想の範疇を越えた行動に出た。

——土下座をしたのだ。

華麗、と思った。

あまりにも自然な動作について食い入るようにその動作を見てしまった。あのレベルは今後の人生で見れるかどうかさえ分からない。

これにはあの蘭も困惑の表情を出していた。ひまりが言っているのはこの時の蘭だ。

「でも、蘭ちゃんの勘違いで良かったよ」

「納得行かない」

「でも、蘭、藍斗さんはずっとこんな感じらしいから諦めた方が早いぞ。ほら」

藍斗さんから事情を説明され、蘭が顔を真っ赤にした場面あのシーンは終わる。

楽屋に戻った今でも、冷静になった蘭には性格が邪魔をしてなのかまだ怒りは収まっていない。

アタシはスマホの画面を見せた。

「ともちーん、これは？」

「蒼真先輩から」

「えーと……蒼真先輩も苦労してるんだね……」

画面を覗き込むひまりとモカ。

先程届いた蒼真先輩からのメッセージがそこに表示されている。

内容は簡潔に纏めると、藍斗さんがややこしい言動で迷惑をかけてしまった。すまない。ライブは存分に楽しんでいこうつと言った感じだ。

初めは興味津々と眺めていた二人だが、段々と別の方向に興味が移る。

「にしても、巴、蒼真先輩とよく連絡取り合ってるの？」

「まあ……程ほどに？」

「まさか、トモちんが……!!」

「な!? そんなに驚くことでもないだろ!!」

二人にはアタシが蒼真先輩と連絡を取り合っているのが意外と思われたらしい。遠慮がちに蚊帳の外から顔を出してきたのはつぐであった。

「皆、何の話をしてるの?」

「つぐさん……………これですよ、これ」

悪い商売人の如く、つぐの懐へ潜るモカ。

今日のモカはいつにもまして色んなキャラが飛び出してくる。

「え!? 巴ちゃんが!」

「モカ?」

「へへへ」

「はあ……………つぐ、モカに騙されないで。まだ決まった訳ではないから」

「そうなの!」

「蘭、そのフォローもあんまり意味ない気がするよ……………?」

賑やかになる楽屋。

普段通りの光景に戻り、アタシはほっとしていた。嫌な胸騒ぎも杞憂に終わりそうで良かった。

良かったはずだった。

——この時のアタシ達はまだ知らない。

「After growの皆さん、準備お願いしまーす!!」

——スタッフから声がかかり、ステージへと向かうアタシ達にまさかあんな試練が待ち受けていたなんて。



本番。

「……………ありがとうございました」

曲が終わり、一言。

だけど、ステージへと返ってきたのはパチパチと鳴る疎らな拍手のみ。

——蘭……………。

ドラムに囲まれた巴はボーカルとして信頼を一番に寄せる背中を見つめていた。普段なら逞しいと思えるその背中も今は淋しく見える。

観客からも一切声がなく、巴を含めたメンバー全員が展開の行方を黙って見守ってしまふ。お陰で静寂な空間が出来上がってしまった。

この雰囲気になった原因は単純明快。

序盤は順調そのものだった。此処のライブハウスではガールズバンド自体が珍しく、観客の盛り上がりも中々の掴み具合いの中でライブがどつと進んだ。

問題は3曲目”Scarlet Sky”の途中。

二番のサビに突入した瞬間に、ベースのひまりに異変が起きた。

——ベースの音がまったく出なくなったのだ。

故障か、もしくはアンプとの接続が悪くなったのか。はつきりとした原因は分からない。ライブで経験したのは初めての異常事態であった。

当事者である焦ったひまりはパニックに身を任せて、思わずやってしまった。音量を下げずにシールドを引っこ抜いてしまったのだ。

この行動がどう影響するかは一目瞭然。アンプから繋いでいたシールドを音量等を

元に戻さずに抜くと、耳が痛くなる大音量のノイズが発生する。

それはバンドの音を遙かに凌駕した。

そして、背後から襲ってきたそのノイズに他のメンバーも驚いてしまう。

完全に演奏が止まってしまった。

『アクシデント発生!!』

待機していたスタッフが数名対応に走る。

まさかのトラブル。不安からどよめきも聞こえてくる。

不幸中の幸いなのか、再びアンプに繋ぎ直したベースはまた息を吹き返すことに成功した。

『ひーちゃん、どうしたの〜?』

ここでモカがMCを開始した。

誰からの合図でもなく、本人の意思でこの時、モカはマイクに近づいたのだと思う。

モカのマイペースを存分に活かしたMCはこの場ではとてもありがたかった。軽くやらかしたひまりを弄りつつも、モカは場を繋いでいく。

——やがて、ライブが終了する。

途中で災難に見舞われつつも、Aftergrowはライブをどうにか全てやり遂げた。

ただ……途中で起きたハプニングに持っていかれた盛況は一気に鳴りを潜め、最後まで戻ってくることはなかった。



ステージ前。

「蒼真先輩………」

巴はステージの下から見上げる蒼真へと近寄った。

Aftergrowの出番は成功とは程遠い、失敗に近い形で終わってしまった。それは彼も承知の上のはず。

後手に回ったアークラは巴達の気持ちも露知らず、容赦なくライブで大いに観客を沸かせることに成功していた。

「ん？ どうした？」

「今日はすみませんでした……」

巴は頭を下げる。

トラブルで沢山の人達に迷惑をかけてしまった。ライブ会場の士気をその行為で多いに冷めさせてしまい、後続のアークラにも少なからず悪影響が及んでしまった。

何より同じメンバーとして、巴はあの時、何も出来なかつた。咄嗟の対処にモ力は喋りで、蘭は最後まで歌いきり、つぐみは全力で合いの手をやり遂げた。

巴だけが恐る恐るドラムを叩いた。変わったのは限られた人のみしか気づかないであらうほんの微かな音の表現力。

次のトラブルの標的が自分かもしれない。そんな予感が脳裏をよぎったせいだ。悔しさと罪悪感が巴の心を包んでいた。

故の謝罪であつた。

「何が？」

ところが彼は首をかしげた。

嘘でも冗談でもない、彼の純粋な疑問から飛び出た仕草であつたと巴は思った。

「アタシ達のライブでアクシデントがあつて……蒼真先輩達にも何かと迷惑をかけたんじゃないかと……」

「あーあれね。お前達が迷惑をかけたなんて、そんなことは無いから。確かにスタッフ達は慌てたかもしれんけど、ライブにアクシデントなんて当たり前なんやしあんな些細な失敗で気にすることは無いね」

「ですけど……」

「巴はライブの醍醐味って何やと思う?」

「醍醐味……ですか?アタシにとつてはバンドメンバー五人が一つになれる瞬間……だと思えます」

「うん、確かにそれもある。でも、俺が出す答えはちよつと違う」

蒼真はステージに目を向けた。

「俺はライブの時にしか観れない景色を観たいんだ。オーディエンスが揃つて腕を振つてくれる、俺のドラムに手拍子をノリノリで打ってくれる、とか。その場所の、その時にしか映し出せない景色を俺は楽しみにしてる」

そして――

「アクシデントもまた俺からしてみれば一興だな。昔よりはだいぶましになつたけど、俺らもトラブルなんてもんは今でもよくあるし。ルーズのギターの弦が切れまくつて

ついに口笛でメロディーを奏で始めたこともあったな。藍斗のマイクが不調で壊れて、結局マイク無しで歌いきったライブもやった。

どれも生のライブだからこそ生まれて観れた。スタジオに引き込もって練習するのもいいけど、俺はライブならではの臨場感が好きやから、ドラムを叩いて……喋りすぎたな」

「そんなこと無いです……アタシには少し難しいですけど」

「どうして？」

「今日、はつきりと痛感したんです。いざつて時に何も出来なかった自分を。今、振り替えると、後悔や反省ばかりで……アタシにドラマーは向いてないとさえ思うように……」

アクシデント発生時。巴は何もしていない。否、出来なかった。

あの時、演奏が止まった時、観客の目が一挙に全身を巡るように感じとれるようになり、思わず背筋がぶるりと震えた。

恐怖とさえ思えるあの空間に巴は怖じ気づいてしまい、気付けば時間はあつという間に過ぎていった。

——無力。お前は無力だ。

脳裏を過る言葉。幼馴染の集う場所として結成された A f t e r g r o w のドラ

マーとして、本当に居ても良いのだろうか、なんてさえ邪な考えもポツリ、ポツリと。
「そんなもんやろ」

彼はそう言い放つ。

「俺と光は経験が特殊やから参考にならんけど、トラブルに初めから冷静に対処出来る奴はほんの少数だ」

巴は思った。彼に励まされてばかりだと。

いや、この彼の甘えに漬け込もうとしている自分がいることに気付いた。

「それに無理して巴が頑張る必要もないぞ」

「え?」

「今日みたいなのがまた起きたとしても、得意な奴に任せればいいやん。モカとかちよ
うど得意そうやし任せてみてもノリノリでこなすぞ、あいつ。まあ端から見れば、無責
任かも知れんけど、巴には巴だけしか出来ない役目もちゃんとする。最低限、それだけ
でも完璧にこなせば、誰も文句だけは言えないしな。なんなら、俺が言わせなくしてみ
せるぞ?」

「……………それで本当に良いんですか?」

「ああ。ドラムは楽器隊の一つ。バンドの音を支える。俺達の役目はそれだけ。後は全
力で楽しむのみに神経を費やす……………なんてね。これ、俺の持論。要するにさ、巴――

」

「はい」

そして、蒼真は優しく笑った。

巴にとつて彼の言葉は忘れられない大事な言葉として刻まれることになった。

「ちよつとぐらいの失敗で落ち込む役目なんてのは残念ながら無いんだ、ドラマーにはね」

——余談。

「因みに票数はどうなったと思う？」

「アークラが圧勝………でしようか？」

「んや。俺らが勝ったのは正解。でも——」

「え？」

「僅差での勝利だ。ここまで追い詰められたのはマジで久しぶり。うん、とつても楽しかった」

「信じられないです……………どうしてでしょうか？あんなことがあったのに……………」

「だからこそだよ巴、ライブって奴はこういうのがあるから面白いんじゃないか？」

巴編—2—『ライブ対決』 終

— 3の1 — 『遊園地』*

◇◇◇

遊園地。

「はーい!!皆さん、私の所に集まってくださいあーい!!」

休日。日曜日。

入場ゲートを抜け、駄々広い広場に俺は足を踏み入れていた。中央の噴水の前で、声を張り上げる一人の女の子を距離を置いて見守っている。

女の子——”奥沢美咲”は掛け声に反応した小さい子供達を不備がないように丁寧に数えていた。

「全員いるようですね」

「了解です!!それでは良い子の皆はお姉さん達とはぐれないようにしてくださいねー。分かりましたかー?」

人数確認を終えた彼女——”羽沢つぐみ”の問い掛けに、子供達が元気よく返事を返す。そのふんわりした光景に、他のお客も微笑ましそうに眺めている。

美咲は保護者として今回の遊園地遠足に同行してもらった。普段から小さい相手に

慣れてる様子の彼女。お陰様で俺を含めた他の保護者担当の安心感は跳ね上がる。

つぐみは実家のカフェの手伝いのお礼として、今日、この日に呼ばれている。美咲が一人では大変だと感じたのか自ら立候補して、彼女の補助に勤しんでいる。

商店街の大人達からの日頃のお礼として、子供達に遊園地のチケットを渡された時は自分があの美咲の立場になり、子供達の先頭にならなければならないのかと思わず身震いしたが二人の存在に正直ホツとしている。

「ソウ君、大丈夫そう?」

「ん。特に問題はない」

地図を確認しに行った沙綾が戻ってきた。商店街の枠組みには勿論、沙綾の実家も入るので沙綾の兄妹も向こうの賑やかな集団の中にいる。

もう片方の山吹家、つまり我が家では女子だらけだと心細いので最年長の俺が強制参加、一応商店街の一員としてカウントされている。

俺が憂鬱である一方で、妹の悠希は今日がよほど楽しみだったのか昨晩は寝れなかったらしい。真夜中に俺の寝室に忍び込んできたぐらいだ。抱き枕にされた。

と、美咲が子供達を一举に何処かへ移動させる仕草を見せる。予想通りにこちらへアイコンタクトが来たので、小さく頷き、了承の合図を返した。

「では、行きますよー!!」

ぞろぞろと子供達は移動を開始する。美咲の右手には目印のミッシェル団扇が握られているので子供達はそれを目で追うだろう。

あの様子だと暫くは大丈夫そうだ。美咲やつぐみは勿論、危険度の低い中学生組も数人はいる。流石に高校生組は別行動だが、緊急連絡は俺に来ることになっている。今の所、目立った問題はない。

高校生組。これに該当するのは俺と沙綾、つぐみ、美咲。

そして――

「買ってきましたよ。これ、お釣りです」

「おつ、すまんね」

「はい、これは沙綾の分」

「え？ 私まで？ あ、ありがと」

「先輩の奢りなんで。遠慮しなくていいぞ」

「おーい、その言い方はどうなんだ？ ……なんか癪だな」

彼女――”宇田川巴”を入れて、高校生組だ。

一応、代表として現場を離れにくい俺だったのでついさつき巴に軽く飲み物の調達を頼んだのだ。

ここだけの話。彼女は商店街の関係者ではない。が、特に太鼓演奏を披露する祭りか

ら地域の貢献度を爆上げしてきており今日、招待された経緯を持っている。

となれば、必然的に巴の妹「宇田川あこ」も来ているのだが、肝心の本人は意気揚々と美咲の後を楽しそうに追い掛けていた。

あこの後ろ姿を見つけた様子の巴。小さく溜め息をつく。

「あこ……………もう少し大人になってくれ……………」

「そう言うなら、俺の妹も似たようなもんだぞ」

「まあまあ二人とも。楽しそうみたいだし、良いんじゃない?」

「……………だな」

「おっ、俺達も置いてかれちゃうな。二人とも、さっさと行くぞ」

「はーい」

前を歩く子供達をふと眺める。

「ん?」

そして、その中でも一際目立つ存在を見つけてしまった。あこや悠希よりも本来であれば、こちらの立場に居るべき人物を。

「確か、はぐみつて……………高校生よな」

「ソウ君、それを気にしちゃうのは不味い」

高校生組。まだ、もう一人いた。

◇◇◇
遊園地、中央エリア。

「では、皆さん、言われた通りの時間までに此処に集合するようにしてください!!」
子供達に集合の目印を確認させ、その後は自由行動へと解散させる。団体で動くよ
り、各個人で楽しく過ごした方がメリットも何かと多い。

一つ役割を終えた美咲。俺の方へと歩み寄って来た。

「それでは蒼真さん、アタシは弟達と行ってきますので、ここで」
「ん、了解。ひとまず、お疲れ様」

「はい。ありがとうございます」

美咲は別行動とのこと。

この際だ。他の高校生組の様子も確認しておこう。

沙綾は美咲と同じく、紗南や純と一緒に遊園地を満喫するようだ。純が手を振ってきたので手を振って返しておく。

つぐみは小学生ぐらいの子供達に連行されていく光景を目撃した。子供でも、彼女の優しいオーラに魅了されてしまったようだ。

問題児のはぐみはもう姿がない。

残ったのは俺と――

「巴はどうすんだ?」

「アタシですか? そうですね、アタシはあこと一緒に――」

「悠希ちゃん!! 行こっ!!」

「うん、待って。だから走らないで!」

――ひゅーん。

「……………どうしましょう」

目の前を二人の妹が走り去った。

「一緒に行くか? 折角来たのに、別々に回るのもおかしいだろうし」

「ですね。最初はどこに行きますか？」

「絶叫系は行けるか？」

「全然大丈夫ですよ」

「……………そっか。いけるんか」

「え？もしかして先輩って……………」

「やってみようやないか!!」

俺、絶叫系は苦手です。

◇
◇
◇

休憩中。

「随分と時間がかかってしまった……」

二人で行動しようとしたのだが、トイレの為に蒼真と一旦離れた巴は彼の待つ場所へ早足ぎみで戻ろうとしている最中であつた。

別れた付近のベンチで休憩してゐるであろう、その姿を探す。休日なので歩いていく人多く、視界が遮られてしまう。

それでも、巴はすぐに見つけた。

「蒼真先輩ー!!」

こちらへ気付いて貰えるようにと、巴は声を張り上げて駆け寄る。その際、蒼真を遮るように居た通行人がその場を動き、巴は彼の様子がはつきりと視認出来る状態になつた。

そして、その足を止める。

『あの!!写真良いですか?!』

『ん?あー、別に良いよ』

『ありがとうございます!!ほら、撮って!!撮って!!』

『はいはい。後で私も………良いですか?』

『別々に撮るの?まあ………いいけどさ』

女子高校生達——制服を着ている——から写真をせがまれた彼が承諾し、撮影を繰り

広げる光景がそこにあった。

彼のファンだろうか。スマホの画面を眺め、黄色い声を上げる彼女達に蒼真も満更なさそうな表情。

一部始終を眺めた巴には何だか気に入らない気持ちが芽生える。

「先輩……………」

「おつ、戻ってきたか」

ようやく巴の帰還に気付く彼。

周りの女の子達も見知らぬ人の登場に戸惑いの仕草を見せる。

「あの……………」

「ごめんな、今日、この子と一緒に回ってるから」

「あつ、そうだったんですか」

「だから今日はここまでで良いかな？すまんね」

蒼真の両手を合わせた謝罪に女の子達はお互いに顔を見合わせる。

どうする？もう良いんじゃない？

彼女さんかな？だとしたら私達迷惑だよね？

漏れた会話が自然と聞こえる。

普段では聞き慣れない単語が飛び出し、むず痒い思いに身を振らせてしまった。

暫くして――

「巴?どした?」

お礼の言葉を彼に告げ、楽しそうに去っていく彼女達を見送った蒼真に巴が気付いたのは少ししてからであつた。

「い、いや!何でもないぞ!!」

「今日の巴は敬語だつたり、じゃなかつたりしてるな。よう分からん奴」

彼に怪しまれるがどうか誤魔化す。

彼女達の会話で巴は気づいてしまったのだ。今のこの状況は世間一般ではデートに分類されるのではないかと。

「そ、それよりもさっきの人達は?」

「アークラのファンやって。そんな中に特に俺推し?の子が居たらしくて、あつさりバレた」

「な、なるほど」

本人はそれで説明十分らしい。

もう少し、一緒に回る身としては何か少しでも欲しかった。具体的な案は思い付かないけど。

「んじゃ、行くか」

「わ、分かりましたー！」

ズキッ、と痛む心。

些細な変化に気付かず、巴は彼の後を追いつけていった。

◇◇◇

お化け屋敷、入り口手前。

「ここに入っちゃうんですか!?!」

偶然、合流したつぐみと共に訪れたのはこの遊園地で有名なアトラクションの一つ”

お化け屋敷”である。

つぐみと行動を共にしていた子供達は入る気満々だ。となると、つぐみも同行しない訳には行かない。

巴が再確認の質問をする。

「だとすると、つぐみ、一人で待つておくことになるけど、良いのか？」

「それは……絶対にイヤ!!!」

であるようだ。

臆病っぷりが存分に発揮されており、まだ入つてすらいなのに巴の背後に隠れる。

因みに限界まで雰囲気作りに精力を押し込んだこのお化け屋敷では最後までゴールすること自体が困難らしい。

長蛇の列に並ぶ俺達。数分ぐらゐの感覚でようやく受け付け前へと辿り着いた。

「んじゃ、入るぞ〜」

最高で三人ずつ一緒に入れる。

つぐみが引き連れた子供達も丁度三人なので、恐怖を知らない無垢な彼等は先に突入してしまった。良い経験になることだろう。

取り残されたつぐみも幸い俺と巴、残り一枠と空いてるので三人で纏めて入ることに。

係員にアトラクションの説明とスタート位置までご案内をされ、どうやら目の前のこの扉をくぐり抜けるとスタートらしい。

とつとと終わらせよう。そんな意思で進もうとした俺だが服を引っ張られ、断念する羽目に。

片方ならまだしも両側からなのだ。

「……………ちよつとお前ら？」

「どどどどどうした？」

「お願いします!!先輩っ!!」

「……………もういいや」

左腕につぐみ。右腕に巴。

がっちりと袖を掴まれ、むしろ俺は動きにくい状況に陥る。相当、二人とも入る前からこの不気味なオーラに参ってるようだ。

つぐみは分かるが……………巴よ、さっきまで平気そうにしてたやないか。

俺が一步進む。二人の掴む力が強くなる。

「痛い……………」

思わず漏れた本音。

だが、それ以上に――

「うわっ!!」

「えっ!!?何!!?何!!?」

「まだ始まってすらないぞ………」

無事にゴール出来るか不安になった。

—3の2— へ続く。

— 3の2 —

◇◇◇

お化け屋敷。内部。

「……………ひゆうどろ、って感じではないんやな」

お墓に人魂が浮かぶ。そんな和風のな装いを俺は予想していたのだが、実際の感じはというと全然違った。

これは完全に……………”病院”がモデルだ。

今も廊下らしき場所をゆっくりと歩いているが、さっきから数字三桁のナンバープレートが暗闇でも目に入る。

病室の番号かな。血だらけ、だけど。

そして、あれはコースの案内のはず。適所に設置された矢印通りに進んでいく。

「……………」

「……………」

「……………二人とも喋らんね」

入ってから二人は一向に無言を貫く。

袖を引っ張られる感覚も同時に強くなる。

静かだといつ怖い妄想をしてしまうが、それは逆に自ら難易度を上げる諸行になってしまう。二人にそんな余裕は無さそう。

さて、いざって時にどんなパニック状態になっちゃうかな。別の意味で俺が痛い目に合いませんように。

ある程度進んだが驚く仕掛けは特にならない。次に、視界に入ったそれに俺はようやく頃合いだと見て、足を止めた。

「……………どうしました？」

「いや、もうそろそろかなって……………」

「何がだ？」

つぐみの質問にそう答える。

巴の方はすぐに分かるはず。

職業病なのか、俺は普段から演出関連には目がない。ライブや曲の参考にしたいので手当たり次第、収集してしまう。

今回も無論、例外ではない。

矢印は完全に扉を指している。開ける、との指示だろう。

がちやり。

俺が製作者だとすれば、扉を開けた先で——

「きやああああああ!!」

「うわああああああ!!」

ほら、来た。這いつくばる長い髪の女。

呻き声もまさに本物。この病院で亡くなった霊って設定だろうか。

暗闇に医務室とホラー要素満載なので、流石に一瞬ビクツとしたものの、既に偽者と理解するので一度姿を捉えれば、後はもうこつちの物。

「……………」

ただ、俺には別の問題が発生した。

両脇の彼女達は完全に恐怖に支配されてしまっている。俺の腕へと身体をびっちり引っ付けて来る。

つまり、程よい膨らみもくつついて来る。

つぐみは一般的な女の子の体型なので、彼女と密着してしまった感想はありがとうの一言。だがまさか、巴もそれなりの柔らかい感触があったとは。

いかん。邪念は消す。抹消なり。

「蒼真さああん!!」

「……………!!」

ぐいぐい密着してくる。

男の性さがと苦闘が必須になってしまった俺を全力で無視のつぐみと巴。

恐怖に染まりきった人が間近にいると逆に落ち着く現象を全身で感じながらも二人を引き摺る勢いでコースを進む。

「ん？(ハハ)は？」

次に来たのは手術室のようだ。

手術台の上にはまさに今にも動き出そうな人が寝そべっている。悪趣味なことに。

「いやあああ………」

あれを視界に入れたくないつぐみは俺の腕へと顔を埋める。

巴もつぐみほどまどとは言わない。が、彼女の腕からは震えが伝わる。

「ほら」

このままではもたない。

つぐみには一旦、離れてもらう。不安そうな瞳からの視線について心打たれそうになるが我慢あるのみ。

俺は彼女の眼前に手を差し出す。

「これは………？」

「手を繋いだ方が安心するやろ？」

「そ、そうですよね……………!!」

深く納得してもらえて何より。

と油断しつつ、片手で繋ぐのかと思いきやのつくみは両手でぎゅつと俺の左手を握り締めてきた。

ひきつる俺の頬。横目で確認すれば、健気に怯える少女がそこに。

黙って受け入れるしかないようだ。

「巴はどうすんの?」

「……………だだだ、大丈夫!!」

「凄い説得力のない返事やな」

意地でも巴は首を縦に振らない。

姉としての威厳か。友達の前で普段とは違う姿を晒したくないのか。

どちらにせよ、俺には関係ない。

「ちよつと、巴さんよ。離れてくれ」

「どどど、どうして?!?!」

「扉ぐらい開けさせてくれ。右で開けたい」

「そそそ、そつか……………」

手術台の上の人形は単なるオブジェクトだった。次の場所へ移動する今でも動く気

配すら見せない。

ふと、ある考えがよぎる。

ビビりながらも結局、何も無いんかいと油断しきつた人に背後から襲う。そんな意地汚いやり方を。

勢いよく俺は振り返った。

「な、なに!？」

「……………俺の考えすぎやった。気にしないで」

「何を考えてたんだ!？」

流石にそこまではしてないか。

周りに敏感な巴は俺の咄嗟の行動にビビりまくっていた。つぐみは俺の腕にしがみついて、一部始終を見てすらいない。

今の巴には何を使ってでも驚かせそうな自信しかないぐらい隙だらけ。好奇心がそられるが、本人からの仕返しに怖いので止めておくが。

再び、病院の通路へと俺達は戻る。

矢印からの指令はもっと奥へ行けとのこと。それと隣にはギブアップ用の扉も設置されている。

あくまでこれはアトラクション。なので、途中リタイヤも勿論可能なのだ。

「どうする？もつと行く？それともここで止めとくか？」

「どうしよう………巴ちゃんは？」

判断に迷うつぐみは巴に決断を乞う。

特に巴の態度からは分かりにくいのが、多分三人の中で一番のビビりは他でもない、巴だ。

因みに俺の服の引つ張りも一番強い。あんまし関係ないか。

普通なら此処でリタイアするのも有り。

でも、どうやら巴にはそれが出来ないような理由があるみたいで——

「いや、アタシは行く」

「それは良いんやけど………大丈夫か？」

「ここに入る前にあこからメールが来たんだ。お化け屋敷、怖かったけどクリア出来たって言うメールが」

「なるほどね。途中でリタイアしてしまうと、あこちゃんに顔向け出来ないよ」

どうやら前者、姉の威厳だったらしい。

弟・妹に出来て、兄・姉が出来ない。そんな事があつてたまるかど孤軍奮闘してしまふのは兄・姉の宿命だろう。

つまり、妹のいる俺にとって、巴の抱く思いを理解できない事はないのだ。

「んじゃ、とつとと行くか。長居しても怖いだけやし。つぐみちゃんも来る?」
「……………はい」

つぐみの握る力がぎゅつとなる。

リタイアであれば、すぐに解放される。つぐみはそれ以上に独りぼっちになるのが嫌だったのだろうか。

「無理すんなよ?ちゃんと脱出する最後まで俺が側に居るから」

「ありがとうございます……………!!」

微笑んで返してくれるつぐみ。

うん、可愛いな。聖女もしくは天使だ。

「巴も。あこちゃんに負けたくないのも分かるんやけどそれ以上に我慢の限界を越えるのも不味いんやからな。無理やと思ったら即座に俺を頼れ、いいな?」

「わ、分かった……………」

釘を指すように二人に言い付ける。

やけに現実味を帯びていたような注意なのは気にしないでくれ。幼馴染からの制裁は貰いたくない。マジ勘弁。

「さてと……………」

攻略を異常なほどに警戒しながらも再開。

どうか二人を無事に出口まで送り届けたいのだが、怖すぎで有名なお化け屋敷なので多少は覚悟した方が良さげかな。

通路をゆつくりと進む。

「ん？」

背後から物音。

「あつ……………やべ」

確認する。向こうに人が立ってる。

よく見れば、あれは手術台の上にいた人形もどきではなからうか。誰も答えてくれな
いけど。

不気味なのが、片手に持つ注射器。

ぼたり、と未知の液体がその先端から溢れてる。

正直、全力で引いてる。

「来ないで……………!!」

「無理無理無理……………!!」

神に願うつぐみ。呪文を唱える巴。

俺の心でござり彼女達を守る自信を削られた一方、化け物は長い黒髪に隠れて曝
け出し状態の片目を真っ直ぐこちらへ向けた。

そして——走ってきた。

もう一度言う。

——走ってきたああああああ!!

「まずっ!! つぐみちゃん、逃げるぞ!!」

「えっ!!? えっ!!?」

追い掛けて来た。なら、逃げるしかない。

幸運にも、案内の矢印は走りながらも目視で判断しやすい。てか、客達を走らすつもりで設計されてあるようだぞ、これ。

つぐみを握った左手で強めに引く。彼女が転ばないように力の調整は慎重に。

もう片方の姫様の様子も確かめないと。

「巴!! 行けんか!!」

「あ、足が震えて……!! 上手く走れ……!!」

「ああもう!! しゃらくせえ!!」

俺は問答無用に巴の手首を掴んだ。

「な!! 何すんだ!!」

「今は黙って?」

「……………」

「何も考えんな。黙って俺に付いてくる」

走る。走る。走る。

二人の手を引く俺に背後がどうなったか確める方法はない。ひたすら安全地帯を指して進むのみ。

息を切らしながらも二人は懸命に追い付こうとしてくれている。

時間にしてはとも長く。距離にしては二回、左に曲がったその先で俺はようやく次へ入る部屋を見つけた。

「見えた!!後、もうちよい!!」

「はあはあ……………!!」

「はあはあ……………!!」

生憎、両手は塞がっている。

となれば、強行手段を選ばざるを得ない俺は扉を豪快に蹴った。壊さない程度に加減したので勘弁してください。

これが、引き戸や手前に引くタイプだと本当にヤバかった。

ちゃんと足で扉を閉め直し、一先ず安全が保たれた現実に一息吐く。繋いでいた手もどちらも解除。床に座り込み、ばくばくした心臓を落ち着かせようと二人は試みていた。

さつき来た扉の窓を覗きながら、俺は呟く。

「体力が戻るまではここで休憩やね」

「私達、逃げ切れた……………」

「分かん。多分、あれがこのお化け屋敷のメインかもしれんし」

「つてことは……………また出てくるつて事か？」

「かもね」

あんな化け物、もう二度と御免だ。

ただ、あの女の人のメイクや動き、仕草等からして力の入れ具合がどうも半端がないように思えた。

俺の予想としては、このお化け屋敷ではあの女から逃げて隠れつつ、脱出する所までが一連のストーリーとなるのではなからうか。

兎も角、まさか強制的に走らされるとは予想外過ぎる。今後も俺の予想を上回るの前提で行動をしていかないと。

まさか、女と遭遇したあのタイミングで、また違った選択肢もあつたかもしれないが今更どうしようもない。

「ここからが本番つて訳だ」

「そんなあ……………」

「二応、安全地帯っぽいのはあるみたいやし、その都度、休める。気を楽に、つぐみちゃん」

「は………」

俺がそのように判断した根拠はあそこにあるリタイヤ専用の扉の存在が占める。まさか、こんな所まで追い掛けてくるとは思えないし、合っているだろう。

人によれば、一気に驚かせて貰える方が好きかもしれないが此処はじっくり料理をしたいタイプのお化け屋敷らしい。

「二人とも体力は戻った？」

「はい!!」

「何とか………」

じっとしてるのも時間の無駄。

立ち上がるつぐみと巴。次に進むのは部屋の奥であり、建物の構成が不明な以上、何処に繋がるのかさえ分からない。

「蒼真先輩………良いですか？」

恐る恐る、とばかりにつぐみが差し出したのは小さな女の子らしい掌。

握って欲しいらしい。

俺がその手を優しく握り返してあげると「やった………」と小さく声が漏れる。

「巴は？」

「……………」

無言で出てきたのは彼女の左手。

状況が緊迫してきた中、巴自身も恐怖に余裕がないようだ。こうやって素直に初めからしておけば良いものを。

すーはー。

深く深呼吸を一つ。いざ、参らん。

また扉か。どう開けよう。

「巴、開けてくれ」

「アタシが!？」

「俺、手が空いてないし」

「イヤだ!!」

「……………だとすると」

——ブルブルブル。首を左右に振る音。

「……………強く握らないでくれますか?二人とも」

脱出したいのは山々。

けど、本当にいけるんか、これ……………?」

—
3
の
3
—
へ
続
く。

— 3 の 3 —

◇◇◇

お化け屋敷、ゴール地点。

「……………やっと出た」

体感時間は約一時間。

実際は二十分かけて、俺達はゴールと書かれた扉を開けた。

振り返ると俺の予想と一致したらしく、驚き要素はあの化け女のみ。ポイントを一点に集中した珍しいタイプのお化け屋敷だった。

故に遭遇する度、マジで恐怖。背筋が凍りつくなど五回目ぐらいから数えてない。

俺でさえリタイアしたいと思うぐらいだ。巴やつぐみこ二人はよく最後まで乗り切ったと讚えたい。

無駄に凝る製作者の思惑通りに嵌まりに嵌まった二人の様子はというと——

「お〜い？ 終わったぞ〜？」

「……………イヤイヤイヤ」

——*いんいんいんいんいんいん*。

巴は俺の手を離さない。

つぐみは俺の肩にがつつりしがみついて顔を埋めたまま制止。

ソイヤ、とたまに巴から聞こえる。

半分、瀕死に浸かつてるような状態ですね。

「正気に戻……………れ!!」

「はっ!?! ゴールしたのか!?!」

「えっ?……………あつ、ホントだ」

ようやく日常へ生還した。

巴とつぐみは辺りをキョロキョロ。勿論、子供達の喧騒が響き渡る遊園地の景色が映るだけ。

今はそれだけで安心する。

「にしても、マジで凄かったんやけど……………このお化け屋——」

「そそそ蒼真君!!」

「ん?」

一瞬だけ、ぴくつとしたつぐみ。

肩から離れた彼女が焦ったように俺を呼んだ。

「その話は止めましょう!! 今後、未来永劫どれだけ地獄の尋問されようとも、止めましょ

う!!」

思い出したくない気持ちだ。凄

「分かった。うん、分かった」

「巴ちゃんもそれで良い!？」

「あ、ああ。良いけどさ………つぐみ?」

巴も引いてしまつとる。

「取り敢えず、これからお昼にしませんか!!丁度良い時間なので!!」

「そう………やな。巴もそれで良い?」

「はい」

つぐみの血相変えた提案。

これは暫くお化け屋敷の恐怖から忘れられなさそうな彼女に俺は密かに無事を祈る。

つぐみの連れの子供達を回収しつつ、俺達一行は食事スペースへと向かった。

ここから——後日に判明した話。

巴があことの世間話でその話題が出たのが切っ掛け。

どうやらお化け屋敷の道のりには幾つか選択肢が用意されており、挑戦者は自由に選べるスタイルを採用している。

ここまではまだ良い。

道中、それっぽい所も何度か確認した。

だが、驚いたことにあこと悠希コンビはあれを余裕でクリアした。不思議に思った巴が尋ねたらしい。あの女の人は出てきたのかと。

……出てきていないそうだ。

あこと悠希が体験したのは、ゾンビメイクした人が普通にばつと影から驚かしてきたぐらい。

もしかすると、だ。俺と巴、つぐみの三人は恐怖のレベルが最上級の道は無意識に選択してしまったかもしれない。

………なんでやねん。



ある行列の前。

「あれ？巴にソウ君？」

偶然にも沙綾と再会した。

一緒にいるはずの弟と妹の姿が見当たらない。沙綾はベンチに座り、一人で退屈そうにしていた。

聞けば、どうやら、純と紗南はこの行列の先にあるアトラクションへと行ったらしい。

二人乗りなので沙綾は大人しくお留守番。

「二人もこれに乗るの？」

「ああ。此処のは世界レベルらしいし、折角来たんだから乗ってみたいと思ってな」

「巴は案外、平気なんだね——」

——ジェットコースター。

「ん？余裕だぞ？何回でも乗れるぐらいだ」

「へえー。でもね、巴、じゃない人が後ろにいるんだよね」

ニヤニヤ顔の沙綾と目が合う。

うるせえよ。まったくもって、余計なお世話だ。

んなもの、金輪際苦手だ。こん畜生。

「先輩……………苦手なのか？」

「苦手で悪うござんしたな！ちっちゃい頃に乗ったのが未だにトラウマなんやけど!?!悪いか!!」

「……………すごい豹変ぶりだ」

「巴。ソウ君、高い所は苦手だよ」

「え？そうなのか？でも、午前中は普通に乘れてた気がするが……………」

「あれは建物の中にあるタイプやったから、どうにか耐えれた」

「先輩なりの理論的な何かがある？」

「残念ながら、今回のジェットコースターは完全に外だもんね」

挑発してくる従妹が心底うざい。

「先輩、どうします？」

「そんなに乗りたくないか……………？」

「はい」

「即答……………」

巴の真つ直ぐな瞳が今は辛い。

滅多にない本人たつての希望なのにどうしてこうなる。

よし——最終手段、決行。

「さーちゃん」

「なくに〜かなあ？」

「……………勝ち誇つた目がうざい」

「悪口を言う人のお願いは聞きませんよ〜」

「好き勝手言いよんな……………今度、ステイックでも何でも奢つたるから」

「うーん、考えとくね。それで？」

「俺と代わって？」

悪いな。無理なもんは無理なのだ。

「私は良いけど……………巴はいいの？」

「え？なんでアタシに聞くんだ？」

「だって、巴、ソウ君と一緒に乗ってたんじゃないの？」

「なっ……………!!」

「あれ？違つた？」

数歩後ずさつた巴。

俺と一緒に乗りたいと指摘されてのその反応。

まるで拒否反応。ちょっとショック。

男と二人きりで乗るのは流石にどっちもキツいか。

真つ赤になつた頬の巴が反論。

「い、いや!!アタシは一人より誰かと一緒の方が楽しいってだけで……………!!」

「そっか……………そっかあゝ」

「めっちゃ納得してるやん」

他にも何か悟つた目をする沙綾。

普段から察しが良すぎる従妹は今回も感知センサーが好調に機能したらしい。

「んじや、はい。荷物はちゃんと見といてね。私は巴と行つてくるから」

「了解、了解」

「純と紗南が戻ってきててもちゃんと居ること。私達が戻るまで此処から動くの禁止」

「そこまで言わなくてもめちゃんとおるつての」

「ソウ君、すぐどっかに行くから」

沙綾が立ち上がり、俺がそこに座る。

「巴!行こ!」

「沙綾……………?目が怖いぞ……………」

「うくん?気のせいじゃない?あ、でも、どちらかっていうと楽しみになつてる」

「な、なんで……………?」

「一言で言うなら、巴関連のせい……………だよ?」

「……………」

同い年。ドラマー同士。

会話を花を咲かせる程になった二人は仲良く列へ向かった。

巴の顔が青ざめていくように見えたのは気のせいだと思いたい。



観覧車。

「もう夕方か……………」

静かに揺れる乗りカゴ。

ぐるりと廻る観覧車。時計で例えるなら十時の位置に俺と巴は居た。

眺める景色は儂き物。

海際にある遊園地なので膨大な海面がいっぱいに広がっている。太陽は沈みかけており、夕日が窓ガラスを突き刺していた。

「大丈夫なんですか？」

「……………何が？」

あまりにも唐突だ。

巴の質問の意図が読めない。たまらず聞き返してしまった。

「高い所は苦手ですよね？」

「正確には高い所から一気に下る感覚が苦手なだけ。観覧車みたいにのんびりとしたのは平気」

「にしては席のど真ん中に座ってますが」

「……………揺れるやん？」

「頂上に来たみたいですね」

「何故、このタイミングで言うねん」

俺の両手は座席に。

「てか、ジェットコースターはどうやったん？」

「急に話題を変えましたね。楽しかったです」

「へえー……乗ろうとは思わんけど」

「苦手な人は遠慮しておくのがベストなくらい、凄かったですよ」

「そっか……そう言えば、待ち時間にさーちゃんとは何喋ってたん？結構、待ったから時間はあつたやろ？」

「えっ……」

地雷を踏んでしまったのか。

巴の様子がこの質問を軸にぎこちなくなる。

「……………ドラムの話ですよ!!最近のお気に入りフレーズとか機材とか、ばっかり!!」

「さーちゃんが俺の悪口とか言ってたなかった？」

「い、言ってますんよ？むしろ……………」

「むしろ？」

「何でもないです!!」

「ちよっ!!揺れるって!!」

「あ、すみません」

やっぱり恐怖心は捨てきれない。

巴の態度も気になりつつ、揺れる乗りカゴにそんな余裕はない。

雑談は続いていく。

彼女と共通する話題は案外多い。

ドラマーやバンドだったり。和太鼓の話も少しは分かるようになった。

やがて、話題は遊園地の感想へと――

「今日は久しぶりに遊んだな……………」

「ですね。アタシだと普段と違うメンバーなので新鮮な感じがありました」

「それって、”Aftergrow”の？」

「はい。蒼真先輩は知ってますか？Aftergrowの名前の由来を」

「いや、知らんな」

「”夕焼け”……………です。学校の屋上でメンバー五人と一緒に見た夕焼けがアタシ達の変わらない日常の証なんです」

赤く燃えたぎる光。

移り行く空の元に写し出された幻想の炎は彼女達の何かを燃やした。

「良い由来やね……………変わらない日常、か。巴達はそれを大事にしていきたいって訳ね」

「はい。特に蘭は……………蘭は変えたくないから、変わりました。自分に何が足りないの

か、ちゃんと考えて、実行して、結果を出して。見ていただけのアタシ達もまた蘭の背中に追い付こうと必死になり初めて……………今の After grow が成り立っていくんです。最近、ようやく気付いたばかりの話ですけど……………つて、ややこしいですね」「んなことないよ。ただ、巴がそうありたいのであるんなら、俺は真逆の意見やなー」「え?」

「俺が今のあいつらとバンドをした理由は……………日常を変えたかったんだと思う。その頃はもう平凡な日常に飽き飽きしてた。時期が時期だけに精神面もだいぶやられてたから……………いや」

俺は首を横に振った。

「全てを忘れたかったんのもかもしれない。音楽に溺れて、ロックに酔って、全てを投げ出したい思いが心の何処かであったから俺はバンドを始めたんだと思う」

「……………不純な動機ですね」

「まあ俺にも色々事情つてのがあるんだよ。てか、もう着くね」

外を見れば、地上が見えた。

どうやら観覧車も終わりが近いみたいだ。

やがて、スタッフの人が乗りカゴの扉を開けた。

指示に従って降りる。通路を進み、遊園地の広場へと移動した。

スマホの画面で時刻を確認する。

「もうこんな時間か」

美咲の指定した時間まで僅か。

代表者の俺が遅刻するのはちよいと不味いかもしれない。

「先輩？ 行きますよ〜？」

「あ、じゃー」

前に行く巴に呼ばれた。

俺は再び歩き出したのであった。

— 4の1 — 『本音魂』



羽沢珈琲店。

「……………で、何でこうなった」

誰々に向けて、ではない。ただ呟く。

それでもしないと今の状況に脳内整理が追い付かない。

「巴が悪い」

「そうだよ！巴がここ最近悩んでるのは皆気付いてたけど、まさかその中身が恋ばなだなんて……………!!」

「ともちん、乙女だね〜」

そして、拾われた。

一を放つと十返ってくる我が幼馴染達が次々と指摘してくる。

その内容がとてもシビアな為、無闇に反論出来ずじまいな巴がいた。

「そ、それで!!今は何待ちだ?」

「巴の白状待ちに決まってるじゃん!!」

「え？……そうなんだ」

会話の路線変更から、さらに変更。

ひまりによる華麗なカウンターが巴にヒットする。一方で、蘭はようやく今日の目的を知った。

「はい、皆の飲み物お持ちしましたよー」

「おうありがとう〜つぐ〜」

「どういたしまして、モカちゃん」

店番中のつぐみ。

氷でキンキンに冷えた飲み物をテーブルに置いた。

「つぐ、まだなのか？」

「うーん？もう来てもおかしくない時間だけど……遅れてるのかな？」

意外かもしれないが、今日の首謀者は彼女。

招集もかけたのもつぐみであり、尚且つその中身は未だに伏せられたままである。

巴だけでなく蘭もそれに該当した。

「何の話？」

「まだ教えられないかな。あ、でも、巴ちゃんだけじゃなくて、蘭ちゃんも今日は参考になると思うよ」

「余計、謎になったな」

あくまで自分の口からは言わないつぐみ。

モ力は飲み物をストローで少しづつ飲んでるし、ひまりはニコニコ笑顔なので触れるとめんどくさい。

——チリーン。

「あつ、来た!!」

店の扉が開く。

そちらに視線を向けた巴の視界には入店したらしき人物が一名。

「ごめんね、いきなり無理言っちゃって……………」

「気にしないでください、ミスつぐみ。可愛らしい女の子のお願い……………僕が誠心誠意果たすのもまた必然なのですから」

「あはは……………」

金髪の少年。

つぐみと気楽に話している。羽沢珈琲店の常連客なのだろうか。

ナンパ紛いな台詞を吐いた彼に蘭の視線が鋭くなる。他のメンバーは全員、意識が彼へ向けられており、唯一の巴だけが席の配置上、それに気付いてしまう。

と、此処まで冷静に観察出来る巴。彼を顔見知り程度に承知していたからだ。

一段落ついたのでか。つぐみは彼をアフロのいる席まで案内してきた。

「皆、紹介するね。」アークラの”ギターをしている”ルーズ”さんだよ」

「よろしく！Aftergrowの皆さん!!あ、敬語は固いので無しの方で!!」



羽沢珈琲店。

「それで。二人とも、ボクから聞きたい事はミスつぐみからもう教えてもらってるから。出来る限り、簡潔に話すね」

”吉宮ルーズ”。

蒼真と同じバンドのギタリスト。基本的にライブではMCや観客の盛り上がり誘導を担当する。

「聞きたい事？」

「つぐみ……………何を聞いたんだ？」

身に覚えがない蘭と巴。

その二人に揃って目をつけられたつぐみはびくつと反応しながらも答える。

「えっと……………蒼真さんの事とか……………」

「はあ!？」

「それに折角だから作詞の秘訣とかも……………」

「なるほど。だからアタシも」

「ご、ごめんね、勝手に喋っちゃって……………巴ちゃん、蘭ちゃん……………」

皆の力になりたい。それだけ。

巴は最近、そわそわした様子でいる頻度が増えている。今のところ、練習やバンドに影響はないものの、密かにつぐみは心配していた。

そして、蘭もまた悩みを抱えるタイプの子。歌詞関連でアフロメンバーとのいざこざも過去にある。なので、少しでも彼女の作詞の手助けが出来ればという思いがあつ

た。

許可なく行動に移すのに抵抗が無かったのは嘘。それでも、直接言ったなら二人は頑なに拒むはず。

幼馴染としての付き合いが一番長い。

「言ってしまったのならもう仕方ない……………なあ蘭？」

「うん」

「二人とも……………!!ありがとう……………!!」

つぐみの善意を無下には出来ない。

何より、チャンス而易々と手放す程に落ちぶれてはいないつもりでもある。

「さて……………何から話そうかな」

「だとするなら、質問は大丈夫か？」

「好都合だね。どうぞ」

「この前に蒼真先輩が言っていた。バンドを始めたのは全てを忘れたいから……………つて。その意図をアタシは知りたい」

巴の質問にルーズは意外そうな表情を見せる。

「随分と信頼されてるんだね。蒼真自身からその話をするとは相当レアなぐらい、滅多にないよ。少なくともバンドメンバー以外で該当する人物をボクは聞いたことないか

な」

「蒼真君は巴ちゃんに心を許しているってこと?」

「ううん。流石にそこまでではないかな、ミスつぐみ」

「え?」

「さっきの質問の返事にもなるけど、蒼真は過去に辛い出来事を経験している。ボクと出会う前の話だから詳細はあまり知らないけど。」

「これが全ての要因。蒼真はそのせいで他人から自分の心奥深くに入り込まれるのを拒否するようになった。でも今では、ボクを含めたメンバーにはちらほら許してくれるまでには回復したんだけどね」

「そんな感じじゃないんだけど」

「普通の人は気付きすらしらないよ。下手をすれば、長年付き合ひのある友人ですら前の蒼真と今の蒼真、そこに違和感を抱くことなく付き合ってるかもしれない。巧妙というか、隙というか。そういうのを蒼真は全然、一切曝け出さないんだ。うーん………曖昧過ぎてごめんね。分かるかな?」

「あつ………」

「巴?心当たりあるの?」

巴は静かに頷いた。

「初めてドラムを叩く先輩を見た時と直接会った時の印象が全然違ったように感じて……もしかしたら」

「それはあるかもね。具体的にはどんな感じ?」

「ドラムを叩く先輩は全部を楽しむように演奏していて……打ち上げで見た先輩は一步距離を置くように振る舞っていたような……」

「す、凄いね……巴ちゃん。私には全く……」

同じドラマーだからだろうか。

素人目からドラムを見ようと技術の差違を見分ける力はない。経験者でないと未知となる世界がある。

一打に込める思いは数知れず。

同じ世界線に希望を抱く住民だからこそ巴には見えてしまった。

「実はドラム以外にも蒼真の真意を知れる方法は……あるにはあるんだ」

「それは何ですか?」

「……歌詞だよ」

「そうか。アタシ達は蘭が作詞してるけど、アークラは蒼真先輩が作詞担当……」

「うん。作詞は人の心を謙虚に映し出す鏡でもあるから。ただ……蒼真の場合だとちよつと面倒で、解釈が複雑というか……」

蘭が作詞する場合。

彼女は己が感じたこと、守りたい思いや伝えたい気持ちを素直に歌詞へと込めるタイプだ。

これは無難とも取れる一般的な方法。

「私、一回アークラの曲をちゃんと歌詞カード見ながら聴いてみた事あるんだけど………何となくルーズさんの言いたい事、分かる気がする………ちよつと聴いただけだと、全然理解出来なかった………」

「蘭はあるのか？」

「ない。他の人の作詞は興味あるけど、今後の作詞に影響されそうで無意識に避けてたかも」

「その点は大丈夫。蒼真のやり方は誰にも参考にも出来ないから。勿論、君も」

「それはそれで腹立つ」

蘭のプライドに火がついた。

「蒼真の込めた歌詞の思い。それは――」

◇◇◇
一方、その頃。

「ねえモカ〜」

「な〜に〜?」

「アタシ達、蚊帳の外じゃない?」

「モカちゃんは今新作ケーキが食べられて大変満足してます〜」

「えっ!? 何それ!? アタシも食べたい!!」

「全部食べちゃいました〜」

「そんなああああ!!」

— 4
の
2 —
へ
続
く。

—4の2—



羽沢珈琲店。

「それは一つの物語として完結しているんだ」

ルーズはきつぱりと告げた。

曲において、作る側が最も伝えたい思いを込めるのは必然的に歌詞となる。

それは言葉だからこそ相手に通じる唯一無二の手段であるからだ。歌詞を紡いだ声は真つ直ぐ聴く者の心へ届けられる。

蘭もまた歌詞への思い入れは強い。

いつも通りの日常で描いた当たり前の気持ちやふとした悩み。見えてそうで見えな部分もちゃんと正面から言葉にする。

故に正面突破の王道とも言える音楽性が生まれ、さらに五人の演奏がそこに加わることで融合の過程を経て、”Aftergrow”の良さが誕生するのである。

「物語？ストーリー？」

「うん。一曲の歌詞が一つの短編小説になつてつて言えば良いのかな」

「た、確かに……言われてみればそんな風に見えるかも……」
「つぐみ？それは？」

「えっ？あつ、歌詞カードだよ。何か参考になるものがあると良いかなって昨日準備しておいたんだけど……」

「どの曲かな？ミスつぐみ、見ても良いかい？」

「うん。はい、どうぞ」

一つのメモをルーズが受け取る。

視線を隅々まで動かした彼はそれだけで満足したらしく、すぐにそのメモはつぐみに返却した。

「その曲も確か、一つの物語があったはず」

「つぐみ、アタシも見せてもらっていいか？」

「……アタシも」

「なら、テーブルの上に置いておくね」

テーブル中央に置かれたメモ。

メモに記載された文字の数々を巴と蘭は読み進めていくがその表情は曇りがちになりつつある。

分かりにくい。否、巧妙に錯乱させていると言った方が正しい。

「基本的に歌詞の解釈に正解という定義はないよ？ 蒼真本人も人によつて見えてくる物が変わるように作詞してゐるって言つてたし」

「これは……………蘭には無理だな」

「余計なお世話」

「蘭ちゃんの歌詞も私、好きだよ!!」

つぐみが謎のフォロー。

「……………ありがと」

「本題に入るね。まず前提として、これから話すのは僕の単なる仮説だというのを把握しておいて欲しい。そして、聞いてもあまりいい気持ちにはならないとも」

「それって……………」

「少なくとも蒼真がこれまで書いてきた歌詞全てに通じる話なんだけど……………ハッピーエンドで終わる曲はゼロ。バッドエンドが殆どを占めるんだ」

悲しい結末。

歌においての大半は自分の心情や誰かへと向けた応援メッセージ等が占める。ごく稀に最悪な印象を裏付ける歌も存在するが、世間一般的には楽しく、ちよつぱり切ない雰囲気曲が好まれる。

蒼真はそういう曲を作るのが苦手。

自分の気持ちを素直に吐けない彼は新たに唄を物語の舞台に引き上げ、そこに第三者の主人公を確立させて代弁させるのだ。

「その曲の場合だと……人間を駒として、この世界自体を一つのゲームで楽しむ神々のストーリーがメインだね。よくある設定のように思えるけど——」

ルーズが歌詞の一つを指差す。

「——ここ。人間の自殺ですらも神様は単なるNPCの選択肢の一つとしてしか見ていない。加えて、曲の終盤にはゲーム自体に飽きたのか、世界そのものもあっさり切り捨ててしまったという神の残酷さも見てとれるかな」

「よくよく見てみると……酷い世界線ですね」

「こんなの序の口だよ。怖いのはこれが現実に起こり得そうな所にあるんだ。だからこそ、曲も曲として成り立つのだけれど……」

「どういうことですか？」

現実に起こりうる。

つまり、それは我が身に降りかかる出来事へと変貌する可能性が少なからずあるということ。

蘭は率直に尋ねる。

その蒼真の秘めた真意と自身の感じた思いを照らし合わせる為に。

「簡単に説明するね。この世界では、神様は人間を道具として扱っており、いくら使おうが神様自身は人間を単なる消耗品程度にしか見ていない……………ここまではOK?」

「はい」

「巴ちゃん、大丈夫?」

「さ、流石に分かるぞ……………」

「一人怪しいけど進めるね。さつき言ったけど、僕達にもこの考えは適応されるんだ。具体的にはそうだね……………食物とか」

「大体は理解した。でも、納得は出来ない。それとこれとは完全に話が別でしょ」
ルーズのヒントに蘭が食らい付いた。

真つ先に反応したのは他でもない巴だ。ただし、不思議そうに首を傾げている。

「……………ん?……………え?」

「巴ちゃん落ち着いて!私もあんまり分かってないから!」

「いや、つぐみこそ落ち着けよ」

はっ、としたつぐみ。

困惑して慌ててる様子は全くない巴は見事に冷静なツツコミを返した。

「納得するかどうかその人次第。蒼真はただひたすらに自分の気持ちを歌詞に込めてるだけだよ。僕に言われても、ね?」

「つ……………そう、ですね。すみません」

「蘭ちゃん……………」

蘭が押し黙った。

ここでどれだけ反論を述べようと、当事者でないルーズには無意味と化す。気持ちを冷静に落ち着かせさせた蘭も理解した。

「とまあ、ここまで歌詞作りの観点から僕なりの解釈と言うか、考えを言ってきた訳だけど……………そもそも前提として言い忘れてた事が一つ」

席を立ち上がったルーズ。

その場にいた全員の視線が集まる緊張の中、ルーズはゆっくりとその口を開く。

「僕達、アークラは恐らく君達、Aftergrow」とは真逆の精神を持ったバンドだ」

「へ？」

「いつも通り……………その言葉を柱に活動してるんでしょ？」

「は、はい……………」

「アークラは違う。むしろ、いつも通りという言葉をも嫌いするかもしれない」

「どうして……………でしょうか」

普段なら怒りの感情も芽生えたかもしれない。

だが、ルーズの険しい表情からその真意はまた別にあるかもしれないと悟った蘭は恐る恐ると質問を聞き返した。

「平凡な日常の破壊……それがバンド結成当初の目標だったんだ」

まだまだ続く。

「ただただ普通の毎日を友達とバカやって過ごすつてのも悪くは無いんだけど……でも、ふと何気無く誰も見たことない景色を求めてしまったつてのがバンド結成の切っ掛けかな」

「それは……分かるかもしれないです」

「巴?」

蘭の予想に一番遠い巴が反応した。

「それは——」

「はああーい!!ちよつとまったあ!!」

「ひまり!?!」

ひまり、唐突な乱入。

いきなりの大声にびっくりした蘭の威圧気味な視線を受けつつも、ひまりは元氣よく主張する。

「どこが、とは言わない。」

「暗い話ばかりでつままない！もつと楽しい話をしようよー！」

「ひまり……………時と場合を考えてくれ。今はそういう——」

「あつ、僕は新作のケーキ一つで」

「えっ!?か、畏まりました！すぐにお持ちしますね！」

先程までの緊張感が嘘の如く霧散。

ルーズはつぐみにオーダーを頼み、注文を受けたつぐみは意気揚々とキッチンへ行ってしまった。

新作のケーキは確か、つぐみの自信作だったので味の感想が貰えると嬉しくなったのだろうか。

「蘭も何か言ってくれ！」

「つぐみ。私もいつものをお願い」

「はーい」

「……………そんな」

味方が消えた巴。

そんな哀愁漂う背中にそつとモカが近寄り、手を置いた。

「ともちん、また今度〜」

「この私の中のモヤモヤはどうすれば良いんだ……………」

またしても、ひまりが挙手。

「折角なので、ルーズ先輩に色々聞いても良いですか!？」

「勿論さ。ガンガン来たまえ!」

「じゃあ——」

つぐみが居た席に座るひまり。

一休めにと巴は半分が減っていた飲み物を口に含んだ。

「蒼真先輩って付き合ってる人は居るんですか?」

「——つ!ごほつ!?!ひまり!?!なんて事を聞くんだ!!」

あまりの展開に喉をつまらせた。

「えく。だって気になるもん。蒼真先輩、バンドの中だと一番モテそうだし」

「そ、そうなのか……?」

「嘘っ!?!巴、知らないのっ!?!蒼真先輩って、普段はクールなのにドラムを叩くとカッコいいでしょ!?!そのギャップが堪らないって女の子、案外多いんだよ?」

「……何?巴、もしかして狙ってる?」

「いやいやいや!!なんでそうなるんだよ!?!」

話路線は徐々に恋ばなへ。

「ずっと気になってただけど、巴って蒼真先輩の事、好きなの!?!どうなの!?!」

「近づい！急にそんな事言われてもなあ……………」

「有りか無しかでは？」

死角からまさかのモカの援護射撃。

「あ、有り……………なのか？悪い人では無いし……………」

「モカ！これは！」

「え〜と。これは事件性ありですな」

「確保！」

問いに問い詰められた結果。

巴がどういう解答をしたのか、後はご想像にお任せしたい。

◇◇◇ 「おまけ！」

「お待たせしました。こちらが新作のケーキとなっております」

「ありがとう、ミスつぐみ。ところでさ」

「はい？」

「いつになったら、質問の答えをさせて貰えるのかな？」

「質問ですか？どんな内容の？」

「一言に纏めるなら、蒼真に恋人がいるか否かって感じ。まあ居ないんだけどね」

「そ、そうですね………!!だとしたら、ルーズさんは………」

「うん？」

「失礼しました!!」

— 4
の 2 —
『本音魂』
終

宇田川あこ編

ー1の1ー『最強のドラマ』*

◇◇◇

スタジオCIRCLE。

「妾と勝負せよ！流動の王よ！」

………なんやねん、これ。

個人練上がり。受付の隣にある小さなスペースで恒例のココアを飲んでいた時の出来事だ。

簡潔に言う。

絶賛、中二病の彼女に唐突に宣戦布告された。あ、中学生なのでぎりセーフか。

彼女の名前は、宇田川あこちゃん。

どうやらあこも練習終わりのようだ。ただ俺と違ってバンド全体での練習かな。他のメンバーはここからでは見当たらない。

「急にどした？」

「友希那さんから聞いたんです！蒼真先輩！」

「ああ……………うん？何を？」

「友希那さんが”Roselia”にドラマーとして蒼真先輩を誘ったことがあるって！」

「ああ。あつたような無かつたような……………」

うろ覚えだけどそんなこともあつた。

そもそもあの言う友希那つて子があまり名前と顔が一致してない。あ、あの銀髪の声が透き通つてる女の子かな。

自慢ではないが、ドラマーはバンドにおいて希少価値が高い。そもそもドラム人口が低い。やるにも敷居が高いという無駄に大変な楽器。

それ故に結論から言つて、あちこちから取り合いになる。うまい人ほどいくつもバンドを兼用してる、ということもざらにあるほどなのだ。

「どつちなんですか!？」

「……………本人が言つてるんならあるんちゃうんかな」

若干、放棄気味の俺。

「なら、勝負です！」

「何故そうなる」

「世界二番目のドラマー、あこが許さないからです！」

偉そうだが、敬語なので面白い。

ロビーでのやり取りなので周りに筒抜け。受付の人も優しい笑顔で見守ってる。

「二番目？一番目は？」

「お姉ちゃんだよ？」

”宇田川巴”。あこのお姉さん。

確かに彼女はなかなか良きドラマー。

因みに宇田川姉妹は二人揃ってドラマーという珍しい姉妹。加えて、仲も良好のよう
で微笑ましい限りだ。

「蒼真先輩………どうしても”Roselia”のドラマーは私しかいないってこと証
明したいんです」

つい俯いてしまうあこ。

”Roselia”とはあこの属するバンドの名前だ。本格派実力バンドとして、名
を広めている。

その内の実力者のそんな様子を間近に見て、俺は残酷に突き放す訳にはいかなかっ
た。

「分かったから。ほら、そこ座って」

向かいのイスに彼女を座らせる。

「確かに、あこちゃんのようにそんな誘いを君のボーカルちゃんから貰ったことはあるよ………多分」

「多分？」

「それがな、記憶が曖昧なんよ。確か………」

俺は昔の情景を思い出すことに。

「てか、流動の王ってなんや？」

「蒼真先輩のドラマスタイルから、そんなあだ名が付いてましたよ？」

「え？まじでか！」



ライブハウス。数カ月前。

「……………今日も疲れたな」

出番も先程終えて、現在は会場脇に設置された自動販売機へ飲み物を買いに来ている。

ライブは大盛り上がり。熱狂的過ぎて、会場内の気温が跳ね上がったような錯覚を覚えるくらいだ。

スポーツドリンクのボタンを押す。

下からそれを取りだし、メンバーの待つ楽屋へ戻ろうとするが――

「……………あの？」

銀髪の少女がこちらをガン見していた。

少し距離をおいたままの彼女は真っ直ぐ俺の目と合う。

ライブを見てくれてた子、だと判断した。向こうは俺のことをどう認識しているのだろうか。

「あなた……………名前は何？」

「ソウ……………ですけど」

この時は本名で名乗るのに抵抗があつた。

直感が警告をしていたのだ。

仕方ないので、芸名を、と言いつつ本名を短くしたただけだが、これで通わせて貰うことにする。

「ソウ……………」

「良いんですか？今日のライブ、まだ続いてますよ？」

俺達の出番は真ん中あたり。今頃はまだ後続のバンドが演奏しているはずだ。ライブ目当てで来たのなら、観ておくべきバンドがずらりと並んでいる。

ただ彼女は呆れるように首を横にふる。

「ええ、構わないわ。だって今の私の目的はあなたなのだから」

「……………ん？俺？」

一瞬、思考が止まった。

はつきりと言い遂げた少女に対して、俺は悟った。こいつは色んな意味でヤバイと。

と、彼女は眼光を鋭くする。

「ソウ。私とバンドを組みなさい」

成る程、そういうことか。

彼女は俗に言う美少女の類いに余裕で入るぐらいの美貌だ。もし、彼女と活動することになれば話題になるのも時間の問題と言える。

しかし、俺の答えはもう決めてある。

「嫌ですよ」

「……………?!……………何故かしら?」

断れる、とは予想外だったようで明らかに彼女の動揺している様子が見てとれる。

「何故って……………そもそも自分こそ誰ですか? 実力どころか名前すら分からない人とバンドをやるうとは俺は思わんし、俺は今のあいつらとで十分満足してますんで。ではまた」

「あつーちよつとー!」

俺は適当に切り上げて、会場へと戻った。関係者以外立ち入り禁止の扉をくぐったから彼女ももう諦めるはず。

雑にってしまった感も否めないが、特にこれと言った問題はないだろう。

だって、もう彼女とは会うことはないから。

———当時の俺はそう思っていた。



スタジオCIRCLE。

「——つて、感じですっかり忘れとった」

「……………蒼真先輩」

あはは、とから笑いする俺にあこちゃんの視線が突き刺さる。

うん、怒ってるな。

”宇田川あこ”という少女にとって俺のあしらってしまったあの少女は憧れの象徴でもあるみたいで。

悪いことをしたのは反省してます。

「……………その後で、友希那さんは紗夜さんとりんりんとリサさん、そして私とでバンドを組むことになったんですよね？」

「そ、そういうことになるんやろうね……………」

——バンッ！

「私、なんか許せないです！」

思わず肩がビクツとなつてしまった。

テーブルを叩いたことで、より周りからの注目を集めることにあこは気づいていない。

あこの気持ちも分からなくもない。

例えるなら、出来た恋人が自分の知らない頃に馬鹿にされたような感覚だろう。

「でも、今はあこちゃんが立派に”Roselia”のドラマーをやつてるんやろ？あのメンバーの中でちゃんと自分を主張出来るのはすごいと思うよ」

「え？そうですか？……えへへ、蒼真先輩に誉められたあゝ……」

「……あれ？」

一瞬であこの怒りが鎮火した。

「あこちゃんの頼みであれば、Roseliaのドラムやつたるけど？」

「……つ!?ダ、ダメです!!それだけは絶対っ!!」

「あの時もしもだけど俺が引き受けてたら、今頃あこちゃんは……」

「……ぐはっ!!」

今度はあこ、ダウンした。

「冗談やつて。今もやるつもりは一切ないから」

「蒼真先輩なら、やりそうで怖いです」

「うん、あこちゃんのお俺に対してのイメージが気になるな……」
考えない。考えない。

「そういえば、Roseliaの次のライブっていつ？」

「次ですか？ 確か、今月はもうないので……来月の中旬じゃないですか？」

「来月なら余裕ありそうやし、観に行こっかな」

「えっ!? ホントですか!?!」

「新曲とかやんの？」

「それは秘密です!! あ、でも、それについて蒼真先輩に、相談したい事があつたんですよ!! 思い出しました!!」

つまり、新曲あるんだな。

相変わらずさこういう所は抜けている。ある意味、それが彼女の魅力でもあるわけ。

「どうもフレーズがしつくり来ないというか……合っていない気がするので蒼真先輩にも実際に叩いて確認して欲しいなと思ひまして」

「……あつと、もうこんな時間」

これは時間かかると悟った俺。スマホで現在時刻を確認して、帰るアピールを実行する。

「蒼真先輩、逃げはダメですよ？」

「いや、俺、この後ね、用事がね」

「さつき蒼真先輩がここにいと一緒にもう今日の予定もないってまりなさんから聞いてますから！」

「……………」

ちらつと受付を見るとここの従業員でもある、まりなさんがニコニコと微笑んでいた。

くつ。まりなさんと会計してる時の雑談でついうっかり漏らしてしまったのだ。

「あこちゃんこそ練習はないんか？」

状況は不利。それを承知で反撃を試みる。

自分の逃げが無理なら、相手の追いを無理にする。そんな理論から基づく行動。

「大丈夫ですよ？今はバンド練の休憩中です」

「休憩？え？つてことは……………」

「そんなことはないですよ？まだまだ時間は——」

……………いやいやいや。

「あこ」

彼女を呼ぶのは俺ではない。

あこの背後にいる人だ。当の本人も声で誰か分かってしまっていたようで恐る恐る

ゆつくりと振り返る。

言い忘れていたか、俺が”流動の王”のように彼女にも渾名がついている。

——”孤高の歌姫”、と。

その人が今、目の前に。

「友希那さん……………」

「ええ。あこ、どうしたの？もう練習の時間よ……………それと」

彼女の視線がこちらへ。

渾名通りのその風格に堪らず背筋が伸びそうになってしまう。

ゆつくりと彼女の口元が開き、

「久しぶりね」

俺の名前を口にする。

——ソウ。

ー
1
の
2
ー
へ
続
く

— 1 の 2 —

◇◇◇

スタジオCiRCLE。休憩ルーム。

「久しぶりね、ソウ」

彼女は「湊友希那」。

現在は実力派バンドとしてメキメキと人気を上げている”Roselia”のメンバーカルとして活動している。

そんな人気絶頂の彼女も俺の事を覚えているみたいで、ぐさぐさと彼女の視線が俺の瞳に突き刺さる。

気まづいレベルではない。今すぐメタル族並みに逃げ出したい勢いだ。

「はい…………お久しぶりですね」

「あら、どうしたの？そんな改まって」

「そんなことはない…………ですよ？」

「蒼真先輩？」

あこちゃんは不思議そうにしてるがお構い無しだ。

彼女、あの時とは随分と雰囲気が違う。今は完全に一人のミュージシャンとして俺と相対している。それが嫌というほど分かってしまう。

「私の名前は、湊友希那。Roseliaのボーカルをしているわ。覚えておいてね」

「……………肝に命じておきます」

「友希那さん？急に自己紹介なんかして、どうされたんですか？」

「ええ、ちよつとね。昔のことよ」

うわあ……………完全に根に持つてるよ、この人。

まるで獲物を狩る獣の瞳を見せてくる友希那にまたしても悪寒が走る。

そして、俺はある結論に辿る。

——うん、苦手です、この人。

「でも、丁度良かったわ」

「何がですか？」

「あなた、これからあこにドラムを教えるのですよ？」

「はい！そうです！」

「待てやい」

あこちゃんの返事が良すぎる。

「違うの?」

「ええ、はい、その通りです、ya」

頷くしかないだろう。

「なら、今から私達ステージ練なの。見てもらえるかしら?」

「あ、それは良いですね! 蒼真先輩、お願いします!」

ふむ。ステージ練、とは此処のライブハウスならではの練習方法であり、実際に本番で使用するステージ上でバンド全体の音合わせをすることを指している。

スタジオとステージでは雰囲気や感覚などが百八十度一気に変わることも多々ある。本番に向けて効果的な練習でもある。とは言え、練習の為に観客は零。虚しさ感もセツトで付いてくる。

「別にそれは構わんですが、俺は何をすれば?」

「あなた個人として、またあなた達のバンドとしての実力は既に認めているわ。それも私達の目標としてる」 FUTURE WORLD FES” に十分出場出来るほどの実力を、ね」

友希那の話に上げたフェスはプロのバンドでも落選は当たり前という、出る側と観る側両方の競争率が高いフェスと思ってもらえたら良い。

ただ、彼女はこう言ってるが俺の所属するバンド内では「出れたら良いな、ま、のん

「びり頑張ろうや」的なノリであり、そこまで本気で目指してない節がある。

本人に告げる訳にはいかないので黙っておくことにする。

「勿論、ソウにとつては不利益なことは承知してるわ。それでも頼みたい事があるのよ」
 「それはあれか？俺にRoseliaの練習風景を見て、感想が欲しいということか？」
 フェスに出るにあたって、一言で表すなら友希那と俺の関係はライバル。俺がRoseliaの練習に口出するのは単にライバルの成長を促すだけであり、結果的に俺はフェス出場の目標から遠ざかるだけとなる。

友希那はそれを危惧しているのだろう。

「大体そんなところね。感想もそうだけれど、演奏において気になった所は遠慮なく指摘して欲しいの」

「あこからもお願いします！蒼真先輩」

あこちゃんは頭を下げる。友希那は視線を逸らすことなく俺を見たまま。

「分かったよ」

「ありがとうございませす!!」

「……………お願いね」

ぴよんぴよん跳ねるあこちゃんと小さく微笑む友希那。

「でも、蒼真先輩、ほんとに良いんですか？先輩、あまり他のバンドに興味ないって聞いて

たんですけど……………」

「よし、まずはそのあこちゃんの情報源を教えてください」

ついでに悪い噂も独り歩きしていると判明した。

他のバンド。勿論、気になるよ。どれくらい活躍してるんだろう、とか新曲はどんな風に仕上がってるんだろうとかチェックすることも多い。

「寧ろ、俺ら以外の人の演奏が上手くなんのは歓迎するくらい嬉しいわ」

「え? どうしてです?」

「そりゃあ……………そっちの方が対バンしてて面白いしね」

これは俺達バンドメンバー全員共通の見解。

何かしらのトップに立ち続けるのも良い。が、隣に誰もいない、そんな狭き世界で音楽をやるにはつまらなすぎるだろう。的な感じ。

「それに可愛い妹分のあこちゃんの頼みとあらば断る訳にはいかんのだよ」

「蒼真先輩……………っ!!」

「……………」

おおつと余計なことを言ってしまった。

あこちゃんの目はキラキラしてるが、友希那の目はどう見ても引いてる。

「それじゃあ早く行きましょう。皆、待ってるわ」

「あ、そうですね！蒼真先輩、行きますよ！」

「わざわざ引つ張らなくて良いんやからね、あこちゃん」

レツツ、練習タイムである。

さて……………俺、大丈夫だろうか。



スタジオC i R C L E。ステージ。

「……………どうでしょうか」

演奏が終わり、沈黙が訪れる。そこに響き渡るのはR o s e l i aギター担当”氷川

紗夜”の声。

蒼真が答えるまで、Roseliaメンバーの様子にはやはり統一感がない。そう感じたあこはステイックを胸元に抱えていた。

友希那は相変わらずの視線の強さを見せ、リサは普段通りベース本体の手入れをしている。燐子は視線をあちこち泳がせていた。

そして、紗夜は蒼真の方に、あこに背中を見せたまま微動だにしていなかった。

「……………大きく分けて二つ言いたいことがあるわ」

蒼真は立ち上がり、ステージ前へと来る。

会場後方で見えていた蒼真。それもバンド全体の音の管理を担当するPAを本来ならスタッフが担当するのだが、そのスタッフのゆきなさんが——

『あ、蒼真君、もしかしてRoseliaの練習見てくれるの？私、仕事が被ってて……………ちよつとだけお願いしていい？』

と蒼真に両手を合わせていた。

物凄く嫌そうな表情の彼。此処でのバイト経験があつたらしく、その時もPAを担当していたのこと。

「全部お願いするわ」

そんな経緯がありつつ、彼は友希那の要望通りに静かにRoseliaの練習風景見

守っていた。

あこには懸念にしていた事がある。

紗夜を含め、燐子、リサの三人は彼とは殆んど初対面に近い。特に燐子が男子と直接話すのを苦手にしており、この練習に蒼真が参加すると説得するのに一番時間がかかった。

対して、あの紗夜がすぐに納得していたのが気になったもののリサも友希那のお勧めとあつてすんなり事は進んでいた。

だが、あこは浅くだが知っている。蒼真の音楽に対する姿勢を。

以上から、これから言われるであろう彼の言葉に対してメンバーがどのような反応を示すのか。不安の種でしかなかった。

「んじゃあ、そうですね……まず、その前に敬語で話すのは止めてもいいか？ 喋りにくい」

「それもそうだね、私や紗夜、燐子は同じ年でもあるわけだし……君とは長い付き合い合いになりそう。ため口でも全然問題ないよ」

「そういうこと。俺に対しても今後、気軽に接してくれて構わんから」

「了か〜い。皆、OK？」

「えっ……あ、はい……」

「私はどちらでも構わないです」

とは言っても二人の態度が変わるのはまだまだ先の話になるだろう、と思ったりサ。メンバー内では一番お話し上手なりサがこうやってメンバーをまとめる事が多い。

「あこは〜？」

「あこはそうだね〜……………」

「あこちゃんはどこつちでもいいよ。お好きな方で」

「分かったよ！蒼真先輩！」

リサが答える前に蒼真が答える。

「友希那もそれでいい？」

「ええ」

素直に頷いた友希那。

それに少々の驚きを含みつつもリサは平常心に努める。

「それで私達の演奏はどうだった？」

改めて、リサがはつきり尋ねる。

それに対して、蒼真はすぐには答えなかった。悩んでいるのか、それともまた別の理由があつてからなのかはあこには判断がつかない。

「……………」

「りんりん?どうしたの?」

「あこちゃん……ううん、何でもない」

一方で、燐子もこの謎の空気にたまらず恐怖と錯覚してしまうほどの何かを感じ取っていた。

本日、初めましての彼、”山吹蒼真”。紗夜と友希那がドラマーとして認めるほど凄い男の子。初印象はそれほど悪いものではなく、あこちゃんと仲が良い先輩さん程度。なのに何故、こんな気持ちに……。

「先に言っとくわ。今からお前らの気に触ったことを言うから。すまん」
「え?どういうこと?」

「……ソウ、あなた何を言ってるの?」

静かに呟いた彼。

そして、燐子は感じた。次に出るであろう彼の言葉。それが波乱を呼ぶ呪文であることに。

やがて、彼ははっきりと告げる。

「Roseliaの演奏についてなんやけど、正直……」

―――絶望した。呆れた。

――1の3――へ続く

—1の3—

◇◇◇

スタジオCIRCLE。ステージ前。

「ちよっ!?何もそこまではつきり言わなくても……………」

彼の一言に時が止まった。

直ぐ様、リサが少しでも反論をしようとして試みるがそれは出来なかった。

何故か。それはリサ以外のメンバーが一斉に顔を伏せたからである。

「まだ自覚があるだけましやな」

「えっ……………皆……………」

「はあ……………やっぱり、ベースだけか」

先程の演奏はいつも通り。そう感じていたりサにとって、今の状況は予想外過ぎる展開である。

「取り合えず、一つ目。これは各パートごとに違うから順に言うわな」

後頭部に手を当てた彼が言う。

「まず、ベース。特にサビまでの入りで、もたついているのが気になる。加えて全体的に音

のバランスが悪い。次から音の強弱を意識すること」

「え？分かったけど……………」

そして、次。

「ギターさん。序盤と終盤で勢いが変わりすぎ。最後らへんで集中力切れてる感じが、あんまり良くないからそこを直すこと」

「……………はい」

「キーボード。毎回の入りが少し遅い。緊張してるんやと思うけど、それが逆に悪い意味で目立つから注意な」

「……………分かりました」

「ドラム。スネア、バスドラの叩きが弱すぎる。それとリズムキープが全然出来てないな。アウトロでゆっくりなりすぎだ」

「うん」

「そして、ボーカル。でも、ボーカル自体は専門外だからそこまで気にしなくて良いんやけど、素直な感想としてはそうやな……………覇気がない。前回のお前らのライブをちゃんと見たわけではないんやけど、それでも分かる。覇気が無さすぎる」

リサの不安な瞳が友希那に注がれる。

「まあ……………までは正直どうでもいいんやわ」

「えっと……………どういう意味かな？」

「ぶつちやけ、こんな細かい指摘は自分のバンドでも滅多にせえへんし。これほど演奏に注目したのもお久しぶりレベルやな」

「つまり、それをしてくれたのは私達“Roselia”だからって事？」

「そう。お前ら、巷では本格派の実力バンドって言われるほどやぞ？直々に本人の頼みとあらば、やらない訳にはいかんやろうし……………でも、その前にさ、一つ確認な。お前ら」

「オーバンド……………舐めてんの？」

その瞬間、リサに衝撃が走る。

一体、何が原因で彼をそこまでさせてしまったのかが分からない。何より、他のメンバー四人が今の言葉をすんなり受け止めていることが不思議で仕方がない。

「ごめん、ベースさん、名前なんやっただけ？」

「私？今井リサ」。リサって呼んでね」

「……………リサだけが合格範囲内だ。他の奴らはぎりキーボードが圏内に入るか入らんか。それ以外は論外」

黙って、唇を噛み締める友希那のその姿にリサは何も言えなかつた。

「次から二つ目に入る。ひとまず、分からん事が多すぎる。少なくとも合同ライブの時

のお前らは文句なしの最高のライブをした。でも、さっきのは今までのRoselli aとは断然大違い。観客に音楽を舐めてんのかって思われても当たり前レベルの演奏やったぞ」

今の彼は怒っている。

そう感じれている余裕があるのもリサだけかもしれない。

それほどまでに彼女達は追い詰められていた。

「何をそんなに焦ってるんの？」

友希那と紗夜がそれに反応した。

「焦ってなんていないわ」

「そうです！私達はもう十分ー」

「実力はあるってか？ほんとか？」

「……………」

黙りこんでしまう二人。

「確かに、特にお前ら二人の上手さは凄いわ。認める。生半可な努力じゃ、その上手さに追い付くのは無理やろうね。でもね、そんなもんはな、残念なことにとそこら辺探せば何処にでもおるもんなのよ」

リサもそれは知っている。

楽器の上手さだけ見れば、世間には有り余るほどの実力者がごろごろしている。その中で勝ち残る必要があるのが *Rosealia* のこれからの宿命とも言い取れる。

悪く言えば、その世界を目指そうとする人物が直ぐに辿り着いてしまう嫌な現実でもある。

「上を目指してんのなら、今のままやと全然やね。というよりか、もうその壁にぶち当たって止まってるって感じか」

「……………ええ、その通りよ。いくら練習しても私達がバンドとして前進していると思えないの」

「そりやそうでしょ。俺でさえ分かる程なんやし」

「恥を偲んでソウに頼みたいの。 *Rosealia* がその先の一步を歩むにはどうすれば良いのかを」

「だーかーらーそれが駄目やねんで」

「……………??」

理解不能とばかりの反応を示す友希那。

「ほんとに分からんの？あの姫様が？」

「むう……………」

こればかりは蒼真本人も手助けを出せない。このままでは相当な時間がかかるだろ

う。

というより、もう身近にヒントとなる存在がいるであろうに。友希那と紗夜は気付いていないようだ。

「まあいいわ。次、キーボードさんとあこちゃんね」

「は、はい……………」

「はい」

楽器の前で萎縮する燐子。

そして、あれほど真剣な顔でいるあこの表情をリサは初めて見た。

「二人の場合、演奏中にだけ、恐れを感じた。これは俺の予想やけど、自分のミスやそれによって引き起こされる何かに恐れてる気がする。さつき俺が指摘した箇所も根本的にはこれが原因やろうな」

「それは……………」

「事情を知ってる俺だからある程度納得はできるけど、ライブ本番でそんな態度が通用するとは思わないよ。そんなに自分が弾くことに恐れをなすんなら、バンドを辞退した方がよっぽどまし」

「蒼真先輩……………っ!!」

「だからって無理してやりきれ、とまでは言わん。流石に俺もそこまで鬼野郎じゃない

し、音楽の世界においてそれは邪道やからな」

燐子とあこ、そしてリサはオーディションという形で *Rosealia* に志願して、認められ、加入が決まった。

リサは友希那の幼馴染みという立場上、燐子、あことはまた違った気持ちでオーディションに望んだので二人の心情ははつきりとまでは知らない。

最後に告げた彼にあこが激しく動揺するその理由も、リサには理解できなかった。

「後は……言わなくてもええか。さて、リサさん」

「うん、何？それと、”リサ”でよろしくね」

「リサさー！ー」

「リーサー！」

「……リサ。これ以上俺がいても意味がないからもう帰るわな。大丈夫、まりなさんには帰り際に来てもらうよう言っとくから、すまんが後の事は任せても構わんか？」

「色々とやつちゃった感がプンプンするんだけど……分かった。後は任せて」

彼は静かに此処から去って行った。

パン！、と鳴り響くリサの一括。

「さて、皆！次、何の曲やろうか？」

バンド全体を見渡し、リサは思う。

——随分と踏み荒らしてくれたね、ソウ…………と。



スタジオCIRCLE。

「それでRoseliaがあんな風になっちゃってたのね。あの時は本当にびっくりしたわよ」

「…………その件についてはホント申し訳ないです、はい」

数日後、俺はまりなさんからあの日の状況説明を求められた。隠す理由もないのですんなりこと細やかに話す。

あの日を逃げるように去った俺は正直、彼女達に対して言い過ぎた感も拭い切れなく、妙な心持ちで過ごしていた。

とまあ、想像ついてしまうが、彼女達とはそれつきりまったく出会ってない。

「蒼真君、それほど気にしなくても良いと思うよ。彼女達なりにも思うところがあつたみたいで練習にもこれまで以上に精が出るわ」

「やと良いんですけどね」

まりなさんとの世間話も俺の個人練習終わりに毎回しているが、こんな俺を心配するような事を言われたのは初めてです。

「蒼真先輩！」

と、背後から元気な少女の声。

黒髪のツインテールに真っ直ぐこちらを覗る紫陽の瞳。

スティックケースを右手に持っている。

「お、久しぶりやね、あこちゃん」

「はい！一週間ぶりですね！蒼真先輩！」

満開の笑顔を見せてくれるあこ。

「あこちゃんも練習帰り？」

「そうです！あ、まりなさん、次のスタジオの予約をしたいんですけど大丈夫ですか？」

「勿論、大丈夫。ちよつと待つてね」

まりなさんはスタジオの管理を記入する用紙を取りに奥へと行ったようだ。

あこと二人きりになる。無言で待つわけにはいかないので。

「最近のドラマの調子はどう？」

「調子ですか？バッチしです！……つて言いたいんですけど……蒼真先輩に言われたことに届くにはまだまだ先の話です……はい」

「そうかあ。やつぱりあの時は正直に言い過ぎたよな……すまん」

「え?! いえいえ!! いえいえ、ですよ!! 先輩!!」

猛スピードで首を横に振るあこ。

「蒼真先輩に言われて Roselia の皆さんも練習により励むようになったんですよ! あ、今まで練習してないとかじゃなくてですね! 雰囲気が変わったというか……兎に角です!」

「……ありがと、あこちゃん」

懸命に話すあこ。

そんな彼女の姿に俺は無意識に彼女の頭に手を置いていた。

「えっ……あっ……はい……」

ゆつくりと彼女の頭を撫でる。

あこ本人はこれを大人しく受け入れている事から嫌ではないようだ。

「あこちゃんはまだまだ上手くなれるか可能性を十分に秘めてる。もしもやけど、困ったことがあったら、すぐに俺に相談してくれて構わんからな」

「……………ありがとうございます」

「こんな時間か。俺、もう行くわな」

「あつ……………」

俺は彼女の頭から手を離す。

名残惜しいような声が漏れ聞こえた気もしなくもないが触れないのが吉だ。

「んじゃあ、またね、あこちゃん」

「蒼真先輩、お疲れさまでした！」

後輩の挨拶を最後に俺はスタジオを後にした。

今回の件を通じて、俺がRoseliaにどう影響を与えたのか。今は分からずともいつかは分かるはず。

その時が来るとなれば、そうだな。ライブで魅せてくれる彼女達の本気の音楽を通じてだと良いな。



スタジオCIRCLE。受付前。

「おまたせ〜。あれ？蒼真君は？」

「蒼真先輩ならさつき帰りましたよ？」

「えー蒼真君もついでにスタジオの希望教えてほしかったのに。もう」

「どうしてです？」

「あれ？あこちゃん、知らないの？蒼真君が個人練する時間。スタッフの間ではちよつ

とした名物よ」

「い、いえ。知らないです……………」

大体、二時間、一時間が相場。それ以上だと、からだ全体に疲れが来てしまう。

でも、彼の場合はそうではなくて。

「……………六時間よ」

「ふやあい!?……………流石、蒼真先輩、凄いです……………」

「あく、あこちゃん。あのね？蒼真君含めてあのバンドは特殊過ぎるから参考にしない方が——」

「あこ！絶対に負けないです！」

「……………聞いてないわね」

宇田川あこ編——『最強のドラム』 終

— 2の1 — 『狩猟のゲーム』*



山吹家。蒼真の部屋。

「……………さて、と」

一日も終わりの時間帯。作業も一段落ついた俺は交わした約束を守るために、あるゲーム機をセットしていた。

というのも、そのゲーム機のソフトで最近人気シリーズの最新作が発売されたのだ。数々の試練や環境を生き抜き、独自の進化を遂げたモンスター達と我らプレイヤーが生死を争う戦闘を繰り広げる系のゲームと想ってくれたら良い。

今回のこのゲームの目玉は対応するゲーム機によって成せるグラフィックの良さである。鮮明に見えるゲーム画面に映る迫力満点のモンスターとの戦闘はスリル良く楽しめる。

「あ、きたきた」

ゲーム機を起動。テレビ画面に表示される。アカウントを選択しろ、との事なので自分専用のに合わせてボタンを押す。

と、グッドタイミングで画面左端に通知が届いたとテロップが出る。パーティーに招待された、とのこと。

俺は予め聞いていたのでそのパーティーに参加することにした。

『あーあーマイクテスー』

「聞こえとるよ」

『おーおー了解、感度良好』

こいつは我らのボーカル。” 秋野藍斗”。

ぶつちやけ、遊ぶ人数の埋め合わせに呼ばれたという残念な人でもある。本人にとっては知らずが仏。

後に二人ほど、このパーティーに参加する予定である。

「えっと……………」

予めフレンドのIDは聞いておいたので検索も問題なく表示される。フレンド依頼を通す。

スマホの方でも申請を送った事を知らせる合図を送り、相手方の反応があるまで待つことにする。

『蒼真〜』

「ん？なんや？」

『次のさ、練習ってあの曲もすんのか？』

「そう………やな。もうそろそろ合わせておきたいし」

『了か〜い。歌詞、覚えな………』

学祭が今月に入り、ライブが近い。もうそろそろ本格的にドラム練習に取り組まねば、と頭の片隅に保存しておく。

——大魔王あこ、がパーティーに参加しました。

お、来たか。

パーティーに三人目の来訪者が来た知らせが画面に届く。

と、ヘッドホンから可愛らしい女の子の声が聞こえてきた。

『お待ちせしました！あこ、参上です！』

『おー、いらつしやーい』

『その声は………秋野さんですね!!』

『おう。こつちも名前は聞いてるよ、よろしくな、あこちゃん。俺のことも藍斗で良いから』

『はい！今日はお願います！』

”宇田川あこ”。それが彼女の名前。

初対面の時にお互いゲーム好きと判明して、なら折角だし機会が合えば一緒にゲーム

をやろうと約束を交わしたのが切っ掛け。

その約束が今日である。

「あこちゃん、よろしくな」

『蒼真先輩!!はい!!楽しんでいきましょう!!』

姿は見えずとも喜ぶ姿が瞼の裏に映る。

あまり騒ぎすぎると近所迷惑に成りかねないので俺とかもう一人の子が軽く様子見をしておく必要があると判断した。

『後一人だな』

「そりゃな」

『りりん、もうそろそろ来ると思うのですけど……………』

——りりん、がパーティーに参加しました。

「丁度、来たね」

『遅れてすみません……………』

『んや、全然だぜ?』

『あつ……………はい……………ありがとうございます……………』

声だけの通信のはず。

それなのに俺には燐子さんが怯えて謝る光景が目には浮かんでいた。

藍斗の事を相当警戒しているようだ。あこからりりんは人見知りと窺っていたが此処までとは。

だとすれば、俺もか。仕方ないけど、徐々に燐子さんには慣れて貰う他ない。

「んじや、やるよ」

『はーい』

『はい……………』

『一狩行くぜ！』

今回はこの四人でやっていく。

「俺が招待していくから各自勝手に入ってな」

『おう』

「入ったら、取り合えず集会エリア集合で」

『了解しました』

『分かったよ！』

俺の使うテレビ画面は既にゲームの中でプレイヤーが集うエリアへと到着していた。

暫くして、あこと燐子さんが操作するキャラが現れる。どちらも装備から予想するにだいたいこのゲームをやりこなしているようだ。

『なあ蒼真』

「どした？」

『集会エリアってどう行くんだ？』

「……………」

藍斗は見ての通り。

さて、俺。藍斗。あこちゃん。燐子さん。

ゲーム好きな面子が勢揃いしたので存分に楽しみたいと思う。

『藍斗さん!!その装備、カッコいいですね!!』

『やろ〜?』

『スキルも……………良いですね……………』

そして、俺は痛感することになる。

こんなメンバーでやるゲームはひと味どころかふた味違う物へと変貌するというこ
とを。



森ステージ。

『おっ!?急に吹っ飛んだ!?』

『あ、すみませ〜ん!!』

『あこちゃん……………!!攻撃が……………!!』

『へ?いやああ!!』

『回復するヤツ置く……………攻撃当たって置けねえ!!』

『あこが引き付けるから!!あっ一気に体力持つてかれた!?え!?』

「……………」

……………悲惨だな。

俺は然り気無く、貫通弾をクエスト対象モンスターに当てて置く。順調に狩猟が進むのが本来の予定だが、周りの戦況はもうそれどころではない。

四人で狩りは初なので、折角なのでクエストクリア対象モンスターも初にしようと思見が出た。目をつけたのは、アップデートで追加されたモンスターだ。

でも、肝心のそのモンスターが弱肉強食の世界でトップに君臨するレベルの狂暴さを兼ね備えており、戦闘が始まって数分後にはご覧の有り様。

『ヤバイ!! 死ぬって!!』

『ふ、粉塵いきます………!!』

『なんで、あこぼっかり狙うのお!!』

——因みに装備は以下の通り。

ソウソウ。ヘビィボウガン。

アイトー。双剣。

大魔王あこ。チャージアックス。

りんりん。ランス。

俺がこの武器を選ぶ理由は武器専用アクションの機関銃が楽しいからである。普段はまた別の近距離武器を使用しているが、パーティーのバランスを見て遠距離一人は居るだろうと思い、これを選択している。

『尻尾、届かねえ!!』

リーチの短い双剣だからな。

『あく!! 必殺技、外しちゃった!!』

あこの武器は距離感を掴むのが特に難しい。

『……………』

りんりんちゃんは操作に全意識を集中していらっしやるからなのか、先程から無言の

まま。おつ、彼女はモンスターの顎を集中的に狙っているようだ。

そしてら俺らの対戦相手様・何とかジョーは激怒していらつしやる。口元からどす黒いオーラを吐き出しているのがその証拠。うん、怖えな。

プレス攻撃には特に注意を向けないと。もし当たりでもすれば一発でゲームオーバーなんて事もあつたりする。

「お、エリア移動したぞ」

激しい動きは燃費も自然と嵩張る。となると、エネルギー補給つまり食事をしたい為にモンスターはその場から逃走を謀る。

食事中は無防備。ハンター側からすれば、大ダメージを喰らわせるチャンス到来の瞬間でもある。

『おらああ!!』

『てやああああ!!』

—— 叫ぶ必要はないんよね。

熱中する二人はさておき、モンスターを追跡していく俺。と、急にモンスターが別のエリア中央で急停止。俺の前方にいた藍斗とあこのキャラと慌てて停止。

あいにく、逃走したのは単なるエリア移動だけで食事したい訳ではなかったようだ。

ここで戦闘再開とのことらしいが。

『プレス来ます!!』

りんりんちゃんのお檄が飛ぶ。敵のいきなりのパターンに丁度武器を構えようとしていた二人にプレスの風ぎ払いが避けれる訳もなく――

『えっ?! 無理やわ!!』

『ああ………我は不屈なり』

――アイトー、が倒れました。

――大魔王あこ、が倒れました。

報酬ゼロまで後一回、と表示された勧告。

『すまん』

『ごめんなさーい!!』

『二人とも………ど、どんまい………!!』

唐突な二人の離脱。モンスターが二人を待つてくれる優しさなんて存在しないので戦闘は俺とりんりんちゃんで続行。

実質、俺が距離を置いて戦うのでりんりんちゃんのリソク戦と見ても殆んど変わりがない。

――数秒後。

『あ、あの………蒼真さん………』

「ん？何？」

『……………ごめんなさい。私、もう無理です』

「え？」

『りんりん!!』

——りんりん、が倒れました。

——報酬がゼロとなりました。帰還します。

りんりんちゃん体力全てをロストで華麗な敗北。これが最後、クエストの失敗条件に触れてしまい、画面に失敗のテロップが大きく貼り出される。

「……………違うの行くか」

『んだな』

『あこもその方が……………』

『……………はい』

全員が悟った。

ゲームであっても、これは遊びとはまた違うの物だと。後、調子に乗りすぎて強化個体のクエストの方に行ってしまった事を。

『あつ、宝玉出た』

——追加。世界は不平等である。

—
2
の
2
—
へ
続
く。

— 2の2 —



目的、炎王龍の討伐。

『なんかこいつ観てるだけで汗かきそう』

「余計なこと言つたらんと黙つて攻撃しとけ」

藍斗のぼやきに俺の文句が跳ぶ。

先程の戦闘から一変して、今回は全員が戦闘経験のあるモンスターを選んだ。それも、古の龍と分類される種族が相手であるので油断はもつての他である。

『来ますっ………!!』

焔焔さんの注意が来た。

—— ”スーパードヴァ”。

敵の必殺技みたいな攻撃。鎧のごとく纏った火の噴煙を一気に爆発させ、全方位を攻撃するヤバイ技だ。

これに当たれば、体力はがつつり持つていかれる。回復が間に合わないと、勿論あの世行き。

『ええ!? ムリムリですつて!!』

『あーやつべーぞ!!』

あこの慌てる声がマイクから伝わる。

藍斗は藍斗で何故かボケが入るが無視。ここで味方の体力を確認すると、俺と燐燐さんは八割以上あるが、あの二人は五割を切っている。

つまり、敵に殺られる絶好の的。

ただ、敵のその必殺技を放つ直前に隙が生じる。そこに閃光玉と言うアイテムを投げて、敵の目を眩ましさえすれば、敵の大ダウンを誘える事が可能。

言わば、ピンチがチャンスとなるのだ。

前者に言った隙がまさに今。俺は閃光玉を投げようと画面下をチラ見したが、残念なことにそのアイテムを事前に使えるようにセットしていなかった。

——と、なると。

「すまん、閃光は間に合わん」

『ふわあああああ?!?!』

——大魔王あこ、が倒れました。

『おお?!? ぎり残った!!』

ガンナーの俺は無事。燐燐さんも距離を取ってまだまだ余裕そう。藍斗だけは殆ど

体力ない様子だけど、生存は生存。

唯一倒れてしまったあこ。無念である。

「燐燐さん、行きましようか」

『は、はい!!』

『オレもいるけど、ね!!』

戦力外が何言ってるんだが。

おっと、ここでモンスターがエリア移動を開始。その際、足を引きずる仕草を見せた。

これは体力が残り少しの証拠。もう一踏ん張りでハンター側の勝利が目前と迫る。

『あれ?移動しました?』

『うん。あとちよつとだよ、あこちゃん』

『えっ!?!今、装備変えてるのにく!!』

リスポーン地点のキャンプ地から目標のモンスターまでの道のりは結構遠い。古龍は討伐のみを目的と設定されるので、素材を入手する剥ぎ取りが手っ取り早い。しかし、クエストクリア後の僅かな時間のみでその剥ぎ取りをする必要がある。

キャンプ地待機のあこには時間オーバーで出来ない可能性があるのだ。

クエストクリア対象のモンスターを発見した。

「寝てるな」

『どうしまししょう?』

『ちよつと待つてください!!あこもすぐ行きますから!!』

瀕死のモンスターがお気に入りの寢床で睡眠中。体力を回復してる。

あこの必死の頼みに仕方なく俺と近くにいた熾熾はあこの到着まで待つことに。

せめてお目覚め用の巨大爆弾をモンスターの頭付近にセットして、弾のリロードを確

認して、と——

『あつ』

——ドカーン!

「藍斗が爆発させたぞ」

『なんでですか!?!』

『操作をミスって、爆弾が起動しちゃった。てへぺろ』

『……………いきます……………!!』

どうにかラストバトルが開始。

と、意気込んだは良いもののモンスターの体力は殆んど空だったようで俺のボウガンが放つ貫通弾がヒットした、その瞬間に——

——クエストクリア!!

『おっしやあああ!!』

『あああ!! やつぱりこうなるんですねー!!』

「すまんね、あこちゃん」

『あこちゃん………フアイト』

一応、報酬は別枠で貰える。

が、それだけでは剥ぎ取りを放棄する理由にはならない。折角苦勞して狩ったのに、成果として素材を剥ぎ取らないのは勿体無い。

コントローラーでキャラを動かしているので、トップスピードは固定だがあこのイヤホンから通じる声には執念が籠っていた。

『あこ、全力ダッシュします!!』

結果——間に合いませんでした。

◇ 報酬画面。

『あつ、宝玉!!』

『オレは特にないな』

「俺も特には」

『あこちゃんだけみたいかな』

『やった!!』

貴重性が一番高い素材をあこが入手したお陰であこの機嫌も良くなりつつ、俺のゲムキヤラはロビーに戻り、次の狩りに向けてアイテムの整理をしようとしていた。

『先輩〜』

「ん?。」

あこの呼び掛けに答える。

『蒼真先輩と藍斗先輩って、アークラのライブはしないんですか?』

『おー? 来月の二十日にするぐらいかあ? なあ? 蒼真』

『それって!! もしかして、あれですか!? 結構大規模なフェスじゃないですか!?!』

「あーそんなんじゃないよ。後輩が企画したライブやね」

『へ？そ、そうですか……………』

あこの言うフェス。それはRoseliaが目標としているフェスに比べ、人気がある訳ではないがそれでも出場するバンドは実力派として並々ならぬ強者が集う。

『でもさ蒼真、確か……………そのフェスから出演依頼っぽいのが来てなかったか？』

「そか？」

『え!?断っちゃったんですか!?』

「スケジュール管理とか俺はまったくしてないからな。何とも言えへんけど、来てたんなら断ったと思うよ」

『勿体無いです!!』

『あこちゃん……………!!落ち着いて……………ね?』

『りんりん……………』

もし、出演を承諾。会場でライブをすれば、知名度アップにフェスに出演した肩書きもセットで付いてくる。

あこちゃんにとって、正確にはRoseliaからしてみれば喉から手が出してしまう絶好の好機には違いない。

ただ、アークラは後輩の企画ライブを優先した。二つのライブの日程が被ってしまったので、残念ながら苦渋の選択をさせて貰ったのだ。

「今日はどうする?」

『オレ、レオちゃんの宝玉欲しい』

『ご一緒します』

『おっ! あんがと!! リンさん!!』

『っ?! は、はい………』

「あこはどうする?」

『行きますよ!!』

「んじゃあ、行くとしたらこの調査クエストになるのかな——」

——ゲームは深夜まで続いた。

あこが途中で寝落ちしてしまい、それを切っ掛けにその日はあっさり解散してしまうがそれもまた一興というやつだろう。

チャットしながらプレイと言う珍しいプレイスタイルを体験したが、なかなか楽しい物ではないかと改めて感じた一日であった。

◇◇◇

後日談。

「うくん……………」

あこは唸る。

「あこちゃん？どうしたの？」

向かいの席に座る燐子がそれに気付く。

「りんりん……………この前、先輩達とゲームした時にライブの話があったでしょ？」

「うん……………後輩さんのライブに出る話？」

「何でフェス出演を断ってまでそっちを選んだのか分からなくて……………」

「それは……………」

「何々々？何の話してるの〜？」

「リサ姉!!」

燐子の隣に居たりサが会話に参加。

リサに以前での蒼真、藍斗との一連のやり取りを簡単に説明した。

聞き終えたりサはうんうん、と頷く。

「ライブの日程が被って、アークラは規模の小さい方を選んだ……………なるほどねえ。なかなか難しい話かな……………とは言え、アタシ達にはまだ経験のない話だけど、他人事ではないし……………う〜ん」

「やっぱり、多くの人に観て貰いたい気持ちが大切かなあ……………つてあこは思います」

「あこの考えは分かるよ。ただ……………アークラはアークラでアタシ達とはまた違うモツ

トーがあるとアタシは思うんだ」

「モツトー？」

あこのそれに答えたのはリサではない。

「簡単な話よ」

「友希那さん……………」

「友希那？聞いてたの？」

「ええ。一部始終、聞かせてもらったわ」

「ここで友希那はドリンクを口にする。」

「私達”Roselia”は実力を認めざるを得ない音楽を目標としていることは確か
ね?」

「はい」

「頑張ります!!」

「片手にオレンジージュースを持つ友希那に言われても、説得力はないけどね」

「リサ、一言余計よ………対して、アークラは観客との一体感を楽しむ音楽を求めている
と私は思うわ」

「つまり?」

「演者と観客、二つの関係性を大切にする表現方法が特に私達と全然違うのよ。アークラはコール&レスポンスをメインの曲もライブで披露するぐらい、ライブでは盛り上がり
りに重心を置いてるわ。今回、フェスを辞退したのもその後輩の企画ライブとやらが
アークラにはきつと魅力的に見えたのね」

「な、なるほどです?………ふえ?」

「後は本人にでも直接聞いてちょうだい」

「はい………」

あこの頭がオーバーヒートしそうだ。

「ねえ、友希那?」

「何?」

「それにしても、よくアークラのライブ曲の傾向とか知ってたね。誰かから聞いたりでもしたの?」

「……………」

「あれ?友希那?」

友希那は頬を赤く染め、視線をそらした。

リサに指摘されて友希那はようやく気付いた。自分の失言に。

このままでは水面下で密かにアークラをライブバル意識していたとバレてしまう。特にバレても困る事態にはならないが、なんだか無性に恥ずかしくなってきた。

そう危惧した友希那は咄嗟に——

「偶然よ」

「偶然、ねえ……………」

冷や汗丸出しの返答。

誤魔化し感ぶんぶんの幼馴染みにリサはそれ以上の追及はしなかった。この道を選
択した理由は至極単純。

「な、何？」

「ううん。気にしないです？」

——面白そうだからに決まっている。

—2— 『狩猟のゲーム』 終

— 3の1 — 『疑惑のシスター』*

◇◇◇

蒼真家。蒼真の部屋。

「……………歌詞が思い付かん？」

パソコンで編曲の作業中に一本の電話で手を止めた蒼真は相手の相談にがちのトーンで聞き返してしまっていた。

蒼真にとつて、相手が相手だけに無縁となる悩みだと思っていたからだ。

『ええ。そうよ』

「……………ああ……………うん。なんかお疲れ様」

『それはお互い様よね？』

”湊友希那”。蒼真の電話相手。

”実力派ガールズバンドの第一前線を走る”Roselia”のボーカリストであり、孤高の歌姫”とさえ称される実力の持ち主。

そんな彼女が何を企んでか、蒼真に歌詞の相談を持ち掛けていた。

——ん？作詞してんの、俺って気付いてんのか？それとも誰かが言った？

先程の友希那の台詞から蒼真は自身のバンドの作詞担当は自分だと彼女に知られているのを瞬時に判断。

意図が計り知れない彼女の心意に蒼真の疑惑は尽きない。

「で、用件は？」

『言ったじゃない。新曲の歌詞を考えてるのだけれど、全然進まないって』

「…………それは俺に言う必要あんの？まずはメンバーにじゃない？」

『勿論言ったわ。その結果、あこが提案したソウに相談した方が良いつて意見で纏まったのよ』

「あこが？え？何で？」

『さあ？あこが貴方を薦めた理由は知らないわ』

あこ本人に自分が作詞をしていると蒼真が言った覚えはない。

なら、あこはどのルートからその情報源を入手したのか。真つ先に思い付くのはあこの姉かつドラマーの――

「巴のやつか……………」

『何？』

「んや、こつちの話」

アフロとの対バンライブでそんな話をした記憶がある。宇田川家長姉、巴經由であこ

は蒼真が作詞をしていると知ったのだ。

特に作詞しているのを隠している、という訳でもないので構わないのだが何とも言えない複雑な気持ちのせいで落ち着かない。

『なら、良いかしら？ 本題よ』

「すまんね。どうぞ」

『ソウは作詞はどうしてるのかしら？』

「……………あー俺のは参考にならへんと思うけど」

『どうして？』

「ちよいとやり方が複雑。一言では説明できん」

『そう……………なのね……………分かったわ』

「直接会えば、解説みたいなんは出来んことはないけど……………」

友希那の寂しそうな声。

つい反射的に蒼真が余計な一言を出してしまう。これが始まりだとは知らずに。

『行くわ』

「は？ なんやて？」

『ソウに会いに行くわ』

「おふ……………そこまで……………流石に節操詰まりすぎやないかと思いまっせ」

美少女の言葉に胸が打たれる蒼真であったが瞬時に正気を取り戻した。

『この新曲は次のライブには間に合わせたいの。インスピレーションがそこにあるのなら、じっとしていられないわ』

「そうかい……………」

短い付き合いでも分かる。ここまで来てしまえば、彼女の頼みを断るのは不可能。

逆に考えるのだ。他のバンド、ガールズバンドのトップランカーの作詞方法を見せてもらえるのなら、此方としても十分利益が見込めると。

蒼真は立て置き型のカレンダーに目を走らせる。

「予定……………次の日曜は暇だけど」

『日曜日ね。その日にソウの家に行けば良いのかしら?』

「俺の家? そうやね。家の住所はまた送るから」

『ありがとう。それじゃ、次の日曜日は楽しみにしとくわ』

———通話が終了しました。

スマホをパソコンの隣に置く。

座椅子の背もたれへ体重を乗せた蒼真は特に意味もなく天井を見上げる。

そして———気付いた。

会話の流れに誤魔化されていたが、改めて思い返すと別にこうする必要なかったこと

が一つだけ。

「姫さん、なんで俺の家に来んの？ カフェとかC i R C L Eでも行けたんじゃあ……」
時は既に遅し、である。

◇
◇
◇

蒼真の実家。

「いらっしやい」

チャイムが鳴り、玄関の扉を開けた。

フェンスの向こうに待つていたのは私服姿の友希那。彼女は相も変わらず真っ直ぐな視線を俺に向けていた。

「今日はごめんなさい。貴重な休息を頂く感じになってしまつて……………」

「それは構わんよ。慣れっこやし、気にせんでよろしいぞ」

「ふふ……………少しは気が楽になつたわ」

のんびりと会話をこなしながら、俺は家に入る上で邪魔になるフェンスをどかそうと庭先まで、歩みを進めた。

「蒼真先輩!!」

と、可愛らしい声で誰かが俺を呼ぶ。

壁でちょうど俺の死角に入つていたらしく、友希那以外に誰かがいたようだ。

「あこちゃん? あこちゃんも来たの?」

「はいっ!!」

今日も満天の元気っぷりなあこ。

真夏の天気日よりな本日なのか、あこの服装は気軽に運動しても平気そうなラフな格好。

ノースリーブなんて男の俺には無縁だ。

「友希那さんと偶然ばったり会いまして!!なんと!!蒼真先輩の家に行くつて言うじやな

いですか!!」

「……………姫さん、もしや誰にも言つてなかった?」

「ええ……………こうなるとは分かつていたから……………」

どっちにしろ事の顛末は同じであつたらしい。

バンドメンバーに伝えないにしろ、一番友希那が危惧していたあこがこうやつてバツチリ付いてきてしまつているのだから。

他のメンバー、紗夜や燐子辺りはきつと遠慮するだろう。リサは友希那が行くならつて興味本位に付いてきそう。

「あこもお邪魔して良いですか……………?」

「ん。全然いけるよ。どうぞ〜」

「やった!!」

フェンスを開けて、二人を迎える。

中学生のあこはお初の実家訪問にテンションが舞い上がり、意気揚々と駆け出して行つてしまった。

「色々……………ごめんなさい」

「なんで姫さんが謝つてんの?むしろ、あこちゃんが来てくれて、俺はちよつと安心したね。姫さんが一人で抱え込んだなら、無理にでもあこちゃんと一緒に来なかつたと思

うし」

「……………あこと会ったのは本当にたまたまよ」

「それでもやって」

Roseliaもまだまだ安泰らしい。

バンドの悩みは一人で抱え込めるほど容易い物ではないと俺が何度も痛感しているからこそ思えるこの感情。うん、大事。

「ん？あこちゃん？」

先に突撃したあこが玄関入ってすぐに停止していた。

小さく呟いていたのは呪文の言葉。多分。

「妾と同等……………否、それ以上……………」

さらに向こう側、廊下には別の少女が。

「あ、どうもです……………ん？」

あの反応は明らかに困ってる。

友希那も彼女に気付いた。つんつんと指で俺の腰をつついてくる。

「あの子は？」

「俺の妹」

「だとしたら、二人は何をしてるの？」

「知らんよ……………」

殺伐とした感じではない。

むしろ、このまま二人はどうなるだろうと邪道な考えが浮かび、見守ることに。

「貴様……………名は？」

「あなたこそ……………何ですか」

あこ。中二病モードに入ってる。

「妾は大魔王あこ!!蒼真先輩は妾の永遠の僕しもべなり!!」

「むう……………兄さんは私の兄さんです」

「兄さん？」

あこの頭上にハテナマーク。

てか、俺がいつあこの手下になったと言うのだ。友希那さん、変な視線はこちらに向けないで。

「私は、山吹悠希……………兄さんの妹です。覚えておいてくださいいね?……………魔王さん」

———これが出逢い。

ドラマーの妹、あこ。

本物の家族の妹、悠希。

山吹蒼真と関連する二人の妹が運命的な出逢いを果たしたその瞬間を偶然にも俺と友希那は目撃したのであった。

……うん、どうでもいいね。

— 3 の 2 — へ続く。

— 3の2 —

◇◇◇

リビング。

「ぐぬぬ……………!!」

これはあれだろうか。

「むぬぬ……………!!」

修羅場って言う一人の異性を多数の同性が取り合い、互いに物凄い形相になるやつだろうか。

テレビでは恋人と愛人がやり合う的な展開がお約束かと。

ただ、実際にこれと遭遇するとはあらま、びつくり。

俺の妹の悠希と友希那の訪問に引っ付いてきたあこがソファに座る俺を中間地点として、バチバチ火花を散らしているのだ。

「何故、兄さんとそんなにくつつくんですか。必要ないはずですよ」

「あこにはいつだってソウ兄が近くに欲しいんですく!!」

「なっ!?なんて破廉恥な!?私だって、黙ってそれを見過ごせる程、甘くはありません!!即

座に離れなさい!!」

「べっく、だっ!!」

「~~~~っ!!」

うん、不毛な争い。

互いに俺の腕を小さな体で抱き締めて、主張のぶつかり合いをする。至つて平凡なレベルの言葉で、時には顔で、端から見れば無様なまでに頑なに張り合う。

普段の妹なら、そこまで頑固にならないのだが今日はとても反抗的だ。宇田川あこ、という同年代の少女に何らかの面で感化されたとも言うのだろうか。

一方で肝心の友希那は――

「にゃー? あらあら………にゃーねー」

家の猫とじゃれあつてた。

名前は“響”と立派な名を持つ雌猫。おおらかな性格をしてるのか、初対面の人でもすんなりなついてしまう。

そんな響に対して、クールに接しているつもりの友希那。頬が少しずつ緩んで来ているのは気のせい。

今日の本題を忘れてなければ良いが。いや、冗談抜きで。

さてと。いい加減こちらを止めないと不味いか。

「二人とも喧嘩になるからあんまりヒートアップはすんな——」

「兄さんはどうなんですか？」

「へ？」

「私とこの人、どちらが妹として相応しいと思いますか!？」

「妾は大魔王あこだぞ!!」

「……………あこさんと」

悠希の目にふざけはない。

むしろ、真剣に質問の答えを知りたいらしく迷いなき視線を自身の兄へ向けていた。

あこもまた同じ気持ち。抱き締めた俺の腕をぎゅつと再度締め直す。

困ったのは俺だ。この時、なんて返せば、正解なんだ。教えてくれ、神様。

——ちらっ。

「ふふふ……………可愛いわ」

あれ、いつまで続くのかな。

今度は床に寝そべり、丸出しされた響の腹をそつと撫でる友希那。響は無抵抗にそれを受け入れている。

外部からの助けもないとなれば、ここは上手くやり過ぎすしかないと俺は密かに決意する。

「どちらの方が妹としては相応しい存在かと問われれば俺はこう断言する——両者、ともに今は否、だと」

「なっ!?!」

「ふあ!?!」

「そもそもだ。真の妹とは己からそれを問いただすという愚かな行為には走らんよ。常日頃から妹として振る舞い、そこに一切の隙を見せべからず。それこそが妹の真髄というべきやないかと俺は思う」

「な、成る程……………です?」

「あ、あこは……………ソウ兄の妹として相応しくない……………?」

稲妻の落ちる衝撃の如く。

あこにストレートに落下した稲妻は彼女のこれまで培った妹魂に亀裂を走らせるのには十分すぎる威力であった。

「でも、二人とも妹だとかそういうの無視してもさ、普通に女の子として可愛いし——」

「「可愛い!?!」」

「うん?……………どした?」

二人の表情が伺えない。

と、悠希がいきなりソファから立ち上がる。その頬は少し赤い。

「だとしてもです！兄さんの理想とは私達が程遠いかもしれんが、せめてどちらかがその真の妹に近いのか決めてください！」

「ええ……………」

あれ。あれ。

「そんなの、あここに決まってるから、聞くまでもないよ」

「甘いですね、こう見えても兄さんは黒髪ロングヘアーがタイプなんです」

「はっ……………!!でも、ツインテールもいけるって言ってたし!!」

「苦し紛れの言い訳にしか聞こえませんよ」

「ぐぬぬ……………!!あこだってもっと知ってるもん!!ソウ兄がこっそり好きなフレーズとかも全部!!」

「一体、何の話を……………まさか、最近になって兄さんのトレンドが変わりつつある……………!?!」

「えっ?俺の空評被害がどんどん増えるやん」

シンプルに怖い。

「このままでキリがありません。ですので、こうしましょう」

「そっか。なら、俺はここらで——」

「逃がしませんよ、兄さん」

「……………はい」

「私とあこさんで真剣勝負をします。勿論、勝負のテーマは『妹』に関して。内容は、先に兄さんに真の妹として認められた方が勝利ということ……………構いませんね?」

「受けてたつ!」

「よろしい。正々堂々、勝負です!」

ふむ。整理しよう。

兎も角、これだけは理解した。話をどうにか切り上げようとしたが、これだと完全に裏目に出ってしまった。

一人では抱えきれないと判断した俺は唯一の部外者でもある彼女を呼ぶ。

「姫さん、ちよつと」

「……………?何かしら?」

「あからさまに距離を取ってんな……………じゃなくて、ちよいとだけでも良いから手伝ってくれ」

「嫌よ。貴方が勝手に起こした問題じゃない」

「——常時、響の膝乗せを許可」

「——っ!!」

「それで手を打とう」

「そ、そう………ええ………仕方ないわね………」
ちよろいな、おい。

◇◇◇

リビング。

「では、始めます」

絨毯に降り立つ二人の妹。

仁王立ちのあこと余裕な態度の悠希。

審査員として俺と友希那がソファに座りつつ、勝負の行方を見守っていた。

因みに予め決めた協定通り、猫の響は友希那の太ももの上で丸まっている。
今回の対決、進行担当は悠希。

「まずはシンプルに兄の事をどれだけ知ってるか。兄さんにとって、より相応しい妹として比べるのであるんなら、これ冥利に尽きます」

「確かにそうかも。でも、勝負つてなるとどうするの?」

「お互いに質問をしましょう。解答が出来ないもしくは不正解であればそこで試合は終了です」

第一ラウンド。”兄の質問対決”。

兄に関しての質問を交互に繰り出す。どちらか一方が解答に不備を出せば、即座に勝敗が喫するとの事。

肝心の俺の役目はというと、質問の答えを正しいかどうかの判断役らしい。ということとは、間違いが出るまでは出番なし。友希那はただ見守るだけの監督役。

「どつちが先攻かじゃんけんだね!」

あこの提案により、先攻後攻を決める。

掛け声と同時に出したのは、あこがパーで悠希がグーであった。

つまり、あこが先攻となる。

「ふふふ………長期戦になるのも面白くなかろう、この試合。即座に決着をつけようで

はないか」

いぎ、勝負開始。

「ソウ兄が好きな撫で撫でポイントはどこ？」

「頭です」

——お、おう。

いきなり質問がマニアックでは無からうか。

確かに、記憶を思い返せば、あことの触れ合いに自然と彼女の頭を撫でている場合が多いがそういう意味合いを含んではない。

悠希も悠希で躊躇なく答えたけどもさ。妹界では共通認識で通っちゃってるのだから。

「兄さんの誕生日！」

「7月25日！ソウ兄の大好物！」

「揚げ出し豆腐！兄さんの困った癖！」

「貧乏揺すりが両足！ソウ兄の宝物！」

「初めて折れたステイック！兄さんの好きな色！」

「ブルーだよ！ソウ兄の持つてる機材ケース、大体青色！ソウ兄の——」

——すげえ。どんどん出てくるわ。

互いに敗けを許す気配はない。

眼前の敵を打ちのめす。目的は一致しているが闘志はぶつかり合い続ける。

一部始終を何気なく見ていた、そして唯一の第三者視点である友希那が唐突に俺を見つめ、ぼそつと呟く。

「ソウ……あなた………」

「止めて。そんな哀れみの視線を向けんといてくれ。俺が一番分かってんねん」



——数分後。

「はあはあはあ………」

「へえへえへえ……………」

猛烈な言葉の羅列による殴り合い。

果てしなく続くかと思われたその激闘も決着はついに付かず。息を忘れる程に白熱したせいで二人共、大幅に呼吸が荒れる。

「やりますね……………」

「そつちこそ」

「まさか、兄さんの〇〇〇〇（兄の威厳が損失する危険性ありなので自己規制）まで知つるとは……………」

ほんと、それだよ。

心の隅から隅まで完膚なきまでに晒し者にされた気分だ。ただただ、めっちゃ恥ずかしい。

悠希は兎も角、あこからも何処からそんな情報を仕入れたのか謎過ぎる解答もちらほら飛び出した。お陰様で、犯人に目星はついた。

というよりか。よりにもよって、俺の愛用ステイックの値段まで知つてるとは。妹、恐るべし。

「次はこれです」

悠希は冷静に口にした。

ではでは、俺的には非常に不本意なのだが、全国の可愛い妹持ちの兄の皆さん、心して聞くように。

「妹に言われない台詞で対決」……です！」
第二ラウンドが始まる。

— 3 の 3 — へ続く。

— 3の3 —

◇◇◇

リビング。

「お兄ちゃん……行っちゃうの？」

ぐさり、と刺さる兄心。

純真な上目遣いからのうるうると揺れた瞳。祈るように握られた両手。

これ程妹のもとを離れる兄にとって、心苦しい物は無いだろう。

「……………85点」

「やったあ!!最高得点だ!」

チャレンジャー、あこ。

見事に妹要素全開の究極コンボを繰り出し、先行の悠希の点数“80”点を上回る。事の成り行きを見守っていた悠希も雲行きが怪しい表情になっている。

第二ラウンド——”妹台詞対決”。

妹として兄を陥没させる台詞を実際のシチュエーションと共に放つ。それを審査員が百点満点方式で採点するだけの物。

先攻の悠希はエプロン姿で「兄さん、晩ご飯が出来ましたよ」と家庭らしい一面をアピールに挑んだ。

俺としては正直ぐつと来るものがあつた。でも、一応審査員としての友希那がこの一言を溢す。

『妹よりも、どちらかと言えば……奥さんじゃないかしら』

そして、悠希自身もそれを認めた様子。

悠希は歯を食い縛り、悔しそうな態度をするがこれと言つた反論は出来ずじまい。

今回のテーマはあくまで”妹”。意図がずれてしまえば、減点対象となってしまうのは仕方がない。

「もう一回ですー!」

「良いよ。それでも、あこの点数は越えられないから!」

「くっ……!!今すぐに立場を逆転させてやります……!!」

両者の承認により、続行。

再び悠希のターンとなる。

口元に手を当てて思考に浸る悠希はじつと考えてから何かを閃く。

「兄さん」

「ん?」

「少し寝てもらっても良いですか？」

「寝る？良いけど」

「向こう側に向きながら」

「こう？」

「はい。それと私が何をしても最後まで起きないでください」

——何されるんだろう。

変な期待に胸を膨らませる。

ソファにあつたクッションを枕代わりにして、俺は床に寝そべる。

「では、始めます」

宣言をする。

ここから採点の基準となる。また、あこの関与も無駄な行為と見なし、反則とされる。

「お兄さん、朝ですよ」

そう言い、俺の肩を揺らす。

なるほど、早朝の時間帯をシチュエーションに選んだようだ。

寝坊気味の兄を起こす妹。うん、いい。

「全く……いつも起きませんね」

そりゃあ、そういう指示ですから。

すると悠希は何を思ったのか、ごそごそと動き出す。俺は背中を向けているので、見えない。

「はわっ!?!」

あこの驚愕した声が聞こえる。

お陰で不安が一気に募る。と、背中に謎の密着した感覚が現れた。

これは、一緒に寝ている……………?!

ぼそつと耳に届いたこの台詞。

「ふふ……………お兄さんの匂い……………」

ヤバい心配がした。

己の意地とかつてない悪寒に俺は堪らず、上半身を上げてしまう。

「あっ……………」

「悠希? 何しようとしてんだ……………?」

「兄さんに抱き付いてました」

「まさかのストレート返球」

「ダメ……………だったでしようか?」

悠希にとって渾身の演技。

うるうる、と彼女の瞳が等しげに揺れる。やはり、兄という生き物は妹に弱かった。

「……………89点」

「やりました……………!!」

ぐつと拳を握る悠希。

兄妹だから可能とされる至近距離のスキンシップ。高得点にならない訳がない。

「あこもやる!」

「あくそうやな。そう言えば、あこの番もあつたな……………」

「ソウ兄は立ってて!」

既にあこの脳内ではプランが構築されているようだ。迷いなく、シチュエーションに近付ける為の指示を出していく。

俺は他に指示もなかったので、棒立ち。

「じゃあ、行くよ!」

ここから他人の関与は受けない。

何が来るんだろうと推測していると、あこはいきなり突撃してきた。

——突撃してきた。

「うひゃい!?!」

「お兄ちゃん!! あこ、今日のテスト満点だったよ!!」

満面の笑み。

そして、何かを期待する視線。台詞と差し出してくる頭から要するに撫でろということだろうか。

「お、おう……………頑張ったね」

「うん!!」

「……………で?」

「ぎゅー」

あこが力強く抱き付いてくる。

ぐりぐりと頬を俺の胸元に押し付けてくるのだが、正直訳が分からない。
甘えたがりな妹という解釈で良いのだろうか。

「あこ、引っ付きすぎよ」

「えく!!友希那さん、良いじゃないですか」

「駄目よ。Roseliaとしての自覚をしっかり持ちなさい」

「そんなこと無いです!!ですよね、ソウ兄?」

「あん?うん……………どうだろうな……………」

確かに有り寄りの有りだけど。

友希那の強制中断で不満味のあこがそのまま俺に向けて来た。

「今のあこのは何点ですか!」

「えっ？そ、そうやな……………」

俺が点数に迷ってる、その時であった。

「……………」

ぐすつ、と漏れた鼻水音。

まさかと思つた俺はそちらに視線を向けた。状況を鑑みて、思い当たる可能性を脳内に浮かべながら。

そこで見た。悠希が涙目になっていた。

彼女が涙を浮かべる明確な理由は分からない。単なるあこへの嫉妬か、はたまた俺自身による何かに原因があつたのか。

「悠希……………」

「泣いてません」

「えっ？そ、そうは言つてもさ」

「……………泣いてへんもん」

頑なに言い張る妹。

これが単なる悠希の意地なのは理解していた。泣く行為はあこの手前、敗北を認めたと同義であるから。

昔から悠希は泣き虫だった。

俺と同じ関西弁を使う。そのせいで同級生にからかわれ、毎晩俺のベッドに潜り込む時期もあった。

中学生に進級と同時に、話し方も一新。お陰で泣き虫癖は鳴りを潜めたと思っていた。だがこの通り、人間の本质はそう簡単には変わらないらしい。

「あ、ちよつとごめん」

「あ……………はい」

あこも素直にどいてくれた。

俺はソファから立ち上り、悠希の前へと歩み寄る。その間も彼女は視線すら合わさうとしない。

ゆっくりと優しく彼女の頭を撫でる。

「これが只のゲームだってのは悠希も分かってるやろ？」

「……………」

「そんな落ち込まなくても。心配せんでも、俺の妹はずつと悠希。それだけは絶対に変わらない」

「……………分かつとる」

「だったら何で泣きそうになってるんだ？」

「……………分からん」

首を横に振りながら答える悠希。

悠希も気持ちの整理が追い付いていない。

突如襲来した謎の妹もどきに自分の好きな兄を持つていかれたなんて事態、誰が想定しておくのだろうか。

「私……………部屋に戻ります」

そう告げ、悠希はリビングを後にした。

「ソウ先輩……………!!あこ……………!!」

「気にせんでええよ。あんな悠希も久しぶりに見たし、その度にすぐ元通りになつとるから」

「ごめんなさい……………」

責任感に飲まれるあこ。

あこが悪いと責めるのはお門違い。些細なすれ違いが生じただけの話。

「あこ」

「友希那さん？」

「飲み物でも飲んで、一旦、区切りをつけましょ」

いつの間にか消えていた友希那。

胸元にはお盆を持ち、コップが四個載せられていた。

ありがたい配慮なのは違いない。
けど――

――何処からそれ持ってきたん!?

◇◇◇

玄関。

「ソウ、今日は楽しかったわ」
時刻は夕方。

本題の歌詞作りはさておき、友希那とあこは帰りの支度をしていた。

本人はこう言うが俺としてはちよつと消化不良気味だ。歌詞のアドバイスとか全くしてない。

— というか、話題にすら上がってない。

友希那が満足げな表情でいるのだから、多分大丈夫なんだろうけど。恍惚なまでに頬が緩んでる。

— 思い出し笑いならぬ思い出し緩みかな。

「あこも楽しかったです！」

「そっか………またいつでも来て良いからね」

「はい！」

「言われなくてもまた来るわ」

「姫さんには言つてへんのやけど………猫目当てか。ホント、響の事好きすぎる気がする」

「余計なお世話よ」

友希那の眼光がヤバい。

「それと………あこちゃん」

「はい？」

「今日はあるやっただけど……悠希とは今後も仲良くしたってな」

「あつ、はい……でも、あこ、嫌われちゃったかもしれないですし……」

悠希の姿はない。

一度二階にある自分の部屋へと戻ったきり、再び階段を下りる気配はしなかった。彼女自身、何か思う所もあつたかもしれない。思春期で難しい年頃だろうから、そつとしておくつもりだけだ。

——と、その時。

「あこ、それはあなた次第よ」

友希那の視線の先は俺ではない。

その向こうにある。そして、発言の意図から汲み取ると。

気まずそうにながらも悠希が玄関にまで足を運んで来ていたのだ。

「悠希？」

俺の問い掛けには反応せず。

悠希は俺の隣に来ると、真っ直ぐに宿敵あこを見つめた。

「あこさん」

「は、はい!!」

「今度は余裕で私が勝ちますから」

「ふえ?」

そして、まさかの勝利宣言。

予想外の発言にあこも貯まらず府抜けた返事を繰り出した。

「あ、あこだつて!! 負けないもん!!」

「そうですか。でしたら、次は——」

——
妹対妹。悠希あこ

運命的な出逢いから相対した両者。

きつと、無理に勝利を選んでまで入手する程には価値がないプライドだったかもしれない。それでも譲れない立場というのがお互いにあった。

今回は中断という形で幕が降りてしまった。つまり、まだ勝負は続くということ。

「仲良く遊びながらにしましょう。その時まで勝負はお預けです」

「——つ!! 勿論!!」

そして、昨日の敵は今日の友。

悠希が差し出したその手にあこは感極まりながらもぎゅつと握り返す。

戦果は友情。ライバルは親友。

一先ず、俺は無事に二人が平穩に終わった事に安堵したのであった。

「ねえ、ソウ」

「ん？」

「最後に響ちゃんを撫でたいのだけど……」

「見事に懲りんな。歌詞の方はいいんか？」

「ええ………題材はちゃんとここにあるじゃない」

あこ編—3—『疑惑のシスター』終

—4の1—『真夏のラバー』*

◇◇◇

真夏日。

「ぐへえ〜」

日射しが容赦なく照り付ける。

お陰で十二分に熱された道路の上を歩くだけでも、汗がどんどんかいてしまう。

あこの現在の様子は、というと——

今日の服装が黒を基調としているので、より暑く感じてしまうのはまた別として、帰り道をととと歩いてきた。額の汗を拭う。

バンドの練習もリサが提案した熱中症が危ないからと早々に切り上げてしまい、午前中でありながらも既にあこは本日の予定なしとなっていた。

リンリンは欲しい物を買いに遠出をするらしい。あこにこの暑さの中、遠出など自ら灼熱に飛び込む覚悟はなかったので遠慮させてもらった。

他のメンバーも各々用事があるみたいで、あこは手持無沙汰に暇を持て余す羽目に。

実家でも姉の巴は不在。ゲームも候補に浮かんだが、不幸にも昼頃からメンテナンス

が入ってしまい、出来ない。

夏休みの宿題はまだまだ余裕があるので後回しでもきつと大丈夫、のはず。

今のあこは面白い何かを探してる真っ最中である。とは言え、バンド練習の帰り道にすぐに見つかるなどとは思っていないので一度家に戻り、クーラーで涼もうと企んでいる。

ふと先の十字路の角を曲がると――

「……………先輩？」

見覚えのある背中。

真夏にあつた軽装姿のドラム先輩が迷いなく歩いて進んでいた。

折角なので、後を追う。

「あれ？ 駅？」

商店街を抜ける。

道中、店の人から貰った食べ物を頬張りつつもあこは見失う事なく追跡に成功して今。

肝心の本人はどうやら遠出をする様子。少し先の最寄り駅へと向かう道を一直線に歩いていく。

――と、いきなり彼が道の角を曲がった。

「あつ!!」

ヤバイ、とあこは焦る。

曲がり先の道は目的地が駄だとすれば、遠回り方向。てつきり駄だと思い込んでいたので痛恨の凡ミス。

曲がり角まで走る。同じ所であこも道を曲がろうと試みれば——

「わっ!?……………せ、先輩……………!!」

あこの先輩、蒼真が待ち構えていた。

彼の表情は何とも読み取れない。やっぱりお前の仕業かと思わせるため息を深く一っだけ吐く。

「あこ、俺に何か用?」

「えっと、あの、その、この……………面白そうだったので蒼真先輩の後をつけてました!」

「素直でよろしい。それに免じて今回は許してやろう」

「やった!!」

「デコピン一発で」

「痛つい!!」

あこのおでこに痛烈な打撃がヒット。
ヒリヒリするのを我慢しつつも次回に向けての反省点を模索したいあこは研究者熱

心である。

「……………いつから気付いてました？」

「あんなに背後をちよこまかされると流石に誰でも気付くんやけど」

「そ、そんな!？」

確かに電柱の影に移動していた。が、あつさり見破られていたらしい。

今日はここまでかと諦めムードのあこ。

でも、まだ昼前の真夏日。ここで予定が白紙になるのは嫌だとばかりにやけくそな行動に出た。

「蒼真先輩、どこかに行く予定ですよね?あこ、暇なので連れていってください!」

「なんじやいそりや。出来なくはないんやけど、あこが来ても面白くはないよ?」

「全然OKです!」

「文句は一切受け付けんからな」

蒼真が来た道に戻る。

と、駅への最寄りルートへ入るとそれに沿うように進み始めた。

やはり、さっきのはあこを誘き寄せる罠だと判明しつつもあこは置いていかれないように彼の隣へと追いつける。

仲良く並んで歩く二人。

「ところで何処に行くんですか？」

「ん？　そういや、言っでなかつたな——」

蒼真は一呼吸置いた。

「墓参りだ」



墓地施設。

「……………随分と伸びたな」

それは、墓の側に植えられた小さな木。余計な枝はバツサリ切られてスッキリとした様子。

そして、丁寧に添えられた花束を交換したお陰でお墓が随分と綺麗に変化した。彼は思い出を嘯み締めるかのように墓の前にしゃがみこみ、両手を合わせる。

「あこもやつとく？」

「え？でも、あこ、よく知らないし……………」

赤の他人のあこ。

此処に着いてからは他人行儀に蒼真の後ろでじっとしてただけである。そもそも、誰のお墓参りすらかも分かってないのだ。

「この中に入ってるのは俺の元カノ。俺が中三の頃に亡くなってからは定期的に来るようになっている」

「元カノ!?先輩、彼女が居たんですか!？」

「失礼だな。ちゃんと居たよ」

「じゃ、じゃあ……………あこも」

墓の前でしゃがむ。両手を合わせる。

——えつと……………初めまして。蒼真先輩の後輩の宇田川あこです。先輩からはドラムを教えてもらってます。

蒼真の彼女がどういう人だったのか。思いを寄せるあこはふざける様子を全く見せずにやり終える。

「んじゃあ、帰るか」

「えっ？もう帰るんですか？」

「長居する必要もないしな。それにさつきも言ったけど、あこにはあんまり関係ないからつまらんだろ」

「そんな事無いですけど……」

ふと、墓石を見る。

まだ中学生のあこには墓石に刻まれた言葉は難しい。人の名字だと言うのは分かるが、全てを理解するまでには至らない。

「でも、お墓参りって確かお盆休みとかに来るのが定番じゃあ……」

「もう一つあるやろ」

「あっ………命日」

「そ。今日がこいつの誕生日やから」

妙な謎も納得した。

と、蒼真がズボンのポケットからスマホを取り出し、画面を見つめていた。

「電話。ちよっと待っててくれ」

「はい」

人気の無い場所へ離れる蒼真。

二人きりで来たので、必然的にあこは独りぼつちに取り残される。墓地園で孤独にいるのはちよつと怖い。

——と、その時。

「あら？ 珍しい。今日は可愛い子がいるじゃない」

あこは振り返る。

「え？」

「ふふふ。こんにちわ、お嬢ちゃん」

「こ、こんにちわ………」

そこに居たのは——

一人の小さなお婆さんであった。

ー
4
の
2
ー
へ
続
く。

— 4 の 2 —



駄菓子屋。

「ほら、遠慮せずに食べなさい。こんなに暑いと若くても大変だから」

ベンチに座るあことお婆さん。

お婆さんはすぐ背後の店から冷たい物を探すと入店し、しばらくしてから手にアイスを掴んで出てきた。

どうも孫の世話をするみたいに普段から他人の世話好きな性格の持ち主らしい。

「ありがとう!!お婆さん!!」

「元気があつて良いこつた。さあさあ、存分にお食べなさい」

ペロリ、と舌が触れる。

ひんやりとした感触が夏の日差しに照られた身体にはとても心地良い。

美味しそうに食べるあことお婆さんはシワのある笑顔を浮かべて見守る。

「それにしても、あの子にこんな可愛い友達もおつたとはねえ……………」

「……………」

感慨深く頷くお婆さん。

だが、あこには何の話なのか心当たりがない。勘違いという線も有り得る。

「彼は今でも元気かしら？」

「えつと……………へ？」

「名前が確か……………ソウ、だったかしらね？いつも、この時期になると来てくれるのよ」

「はっ!!?蒼真先輩の事ですか!？」

点と点が繋がった感覚。

あこはこのお婆さんが蒼真の墓参りに来た今回の件と関係のある人物だとこの時に理解した。

蒼真は元カノの墓参りに来たと言った。

つまり、このお婆さんはその人の保護者的な存在に。

「蒼真先輩は元気です!!あこにも優しくドラムやゲームでも沢山お世話になってます!!」

「そうかい、そうかい。なら、アタシの気持ちも少しは楽になるってもんだよ」

「楽……………?」

「孫が亡くなってからずっと彼は独りで勝手に自分を追い詰めていないか、不安で仕方がなかった。あの時、一番悲しい思いをしたのはアタシでもなく、彼だからね」

遠くを見つめるお婆さん。

脳裏に情景を浮かべ、懐かしく描く様子はお婆さんの口から紡がれる言葉一つに刻まれている。

「あこは……蒼真先輩の昔の話は全く聞いてないです……」

ポツリと出たあこの一言。

「ありがとうね」

「ふえ？」

「アタシには数年前まで姪っ子が居たのよ。いつでも笑顔を振り撒き、元気しか取り柄がない女の子」

お婆さんは語り始める。

初めは不思議そうにしていたあこも黙って聴く姿勢に徹し始めていく。

「元気が良すぎるあまり、周りに迷惑をかけてしまう事も日常茶飯事。アタシが何度注意しても聞く耳を持たずじまいでどうしようか悩んでしまうぐらいにはね。その時だったかな。彼が現れたのは。」

彼と一緒にいる時のあの子は不思議と良い子に育つようになったの。あまりにも順調すぎて、不思議に思ったわ。けど、あの子の彼を見る目を見てすぐに分かった。アタシも同じ経験をしていたもの」

「どうして?」

「お嬢ちゃんはしたことがあるかしら? 恋」

「恋………恋?!」

「ふふふ、まだこの話は早いかしら?」

「そ、そんなことは………!!」

ぷしゅーとあの頭上から湯気が放出。

「あの子は恋をしていたのよ、他でもない彼に。女の子はね、好きな人の前では無力なのよ。いつもは騒がしい女の子がしおらしい態度になるのも合点がいったわ。」

彼もとても良い子。優しい性格で気遣いも出来る。何より、あの子を見つめる瞳が慈愛に満ちていたわ。

やがて、二人は付き合う事になった。姪っ子の恋愛に部外者が手を出すわけにはいかなかったアタシはその段階に行くだけでもとてもハラハラしたわ。まだまだ歳じやないってことね」

「あっ………うん」

「でもね、やっぱり恋に試練は付き物。二人の仲は順調だったけど、神様は許してくれなかつたみたい。」

遺伝性の病気があの子に発症したの。あの子の親も同じ病気で亡くなってるけど、遺

伝しちゃって……あれほど神様を憎んだのは初めてね。アタシが肩代わりしたいぐらい、何度も願ったわ。

でも……あの子は全てを受け入れた。残り少ない人生だと分かっているけど、ずっと笑っていたわ。彼もまたそんなあの子の思いを尊重してくれたのね。ずっと最期まで付き添ってくれた。

あの子が亡くなってから、アタシは彼と会う機会を一度も掴めずにいたの。怖かったのね。彼がアタシを顔を見れば、思い出してしまいかもしれないって理由に逃げて」

お婆さんの決断が悪い訳ではない。

むしろ、あこでも共感出来る部分があるだけに単純に彼から逃げてしまったお婆さんが悪役になるとは思えなかった。

「唯一の心配は彼があの子の死を引き摺っていないかどうかだけだった。でも、その様子だと問題はなさそうかしら。むしろ、女の子の墓参りに別の可愛い女の子を連れてきちゃうぐらいだもんね」

「えつと……今日は無理矢理あこが先輩に連れてきてもらっただけで……」

「それでもよ。迷惑かもしれないけど、これからも彼の側に居てあげて。あの子のようになりたくはない。迷惑かもしれないけど、これからも彼の側に居てあげて。あの子のようになりたくない。その時は支えてあげてくれないかしら？」

「はい!! 勿論です!!」

「良い返事ね。これならアタシも心配なく任せられそう」

そして、お婆さんは立ち上がる。

「アタシ、もうそろそろ行かないと」

「えっ? もうですか?」

「残念ながらそうみたい。それじゃあ、最後にこれだけ。彼の事は任せたわよ、あこちやん」

「うん。任せて、お婆さん!!」

お婆さんは何処かへと歩き始める。

その背中を眺めながら、ずっと手を振るあこであつたが——



「あーーーーー!!!」

遠くから聞こえる蒼真の呼び声。

あこはそちらに視線を向ける。

「蒼真先輩!!こっちはです!!」

「はあ……………やつと、見つけた。じつとしてろって言っただけだったっけ?」

「ご、ごめんなさい……………」

「ん?そのアイスはどうしたんだ?」

「そこのお店で買いましたよ。さっきまでそこでお婆さんと喋ってました!!」

「お婆さん?」

「はい!!ほら、向こうを歩いて……………歩いて……………」

振り返り、その先を指差す。

だが、無人のゴツゴツとした道が伸びるだけである。

「あれ？蒼真先輩、向こうに誰か居ませんでした？」

「誰も見てへんよ。今おるのは俺達だけ」

「あれ？あれれ？」

とある夏の日。

「確かに居ました……居たもん！」

「どんな人やったん？」

「えっ？先輩の元カノの叔母さんって言ってましたけど……」

「は？絶対に有りえへんぞ、あこ。俺の記憶だと確か、その人は——」

——去年、亡くなったって聞いたけど……。

あご編—4—『真夏のラバー』終

松原花音編

—1の1—『Aquarium』*

ファーストフード店。

「あつ……………」

お互い偶然にも顔を合わした。それも客と店員として。ドラムの個人練もほどほどに小腹が空いてしまったので、此処に入店したのだがまさかこんな所で再会するとは。

その相手は花音さん。どうやらユニフォーム姿から察するに此処でバイトしているようだ。あの集会以来会うのはこれが初。

「……………このセットお願いします」

「あ、はい。畏まりました」

何事もなかったかのように会話をこなす。向こうも絶対に気づいているはずだが互いにそこは触れない。

特に知り合いだからと言って俺に対する接客自体に変化はなく、彼女にジュースやハンバーガーの種類を告げた。

「合計で780円になります」

紙の野口さんを彼女に渡す。

お釣りをレジから回収した花音さん。俺もそれを受け取ろうと、掌を差しのべる。

「っ！」

ぴくつと、花音さんが反応した。

お釣りを渡される際、ちよつと彼女の手と触れてしまったがそこまでリアクションされるうちよつとシヨック。

俺だって少し緊張したのに。

「……………」

んで、だ。この時間帯はどうやら店自体が暇らしく俺の後ろに並ぶ人もいない。花音さんも俺の頼んだ商品が届くまですることもない。

お互いすることなく、目を合わせたかと思えばすぐ反らす。そんな初な反応を繰り返していた。主に花音さん。

反応が面白いから、じつと見つめていたらそうなっていた。あ、泣きそう。

「あの……………何か用ですか？」

「いえ、お久し振りだなあと思いました」

「あ……………あの日以来ですな」

良かった、俺の事は覚えてもらっていた。じゃなければ、ただのナンパ野郎だ。

本来ならこんな世間話は店員と客とでは駄目なのだが、客が疎らである為、これぐらの談笑は目を瞑ってもらえるみたい。

レジ対応してるのも花音さんだけみたいだし。

「ここでバイトしてたんですね」

「う、うん……………」

どこか他人行儀な花音さん。

会ったことがあるとは言え、まだ一対一で会話したことはなかったはず。

加えて、男性が苦手とも耳にしたこともある。緊張するのも無理はない。

「……………俺もバイトしてたんですね。最近はあんまりかな……………」

「そう……………ですか……………」

「……………」

「……………」

うん、会話が続かん。

男苦手の花音さん。コミュニケーションがあんまり得意ではない俺。まあ、話題がないと続かん。

ドラマの話でもすべきだろうか。

だが、花音さんのドラマを語るにはまずバンドの方から知ってもらわなければならない。

るだろう。という、俺もあまり他人に自慢できるほどの知識を持つていないわけではないが現段階での話だ。

バンド名は”ハロー、ハッピーワールド!”。

世界中を笑顔いっぱい。そんな目標を掲げたバンド。初めは、なんとも大規模な目標だとか、理想の夢を見すぎている可哀想な人だとか、大抵の人は感じるだろうが演奏を目の当たりにすれば分かるはずだ。

ただ、ここであまりにも膨大な量になってしまふを理由にバンド名を略称しての”ハロハピ!”の詳細を語る訳にはいかない。

取り敢えず、三行で纏めると。

——ボーカル、超破天荒。

——加えて熊さんにわんぱくにイケメンに、ひたすらツツコミ要素多い。

——それを支える花音さん、すげえ。

の以上である。

「花音ちゃん?」

と、店の奥から呼ぶ声。

トレーを持って出てきたのは花音さんと同じ制服を着た女の子。

その子はレジ前、花音さんの隣に来るとトレーに乗った商品を差し出してきた。よく

見ると俺の頼んだ物だ。

「あ、ごめんね、彩ちゃん」

「ううん、気にしないで」

首を振って、軽く微笑む。

その一連の動作はまさに店員の鏡の象徴であつた。

「お待たせしました。ご注文の品です」

「あ、どうも」

その店員さんは俺に商品を渡して、自分が手持ち無沙汰になると元の持ち場に戻る素振りは見せず、俺と花音さんを交互に見比べていた。

「もしかして花音ちゃんのお知り合いさん？」

「う、うん……………」

「なら、挨拶しといた方が良いかな？」

小さい声で会話が始まった。

俺はもう席の方へ行つても良いのだろうか。

と、大きく一歩彼女が出てきた。

「あ、初めまして！私、丸山彩と言います。花音ちゃん共々よろしく願います！」

「あ、ご丁寧にどうも。山吹蒼真と言います」

「よろしくお願いしますー……………山吹？あの山吹さん？……………え、でも？あれ？」
俺の名字に彩さんが反応した。

「どうやら彼女は沙綾の事を知っているようだ。山吹、という名字でぱつと思いつくのは、山吹ベーカリー」のパン屋ぐらい。

彩さんはそのパン屋の常連さんなのかな。

「沙綾？」

「あ、そうです!!……………え!!お兄さん!？」

思わず声を上げる彩さん。

「たまらず花音さんが辺りを様子見するが、店内は俺達以外誰もいないので特に何も起こらない。」

「正確には従兄やね」

「従兄さん!!初めて知りました!!」

「はわわ!、と段々慌てる花音さん。」

「微笑ましく見てると、花音さんの様子が変わってきて。」

「あの……………そ、蒼真さん!」

「えっ!?!あの花音ちゃんが……………!!」

事情は知らんが、彩さんが感動してる。

「どうしたの?」

「彩ちゃん、”Pastel*Palettes”のボーカルですけど……覚えてないですか?」

「ん?」

「え?」

俺と彩さんの視線が一切に花音さんへ。

”Pastel*Palettes”。確か、麻弥さんの所属するアイドルバンドでつい先月のライブでも共演したバンドの一つにあつたはず。

そのバンドのボーカルが彼女。そりゃあ見覚えあるはずだ。

「彩ちゃん。蒼真さん、この前のライブで出てたゲストバンドのドラマーさんだよ」
「俺達……初めまして、じゃなかったですね」

「えへへ。そうでしたね」

つまり、沙綾とはバンド繋がりなのか。

あいつも意外と交友関係が、広い。あれ?なんか違うな。まあいいや。

「ていうかもうそろそろ……」

俺の視線は下、トレーの上に乗って食欲をそそる匂いを醸し出すハンバーガー達へ注がれる。

早くしないと冷めてしまう。美味しさ半減。

「あ、ごめんなさい！」

「いえ。お気になさらず」

「すみません。申し訳ないですけど、最後に一つだけ良いですか？」

「え？あ、何ですー」

そう言うとき彩さんは俺の耳元まで近付きー



ファーストフード店。外。

「お待たせしました！」

先程の制服姿とは売って変わって私服姿で登場した彩さん。

『ご相談したいことがあるので、お店の外で待っててもらって良いですか？私の今日のバイト、もう終わりますので………』

ああ言われては男として断れまい。

ライブで共演した同士ではあるものの、それはバンドの話であって個人となると話は別。

実質上、初対面に近いのだが彩さんはどういう意図で俺に相談することを決めてしまったのか。しかも彩さんは花音さんの友達、でもあるので無下に扱えないのが何とも。

「わざわざありがとうございます、山吹さん」

「いや、それは良いんですけど……」

「………どうかされました？山吹さん」

今、彼女の耳打ちシーンが脳内でリピートされた。流石、アイドルバンドのボーカルをしているだけあって声質はとってても善きであった。

不思議そうに首を傾げる彩さん。

話を逸らさなくては。

「ふと思ったんですけど、山吹さんって正直ややこしくはないですか？」

「え？あー………それもそうですね………」

「だから名前で呼んでも別に構わないですよ」

「なら失礼して。蒼真君………で合ってます？」

「合ってます」

「でしたら、この際ですし、私のことも名前でご呼んでください。なんなら呼び捨てでも！」

今、犬の残像が見えた気が。

「いきなりそれはきついな……………彩ちゃんって呼んでも?」

「全然構わないですよ!あ、ついでなんですが、蒼真君って高校生です?」

「高校二年生」

「え!?私と同学年!?なら、敬語じゃなくても良いよね?蒼真君、さっきから敬語で話してるとどうしても違和感を感じちゃうから……………」

「そんなに俺の敬語が変?」

「ううん!!全然!!なんとというか……………喋り方を無理してるというか……………何言ってるんだろう、私。あはは……………」

「大丈夫。大体、言いたいことは分かった」

よし、何とか誤魔化せたようだ。

自分でも段々何を言ってしまうのか発言に少し恐怖を感じてしまいが、今のところ問題は無い。

彩ちゃんも別の意味で同じなのか、から笑いをしてる。

というより、敬語の件をどうにかしたい。ついこの前も別の子に指摘されたばかりだ。

「それと蒼真君。ご相談の件んだけど……」

「え？あ、そうやった」

「詳しい話は私のいつも行ってるカフェで話しても良いかな？」

「それって時間かかる？」

「う、うん。場合によつては………だけど」

「了解した」

「うん、ありがとね！じゃあ早速だけど行こつか。こつちだよ」

彩ちゃんが先陣を切つて歩き出す。

うーむ。これはますます相談の内容が分からなくなってきたぞ。バンド関連の線が今のところ濃厚だ。

「先にどんな内容が聞いてもええかな？」

先手を打つ。

そんな気分で聞いた俺。他に特に深い意味を込めることはなく、ただ何となく。ん？、と彩ちゃんが後ろを振り返る。

「えつとね………」

ただその後の彩ちゃんの一言でこの先、その相談がただ事で終わらないのを痛感する羽目になってしまうことを俺は知ってしまった。

「……ちよつと蒼真君とデートしてもらおうかなあ……なんてね♪」

—1の2— へ続く

—1の2—

◇◇◇

駅前広場。

「五分前か……」

指定された時刻は九時。

朝の時間帯から俺がこんな緊張ぎみに眩いたかと言うと、原因は今日の予定にある。

本日、トリプルデートです。

先週のあの日、彩ちゃんから相談されたの内容は至極単純であった。

要するに、近場の水族館の期間限定グッズが欲しい。でも、それはカップル限定のみ入手が可能という条件付きだった。

彩ちゃんと花音さん。どちらかというど花音さんが特にそれを欲しかったらしく、でも男子がいないのでどうしようも出来ない。固唾を飲んで見守ることしか出来なかつたらしい。

そこに、俺が偶然登場しちゃった訳だ。

彩ちゃんもお墨付きの花音さんが極度の人見知り問題も、俺と花音さんのあのちよつ

としたやり取りを見て問題ないと判断したようで……………。

結果として俺が抜擢された。

『蒼真君と花音ちゃんは同じドラマードから花音ちゃんもきつと……………ね?』

あの後、案内されたカフェで彩ちゃんにそう言われた台詞がこれだ。

ね?、と後押しされても分からん。カフェの店員さんも接客態度から察するにどうやら彩ちゃんと友達らしく、あの台詞に聞き耳たてて頷いていたのを俺は目撃したけど。それでも、俺にとっては永遠の謎台詞となる。

「あ、蒼真君!」

「ん?」

柱にもたれ掛かっていると声がする。

ふと左を見ると、ぴよこぴよこ水色の髪が跳ねて近づいて来ているのが見える。

うん、花音さんだ。

「なんか今日はごめんなさい……………わざわざ付き合わせちゃって……………」

「んや、今日は練習もないから全然大丈夫」

「本当にありがとうね。蒼真君のお陰でクラゲキーホルダーが手に入るんだよ?」

「ク、クラゲ……………?」

明らかに嬉しそうな花音さん。

ふむ、この人はクラゲが好きみたいだ。あのフォームがいいとおしくなる人も世間ではいるみたいだが、まさか此処にいたとは。

「彩ちゃんは一緒でないの?」

「え? 彩ちゃん? ……ううん。私、彩ちゃんにここに来るように言われてるだけだから詳しいことは……」

「そうなんや……」

微妙な間があつたのが気になるが、どうやら彩ちゃんはまだのようだ。

「あ、電話……」

花音さんのスマホから音楽が溢れる。

それはそうと着信音が個性的だ。これはなんの曲だろう。花音さんのバンドの曲かな。

ちらつと、俺の様子を伺う花音さん。

どうぞ、と俺は言う。

小さく頷いた花音さんはスマホの画面を軽くタッチ。右耳にスマホを当てながら、人影がない所へ離れていった。

「……もしもし?」

「……ふええ!? あ、彩ちゃん!」

「……そ、そんなぁ……………緊張するよお……………」

「……うん……………頑張る……………」

離れて見ても分かるが、花音さんがこれでもかというぐらいに動揺してる。

このタイミングで、花音さんの反応。そして、彩ちゃんの不在。

大体予想つく。ついてしまうが、それだけは駄目だ。

「……………あのね、蒼真君」

電話を終えた花音さんが戻ってきた。

何とも言えない微笑みを纏ったその表情。かと思えば、俺も似たような感じになっちゃってるだろう。

「彩ちゃん、急な仕事が入っちゃって今日は来れないらしくって……………」

「あく……………彩ちゃん、一応アイドルだもん……………忙しいよな……………」

「う、うん……………」

ちよつとした皮肉を込めた俺の言い分も花音さんは軽く流してしまった。その反応はそれほどまでに急激に緊張具合が増してきてしまっていることを表していた。

なんと、今日は二人つきりだ。

俺と花音さん、両者とも彩ちゃんという繋がりがあると思っていたからこそ今日は気持ちを整理して迎えることが出来たのに。

それが無くなったのだ。

だとすれば、これは単なる男女のデートになるのでは……………。

「じゃあ……………行きますか」

「……………はい」

ああ、神様。

今日は、無事に終わられますように。

俺は静かに祈った。



水族館。入場ゲート前。

「高校生二枚でお願いします」

受付のお姉さんからチケットを貰う。

もはや花音さんとのデート状態へと移行後、二人一緒に電車に乗ってから最寄り駅で下車して、そこから徒歩で少し歩き、無事に目的地前まで辿り着くことが出来た。

花音さんが危うく別路線の方へ行きそうになつてたのを慌てて止めたぐらいで特にこれと言つた進展も問題もない。来る途中、常に無言ではなく軽い世間話でもしながら来ているのでそこまで気まずい空気でもない。

ふと気づいた。今、思えばの話だが彩ちゃんが出来たとしても男女の比率は一对二となり、それはそれで突つ込み要素がある気もしなくもないことに。

さて、水族館の入場ゲート袖で待たせてある彼女の元へとそそくさと戻ることにする。

「はい、これ」

「あ、ありがとう。ちよつと待っててね。今、お金出すから……」

「あく別にそれくらいはいらんよ？」

「そこまでしてもらうのは流石に悪い……かな？」

「気にすんなさ。こんなん、男の小さな意地やし。見たところ、周りも限定グッズ狙いみたいやから、早めに行こう」

俺が話を完全に折った所で花音さんも諦めたのか、小さく頷いて俺の後に続く。

購入したチケットでゲートを通る。

暗めの通路を二人して歩く。肩と肩の距離は一人分空いている。

ちよつとした無言が続くなか、視界が開ける。そして、視界いっぱい写りだされたのはこの水族館名物の超巨大水槽であった。

「うわあ〜……………すごいね……………」

「もしかして、ここに来んのは初めて?」

「うん。普段は別の水族館に行ってるから、水槽がここまで大きいとは思ってなかったよ」

中にいる全ての魚類の種類を一見では網羅出来ないほどの巨大さを誇る水槽に圧巻の意を示している花音さん。

あ、マンタおる。でっかいな。

「きゃっ」

と、小さな悲鳴。

咄嗟に出所を確認すると、そこで俺は花音さんがこちらへ倒れかけてるのを目撃する。

刹那、俺は彼女の肩を支えた。

「大丈夫？」

「う、うん……ごめんね」

どうやら後ろから来た通行人と花音さんがぶつかってしまったようだ。

「すみません」と前にいた女性が軽くお辞儀をして謝ってきた。花音さんも「こちらこそすみません」と小さなお辞儀で返す。

「ここら辺は邪魔みたいやし、移動しようか」

「……………うん。そうだね」

この時の俺は見てなかった。

花音さんの頬が少し赤みを帯びていたことに。

◇

水族館。2号館。

「えっと……それでええんか？」

「うん！ようやく会えた！」

左手に持ったそれをもう一度凝視。

クラゲだ。まさにそのままク・ラ・ゲ。キーホルダーのはずなのに、軽く指で押すとふにふにする。なんとこのクラゲ、妙な質感も再現されている。

あ、これ慣れたら案外気持ちいいかも。

それはそれとして、どうしてここに俺達がいるかというと、だ。

先程、花音さんと一緒にパンフレットの地図を確認してクラゲイベントはこの建物でやっているかと判明。早めに行こうと俺が提案し、花音さんがそれを承諾したからである。

因みにこの水族館自体、いくつかの建物から成り立っており、それぞれが何かしらのテーマを立てて海の生物どもを展示している。

「キーホルダー、残ってる良かったね」

「そ、そうだな……」

クラゲを頬にすりすりする花音さん。

さっきの巨大水槽を後にして、今回の目的を果たすべく、この2号館へ足を運んだ俺達であったがそれでも限定グッズの幾つかは既に姿はなかった。まさかの予想以上の

クラゲ人気に俺の心はふえくとなってる。要するに意味不明だ。

それでも、花音さんが目当てにしてたこのクラゲキーホルダーは数に余裕があったみたいでどうにか入手出来た。

俺は特に要らないのだが、花音さんから笑顔で「はい、どうぞ」と渡されてしまったので持つてる。

そっか、これはさっきの入場チケットのお返しか。ありがたく頂戴しておこう。

「それで次はどうする？」

「うーん。今日はこれを買いきただけだもんね……………」

「折角だし良ければだけど、適当にお薦めのコースとか案内しよか？」

「え？良いの？」

「大分前なんやけど、何回か来たことはあるからね。ある程度場所は分かるし、時間もまだまだあるから」

「えっと、それじゃあ……………お願いしようかな」

おおっと、天使降臨かな。

「何か観てみたいもんとかある？」

俺はこの水族館のパンフレットを渡す。

「……………あ、イルカショーあるんだ。それに……………結構広い」

「それがここのアピールポイントらしいよ」

魚の種類と数が押し売りらしい。

「取り敢えず……イルカショーが観たいかな」

「ショーの時間はどうなつとる?……ありや、まだ結構余裕あるんか。よし、それまでは適当に観て回ろう」

「うん。イルカさん、楽しみ〜」

まあ……花音さん、楽しそうで良きかな。

◇

水族館。4号館。

「お待たせって……あれ?」

その後は数十分くらいかけて、あちこちの水槽を彼女と観て回るを繰り返していた。

その度に可愛らしい反応をする花音さんは端から見ていて飽きない。

とは言え、流石に歩きっぱなしは互いに負担が大きいので目先についたベンチで休憩していた。三分前の話だ。

その間の俺はトイレへと席を外しており、つい今戻ってきたのだが肝心の花音さんの姿がどこにも見当たらない。

辺りを一望するもあの水色少女の気配すら感じられないことに俺はつい苦笑いを浮かべてしまう。

……いやいや、早く探さないと。花音さんはここに来るのは初であり、まだ立地は完全に把握出来ていないはず。

「花音さくん?どこ行つた?」

どうやら、神様、迷子発生のようなです。

— 1 の 3 — へ続く。

—1の3—

◇◇◇

水族館。3号館。

「ふえ〜……………(ん)ど(ん)……………」

その場をゆっくり一回転。

家族連れが目立つ中、私の目当ての人やその手掛かりは見当たらない。

私、花音は完全に迷子と化していた。高校生なのに。恥ずかしい。

数分前に蒼真君にベンチで待っているように言われたのだけれど、一人っきりの小さな女の子を見つけてしまえば、誰だつてじつとしていられない。

その子は私と同じクラゲグッズが目当てで両親と来たそう。でも、販売場所付近ではぐれてしまったみたい。幸運にも、その販売場所は私でも分かるので連れいくことに。

『あ、パパ！ママ！』

『愛ちゃん！すみません、うちの子がとんだご迷惑を……………』

『いえいえ、無事に再会でできて良かったです』

目的地まで案内すると、不安そうにキョロキョロとしている大人がいたのでもしかし

てと思つていたがやっぱりこの子の母親であつたようだ。

後から聞いたが、この時、母親はこの子が帰ってくるかもしれないとその場で待機。代わりに父親が搜索に出掛けていたそうだ。

『ばいばい、お姉ちゃん！』

可愛らしく精一杯に手を振るその子に癒されながらも私は早く戻らないと、と思つていた。

だが、しかし、だ。

結論から言うと私は戻れなくなつていた。来るときはスムーズに行つた。でも、帰りでは道が多く別れており何処から来たのか判断がつかなくなつていた。これでは、あの子も迷子になるはずだ。

——早く戻らないと。

その気持ちとは反対に目的地は段々遠ざかつていく。そんな錯覚を覚えるほどの道の複雑さに私の頭は参つていた。

「お、いたいた」

彼と再会したのは、その時であつた。

「あ、蒼真君……………ごめんね」

「やっぱりこの辺で迷うよな。なんかアマゾン川みたいな構造で一旦、本流に入つてし

まうと戻れない設計らしい。すごいこだわりやね」

「そうなんだ……………」

「んじゃあ、とつとと行こうか。シヨールまでまだ時間はあるけど席は良いところ取つておきたいし」

彼は私に背を向け、進み出す。

「あ、あのー！」

「ん？どうした？」

「……………私に何も聞かないの？」

わざとではない、とは言え、結果として彼の言葉を破ってしまった。それなのに彼から一切の追求がないことに私は不思議で仕方がなかった。

と、彼の返答はあっさりしていた。

「迷子を案内してたんやろ？」

「へ？どうしてそれを……………？」

「さつき来る途中に父親っぽい人からお礼言われたんよ。どうやら、俺が君と一緒に来てるって覚えられてたみたいだな」

彼は静かにそう言った。

「迷子を案内するのは良いけど、自分が迷子になったら意味ないよな、はは。ミイラ取り

がミイラになるってやつ？」

「ご、ごめんなさい……………」

「謝らなくて良いって。迷子探しは慣れるんやから」

「え？」

「俺の妹が……………ね」

優しく微笑む。

それにどうしてか、少しだけ私の胸が疼く。今の私にその理由を探すだけの余裕はなかった。

「これは答えなくても良いけど、今日一日通じて思ったん感想としてだよ？……………もしかして迷子になりやすいタイプ？」

「……………はい、方向音痴です……………」

気恥ずかしいが、手遅れにほどがある。既に殆ど彼にバレてるので大人しく白状すること。

勿論、方向音痴になりたくてなっていない。こればかりは治しようがない。

「俺の妹も迷子の天然記念物並みやからな。いつつも対策としてやってるのがあるんやけど……………まあこれは無理やな」

「私じゃ駄目なの？」

「そういうことじゃないんだよ」

なんかここだけは譲れない。そんな対抗心が私の中で燃え上がる。

自分でも抑えきれないほどの自分に驚く私もいた。

「妹さんと一緒のこと、私にして欲しいなあ。そうすれば、これから私達のはぐれることがないってことでしょ？」

「……………今日は人も多いしな、しょうがない」

彼は渋々と言った感じで諦めた。

小さく「いつも通り……………いつも通り」と呟く彼にちよつと私もやらかした感が芽生えてきて不安になる。

「ん」

と、彼は右手を差し出す。

「……………?!?!」

「いや……………手を繋ぐんだよ」

「手を繋ぐ……………ふえ!?!」

思考がパニック。

男の子と私が手を繋ぐ? いやいやいや、そんなカップルみたいなこと……………でも、二人で来てるから今更では?

といつの間にか、導かれるように私は何故か彼の掌をじっと見つめている。

「蒼真君の手……………綺麗」

「そか？ ドラムの練習で結構ひどいもんやと思うけど」

「だからこそだよ。うん……………すごい……………ドラマーの手をしてる……………」

彼の手は私より大きくて何より逞しい。

きつと絶大な練習量で傷ついて、より強く治ることを何度も繰り返したのだろう。繰り返して、また傷ついて。そうして人は立派に成長していくと私は知っていた。

「……………やっぱり止めようか？」

ぺたぺた、と掌を触る私に彼の照れ臭そうな声が飛ぶ。

あ、ごめんね！と私は彼の手を離れた。

「ううん……………やる。手、繋ご？」

そう言うとは彼の手を掴んだ。そして、彼の隣に肩を並べる。

これには彼も慌てふためく。

「え？ か、花音さん？……………唐突やな」

「あ、蒼真君。やっと私の名前言ってくれた」

「名前？」

「うん。蒼真君、なかなか私のこと呼んでくれないんだもん」

と言つても、彼に全ては分からないだろう。これは私の小さな競争心に過ぎないのだから。

朝、集合した時だ。彼は先週会ったばかりの彩ちゃんを名前呼びしていた。それが少し胸に引つ掛かる感触がして、あまり気分が良いものでないのは覚えている。

「そうやつけ？」

「彩ちゃんはもう名前にちゃん付けだもんね」

「それは本人からそう呼ぶようになって言われたからやぞ？」

「……………なら、私も、ね？」

いつになく積極的な私。

それはきつと手を繋いでるせいだ。彼の肌から伝わる温かさが私を混乱さしているからに違いない。

「花音ちゃん……………で良いのか？」

「え!? あ……………うん」

びつくりした。何の前触れもなく言うんだもん。

「なら、折角やし言うけど、自分では気づてへんのかな? いつの間にか敬語が外れてる気がするんやけど」

「わ、私が? そういえば……………ホントだね」

「まあ俺は今のままで構わんよ。そっちの方が花音ちゃんらしいし」
彼の指摘について頷いてしまう。

本人は気にしないと云つてくれているが改めて言われてしまうとどうしても意識してしまふ。

「じゃ、じゃあ！行こー！」

「おおつ、と。花音ちゃん、そっちじゃないよ」

「……………むう」

——この後。

私達は予定通り、イルカショーを観賞して思う存分に楽しんだ。水飛沫が飛んできた
り、イルカの派手な回転ジャンプに、とショーは無事に成功を収める。

ショーが終わる頃にはもう夕暮れ。遅くなるわけにもいかない、と彼は帰ることを提
案し最寄り駅まで一緒に帰ることに。

電車に乗るまで手を繋いでいたという事実にお互い照れてはいたけど……………。

それを含めて今日は充実した一日と言える。彼も同じことを思っているのかな。
思ってくれてたら嬉しい。

「んじゃ、また」

朝、出会った場所でその日、彼と別れた。

ただ、朝と違うのは、朝に感じるもののなかつた空虚感を誤魔化すように私は帰り道の最中、今日の戦果であるクラゲキーホルダーの感触を味わっていたことぐらい。そのまま、自分の気持ちに整理をつけることはなく、私はその日を終えることにしたのであった。



羽沢珈琲店内。

「それで花音ちゃん、水族館はどうだったの？」

あの水族館デートから数日後。

偶然のタイミングで学校からの帰り際に彩から直々のティータイムの誘いが来たので、花音は約束場所に指定された羽沢珈琲店に立ち寄っていた。

こんな質問が飛んできたのは彩の向かいに座り、店員兼友人のつぐみにドリンクの注文を頼み終えたその時である。

「え？」

「え？じやなくて!!私にも聞かせてほしいなあ」

「そんなあ……誰にも話してないから」

「なら、尚更!!ね?お願い!」

「うん……」

若干の照れと一緒に天井を仰ぐ。

「とは言ってもね、あの日は予定通りに蒼真君と水族館に行っただけだよ?あ、クラゲキーホルダーも無事に買えたんだ」

バッグに付けてあったそれを見せる。

ただ、彩はそんなことでは満足してないようだ。

「そうじゃなくてね、ほら!……どう言えば良いんだろう……」

「うん?」

「あ、蒼真君とは何か進展あったの?」

「進展?」

果て、何のことやらと首を傾げる花音。

その反応に彩はこれはまさかと言わんばかりに問い詰めることに。

「え？花音ちゃん…………蒼真君の事、好きじゃないの？」

「ふえ!？」

「勿論、ラブの方だよ？」

「ふえー!?!違うよ!?!」

一気に熱が頬に帯びる花音。

「てつきり花音ちゃん、蒼真君の事を好きだって思ってた…………」

「確かに蒼真君は良い人だけ…………」

「だってだよ、花音ちゃん。蒼真君と喋ってる時、とつても嬉しそうにしてたから」

「えっ!?!ほんと!?!」

思わず両手を顔に当ててしまう。

まだ少し頬が熱いことが肌を通じて己に伝わってしまう。

「本当に蒼真君の事は好きじゃないの？」

「……………分かんない。蒼真君とはまだ知り合ったばかりでお互い知らない事が多いだろうし……………でも、あの日から蒼真君の事を気になってるのは確かで……………え、あ、これは違うから!」

「うん、そうだね〜そうだもんね〜」

「もう！彩ちゃん！今のは違うから！忘れて!!」

わたわたとする花音にたまらず微笑んでしまった彩。内心では、これは面白い展開になつてきている、と気持ちが生々浮き浮きしてしまっていた。

「花音ちゃん、お待たせ〜つてあれ？花音ちゃん、どうしたの？」

「つぐみちゃん!!それがだよ、花音ちゃんが恋を——」

「彩ちゃん!」

花音はまだ恋を知らない。花音にとってまだ男の人は怖い存在のイメージが定着していた。

——私って……蒼真君の事……。

でも、この日を切つ掛けに恋の一端へと足を踏み入れてしまった。今はわからずとも、彼女は後に知ることになる。

—2の1—『Shopping』*

◇◇◇

駅前広場。

「ん？あれは………」

偶然とも言えるのかな。

あの見覚えのある赤い服装。あれは俺らのボーカルがいつも着ているやつだ。

俺は声をかけるべきか迷った。どうやら奴が誰かとお話し中という判断からである。

また次の機会で良いや、と思考を巡らせながら歩き続けると、奴の背中から徐々に別の人影が見えてきた。

ふと、気になったので誰だろうと確認した。

——そして、俺の足が止まる。

あの爽快な空模様を思い出す髪色をした少女。俺の知ってる人ではあの人しかいない。

”松原花音”ちゃん。

たまたま髪色が一致した別人の可能性もあるだろう。きつとそうだ。俺らのボーカ

ルと花音ちゃんにはそもそも接点が存在しない。二人が此所で会話をしているなど意味不明だ。

でも……………。

「……あの……………それは……………」

「……ちよつとで良いんだよ。教えてくれないか？」

「……わ、私……………っ!!」

うん、わたわたししてる。花音ちゃんだ。

彼女は目の前に意識を持っていかれているのか後ろ越しの俺に気づく様子はない。

両方とも知り合いなので、変な方向へ話は行かないだろうが花音ちゃんが困っているのも事実。

「……………めんどいな」

愚痴を溢しつつ、二人に近づくことに。

「あんたって確かこの前の合同ライブにいたはずだろ？ だったら少しでも良いから教えて欲しいんだけど」

「で、でも……………知らない人には……………」

聞こえた感じ、ボーカルが無理に詰め寄って、花音ちゃんがそれに四苦八苦しているようだ。

本来の奴はあまりしつこく迫ることはしない性格なので、俺が慌てることはない。が、花音ちゃんの方は明らかに限界に近付いてきている。

「おーい」

「ん？………お」

「えっ………」

軽く呼んでようやく二人が反応した。

シンクロ率MAX並みの華麗に一致した動作で二人はこちらを見る。

「蒼真か」

「蒼真君!!」

次に、二人して俺の名前を呼ぶ。

「「………え？」」

そしてまた顔を会わせた二人。

その反応の一部始終をくつきり見てしまった俺。

つい一言が漏れてしまう。

「お前ら、知り合いちゃうんかい」

◇ 駅前広場。

「……花音ちゃん。こっちが”秋野藍斗”。俺らのバンドのボーカルね。同い年やから敬語はなくても全然構わん」

「う、うん。分かった」

「はあく。んで、藍斗や、この子が”松原花音”ちゃん。俺と同じドラマー。天使。以上」

「おうよ」

「て、てんし………?」

話を纏めよう。

どうやら事の発展は我らのボーカル、藍斗のせいらしい。

断定は出来ないが、駅前で花音ちゃんを偶然見かけて声をかけたは良いが話が噛み合わなくなつて困り果てていた。そこに俺がちょうどよく登場した、とのこと。

……俺、花音さん関連だとびつたりのタイミングで毎回登場してる気がするな。

「それより、藍斗」

「ん？何？」

「なんでこんな所で花音ちゃんに喋りかけてんだよ。ほら、お陰で怖がつてるやんか」

花音ちゃんは藍斗視線では俺の背中に隠れるように配置取りをしていた。指で少し自分の服をつままれる感覚も何となくする。

藍斗が怖かつたのだろうか、花音ちゃん。分かるよ。こいつ、茶髪だからパット見、チャラそうにしか見えない。

恐る恐るこちらの様子を伺う藍斗は諦めたように本音を口に出す。

「名前を聞きたかつたんだよ」

「…………ナンパやない？お前…………」

「ナンパ？…………ち、ちげえよ!？」

なら、何だというのだ。

見知らぬ女の子に名前を唐突に尋ねる現象を他に言い表せる言葉があるのか。

「バンドの方だよ!？」

「え……………？」

これは俺ではない。花音ちゃん。

よし。大体、大まかな状況は掴めてきた。こいつの悪い癖が引き金となっている。

藍斗は昔から言葉足らずな少年であった。肝心なときに肝心の要素を無意識にふっ飛ばしてしまうので、勘違いされることも日常茶飯事。

その癖は高校生になっても変わらない。

「花音ちゃんのバンド名はハロハピ」

「う、うん。」ハロー！ハッピーワールド” って言います……………はい」

「ハロハピ……………そう！それ！それだ！」

藍斗の声に驚いた花音ちゃんがぎゅつと俺の服の端を握りしめた。

そして、こいつは理由を語り出す。

「この前の合同ライブの時に出てたのは覚えてたけど、バンド名をどうしても思い出せなくてさ。その時にあんたを見かけたからつい！すまん！」

「あ、はい……………そういうことなら」

藍斗が頭を下げた事に花音ちゃんも少しは警戒心を緩めたようで、俺の隣へと移動してきた。

「そう言えば、藍斗。時間は大丈夫なんか？何か大事な用事あるとか言っとったやろ」

「……………お、お!? ヤバイ!? 遅刻してまう!? じゃ、オレ、もう行くから!!」

そそくさと退散する藍斗。

相変わらず一つ覚えると一つ忘れる馬鹿の象徴みたいな行動しやがって。

ライブでの藍斗のボーカルの実力は素直に認めてるのだが、こういうプライベートになると一気に墮落してしまうのだから人はそう簡単に行かないものだと思おう。

他のメンバーも藍斗と似たようなめんどくさい部分を持つてるのだから毎回纏めるのには一苦労。

さてと。

今は置いてきぼりの花音ちゃんのアフターケアをするのが最優先事項だ。

「ごめんな、花音ちゃん。あいつ、悪い奴ではないんやけど……………馬鹿な奴なんよ」

「ううん。私こそ変な勘違いしてたみたいだから。お互い様だよ」

この件はどちらにも非がない。

というのも少しおかしい気もするが、藍斗のあれに慣れるのには時間がかかる。

今回は俺が早めに仲介に入れてたので一安心。

「あ、そういえば……………」

「どうしたの?」

俺はここで重要な事を思い出す。

「藍斗の奴、彼女おるで。れっきとしたリア充やな」

「ええっ!？」

ナンパ?と俺が呆れて聞いたのもそれが理由の一つ。とは言え、藍斗がナンパをするとは思っていないかったが。そもそも恋愛面では相当のヘタレだし。

話を戻すが、俺は藍斗の彼女さんとは数回会ったことがある。特徴を上げるとなると、年上の包容力高そうな女の人。なので藍斗のあの癖も普通に見抜くぐらいの寛容さを備えている。

花音ちゃんにはこれが相当衝撃の事実だったようで、驚嘆してるまま停止。

と、思えば、視線を下に向けて小さく口を動かす。

「……………蒼真君は……………」

「んっ。」

「……………ううん。何でもないよ」

花音ちゃんが何か言おうとしていたのは気付いたが、まったく聞こえなかった。

本人が首を横に振って微笑みを見せてくれるのだから下手な追求は出来ない。

「それよりも蒼真君はどうしてここに?」

「買い物。最近、欲しいものが店に入荷されたって聞いてな。暇がある内に買いに行こうかなっと思っ」

「ほんと!? 私も今日は買い物行こうかなって思ってた……それで……折角だから……」

モジモジと恥ずかしそうに人指し指を合わせる花音ちゃん。

「助けてもらったお礼も兼ねてなんだけど……買い物、一緒に行かない?」

花音ちゃんは小首を傾げる。

顔をトマト以上に真っ赤にして、加えて花音ちゃんの目元もうるうるとしてしまっていた。彼女が決死の勇気で告げたのだと思いきらされる。

もう、これは……断れまい。

「全然いいよ」

「ああ……良かったあ〜」

「俺が責任もって、花音ちゃんが迷子にならないように見ておくわ」

「え、え?……あ。そ、そういうことじゃないよ!? もう!!」

からかわれた、と気付いた花音ちゃん。違う意味で頬を赤く染めていた。

可愛い、と脳内思考を埋め尽くされていた俺は近くに詰め寄ってくる彼女の懸命な抵抗を適当にあしらう。

「ほら、まずは切符から買うよ。お金はー」

「流石にそれぐらい分かるもん!! 蒼真君!! 私のこと、馬鹿し過ぎだよ!!」

「ははは」

一回目はファーストフード店。傍らには彩ちゃん。二回目は駅前広場。藍斗が引き金。

——なんともまあ花音ちゃんとは奇妙な再会続きなこと。

「蒼真君、早く行くよ」

「花音ちゃん……だからそっちじゃないって」

「えっ!?!」

「……嘘やで」

「っ!?!?!?!」

俺はそんな思考を心の片隅に押し寄せ、不機嫌気味の花音ちゃんと共に電車に乗るのであった。

—2の2—へ続く。

— 2 の 2 —



シヨツピングモール。

「……………ようやく着いたよ」

予感はしていた。

具体的には駅を降りて改札機を通った直後からだ。花音ちゃんの足が止まり、左右をキョロキョロし出した。

もうこの段階で俺は気付いていた。

——この子、既に迷つとる……………と。

「うん、思ったより駅からすぐ近くだったね……………」

「やのに、お陰様でこの辺りの地理を一気に知れた感覚を味わうことになるとはね」

「……………ごめんなさい」

あそこで右を選べば、即目的地着。

なのに、花音ちゃんは見事に左を選択した。俺はこの駅で降りるのは初めてで尚且つ花音ちゃん自身が人の力を借りずとも辿り着けると宣言したので後ろを付いていくだ

けだったが、それが不幸の始まりとは。

兎や角言つても、時間は戻つてこない。それほど時間をロストした訳ではないので気を取り直して行こうと心掛ける。

「花音ちゃんは何を買いに？」

「服……………かな？」

「かな？」

「あつ、うん！お洋服を買いに来たの！」

誤魔化そうとする花音ちゃん。

でも、今明らかについさつき考え付いたような感じがしていたのだが。

「んじゃ、レッツらゴー」

「あつ……………」

「どうかした？」

「ううん、何でもない。早くいこ」

とは言いつつ、花音ちゃんの視線は俺の手元へとチラチラ伺うかのように動いている。

成る程、そういうことか。

「ん」

俺は右手を差し出す。

「えっ?」

「花音ちゃん専用迷子対策」

「もう!」

言葉とは裏腹に彼女は俺の手を掴む。

またはぐれられても困るから。特に両者とも未知の土地となれば尚更。手を繋いでおけば、そんな不安も解消される。そういう理由で俺は彼女に手を差し伸べた。

………本当にそれだけか?

隣にいる花音ちゃんはニコニコしている。

俺と手を繋ぐのが嬉しいのだろうか。そう思ってくれていたら正直、俺も嬉しい。でも、同時に気恥ずかしい。

——考えるな。自分はあれを忘れたのか。

………昔の記憶が過ってしまった。

一気に興が冷めたような感覚を覚えてしまう。こんなもの、とつとと捨て去りたいのに。

「蒼真君? どうしたの? 行く?」

「あ、ああ………」

俺はこの気持ちを胸の奥にしまった。
だって、これは二度と思い出してはいけない過去の造物なのだから。

◇◇◇

ショッピングモール。

「……………やつぱ、花音ちゃんも女の子やん。ヤバ」
「むうー。それ、どういう意味なの〜？」

おーらら。聞こえてしまっていた。

買い物を終えた俺と花音ちゃんは同じショッピングモール内の全国展開のファミレスで昼食を摂るつもりで席に座っていた。

既に注文は終えて、料理待ち。その時間に先程の会話が発生した。

俺はちらりと足元を見る。

「んや、随分と買いましたなあーって」

「そういう蒼真君は逆に服に興味が無さすぎると思うよ。ライブの衣装とかどうしてるの？」

彼女の足元には数個の紙袋。

中身すべてが今日の戦果である。俺には無縁の物体が数多く存在していた。

花音ちゃんが試着した際に感想を求められたのでそれなりに上手く返してはいたつもりだが、此所まで大量の荷物になるとは予想外。

「ライブの服は妹にパス。もしくははその日の気分次第」

「っ!!そういうのは良くないよ!」

俺の答えは花音ちゃんには不合格の様子。そうは言われなくても、実際にあまり関心が無いので必然的にそうなってしまう。

「決めました」

「……………ワッツ？」

「ご飯食べたら蒼真君の服を買いに行きます」

「Oh……………それはありがたいんやけど、花音ちゃん、あのね？」

「ふえ？」

暴走モードに入りつつある花音ちゃんを落ち着かせる。

「俺の用事も先に済ませちゃって良か？」

「あつ、そ、そうだよね……………今日は蒼真君が付き添ってくれる予定じゃなかったもんね……………」

「ごめんな。花音ちゃんとの買い物はいつでも大歓迎やし、俺の服についてはまた今度にもでも一緒に行こうな？」

「また今度……………うん」

どうにか納得させる事に成功した。

このままだと、俺の財布の偉人達はあつという間に亡き者へと変貌してしまったであろう。

何故か頬を少し赤らめた花音ちゃん。

「あつ、そうだ……………」

すると花音ちゃんは何かを思いだし、足元の紙袋の中を探り出す。俺は不思議そうに彼女のその動きを見ていた。

やがて、花音ちゃんは一つ小さな袋に包まれた何かを取り出した。それを俺の方へと両手でそつと差し出して来る。

「はい、これ。朝のお礼です」

「え？いつの間にか買ったん……………ありがとう」

「どういたしまして」

笑顔を見せる花音ちゃん。

俺はじつと彼女からのプレゼントを見ていた。あまり異性から貰ったことがないので、どういうリアクションをすれば良いのか分からない。

「これは？」

「リストバンドだよ。男の子に選ぶのは初めてだからお気に召さないかもしれないけど……………」

「リストバンド……………初めて……………」

「えっ、いや……………あの……………深い意味は……………」

両者ともに気不味い空気が。

あ、あのですね。そういう情報を言われましても理解が追いつかないと言いますか。何と言いますか……………ともかく。

「うん、花音ちゃん、ありがとね。大事に使わせて貰うから」

「はい……………」

まだ花音ちゃんは復活しない。

「お待たせしました！御注文の品でございます！」

ここで料理が運ばれてくる。

お互い無言のままに店員さんが料理を目の前に置いていくのを眺める。

店員が席から離れると、目の前から食欲を刺激する憎たらしい匂いが醸し出す。

「取り敢えず食べようか」

「……………そうだね」

「いただきます」

「いただきます」

この後、料理は美味しくいただきました。



とある駅。

「んじや、こつちやから。足元とか気を付けてね」

次は蒼真君の買い物。

私は彼の誘導に付いていく。迷子対策などと不服であるが、今もちゃんと私の右手は彼の左手と繋がっている。そして、それを考慮してなのか、彼はゆっくりと移動する。

蒼真君は細かな気遣いが得意。繊細な性格の持ち主。しかも、それも黙って行うことが多い。私はちゃんと気付いていた。

今も歩道を歩いているが、道路側を彼が歩く。たまたまかもしれないが帰りは繋ぐ手が逆になるので彼は意識して行動していることが分かった。

さらにさっきの買い物だって、彼の性格が出ていた。新作衣服の試着の時に思わず彼に感想を聞いてしまったが、彼は困る顔を一つせず丁寧に答えてくれた。

ファッションに興味がない、分からん、知らんと口では言いつつ、ちゃんと他人の服装は事細やかに見ている彼。なのに、肝心の自分が疎かになっているのは私のファッション魂が許せなかった。

故に勢い目掛けてあんな発言をしてしまった。後悔の気持ち精神を支配しつつ、結

果的にまた彼と出掛ける約束が取れたのは結果オーライでもある。

こんな彼の性格だからこそ、彼のドラムにもその影響が出ているんだね、と一人納得しながら私は知らない道を歩いていく。

「どこに行くの？」

「んーもうすぐ着くから」

こつこつと彼は目的地を教えてくれない。

もやっとした感触を胸に抱きながら、私はひたすら彼と一緒に歩いていく。

——数分後。

「ハハハ」

「ハハハハ」

彼の足が止まり、到着したことを知らせてくれる。私は眼前にある建物の看板へ視線が移る。

でも、文字が掠れて読めなかった。

「中は楽器店やな」

「楽器店？」

だとすると、老舗の類だろうか。

「んじゃ、入るよ」

彼は私の手を離し、店内へと入る。

「えっ、まつ、待つて！」

置いていかれた私は慌てて彼の背中を追いかけるのであった。

— 2 の 3 — へ続く。

— 2 の 3 —

◇◇◇

古びれたビル。

「はいは………」

私はゆっくり店内を見渡す。

古びた木材の香りがする。加えて、天井近くの壁際まで綺麗に並べられて展示された楽器がより一層、部屋の狭さを際立てている。

正直、居心地が少し悪い。

まだ此処の空気に慣れていない、という理由がその大半を占めるとは思うけど、今の私にとつてはあまり長居は遠慮したい場所。

唯一頼りの蒼真君は入店してから迷うことなく、受付テーブルの方へと歩いていく。置いていかれたくない私はそそくさと後を付いていった。

やがて、蒼真君は受付前で足を止める。

「あ、蒼君じゃない。いらつしやい」

「(無沙汰です)」

店奥の受付に座っていた年上の女の人。

「蒼真君はその人と会話を始めた。私は後ろから眺めていた。元から二人は知り合いらしく、女の人は蒼真君に気付くと椅子から立ち上がり受付のテーブルまで動いていた。」

置いてけぼりの私。それが何だか少しだけモヤモヤする。

今日だけでも、私の知らない蒼真君ばかりと遭遇する。彼と会って一年も経っていないので当たり前だと言え、当たり前前だけ。

それでも、少しずつだけ彼の事を知ることが出来た、とポジティブ思考にすれば、モヤモヤ感から救われた気分は味わえる。

「それで、例のものは？」

「奥に並べてあるよ？取ってこようか？」

「いえ、大丈夫です。もしかして桐山さんもそっちにいます？」

「うん、いると思うよ」

頷いた蒼真君は左奥の別の部屋へと向かうのか、また離れていく。私は彼の後ろを追いかけてようか迷ってしまう。

「あれ？」

と、声がかかる。

反射的に視線を向けてしまうと、先程蒼真君と話していた女の人ががつつり目が合ってしまった。

女の人がにこやかに笑顔を浮かべる。

「蒼君の付き添いかな？」

「え？あの、あ、はい！」

「ふふ、緊張しなくてもっとリラックスして？取って食べる訳じゃないんだから」

唐突な質問に声が裏返ってしまうが、女の方は優しく返してくれた。この人、いい人だ。

ふー、ふー、と深呼吸を繰り返して心を落ち着かせる。気がつけば、蒼真君の姿は完全に見失ってしまった。

「蒼君の彼女さんかな？」

「ふええ!?!ち、違います!!」

「なるほど。少なくとも脈ありね……………」

姉さんの質問に私はもうパニック状態。

全力で首を横に振る私にはお姉さんの微弱な呟きなど耳に届かない。

「でも、珍しいこともあるんだ」

「……………どういことですか？」

私の問い掛けにお姉さんは答える。

「蒼君、いっつも一人で来るからね。誰かと来る、それもこんな可愛い子を連れてくるとは……………」

「可愛い……………」

私の頬が熱を帯びてしまい、熱い。

こんな目に遭うのなら、心の準備をしておきたかった。

「蒼君も罪だね」

「えっと……………」

「あ、そう言えば名前をまだ聞いてなかった。名前はなんて言うの？」

「松原……………花音です」

「可愛い名前。花音ちゃんって呼んでいい？」

「はい」

「よし、覚えた。私は夕ゆうつて言うの。よろしくね」

「ゆ、夕ゆうさん……………」

どうにか私は会話を付いていく。

ほんわりした喋りでどんどん攻めてくる威圧感はこの人にしか出せない、と私は肌身を持って感じた。

「にしても蒼君も女の子を楽器店にデートに来るって何考えてるんだろうね？」
「デ、デート!？」

「うん、デート。ここに来る前も何処かに行ってたでしょ？」

「どどどうして分かるんですか!？」

「それはだね、蒼君が此処に来る時はいつも午前中の間に、だからだよ。でも、今日は午後に来たから寄り道でもしてたのかなって。さて……………花音ちゃんの手荷物を見る限り、寄り道はデパート辺りかな？」

「……………その通りです」

「蒼君、全然服に興味ないでしょ？」

「そ、そうなんです!!……………はっ!？」

共感してくれる人について本音が。

「うん、結構がつつりデートしてるね」

「はい、……………」

この人には反論しても無駄だと学んだ。

蒼真君のファッション無関心ぶりも知っている夕さん。となれば私にとって、蒼真君と夕さんの関係が気になってくる。

「あの……………」

「ん？」

「夕さんって……蒼真君の事はいつから知ってるんですか？」

「気になる？」

「やっぱり、この人、苦手。」

「乙女な返答をありがとう。顔、真っ赤だよ？」

「ふええ……」

「あはは。これは後で蒼真君に一言言っておかないと。お礼に花音ちゃんの知りたいたいと、答えるね。結論から言うと、蒼真君は小さい頃から知ってるよ」

夕さんの答えに私の目が点になる。

蒼真君の幼い頃を知る人物が今、私の目の前にいるのだ。

「関係で言えば、そうだね……蒼真君のバンド、あるでしょ？」

「はい」

「そのバンドのベースの実際の姉さん」

「な、なるほど……」

「私の弟と蒼真君が中学生から友達で、よく此処に顔見せてくれたから自然と……ね」

夕さんはそう言葉をくくる。

蒼真君のバンドのベースさんの姉で、実家が楽器店を営んでいるから蒼真君もよく夕

さんと会う、ということらしい。

「まあ此処も来月には閉まつちやうんだけど」

「え?! 閉店するんですか!?!」

「あー、違う違う。ごめんね、単なる移転だよ。此処、お爺ちゃんが経営主だけど、もう歳でしんどくなつてきたらしくてね。折角だし私の両親の住んでる所でやることにしたんだ」

「移転………よ、良かったです」

移転と聞いて胸がほっとする。

私は初めて来たとは言え、蒼真君にとっては思いでの場所。それが消えるのは心苦しい。

「花音ちゃん。蒼君、ああ見えてなかなか本音は言わないから、もし攻めるならとことん攻めること、と私からのアドバイス」

「どういうことでしょうか……!?!」

「若い内に頑張りたまえ、恋する少女!」

「は、はい!」

氣迫に負けて返事をしてしまう。

夕さんが右手を天に向けて上げるから私もしなくちやダメかと思ひ、左腕を上げる。

——この最悪のタイミングで私は一番最悪の人の声を後ろから聞いてしまった。

「何やってんの？」

「そ、蒼真君!? 見見見た!？」

「思いつきりガッツポーズしてんね」

「ふえええ!! 夕さあああん!!」

「はい、よしよし。渾身のブロウが入っちゃったね。蒼君! なんてことしてんの!」

「いや…………聞かれたからつい」

夕さんの胸元へ抱きつく私。

蒼真君は夕さんに軽い説教を頂戴してしまう。

これは事故。事故なのだ。

「花音ちゃん、置いてけぼりにしたの思い出して帰ってきたんやけど……………」

「蒼真君、それは?」

ぶつぶつしてる蒼真君が両手で重たそうに抱えている物体にようやくと言った感じで私は見た。

あの形状はスネアドラムかな。

「今日はこれ目当てで来たんよ。これ、普通のスネアやなくて、なんとウッド製のスネア!」

「へえー」

「……………まさか興味なし?」

「そんなことはないよ?私、ウッドスネアを生で見たの数回ぐらいだから」

自慢そうに嬉しそうに言う蒼真君。

そんなに喜ぶなら、もう少し私との今のこの状態も嬉しそうにしてほしい気持ちもぼちぼちある。

そして、端を見ると夕さんが驚いた様子でいた。

「え?もしかして花音ちゃん、楽器とか行ける口?」

「もしかしても何も花音ちゃん、俺とおんなじドラマーだぞ。だから、連れてきた」

「あーそれは夕ちゃん、びつくり!」

夕さんは私のこと、どういう目線で見ってたのだろう。気になってしまう。

「なので、夕さん」

「ふえ?」

「え?私の真似!?!」

「あ、気にしないで。何?蒼君」

「いつも通りこれをあいつに持ってくるように伝言をお願いします」

「いつも通りね、分かった」

「それと花音ちゃんのご案内もお願いしていいですか？」

蒼真君は夕さんにそんな提案をする。

夕さんが楽器の案内をしてくれるのはとてもありがたい。けど、あわよくば——

「それは無理かな」

「え？ どうしてです？」

「花音ちゃん、蒼君にやって欲しいみたいだよ、ほら」

蒼真君の目がこちらに。

恥ずかしくてつい私の目線は床とご対面してしまう。ううー、私のバカ！

「お、お願いします……………」

勇気を絞りに絞って出した一言。

蒼真君を見れない為、緊張がじわじわと私のからだ全身を包み込む。返事が返ってく

るこの時間がやけに長い、そんな気もしてくる。

「やれんことはないんやけど……………」

「ほーら、そこで渋らない！ 後は私がやっておくから大人しく行ってこい！」

「へーい」

と、私の手が握られる。

「花音ちゃん」

「は、はい……………」

顔を上げるとそこには蒼真君が。

近い。近い。顔が近いよ。

「うわあ……………後で弟にも言つとこ」

今日一番の急接近に私の心臓の鼓動がばくばくと跳ね上がっていく。顔が真っ赤にまっつてしまう。

こうなつてしまえば、最早私は理解せざるを得なかつた。

——私、松原花音は蒼真君を好き。

今日、彼に対する気持ちをはつきりしようと目標にして挑んだ。その答えがこれ。

「なら、俺のいつも使つてるの教えれば良いんかな？こつちやから付いてきて」

でも、同時に次の目標は決まつた。さつき夕さんのアドバイスもきつとこれのことを指しているはず。

次の目標。それは——

◇◇◇

C i R C L E。A スタジオ。

「それじゃ、皆さん、片付けしてください」

美咲の合図を切っ掛けにハロハピのメンバーは各自の作業へと散っていく。今は練習も先程一段落つき、撤収している最中。

「花音さん」

「どうしたの？美咲ちゃん」

三バカを横目に美咲は花音の座るドラムの近くへとやって来ていた。

実は美咲には今日の練習を通して、気になることがあったのだ。それを確かめようと花音の元へ。

「今日はやけにドラムが楽しそう？みたいな感じでしたけど……何かありました？」

「そ、そうかな？いつも通りだけど……」

「なら良いんですけど……あれ？」

「美咲ちゃん……？」

美咲の視線は花音の手先へと。

「スティック、変えました？」

「やっぱり美咲ちゃんにはバレちゃうね……」

「ということとは？」

「うん、蒼真君のお薦めで試しに使ってみてるんだよね、このスティック。でね！美咲ちゃん！これがとつても使いやすいんだよ！」

「は、はあ……」

「つい思わず今日は派手に叩いちやったけど、まだ予備はあるから大丈夫。うん」

「予備……ですか」

口がひきつり気味の美咲。

「うん！本番用と予備用、それに保存用があるから」

「……」

この時、美咲は思った。

——蒼真さん。せめて花音さんだけは私の味方のままにしてください。そっちに行かれちやうと私の限界まで一気に………ほんと、無理なんです。

「あ、もうスタジオ出ないと」

ステイックを頬擦りした花音を美咲はそつと私は見てない、そうだ見ていないのだ、と心に決めたのであつた。

松原花音編—2—『Shopping』 終

— 3の1 — 『consultation』*



都内の喫茶店。

「今日はありがとうね」

窓際のテーブルに腰かける二人の少女。

ライトブルーな髪をツインテールに括った少女は、松原花音。対して、ブラウン髪をポニーテール風にしてあるもう片方の少女の名前は、山吹沙綾。

「いえ！ 急な誘いだっただのはびつくりしましたけど今日は練習もないので全然大丈夫です」

「うん………本当にごめんね」

「謝らないでくださいよ。反応に困りますって」

二年生と一年生。

ドラママーという共通点があるとは言え、上下関係はちゃんとしておきたいのは沙綾の意思である。

でも、花音がしつこいほど罪悪感を感じているので対処に沙綾は困ってしまう。

沙綾に連絡が来たのは一時間ほど前。大事な用件があるとそこに書かれており、沙綾は約束場所に指定されたこの喫茶店に足を運んでいた。

「それで話つて言うのは……………」

「あ……………うん。そうだよね……………」

言葉の切れが悪い花音。

その一部始終を見ていた沙綾は恐る恐る己の予想を口に出すことに。

「山吹蒼真について……………ですね？」

「ふえ!? な、なんで!？」

「私への相談なので、花音さん先輩と私の繋がりからじっくり考えてみて……………ドラム、もしくは蒼真関連の二択が真つ先に思い付いたんですけど……………」

最後の決めては勿論ある。

「もしドラムの相談なら、花音さん先輩は蒼真本人に言うんじゃないですか？」

「えつと……………それはその時にならないと何とも言えないけど……………」

「なら」

「うん、今日は蒼真君の事で沙綾ちゃんに聞きたいことがあつて……………」

「私に答えられることなら何でも」

「ありがとうね、沙綾ちゃん」

——あく……………そうだよね。

花音の微笑みに沙綾の胸は何故かきつくなる。

ざわつく不安なこの感情を沙綾は目の前の彼女に悟られぬように必死に抑えていた。

「まず……………なんだけどね」

「はい」

「沙綾ちゃんと蒼真君って……………付き合ってたたり？」

「そんなことはないですよ？今も昔も親戚の関係のままですし」

「あつ、そうだったね……………なら、蒼真君って……………その……………今、彼女さんとかは

……………居たりするのかな？」

「ソウ君の彼女……………うーん……………」

びくびく、と返答を待つ花音。

あまりのその華麗な待ち姿に沙綾の心ではいたらずら心が芽生え始めていた。

「いたらどうするんですか？」

「えっ!？」

「どうするんですか？」

「もしそうだとしたら……………私は……………諦めるだけ……………だね」

「告白はしないんですか？」

「告白っ!? そんなの私には無理だよ!」

「それじゃあ花音さん先輩の片想いになりますよ?」

「……………うん、そうなっちゃうね……………」

「ぷっふ……………あはは!!」

「ふえ?」

顔を真っ赤にして否定する花音にたまらず沙綾は我慢できずにととうとう大爆笑。理解が追い付かない花音はポカーンとただ沙綾の笑う姿を眺めるだけ。

一笑いして落ち着いた沙綾はゆっくりと花音に対して説明をしていく。

「花音さん先輩、ソウ君が好きなんですネ」

「ふええ。私ってそんなに分かりやすいのかな……………」

「先程の会話を思い出してみてくださいね。私、花音さん先輩がソウ君を好きなのを前提で話してるんですよ?」

「えっ? あつ、確かに。言われてみれば……………」

「私だったから良かったものの、今後は気を付けてくださいよ。特にソウ君本人に気付かれてしまうと堪ったもんでもないですし」

「お勉強になりました……………」

一手を盗られてしまった花音。いつにもまして萎縮してしまっている。

これは流石にやり過ぎたか、と思った沙綾。

ちゃんと質問に答えようとした矢先――

「それにしても、こういう所は二人とも従妹らしく似ているんだね」

「え？ どういうことですか？」

「蒼真君と沙綾ちゃん、どっちもイタズラ好きな所」

「ソウ君は否定しなさいですけど、私はそんなにですよ？」

「なら、蒼真君のイタズラ好きが沙綾ちゃんに移っちゃってるのかもしれないね」

「……………」

自分の無意識を他人に指摘される。そうなってしまった人は気恥ずかしい気持ちに包まれるものだ。

余計な事は考えまいとした沙綾は誤魔化すかの如く話題を変換。

「話を戻しますね！」

「ふふ、うん」

「ソウ君……………あつ。蒼真のことなんですけど」

「どっちの呼び方でも私は気にしないから、沙綾ちゃんの好きにやっても全然いいよ？」

「すみません……………話が全然進みませんね」

「ふふ、そうだね」

からかうと可愛い。けど、やはりこの人は先輩だと痛感した沙綾。

「私の知ってる限りではソウ君に彼女はいないはずだと思います」

「……………こういう時はどういう反応をすれば良いのかな？」

「良かった、で良いんじゃないですか？」

「良かった……………」

「いや、そんなドラマ風に言わなくても」

花音に変なスイッチが入ってしまった。

「ただ……………」

「他に何かあるの？」

「うーん……………あることにはあるんですけど……………」

様々な事情が重なり、話せない。

そんな態度を見せる沙綾ごごときでは今の花音は止まらない。

「沙綾ちゃんには知ってることだけでも話してほしい。私、蒼真君のこと何も知らな過ぎるから。少しでも蒼真君に近づけるのなら……………私は後悔なんてしたくない」

「花音さん先輩……………」

「でも、同時に沙綾ちゃんには無理に話して欲しくはないかなって気持ちもあるんだよ。だって……………沙綾ちゃんも蒼真君の事、好きでしょ？」

「……………えっ?」

花音はにっこりと笑顔を浮かべる。

「今日会ってみて私、確信したんだ。沙綾ちゃんも私とおんなじ女の子なんだって」「ちよちよ!ちよつと待ってください!」

一人進める花音に沙綾の慌てぶりが目立つ。言葉の意味が徐々に飲み込めてきた沙綾はようやく否定モードへ起動する。

「私がソウ君を!?!好き!?!ですか!?!」

「うん」

「な、何でそうなるんですか!?!」

落ち着こう。

蒼真とは沙綾にとつて単なる従兄だ。ドラムの師匠でもあるが、そこに恋愛などの感情はない……………はず。

確かに、彼との時間は心地よいと思ったことはある。それだけ、それだけだ。

「あれれ?違うの?なら、ごめんね?」

「ぐっ……………」

台詞だけで見れば、花音は自らの失言を反省して謝ってるように見えるだろう。

だが実際は違う。こうやって挑発して沙綾を正直な乙女の世界へ誘っているのだ。

「正直……まだ分からないです……」

「そっか……余計なお世話だったね」

「いえ、優柔不断な私が悪いんです」

互いに話がしにくい方へと進む。

その空気を破ろうと、その場に立ち上がり両手を合わせた花音がきつぱりと宣言。

「よし、沙綾ちゃんの恋ばなは今日はこれで終わり！沙綾ちゃん、良いよね？」

「はい、分かりました！」

今日は……である。沙綾は気付かない。

「それで、話を振り返すようで申し訳ないんだけど……沙綾ちゃんがさつき言おうと

してたのは……？」

「そうでしたね。私が中学生の話です」

「うん」

「軽音部の子達から噂程度で聞いたんですけど……」

ごくくり、と息を飲む花音。

やがて、沙綾はそれを口にした。

「ソウ君にはその頃——」



後日談。

——彼女さんがいたらしい……です。

花音にとつて、あの日の沙綾の発言は彼を成している根源へと触れる一步の始まりとなる。

だが、花音本人はまだ知らない。

それが彼を苦しめていると。それから彼は必死に逃げていると。そして、それを彼は今でも掴んで放さないことを。

沙綾も知らない山吹蒼真の空白の一年間。

……扉はゆっくりと開いていく。

松原花音編—3—『Consultation』終

— 4の1 — 『Breaker』 *



あの二人が初めて出逢つたのは中学一年生の時のはず。私が蒼君と会つたのはその後だけど、多分合つてると思う。

——え？切つ掛け？

きっと軽音部に入部した一年生同士、自然と話もするようになったんだろうね。私もそうだし。蒼君はどうやらベースの子に引き摺られる感じの成り行き入部だったらしいけど何だかんだで仲良くなつてたみたい。

「ねえ！ボク達でバンドやろうよ！」

この彼女の一言が始まり。

まず、私が最初の犠牲になった。小学校からの付き合いもあつて、彼女に狙いを付けられた。リードギター担当。

次にバンドに加入したのはベース担当の光君。口数が少ない男の子だけど、その分、内に秘めている情熱は誰にも負けていないぐらい熱い印象だった。

そして最後にドラム担当として蒼君が加入した。その時、私は彼とはまったく面識が

なかつたけど真面目でクールな印象がその時私には彼に対してあった。暫くして、その印象は呆気なく崩れるけど。

ボーカル担当は勿論、言い出しつぺの彼女。

「とりあえずの目標は武道館！」

………なんて言ってる馬鹿はともかくとして。これでようやく私達四人がバンドを旗にして一つに集った。

——初代”アークラ”が始動したんだ。



羽沢珈琲店。

「……ここまでではOKかな？」

私・松原花音はその言葉に小さく頷く。

私と同居している、黒髪ショートヘアの彼女は驚くことに蒼真君と以前バンドを組んだことがある仲だったらしい。

でも、そのバンドは既に解散している。高校に進学する時にはメンバー同士が別々になつてしまい、それ以来完全にバンドとしては機能停止してしまっているそうだ。

「……………でも、やっぱり喋らないと駄目かな？今更なのは分かっているけど……………」

「それはどういう意味で、でしょうか……………」

彼女の名前は“辻原可織”さん。

前バンドでギター担当をしていた彼女。今も趣味程度ではあるものの、音楽を楽しんでいるみたい。

今日可織さんと私が出会っているのには理由がある。

沙綾ちゃんに相談を持ち掛けたあの日以来、私は沙綾ちゃんから聞いた事が忘れられずに毎日をごっこしていたのだ。

——蒼真君の元カノ……………。

蒼真君本人にその件を聞いてみようとも考えた。けど、蒼真君はきつと私達から隠すつて、沙綾ちゃんが太鼓判を押しており私もそれに賛同していた。だから、この案も

断念せざるを得ない。

具体案が出ない。そのせいで私の心の中はもやもやした感触がずっとあった。

そんな、ある日のこと。

『花音？最近あなた、変よ』

こころちゃんからその台詞が出たのはスタジオ練習の終わり頃だった。

バンドの皆に個人的な理由で迷惑をかけていたと私はその時知ってしまい、申し訳無い気持ちで胸がいつぱいになってしまふ。

『子猫ちゃん、悩み事なら私達に打ち明けるが良い。』

『かのちゃん先輩、大丈夫？』

『無理しないでくださいね』

バンドメンバーから心配の声を受けて、私は素直に打ち明けることに決めた。

——蒼真君のことなだけど……………。

こころちゃん達に相談した結果、なんやかんやのやり取りがあつて、黒服の人達に協力してもらうことになった。

そして、私は中学時代の蒼真君がバンドを一緒に組んでいた一人の存在を知らされる。

その人が”辻原可織”さん。現在の彼女が何処で何をしてるかは不明であつたけど

も、何とか連絡を取ることに成功した。

なので、こうして蒼真君の昔話を語って欲しいと彼女にお願いした。承諾は望み薄だと思っていたが、可織さんはそれを快諾。わざわざ喫茶店までご足労願っている。

「あんまり楽しい話でもないよ？」

「はい、分かっています。私はそれでも聞きたいです」

可織さんの問いに私は迷いなく頷く。

「うん、なるほどなあ……………ふーん。ソウ君、恵まれてるんだね……………」

小さく可織さんは呟く。

そこに含まれた真意は今の私には謎のまま。可織さん達の昔を私は知らない。

「じゃ、話そうか。私と蒼真君と光君……………そして”璃里亜”ちゃん。四人でバンドしてた頃の話……………」



”アークラ”。それが私達のバンド名。

「え？それって今の蒼真君のバンドと同じ名前じゃ……」

うん、そうだよ。

今のアークラはね例えるなら、“二代目”って感じかな。実はメンバー半分が初期のメンバーと変わってるんだよね。

詳細を話すと、ベースの光君とドラムのソウ君は同じ。だけど、ギターとボーカルの子が入れ替わってる。

お察しの通り、初代のギターは私ね。って言っても、私が辞めた理由は単にバンド活動するにおいて環境が悪かっただけでソウ君達と仲が悪いとか、音楽の方向性の行き違いでぶつかったとかじゃないから安心して？

なんなら今でも連絡はたまに取り合うぐらいだし。ライブも予定が会えば観に行ってるよ。

「なら、どうしてボーカルさんはバンドを離れてしまったんですか？」

……居ないんだよ、もう。

「え？」

中学三年の冬に。

「(イ)、(イ)めんなさい……!!」

ううん、気にしないで。今日はその話をしに来たんだから。

初代アークラボーカル”遠堂璃里亜”ちゃん。

璃里亜ちゃんはいつも無邪気にはしゃいで周りの皆に笑顔を見せていた天真爛漫な性格の女の子。彼女の笑顔を見て、私達も何だか救われた気になっていたぐらい。

璃里亜ちゃんは軽音部ではボーカル一筋。ギターも初めはやろうとしてたけど、手先が不器用な璃里亜ちゃんはすぐに諦めてた。

でも、声の出し方は人一倍得意な女の子でもあったんだよ。透き通るように綺麗な声で聴いてると不思議と気持ちが高揚する彼女独特な歌声の持ち主。学校内では璃里亜ちゃんの噂で持ち切りになるぐらいの人気ぶり。

『細かいことは気にしないでガンガンいくよ!!』

これが耳にタコが出来るほど聞いた璃里亜ちゃんの口癖。

天真爛漫ではあるけど、悪く言えば無鉄砲ぶりで悪目立ちするのが璃里亜ちゃんの特
性。

ライブの時でも想定外の行動は当たり前。セトリリスト全てを終えたかと思えば、気持ち荒ぶってしまったのか新たな曲を勝手に始めたり。一緒にやる身としては油断できない存在だね。

でも、逆にその破天荒ぶりは客受けしちやった。バンドの人氣は右肩上がり。文化祭とかではとても盛り上がって、そのお陰で楽しかった思い出がたくさん出来た。

それでその璃里亜ちゃんの暴走を毎回止めていたストツパーが蒼君。色々あつたりするんだけど、結局は蒼君が璃里亜ちゃんを抑えると全てが片付いてしまうって感じがアークラの日常になってたかな。

「バンドは………楽しかったですか？」

勿論。あの時間はとても大事にしたい時間だよ。今もその気持ちは変わらない。

「それでは………何が？」

一から順番に話すね。

私達のバンド、アークラは最初は軽音部内で定期的にライブを披露する程度の些細な目標を目指して頑張っていた。

でも、ライブを数回こなしていくと璃里亜ちゃんは満足できなくなっていくたのだからね。もつと沢山の人と一緒に歌を歌いたいと言うようになった。

璃里亜ちゃんに押し負けるかのように、そして私達は自らの限界への挑戦として、バ

ンドとして学校外の世界に飛び込んだ。と言っても近くのライブハウスにお邪魔しただけの話だよ。

「楽しそうですね」

うん、今思えばライブハウス巡りは楽しかった。

璃里亜ちゃんや蒼君のお陰であつたかもしれないけど私達は周りのバンドとは似ても似つかないスタイルだつたから余計にね。

——ここからが本題だよ。

「え？」

ある日、璃里亜ちゃんから相談があるつて私は呼び出された。初めての事だつたから何かあるんじゃないかって思わず不安になつちやつたぐらい。

まあある意味、その不安を裏切ることになるんだけど。

「……………」

気になる？花音ちゃん。

「……………はい」

恋したんだつて。

「……………はいっ」

——時は数年前に遡る。



放課後の教室。

「それで話って?」

私・可織の眼前に映る少女は私の問いに直ぐには答えなかった。彼女の性格なら直ぐに答えそうなのに答えない、その態度に私は妙な違和感を覚える。

「可織って恋はしたことある?」

「(っ)、恋……!!?」

私は一瞬呆気にとられた。

これは嘘だ。もしくは夢だ。彼女の口からその言葉が飛び出すなんて。

——”遠堂璃里亜”。

それが彼女の名前。一言で纏めるなら思考が読めない暴走少女。暴走すると私ですら手が付けられなくなるのは日常茶飯事だ。

私の所属するバンドのボーカルでもあるからして、彼女との付き合いはだいぶ長い。小学校の低学年から私達は一緒にいる。

そんな璃里亜から恋という単語が出るのは今までになかった事例。つまり、私にとつて緊急事態に他ならない。

「私の場合、無い訳じゃ無いけど……………」

「なら、良かった。ボク、最近胸が痛いんだ。常にじゃないから病気でもないし……………可織なら知ってると思ってる」

「胸が痛い？どういいう風に？」

「チクチクしたり、ズキンとしたりする」

彼女は自分の胸元を掴んだ。

「どういう時に痛いの？」

「それは……………」

璃里亜は目線を逸らした。

——え？この子、誰？ほんとにリリー？

正直、気持ち悪いぐらいだ。

璃里亜という少女は本来、周りに笑顔を撒き散らす元気全開な性格の持ち主。ここまですぐ奥手になっていく彼女に私は疑いの目を向けるぐらいに今の璃里亜は豹変してる。

恋する少女は此処まで変化させるとは。恐るべし。私にそれは他人事ではないので簡単に人には言えないけど。

——となると相手は……………。

「……………蒼君だね」

「っ!!……………う、うん」

予想は見事に的中。

気付かない方がおかしいぐらいだけど。あんなに蒼君に視線を向けて、璃里亜はニコニコとしまくってるのだから。本人がそれに気付いているかは別だ。

「蒼ちゃんといると安心するんだけど、他の女の子と仲良く話してるのを偶然見ちゃって……………そしたら、何だか嫌な気持ちに……………」

「それで自分が蒼君に恋してるって思った？」

「うん。いつからかは覚えてないけど、ボク、もつと蒼ちゃんのこと知りたいつて思った」

「なら、そうだね。蒼君は案外鈍感だし、リリーから告白したら？」

「い……………い……………」

——あれ？

璃里亜の反応が鈍い。

てつきり「うん、そうだね！」ばりの返答が来ると構えていたのに。これでは何だか不完全燃焼だ。

「……………ボクが？」

「なんで私がしないといけないの？」

「それはそうなんだけど……………恥ずかしいよ」

「なっ!？」

——あのリリーが!!ふおおお!!

今、絶対に璃里亜の口から恥ずかしいと言った。彼女に言わせたい言葉ランキング上位に君臨する内の一つだ。

人前に立つことも。そして歌うことにも緊張を感じさせない度胸だけは人一倍の彼女にまさかの例外を私はついに発見してしまった。

でも、よく考えてみる。なんと言おうと璃里亜にとつてこれは所謂初恋になるのではないか、と。親友の恋を全力で応援するのは私のセオリーじゃなかったのか、と。

「リリー、やるよ。やるからにはとことんやるから。蒼君をメロメロにさせちゃうんだ

から」

「ふええ………可織が怖いよ………ボク、そんなキャラじゃないのに………」
「さあ!!楽しくなってきた!!」

本人は乗り気ではないが、璃里亜は世間から見れば美少女だから問題ない。ただ中身が残念なだけで。

蒼君は璃里亜の気持ちに気づいてるのかな。個人スタジオに数時間引き籠ってるぐらいのドラムバカだから気づいてない方に私は賭けるけどね。

ともかく、こうやって——

「お手柔らかに………ね? ホントだよね!」

——私、辻原可織は友達の恋物語を応援することを神に誓うことになったのだ。

—4の2— へ続く。

— 4 の 2 —



第二音楽室。

「え？上手くいっただ？」

夕日が窓から光を射す頃。

璃里亜と二人きりしていると、彼女から告白の報告を受けた。

あまりにも突然だった。ついチューニングしていたギターを床に落としそうになる私であつたがどうかギターの無事は確保した。

「うん。言ったらOKだって」

「……………待つて。私の脳内整理が追い付かない」

手を伸ばして、咄嗟に待ったをかける。

あの鈍感コンビが恋人関係に昇格したと、たつた今、当の本人達の片割れから告げられた。その解釈で間違いはないはず。

蒼真は最近、特にのめり込んでいるのか、スタジオに居ることが大半のドラム馬鹿。そして、璃里亜は告白という単語だけでぽっこり頬を赤く染めてしまう初^{うぶ}恋をする

元気少女。

それが私の知らない間に、璃里亜が恋をしたと発覚した。数日後に既に二人の関係が恋人になっていた。こんな急展開を一体誰が予想できるのか。

つまり、私の密かに企む”二人のキューピッド作戦（自己満足）”は無駄足に終わってしまった事を示唆しているのではないのか。

——無念なり…………。

こうなれば奴に独占される前に璃里亜の照れ顔コレクション脳内メモリーの容量を増やしておかなくてはならない。

「それで？蒼君と念願の恋人になった訳であるとしてさ……………何するつもり？」

「何って……………ボクは蒼ちゃんと一緒に居るだけで満足だよ」

「Oh……………yeah……………」

「え？可織!？」

純粹な彼女の心に私の邪念が混じった言葉は邪悪へと染める毒となる。

わざとではないんです。ごめんなさい。

おろおろと戸惑う璃里亜もまた私の脳内メモリーでは大歓喜であるからして本人には言わないけど。

「私のことは気にしないでおくれ……………」

「わ、分かったけど……………」

「これからだね」

「うん」

「まあ……………私にしてやれる事は少ないけど応援は全力ですから」

「可織!!」

「ちよっ!？」

飛び込んで来た璃里亜に焦る私。

どうにか尻餅はつかずに済んだけど、完全に抱き付かれて身動きが取れなくなってしまった。

ぐりぐりと顔を擦り付けるその姿にぐっと私の胸が打たれた。

「可織が親友で良かったよ」

「そう? リリー……………幸せになってね……………」

「うん。あ、でも可織も一緒に幸せにならないと駄目だよ?」

「それは難しい相談だね」

「大丈夫!! 可織にも好きな人いるでしょ?」

「今はいないかな」

「嘘だあ!!」

「嘘じゃないって〜!!」

しばらく、これが続いた。

はい、幸せです。

ただ璃里亜に彼氏が出来たのは嬉しい。でも、どうにも腑に落ちない何かが私の心にこびりついて全然離れてくれなかった。



スタジオ”Square Road”。

「やっぱりここに居た」

——直接本人にあの真実を確かめる。

このモヤモヤに区切りをつける一心で私は蒼真を探していた。やはり、私の予想通りに彼はアークラの拠点であるスタジオの個人練習スペースを陣取っていたお陰で直ぐに見付けることが出来た。

部屋から漏れるドラムの打撃音は鳴り止まない。十中八九、彼はひたすらドラムを叩き続けている。もうどれぐらい時間が経っているのだろうか。

——ノックもせず、私は扉を開けた。

「っ!?なんだ、可織かい……………」

「練習の所、ごめんね」

流星に大胆すぎた私の行動に彼は驚いたようで軽く溜め息をついていた。私はドラム部屋に入らず、扉付近でタイミングを伺う。

彼の察する能力は鋭い部類に入る。すぐにイヤホンを耳から外し、スティックをバスドラの上に置いた。

「んで、何用?今日は全体練習はなかったはず」

「うん。ちよつと二人で話をしたくて」

「ん?話?まあ……………良いんやけど」

「ほんとごめんね」

「別に構わんよ。移動するか」

立ち上がった蒼真は私の隣を通り、ドラム部屋を後にした。私は黙って彼の後を早足に追い掛けていく。

行き先はスタジオの受付すぐ隣の待機スペース。ソファにテーブルが設置され、楽器を置けるように空間も余分に確保されている。

今はバンド練習では中途半端な時間帯らしく誰も待機スペースには居なかった。都合が良いのでそのままテーブルに座った彼と向かい合わせに私は座る。

「単刀直入に言うね」

「ああ」

「璃里亜と付き合うつて話、ほんと？」

「よく知ってんな……………昨日からね」

「オーケー。ちよつと待ってね」

……………マジでした。

「リアルの話？」

「リアルやね」

「そつか……………あああああああ」

ぐてり、と私は頬とテーブルを密着させた。その様子を蒼真はただ苦笑いで見守って

いる。

改めて両者から事実をはっきり伝えられ、私の心境は複雑さを増してしまっていた。友人として素直に応援したい。でも、親友を奪い去られた嫉妬心が芽生えているのもまた事実。

唐突に顔をあげた私。蒼真はびくつと肩を震わせるがお構い無しに私は尋ねる。

「ほんとに!!ほ・ん・と・に!!リリーのことを好きなの?」

「なんやそれ?まあ……………そうだね」

「私、真面目だよ」

「璃里亜と付き合うには私を越えていけつてやつ?」

「蒼君」

私はじつと彼の目を見つめる。

「……………少なくとも、中途半端な気持ちではない。それだけは断言出来る」

「……………どういうこと?」

「今の俺が目指すのは璃里亜の夢を叶えさせてあげること。それだけ」

「リリーの夢?」

真剣さを帯びた彼のその言葉。

私は璃里亜の夢に心当たりはなかった。一体、彼女は何を蒼真に語ったのだろうか。

言うか言わないか。その決断に蒼真の口元の動きが鈍る。それでも、私だからこそと話してくれる決意をしてくれた。

「璃里亜の夢。それは——」



——最近、練習が多い。

ギターの弦に触れながら、私はふと思う。

放課後は学校で練習。夜にはスタジオで練習。十分すぎると思うが、まだまだ練習不足って感じもバンドの雰囲気的にあったりして正直、普通ではない。

近々オーディションがあり、それに向けてって事もあるだろうけど、それを考慮しても明らかに多い。一日で六時間も入るなんて聞いたことがない。まあアークラはやる

けど。

この前もベースの光にそれとなく聞いてみたけど、どうやら気づきつつも光は黙認しているみたい。

そして、光と話して改めてある事実について明確にはつきりした。

蒼真と璃里亜が普通じゃない。

二人が恋人の関係になってからは特に顕著に酷い方へとヒートアップしているような感じもする。

肝心の蒼真は何を考えているのか最近になって全然分からぬ。出会った当初は行動に考えが出やすく、可愛い所もあるもんだなと思っていたのに。

一番ヤバイのが、新曲のデモが凄い頻度で送られる事。作曲を全面蒼真に任せておいてあれだけど、どれも作り込まれ完成度が高いからこそ逆に怖い。一体、どうやって蒼真はこれを思い付き、形にしているのだろうか。

加えて、蒼真は全体練習以外にも個人練習をプラスでしていると風の噂で流れてきた。この前も数本ステイクを折れるぐらい叩いていたらしい。

ちゃんと寝ているのか心配になる。

一方で璃里亜もここところ、ずっと声を張り続けているせいか、私には最近の彼女の喉の調子がいまいちに感じていた。

とある日にも——

『璃里亜。最近さ、バンドで無理してない?』

『え?急にどうしたの?』

『何となくだよ。それで、どうなの?』

『無理なんてしてないよ?全然大丈夫だつて!!歌うのは楽しいし、蒼ちゃんの色んな曲を教えてくれるんだ。それに皆で一つ何かに打ち込めるって最高じゃない?』

『そうだけど……』

『ボクのことには気にしないで、璃里亜も一緒に頑張ろうね!』

『……うん、そうだね』

分かつてはいた。

本人に直接聞こうが本音を口に出す訳がないと。特に璃里亜は人の目を気にする子だ。幼馴染の私を不安にさせたくない気持ちは人一倍あると思う。

「ふう……もう今日はギターの練習は大丈夫でしょ」

健気は無邪気に一生懸命に歌う璃里亜の隣でギターを弾く私。この構図がずっと続けば良いなど、それだけがたつた一つの私・可織の望みであるのだけれど、それが今は変わってきている。

何かつて?——秘密だよ。

日課のギター練習を終えた私。部屋の隅にあるスタンドにギターを立て掛け、私は椅子へと腰を下ろした。

私の頭の中ではとあるシーンがふと思い返されていた。

——”ボクのことには気にしないで”

璃里亜の口癖。本人は多分、無意識。

そして、私は幼馴染だからこそ知っている。これは、この時の彼女が並みならぬ何かを抱えている時に出る台詞であることを。

以前、この口癖を口にした時の璃里亜は確か体調不良で熱を出していた。にも関わらず、璃里亜は商店街のイベントに出演しようとしていたのだ。

流石に私や大人達に止められ、事なきを得た。その時の心情を璃里亜は後にこう語る。

——子供達が僕の歌を待っていた、と。

璃里亜は自分よりも他人を優先する。自己犠牲に近いその行動っぷりは制御が効かないロボットののごとく暴れる。

アークラでは蒼真が璃里亜の暴走を制御している。惚れた弱味って感じらしくて、本人も気持ちに有耶無耶になってしまい、彼に反抗は出来ないらしい。

と、なるとだ。問題は蒼真に伝えるべきか否か。でも、具体性がゼロでかつ蒼真自身

も少し危なくなってきた。慎重に事を選ぶべきかもしれない。

「……………寝よ」

私はこの時、判断を遅らせた。

天の神様が私のこの決断を赦してくれなかったと実感するのはすぐである。



——数日後。

アークラのオーデイションが終わった。因みに結果が出るのはまだまだ先。気長に待つしかないね。

悔いはない。新曲もこれまで以上に会心の完成度で披露できたと自負できるし、他のバンドは緊張でガチガチだったが私達はいつも通りの暴走具合で演奏をやり終えられたのだ。やっちゃった感は少しあるけど。

山場も越えて、ほっとしていた私。確か、その頃だったはず。あの報せが私の耳に届いたのは。

それは――

――璃里亜が入院したという報せ。

――4の3――へ続く。

—4の3—

◇◇◇

総合病院。304号室。

「おっ、おひさー！」

部屋に入ると聞き慣れた声が。

私の目に映るのは真つ白を基準とした部屋模様。清潔感溢れる空間にポツンと置かれた一つのベッド。

声の主、璃里亜はそこに寝そべる形でいた。私の気配に気付いたのか、上半身は起こしている。

「リリーやい……………なんて呑気な……………」

「その件についてはほんとにごめん!!」

「まあ元氣そうで何よりだけど」

璃里亜の明るい顔を見ていると心配していた私は何だか馬鹿らしく思えてくる。

「体の方は大丈夫？」

「ボクは大丈夫だよ？でも、退院はまだ出来ないみたい……………」

「そうなんだ……………」

一瞬間間見えた、璃里亜の悲しそうな目。

「ソウ君は凄いいよね……………」

「リリー？」

ぼそつと呟くそれに私は反応した。

璃里亜は小さく頷くとゆっくり話始める。

「ボクって歌うことしか取り柄がないから。ドラムに作詞作曲もこなすソウちゃんに追いつけなくて……………彼女として、ちゃんと出来てるのかなあって思っちゃった……………」

私は何も答えなかった。

「期待に答えられそうにないや……………」

「リリーはちゃんとソウ君のこと、好き？」

「可織？急にどうしたの？」

「私のきまぐれだから気にしないで。それで、どうなの？」

すると、璃里亜はそつと目を逸らす。

「好きだけど……………」

「なら、それで良いんじゃない？」

「え？」

「期待に応えるとか隣に立つとか。余計に考えちゃうかもしれないけど、要はその人の事を好きかどうかが大切なだけ。それだけで十分じゃない?」

驚いた様子でこちらを見る璃里亜。

「えへへ……可織に言われちゃうとは。うん、その通りだね!!」

「……………もう時間だから、私帰るね」

満面の笑みについ照れ隠しが。

椅子から立ち上がる私に璃里亜は不満の態度を示した。

「え?もう?しょうがないなく。今日は来てくれてありがとうだね、可織」

「どういたしまして。また来るよ、リリー」

「じゃあねー」

全力で手を振る璃里亜。

私はそんな璃里亜に軽く手を振り返し、病室を出たのであった。



璃里亜の家。

「うん、皆、揃ったわね」

あのお見舞いから数日後。

私を含め、アークラメンバーの三人は璃里亜の住む家へとお邪魔している。

リビングのテーブルに座る私達にバシッと手を叩いたのは彼女の保護者である母さんだ。

「それで……………話とは？」

私に昨日、何の前触れもなく来た連絡。

内容は璃里亜の大事なバンドマンの皆さんと一緒に家に来てほしいと、だけ。他に一切の記載はない。

不思議に思いながらもこうして私達は今日を迎えた訳だ。

「皆さんに伝えなければならぬ事があります。勿論、璃里亜ちゃんに関する事で」

私達は黙って頷く。

「まず、そうね……………可織ちゃん」

「は…?」

「可織ちゃんには黙っていたのだけれど……………私、璃里亜ちゃんの本当の母親ではないのよ」

「……………え?」

理解が追い付かない。

彼女とは私が小さい頃からの付き合い。私と璃里亜が遊ぶ時にはいつも優しく見守ってくれていた。

母親のような優しさに私は二人目のお母さんとさえ感じていたこともあるぐらいにお世話になった人物。

実際は璃里亜と彼女は親子の関係ではなかった知られざる真実を今、彼女の口から聞かされた。

——つまり、璃里亜の母親は別にいる?

「血筋がないって訳じゃないのよ? 璃里亜ちゃんと私の関係は遠い親戚。璃里亜ちゃんのお母さんからのお願いがあつて、私が保護者代わりになつていたつてわけ」

「え? じゃあ本当のお母さんは何処に!?!」

「……………璃里亜ちゃんを産んで、数カ月後に亡くなつたわ」

「っ……………!!」

何かが込み上げてくる。

たまらず口元を手で隠してしまった。視界の端にいる蒼真や光も口には出さないものの、驚いた仕草を見せていた。

知らなかった。言葉が出ない。

「死因は遺伝性の病気。先生の説明は難しく全部を理解するのは私には無理だったけど……………」

「そんな……………」

救いようがない結末。

天真爛漫なあのお笑顔にそんな運命が隠されていたなんて。

「遺伝性……………」

「はっ!?……………つてことは、叔母さん……………嘘ですよね?」

光の呟き。私の頭に雷が落ちた衝撃。

想像した自分を殴りたくなるその結論に私の声は震えてしまっていた。

——嘘だよね……………?嘘だよね!?

「……………残念だけど、今回の検査で判明したわ。璃里亜ちゃんにもお母さんと同じ病気が発症している可能性が高いとのことよ」

「そんなあ……………」

—— 璃里亜が死ぬ。

そんなの信じたくない。私の心は認めたくないと叫んでいた。

「そうよね……………いきなりで皆、困惑しちゃうよね……………」

叔母さんもきつと悲しいはず。

璃里亜は叔母さんにとつて愛しの我が子のように育ててきた娘なのだから。

「ちよつと、小腹にちようどいい軽いものを作ってくるわ」

そう言い、叔母さんはリビングからキッチンへと移動する。

テーブルに残されたのは私と光、蒼真の三人。

「……………」

空気が異様に重い。

まだ大人とは程遠い私達。経験も少なく、どう乗り切れば正解なのか誰も分かりはし

ない。

ブルル、ブルル——

「うん……………？」

スマホが震える。

こんな設定に覚えはなく、不思議に思った私はスマホのロックを解除した。

メールだった。

中身を読み進めていく私であったが、とある一文に目が止まった。

「ねえ……………」

「どうしました?」

「合格だつて」

「何が?」

「オーディション……………でも」

—— 一次予選、通過。

つい先月受けたオーディションの結果がこのタイミングで通知されたのだ。

素直に喜ぶべきか。

それとも——

「次の本番はいつ?」

「えっ……………」

蒼真はそう尋ねてきた。

私は耳を疑った。

本来のバンドなら二次予選通過を目標とするだろう。でも、今のアークラはバンドとして成立していない。

迷惑をかけない為にも、早くオーデイション辞退の件を責任者に伝えるのがベストと私は思っていた。

対して、蒼真は真逆の考えを示した。

「蒼君?まさか……………出るつもり?」

「ああ。やるに決まってるやろ」

「蒼君!?!本気で言ってるの!?!そんな場合じゃないでしょ!!今は練習よりも蒼君はリリーと一緒に居るべきなんだって!!」

つい声を張り上げてしまう私。

その光景に彼の瞳の色が一瞬で変わった。

「やからこそ、もつと俺達は進まないといけないんやって」

「何で!?!今のアークラは何も出来ない!!リリーが揃って、初めて活動を再開するんでしょ!!」

「それやと遅すぎる。璃里亜の夢を叶えるには今はそれしか——」

「……………夢?夢だって?」

「可織?」

「私には今の蒼君にその夢を叶えられるとは思えない!!」

「はあ!?!それこそありえへんよ!!俺がこんなだけ努力してやってるんやぞ!!これまでの

成果を全部泡に流すだけは絶対にさせたくない!!」

「———こんのっ!!」

激昂した私は衝動に身を任せてしまう。

その結果、彼の胸ぐらを掴み、眼光を鋭くして睨む私がそこに誕生した。嫌われても構わない。もう私には我慢の限界を越えてしまっていた。

「可織さん!」

慌てる光。

「私だって蒼君が最近は特に、バンド活動を頑張っていたのは知ってるよ!!」

「なら!!———」

「でも!!それに加えて!!私は蒼君が頑張ると無理をしても隣で走ろうとするリリーがいたのも知ってる!!この意味、分かる!」

「……………」

「リリーが倒れたのも、その病気が原因かもしれないけど!!本来なら後数年は大丈夫だったはずだったらしいよ!?!でも、現実はこうなってしまった!!蒼君はちゃんと理解してるの!?!リリーの容態が悪化した最大の理由はストレスと過労だって!!担当の先生から聞いた!!変に走る蒼君に追い付こうと必死になってたんだよ!?!……………あの子は!!」

蒼真は何も答えなかった。

ただ私の胸ぐらを掴む腕を引き離そうとしていた彼の腕に籠る力は段々と小さく
なっていく。

怒気を削がれた私も落ち着きを取り戻した。彼の服を掴んでいた手を離す。

「笑顔で満ち溢れた最高の景色を視てみたい」……………それがリリーの夢だって。二人
が付き合った頃の蒼君はそう言ってたね」

「ああ……………やから俺は大きなステージで沢山の観客の前でアークラがライブをやれ
ば、見せてやれると思っていた……………」

「あの時の私は何となく聞き流していたけど、今思えば、蒼君が道を踏み間違えたのもそ
の頃だった」

「俺が間違っていた……………?」

「うん。蒼君は二つ、重大なミスを犯した」

私は己の考えうる全てを告げる。

彼にはまだ取り返しがつく。失う前に少しでも。

「二つ、私と光に一切の相談をしなかったこと。話してくれさえすれば、ちゃんと私達も
協力した。光、そうだよな?」

「え、ええ……………はい。そりゃあ」

「ほら。蒼君だけじゃない。皆の夢はバンドの目標でもある。無下に一人で抱える必要

はないんだよ。私とリリーと光、そして蒼君が揃ってようやくアークラが成立する。誰かが突っ走るバンドは真のバンドじゃない」

「……………ああ」

「二つ目、リリーの夢を叶えようとしすぎて、蒼君はリリー本人をまったく見ていなかったこと」

ふと脳裏をよぎる。

璃里亜の悪い時に出る口癖があつたという前兆があつたが私はその判断を後回しにしてしまったこと。

もし、あの時、彼に璃里亜が危ないと助言さえしておけば——と、もしもの話が何度も頭の中で浮かんではすつと消えていく。

——今更、遅いのだ。

「……………でも、これについては私も悪いと思ってる」

「可織は関係ないやろ……………」

「そんなことない。私もリリーの調子が変わったことには気付いていた。いや、気付いていたにも、だよ。でも、私は誰にも言わなかった。まだ大丈夫だろうって後回しにしてしまった……………」

「……………可織さん」

「これから私達がするべきなのは何か。限られた時間はもう戻らない。それらを肝に命じて、アークラの行き先を決めないと……………」

突如、訪れた日常の崩れ。

最初はほんの小さなひび。誰も気付かない小さな小さなひび。やがて、ひびは亀裂へ。またしても気付かない内に。

——私にとって、アークラは居場所。

アークラが崩壊へカウントダウンが始まろうと私は決して壊させはしない。

私と璃里亜が愛して、蒼真と光が築き上げてきた財宝がアークラというバンドなのだ。

でも、今のアークラには今世紀最大の危機が迫っている。積み重ねた物が一瞬で崩される光景だけは見たくない。

叔母さんとのやり取りを嘔み締めるかのようにゆっくりと思い出す。

——リリーと一生会えない……………か。そうなれば、きつと泣いちゃうんだろうな……………私。

静かに私は目を閉じた。

— 4
の 4
—
へ 続
く。

—4の4—



とある冬の日。

「……………雪だ」

曇り空に散る小さな白い雪。

私の重ねた掌にそつと下りて、ゆっくりと溶けて消えてしまう。儚い幻想のように。新年が明けて、初めての雪景色。

厚着してもなお寒さに震える体について両手で擦り合わせ、少しでも暖かさを求めてしまおう。

白い息をそつと吐く。

——本日、璃里亜の葬式が執り行われた。

入院してから半年。璃里亜の容態は数回安定した時期もあったが、どれも退院まで回復するには至らず。ある日体調が前触れもなく悪化して、そのまま最期を迎えたと彼女の叔母さんから伝えられた。

一方でその頃、璃里亜の入院生活をしている間の私を含めたアークラのメンバーは普

段通りの学校生活を送った。

受験真つ只中の三学期を迎えたクラスの様子はいつにもまして忙しさに拍車がかかっていた印象があった。既に私の入学先は一足先に決まっていたのでのんびり観戦モードである。

なので、周りは勉強に夢中で相手にされない。ふと視線を向けた先、私の隣の席もいつも空席で、寂しい思いを抱いたことは少なからずある。

それがいつからだろう。

璃里亜のいない毎日が当たり前となり、暫く会わなくなったせいか彼女の笑顔を思い出せない日々が延々と続いた。

クラスメイトと世間話をして、卒業間近の軽音部で好きなギターを弾いて、後輩達と気ままにセツションしたりもした。楽しい一時を過ごした。

その賑やかな光景に璃里亜はいない。

やがて——私の心はもう彼女を必要としていなかったと初めて知ることになった。複雑な心境だった。

頭では勿論彼女と一緒に音楽をやりたい。ライブではちゃんと合わせるからやりた
い放題に暴れてほしかった。

でも、本心では真反対に彼女の暴れつづりを厄介事と捉えてしまっていた自分も否定

できなかつた。

「そう言えば……………手紙が……………」

帰り際に璃里亜の叔母さんから手紙を受け取ったのを今、思い出す。

ポケットから取り出したそれは可愛らしいシールで留めがされてあつた。私は丁寧に捲つた。

何の手紙か予想はしていた。

主は璃里亜であつた。

『可織へ。』

えっと、手紙を可織に書くのは初めてだから何を書けば良いのかわからないよ!! 書いてしまつて、余計だと思つたけど消すのがめんどくさいからそのまま行くね。

ねえ聞いて聞いて!! 最近、ソウちゃんがよくお見舞いに来てくれるようになったんだよ!! 今更、ソウちゃんはボクのありがたみに気づいたのかな?

遅いよ!! プンスカ!!

相変わらず、変なお土産も一緒に持つてきちゃうし!! この前なんてゲームセンターで一発で取れたつて言いながら変なピンクの熊人形を渡してきたんだよ? なんて名前かすらも分かんない。

逆に光ちゃんはたまにボクの所に来ては無慈悲な報告ばかりしてくる。授業の進

み具合なんて、ボクにはさっぱり……。勉強なんてイヤだ!!——』
くすり、と笑ってしまふ。

愚痴とも取れる彼女の書く内容はイメージ像が鮮明に浮かび上がってくる。

『——二人ともまだまだ乙女心が分かつてないね。でも、沢山の女の子からちやほや言われるからソウ君が調子に乗っちゃつてた時期もあつたりしたのはちやんと覚えてる。』

あの時はホントに不安だったんだよ!?ボクよりも可愛い子があつちこつち居たから、ソウ君は僕を捨てちゃうかもつて考えちやつたり……。』

最後まで僕を選んでくれたけどね!!

どやっ!!』

どや顔が無性に腹立つ。

『これを読む時、僕はもういないと思うから可織にはソウ君に対して伝言をお願いしたいかな。後悔してることが一つだけ。』

僕がああの世に行つちやうとにソウ君、きつと自分のせいだつて責めちやうかもしれない。でも、僕の事を忘れてくれつて言うのは流石に僕自身もちよつと寂しいからソウ君にはこう伝えてほしいかな。

幸せに生きてください——つて。

皆に持病があるって今まで黙っていたのは悪かったと思ってるよ？

え？反省？してないけど？

だって、言っちゃうとソウ君はずっと僕の夢を叶えようとして、自分を壊していつちやう。それは僕でも赦せない。

僕はただソウ君が後ろでドラムを叩いてくれて、そつと僕の歌声を支えてくれるだけで満足しちやう軽い女の子だから。

可織にはソウ君にこれから色んな人達と出会って、楽しく音楽と向き合って続けてほしいって伝えて欲しいなあ。

なんなら新しい彼女も作っちゃったりしても全然OKだけど……あーあ。きつと可愛い女の子なんだろうな。きつと僕なら太刀打ち出来なくて、隅っこで拗ねちやうぐらしいに。生で見たいけど、少しツライ……かな。あ!!可織なら全然ソウ君なんてあげれるよ!!いる?』

ここでようやく私は違和感に気付く。

璃里亜の書く手紙の中身。ここまで全てアークラの日常の様子を記載している。あえて、私の事には一切触れずに、だ。

次の文からやたら消した跡が目立つ事に気付いた私は気持ちを切り替えて読み進める。

『そして、これを読む可織へ。

僕が生きてる短い間に貴女に会えた事が一番の僕の誇りでした。

初対面の印象は今でも覚えてる。幼稚園の砂場で一人遊んでいた体の弱い僕に唯一話しかけてくれたのが可織だったから。

その時の可織の笑顔がずっと大好きで、僕も可織の笑顔を真似しようとしちゃって、そのせいでこんな僕になっちゃったんだよ？知ってた？

昔に比べて、可織の笑う所あんまり見なくなっちゃったね。笑ってた方が良いよ？じゃないと幸せ逃げちゃうし。何より可織の笑顔、可愛いし。そういうのズルいよね。

心残りは……あえて言うなら、僕と可織とでダブルデートが出来なかつたことかな。恋愛面では一足先に僕がリードしちやってね。うん、可織は可織のペースで来たら良いと思うから仕方ないんだけど!!

あつ。可織の彼氏なんて、ソウ君にはまったく勝てないから!!これ、絶対!!

最後になっちゃったけど、僕は絶対に忘れないから。皆と会えて、アークラでバンドが出来て、理想の友達が出来たこと。僕には勿体無い程恵まれた人生であつたこと。全て可織達、皆のお陰。

大丈夫!!きつと可織達ならどんな困難があつても、問題ないよ!!これから僕だけは一緒に隣で答えを探せないけど、離れた場所から応援してるよ。

ほんとのほんとの最後に。

ありがとう。そして、さようなら。

遠堂璃里亜より』

私はゆっくり手紙を折り畳んだ。

「あれ……………?」

頬に濡れた感触。

掌で拭うそれを私は理解しようと努める。

それは——涙であった。

「つぐ……………」

ひきつる喉奥。

溢れだした涙を直ぐに塞ぎ止める方法なんて私は知らない。知りたくもない。

「リリー……………今まで、ありがとう……………!!」

袖で乱雑に涙を拭う。

そして、私は曇天の空を見上げた。

天国で見守ってる彼女に私は最後となる涙でぐちゃぐちゃになった全力の笑顔を見せつけてやったのだ。

◇◇◇
卒業式。

「……………うん、揃ったね」

場所は音楽室。

部活の活動場所として、三年間お世話になった此処も今日でおさらばである。

「二人とも卒業おめでとう」

「ん。可織もおめでとさん」

「祝辞良かったですよ」

「ありがとう。あれ、中々に緊張するね」

蒼真と光。

音楽室に居たのは私を含めたこの三人のみ。

「それで呼んだ理由は分かると思うけど、大事な話がある」

蒼真は何も言わない。

まだあの時の喧嘩の仲直りをしていないせいで、向こうは知らないが、私は少し気ま
ずさを感じてしまっていた。

「私、”アークラ”を抜けるから」

「可織さん!?それは……………!!」

「別に光君や蒼君を嫌いになつたつて訳じゃないし、リリーが居ないからつて訳でもな
い」

バンドを抜ける。

私にその決断を下すまでは相当の覚悟を要してしまった。これが普通のバンドなら
もう少楽に出来たのだろうと思うが、それほど私の”アークラ”というバンドに対して
の思い入れが強かったのだ。

光は驚いた反応を示し、蒼真は静かに目を閉じてしまった。

「私が将来の事を考えて、このまま二人とバンドを続けるのは違う気がしたから。進学先も違うから今後は練習しにくくなるだろうし……………」

「ですが……………」

「光君？私はもう変えないよ」

私の気迫に光はぐつと言葉を堪えた。

バンドをやる同士であるからこそ言葉無しで伝わる思いに光は反論が出来なかった。

「ごめんね、と光に罪悪感を思いつつ私は蒼真の顔を見た。

「分かった。ってか、アークラの活動自体を休止しようかと思つてたから問題ない」

「え？休止？そうなの？」

「ええまあ……………蒼真とはそういう話になってまして……………でも、メンバーがまた揃うまでつて話では……………」

「仕方が無い。可織が決めたのに俺らが口出しする訳にはいかないやろ」

蒼真はどこか諦めムードを漂わしていた。

言い訳に全て身を任せ、自分は何にも悪くない。そんな風に私は思えてしまった。

卒業式が終わって直ぐに呼び出してしまったので、時間も無い。外がより騒がしくなったので私達も戻ることになった。

光が先に扉を抜け、蒼真も音楽室を出ようとした。その時に私は彼に話しかける。

「蒼君」

「何や?」

「バンドは……ドラムは続けるの?」

「そりゃ……やるけど」

「リリーからの伝言。”幸せに生きてください”……だつて」

「……そつか」

「私が言うのもおかしいけど、誰も悪くないから。だから、蒼君が背負う必要もない余計な責任もあるんだよ」

「……お氣遣いありがと。可織だつて、とつと引つ付かないのか?今の俺はそれがちよつと不安やね」

「ん?どういうこと?」

「好きなんだろう、光のこと」

「——つ!?そんなことないから!!」

「だと良いんやけど。行くぞ」

「あつ、待て!!こんのつおお!!」

蒼真は余計な一言が多い。

璃里亜と過ごした日常はもう帰ってこない。でも出逢いと別れを繰り返し、私はまた歩み続けるしかないのだ。



現在。カフェテリアにて。

「——以上が、私が知る全て」

ふー、と知りうる全てを語り終えたマイマウスにご褒美を与えようと私は店員さんに運んでもらったコーヒーカーップを口に運んだ。

花音の様子をちらりと伺う。

テーブルをじつと見つめたまま動かない。

「そして、蒼君とリリーとの間で最後に何があつたのか、だけど………私は関与してないからまったく知らない」

暗黙の了解と言うべきか。

生前の璃里亜と最後に言葉を交わしたのは他でもない恋人の蒼真だったと記憶を辿る。

その時、二人は一体何を喋つたのか。生憎、私と光はそれを直接蒼真に尋ねるなどという土足で彼の心中に踏みいるだけの勇氣はなかった。

ただ、彼が抱え込んだ秘密には気付いていた。それはきつと今も巧妙に隠し続けている。

——彼ならきつとそうするだろうから。

「……………蒼真君は」

「うん？」

「……で花音が口を開く。」

「私の知ってる蒼真君は本物の蒼真君ではない……………?」

「それはちよつと違うかな。きつと貴方が見た蒼君はほんの一部だけ。云わば、氷山の一角。蒼君の心の水面下を見ようにも本人がそれを巧妙に隠すから、どうしようもないんだよ」

「なら、どうすれば……………」

「心の扉を開ける鍵は花音ちゃん。貴方しかないんだ……………うん、多分」

「私が?それに今、多分……………」

花音が恐る恐るに尋ねる。

「私が言っても効果はなかったみたいだけど、花音ちゃんの口から言ってもらえればきつと蒼君も少しは心変わりが出来ると思う」

「そんな大役、私には……………!!」

「話を聞いた限りだと、少なくとも蒼君は貴方を女の子として認識してる。だったら大丈夫。高校生からの蒼君を私はまったく知らないから断言しづらいけど……………つもう、やっぱりまだリリーのこと、引き摺っていたなんて……………男として、どうなの!!」

「そ、それは……………あの……………」

「まあ説教はぼちぼち本人にするとして。花音ちゃんには伝えてほしい事を今から洗い

ざらい喋るから蒼君に直接伝えて」

「そんなあ……………」

「好きなんでしょ？」

「……………はい」

「なら、此方からがつつり攻めないかね？」

「……………はい」

やがて、私は蒼君の全てを彼女に託すことになる。

きつとこれは責任転嫁という行為に近いだろう。でも、璃里亜本人の希望を汲み取るのであれば、私ではなく花音という新たに彼の心を奪える女の子に彼の幸せを願って貰うべきだと考えたのだ。

——これで良いんだよね？……………リリー。

花音編 | 4 | 『Breaker』 終

—5の1—『Proof』*

◇◇

かののん：蒼真君、お時間大丈夫？（21：37）

ソウソウ：大丈夫やでー（21：54）

かののん：この前、蒼真君の服を買いに行くって話になったでしょ？来週の日曜日でも良いかな？（21：56）

ソウソウ：ほえー。花音ちゃんから直々に誘われるとは（21：56）

——頬を膨らませたミツエルスタンプ。

かののん：もう！緊張してるんだから！（21：57）

ソウソウ：すんませんって。その日は今の段階では予定なしやからいけるで（21：57）

かののん：うん、なら駅前で待ち合わせをお願いします（21：58）

ソウソウ：へーい（21：58）

ソウソウ：何時や!?（22：24）

かののん：ふえ!?1010時で良い？（22：25）

ソウソウ：んー？10時ね、了解。にしても、なんでこれで驚くんよ？（22：26）
 かののん：つい（22：26）

——ペこりと謝るミツシエルスタンプ

ソウソウ：随分とお気に入りやね、そのスタンプ（22：27）

かののん：あ、バレちゃった（22：29）

ソウソウ：バレバレやね（22：30）

かののん：そうかな？（22：30）

ソウソウ：そうだよ。明日も早いし寝ますわ（22：31）

かののん：うん。おやすみなさい（22：32）

ソウソウ：おやすみ（22：34）

——ぐっすり眠るミツシエルスタンプ。

かののん：あつ、持ってたんだ（22：38）



最寄り駅前広場。

「あ、待たせちゃったかな？ 蒼真君。おはよう」

「ん。おはよう、それとご苦労様」

「ご苦労様って……まだ来たばつかだよ？ ふふ」

十時を過ぎる前の時間帯。

冬の寒さに身をよじりつつ、二人は無事に合流を果たす。

「案外、利になかっているとと思うけどね。花音ちゃんって家から此処まで最短で何分かかんの？」

「えっと……十分くらいかな？」

「今日、家を出たのは何時？」

「九時半ぐらい」

「ほら。そういうこと」

「どういうこと!？」

完全論破したとばかりの彼。

不服と花音が訴えるが直ぐ脳裏にとある結論が横切る。

家から出た時間と此処に到達した時間。

最短コースであれば、九時四十分には到着する予定なのだが現実には更にプラス十五分の猶予があつてから到着した。

この謎の空白時間は単に花音が彼と二人きりのデートをする事実に関係が一杯となり、普段使う道から逸れてしまった事が原因だ。

「あんまり馬鹿にされちゃうと、流石に私も……怒っちゃうよ?」

「すまんつて。でも、ポンポン姿の花音ちゃんも本音は見てみたい」

「もう!本当に分かつてるの?蒼真君!ちゃんと反省すること!」

「ほいさ。でさ、今日はあれよな?どこを回るのかちゃんと計画は立ててる感じ?」

「話、逸らされた……一応、事前にメンズの服が揃つてるお店は調べてあるけど」

「なら、今日一日は完全に任せても平気?」

「全然構わないけど……どうしたの?」

ふとした違和感を覚えた。

花音はその招待を探るべく、直接尋ねる手段に出る。対して、その質問に蒼真は気まずそうに目を逸らした。

「……昨日から徹夜なんよ。あんまし頭が働かん気がする」

「えっ?!しつかり寝ないと駄目だよ!」

「分かつてはいるんやけど、新曲のインスピレーションが浮かんでしまつてな?忘れん

うちに譜面に起こしてると気が付けば、朝やった」

「気持ち分かるけど……今日、気分が悪くなったりしたらすぐに言つてね？」

「承知した」

蒼真の体調は万全ではない。

当日に用事があると分かりつつも、やらかしてきた彼に花音は不満が無いと言えは嘘になつてしまう。

だが、同時に今日は無理を承知で頼んだ二人きりのお出掛け日。忙しい彼にわざわざ時間を確保して貰った恩もある。

結局、軽い注意喚起程度に収まる。

「他に隠してる事は無い？」

「浮気がバレた夫やないんやから、そこまで詰問せんでも……」

「私、蒼真君の事全然知らないから……こうやって聞くしか選択肢が無いんだもん」

「そうかい」

「今日は洋服とかアクセサリーとか見て回ろうと思つてるけど、大丈夫？」

「服のセンスに関しては何も心配しとらんよ。だって……」

「だって？」

蒼真の花音の全身を眺める。

異性にきつぱりと服装を吟味されているという事実からなのか、むず痒い思いが花音に襲い掛かる。

「うん。似合ってる。花音ちゃんらしい可愛さが出てるんやない?」

「へっ!? あ、ありがとう……………ござい……………ます……………ふええ」

ふしゅーと吹き出る蒸気。

あまりにも大胆かつ直線的な蒼真の好評に花音は即座にノックダウンとなった。

「そろそろ行かないと不味いかな。行き交う人も増えてきたし、巻き込まれるのは避けたい」

「そ、そうだね! あっ、でも……………」

「まだ、なんかあんの?」

「その……………目的地は決めてあるんだけどそこまでの道のりがちよつと自信なくて……………」

「……………おおよそ察した。分かった分かった、行きたい場所が何処か教えて? それくらいは俺が案内するよ」

「うん。ありがとう、蒼真君」

にっこりと花音は微笑んだ。

「……………こんなの、当たり前やね」

蒼真も照れ隠し気味に答える。

「んじゃあ、行こうか」

二人は揃って改札へと歩みを進める。体と体同士に生まれる小さな空間は自然と掌を握り合い、繋がっていた。

「なんだか久しぶりだね」

「ん？言われてみればそんな感じはするけど、そんなにか？」

「ふふ、案外そうかもしれないよ？」

——二人の頭上の空は曇り模様。

—5の2—へ続く

— 5の2 —



電車での移動中。

「卵も良いけど、やつぱり丸やない?」

「蒼真君のバンドスタイルには丸が一番合つてると私も思うよ? でもハロハピだと、卵か涙で落ち着いちゃうかな……細かいおかずが多いからその分、粒もはつきりさせないといけないし」

「あ、それもそうか。ハロハピの曲はパレードっぽい雰囲気曲が多いもんな。やつぱり、シングルよりもダブルストロークを使う機会が多い感じ?」

「そこまで頻繁には流石に使わない……あつ。でも、ダブルを高頻度で使わないと叩けないフレーズ、ハロハピだと多い気がするのには確かかもしれない」

「となれば、花音ちゃんもテクニカルタイプのドラマーかもしれない」

「ふふふ、ありがとう。だとしたら、蒼真君もテクニカルだと思うよ。ツーペダとか私、使ったことすらないもん」

電車のとある座席に座る二人。

何を題材に話すかと思えば、まさかのドラム機材。赤の他人が盗み聞きを立てても意味不明な単語が飛び交う。

「今度、蒼真君に教えて欲しい事があるんだけど、良いかな？」

「内容による」

「ええ。ゴーストノート覚えてみたくて……周りにそれが出来る人がなかなか居なくて」

「ああ……うん？ゴーストノート？花音、ライブで既にやってなかつたっけ？」

「ううん。ちゃんと意識し出したのはここ最近になってだよ？でも、ダウンストロークのやり方でちよつと躓いちやつて……蒼真君のアップダウン奏法、とっても綺麗だから、私にもそのコツとかを教えて欲しいなって」

「別に教えるのは構わんけど……にも、って何だ？にも、って」

「え？だって蒼真君、あこちゃんとか色んな人のドラムの先生やってるって聞いたから」「ただアドバイスをしてるだけなんやけどな……まあ良いや。今度、都合が空いた日にでもスタジオで」

「うん」

「俺の指導は只じゃ済まされないぞ？」

「楽しみにしてるね」

——まもなく、次の駅の……。

「あつ、この駅。次の駅で降りるよ」

「さいですか」



シヨツピングモール。

「んで、花音ちゃんほどの店をどこ所望なのかな？」

目的地には無事に到着。

俺にとつては初見の場所であったが、予め名前だけは花音から聞いていたのでスマホの地図アプリを参考にどうにか。

と言うか、改札口を通れば目の前に案内板があったからそこまで苦でもない。

相変わらず、方向音痴の花音は真逆の道を進みそうになっていたが。ここまで来れば、尊敬に値するレベルに花音の方向音痴問題は深刻なのである。

「えつと……この三階にメンズのお店が揃ってるらしいから、一先ずはそこに行きたいかな」

「三階ね、了解」

エスカレーターを利用し、三階へ。

人混みはボチボチ。昼の時間帯からなのか、多くの客はレストランやフードコートのある別の階層に集中してそうだ。

と、考えていれば自然とお腹は空いてしまうというもの。

「そーいや、昼飯どうする？」

興味は現在、それしかない。

「あつ……どうしよ？私は何でも良いよ。蒼真君の好きな物でも大丈夫」

「言つたな？」

「へ？」

「なら、辛い系で。折角やし、地獄並の奴とか無いかな」

「か、辛い……………？ぜ、全然……………？へ、平気だよ……………？」

見栄を張る花音。目が完全に泳いでいる。

「ま、嘘やけど。俺も辛いのは無理やし」

「……………」

「痛い!?——ん?？」

左側の腰元をつねられる。

「たまらず痛みの原因へ目を向ければ、冷酷なまでに冷えた視線を送る花音の姿があった。」

「何か言いたい事はありますか？」

「……………昼飯は奢るから」

「うん。なら、さっきの嘘は許しておきます」

「この子、怒らせたら怖いタイプだ。」

「肝に命じておこう。命だけは惜しい。」

「あつ、この店だよ」

「此処？先に入るんか？」

「もう店前まで来ちゃったし、店内を見てからご飯でも遅くないと思うけど。良いかな？」

「花音が良いなら別に構わんよ」

「なら、入るね」

奥行きある空間に並ぶ店の数々。

その一つに足を止め、店内へと俺と花音は踏み入れる。

落ち着いた雰囲気のお店。花音の見立て通り、男向けの洋服が狭しばかりに陳列されてある。

だが、俺が気にしたのはそれでない。

「お客、女性ばっかだな……………」

「レディースも沢山置いてあるからかな？あつ、男の子向けの服はこっちだつて」

この店は二刀流スタイルなのか。

いや、単に男女どちらでも使用可能な商品を取り扱う数がシンプルに多いだけのようだ。女性客は勿論、男性客もちらほら確認できた。

店内を眺めつつ、先陣を切る花音の後ろを付いていく。

「蒼真君はここに待ってて」

「え？俺は待つてるん？」

「うん。私は何個か持つてくるから蒼真君は試着して気に入った物を選んで欲しいなつて」

「そうなると花音に全部一任するけど……ええの？」

「任せて」

そして、花音は店の奥へ姿を消す。

完全に彼女頼りな展開になってしまった。実質、服のセンスに関しては全く理解不能なレベルなのでとても有り難いのは確か。

適当に空いていた椅子に座って待つ事に。

「蒼真君、これちよつて着てみてくれないかな？」

「……………持つてくるの早いな」

「予め目星だけは付けてたから。ほら、お願いします」

これはパーカーかな。

試着する服を持たされた俺の背中を押していく花音。俺を早く七変化させようとす
るのは分かるが、そこまで躍起になる理由は不明。

誘導先は案の定、試着室。

注意書きには店員に一言かけるようにとあったので目についた近くの女性店員に声

をかけておいた。

「着替え終わったら出てきておいてね！私、また別のお洋服を取ってくるから！」

花音さん、上機嫌ですね。

試着室に入り、花音選別のパーカーへと衣装チェンジを行う。上半身だけなので特に時間もかかる事なく終了。

「ほい終わったぞ………つと、居ないか」

扉代わりのカーテンをひらり。

花音の姿が無いのでまだ店の何処かで選んでいるようだ。

「今日は彼女さんとおデートですか？」

「え？」

めっちゃびっくりした。

先程、声をかけた女性店員が話し掛けてきたのだ。正直、花音が戻るまでは平和だと油断しまくっていた。

「彼女とはそんな関係じゃ無いですよ」

「あつ、そうなんですね。私、てつきりお二人はカップルかと」

「ちよつとした楽器仲間？って感じですよ」

「それは羨ましい事です。お店に入ってからの一部始終を見させて貰いましたが、お二人

は仲が良いんですね」

「そうですかね？まあ悪くは無いかと」

「加えて彼女さん、とおおくつても!!可愛いじゃ無いですか!!貴方もそうは思いませんか？」

「ええ………あつ、はい」

めつちやぐいぐい来るやん、この人。

「私を見た感じでは彼女さんも貴方の事、悪くは思っていないと思います。行くなら今がチャンスです」

「は、はあ………」

「あつ、戻ってきたみたいですね。ではこれで失礼します。ごゆっくりお楽しみくださいませ」

嵐の如く、店員は去っていった。

「なんか………すげえな………」

「蒼真君?どうしたの?」

「いや、花音………何も無い。何も無かったんだ」

「ふえ?」

インパクトが有りすぎて、もう………ね。

さてと、この後についてだが。

残念ながら特に詳細に語るような場面はない。

あえて、言うなら何回か試着からのお披露目が続ぎ、花音がやたら俺の着た服にチラチラ視線を外したりする等の反応をしていたぐらいだろうか。

疑問に思いつつも無事に何を買うかは決められたので結果オーライとする。

その後――。

「花音ってさ」

「うん」

「どうして俺なんかに………やっぱ良いや」

「えっ?そこまで言っちゃったのに止めちゃうの?」

「今のは忘れてくれ。それよりも――」

「話逸らそうとしてもダメです。最後まで言ってくれるまで蒼真君とは今後一切話し

ません」

「そこまで拗ねなくて………あつ、クラゲアイス販売してるやん」

「クラゲ!?!ど、何処!?!」



帰り道。

「今日もまた色々買ったな………」

蒼真はぶら下げ荷物を他人げに眺める。

女の子の買い物は長期戦と知識はあった。とは言え、これまでの蒼真の身近な人物に実現するような者は居なかった。

妹の悠希は買い物は淡白に済みます。沙綾とはそもそも二人で出掛ける機会がない。

そして、昔の彼女もまた同様に。

大量の紙袋。それ自体一つ一つの重さはないが、まとめて持つてみれば腕がキツイと
感じるのも仕方がないのだ。

「これで今年の分は大丈夫だと思うよ」

「今年……………」

「うん、今年」

「つてことは来年も……………」

「まさか、蒼真君。これだけで一年をやり過ぐそうと思ってる？」

「ちやうの？」

「ちやいます!!」

花音に関西弁で怒られた。

男女で洋服の価値観の違いが顕著に出てしまう。蒼真はファッションに関しては無
頓着を一途に貫くように。今日の成果の期限が季節一個で切れてしまうなどと、蒼真は
想像すらしていない。

「またしばらく経ったら、行くからね!」

「またあ?」

「文句言わない。勿体無いよ? 蒼真君。折角カッコいいのに普段からお洒落しないなん

て。ライブの時以外もちゃんと気を付けないと——」

「カツコいい？カツコいいのか」

「うん？あつ……………」

花音の歩く足が止まる。

少し進んだ蒼真が遅れて停止。振り向くと、顔を真っ赤に俯く彼女の姿があった。

完全な自爆である。

無意識に口から出た思い。花音にとってそのまま過ぎ去れば良いものを、耳の良い蒼

真は拾ってしまった。

「蒼真君のけち……………」

「なんでやねん。でも、ありがとう、花音」

「ふえ？」

「今日一日ずっと俺に付き合って貰って。ここまで助けて貰って。誰にも言うチャンスが無かったからこれまで放置してたんやけど、花音のお陰で色々助かった。ありがとう」

「ど、どういたしまして……………」

さつきとは違う照れが襲う。

彼のこういう所がズルいと花音は必死に邪念を抹消する。いきなりお礼を言うなん

て卑怯極まりない。

「……………帰ろつか」

「うん」

気温も一段と下がる時間帯。

彼の隣に並び立とうとした花音がまた新たに一步を出して——

「……………っ!!」

「花音? どうした?」

唐突に発生した痛み。

顔が少し歪み、不意に漏れた声。蒼真は聞き逃さなかつた。

「……………」

蒼真は花音の足元を見た。

「だ、大丈夫だから。何でもないよ? 段差に躓いちやっただけだから」

「お前は何処まで俺を助けるつもりなんだ?」

「ど、どうしたの? 蒼真君こそ……………」

「足、見せてみ。右足」

「それは……………」

完全に見破られている。

抵抗も虚しく、花音は素直に従った。ちょうど近くにベンチがあったので其所に移動。

ゆつくりと座り、右足の靴を自ら脱ぐ。

花音の足元に膝ついた彼はそつと右足を添えるかの如く優しく持つ。

「やっぱり靴擦れしてんね。ここまで無理せんでも」

「ごめんなさい。折角のお出掛けだったから、新しい靴にしてみたけど……逆効果みたいだったね……」

「そっか。応急処置だけでもしたいんやけど、生憎そういうのが今手持ちにないんだよな……」

「大丈夫、うん、大丈夫だから。家も近いし、これぐらい——」

「信用ならんよ。今の花音のそういう台詞」

「ふええ……」

見事に撃沈。

ただ、互いに困り果ててしまう。花音の家が近いのは本当だが、今の彼女にこれ以上の無理だけは禁物。

と、蒼真が曇り空を見上げる。

「雨？」

「あつ、ホントだ」

顔に触れるひんやりとした雨粒。

ある意味、タイミングとしても最悪な天候の到来だった。

「もうこれしかないか」

「えっ?これしかないって、どういう……」

雨足が弱い今の内に。

蒼真は花音に対して、しゃがんだまま背中を向ける。

「ほら、乗ってくれ」

「ええ!?で、でもそれだと蒼真君の負担が……」

「構わん。ドラマー舐めんな」

「ドラマーは関係ないと思うけど」

「そこは案外、冷静なんだな……」

でも、選択肢は他にない。

息を飲んだ花音は蒼真の背中を前に覚悟を決めた。

「それじゃあ……」

ゆっくり。慎重に。

蒼真の背中に体重を掛ける。密着した身体に緊張が高まりつつも彼の首元に両腕を

回した。

「……………大丈夫？」

「ど、どうにか」

「えっ？本当に大丈夫なの!？」

と、大きく揺れる。

花音は懸命に蒼真の背中にしがみつく。

やがて揺れが収まる。臉を開けば、見える景色がいつもより高くなっていた。

「おっ。雨が強くなってきた。このまま行くけど、準備はOKよな？」

「う、うん……………」

「後は荷物を持って、と」

——高鳴る心臓。

「うん？ん？そんなに力強くしがみつかれると、荷物がとれへんのやけど……………」

抑えきれない衝動に芽生えた花音。

降り注ぐ雨の雑音に気持ちはひんやりと後押しする。

二人の髪が水滴を含み、濡れていく。

「……………待って」

「か、花音……………」

「…………ごめんね、このまま待つて欲しいの。後、もうちよつとだけ。もうちよつとで準備出来るから……………」

ぼそつと聞こえたのは小さな我が儘。

何を待つのか。蒼真は空気を察してなのか、問う事はしなかった。じつとその時を待つ。

——空は未だに「雨模様」。

——次回、花音編最終回！——

— 5の3 —

◇◇◇

蒼真の動きが止まる。

「……………待つて」

背中から感じる体温、そして両腕を押さえるようにして前で組まれた小さな女の子の
細腕。

蒼真は花音にぎゅつと抱き付かれていた。

彼の背広に顔を埋める花音は微かに聞こえるぐらいの音量で彼を止める。

「か、花音……………」

「……………ごめんね、このまま待つて欲しいの。後、もうちよつとだけ。もうちよつとで準
備出来るから……………」

動揺する蒼真。控え目で大胆な行動を取らない彼女を裏切るこの行動に蒼真はただ
黙っているだけであつた。

対して、花音は必死に心を落ち着かす。

——逃げちゃダメ。心に決めたの。

四文字だ。それを彼に伝えるだけ。

分かっているはずなのに、心臓は鼓動をより一層激しくして来る。全身が一気に震えて、今すぐ逃げ出したい欲望が脳内を占めにかかる。

あの日——

……彼のつらい過去を聞いてもなお、花音は彼の隣に居たいと思った。

……私にしか出来ないことを彼にしてあげたいと思った。

……何より、全てにおいて何をして也不必ず脳裏には彼のことか思い浮かんで来た。

そして——

山吹蒼真という一人の男の子を助ける。そう誓った。

でも、彼の深く抉られてしまった心の傷はもう永遠に完治する事はない。彼自身もそれを自覚している。

境界線を跨ぐ一步を踏み込めない蒼真はずっと周りの人々から隠し続けた。そして、表ではどんなに仲が良くても、裏では一定の距離を置くようになった。

愛する人が目の前で亡くなる経験は花音にはない。彼がどんな心情でその時を迎えたのかは分からない。

それでも、彼の昔のトラウマを甦らせてでも告白を行うのは単なる花音の我が儘に過ぎなかった。

「あのね……蒼真君」

花音は顔を埋めるのを止め、彼の首もとへと近付く。身長が高い彼に花音が近付くだけの限界まで。

蒼真はじつとして動かない。

「知ってるとは思うけど、私………」

きつと彼は私の気持ちに気付いている、と花音には確信があつた。根拠はどこにも無いけど、鈍感でない、むしろ恋愛には人一倍繊細な彼にはすぐに見抜かれるだろう、とそんな気がしていたから。

裏付けるかのように、蒼真は黙って花音の次の言葉を待つていた。

「貴方のことが……好きです」

彼の耳元ではつきりと花音は告げる。

お互い顔を会わせてないので表情は見えないが、花音は自分の顔が真っ赤になつていてのだけは分かっていた。

——言っちゃった……。

もう後戻りは不可能。これまでの彼との些細なやり取りは今後の未来永劫で復活する可能性は零に近い。

花音に後悔はなかつた。むしろ、胸につつかえていた何かが取れた気がした。

「それって……………」

ポツリ、と漏れた声。

「ポツリ、と降り出す雨。」

少しでも、勘違いという勝手な解釈にすがり付きたい蒼真にとって、それは最後の足掻きでもあつた。

「二人の女の子として……………だよ？」

「……………そうか」

大きく息を吐いた蒼真。

雨足が徐々に勢いを増していく。頭や服が濡れていく。

「ごめん」

刹那、彼の口から飛び出た謝罪。

「君とは友達、でありたい」

「うん……………どうしてか聞いても良い？」

「……………驚かないんだな」

花音の反応は至って冷静であつた。まるで自分の告白は初めから成功しない事を知つてたかの如く。

「……………理由は言いたくない」

頑なに拒む蒼真。普通はそうだ。自分の心奥深くに土足で入られていく感覚は誰であらうと不愉快極まりない。

花音は、ごめんね、と彼に対しての言葉を添えて彼の心の傷へ触れていくのを覚悟した。

「璃里亜ちゃんのことなら聞いたよ」

「……………もう忘れたよ、そんな奴」

「駄目だよ。そんなこと言っちゃ」

やっぱり、まだ彼のなかに璃里亜は居る。

彼が唯一愛した女性。もう他界してしまっており、一生涯、彼女の笑顔は見れない。

璃里亜の名を聞いた蒼真は荒く言葉を投げ棄てていく。

「花音……………君は何も知らない」

「うん。私は何も知らない」

「なら、俺の事は好きにならない方がいい。花音ちゃんが何も知らない内に——」

「蒼真君」

蒼真の顔のすぐ近くに花音がいた。

雨でびしょ濡れの彼女は真っ直ぐ蒼真の眼だけを見ていた。

「今の発言は流石の私でも怒るよ。蒼真君を好きにならないなんて選択肢、私には絶対

にないから」

「……………花音」

「蒼真君が苦しんでいるのは分かってる。でも、そんな姿、私だってもう見たくない」

「なんで其処まで……………」

「蒼真君が大好きだから」

真剣な眼差しに蒼真の喉がつまる。

「璃里亜ちゃんだつてきつと蒼真君には幸せになつて欲しいと思う。私は逃げない。だから、蒼真君にも逃げ出してほしくない、私……………ううん、私達から」

「……………無理だ」

「無理じゃないよ」

「絶対に無理やねんて!!」

「っ!?!」

彼の大声に花音はたじろいだ。

「璃里亜が居なくなつたのは俺のせいなんだ……………!!俺がこのバンドなら、このメンバーなら、俺と璃里亜の二人なら何処までも行けるつて調子に乗つて!!そのせいで璃里亜に取り返しの付かない怪我をさせてしまつて……………そして璃里亜の夢すらも俺は壊してしまつたんやぞつ!!そんな卑怯者が今更誰かと幸せになれだなんて……………」

彼の悲痛な叫びが雨の中、響き渡る。

まだ成長途中の彼に起こってしまった運命は最悪な結末で幕を下ろした。どうしてもその運命に抗えなかった彼はついに全てから逃げ出してしまふ。

そして、未だにその時の彼女の語る夢は悪魔の囁きと変貌して、彼を蝕んでいた。

——本当にそうなのだろうか。

「違う!!」

「か、花音……………?」

たじろぐ蒼真が目にしたのは迷いの無い花音の瞳。彼女の瞳から流れ落ちているのは雨の滴かそれとも涙か。

「璃里亜ちゃんはきつと最後まで幸せだったはずだよ!!」

「そんなことは……………」

「蒼真君こそ何も分かってない!!」

「……………」

「確かに璃里亜ちゃんとはもう会えない……………もし会える未来があつたなら、私と璃里亜ちゃん、仲の良い友達になれたかもしれない」

「なら……………」

「でも!璃里亜ちゃんは蒼真君と最後まで一緒に過ごせて、悔いはないはず。だって、写

真越しに蒼真君と一緒にいた璃里亜ちゃん、嬉しそうに笑っていたもん」

「俺は……………」

「好きな人には幸せになつて欲しい。そう思うのだったら今の蒼真君は間違つてる。そうだよ、今の蒼真君を見た璃里亜ちゃんだったら何て言うと思うの？」

蒼真は答えない。

「——僕の事は気にしないで」

「……………そこまで知つてるのか」

”気にしないで”。

彼女の口癖でもあつたその言葉。他人を優先して自分を後に回す彼女の常套句だ。

花音ははつきりと蒼真に告げた。

「私のお願いは一つだけ。璃里亜ちゃんの事を忘れて欲しいなんて言わない。だけど、せめて今、蒼真君と一緒に生きている私達の事をそんな目で見てほしくないだけ」

「……………怖いよ。変われ、だなんて」

「うん、そうだよね。でも大丈夫。私が付いてるから。それにハロハピの皆に沙綾ちゃん、巴ちゃん、あこちゃん、麻弥さんだっている」

「……………本当？」

「誰も蒼真君を見捨てたりなんてしない。二の舞になんてならない」

「俺……………夢を持ってても良いのか？」

「うん、私も璃里亜ちゃんも皆、蒼真君の夢を応援するから」

そつと花音は蒼真を抱き締める。彼も最初はびくつくものの、目立った抵抗はそれつきり。

両膝を湿った道路につけた彼の背中はとても小さかった。

優しく彼の背中を擦る。時折、彼のひくつく声が漏れるが花音はずっと撫でていた。



——数十分後。

「……………分かった。俺、これから君達のことちゃんと見る事にする……………今までごめん」
「ううん、気にしてないから」

「それと……………」

「それと？」

「……………返事の件はやっぱり保留でお願いします」

「あつ……………う、うん。待つてる……………」

蒼真はぎゅと花音を抱き締める。

雨音が静かに二人の空間を形付ける。固く閉ざされた蒼真の心中では何かが変わろうとしていた。

花音の口が勝手に動く。

「でも、一個だけ……………」

「花音？」

「私の事を一人の女の子としてちゃんと見てれる証が欲しいとかなんて言ってみちゃったり……………」

「証？」

まだ少し不安が。

そんなふとした迷いから飛び出たほんの欲張りな一言。

抱き締めている蒼真を優しく離れた花音は両手をぶんぶんと振り回す。不思議そうに見ている彼の顔が余計に花音の羞恥心を増幅させる。

「ううん……………やっぱり今のは忘れて」

「……………分かった」

「えっ？蒼真く——」

——雨はもう……………止んでいた。

花音編 終結

大和麻弥編

ー1の1ー『モデル撮影』*

◇◇◇

とある日。事務所、会議室。

「ええー!!!」

叫び声がこだまする。

声の張本人に対して、被害に巻き込まれた様子の四人の少女達はたまらず耳を手で塞いでいた。

「麻弥ちゃん……………どうしたの?」

堪らず、近くにいた千聖が声をかけた。

「びつくりしたあ……………」

「何事ですか!?!」

「何々?面白いことでもあった?」

各自、”Pastel*Palette”のメンバーが先程の出来事に好奇心を示すかのように集めた。

ボーカル、”丸山彩”。

キーボード、”若宮イブ”。

ギター、”氷川日菜”。

ここにベースの”白鷺千聖”とドラムの”大和麻弥”を加えた計五人が、今世間で話題持ちきりのアイドルバンド”Pastel*Palette”である。

「それが……今度の撮影なんですけど……」

スタッフと先程まで打ち合わせをしていた麻弥。その時に、原因があったみたいでゆっくりと彼女は話し出す。

「メンバーごとにテーマが違うあれね」

「私は……”メイド”だったかな」

「私は”ブシドー”です！」

「そうね……確か、私は”お姫様”で、日菜ちゃんは”スポーツ少女”だったわね？」
「うん、そうだよー」

既にモデル撮影自体は何回か体験しているパスパレのメンバー達。故に今回は一風変わって、各自テーマに沿った撮影を行うと数日前に聞かされていた。

勿論、麻弥もテーマを聞いているはずなので今更驚くようなこともないはず。

「それがジブンの場合は”デート風景”で……」

「おおー！」

「日菜ちゃん！」

目が怪しく光った日菜に彩が気付く。

「正直、恥ずかしいのですがこれも仕事と覚悟してたんですよ」

「そうね。私達パスパレにとっても大事な活動の一環だもの」

「それが先程、撮影するにあたってどうも相手が必要と判明したらしくて……………」

「相手？」

「それって……………つまり彼氏役ってことかしら？」

「……………はい」

「[[[[……………]]]]」

メンバーの表情が微妙になる。

麻弥は元々アイドル志望でこの業界に入ってきている訳ではない。単に機材が大好きな少女であって、恋愛面に至っては初心者以下。

だが、今回の撮影のテーマは“デート”。既に彼女の心の許容量がオーバーしていることは他の全員が言わずとも感じていた。

「ジブン……………あまりそういう事はしたことないので上手くいくかどうか……………」

「スタッフさんからどうという人と撮影するとかは聞いているの？」

「いえ…………あくまでジブンメインの撮影なので、まだ決まっていなくて…………でも、少なくとも俳優さんとは聞いてます」

「ん……………」

「千聖ちゃん？」

考え込む千聖に彩が首を傾げた。

明らかに何かを企んでいる。だが、それがどういう物なのかは想像がつかない。

男の人との撮影。もし自分がその立場になったとなれば、緊張してしまうのは確かだ、と彩は思っていた。

「麻弥ちゃん」

「はい？何ですか？」

「麻弥ちゃんと仲が良い男の人とかいないかしら？」

「え!?!ど、どうしてつすか!?!」

「その人に頼むのよ。少なくとも緊張はある程度ほぐれると思うわ」

「だけど、それって一般人さんをお願いするってことになるんだよね？大丈夫なの？」

彩の疑問も、もつともである。

対する千聖の反応は冷静であった。

「雑誌に載るのは麻弥ちゃんだけだから問題ないと予想がつくわ。それで麻弥ちゃんと

その人に注目が集まりでもしたら、結果としては、雑誌の利益に十分効果があったということになるから一石二鳥でもあるわね」

「えー凄い自信だね。でも、私達だけで決めちゃって大丈夫なの？」

「自分で言うのもあれだけど、悪くない提案を出したつもりよ。スタッフさんに話せばすぐにでも通ると思うわ」

話を進める千聖と彩と日菜。

それを口出しできず、無言で見守ってしまったている麻弥に心配そうに近づくのはイブであった。

「マヤさん、大丈夫ですか？」

「えっ？あつ大丈夫ですよ！イブさん。心配かけてすみません」

「なら、良かったです！」

イブの無邪気な笑顔が眩しい。

「それで、マヤさんには男の相手？はいるのですか？」

「その言い方はちよつと違うような……………」

イブの変な言い回しに苦笑いで返しつづ、麻弥は考えていた。いることにはいる。男性であつて、さらに自分と話も合う人。

——と、三人が同時に頷いているのが麻弥の目にはいる。

「なら、早速話をつけに行つてくるわ。それでいいわね？麻弥ちゃん」
「あ、はい！……え？千聖さん？」

千聖の唐突なふりについて反射で返事をしてしまった。

気付いたときには既に千聖は部屋を後にしていた。麻弥の頬がひきつる。

「良かったね、麻弥ちゃん！」

「段々面白くなつてきたよ！」

「マヤさんのお相手、会えるの楽しみです！」

麻弥もこう言われて分からない訳にはいかない。

一先ず、落ち着いて纏めよう。

次の撮影において、彼氏役が必要となつた。ただ、いきなり初対面の男の人と例え嘘でもデートのような事をするには抵抗がある。

なので、特別に麻弥の知り合いの男性にゲスト出演してもらおう……とパスパレの中で結論がついたらしい。

「え、ええー！?!?!」

本日、二度目の悲鳴。

◇◇◇
撮影スタジオ。

「……………これは……………まじかあ」

おっと心の声が漏れてる。自重、自重。

スタツフに案内され、ここに辿り着いたのだがこういう環境は初めてなので少々気が引いている。

俺がここに来ている理由は一本の電話からである。

つい先週にドラム同士の麻弥ちゃんから電話があったのだ。しかも、第一声が「助けてください！」と来たもんだ。相手がパニックだと、逆に自分は冷静になつてしまう現象を実感した。

その後、詳しい事情を聞かせてもらった。雑誌の撮影でデートをテーマとするが、麻

弥ちゃんの相手役に適役がないので俺に助けて欲しいとのこと。

一通り聞いた感想としての一言。麻弥ちゃんの所属するパスパレのメンバーさん、随分と大胆ですね。麻弥ちゃん、電話のとき既に泣きそうだったぞ。

「あ、蒼真さん！お待ちしてました！」

おっと、ここで本人の登場である。

撮影する場所は本格的な撮影スタジオのようだ。今回のテーマに沿って、何も無いスペースにベンチが一つポツンと置かれている。背景は合成でもするのか真緑の壁に統一。

「あ、麻弥ちゃ………ん」

「蒼真さん？どうされました？」

いや、言葉が詰まっただけや。

原因は麻弥ちゃんの格好。白いワンピース姿とか滅多に見ない。それもデートに向けて張り切った女の子が選ぶような。

そういうえば、今日はそんなテーマだったな。

「麻弥ちゃんの服、お似合いだなって………思っただけやから気にすんな」

「え？あ、そうですか………ありがとうございます………」

麻弥ちゃん、ポカンとしたかと思えば頬を少し赤らめて小声になりながらも言ってく

れた。

無言が続く。普段の俺なら静かな空間でも平気なタイプだが、とにかく気まずい。

ふと自分の格好を見て思い出す。

「そう言えば、俺、制服なんやけど……大丈夫？」

「あ、別室に着替えありますよ！案内しますね！」

そんなこんなで麻弥ちゃんは意気揚々と歩きだす。

さて、今日の撮影はどうなるのだろう。俺はちよつとした好奇心と共に彼女を追いかけた。

— 1の2 — へ続く。

— 1 の 2 —



撮影スタジオ。

「では、撮影を始めます」

スタッフのかけ声でいよいよ本番。

俺も随分と時間をかけて着替えてきたので準備も万端。大半はパスパレメンバーとの雑談のせいでもあるが。

そうそう、麻弥ちゃん以外のメンバーも普通に全員居た。てか、襲撃してきた。

控え室で待機していたが、俺が来たということで着替え室に覗きに來たらしい。特に暇あ、だから来たよ！と水色ショートの子が嘆いていたのが印象的。

今日一日纏めて撮影予定のパスパレメンバー。最後が麻弥ちゃん、このことでよろしくとベースさんに言われた。

会ってから思い出したが、彩ちゃんもパスパレの一員。なので当然いる。ただ向こうは麻弥ちゃんの相手が俺とは知らなかったらしくー

『蒼真君!? え!? なんです!』

と、相対したときには彩ちゃんの変態はまったく隠しきれなくなっていた。彩ちゃん、世間は案外狭いものなんです。

「はい。分かりましたー」

「……………慣れないな、これ」

「大丈夫ですっ！蒼真さんにお似合いですから！」

「そうかな……………」

隣の麻弥ちゃんが返事をする。

俺も不安を漏らしつつ、歩き出す。

少し前に、そんなこんなで互いの自己紹介も兼ねつつ、彼女達のプロデュースで俺の服装が決められたのだが、如何せん、俺はファッションには微塵も興味がない。

つまり、どういう服で何をアクセントにしているのかが一切不明。ただ、キーボードの子からはお似合いでカッコいいです！ブシドー！とのことなので大人しく着ている。

あの子、どこの国のハーフなんだろう。ブシドーって何のことやら。

「まずはそうね……………」

カメラマンの指示に従い、動く。

撮影、とは言ったもののスタツフも最小限。カメラマンとディレクターとその他数人。そして、俺と麻弥ちゃん。

大人数から注目が浴びるとただでさえ緊張しているのに余計に動きに強張ってしま
う。その点では、ありがたい配慮だ。

「にしても案外ホーム感あるよな」

「それは蒼真さんが来るならって千聖さんの配慮のお陰ですね」

「そうなん？」

「ええ」

千聖さん。パスパレのベースさん。

以前からも女優として活動しており、パスパレのまとめ役を買っている程の真面目さ
ん。たまにテレビのドラマでも見かけるので人気なことは確か。

小さな配慮も出来るとはあの人、何者だ。

「二人ともまずはベンチに座ってね」

「座ったあとはどうすれば？」

「そうねえ………お好きにして頂戴。こっちで勝手に撮っておくから」

そう言われても。

ベンチに腰かけた俺と麻弥ちゃん。スタッフから自由にとの指示が出たが、逆に今は
それが困る。

「撮影がこんなあつさりしてるとは」

「ジブンも初めてです」

「適当な会話をこなすしかない、とお互いに理解はしているのでそつなくこなしていく。」

でも、一つ問題が。

麻弥ちゃん、普段は眼鏡をかけてるのたが今はコンタクトレンズなのか眼鏡はしていない。

それを見た俺は。

「……うわっ、超美少女やん。」

ギヤツプが物凄いとはこの事。会話は普通だが、俺はさつきから麻弥ちゃんの方を一切見ていない。

だって、見たら意識してまうから。

「蒼真さんのバンド、近々ライブはしないんですか?」

「え? ライブ? ……来週ぐらいに対バンはするね」

「な!? それはどことですか!?!」

超絶に興味津々の麻弥ちゃん。

「After growとやったかな」

「アフロ! 絶対観に行きます! 蒼真さん、知ってます? アフロとはジブン達パスパレも

曲を提供してもらったりと仲が良いんですよ！」

「そうなん？それは意外」

「ですね。まさかですよ！」

Aftergrowがパスパレに曲提供とは。これまた身近な所でまさかの繋がりが発見された。

あの頑固なボーカルがパスパレに合わせた曲を作ったのか。嘘だあ。

——と、——で。

「蒼真君。もつと麻弥ちゃんの方に顔を向けてね」

「っ!？」

「どうしました？」

「んや……………」

くっ、あのカメラマンやりよる。

ここは男として覚悟を決めない。そう心に誓って俺は麻弥ちゃんの方へと振り向く。

「あの……………蒼真さん……………そんなにじつと見つめられても……………ジブン……………恥ずかしいのですが……………」

「あつ、すまん」

「い、いえ……………」

「いいねー!!それ!!」

外野が騒いでるが知らん。それどころではない。

俺も麻弥ちゃんも照れ臭くなってしまい、どちらとも視線を反らす。

「ほんとごめん」

「そんなことは……………ないです……………はい」

「これは……………気まずい。」

「よし!次に行きましょ!」

ここでカメラマンがノリにのった勢いでそんな提案をしてくる。

一息落ち着けると思った両者。それは儂くも即座に消される。

「蒼真君!座ったまま麻弥ちゃんの腰に腕を回して頂戴!」

目をパチクリとする俺。

「……………すみません。もう一度お願いします」

「麻弥ちゃんの隣に移動して、腰に手を回すのよ!ほらほら男の子!」

待て待て待て。待てやーい。

それはちよつとハードル高くないですか。麻弥ちゃんはまだ知り合ったばかりの女の子ですよ!!

彼氏でもないのに腰に手を回すなんて事——

「蒼真さん……………お早めにお願ひします。ジブンも緊張しちゃうので」

「……………良いの？」

「はい。今日はそういう撮影ですから」

麻弥ちゃんがそう言うなら、と俺は彼女の隣に腰を下ろす。近い。女の子特有の香りが鼻孔を刺激してくるが、今の俺は無心に近い状態。

ゆつくりと左手を麻弥ちゃんの背後から伸ばしていく。

「はぁ〜い。そのまま笑って〜」

笑えるか！と訴える。勿論、届かない。

むしろ仕上がりが気になる。苦笑いになつてる自分しか想像できない。

麻弥ちゃんとは密接になつてゐる。意識しないように心掛けるが無理。

ひとまず、柔らかい。全身を使うドラマーなのに何故だ。

「OK。もういいわよ〜」

数回、フラッシュを浴びたら許可が降りた。即、俺は左手を彼女の腰から離して深呼吸を目一杯する。

「……………」

「……………」

序盤と比べるとどうしても静かになってしまふ。

麻弥ちゃんも俯いたまま、両手を膝の上で握り拳を作ってじっとしている。

俺はというと、カメラマンのニヤリとした笑みを見逃さないでいた。

「……これは……まだまだ続くぞ。」

「それじゃあ次はお姫様抱っこ行こうか！」

「おおおお姫様抱っこですか!？」

覚悟を決めた麻弥ちゃんでもこれで完全にパニックモード突入だ。俺はそれに入ると無言になるタイプ。

「……はもう無だ。無の境地を極める修行だと脳内に植え付けるのだ。」

「……無。無。無。可愛い。無。」

「麻弥ちゃん」

「そ、蒼真さん?」

「ほら、もうやるよ。大丈夫、ちゃんと俺が支えてやるから」

「は、はい……………」

両者、思いを胸に立ち上がる。

俺は麻弥ちゃんの腰と膝裏に手を伸ばして彼女を持ち上げる体勢へと移行。その間、お互いの表情が見えないのもう行き当たりばったり。

そして、数秒の空白を空けてから俺は麻弥ちゃんを軽く持ち上げた。

「お、重くないっすか……………?」

「んや、全然。想定よりは軽いな」

「よ、良かったです……………」

迪々しい俺達に対して、スタッフ側では女子の割合が高いせいとか、まさかの大盛り上がり。加えて、鬱陶しいほどに囃し立ててくる。

「…………成長したな…………麻弥ちゃん。」

「…………いけ!!そこだ!!いけえ!!」

「…………二人とも良き人生を……………」

誰だ、悟りを入れてくる奴は。感動しちやつてる人にいたっては、あんた保護者かよと声を大にして言いたい。

後で押し寄せ煩い人と語り合うことに決めた俺は胸にいる麻弥ちゃんの様子を伺う。

「…………恥ずかしいですね」

「……………」

「…………蒼真さん!何か言ってくださいいよお」

身動きが取れない麻弥ちゃんの悲痛な叫びが聞こえる。すまん、俺もある意味限界なんだよ。

この麻弥ちゃんを抱っこしている時間はゆっくりと進んでいるような錯覚を俺はじっくりと味わっていた。うでの疲れも貯まってきた。

幸か不幸か、すぐに終わりは近付く。

「ありがとうー！もうOKよー！」

よし、許可が降りた。

早速と言わんばかりに俺は麻弥ちゃんを下ろそうと体勢を変えようとすると。

「蒼真さん」

「うん？」

「もう少しだけ……このままで良いですか？」

「え？……あ、うん。構わんけど」

麻弥ちゃんがそう言うなら、と俺は彼女を下ろすのを中断した。でも、俺にとって彼女の発言の真意は謎に包まれたまま。

数秒して麻弥ちゃんは再び言う。

「もう大丈夫です」

「分かった。ゆっくり下ろすから気を付けて」

「はい、ありがとうございます」

結局、俺の胸はもやつとしたまま麻弥ちゃんを優しく下ろした。聞こうにも聞きづら

い。うーん。

思考の海に沈んでると、カメラマンが近づいてくるのが見えた。どうやら撮影も終盤に入ってきたようだ。

「さて、次はあなたたちの意見を取り入れての撮影をしようかなって考えているの。急で悪いんだけど、何かあるかしら？なければ、これで撮影は終了よ」

「俺達のですか？」

「なるほど……ジブン達らしい何か……」

「そこまで深く考えなくてもいいわ。軽く撮ってみて、良かったら雑誌に載るだけだし二人だけの思い出の記念写真としてでも大歓迎よ」

つまり、ただのおまけ程度と思えばらしい。

あつてもなくても良い素材とのことなのでこれはカメラマンさんりの好意、お礼と捉えるべきか。

「俺と麻弥ちゃんね……あ」

「蒼真さんとジブンですか……あ」

俺と麻弥ちゃんは目を会わせる。

そして小さく相槌を入れる。ここまでこれば、意見は言わなくても同じだろう。

山吹蒼真と大和麻弥。

二人の共通点と言えば、言わずともがな思い浮かぶ。

「なら、折角やし」

「はい！それで行きましょう！」

「……そう、ドラムだ。」

◇◇◇

後日談。

「あれ？麻弥ちゃん、それって……」

事務室のテーブルで雑誌を広げている麻弥を目撃した彩。しかもそれには見覚えがあつたのでたまたま麻弥の背後へと陣取る。

「あ、彩さん！そうです！この前の撮影がもう出来上がったみたいですよ！」

「えっ？そんなの？どれどれ……あつ。私のは上手く撮れてる………のかな？」

「あはは………彩さんらしい一枚じゃないですか！」

彩の写真はばっちりメイドさん。ただし、転げそうになって運ぶ途中の皿を危うく落としそうになっているシーンを抜き取ったかのようなようになっていたのだ。

これには麻弥もフォローを入れるが、あまり成果は見られない。

「あ、そうだ。麻弥ちゃんはどう？蒼真君も映ってるのかな？」

「ちよつと待つてくださいいね………あつ、これです」

「えっ？………す、凄い。カッコいい………」

「ありがとうございます、彩さん。ふへへ」

そこに映し出されていたのは麻弥。それは良い。麻弥と背中を合わせているのは蒼真だ。

彩が驚いたのとはそこではない。ドラムのセットを前にスティックを握り締めて陣取る麻弥のその堂々たる一瞬の姿を切り取ったかのような臨場感あるその一枚はもはや感動の域を超越せざるをえない大作であったのだ。

「いやあ………蒼真さんとセックションしてた所を撮られたみたいでこんな感じになっちゃいました」

「だとしても……だよ!! 蒼真君と何か撮ってるんじゃないの?!」

蒼真と麻弥の撮影中はずっと楽屋待機の彩。

自分達に比べて、随分と長引いていたので撮影が難航していたのかとばかり思っていた。まさか、二人がドラマのセツションをしていたとは。

「えっ!? あ、あれは………秘密です!」

「そんなあくズルい! 教えてよ! 麻弥ちゃん!」

「駄目ですって! あれはジブンと蒼真さんだけの秘密ですから!」

それでも、とばかりに詰め寄る彩。でも麻弥が白状する日はきつと来ない。

——これはジブンと蒼真さんの………。

あの日、記念撮影として自分が彼にお姫様抱っこしてもらった写真。それだけは誰も見せたくはない麻弥の密かな決意の表れでもあった。

大和麻弥編——『モデル撮影』 終

— 2の1 — 『ドラム図鑑』 *



某所。撮影スタジオ。

「では、ついに始まりました！毎週金曜20時から配信しています”ドラム図鑑”！本日の進行は”Pastt*le*Palette”のドラム担当”大和麻弥”がさせていただきます！」

ジブン、麻弥はただいまカメラに向けてカンペに書かれた文字を意気揚々と読んでいた最中であつた。

撮影であるが、同時に某動画サイトへの生配信でもあるので放送事故が危ぶまれる可能性がある。でも、この”ドラム図鑑”という企画は至って穏やかに進んでいくのでその心配も杞憂。

内容は至極単純。ゲストのドラマーさんと色んなテーマで語り合うだけ。ドラムセットを並べてみたり、お互いの自慢の機材を紹介しあつたり。

これが、ネットではそこそこの人気を出している。プロの方もゲストで呼ばれたりするぐらい。観ている人にとっては勉強になったりするようで右肩上がりです。視聴者が増

えている。

「おつ、もうこんなに多くの人が観てくださってるのでしょいか？ありがとうございませす！」

視聴者と配信者が直接コミュニケーションを取れるのも、この生配信の魅力でもある。さらに視聴者の人数も画面から確認が出来るので早速、ジブンはそれを観ていた。

——542。

序盤と考えると、これは相当な数である。

「コメントの方も見てますよ〜」

『今日は麻弥ちゃんだー』

『麻弥ちゃん！手を振って〜！』

『後ろのドラムセットすげえ』

視聴者の記入したコメントもジブン側から確認出来る。これも魅力の一つだ。

カンペに進行を仰ぐ文字が出る。

「では、早速ですが！」

メインイベントへといきなり突入。

毎回、恒例のゲスト紹介。ジブンはそれが誰なのか知らされていない。

緊張の一瞬。でもジブンは楽しみになってきている。同じドラマーと機材関連を存

分に語り合えるのだ。期待に胸が踊りまくる。

「ゲストの登場となります！どうぞぞ！」

張り切って声を出した。

暫くの間、静寂が訪れる。

「あ、あれ？」

普段ならここでゲストが登場。でも、誰も現れる気配がしない。撮影カメラの背後のスタツフも特に目立った動きはない。

と言うことは………これは——

『麻弥ちゃん！後ろ!!』

コメントに流れたその一言。

咄嗟に私が振り向くと、そこには一人の男性が満面の笑みをして立っていた。彼の手にはスタンド。その先には——

「ひゃあ!？」

「あはは、ドッキリ大成功やね」

——シンバル。

完全に油断していたジブンにそのシンバルの甲高い音は驚愕の一打となった。

つい悲鳴がスタジオ全域に漏れてしまい、たまらず恥ずかしい気持ちになってくる。

「そ、蒼真さくん!!」

「ごめんね、麻弥ちゃん。さて、観とる皆さん、今のちゃんと観れた? 貴重映像やったぞ」

カメラに向けて蒼真は手を振る。

『ふわあああ!! ソウさんだあああ!!』

『観れました! 家宝にします!』

『ありがとう……』

一気にコメントが流れる。

それを一望した蒼真は満足そうに頷くが、ジブンはそれが気に入らなかつた。

カンペが更新される。スタッフサイドもドツキリは完全に把握済みのようであつてやられたとはこの事なのか、とジブンは分かつてしまう。

「で、では改めて……自己紹介の方をお願いします」

「了解」

画面の左側に映るジブンとは逆、右側に置かれた椅子に座つた蒼真はこほん、と一息置く。

「本日のゲスト、一応ドラマーの山吹蒼真です! よろしく!」

こうして“ドラム図鑑”のオープニングは無事に終えたのであつた。

◇◇◇

山吹家。リビング。

「あつ、始まった」

パソコンの某動画サイトを開いた私、沙綾は目的としていた動画をすぐに見つけた。と同時に動画の配信も開始されたようで、画面に麻弥ちゃんの座ってる姿が目立つ。

「ソウ兄ちゃんは？」

「まだみたいだね。ゲストだから麻弥先輩に呼ばれるまで待たないと」
妹の沙南を隣の椅子に座らせる。

リビングのテーブルにぽつんと置かれたノートパソコン。山吹家の日常とはかけ離れた光景であった。機械は苦手な一家なのだ。

あつちの山吹家はそうとは限らないかもしれないけど。

と、弟の純が私の肩越しに覗く。

「ねえねえ、奥にあるのがソウ兄のドラマ？」

「え？……どうだろう？」

画面に映るスタジオの背後。

明らかに誰かのドラマセットが置かれてある。しかも二つ。

片方は麻弥のだと仮定すれば、もう片方はゲスト自慢のドラマセットのはず。番組の中でゲストの機材紹介コーナーもあるので後々わかるだろう。

『では、早速ですが！ゲストの登場となります！』

番組始まって早々。ゲスト登場の番となる。多くの人はここで誰なのか胸を膨らませているらしいが、私は今回のゲストを知っているので残念ながら味わえない。

純と沙南の二人は逆にゲストの登場をこれかとはばかりに期待しているらしく、そわそわしているのが私まで伝わってくる。

「あつ、いたー！」

「ホントだ！ソウ兄だ！」

「何やろうとしてんの……」

画面の奥からこっそりと忍び寄る蒼真。

進行の麻弥は気付いていない。不安そうにキョロキョロしているが、プロ魂から背中を見せる訳にはいかないのだろう。結果的に不吉な笑みを浮かべる蒼真の接近を許し

てしまう。

そして、私はそんな蒼真の手に持つ物を見て、苦笑いするしかなかった。

『ひやああ!!?』

悲鳴がスピーカー越しに響き渡る。

自由に出せるコメントも大量に右から左へと通過していき、視聴者側も大盛り上がりを見せていた。

『そ、蒼真さ〜ん!!』

『ごめんね、麻弥ちゃん。さて、観とる皆さん、今のちゃんと観れた?貴重映像やぞ〜』
蒼真が手を振る

それを見た沙南は元気よく手を振り返す。

「沙南、向こうからは見えてないんだよ?」

「分かってる!でも、やるんだ!」

彼のことを相当お気に入り沙南。

姉としては嬉しいやら、寂しいやら。複雑な心境。

「おおー!!すげえー!!」

弟の純は自分の知ってる人が画面に映っている事象に興奮が収まらないようだ。科学技術の発展を肌で感じている的な感じだろうか。

こんな飽きない二人の様子を見ている内に蒼真と麻弥のやり取りが再開していた。今はちようど蒼真が自己紹介をするみたいだ。

『本日のゲスト、一応ドラマーの山吹蒼真です！よろしく！』

ここで一旦、画面が切り替わる。

パスパレの曲がBGMとして流れて番組定番の静止画が出る。この間にスタジオ内では転換が行われている。

——数分後。また画面が切り替わる。

『では……ここからは紹介コーナーとなります！内容は主に謎に包まれた蒼真さんのプライベートなどを掘り下げながらになります。蒼真さん、よろしいですか？』

テレビだと滅多に見ないが、ネット番組ではよくあるコーナーらしい。私はそれほど見ないが、有咲が言っていた。ここでゲストの心情だったり、独自のこだわりを視聴者は知ることが出来る。

特に蒼真は世間では、謎多きドラマーとされている。

『ええ、勿論です』

画面左側に座る麻弥と右側に座る蒼真。

普段の店に訪れる時の抜けてる服装とは違って、画面の向こうでは完全にお洒落を決めてる彼になんだか不満を覚えつつも黙って見守ることに。

『では、早速……まずは観てくださってる方に蒼真さんの軽いプロフィールをご紹介しますね』

『うわあ……恥ずかしいやつ……』

『ちよつとお静かに良いですか?』

台本を手にもつ麻弥の鋭い注意。

萎縮するかのごとく蒼真が小さくなる。

そして「何それ理不尽や……」とらしき台詞がスピーカーから微かに届く。

『wwwwww』

『麻弥ちゃん強いです』

コメントでも無論、それを逃さない。

家のキッチンが少し慌ただしくなり物音が目立ってくるのが気になり、私はそちらへ意識を向ける。

「沙綾く。ちよつと良い〜?」

「はぁーい」

母親から声がかかる。

「純、沙南。仲良く観るんだよ」

「あいさー」

「はーい」

「純、変な返事はしーない！」

「ごめーんなさーい」

まあ、どうせ彼の影響だろう。

そんな思いを抱きつつ、沙綾は母親の手伝いへキッチンに向かうのであった。

ー2の2ー へ続く。

— 2の2 —



撮影スタジオ。

「では、蒼真さん。さっさと時間がなくなる前に質問コーナーと行きましょうか」

麻弥がそう仕切る。

自分のプロフィールを他人に言いたい放題にされた蒼真は元気なさげにしているが、麻弥はまだまだ張り切っている。

プロフィールと言えど、主にドラママーとして蒼真が行ったこれまでの活動を簡単に説明しただけなので、まだ良かった。

「質問？」

「はい。いくつかはこちらで用意させてもらってますが、勿論コメントの方で上がった質問も取り上げさせて貰います」

「それは麻弥ちゃんに対しての質問もあんの？」

「ええくと……ジブンは司会進行なのでないそうですね」

離れてネット配信の様子を見守るスタッフを一瞥した麻弥。自分に対しての質問は

用意されていないと知ると何処か浮かれ気味に話し出す。

蒼真は反対につまんないとばかりな態度を見せていた。

「ではいきますよー！」

「ほー」

1——蒼真さんがドラムを叩く際に気を付けている事、もしくはコツなどはありますか？

「……………そやね。迷いを捨てること」

「とうとうと？」

「次はこのフレーズを叩いて、あのパターンに移るから区切れを特に気を付けよう、とか考えたりするかもしれないけど逆にそれが緊張感を生んで、体が固くなってしまつて、最終的に失敗に繋がってしまうのではと俺は思つてる」

「ジブンも分かる気がします。 いざ、ライブになると全然普段通りの演奏が出来なくなりますから」

「本番は普段の八割しか出せないつてよく聞かぬ。だからこそ、練習からそれこそ無意識にその曲を通せるぐらいに練習して本番に臨む必要があるつてのが俺の意見」

「ありがとうございました。では、次へ」

2——どれくらい練習してる？

「練習って個人で、かな？俺の場合やと、酷い時には——」
「酷い？」

「六時間ぶつ通しでひたすら叩く練習を一週間したこともあるぐらい」
「……………それは酷いですね」

苦笑いの麻弥。

悪いね、とばかりに蒼真はふんすと鼻を鳴らす。

「今はポチポチとスタジオに籠ってやっとするぐらいかな？」

「大体一回でどのくらいですか？」

「二時間」

「先程のインパクトが強すぎて、長いのか短いのか分からないです」

「これぐらいは普通じゃない？」

「はい、コメント欄が荒れますのでそういう発言はお控えぎみでお願いしますね、蒼真さん」

「……………はこ」

立场上、麻弥より下の蒼真。

ゲストのはずなのに、麻弥からの扱いが雑なのは如何にと訴えたい。

3 —— 何歳からドラム始めました？

「中学一年生」

「切っ掛けとかはどんな？」

「ベースの光に軽音部に連行されたのが切っ掛けやね。そこで誰も手付かずのドラムを見つけて、俺がやることになったと」

「……………ドラマーは人手不足が常ですから」

「元々やる前から興味はあったんよ？ 管楽器とか弦楽器よりかは打楽器がなんか一番惹かれる感じが小さい頃からしてたし」

「そうなんですね」

「それで、いざドラムをやってみると、とことんハマってしまつて……………そうなるよねえ。後はもう自分でも止められないぐらい叩きまくつてたのが中学の良き思い出」

「……………だそうですよ、皆さん」

麻弥の無言の空白があった。

4 —— 練習とかは具体的には何をしてます？

「まあ……………困るよね」

「ですね」

「初心者だとまずは基本のエイトビートを叩けるようにすることかな」

「と言いつつ、エイトビートだけでも数パターンありますから。初心者からしたら大変

だと思えますよ」

「そこは気合いで乗り気つてもらおうしかないな」

軽く苦笑いを浮かべる蒼真。

「ここはもう譲りようがない最低ラインのようなものだ。」

「一先ず自分の好きな曲のコピーをするのがドラムが上手くなる近道になるんかね

……………」

「蒼真さんはそのように?」

「基礎練は程ほどにして、後は好きなバンドやアークラの楽しい曲とか。他はね……………
気に入ったフレーズもひたすら繰り返し返して叩いてるな」

「あ、蒼真さん。そのアークラの曲の中でも難しいフレーズは多くありますが、どうすれば叩けるようになりますか?との質問も多く来てますよ」

麻弥はモニターを見ていた。

そこで蒼真が話す内容を掘り下げる質問を見つけた麻弥は折角の機会だからと彼に聞いてみたのだ。

「難しいフレーズ……………多分あれのことかな?ぱつと何個かは思い付くけど、あれはね曲に合うからやってるって理由もあるけど、己の限界の挑戦も兼ねて、あえて難しくしてるってのもあってね、完コピされると俺の立場が……………まあまあ麻弥ちゃん?

ちゃんと答えるから」

「ジブン、何も言つてませんよ?」

「……………それもそうか。行き詰まった時はゆっくりとそのフレーズを確実に噛み締めるかの如く練習するのが一番。それでも無理ならさらに遅くする。今の実力で出来るまでスピードを落として、慣れてきたら徐々に原曲までスピードを戻していくつてのが一番の近道やと俺は思うな」

「なるほど……………ジブンは無意識に蒼真さんと同じことをしてしまつてる気がしますね」

「……………その発言も危なくね?」

「え? そうですか?」

5——憧れのドラマーとかはいますか?

「憧れ……………勿論いるけど、言いたくはないかな」

「どうしてです?」

「俺が尊敬してゐるって向こうが知ったら、会つた時にうざい顔で言い迫つて来るのが目に浮かぶから」

「となると、実際に会う仲なんですな」

「でも、初めて会う時は既にその頃から尊敬してたから、だいぶ緊張してたぞ? 流石に」

「誰だって尊敬する人と会うのは緊張しますよ。知ってます？ 実はジブンも蒼真さんと初対面の時は緊張してたんですよ？」

「あーあの時？ 全然そういう風に見えなかったけど」

「まあまあその話はまた今度にしましょ！」

自分の話題となると速攻で切り上げる麻弥。

「蒼真さん、他には居ないんですか？」

「他……………俺の親父とか、かな」

「い、意外ですね……………」

「ドラマーではないんやけどね。何て言うか……………物事に取り組む姿勢とか態度、やり方？ 過去に起きた問題をあっさりクリアしてきた親父のその背中を見て俺は育ってきただから。まだ高校生だけど、色んな面で有難いとは思ってる」

「それは、男だけの……………でしょうか？」

「いや、それは知らんけど」

6 ———— 今後の目標は？

「難しい所よな。まあバンドとしてはどんどん沢山の人に俺達の音楽を聴いてもらって欲しいのが一番かな。ライブで全国を色々と回ってみたいしね」

「蒼真さん個人の目標とかはどんな風に？」

「正直……………あんまない」

「え？ないんですか？」

「うん、ない。あえて掲げるなら、そやね。五体満足で健康のまま死ぬまでドラムが出来たら良いなあとは思つとるけど……………それも目標とはちよつと違うし……………あ、そうだ。自分のドラムセットを製作してみたいとは思つとるよ」

「それは、目標よりかは夢に近いですね」

「そうなるんよなく。今のセットもそれなりに満足しちゃつてるから、オリジナルのドラム製作は余裕があればの話になると思うわ」

7——麻弥さんの事はどう思ってますか？

「……………だそうですけど、蒼真さん？」

「麻弥ちゃんの事……………ね」

ちらり、と蒼真の視線が麻弥の方へ。

そわそわとしてる麻弥。明らかにこれから答える蒼真の答えに麻弥の期待が隠しきれない。

蒼真もうつつすらとそれには気づいていた。

「——の前にほら、麻弥ちゃん。何か出とるよ」

「え？あ、ここで一度休憩を挟む、とのことですね」

スタッフのカンペに気付いた麻弥が冷静に読み上げる。

ぶっ通しも骨が折れるので数分の休息をここで挟むそうだ。あえて、質問に答える直前を狙うのも休憩の間に視聴者が遠ざかるのを防ぐ目的があつてこそその手段の一つ。

「その間はパスパレの曲を流すそうなので、ぜひお聴きください！また曲が終わると蒼真さんの質問コーナーを再開いたしますので、皆さんのんびりお待ちくださいね」

「では”Pastt*le*Palette”より——」

——”はなまる◎アンダンテ”。

— 2の3 —

◇◇◇

スタジオ。

「では、再開しまーす」

麻弥ちゃんの前進行で再び質問コーナーへと戻る。余談だが、配信画面で曲が流れていた間の俺と麻弥ちゃんは何をしていたのかと言うと、水分補給もしながら世間話を軽くしていたぐらい。

パスパレの子達のつい笑みが溢れる微笑ましい話だとか、俺のバンドの状況具合だとか。そんな他愛もない内容。

「んじゃ、さっきの質問に答えるな」

「えっと……………ジブンのことをどういう風に思っているか……………でしたね」

流石に麻弥ちゃんでも緊張するのかな。

己の評価を他人から直接口から聞くなど、滅多な事では体験しない。普段なら気恥ずかしくてつい避けてしまう。

「そやね。一言で言えば……………」

麻弥ちゃんが息を飲む。

「敵」

「えっ!?!……………敵ですか……………そうですか」

俺の選んだ答えに分かりやすく、がーんと凹む麻弥ちゃん。

「あつ、ライバルって意味」

「へえ? あつ、そういう意味ですか!……………うん? ジブンが蒼真さんのライバルですか!?!」

「驚きすぎな」

「そんな!?!ジブンなんてまだまだですよ!!」

謙虚なのか。遠慮がちなのか。色んな表情を見せる麻弥ちゃん。観ている側は面白
いんだろうな。

麻弥ちゃんにはドラマーとして俺と肩を並べていないと頑なに拒むが、何もそこまで否定しなくても、と俺の心中ではそのように呟いている。

パスパレで活動する以前から、プロとして麻弥ちゃんは活動していた。こんな実績を持つのに俺より下手なんて有り得ない。

「んなことないって。麻弥ちゃんを俺はドラマーとして尊敬してる」

「そ、そこまで……………ふへへ……………なんだか恥ずかしいですね……………」

麻弥ちゃんは頬に手を添える。俺から視線をそつと外して誤魔化してはいるがにやついたその口元は俺から丸見えである。

—— 『深い、ですね』

—— 『ほーん。なるほどー』

—— 『麻弥ちゃん、嬉しそう』

コメントでは様々な推測が流れる。二人にそれらを拾える余裕はない。

「もう一つおまけで言うが、俺にとつてはドラマー全員が負けられない存在であり、同時に貴重な仲間でもあるということ覚えておいて欲しいな」

カメラに向かって宣言する。

同じ楽器を愛した者。競い合い、時には励まし合い、愚痴を言い合い、その過程を乗り越えて己のドラマーとしての真髄を見出だすのだと俺は思っている。

そこにプロやアマチュア、果てには年齢の差やドラム歴などは関係ない。

「蒼真さんがそのようにお考えだとは……………」

麻弥ちゃんが隣で思考ぶつてる。

おっと、スタツフがカンペを無茶苦茶振ってるのに麻弥ちゃんが気付かない。まさかの進行担当が役割を忘れてる。つんつんと肩をつつくとようやく視線をあげて気付いた麻弥ちゃん。慌てて番組を繋ぎ直す。

「で、では！次に参りましょう！」



8——二人の出会いとは？

「もうドラマ関係ないな」

「逆にジブンに関する質問も段々増えてきてるような……」

予定ではジブン・大和麻弥に関わる質問はスタッフ側では用意されていないと聞いていた。

それがこうもばつちりと質問に取り上げられている。となると、確実にスタッフの悪意か無遠慮な善意により、コメントから選別されているはずなのだ。

蒼真さんはその辺の事情を知る由もない。一瞬、不思議そうにする仕草をするがすぐに質問の答えを熟考し始める。

「初めてはあれだね。打ち上げか」

「そう………ですね。合同ライブの後、ドラマーだけの打ち上げがついこの前、あったんです。そこにジブンと蒼真さんもいた感じですね」

「その時は………確か、機材の話でもしてたんだけ？」

「ええ、そうです」

第一印象は鮮明に覚えている。

以前の合同ライブで遠くから観ていたけど、いざ会ってみるとおっとりした印象を受けた。

ライブの時の蒼真さん、まさに迫力お化け。バンドのスタイルがロックだから自然とそうなるけど、蒼真さんに至ってはメンバーの演奏も喰ってかかる程の存在感を魅せるから凄い。

それが打ち上げで話をすれば、関西弁で呑気に喋る高校生の男の子なのだから、そのギャップにびっくりする。

「でもジブンは会う前から知ってました」

「あー言ってたね。動画で観たんやろ？」

「はい」

—— 『私もみたー』

—— 『これですネ』

—— 『えっこれソウさん!?!』

—— コメントでも展開が早い。

話から予想した視聴者から蒼真さんの演奏動画のURLらしき文字列が画面を横切る。あまりの早さに感嘆の意を示すほどの手際のよさ。

「……………黒歴史やね」

「そんなことないですよ！大変素晴らしいドラミングです！」

「そんなに褒めてもやらないよ？」

蒼真さん、裏をかかれるのが相当癪らしい。催促する素振りすらないのに警戒心を張り積めている。

視聴者の皆さんはきつと蒼真さんのドラムを叩く姿を映像越しでも良いから間近で見たいものだろう。生のライブでの蒼真さんは他のメンバーと立ち位置の関係で姿が被る。ましてや観客が多いと余計に蒼真さんのカッコいい姿は遠退いてしまう。

—— 『ドラマやって!!』

—— 『みせろー!!』

——『意気地無し!!』

コメント欄ではこんな風に不評のラツシユが続く。ドラマーなら一目でも彼の演奏は観ておくべき代物だとジブンは思うので気持ちは分かる。

「ははは!!やんねえぞ!!」

——蒼真さん、楽しそうですね。

当の本人は本気なのか、冗談なのか。

嘲笑うかのごとく放つその言葉の真意は分からない。

そろそろ止めてあげないと。

「皆さん、安心してください。ちゃんとそういうコーナーもありますから」

「……………おうふ」

「まだまだ質問はありますからね? 蒼真さん」

「……………もう何でも来いやー」

さて、と一息ついて質問を読もうとしたジブン。

が、言う前に目を通すと、その質問の内容に思わず動きが固まってしまった。

「麻弥ちゃん?」

「……………な、何でもないですよ!?!で、では!!」

9 ——好きな女性のタイプは?

「あく……………黙秘権行使で」

「なんと……………ホントに良いんですか？」

「お？どゆこと？」

「蒼真さん、忘れてます？質問はまだまだ続きますってジブン言いましたよ？」

「つまり、ここで使うと後がヤバイってか」

「はい」

どうにかジブンは冷静を取り戻す。

蒼真さんも流石のこれに即答ではなく、うーんと唸り始めた。

ジブンにとって蒼真さんの恋愛事情はまったく知らないのと同義。あわよくば、これからの解答を参考に蒼真に近づきたく——

——はっ!?ジブンは一体何を!?

「参考までに麻弥ちゃんは？」

「ジ、ジブンですか!?!優しい人じゃないっすかね!?!」

「なるほど。そうやね、俺なら二人っきりの時でもリラックス出来る関係なら特に気にしないかな。俺、昔から何かに集中すると黙っちゃうれしいし」

「二人つきりですか……………」

蒼真さんと二人つきり。

「で、では!!次にいきましようか!!」

「うん?慌てすぎちやう?麻弥ちゃん」

「そ、そうですかね!?ジブン、全然落ち着いてますよ!!」

「……………マジでどした?」

彼の心配する視線が痛い。でも、今のジブンにそれを遮る余裕はない。

質問内容も殆んど思考へ回さず、ただひたすらに読むことだけに従事る。

それが逆にジブンを苦しめることになるとは知らずに。

10——蒼さんは麻弥ちゃんの事、アリですか!?ナシですか!?

「……………へえ!?今、ジブンなんと!?!」

「俺が麻弥ちゃんのこと有りか無しかやって言つてたね」

「ふあああ」

「麻弥ちゃん!?!」

ふしゆん、と何かが切れる感覚がした。

跳ね上がる心拍数。頬に熱が段々と帯びてきて、彼の顔を見る度に視線を合わせられないジブンに気付き、もどかしくなった罪悪感に胸が締め付けられる。

でも、彼の声をもっと聞いていたかった。彼の隣はパスパレの子達とはまた違う安心感があっただろうか。

ずっと貯めていたこの感情。名前は分からない。初めて芽生えたのは彼と初めて会った瞬間か。または彼にお姫様抱っこされて彼の瞳が近くでくつきり見えたあの時かもしれない。

どちらにしろ、徐々にこの感情を制御できなくなっていく事だけは確か。はつきりとした焦りを覚えた。

——ジブン、どうしてこんなに心臓がバクバクするのでしょうか………？

大和麻弥、恥ずかしながらここから後の記憶はあまりなかったと後に語ることになる。



放送終了後。

「お疲れ様でしたぁー!!」

スタッフの掛け声でようやく緊張した雰囲気落ち着いた。生放送では事故もただ事では済まないもので、特に裏方の人達が緊張しても無理はない。

一度麻弥ちゃんがオーバーヒートしそうになっていたが、それが山場だったようで後のコーナーの進行は順調にすんなりいった。

蒼真は軽くストレッチをして、今後の予定を考える。晩飯にしては少し遅いが店はまだまだ活気の真つ最中だ。

妹に晩飯は要らないと伝えてあるので、帰りに何処かでご飯を調達するか店内で手っ取り早く済ませておきたかった。

折角だからと言うことで蒼真は麻弥を誘うことに。

「麻弥ちゃん」

「はい? どうしました?」

「ご飯行かない?」

「ご飯ですか!?! それって……ふ、二人きりでしょうか……?」

「ん? そうなるね」

時間もあれだし、他のメンバーもきつと晩飯は食べ終えているだろうと考えている蒼

真。

対して、麻弥はさっきの生放送で出てきたワードに無意識に凄く食い付いていた。

「ご、ごめんなさいっす!!まだ打ち合わせが残ってて……」

「そっか………んじや、先に俺帰るわ」

「はい。今日はありがとうございました。蒼真さんのドラマを知れて、ジブンとても嬉しかったです」

「ああ。俺も今日は麻弥ちゃんの事、知れて良かったよ」

「は、はい………」

蒼真はスタジオを離れていく。その彼の姿をじつと麻弥は眺める。

打ち合わせなんてない。麻弥がついた真っ赤な嘘だ。

気持ちの整理がついていない麻弥に彼と二人きりの食事など処理が追い付かないのは今の麻弥でも想像がつく。蒼真に悪いとは言え、懸命な判断と言えるはず。

——蒼真さん………。

それでも麻弥の胸はチクリと痛い。

立ち去る彼の背中はとても淋しいものであった。

麻弥編—2—『ドラム図鑑』
終

— 3の1 — 『レッツ密着！』 *

◇◇◇

練習スタジオ。

「では、カメラ回しますよ〜」

麻弥の合図にポチッとカメラが作動する。

カメラのレンズがじつと俺の立ち姿の全身を捉える。心なしか、むず痒い気もしなくもない。

機材大好きな麻弥ちゃん。完全に撮影する方に意識を没頭させているが、本来の仕事はそつちでは無かるう。

「……………これ、回つとるの？」

「回つてますよ」

「……………で、どうすんの？」

「……………どうしましょう」

撮影は専門外の俺。肩書きはアイドルだが実際は機材いじりの大好きな麻弥。

どちらも密着に關してはド素人に近い。スタッフさんも人員が別の問題児に割かれ

ているようで此処にはいない。

麻弥の担当スタッフはいる事にはいる。でも、麻弥の持つビデオカメラだけ渡してどっか行つた。大雑把というか、信用されるといふか。

「取り敢えず、麻弥ちゃんが観てる人へ説明的なのをしたら?」

「えっ!? ジブンが、つすか!?!」

「俺がすんのも変な気がせえへん?」

「確かに……………」

番组的に俺はゲスト扱い。そんな俺がいきなり、「どーもー」から映像が流されると観ている側はビックリしてしまう。

麻弥も理解はしているはず。だが、行動に移そうにも撮影始めの手本がこの現場では無いに等しいので躊躇してしまっている。

「こ、今回はこちらに居ますアークラ、ドラマーの蒼真さんを密着することになりました」

少々手間取りながらもナレーションを始めた麻弥ちゃん。その間、じつとカメラのレンズはこちらに向いたまま。そこはプロ根性魂。

一言言い終えた麻弥ちゃん。何かを訴えかけるかのように彼女から視線が突き刺さる。

あ、自己紹介しろってことね。

「アークラ、ドラム担当のソウです。今日はよろしくお願いしますね」

「はい、よろしくお願いします」

「ここでカメラの撮影が一旦止まる。

「これで良いんですかね……？」

「分かんねえ」

「ふへへ」

「ふふっ」

お互いに苦笑い。兎も角、やることはやったので大丈夫しよ。

スタッフから具体的な指示があつた訳でもないので適当に編集で纏めてくれることを期待しておく。

「それですね、蒼真さん。今後の予定は……あ、その前に撮影再開しますね」

「へーい」

ズズズ、とレンズの動く音がお気にいり。

「この後の予定はどのようによ？」

「今日は何時間かドラムの練習して、そつから商店街に寄つて買い物やね」

少ないように思えるが、今日は金曜日。普通に学校の放課後であるからだ。

現在時刻は只今16時前後のはず。

「なるほど……では改めて、蒼真さん、よろしくお願いします」

密着は計三日間に分けて行われる。

今日と土日を跨いで、続け様にアークラのメンバーは日頃の過ごし方や風景をパスパレの子達にカメラに収めて貰うのだ。

と自慢げに言いつつ、流石に本来の予定や外せない用事もあいつらにもあつたみたいで初日からこうやって密着されているのは俺だけというね。

「つて言ってもこれから一時間程度、俺がひたすらドラムを叩くだけやけど……」

「お気にせずいつも通りでお願いします」

「良いんか? 見てるだけやと、つまんないと思うけど」

「そんなことないですよ? こうやって近くで見学して貰えて、勉強になりますから」

「なら、良いけど……」

麻弥ちゃん部屋の前で椅子を置き、そこに座った。

カメラがあるって認識だけでなんだかむず痒い気分になりながらも俺はイヤホンを耳につけ、ドラムを前に座る。

「んじや、やりますか」

スマホをタツチ。

音楽の再生が開始された。

◇

二時間後。

「楽しかったです！」

「なく。俺も久しぶりに刺激をもらった」

練習スタジオを出たジブンと蒼真さん。

二人並んで歩きながら話す会話のテーマは

決まって先程までのドラム練習だ。

蒼真さんの宣言通り、初めの一時間弱はひたすら蒼真さんがドラムの練習をしているだけの時間が続いた。

曲をイヤホン越しに聴きながら合わせて叩いたり、気になる箇所を集中的に繰り返したり。他には、基礎の練習など。多くのドラマーさんがするような練習方法を蒼真さんは採用していた。

その後、休憩を取るらしい蒼真さんはイヤホンを耳から外してジブンに一言。

『麻弥ちゃんも叩いてみる?』

この時、ジブンはどう返事したか覚えてません。他人のドラムセットを体験させてもらえるのは滅多にない機会。ましてや、その相手が蒼真さんなのです。興奮しない理由がないでしょう。

後半の一時間はあつという間。互いの好きなフレーズを自慢しあったり、気になる点をアドバイスしてドラミング技術を高めあったり、と充実した時間を過ごせました。

うん? ジブン、何かを忘れているような——

「あつ……………」

「どした?」

「これ、本来は蒼真さんの密着のはずなのにですよ?……………それなのにジブンがつい舞い上がってしまいました……………」

「今更? 別にいいんじゃない? まだ密着自体は初日やし、これからまだまだ取り高をとれるチャンスはあると思うよ」

「蒼真さん……………」

蒼真さんはこういう人です。

彼は他人に対しておおらかに接してきます。そう言えば、自分に対しては自棄にシビアですが、何かこだわりでもあるのでしょうか。

「蒼真さんはドラムに対して譲れない信念があるんですか？」

「ああは言ったけど、まさかの今聞くのね……………」

「い、いえ!?これは個人的に気になっただけでして……………」

気付いた頃には口から漏れていました。

きつと、かつてのジブンなら遠慮してしまい発言事態なかったであろうこの質問にしました。側のジブンですらただならぬ予感がします。

蒼真さん、悩み始めました。

「……………楽しいが一番の理由かな」

「やっぱり結局はそうなりますかね」

「俺の場合は他にもあるっちゃあるけど……………これはあんまり良いもんでもないからね」

その時の蒼真さんは遠くを見つめていました。

「ともかく今はあれやね」

「はい?」

あれ、とは何か。

その答えは蒼真さんの視線が教えてくれました。気づかぬ内に商店街の一角へとジブン達は来ていたようです。

夕飯前の食材調達に赴いた主婦らしき方達がそれはもう沢山。お店の方も活気に盛り上がっています。

「麻弥ちゃん」

「はい?」

「普段やったら大丈夫やけど、今回は多分ヤバイことになると思われるから予め言っとく。覚悟はしておいた方が良く」

——覚悟っすか?

その言葉の意味が体感するのは少し先の未来であることをこの時のジブンはまだ知るよしもありません。

◇◇◇

商店街。

「皆さん、す、凄い活気ですね………」

場所も移り、現在の俺と麻弥ちゃんは商店街の通りを歩いていた。俺が持つビニール袋から分かるが、もう既に何件かの店には立ち寄っている。

麻弥ちゃん、とてもお疲れのよう。俺は慣れてしまったが、此処の店の主人達の押しが凄いなだね。容赦なく我先にとお勧めを出してきたり、誉めに誉めて油断した隙を狙ったりと正直、正面から相手にしたくないのが本音である。

だが、相乗効果として貰えるオマケもそれはもう大量の大量。お陰様で出費が安く済むので、仕方なしにオジさん達の世間話ぐらいは付き合っただけやっっている。

「良かったね。後は帰るだけやから」

「よ、良かったっす……………」

うん、麻弥ちゃん、気の毒でしたね。

「それにしても蒼真さん、随分と皆さんから慕われていましたね」

「そうかな？」

「はい。皆さん、とても優しい目を向けていましたから」

「毎日つてぐらい行つてるからやろうね」

「もしかして、普段から蒼真さんが料理してる感じですか？」

麻弥ちゃん、それはない。

「妹の担当だよ。もしくは母さんが家にいるときは勝手にやるけど」

「なるほど〜」

「んで、この通り！俺が荷物運びさせられとる」

ぐつとビニール袋を持ち上げる。

「優しいお兄さんじゃないですか。立派です」

「……………」

「あれ？照れてます？」

「うるせえやい」

初めて、そんなこと言われた。

「ん？」

と、ここで空いっばいに大きなチャイムの音が鳴り響いた。この時期では夜七時に
なつたことを意味する。

その音に釣られ、何と無く上を見上げた俺と麻弥ちゃん。

「もうこんな時間になつちやいましたね」

「お？もうそんなに経つちやつたか。麻弥ちゃん、次はウチに行くよ」

「へ？………」

まるで初耳とばかりな反応。

俺がその場を振り返ると麻弥ちゃんの動きが停止していた。

◇ ジブン、全ての動きが止まる。

「へ……………」

「ん? そういう話って聞いてるんやけど」

「ウチって……………蒼真さんの家つすか!？」

「そりゃあそうやる。スタツフさんから麻弥ちゃんも夕食に招待してもらえませんか? て聞いた母親が今頃ノリノリで作つとるはず」

「ちよつ、ちよつと待ってください!!」

慌ててジブンは蒼真さんから距離を置いて、スマホを通じて連絡をすることに。

直ぐに電話は通じました。先程の蒼真さんの台詞の真偽を単刀直入に確かめます。その質問は予測されていたのか、スタツフさんからの返事はあっさり返ってきちやいました。

お陰で、緊張した顔付きで蒼真さんの元に戻る羽目に。

「……………蒼真さん」

「どうやった?」

「その通りつす……………」

「やろやろ」

自分の発言に嘘がないと判明した蒼真さんは安心した表情をみせます。この時のジブンにそれを記憶に留める余裕はないです。

「んじゃ、暗くなる前に行()行()」

「はい……………」

勿論、ここから断るなんて選択肢もなく。ジブン、大人しくとぼとぼ蒼真さんの背中を徒歩で追いかけます。

——蒼真さんの家!? ヤバイどころじゃありませんよ!?

どうやら大和麻弥、山吹家に急遽、家庭訪問することになりました。

— 3 の 2 — へ続く。

— 3の2 —

◇◇◇

山吹蒼真、実家。

「貴女が麻弥ちゃん？いらっしやーい!!」

——ガチャン。

俺は玄関を閉めた。

迷いなき即断を目撃した隣にいる麻弥ちゃん。俺の顔をちらつと見るなり、複雑な表情を浮かべる。

分かる。気持ちは分かるけど、俺も被害者側であるんだって。

「蒼真さん……………?」

「これが日常」

「へ?」

「日常」

「りよ、了解つす……………」

憂鬱だな。これを開けないと家に入れない。

だけど、このまま麻弥ちゃんを困らせる事態になるのはもつと不味い。

覚悟を決めて、扉をオープン——

「お帰りなさい！ご飯にします？お風呂にします？それとも………わ・た・——」

——ガツチャン!!

「……………ふう」

「蒼真さん？」

「お玉を持ち、エプロンを着たばあが居たな？あれは幻想に過ぎない」

「蒼真さん……………？」

「さてと……………」

もう一度、扉をオープン。

さつきと違い、声は飛んでこない。何事かと視線を下にずらすと——

「……………死んでるな」

「よく冷静でいられますよね、蒼真さん」

腹部を包丁で刺され、仰向けに倒れる一人の被害者がそこに。第一発見者の俺と麻弥ちゃんは特に動揺することなく、その現場を眺めていた。

無駄に凝ってるのか、照明も薄暗いモードへと変わっていた。あの短時間でいつのまに用意したのやら。

びくびくと死体が動くのがまた鬱陶しい。

「どうぞ、麻弥ちゃん」

「えっ？お、お邪魔しま〜す……………」

靴を脱ぎ、廊下へと麻弥ちゃんを案内。

恐る恐る麻弥ちゃんは死体（母親）の隣を通ろうとする。異常な状況に巻き込まれた麻弥ちゃん、明らかに警戒体勢。

頭では理解しているが、恐怖を感じるとなると話は別つてやつだろう。

が、麻弥ちゃんが死体の頭の近くに足を置いた、その時。

——がちつと死体の腕が麻弥ちゃんの足を掴む。

「ひっ!？」

「改めて……………いらっしや〜い、麻弥ちゃ——」

俺は耳を塞いだ。

「いやあああああああああ!!!」

◇◇◇

リビング。

「ほんまに、麻弥ちゃん、ごめんね!!ほんまに!!」

意識が昇天した麻弥ちゃん。

魂が抜けそうな程、ぼけつとしている。悪化する前にテーブルの椅子に座らせたが大丈夫だろうか。

相当、あれが衝撃的だったらしい。俺からは見えなかったが、母親は即興のゾンビメイクを施していたようでそれも麻弥ちゃんを放心へ導く手助けをしている。

焦点が戻った麻弥ちゃんは俺の母親を見た。

「平気ですう……………はい……………」

良かった。母親の心配度全開の謝罪に答えられるぐらいには回復したみたいだ。キッチンで鍋が沸騰し出したので慌てて母親は料理の方へと戻っていく。

これに懲りて、母親には少しは遠慮してもらいたいのだがぶつちやけ見込みは薄い。俺が妹が友達を家に招く度に母親が家にいると発生する強制イベントなのだから。

「もうすぐご飯だから、蒼真！悠希が上にいるから呼んできて！」

「はいはい……………」

逆らうと五月蠅いので黙って従う。

「ところで麻弥ちゃん、ひとつ聞いてもええ？」

「はい？何ででしょうか？」

「やっぱり——」

また悪巧みを考える母親の顔がちらりと見えたが、無視。麻弥ちゃんには申し訳無いが犠牲にでもなってもらおう。

階段を上がり、廊下へ。妹の悠希の部屋の前に着くとドアを軽く二回ノックする。

「お兄？..」

「悠希、ご飯やで」

「うん、分かった。今行く」

さてと。目的も果たしたので戻ろう。

階段を下ると、その先には何とも表現しがたい異様な光景が広がっていた。料理を運ぶ母親と顔を真っ赤にして俯く麻弥ちゃんの姿があったのだ。

俺の座る席は麻弥ちゃんの隣。俺の居ない間に何をしてたのか気になりつつも、黙って着席した。

「どうした？」

「ななな、何でもないっすよ!!」

「……………あつそう」

ぶんぶん!と首を横に振る麻弥ちゃん。

疑わしさが漂う返答であつたが俺は何故かそこで話を切り上げてしまう。

都合よくダダダ、と勢いよく下る音が聞こえたので俺達の注目はそちらに。

「お兄!今日のご飯って!な——お客さん!」

「あつ、どうもっす」

「はっ、はい、どうも……………」

初対面の悠希と麻弥ちゃん。

昨日、俺はお客さんが家に来ると伝えていたはずの悠希だが完全に忘れていたらしく普段とは違う張り切った姿を目撃されてしまった。

恥ずかしくなったのか、唐突に黙りこんだ悠希はお気に入りスペースにある椅子に座ってしまう。

「ジブン、嫌われてるのでしょうか?」

「んや、あれは自業自得やから」

「自業自得？」

頭を傾げる麻弥ちゃん。

そんなこんなで母親自慢の料理も並び終えたらしい。エプロンを外した母親も俺の向かいの席についた。

ニヤリとした笑みに俺はヒヤリとした。

「それじゃあ、蒼真が可愛い女の子を家に連れてきた記念として乾杯ー!!」

「へ!？」

「……………ちやうからね」

——もう、俺のライフは無いんだよ!!

麻弥ちゃんと悠希の紹介を俺が互いにしつつ、母親がお代わりいるかと執拗に尋ねるのを避けつつ、山吹家の晚餐はいつもの日常通りに過ぎ去っていったのであった。

◇◇◇

帰り道。

「なんか申し訳無いです……ここまで来てもらって」

帰りになるともう夜遅く。

ジブンは帰り道も蒼真さんに付き添って貰っていました。

暗い道を女の子一人で歩くのは危ないと蒼真さんのお母さんからのお達し。一度は断ったのですが、結局はジブンが折れる羽目になりましたので。

「別にこれくらいは問題ないから。それよりも結構遅くなっちゃったけど、麻弥ちゃん家の方とか大丈夫か？」

「あつはい。両親に連絡はしてあるので大丈夫ですよ」

「そっか。それなら良かった」

——にしても近いっす!!蒼真さん!!

蒼真さんとジブンの肩が触れるか触れないか。

そんな絶妙な距離感にジブンの心境内はただならぬ焦りと恥ずかしさが混ざりあっています。

街灯に照らされた歩道を歩くジブン達。

その間にあるのは必要最低限の会話のみ。一見、気不味い状況のように思えます。けれど、この空間の居心地が悪いとは自然と思わないジブンがいました。

「着いたね」

「へ？——あつ」

そんな時間もすぐ終わりを迎えてしまう。

目的地である蒼真さん家近くの駅。駅名を記す看板も見えてきて、いよいよお別れの時間が迫ってきます。

「今日はありがとうございました、蒼真さん」

「ん。こつちこそありがとうな。色々楽しませて貰った」

「は、」

改札口前に到着します。

「それじゃあ、ここで」

「分かった」

「明日もお願ひしますね」

「了解。また明日ね、麻弥ちゃん。じゃあの」

「はい、お疲れ様でした」

ジブンは改札口を通り、駅のホームへと。

実家がある方面へと電車が発車するホームへと続く階段へと降りたジブンがふと目にしたのは多くの人。

普段なら気にしない一コマです。ですが、嫌な予感について何となく視線がそちらへ。

そして、耳に入ってきたのは――

『電車、今日はもうないらしいぞ』

『マジか。終電にしては早くね?』

……へ?!

なんだか的中しそうな雰囲気。

他のグループの会話にも耳を傾けてみます。

『なんか事故があつたらしいって〜』

『ほんと。夜遅くに迷惑だよ』

『どうする?』

『ママに迎えに来てもらう』

事故の影響で電車が出ないなんて。こんな時間帯にとんだご迷惑な事です。

——ん？だとすれば、ジブンは家に帰れないのでは？

「っ!?……………不味いっすね」

重大な事態へと招かれた事実にはジブンの思考がゆっくりと浸透していく。この感覚に慣れていないジブンは直行特急でパニック思考へと陥っていく。

案を捻らせては理由付きで却下。その工程を脳内で何度も繰り返し返す。一向に最善の対策案が出ないその焦燥感がより一層悪循環へと陥れて来ます。

「あっ!!」

ようやく思い付きました。

そして、最終的にジブンが選んだ策とは——

「蒼真さああん!!」

これしか無かったんです。

唯一の救いが帰る前にと、全力疾走で階段を駆け上がり、改札口をこれまでの人生最高速度で突破しました。次にまたしても全力疾走でうっすらとした記憶を頼りに来た道を戻ります。

蒼真さんはすぐに見つかりました。まだ時間が経っていない事が不幸中の幸いと言えます。

ジブンの声にはつと振り向いた蒼真さん。やがて、ジブンを認識すると驚いたように

声を出しました。

「ど、どうしたんや？麻弥ちゃん」

「それがですね……………はあはあ……………電車がもう出ないらしくて……………はあはあ……………」

「えっ?!いつもならまだあるはずやけど」

「さつき事故があつたらしくて、今日はもう……………」

「事故……………なるほどね」

「どどどどうすれば!?!」

落ち着いていられません。

下手をすれば、今日は野宿だつて有りうるんですよ。フルパワーで遠慮したい選択肢ですが最終的にはそうならざるをえないとなると。

ここで蒼真さん。ジブンの様子を見かねてなのか、とある行動に――

「へっ?そ、蒼真さん?」

「麻弥ちゃん、落ち着けて。まだ絶対に帰れへんくなつたわけちゃうやろ?」

ゆつくりと蒼真さんの掌がジブンの頭上を動きます。撫でられています。

あまりの恥ずかしさにかあゝと頬に熱が帯びる体験をジブン、この時、はつきりと実感しました。

止めて貰うなんてことはしないです。

「麻弥ちゃんの両親に迎えに来てもらうとか？」

「残念ながら、両親は昨日から出張中で……今は誰も家に居ないんです」

「そっか……」

「あつ……」

思考に浸り、唸る蒼真さん。

撫でられた手も放され、ついジブンの声が少し漏れてしまいました。聞かれてない
良いのですが。

「ん？ なんか。こんなときに電話か……」

「こちらは気にせず。どうぞ」

「すまんね」

着信音と共に蒼真さんはスマホをズボンのポケットから取り出します。

お相手が気になる所ですが、今のジブんにそんな余裕はありません。

通話していた蒼真さんですが、すぐにジブンの方へと視線を向けてきます。疑問に思
い一つも見守っていると蒼真さんは自分のスマホをジブんに差し出してきました。

「え？」

「母さんから。麻弥ちゃんに変わってやって」

「あつ、はい」

スマホを受け取り、耳に当てます。

「もしもし……あの——」

『あつ!!麻弥ちゃん?ごめんね!!今、電車が止まって動いてないでしょ?』

「そ、その通りです……」

『それでね?もし良かったらウチに泊まってく?』

「え?イヤイヤイヤ!今日はもう随分とご迷惑をお掛けしましたのに……これ以上は」

『そんなちっちゃいことは気にしちやあかんよ?ウチ、麻弥ちゃんの事を気に入っちゃったから』

「で、ですが——」

『決定やね!蒼真を連れて、戻ってきてね。んじゃあ』

——プツリ。

「……蒼真さあくん」

「大体、予想出来るんやけど……」

「これ、返します」

「お、どうも」

スマホを蒼真さんに返却します。

「……………帰ろっか」

「……………はい」

——大和麻弥。

どうやら山吹家に宿泊するところになってしまいました。

——3の3——へ続く。

— 3 の 3 —

◇◇◇

リビング。

「これはどうしたら………」

「かつてない難題に直面した。」

帰宅手段を無くし、ついご厚意に甘えて蒼真の実家に一泊だけとは言え、泊まることになってしまった。

一応、アイドルに身を置く麻弥。

異性宅に宿泊などもつての他で無かろうか。アイドルらしからぬ行動であるのだけは分かる。

もしも、何処かからの伝つてで世間体に、パスパレメンバーに知られてしまったならば、バンド存続の危機にすら陥るかもしれない。

「麻弥ちゃん、お茶置いとくね」

「あ、ありがとうございます」

テーブルに置かれたコップ。

蒼真の母親にお礼を告げる。遠慮気味に一口飲むと、ひんやりした感覚が喉を潤してくれた。

「座つてもいい?」

「え?………はい、どうぞ」

承諾を求めてきた蒼真の母。

麻弥の向かいの席に腰を下ろした。

「それにしても………」

「何でしょう?」

「麻弥ちゃん、テレビでも十分可愛いんやけど、生で見るとより可愛いわね」

「ありがとうございます………」

「元々蒼真からアイドルが取材で来るって聞いてたんよ。でも、実はちよつと疑つてた。蒼真にそんな可愛い女の子を家に引き連れて来るなんて思つてなかったから。本当やったんやね」

有名人扱いに慣れない麻弥。

いきなり褒められると対処に困ってしまう。精々、小さくお礼の返事をするぐらいが限度。

加えて、彼はちゃんと麻弥をアイドルとして実の母親に伝えていた。それが無償に嬉

しかった。

「これは蒼真が中学の頃の話ね」

「はい」

唐突に始まる息子話。

と言いつつ、麻弥は興味があつた。

「あの子、昔は今よりももつと無邪気にはしゃで周りを引つ張る性格だったのよ」

「そうだったんですね」

意外だ。

「それが高校入る直前にはああいう風に落ち着いちやつて………反抗期が過ぎちやつたんかな？もう少し楽しんでいたかつたんだけど」

「はあ………」

「他にも理由はあるにはあるのよ？でも、私の口からは内容が内容だけにそう簡単には話せないし………だから、麻弥ちゃん」

「は、はい！」

「知りたいと思わない？」

「へ？」

ニヤリと浮かべたその笑み。

麻弥の前に母親という脅威の壁が立ち塞がろうとしていた。

◇◇◇

蒼真の部屋。

「お邪魔しま〜す……………」

麻弥が踏み入れたのは彼の部屋。

ノックすれば返事が来たので、恐る恐る扉を開けて部屋の中をそつと覗く。

「蒼真さん、お茶をお持ちしましたよ……………」

建前は飲み物の配膳。

ただし、その背後には蒼真の母親による強制に近い意図が働いていた。

曰く、彼の部屋に行けば分かると。些細な違和感でも良い。彼にぶつけてみれば、きつとそれは彼の思惑を触れる糸口へと変貌するから、と。

蒼真の部屋はまさに男子高校生な雰囲気。

漫画や小説がきちんと整頓され、綺麗に敷き詰められた本棚に折り畳まれた毛布があるベッド。何の変哲もないタンス。

ここまで整理整頓されてるとなると彼本来の几帳面、真面目っぷりな性格による影響だろうか。

部屋の内部はテレビやネットで勝手に浸透した麻弥のイメージと殆ど相違がない程、驚くほどに合致していた。

「蒼真さん？」

そして、先程から彼からの返事がない。

強行手段に移る。主の返事無しに中へ踏み入れた罪悪感の扱いに困りつつ、麻弥は彼の姿を探す。

すぐに見つかった。

部屋の壁際に設置されたテーブル。高価な機材が大部分を占めている。

彼は扉に背中を向けていた。頭にはヘッドフォンを装着。パソコンの画面を操作中の様子から鑑みて、作曲中だろうか。

「蒼真さくん」

「うわっ!? ……なんだ、麻弥か」

「す、すみません ……お邪魔でしたか?」

肩をつついた。

突然の不意打ちに驚き振り向いた蒼真であつたが、麻弥と目が合うとすぐに冷静さを取り戻す。

彼はヘッドフォンを膝元に置いた。

「んや。丁度キリがいい所に入ったから、気にせんでええよ」

「ありがとうございます。あの、蒼真さん、もしかして今、画面に映ってるのは ……」

「新曲のデモやね。アークラの」

麻弥の目の色が変わる。

機材関連に目がない麻弥は普段は目にしないであろう曲のデモ作り場面と遭遇した。

専門知識を要求される曲作り。根幹を知っておくだけでも十分損はない。

「打ち込みもしっかりしてますね ……」

「しっかりって言ってもそんなに本格的やないよ。コード進行だけ合わせて、ソロ部分は完全に人任せにしてるし」

「十分凄いじゃないですか!」

「まあ……………そうなんかな」

「あの、見させてもらっても大丈夫ですか？」

「見る分になら、全然構わんよ。ほれ」

ついテンションが向上する麻弥。

もつと近くで見ようと蒼真の肩越しに画面を覗こうとする。

麻弥は蒼真の肩に手を置いた。

「あのさ……………麻弥？」

「はい？…どうしました？」

「近い。めっちゃ近い」

「近い……………？」

ふと言われてみれば。

麻弥の顔が軽く動けば、蒼真の顔と触れるぐらいに近距離に接近していた。

父親以外の異性とは初めてとなる至近距離で麻弥は彼と視線を合わせる。

「~~~~つ!？」

意識してしまった。

かあつと急上昇で熱を帯びる頬。反射的にその場を離れた麻弥は彼から隠そうと両

手を頬に当てる。

二人の間に微妙な空気が流れる。

「す、すみません……………」

「いや……………こつちも役得だったというか……………」

お互いに視線を刺らしたまま。

実は蒼真には加えて、背中にぴたと触れた二つの柔らかい感触も味わっていた。麻弥の自覚がないとは言え、意識してしまうのは男の性である。

ぱたぱたと、と掌を団扇代わりに熱を冷まそうとする麻弥は何気に部屋の中を見渡していた。

そして、タンスの上に気になる物を発見。

「蒼真さん、これは？」

「ん？……………ああ、写真だよ」

「写真ですか」

伏せられた写真立て。

それを手に取り、写真を眺めてみることにした麻弥。

写し出されていたのは四人の制服を着た少年少女達。ライブハウスのステージらしき光景をバックに四人は横に並んでいた。

麻弥はその左から二番目に、蒼真の姿を捉える。少々、今と比較すれば若く見えるが

間違いないと彼であった。

「そう言えば、麻弥つてき、俺と初めて会った時に質問しようとしてたな」

「えっと……よく覚えてますね」

「あの時はヒヤリとしたから鮮明に覚えてんのよ」

ドラマ集会の話で。

麻弥は蒼真に質問をぶつけようとしたが、それを蒼真自身が遮った。そのままあやふやになったまま現在に至る。

「確か、アークラが活動休止した時の経緯を聞きたいんやね」

「蒼真さんが無理してまでは流石に……」

「いや、良いよ。話す。麻弥になら話しても大丈夫やろうし」

蒼真は座る椅子を半回転した。

腕を膝に下ろし、軽く目を伏せた彼はゆっくりと語り始める。

「その写真で言えば、俺の左にいるのがベースの“光”。右隣がボーカルの“璃里亜”。そして一番右のギター担当“可織”。その四人で“アークラ”としてバンド活動をしていた」

「今とメンバーが変わってますけど……」

「ああ……ボーカルの子が病気で倒れたんだ」

「っ!?!……………そうでしたか。すみません」

「ん、平気。さてと、定期的に中学卒業の頃の話やったから、それを皮切りにギターとは別々の学校に進学が決まった事もあって、バンド活動がしにくくなるって理由にギターが離脱。残ったのは俺とベース、二人だけ。流石に二人だと厳しくて、泣く泣く活動休止せざるを得なくなった……………つてのが麻弥の知りたい全容かな」

話に区切りをつけた蒼真。

「ジブンが初めてアークラを知った時、丁度、活動休止をしていました。ですが、合同ライブで一緒に出場すると聞いて、驚いた記憶があります」

「合同ライブの前から、新メンバーを加入して活動を再開したからね。そこら辺の過程は何かと一悶着あったから省略するけど」

「バンドの曲も方向性は変えたんですか?」

「変えたってか、変えざるを得なくなつた。以前は俺が作詞作曲してたけど、作曲は新しく入ったボーカルの奴に任せるようになったから」

「作曲……………」

ふと麻弥は部屋の隅にある物を見つける。

「あのギターも蒼真さんが作曲に使ってた、とかですか?」

「あれは……………もう居ないボーカルが置いていったギターやね」

「ご、ごめんなさい！またジブン……………!!」

墓穴を掘ってしまった麻弥。

彼の母親の助言通りに彼の部屋にある物に訳有りなパターンが多いと自覚する。

ここまで来ると、まるで戒めのように、忘れないように配置しているようにしか思えない。

「そりゃあ、そうなるわ。あいつ、よく物をこの部屋に置いていったし」

「え？あの……………璃里亜さん？とはどういう関係だったのですか？」

そして、麻弥は最大の地雷を踏む。

よりにもよって、本人の口から言わせてしまう。彼がここまで拘る理由を。

「璃里亜は俺の……………元カノだ」

「え？」

— 3 —
『レッツ密着！』
終

—4の1— 『デート作戦』 *



とある練習スタジオ。

「でーはー！第一回麻弥ちゃんデート大作戦会議を始めたと思いますーす！」

彩が高々に開催宣言をしている。

ともかくどうしてこんなことになってしまった、と麻弥は頭を抱えていた。ただし、実際に両手を頭に置いておる訳ではない。

パスペレ恒例の早朝練習も終わり、いつもの撤退かと思えば今日は一味違う展開に。確信したのは彩が唐突にこんな事を言い出し始めた瞬間。

現在、此処にいるのは彩とイヴ。それに日菜と麻弥を含めての四人。千聖は仕事があるために早々に撤退した。

「はいはい！質問！彩ちゃん、いきなりどういうこと〜？」

「安心して。説明はこれからだよ、日菜ちゃん」

ふんす、と漏れる鼻息。

無駄な演技が入った彩が指示を出す。すると、イヴがスタジオにあったホワイトボー

ドを運んで来た。

「お待たせしました！アヤさん！」

「ありがとう、イヴちゃん。後は私がやるから、座つても大丈夫だよ」

「押忍！お先に御免致します！」

「い、い、めん……………」

謎台詞を放つた本人は満足そうにしている。使い方、合ってるのだろうか。

無闇に迫及せず、彩はただ首を傾げる。

「い、い、ほん……………では、——」

そして、説明が始まる。

——簡潔にまとめると。

恋する乙女代表、大和麻弥。

彼女の恋の手助けを全力で果たするのが今回の目玉かつ最大の目標である。

「知つての通り、麻弥ちゃんは奥手な性格だからなかなか自分からアピールする事が難

しい……………なので、ここは私達の出番が必要って訳なのです！」

「本人の前で言いますか……………」

「もち。手伝うのは当たり前前だけど、肝心の相手は誰なの？」

「ブシドーですね！」

目的の明確な提示。

日菜がそれを要求したと同時に麻弥の顔がはわはわと赤みを帯びていく。

でも、流石に他人の秘密をあつさり漏らす程、彩の口が緩い訳では――

「アークラの蒼真君!!」

「彩さん!?!言っちゃうんっすか!?!」

「あー、やっぱりかー」

「日菜さん!?!」

衝撃発言。しかも連発。

麻弥の予想はことごとく、しかも最悪な意味で打ち破られていく。

やっぱりってなんだ。やっぱりって。

「ソウさんがどうかしたのですか?」

「イヴさんはそのまま置いてください………」

唯一、イヴだけは理解しておらず。

その純真な心だけは失わないでくれと刹那に願う麻弥であった。

「運の女神様も私達に味方しているから、きつと大丈夫!!」

「目指すはラブのラブだね!」

「ちよつと何言ってるか分からないっす」

「ちようどこれからアークラの練習風景をレポートする予定になつてゐるから、それまでに幾つか作戦を練ろうと思つてゐるんだけど……皆、どう思う?」

「賛せーい!!」

「えつと………はい! 良いと思います! 戦術次第で勝負の行方は変わると聞いたこともありますから!」

「イヴさん………ちよつとずれてますよ」

敵なんて居ない。勝敗などもない。

放置してくれて構わない麻弥の心情はガン無視で次々に進んでいく謎の作戦会議。

彩はマジックペンの蓋を開け、ホワイトボードにでつかく“蒼真君攻略作戦案”と書き上げた。

それだと、解釈が凄いいことに。

「それではここに開催を宣言します!」

「いえーい!!」

段々と麻弥は思い始める。

この二人は自分達が恋愛する乙女を弄って、呑気に楽しみたいだけなのでは、と。

———というか。

そもそもの発端は今朝に至る。

密着二日目の日程はこれから午前にはアークラのバンド練習の風景の撮影と取材。そのまま昼を挟み、午後から場所を変えて、メンバーの個人インタビューとなっていた。

麻弥は蒼真の家で一夜を過ごした。生憎、彼と同じ部屋で就寝——なんてロマンチック展開はなく、蒼真の妹である悠希の部屋で仲良く寝させてもらった。

真夜中に初対面に近い二人きりの状況だったので若干の不安面も抱えていた。が、共通の趣味が判明した事もあつてなのか、すぐにその不安も解消され、その晩はぐつすりと眠れた。

まさか、妹さんが演劇に興味があつたとは。今度、実際の演劇に招待してみるのも悪くないかなと麻弥は頭の片隅で考えていた。

—— 閑話休題。

事の始まりは一本の電話。

相手は他でもない彩本人から。内容は単なる業務連絡で、練習時間が三十分遅れてのスタートとなっただけ。

一見、問題がないように思える。

しかしながら、麻弥が電話に出たタイミングで偶然にも寝起きの蒼真が通りかかった。

おはよう、と癖毛を気にしながら挨拶をした彼。麻弥が通話中なのも、本人が寝ぼけ

ぎみなのかスルー。これが仇となる。

早朝に電話中、スマホから漏れて聞こえる男の声。彩がそれを聞き逃すなんてへまを犯す可能性は容赦なく潰され、即座に猛烈な追求が開始される。

数秒もしない内に麻弥は全てを打ち明けた。

——蒼真さんの家に泊まった、と。

そこからの展開は想像で補えるだろう。

唯一、麻弥が意外だと思ったのは最初に知った彩が何故か千聖だけにはこの事実を黙っておいた点。

十中八九、芸能界に詳しい彼女に恋愛関係の話題を持ち掛けてしまえば、その瞬間、千聖から厳正な対処を求められ、彩が心底やりたいとされる現在進行中のこれを行えないから言わないで置いたと思われるが。

この事実を千聖本人に知られれば、正直、かんかんに怒られそう。

「案がある人！」

「あれ？彩ちゃんからは何も無いの？」

「えっ？……………も、勿論あるけど！まずは皆の意見も聞こうかなって……………」

「じいー」

「……………はい、何も考えてない……………です」

「素直でよろしい」

日菜の無言の威圧に根負けした彩。

恋愛に興味津々の彩であるが、アイドルに人生をかけつつある身分なのでそもそも恋愛経験が皆無に等しい。

故に具体的に異性を夢中に落とし上げる方法など知る由もない。

「因みに日菜ちゃんは何かあるの？」

「わっかんない」

「ええー!？」

「だって、男の人を好きになったこと無いもん」

「そ、そうなんだ……………」

天才という異名を持つ日菜。

前提として彼女の隣に立てないと、彼女にまず異性としてすら認識されない。これまでにそれを成し遂げた者が居ないというのは日菜の発言から汲み取れる。

もしくは日菜自身が気付いていないだけかもしれない。が、どちらにせよ、麻弥へのアドバイスはあまり期待が出来ない。

だとすれば、もう一人。

残されたイヴに視線が集まる。

「ワタシの顔に何か付いてますか？」

結果はご覧の通り。

ここままでバンドのよしみとして同席していた麻弥もそろそろ時間的に限界が迫って来ている。

「彩さん」

「うん？」

「ジブン、もう行ってもよろしいですか？」

「えっ？だ、駄目だよ、麻弥ちゃん!!主役が居ないと話が進まないから!!」

「ですが………時間が押してますし」

「後、五分だけ!ううん、十分だけでも良いから!!」

「地味が増えてますね」

「お願いだつて!!麻弥ちゃんも蒼真君とは仲良くなりたいでしょ!!」

「そう言われると………」

もはや、どっちがどっちなのやら。

半泣き状態の彩に抱き着かれてはどうしようもない。波々、麻弥はもう少しだけ居ることになった。

誰も案が浮かばないのが現状。このままでは結局、無駄な時間を浪費しただけになっ

てしまう。

「はい！」

「イヴちゃん!! どうぞ!!」

「麻弥さんと蒼真さんがもつと仲良くなる方法を考えれば良いのですね？」

「その通りだよ！イヴちゃん！」

ふむ、と考え込むイヴ。

パスパレでも特に考えが読めない彼女の珍しい長考に日菜や彩も自然と次の言葉を静かに待っていた。

「思い付きました！」

麻弥は思う。

彼へに対しての恋に近い思いは少なからずある。日に日に増して、時折、胸が締め付けられる事もある。

少し前はただ彼と機材談笑するだけで満足していた。好きな事を語り合える仲間と出会えて幸せであった。

いつからだろう。

彼の向ける仕草に自然と目が追い掛けてしまう。彼と視線が合うと直ぐに逸らしてしまう。ドラム姿について目が離れなくなる。

近いと胸の動悸が激しくなるけど、遠く離れると寂しく感じてしまう。彼へ連絡する時は一字一句何度も読み返すし、返信が来るまではとても不安になってしまう。

そして、ある日、唐突に分かってしまう。

きつと、これが恋なんだろうな——と。

だから、これだけは言いたい。

「決闘をしましょう！」

——それだけは絶対に違う、と。

—4の2— へ続く。

— 4 の 2 —



ライブハウス” Square Road”。

「いつ見ても……………凄いな……………」

パスパレ全員集合。

現在、アークラの練習風景を静かに見学中であった。ライブスペースで曲の研鑽に励む彼等の迷惑にならぬよう、ステージから、一番遠い壁際に五人揃って並んでいた。本音をつい漏らしてしまう彩。その視線は他でもないステージに向けられている。

「……………私達には出せない一体感……………いえ、これはもはやあの四人だけが一同に揃わないと成立しない音楽ね」

「ええ……………千聖さん。いつか、ジブン達も」

「……………そうね」

千聖と麻弥も同じく。

言ってしまうえば、彼女達が目撃したのは単なるアークラの練習風景に過ぎない。いつも通り。

だからこそ、痛感する羽目になった。

己のバンド、パスパレとの明確な実力の違いを。

麻弥は思う。ここまで違うのか、と。

アークラというバンドを語るに辺り、まず知るべき存在は彼ら独自のスタイルにある。

ライブでよく目にする光景の一つに、ボーカルもしくはギターが自分達のバンド名とメンバー紹介をするあの光景がある。

当たり前前に思えるかもしれない。なのだが、アークラは外でのライブでは一切しない。

曲中で歌詞とは違う生の言葉を発したり、コール&レスポンスへの誘導を理由にマイク越しに喋る場合はあるが、基本的にライブ中は余計な台詞は全く吐かない。

そして、最後の曲をやり終え、締めをくくるその時になって告げる。

——これが今の”アークラ”だ！その胸に刻んどけ！、と。

終演の果たし状。

そう呼称されるようになった程、アークラでは決まり文句でもあるその言葉。ただ言うだけなら、観客の心に残る印象は薄い。

だが、実際は異なる。多くの人がその言葉に胸を打たれる思いに浸ってしまうのだ。

何故かと言えば、その理由はライブの中にある。

——アークラは音で魅せるバンド。

ドラムの一打に秘めた一魂。ギターの猛烈なメロディ。ベースの全てを飲み込むライオン。ボーカルの真つ直ぐに突き刺さる歌への思い。

四つが混ざり合つた結果。何倍にもなつて、アークラだけが刻める音楽として、曲としてステージで披露される。

「ブラボー、です!!」

「さっきの二番のＣメロつてどうやって弾いてるのかな〜?」

「え? 日菜ちゃんでも分からないの?」

「私にだって分からない事は一つや二つぐらいはあるもん」

「そうなんだ……………」

日菜はそう訴える。

普段から日菜は何でもすぐにこなす印象を持つ彩は意外そうに答えた。

「そろそろ私達も一緒に練習する頃合いよ」

「ハイ!」

アークラの練習が一旦休憩に入る。

これからの予定としては各パートごとに意見交換をしつつの個人練習へと入ってい

く。

予め課題曲を決め、その曲を覚えてきたパスパレメンバーは曲を通しつつ、アークラに指南を受けて、個人そしてバンド全体の技術向上を目指す。

「麻弥ちゃん、作戦覚えてる？」

「本当にやらなければ駄目でしょうか……？」

「大丈夫！自信もって！」

「ええ………はい………」

麻弥は勿論、同じパートの蒼真と。

しかも一対一の指導となる。それだけでも緊張するにも関わらず、彩から一つの指令が下されている。

「それじゃあ！皆、練習頑張ろう！」

「おー!!」

麻弥の憂鬱とは無縁とばかり。

彩の掛け声に元気よく盛り上がるイヴと日菜の姿があった。



——”アイのギャップ”。

「アドバイスって言われてもなあ……………」

蒼真は困ったように頭をかく。

アークラとパスパレの交流練習において、各楽器ごとに分かれて練習する時間が設けられた。

だが、ドラムの場合、麻弥は既に一人のミュージシャンとして完成してしまっている。この段階まで来てしまえば、各自の拘りやプライドも成立済み。

その部分に無闇に触れても、あまり良い結果に繋がらないのは経験済みの蒼真。だからこそ、困り果てていた。

「と、取り合えず蒼真さん!!自分の演奏を見てもらってからでよろしいっすか!!」

「そう……………やな。時間はたっぷりあるんやし」

ほっと息を吐いた麻弥。

ドラムを前に座ったものの、身体は妙に落ち着かない。

掛けた眼鏡をくいっと直す。

「……………ん？」

特にこれと言った反応は無し。

やはり、詰めが甘いらしい。作戦は次の段階へ移行する。

その前に演奏の準備、と。

「叩く前に少しごめんなさいっす」

眼鏡を外して、空いてるスペースに置く。

ちらりと背後に立つ蒼真の顔を覗き見た麻弥だったが、流石に一瞬だけでは判断が出
来ないと気付く。

「で、では……………!!」

蒼真の方へ軽く微笑んでから。

「ん?どした?」

「い、いえ!?!何も!?!」

「なら良いんやけど」

慌てながらも麻弥は真っ赤に染め上がった両耳に付けたイヤホンに課題曲を流し込

みながらふと思う。

——これ、意味あるんすか!!彩さん!!

恥ずかしい思いをしただけの麻弥であった。



パスパレ作戦会議。その一。

「駄目だった〜!」

「そんな……!!?麻弥ちゃんの究極のギャップジェネレーションが効かないだなんて

……!!」

「どうして、彩さんがそこまで悲観的になってるのでしょうか」

練習終わりの休憩中。

「男の子はギャップに弱いつて言うから!!麻弥ちゃんの眼鏡をかける時と外した時でいけると思ってたのに!!」

彩は悔しそうに地団駄を踏む。

情報源は雑誌。そこに普段、眼鏡姿の女子がふとした瞬間に素の顔を異性に見せれば、その仕草に異性はドキッと感ずる。

そんな風に記載されたページを偶然見た彩がこれだと確信して構成された作戦だったが、蓋を開ければあつさりど撃沈。

一番の敗因は——

「蒼真さん、普段から自分の両方の姿見てますから。今になってだと特に効果も……」
「はっ!!そうだった……!!」

「やっぱり彩ちゃんは彩ちゃんだね〜」

「むー!!」

へへへ、と笑う日菜。

彼女の彩の作戦での誤算も既に見抜いていたようだ。ただし、面白そうだという理由で黙ってたに違いない。

ぶんすかと怒る彩にゲラゲラ笑う日菜の光景に麻弥はそつと溜め息をついた。

「あつそうだ。麻弥ちゃん的にはどうだったの？」

「どう、とは？」

「手答えとかそういう感じ？」

「……………蒼真さんは自分よりもドラムをずっと見てるようでした。当たり前と言えば、当たり前ですけど」

「成る程……………ふむふむ。蒼真君攻略の鍵はドラムにあり、っと」

「彩ちゃん、今のメモる程かな？」

やるき満々だ。

彩が懸命にペンでメモ帳に書く姿を他人事のように見つめる麻弥であったが、巻き込まれるのは麻弥である。

「それでさ、彩ちゃん」

「何？日菜ちゃん」

「次の作戦はどうするの？」

「ふえ？つ、次？そ、そうだね……………」

目が泳ぐ彩。

「彩さん、日菜さん。協力してもらおうのはありがたいですが、自分的に今の関係も満足してるので——」

麻弥が喋っている次の瞬間。

——バァン!!

盛大な音と共に扉が開かれる。

部屋に入ってきたのは休憩に遅れていたイヴであったが様子が変。
自信ありげな瞳にワクワクした口元。

「イヴさん………う？どうしました？」

麻弥は嫌な予感がした。

「ルーズさんから良い事を教えてもらいました！名付けると——”当たって砕けろ”らしいです!!」

「イヴさん。それ、駄目なやつです」

「なんと!!：そうなのですか………麻弥さんの力になれず、申し訳ないです………この罪は私の腹を切って償うしか………」

——ちらっ。

彩と日菜の視線が麻弥に。

ひやりとした汗が浮き出てくる麻弥の頬はひきつる。

要するに、やれと。

他に案がない以上、イヴが持ってきた作戦でしか彼との進展を進める方法がない、と。

「ぐぬぬ……でも、イヴさん」

「はい………？」

「そのルーズさんから聞いた事、教えてください。それからやるかやらないかを考えることにしましょう」

「うん………今日の所は妥協してOKかな」

「やった！ねえねえ！イヴちゃん！教えて、教えて！」

「はい!!」

「………はあ」

麻弥はぐったりと項垂れる。

恋の試練はまだまだ続きそうであった。

— 4 の 3 — へ続く。

—4の3—

◇◇◇

——”ベントウ”。

「以上でインタビュ―は終了です。お疲れ様でした、ソウ様。次の予定までしばらく時間は空きますので是非ごゆっくりしておいてください」

スタツフが部屋を後にする。

取材を受けていた蒼真はライブハウスの楽屋スペースに一人ポツンと取り残された。

「……………にしても、腹が減つたな」

時刻は昼過ぎ。

慣れない早朝のバンド練習に番組の取材と緊張続きの時間をどうにかやり遂げた蒼真。

その代償は勿論存在する。現在、空腹という形でそれは現れていた。

——コンコン。

「んっ……………どうぞぞ〜」

扉からのノック音。

蒼真は丁寧に対応した。メンバーであれば遠慮無しに部屋に突入してくるので、来訪者はいつもととは違う部外者だと判断した為だ。

恐る恐るとばかりに楽屋の扉が開かれる。

「蒼真さん、今はちよつと大丈夫ですか？」

「ん？なんだ、麻弥か。取材はさつき終わつたし、大丈夫やぞ」

「はい。取材、お疲れ様です。どうでしたか？」

「記者の人、ガチやつた」

「それはそうですよ。ちゃんとした雑誌に載りますから」

「まあ……………変な答え方はしてないから大丈夫やろうとは思うけど」

「ふふふ。蒼真さん自慢のドラム話、楽しみにしてます」

「複雑やなあ……………」

単に蒼真は恥ずかしいだけである。

自分の語つた物を同業者に見られるのはさらに。

「と、ところろで……………」

急にしおらしくなった麻弥。

一体何事かと思つた蒼真が麻弥の様子を確認しようとするば——

「お腹空いてます?」

「空いとる」

「そ、即答!? 因みにこの後はバンドメンバーの皆さんと一緒に食べられるご予定とかは………」

「ないかな。あいつら、先に食べてくる言うて俺を置いて、どっか行つたし」

「そうですか!!」

「なんでそんなに嬉しそうなん?」

「そそそ、そんなことつ、ありませんよつ!」

と言いつつ、隠しきれてない麻弥。

そわそわしてる感じが気にかかる蒼真であつたが、正直に指摘しようと口にすることはなかつた。

「実は………」

麻弥は背負っていたカバンを下ろす。

チャックを開け、中から取り出したのは蒼真にとって見覚えのある代物。

「弁当箱やん。しかも俺ん家の」

「はい。蒼真さんのお母様から持っていくようにと言われました………」

「あれ? 今日はいらんつて言うた筈やのに」

最後の一言。麻弥の顔が青ざめる。

「ご、ご迷惑でしたでしょうか……?」

「あーいや、そんなことは……ややこしい言い方やったな。丁度、昼飯をどつかで調達しようかと思ってたから助かるよ」

蒼真は麻弥から弁当を受け取る。

試しに蓋を取ってみれば、一気に蒼真の鼻孔に食欲をそそる匂いが入り込む。

「ん? 面白いや、麻弥の分はあるんか?」

「えっと、はい。ありますよ」

カバンからまた別の弁当箱が登場。

絵柄が異なるものの、形や容量は蒼真の物と同じタイプだ。

「では、食べましょうか」

両手を合わせ、いただきます。

蓋の裏にある箸を掴み、弁当の中身を一つ一つどれから食べようか吟味していく。その中のひとつ。玉子焼きに視線が固まった蒼真は軽く持ち上げてみる。

「……………麻弥」

「は、はい!」

「そんなにこれを見つめてどうした? あ、欲しいやつ?」

「だだだ大丈夫です!!」

ぶんぶんと首を振る麻弥。

否定するだけなのに随分とダイナミックな反応だな、とちんけな思考を巡らした蒼真はぱくりと玉子焼きを一口。

「ど……………どうでしょうか?」

「……………っん。え?何が?」

「そ、そのですね……………玉子焼きが……………」

「なんでそんなに麻弥が気にするんだ?……………気にする?……………気にする。成る程……………」

「へ?」

じつと玉子焼きを凝視。

そして、蒼真は静かに納得した表情へ。

普段通りの母親特製弁当だと思ひ込み、特に意識してなければきつと気付かなかつただろう。

微かに黒く焦げた箇所が存在。

一応、料理慣れしている母親がするとは思えないミスが発覚。

「うん、美味しい。ちゃんと俺好みの味付け」

「そ、そうですか……!!」

蒼真の素直な感想に麻弥は曖昧な返事。

だが、そのやり取りの裏に互いの思考のバトルが繰り広げられていたのは当の本人達だけにしか分かり得ない。

——チャンス、到来です!!

そして、心理戦はラウンドツーへ。

攻撃を仕掛けるのは勿論、麻弥。事前に決めておいた作戦を遂行すべく、緊張で跳ね上がる心拍数をどうにか落ち着かせた。

箸で自身の弁当の具の一つ、ハンバーグを掴んで持ち上げる。ちゃんと左手は下に添えて。

「そ、蒼真さん!!」

「え?急に何や、つて……それも食べるってこと?」

「こつちの味の感想も頂きたいので!!」

「いや、俺の弁当にもあるんやけど?」

若干、説明がヤケ糞気味。

ふるふる震える箸の先端を蒼真の碧色に染まる瞳がしっかりと捉える。

俗に言うこれは——”あーん”。

異性の口へ食べ物を作り込む仕草。

知識はあれど、実際にやってみれば全然想像と違う感情に現在進行形で襲われている麻弥。

蒼真の冷静な突っ込みは届かない。

顔がトマト以上に真っ赤な彼女。このまま放置、なんていたずら心も芽生えつつ、箸の先端にあるハンバーグを半分だけパクリと食べた。

「……………めっちゃ上手い」

しつかり味わった後、漏れた一言。

ほっとしたのか、重荷が一気に取れた麻弥もまた返事がすんなりと出てくる。

「良かったですね！」

「これ、麻弥が作ったんやろ？」

「そそそそんなことは!?!ちちち違いますけどお!?!」

「ほら見てみい」

「……………分かります?」

「分かる」

きつぱりと断言した蒼真。

てつきり上手く誤魔化していたつもりの麻弥にこれは痛恨の一打。羞恥心が怒濤の

ように溢れ出す。

と、なれば蒼真の顔を見るとどこか常に自分のお膝元とこんにちは状態だ。

「今朝、蒼真さんのお母さんが台所でお弁当の準備している所に偶然居合わせちゃいまして……………そのままの流れで自分も手伝うことに……………」

「なんか、ごめん……………」

己の母親のやらかし、想像出来てしまう。

なんやかんや言われて、気が付けば母親の誘導に手が染まっていた。

常套手段。

家族内ならまだしも、赤の他人である麻弥も被害に巻き込んでしまった罪悪感が蒼真を襲う。

「謝らないでください。自分もお陰様で色々と勉強になりましたから」

「なら、良いんやけどね」

勉強の内容は主に――

「麻弥もなんか食べる?」

「へ?」

「俺だけ貰うのもあれやし。何が良い?何でも選んで構わんよ」

空気が一変。

立場の交替の予感に麻弥の動きが固まる。蒼真がこういう性格の持ち主は分かっていたのにどうして予想していなかったのか。

「……………で、では、トマトで」

「何故、ここで野菜」

不思議に思いつつ、プチトマトを箸で掴む。

「んじゃ、行くぞ」

「は、はい」

「……………なんか緊張するな、これ」

「言わないでください!!」

余分に緊張が芽生えつつ。

蒼真の持つ箸の先端、トマトが徐々に麻弥の口元に接近。

麻弥の腰が少し浮かんでしまう程、迎えに行こうとしている。

そして――

「麻弥ちゃん、さつきからスタッフの人が呼んでるよ……………あつ」

扉を開けた彩の登場。

がっつりと蒼真と麻弥の二人の瞬間を目撃してしまった。

彩の目がゆらゆら揺れる。麻弥の顔が開いた口と共にゆっくりと動いた。その動き

始めまるでロボットの如く。

「失礼しました〜」

——ガチャン。

「彩さん!!ちよつと待ってください!!蒼真さん、失礼します!!」

「えっ?あつ、了解。弁当は?」

「すぐに戻りますから!!」

彩の後を追って麻弥も部屋を退出。

部屋の外である廊下からはやたら響く少女の謝罪の悲鳴が聞こえたそうだ。

蒼真は宙を彷徨うトマトを食べた。

「あつ、これも上手い」



後日談。事務所。

「買ってきました!!」

イヴが前触れもなくとある部屋に突入。

唐突な謎の宣言に、部屋の中に居た者が予測できる訳もなく。

「わっ!? イヴちゃん!」

「び、びつくりさせないでくださいよ」

そこに居たのは彩と麻弥。

二人とも椅子に座り、テーブルには一つの雑誌が置かれていた。

「かたじけないです!!ですが、どうしてもお二人に見せたいものがありました!!」

「え? イヴちゃん、それは?」

彩はイヴの抱える物体に目が行く。

「ソウさんが載ってる雑誌です!!」

ウキウキが隠しきれないイヴ。

因みに雑誌の取材をあの時、受けたのはアークラのメンバー内では蒼真を含め二人だけだ。

「でも、イヴさん。ここにもうありますよ」

「うん。ちょうど見てた所だよ」

「そ、そんな!？」

麻弥がテーブルの上から手に取る。

その雑誌はまさにパスパレのメンバーが表紙となった一品であった。

つまり、イヴの持つ雑誌は被り物。

のはずだが、彩の視線はイヴの掲げ持つ雑誌の表紙に注がれる。

「でも、麻弥ちゃん。イヴちゃんの持ってきた雑誌、ちよつとこれとは違うみたい」

「た、確かに……………表紙が自分達ではないですね」

「ワタシ、間違えたのでしょうか……………?このページにソウさんの写真があったので、てつきり……………」

「ちよつと見せてくれる?イヴちゃん」

「はい!」

彩がイヴから雑誌を受け取る。

証言通り、蒼真の名前とバンド名がページの一部分に記載されていた。

「ホントだ。蒼真君の写真があるよ。ん？でも、これ本人かな？」

「蒼真さん、他に取材でも受けていたのでしょうか？自分、聞いてないですけど」

「えっと、記事の内容はと……えっ!？」

「どうしました？彩さん？」

ページを読み進めた彩の表情に変化が。

青白く顔色が悪くなり、チラチラと麻弥を窺う仕草が多くなって来た。

「日菜ちゃんが……」

「日菜さん？何故、日菜さんが出てくるんですか？」

無言で彩は麻弥に雑誌を手渡した。

眼鏡をくいっと直し、記事を読もうとした麻弥であったが——

「え……………」

「今度は麻弥さんがカチンコチンです!!」

「どどどどどどうしよう……!!」

「彩さんはニワトリになっちゃいました!!」

微動だにしなくなった麻弥。

記事の内容は知らないイヴと逆に知ってしまった彩の反応は綺麗に真反対。

それもその筈。

雑誌のとあるページに記載された記事。

その第一文は――

『アイドルバンド”パスパレ”の氷川日菜に彼氏疑惑!?!その相手はなんと今人氣急上昇中のロックバンド”アークラ”のドラマー!?!』

麻弥編―4―『デート作戦』 終

—5の1—『ハート内閣』

◇◇◇

事務所。会議室。

「日菜ちゃん、これはどういう事かしら？」

緊張が張り詰める空気が場を占める。

コの字型に配置されたテーブル。部屋唯一の扉から一番遠く、壁際にある椅子に鎮座するのは一人の人物。その者は——

——” 氷川日菜”。

対して、向かいの席に腰を下ろすは——

——” 白鷺千聖”。

「え？何の話？急にそんな怖い顔して、どうしたの？」

「とぼけないで、日菜ちゃん。自分でやらかした重大さに気づいてるわけ？」

「話の意図が分かんない」

千聖が日菜の元へ詰め寄る。

テーブルに両手を激しく置いた千聖の鋭い眼光が日菜に突き刺さる。だが、当の本人

は知らぬ風を守り抜く姿勢を出す。

「千聖ちゃんが……マジだよお」

「まさに鬼ですね！」

「しっ！ここは自分達は黙って見守るのが一番っす」

そして、部屋の端から見守る三人。

彩は千聖と日菜のバチバチ火花に身体を縮ませ、イヴは相変わらずの平常運転。

麻弥もまた二人の行く末を見逃すまいとじっと視点は一つに定まったまま微動だにしていない。

「日菜ちゃん。貴方が蒼真君とのツーショット写真がネットで騒ぎになっているの知ってる筈よ。それを承知でもう一度尋ねるわ。本気で分かつてるの？」

「分かるも何も、そもそも千聖ちゃんこそ何か勘違いしてない？」

「え？」

「私とソウ君が二人きりでいるって状況も別に不思議じゃないでしょ。一般人ならまだしも、この時はソウ君も一緒に同じ仕事をしたようなもんだし」

「そ、それもそう………ね」

千聖が押し黙ってしまった。

話題に上がった写真とはまさに蒼真と日菜がツーショットで写っていた物。だが、そ

の背景は単に仕事終わりに帰るシーンを切り取っただけ。

一番問題なのは日菜ががつつり蒼真にしがみついてしまっていた事。一見すれば、デートする二人がイチヤイチャしてるだけにしか見えない。

「でも、日菜ちゃん」

「うん？」

「肝心な事を忘れてるわよ」

「肝心な事？」

「ええ。今回も前回みたいにパスパレメンバーだけで済ませれば良かったのだけど………残念ながら蒼真君も世間一般人からは非難の対象にされてるわ」

「え？何で？蒼真君も一応一般人扱いだから大丈夫じゃないの？」

「そうね。私も蒼真君が非難を浴びる理由が分からないのよ」

普通なら日菜の意見がご最も。

バンドマンなど日本の中でも無数に存在する。まだプロとして本格的に活動していない蒼真は芸能界ではまだ一般人扱いとされる。

——だが、これには盲点が存在する。

「ち、千聖ちゃん………!!」

「あら？どうしたの？彩ちゃん」

「蒼真君……ううん、正確には言うところではネット界ではとっても有名な方でございまして……」

「え？」

「あはは！彩ちゃん変な口調！」

「つまりは……蒼真君は扱的には芸能人と殆ど変わらないぐらい……かと、です、はい」

知名度は近代では芸能界と同等にネット界限でも上げる事が可能となっている。

某有名動画サイトで活動するだけの人が現在では芸能人以上に世間に認知されてるパターンもまたあるようにネットの勢いは右肩上がりである。

千聖はそういう方面には疎い方であった。

故に日菜のスキャンダルが発覚したと知った時も予想以上に騒ぎが大きくなると思ってもいいない。

人の噂も七十五日。時間が経てば、自然消滅するのとつきり。

「彩ちゃん………具体的にはどのくらい、蒼真君は有名なのかしら………？」

「ど、どのくらい!?私もちよつと噛った程度でさすがにそこまでは………」

「そう………とこころで麻弥ちゃん」

「は、はいっす!!どうされましたか!?千聖さん!!」

うわっ——完全な飛び火だ。

冷や汗だらけな麻弥の隣でひっそりと存在感を消そうと躍起になっている彩はそう思った。

ここまでの最中、二人から飛び出た主張。

日菜はあくまで仕事の一環で二人きりになっただけ。そこから噂に尾びれ背びれが定着して事態が複雑になっただけ。

対して、千聖はアイドルという立場である以上、男性と二人きりという状況は極力避けるべき。何故ならこれは相手を信頼出来るかどうかの話の論点ではなく、そういう関係性だと世間から一度でも認識されてしまえばもう取り返しがつかないから。そうなれば、両者ともに只事では済まされないと千聖は懸念している。

一見——どちらも正しいと言える。

少なくとも彩はそう考えていた。

普段からSNS関連に関わっていたからこそ、蒼真がネットでの活動をしていた事も耳に入っていた。それが余計に問題を拗らせるとは思っていなかったが。

プライベートでも友好関係を築く蒼真に迷惑を掛けてしまっただけでも既に彩の心中で罪悪感が芽生えている。その焦りからなのか、余計に彩は解決案が思い浮かばなくなってしまうていた。

希望の糸口は麻弥に託された。

「麻弥ちゃんも蒼真君に関して私達の中で一番知ってるはずよね？」

「え、ええ………同じドラママーですし、何より自分が尊敬する人っすから。それに………」

「それに？」

「あついえ、何でもないです」

麻弥の表情に一瞬曇りが見えた。

頭の片隅で気にしつつも千聖は冷静に解決へ向けての糸口を辿っていく。

「蒼真君がネットで行ってる活動も分かるかしら？」

「はい。自分も視聴者の一人なので。特に有名なのはドラムの演奏動画、初心者向けのドラム講座とかでしょうか。どれも再生回数は十万を越えています」

「確か、私達パスパレのMVは………」

「蒼真君より少し多いくらいかな？あつ、でも全動画の再生回数の合計となると余裕で負けちゃうかも………」

「………つ!？」

千聖が舌を巻いた。

パスパレはグループ。しかもプロとしての誇りも端くれなりにある。

対して、向こうは個人活動。なのに此方と肩を並べる程の動画再生回数を保持している。芸能界で有名だからと慢心するのは愚かな行為に等しい。

「まだ本格的にメディアに取り上げられてないだけでも幸いと言っていいわね……」
現段階。

蒼真と日菜の騒動はとある雑誌に記載された記事一つのみ。

テレビ等でそういうニューースが放送された様子はない。これは事前に千聖がスタッフを通じて調べた結果だ。

ここで日菜が話題を少し転換する。

「それでさあ、ソウ君本人は何て言ってるの？」

「そこで再び麻弥ちゃん!!」

彩が咄嗟に振り向く。

他の者も同じ結果に至ったのか、麻弥を除く全員の視線が一同に集まった。

ぶんぶん、と全力で首を振る麻弥。

「いやいやいや!!聞けてないですって!!自分もさつき知ったばかりなので!!」

「なら、聞こうよ」

「へ?日菜さん?」

「日菜ちゃんの言う通りね。私達の今後の方針を伝える為、それに蒼真君の今の現状も

知っておくべきよ」

「た、確かにそうかもしれませんが……………」

彩もまた頷く。

唯一、麻弥だけが納得できずに渋った様子で己のスマホを眺める。

「どうされました？麻弥さん？」

イヴがそつと近寄る。

「切腹ですか？」

「えつと……………このタイミングで連絡してもご迷惑では無いかと……………」

「大丈夫です!!武士はどんな時も非常事態に備えます!!」

「蒼真さんって武士だったんですね……………」

いざ、覚悟を持って。

「では……………押します」

麻弥はそつと通話ボタンを押した。

—5
の
2—
へ
続
く。

— 5の2 —

◇◇◇

生放送、配信中。

「うわあ!! 負けたあ!!」

あこの悲鳴。

イヤホンから伝わる不意打ちな大音量に軽く鼓膜の無事を確認しながらもパソコン画面と懸命に向き合う。

そして、その数秒後——

「終わりました……………!!」

「やったあ! 流石、りんりん!」

「ふう……………どうにかなったもんだな」

画面に表示された勝利の証。

銃弾が飛び交う戦場を見事に征した者のみが与えられる。

あくまでゲーム内、での話だが。

「次はどうする? まだやる?」

「私はどちらでも……………」

「なら、もう一回ですわね!!」

最近流行りのバトルロイヤル。

概要は簡単に纏めると、同じフィールドに数十人のプレイヤーが降り立ち、互いに体力を削り合い、最後の一人もしくはチームになるまで戦い続ける、以上。

ただこのゲームはFPS、つまり一人称視点の画面を視て操作する物である。熟練であればあるほど、戦場では脅威的な強さを誇ってしまう。

その点、今のパーティーは強力と言えるだろう。何たってゲームにおいて大ベテランの燐子がいる。

「流石、フォローがいるといないでやり易さが全然違うなあ」

「こちらこそ……………ソウさんが欲しい場面で援護してくれるので凄く助かります」

「あこは〜?」

「すぐにダウンしないように」

「ええ〜そんなあ〜」

「頑張ろうね、あこちゃん……………っ!」

画面越しにぐつと拳を握ってそうな燐子。

基本、三対三の銃撃戦。一人でも戦闘不能となれば形勢は一気に不利となる。

加えて、このゲームはバトルロイヤル。漁夫を狙う別のパーティーも参戦する場合もあるので、敵を倒す力よりも生き延びる力が大切だ。

となれば、無闇に突撃するあの現状はあまり好ましくない。

「あの、ソウさん……………」

次の試合へ向けて。

順番に使用キャラを選択している最中、燐子がそつと声を出した。

「どうしたん?」

「ソウさんの事が話題になってます……………」

「ん?」

「コメント欄で……………」

バンド関連かな、と考えた。

投稿した動画の一つが誰かのコメントで火が付いたかもしれない。このご時世、どんな些細な物でも知名度が上がる切っ掛けと成りうる可能性を秘めている。

知らない内に動画が大勢の目に留まっていたなんてざらだ。

と、生放送のコメント欄でも燐子の発言と似たような指摘が相当な頻度で浮上しているのをチラ見する。

いや、燐子はこれを見て、即座に本人に伝えたのだと判断した。内容が内容だけに。

「ふむふむ………アイドルと浮気説が浮上中？俺が？」

「ふえ!? ソウ先輩、浮気しちゃったんですか!？」

「んな訳あるか。てか、そもそも結婚もしてへんつつうの。まだそんな歳やないし」

真偽を問いたい旨のコメントがざっと沢山。

流石に短い文だけで全容を把握するのは難しい。意図的な文の省略は時に世論を間違った解釈へ誘導してしまう。

ゲームの途中だが、詳細を検索しようか迷ったその時に丁度良いタイミングで長文のコメントがふと目につく。

『アイドルと二人っきりの写真が雑誌で大きく取り上げられている。どちらも人気急上昇中のバンドなので、ネット民の食い付く餌となった』

「ふむ。アイドルってそんな人が俺の知り合いに居るかっの………いや、居るな」

「ソウ先輩、凄ーい!!」

「あこも知ってる。というかほぼ身内ってレベル」

「はへえ？」

「元凶っぽい写真、見つけましたので送ります」

スマホの着信音。燐子からだ。

「ちよつと、マッチは一旦抜けるけど構わんなかな？」

「はい」

「うん、良いよー」

ゲームも待機スペースに移る。

燐子から送信された画像を見れば、これは確かに俺ともう一人女の子が明確に写った写真だ。

「あつ、日菜ちゃんだ。あれ？つて事は相手はパスパレ？」

「……………だな。しかもこれ、インタビュー仕事があつた日の帰り道の途中やん」

「捏造されたのでしょうか？」

「どうやら。写真だけじゃ何ともねえ……………」

判断が難しい。

アイドルと言えど、パスパレはまだまだ発展途上。人気もボチボチだし、俺のバンドも知名度は全国規模ではない。精々、地元で有名な程度だ。

故にこんな平凡なスクープを盛大に取り上げるメリットがあまりない。実際にやられようが、炎上するような世間からの注目度は浴びないと思える。

「配信は……………どうしますか？」

「そうだ、配信中だった。」

視聴者は数百程度の小規模なので、どちらでも構わないのが本音だ。

ちらつと視界の端に見えたそれに俺の肩が潜まった。

「……………今日はここまでかな」

「え？ソウ先輩、終わっちゃうの？」

「ごめんな、あこちゃん。ちよつと急な用事が出来たから」

「あこちゃん、二人で続きしよつか？」

「はい!!」

スマホの画面が光っている。

表示されたその文字に俺は配信を断念せざるを得ないと思った。

二人がゲームのパーティーから離脱する。

後でお詫びに何かしないと、と脳内を過らせつつ、改めてスマホと対面した。

——”大和麻弥”からの着信です。

「出ないといかんよなあ……………」

◇◇◇
カフエテリア。

「遅れてすみません!!」

あれから数日後。

麻弥との電話では、直接話した方が良いとお互いが納得する形となり、こうして待ち合わせをしていた。

慌てた様子で駆け寄る麻弥だが、まだ時間まで幾らか猶予はある。

「別に遅れてへんよ?」

「へ? あつ、本当ですね。てつきり過ぎてる物かと」

危惧はしている。

日菜との写真が話題に上がる今、同じバンドメンバーの麻弥と二人きりで会うのは危険性が高いのでは無いかと。

でも、麻弥本人がそれはほぼ無いと言い張った。プライベートでは、そんなにファンから話し掛けられる事は無いから、今回もバレないと。

ライブとプライベートでの麻弥の相違点は眼鏡の有無だけなのだが、見慣れて無いと気付かないものかと感じる羽目に。

「今回の騒動について、蒼真さんは何処まで把握してますか？」

「把握って言うかなあ………多少、あの写真のせいでちやほや言われてるのを知ってるぐらい？」

早速、本題に入る麻弥。

この数日で軽く検索はしたが、やはり知名度の低いバンド同士、多少の盛り上がりはあったが言ってしまえばそれだけ。既に鳴りを潜めている。

「今回は早期の対処と日菜さんの性格を理解してくれているファンの皆様のお陰もあって、大事には至りませんでしたけど………」

「あつ、そうなんや」

「はい。ですが、こういう事態は二度と引き起こしてはならないと思うのですよ」「確かに」

偶然の賜物とは言え。

どれが油に火を注ぎ、注目を集めるのか予想に敵しい世界で生きるパスパレ。色んな方面で対策を入れるのは必然と言える。納得も出来る。

——だがしかし。

次の麻弥の一言に、俺の理解力はどうやら追い付かなかつたらしい。

「そこですが………今回を機に、蒼真さんとは一旦距離を置こうかと………考えています。下手をすれば、もう会えないかもしれません」

—5の3—へ続く。

二葉つくし編

— 1の1 — 「もしかして初心者の子じゃない？」

◇◇◇

C i R C L E。受付。

「暇だなあ……………」

とある日のこと。

派遣バイト員として、受付に立つも客が来る気配が全くもって皆無。

最近では繁盛してきた、と豪語していたまりながこの現状を目の当たりにすれば、何て言うのか。

正解は「後は任せたね〜」だろう。

と言うか、現在進行形で店番が俺だけなのもそのせいである。

「あ、あの〜……………」

人手不足なのは分かる。

音楽業界も最近では流行りの病が原因で大人数が集まるイベントも大々的な開催は厳しく衰退する一方的だし、出演する側も人が集まらないと分かっているからライブする意

思は薄れているように思える。

俺のいるバンド”アークラ”も事態が収拾するまでは曲作りに励む方針だ。ライブばかりでそちらに手を付けられ無かったから丁度良いタイミングじゃないの？と言われるとそうなるが。

「あ、あれ？聞こえてない……………」

さて、更なる今後の方針をどうするべきか。

ベースの光とそこから辺に閑しては念入りに話をしておくとしよう。あの馬鹿二人には事後報告になっても文句は出ないだろうし。

三年生ともなると進路面も考えておく必要があるし、まだまだ忙しくなりそうだ。

「すみません!!」

「わあい!」

——び、びっくりした……………。

いつの間にか受付前にいた女の子。

ツインテールに結んだ紫よりな黒髪にまだまだ成長途中を醸す幼い顔付き。

キリツとした目付きだが、瞳の奥は不安げに揺れていた。随分と待たせてしまったよ
うだ。

「どうかされました?」

次の予約までは確か数時間後。

しかも顔馴染みのガルパの子達なので、目の前の少女はまた別の用件で尋ねたと判断する。

「えつと……個人練習をしたくて……」

「あつと、なるほど。個人練習用に使える部屋は……空いてますね。大丈夫ですよ」

「良かった〜」

ほつとする彼女。

個人練習の割には荷物にギターケース類の存在が確認出来ない。となれば、ボーカルかドラムかキーボード辺りが無難か。

と、手提げ鞆を左手に持っているのが見えた。そこからひよいと顔をだすスティックの先端も。

「もしかして……ドラムの練習でも？」

「えつ？あつ、はい。そうですけど……」

やはり、正解か。

ぴつたりと当てられた事に驚いた様子の彼女はじつと俺の顔を見つめる。

「……あれ？でもなんで？あつ、もうドラマーとしてのオーラが出ちゃってるとか？」

そして、小さく眩く。

案外どんくさい一面を持つ子なんだな、と感想を持ちつつも俺は素直に指摘してあげる事にした。

「鞆からステイックが出てますよ。移動する際に引つ掛かると危ないのでちゃんとしてまっしておいた方が良いでしょう」

「あつ……………!!ありがとうございます!!」

綺麗な角度でのお礼。

真面目な一面もあるんだなあと感慨深い思いに身を浸しつつも、慣れた手付きで手続きをこなす。

「何時間にします?」

「あつと……………2時間くらいで!」

「2時間ですね」

と、俺はふと手を止めた。

空いてるスタジオに設置されたドラムの調子がやや不調な傾向にあるとの報告を思いついたのだ。

もしもの可能性を考え、ドラムに詳しい俺が派遣されたのだから軽い注意程度で問題は無いかな。

「もう入っても大丈夫ですね。それと最近、ドラムの調子が良くないみたいなんで何か

「あれば構わずに呼んでくださいな」

「分かりました!!ありがとうございます!!」

「はい……………つて、もうおらん」

ツインテールを揺れる。

「いよいよドラムが叩ける高揚感に浮き浮きした彼女は意気揚々とスタジオへ向かってしまった。」

「分かるよ、その気持ち。自宅練習が出来ないからつい気持ちが荒ぶってしまうね。」

「蒼真君、調子はどう?」

「と、スタジオへ続く廊下から入れ違いにライブハウスの支配者、まりなが堂々とした振る舞いで登場してくる。」

「さっきのまりなさんの言い分を聞きたいぐらいに暇ですよ」

「くっ……………!!蒼真君がいる日に限って予約がないだけなのに……………っ!!」

「まあさっき知らない子がスタジオ入った所ですけどね」

「え?どんな子?」

「知ってどうするんですか」

「後で幸運のバイト君に会えたね!つて報告をする為だよ!」

「俺は招き猫扱いか何かですか」

出現率が極端に低いのは認めよう。

だがそれは俺がこのライブハウスの人員不足を補う為に派遣されたからであって、しようがない部分でもある。

ドラムという楽器柄、詳しい人は希少。

まりな本人もギターを嗜んでるのでそういう方面でのトラブルは対処可能だがドラムとなると専門外らしい。

とは言え、だ。全員がお手上げ状態は流石に不味いので、仕方無しに俺が居るという訳である。

「それでそれで!!どんな子が来たのかな?」

「名前は知りませんが……お嬢様っぽい風格でしたね」

「それから、それから!」

一体、何が面白いのやら。

「髪型はツインテール。それに担当パートが俺と同じドラマー……ぐらいですかね。ぱつと挙げられるのは」

「ツインテールにドラマー……」

特徴は捉えていると思う。

どうやら、まりなも該当する人物に心当たりが合ったらしい。はっ!とこちらを見

る。

「もしかして、初心者の子じゃない?」

「知りませんよ」

「それもそっか」

「確かに、初心者っぽいって言われるとそんな雰囲気はありましたけど」

「だとしたらほぼ確定かな。最近、活動を始めた”Morfonica”ってバンドは蒼真君、（ゴ）存じ?」

「俺がガールズバンドの最先端まで把握してるとまりなさんはお考えで?」

「そっかあ……知らないのも無理ないか。あつ、でもチエツクはしておいた方が良
いかな。”Morfonica”は最近の私の個人的なお薦めバンドだし」

「それくらいなら……暇があるときにやっときますけど。参考までに、他にもいます
?。そういうの」

「うくん……ガルパの子達以外ってなると、RASかな?」

「ラス」

「うん、”RAISE A SUIREN”。ファンの間ではRASって略するのが定番
だね。あの友希那ちゃん達にも引けを取らない本格派バンドって感じ」

「へえ。あのRoseliaにですか」

「バンドメンバーの一人にチュチュって愛称の子がいるんだけど、噂じゃ友希那ちゃんをスカウトしたんだって。でも、あっさり断られちゃって」

「でしようね。姫さんもそう易々と今のメンバーを捨てる真似だけはしないでしょうし」

友希那を引き入れたい思いは分かる。

彼女の歌声はそこらのボーカリストより何倍も秀でており、おまけに彼女自身の性格も妥協を許さない徹底ぶりだ。

正直、アークラとしてもライバルとして相對したくない候補の筆頭にも名を馳せるぐらいだ。

そんな友希那を目につけたチュチュって子もスカウトのセンスは多少あるように思える。肝が据わってる。

「そのせいか、今じゃ打倒“Roselia”って目標掲げて頑張ってるみたいだよ」

「なるほど、そこら辺の事情は追い追い。一応、出来る限りの確認はしますけどもあまり期待はせずに欲しいですね」

「次の標的はもしかしたら、蒼真君達かも」

「……………物騒な世の中なことで」

ライバル求める系バンドは御免だ。

アークラは自由気ままにやる方向性だし、根本的な部分が合わない気がするから。仮にこちらのバンドに油を注ぐような行為をすれば、保証はしかねないが。

まりなさんとの世間話が盛り上がる一方。

—————………ああ!!

「……………今のは?」

「悲鳴に聞こえたけど……………蒼真君、ちよつと見てきてくれないかな?ここは私がいるから」

「そうですね、行つてきます」

受付を離れ、通路へ踏みいる。

聞こえた方角には無論、スタジオがある。使用中となると、対象となるのは一ヶ所だけだから場所の特定は容易い。これが全部屋満室だと一々確認しなければならぬので大いに助かる。

十中八九、さっきの子が何かしら引き起こしたのだろうと思いつつもそのスタジオの扉前へと辿り着く。

やはり、防音扉が完全に閉まっていない。防音扉はとても重く、初心者がやらかしかちなミスの一つだ。

悲鳴が微かに聞こえた時点で、もしかしてとは思っていたが。

「すみませくん、声が聞こえたので確認で来ました。大丈夫ですか？」
扉をちよつと開けて、覗く。

ノックなんて無意味だし、楽器を弾いてる様子もないのでこちらの方が手っ取り早い。

「あ、あの………!!」

先程の子がひよいと部屋奥のドラムから顔を出す。

一見、可愛い仕草だがその表情は最後に見た嬉しさ溢れるものとはうって変わって、今にも泣き出しそうな悲しい表情へと変貌を遂げていた。

あー、と瞬時に悟った俺が気にしないでと声をかける前に彼女は涙声で告げる。

「ごめんなさい………!!壊しちゃったかもしれないませくん………!!」

—1
の
2—
へ
続
く。

—1の2—「私にドラムを教えてください!!」

◇◇◇

C i R C L E。練習スタジオ。

「よつと……………これで完了やね」

意外とあっさり直った。

ハイハットのクラッチのネジ部分が擦れて、全然効いてないだけだったので交換を行うだけで修理自体は完了するという呆気なさ。

当の本人はそんな事実は露知らず。

「ありがとうございます!!」

「元々、限界が来てただけなんでそんなに気にしなくても大丈夫ですよ」

「はい……………さっきまでの自分が恥ずかしい限りですね……………あんなに慌てちゃって」

「本番に向けての練習には丁度良かったじゃないですか」

「え?」

「え?」

——あれ?通じてない?

ライブにトラブルは付き物。

未然に防ぐのも大事だが、咄嗟に対処できる対応力もまた一人のバンドマンとして磨くべきであるという教訓から来る冗談。

この意味を理解していないとなると、ライブに関してほぼ未経験レベルか純粋に分からなかったポンコツかのどちらか、だ。

後者だけは止めてくれ。なかなかの致命傷が自分に刺さってしまう。

「今のはどういう意味で……………」

なんだ、只の前者か。一安心。

「ライブの本番中にもこんな感じで壊れる事って案外、普通だったりするんですよ」

「えっ!?本番中ですか!」

「そつ。なので、練習の時になって良かったねって話です」

「わ、分かりました……………でも、幾ら練習しても本番でも同じ繰り返しになりそうな予感が……………」

非情な世界だ。

本番の緊張感に押しやられ、トラブルが起きても適切な対応が思い浮かばない事態を体験する人は多いだろう。

俺もその内の一人だった。

だった、と言うのも今はほぼ克服したと言っても過言ではない。慣れが非常に役に立つ。場数と言うべきか。

一度、経験しておけば次への対策も立てやすいし何より無闇に混乱しなくて済む。

「慣れですよ、そういうのは」

「凄いです……………っ!!何でも知っていますのですね!!」

「流石に何でもは……………いかないですね。知ってる事だけです。というか——」

「はい？」

彼女へ視線を向ける。

純粹無垢に首を傾げる彼女は恐らく、ライブハウスの従業員への期待度が極大まで高まっただけそう。

あながち、間違いではないが。

「同業……………ですよ？」

「えっ?!私と一緒に、ドラムをやったらっしやるのですか!?!」

「そうですね。嗜む程度には」

と、驚愕の事実直面に彼女。

芸人並みのリアクションを見せたかと思えば、ぶつぶつと何かしらの思考に耽ってい

る様子。

特に指摘する事無く、眺めていると、

「あの………一つお願いがあります」

「はい？何でしょ？」

意を決した彼女は言う。

「私にドラムを教えてください!!」



CIRCLE。受付。

「へえ。それで？結局、教える事にしたんだ？女の子と二人きりで、付きつきりで

」

まりなさんのニヤニヤが若干、癩。

確かにそうだが、語弊を生むような言い方は控えてほしい。只でさえ、最近はその子と絡む機会が多いのに。

「お互いの時間があれば、の話ですよ」

あの一件について、だが。

一言で纏めると——弟子が出来ました。

楽器練習は独学も一応可能だが、誰かから教わる方が上達の速度は段違いに早くなる。その知識が脳裏をちらつき、彼女の依頼を断るに断れなかった。

『それじゃあ、現段階でどれくらい出来るか見たいんで軽く叩いてもらっても?』

『はい!ですが、具体的に何をすれば?』

『エイトビートで大丈夫』

『任せて!』

ドラマーとしての素質はある。

これまで誰からも基礎を叩き込まれていなかった分、リズムに多少のばらつきは見られるものの、後々修正すれば良いだけだ。

将来は化けるかもしれない原石。今、俺はそれを目の当たりにしている。

『よし、もう大丈夫。教えるのは構わないんやけど、一つ条件がある』

『はい』

『敬語禁止』

『えっ?でも、先輩にタメ口は……………』

『なら、この話は無かった呈で……………』

『分かりました!!ううん、分かったわ!!』

この提案に意図はあまり無い。

単純に敬語だと距離感を感じてしまう。そんな状態で教えるのは互いに気まずいし、禁止にすれば彼女も敬語へ余分に気を回す必要が無くなる。

とまあ、建前は置いておき、本音は俺自身が敬語で誰かから接して来られるとむず痒いから、だけだったりする。

「そういえば、これで何人目になるの?」

「だから変な言い方は……………三人目ですかね」

「案外、少ないんだ」

「おっと。まりなさんの俺に対するイメージが今なのである程度把握しました」

「何だと……………っ!!」

ドラマーの弟子の数ね。

これでも多い方だ。初代は沙綾だが俺が指導する事はないから実質、卒業扱い。

二代目はあこだったりする。今でも現役。

指導ってよりかは相談に近いか。フレーズの修正や曲に基本パターンが嵌まつてる
か的な内容が多い。

『では、改めまして。月ノ森学園、一年の二葉つくしです！この度はご指導のほどよろし
くお願いします……………っ！』

そして、三代目の着任。

バンドを組んだのもまだまだここ数カ月の話でライブも手で数えるぐらいの経験し
かないそうだ。

彼女のバンドに関しては謎が多い。

同じ時間を共有する機会はこの先多そうなので、また改めて聞けば良いだけの話だ
が。

「ところで、蒼真君」

「はい？何ですか？また、留守番お願いね！って奴ですか？」

「違うから！あれは特例であって、普段は違うからね!？」

「分かりましたよ。それで本題は？」

「次、蒼真君がライブする日を知りたくて。いつ？」

「それはまた……………良からぬ企みをしてそうですが」

「うん、それはない」

「……………。来週の土曜に、スクエアの方でやりますけど」

「そのライブは当日取り置きでもいける感じかな?」

「いけたと思いますけど。来るんですか?」

「さあ、どうだろう……………」

そんな謎に包んだ風な演技はしなくても。

まりなの真意は掴めないが、ライブの邪魔をするような真似だけはしないから特に突っ込んだりはしない。

てか、めんどくさい。

「なんか失礼な事、考えたでしょ」

「また、まりなさんのお節介が発動したんかなあつて思ってただけですよ」

「なら、良いけど」

危ない、危ない。

「話は戻るけど、つくしちゃんの今後はどうするつもりなの?」

「おつとここで問題です、まりなさん。バンドマン初心者が必ずレベルでぶち当たる最初の壁って何だと思います?」

「えっ?……………上手い人の演奏に自分を重ねて、怖じ気づいちゃう事とか?」

「違いまつせ。俺が思うに、ライブの理想と現実の相違に気付いてしまった、その瞬間がそうじゃないかと」

「あく……私もあつたね。想像してたよりも観客が全然居なかったとか、盛り上がってくれなかったとか、そういうこと？」

「はい。話を聞いた感じ、つくしはまだ経験してない様子だったので第一関門はそこで心が折れるかどうかが要かと」

初心者のバンドは多い。職業柄、頻繁に目にする。

の割りには、気付けばそのバンドが消えていたという体験をした人も多いだろう。そのバンドが、初心者という枠を脱したのも理由の一つにある。

最大の要因はライブでの理想と現実の落差に精神がやられる事にある。大半の人が、そのせいで止めてしまう。

一度、ライブをすれば沢山の歓声やライトを浴びて、会場の空気が熱に包まれる光景を夢見るだろう。

だが、実際にライブをすると――

『あの………今度、近いうちにライブするから是非とも観に来て欲しいなんておこがましいかな………あつ、ううん！何でもないのでよ！』

――何もなければ良いのだが。

—
1
の
3
—
へ
続
く。

—1の3—「あ、あの!! 師匠!?!」

◇◇◇

CIRCLE。スタジオ内。

「そう言えば、先週のライブはどうやったん?」

その言葉に私は手を止めた。

回転椅子に座って、くるくると回っていた私のドラム師匠でもある彼はその動作に気付かない。

話題が上がったライブ。

私にとってはあまり良くない結果で幕を閉じていた。正直、思い出たくないレベルで。

だから、彼から言われるまでは話すつもりは全然無かった。

「全然ダメでした……………」

「ダメって客がおらんかったん?」

「違うんです。いや、違わなくは無いです……………」と、兎に角! 私達のバンドの出番の時だけ盛り上がりが無かったというか……………」

出番が終わった瞬間はそういう物かと。

精々、寄せ集めの初心者がするライブだから盛り上がりには欠けたのだと思っていた。

でも、後続で出演したバンド全てが例外無く私のいる楽屋まで歓声が届くぐらいにステージを熱くしていた。

「そういうもんだよ」

師匠は呆気なく言う。

普段からお世話になる彼だが、あまりの冷めた態度に私は少しイラついてしまう。

「そういうもんって………ヒドイです」

「だって、他に言い様も無いし」

「何で!? 師匠だって知ってるじゃないですか!! ちゃんと練習したのに! 努力して頑張ったつもりなのに!」

分かっている。これは只の八つ当たりだ。

彼に一切、非は無い。私のドラマーとしての実力不足が原因の一環なのも重々承知している。

あんなにも。練習場所も確保して、覚束無いドラムに試行錯誤を繰り返しながらも諦めずに練習したのに。

私達の初ライブは呆気なく散った。

——散ってしまった。

「んじや、逆に聞くけど」

「え？」

「つくしのバンドのさ、えっとモニカだけ？そのモニカにとって、ライブで何がどうなれば成功したって言えるんだ？」

「それは……………」

言葉に詰まる。

私達のバンド”Morfonica”にとつてのライブに注ぐイメージ像。

彼はそれを知りたいと言う。

「皆と上手く音を合わせられて、観ている人達を納得させられる演奏をしたら、だと思いません」

「……………過大評価しても40点」

「へ!?!何で!?!」

「そつちで考えろつて。今回は答えだけ先に知つても意味がないからな。バンドのリーダーなんだろう？」

「リーダーだけどお……………分からない事は分からないよ!」

たまらず本音が漏れる。

その私の余りある姿に彼は何故か微笑ましくしていた。

「その気持ちはバンドメンバーには言っているん?」

「……………言ってます」

「なら、そこからやね。俺は一言も一人で解決するようには言っていないし」

「……………」

詭弁だ。言葉の綾だ。

だけど、メンバーには秘めたる悔しいという気持ちは隠している。彼はそれすらも考慮して、答えを導くようにと誘ってくる。

いつからか、私の心は自然と彼の言葉だけはすんなりと受け入れてしまう。

つまり、これは悪足掻き。

「そんなの……………今更、ましろ達に言ったって、迷惑かもしれないし」

「迷惑って言われたんか?……………ちよつと、ニュアンスがちやうか。そうやな、逆にメンバーの子達から同じ事を言われたら、つくしはそれを迷惑と感じるのか?」

「……………感じません。むしろ、嬉しいです」

「やろ。ほらみー」

「ぐぬぬ……………っ!!」

今日も私は彼に敵わない。



C i R C L E。練習スタジオ。

「師匠はどうして私にドラムを教えてくださいの？」
とある日。

今日も秘密の特訓と称して、私はスタジオでドラムを叩いていた。彼は膝の上に乗せたスネアのチューニングの真つ最中。

ステイックをスネアに置いた私の質問を聞いた彼はその手を止める。

「つくしが教えろって言ったやん」

「あつ、いや。そうじゃなくて……………私としてはてつきり初ライブまでの関係かと」

「えつ、その方が良かったのか……………っ!」

「ううん!!違うの!!私に時間を割いてくれるのが申し訳無いから……………」

この二人だけの時間。

最初は奇妙な空間で自分でも不思議に思えるぐらいに謎に包まれていた。ドラムはぐんぐん上達したけど。

でも、今ではこの時間を私は心地よいものだと感じていた。委員長として、リーダーとしての重荷を背負わずに只、彼の弟子としてこの時間が。

私自身もびっくりしている。普段は絶対に赤の他人の前では口にしない弱音を彼の前では呆気なく吐いてしまう自分に。

「うくん、なんやろな……………」

顎に指を当てて、彼は思考を巡らせる。

知り合って間もないけど、師匠は不思議な人だと思う。初対面である私のお願いもあつさり承諾して、こうして事後保証もしてくれる。

あつ、ライブまでだと思ってたのは私の思い込みだったみたいだけど。黙つとこ。

一方で、単純に私は知りたかった。彼はどういう心意で私にドラムを教えてくれるのか。

「何でなんやろ？」

返ってきたのは疑問でした。

「師匠だつて、分かつて無いじゃないですか」

「そんな嬉しそうにする事………？」

「えっ？私の顔つて今そうなってるの？」

「うん。弛んどるぞ、頬が」

「へっ!？」

ぱつ、と手を当てて隠す。

その仕草に彼がやってやったとばかりに笑い始め、またしても彼にからかわれたと私は気づいてしまう。

いつもそうだ。私が年下だからと良いことに面白半分、言葉巧みに遊んでくる。

ただ——正直、そんなにイヤではない。

学校での私は委員長としての身分がある。

特殊な学校である故、生徒も人並み以上の天才しか集まっておらず、少しでも油断すればあつという間に置いていかれるそんな世界で、だ。

私もまた追いかけるだけで精一杯。

その証拠に他のメンバーと違って、秘密裏に楽器の練習もしている。きっと、真の本物は無駄な練習もせずに本番に挑むのだろうけど。

無い物ねだりはさせておき。月ノ森学園の肩書きを背負う必要がない彼と過ごす時間はとても楽しい。

「冗談はさておき。えっと、つくしにドラムを教える理由やったか」

「冗談……あれ?無かったのでは?」

「そつ、やっぱり無いね。考えたけど何も思い付かなかった」

首を傾げる私。

私が悪いのではない。特に理由が無いのに私にドラムを教えている彼に非があると
思う。

「なら結局は何で?って話に戻るけど、結論から言えば、つくしといるこの時間は俺にとつても有益やと思えるから、やないかな?」

「私との時間が有益……?」

「そつ。他にもあるぞ。出来なかつた事が出来るようになった時のつくしの喜び具合。あれは教えるこつちも吊られる勢いで嬉しくなっちゃう」

「なっ……!!」

脳裏に浮かぶ鮮明な映像。

『やったあー!! 師匠!! 私、出来るようになったよ!!』

スティックを両手で天高く上げて。

満面の笑みで報告する私のその姿は今振り返ってみれば、随分とはしやぎ過ぎでは無
かろうかと思えるレベルでの有頂天ぶり。

いや、確かに嬉しかった。とても苦戦していた場所だけに、その時の記憶は今でも鮮
明に覚えている。

「わ……………わ……………わ……………っ!!」

「わ?」

「忘れてください!! 少しも思い出さないで!!」

「そんな無茶な要望は通りませくん。せめて、アップダウンが出来るようになってから、
出直して下さいな」

「ぐぬぬ……………!!」

今日もまた私は負けてしまう。

◇◇◇

CIRCLE。休憩スペース。

「ふむ………こんなもんか」

録画した動画の鑑賞中である師匠。

バンドの雰囲気も知りたいから、こつそりと撮ってきてくれと頼まれた時は裏では別の理由が働いているのでは、と疑いもした。真剣に映像を見つめる師匠の姿できつぱりと晴れたけど。

さて、現実逃避はここまで。

赤の他人に練習風景を見られると考えるだけでも緊張して落ち着かないが、見終えた師匠に評論を聞かないと。

「どうでしたか?」

「いやあ………スマホ越しでもバイオリンって迫力あるんだなく。すげえ」

「るいさんのバイオリンはプロ並みに上手ですから!!……つて、違います!! 私のドラムです!!」

モニカのメンバーの一人、るいさんのパートはバイオリン。

例を見ない変則的なスタイルでもあるので、どうしてもそちらに視線が移ってしまうのは身内目線からでも共感出来る。

でも、師匠には私のドラムを見て欲しい。評価して欲しい。そして、アドバイスとか指導とかして貰いたい。じゃないと、上手くなれない。リーダーとしての威厳が無くなってしまう。

「つくしのドラムは……バンドとなると悪目立ちはして無いし、かと言って無粋に目立っても無いしな……普通?」

「ふ、普通」

「これからに期待って感じか」

普通じゃダメ。

このペースだと他のメンバーに遅れる。そう考えるだけで私の心に焦燥感が住み着いてしまう。

「まつ、気にすんな。まだまだ発展途上なんだし、俺もちゃんと付き合うから」

「ふわっ!!」

と、頭上にならずっしりとした感覚。

続いてそつとそれが左右にゆっくりと動いていく。

あまりの衝撃っぷりに思考が飛んだ。

「あ、あの!!師匠!?!」

「ん? あつ、すまん。つい癖で」

「い、いえ………」

そして、撫でられた髪にそつと触れる。

大きくて、逞しくて優しくかつた彼の掌。不思議と胸の中がいつぱいになる。だけど、どこか心地好くて。

初めての感覚に戸惑いつつも、どうにか返事だけは。果たして、上手く返せただろうか。それすら確認する余裕が今の私にはない。

………今日も、うん。

—
1
—
終

特別編

沙綾大人編—1—『同棲生活』



山吹家。蒼真の部屋。

「……………」

椅子に座り、パソコンと向き合う俺。

作曲作業に没頭中の俺は相変わらず曲作りの途中で行き詰まっていた。

さて今はというと、大学を卒業して既に数か月の月日が流れている。俺自身の所属するバンド“アークラ”も有名なプロダクションと契約を交わし、在学中にプロデビューを果たしていた。

元から知名度はそれなりにあったお陰で、プロ初のアルバムもなかなかの売り上げを見せているようだ。そうマネージャーから意気揚々と言われた。

気が早いことに次回作にも結構なレベルの期待をあちこちから寄せられているらしく、そうとなると単に嬉しいやら同時にプレッシャーもあって、複雑な気分だ。

ライブも他のメンバーの実力、スタッフの助力などもあって、チケットはあっという

間に完売だそうで。ありがたい。

「ここが問題やな……………」

今、俺が製作する楽曲は二つ。

一つは秋シーズンに放映が始まるアニメの主題歌の予定だ。マネージャー曰く、そのアニメ関連のディレクターから抜擢された、とのこと。

後、一つは――

――その時、着信を知らせる音楽が鳴った。

俺の視線は手元のキーボード横、ブルーライトで光るスマホ画面へと移る。そこには電話を知らせるマークと相手の名前が表示されていた。

――”山吹沙綾”。

無視出来る相手ではない。後で直接ぐちぐち文句を言われるよりかは素直に電話ぐらい出てやろうと思ひ、俺はスマホを手取る。

『あ、もしもし?』

「もしもし。さーちゃん、どした?」

『えっーと……………あのね。明日暇でしょ?』

「そう……………やな。明日は予定もない」

『私も明日休みが取れてね。それで何処かにデートに行こうかなって。最近、忙しくて

全然行つてないでしょ?』

「デートねえ……………」

俺と沙綾はそういう関係だ。

『駄目? ソウ君、最近忙しいから休みたい時にゆっくり休みたいよね?』

「んや、行こうか。デート」

『ホント!?!』

「気分転換したい所やったし、全然いける」

『うん。そういうことなら分かった。あ、これ何だろう……………ちよつとごめんね、ソウ君。電話切るけど、続きはまたね?』

「はいはい、了解、了解」

返事が適当!と沙綾の怒り声が飛んでくるのを見越して、俺は切断ボタンを早めに押す。

沙綾と二人きりのデート。俺が仕事にプライベートの時間を相当喰われてるとは言え、沙綾にそんな言い訳は出来ない。暫くデートもお預けだったのでここで一息入れておくべきだろう。

パソコンの画面を消して、俺は両手を上に上げて背筋を限界まで伸ばす。伸びきった筋肉が良い快感を出してくれている。

「入るよ〜」

コンコン、と扉がノックされる。

俺が返事をする前にその人物は部屋へと侵入してきた。俺はその人物が誰かはもう予想がついているので、特に注意はしない。常習犯なのでとつくの昔に諦めている。

「ソウく〜ん」

座る肩にどつさり体重がかかる。

しかも俺の鼻孔は女の子特有の甘い匂いを捉えていた。よくよく意識すると背中に柔らかな感触も。

だが、これも毎回。俺は肩から出てきたその手を優しく握るが、呆れるから止めてくれと思わせるほどの声を出す。

「さーちゃん……さつきのは何？」

「デートのお誘い」

「いや、わざわざ電話じゃなくてもだな」

そう。沙綾とは現在、同棲中なのだ。

だからさつきの電話も正直に言えば意味が殆どない。

「電話の方が新鮮でしょ？ 私達付き合って数年過ぎてるし、たまにはこうでもしないとねー」

「…………いや、さーちゃんはいつになっても変わらないから楽」

「ちよつとー。それ、褒めてるのー？」

「褒めてんだって……………てか、この感じ……………お前、もう呑んでるな？」

「ええー、呑んでないよ！」

沙綾の呂律がやや不安定。

飲酒は法律的に余裕でクリアしてる俺達であつたが、普段からお酒はあまり呑まないタイプである。

特に俺がそうだ。苦手ではないけど、酔えない体質なのかあんまり好きではない。

「あ、今日貰つたお酒……………あれ、テーブルに置きっぱなしやったか……………？」

大人の付き合いの一環として。普段からお世話になつております、と付き合いの長い友人から渡された代物だ。

高級そうな箱に入っていたので、落とさないように取り合えず安全なところに移動させて、そこに置いた記憶はある。が、それっきりで俺の記憶は途切れている。

もし、沙綾が好奇心で箱を開けてしまい、その酒を口にしてしまえば、今のこの甘えん坊モード沙綾も納得が行く。

「ねえー、ソウクーん。チューしてよー」

「はいはい……………大人しく寝てろ」

「する気、ないでしょー」

「電話では酔ってなかったと思うんやけどな……………やけに酔いが回るの早い……………」

肩越しに暴れる沙綾を落ち着かせる。

沙綾は酔ってる時の記憶はちゃんと事後になつてからも明確に覚えている。

それで、沙綾は今までにこれと似たような行動をしており、後から一人勝手に悶絶する姿を俺は数回目撃している

「ぎゅー」

さーちゃん、首元が絞まっています。

山吹家の長女であり、下に弟と妹を持つ沙綾は自然と幼い頃から下の面倒ばかりを見ていた。母親も病弱とあつてなのか、普段からお世話をする方へと回る習慣がある。

これはあくまで俺の予想だが、その反動で沙綾は甘えると言う行為を知らない。誰かに甘えられる、は得意。でも、その逆となると未経験に近い沙綾は出来なくつてしまう。

「……………ソウ君がいる〜」

そして、今は俺がいる。甘えても許してくれる人がいる。

でも沙綾にとつては方法が分からない。選んだ選択肢は酔っぱらうこと。酒の力で沙綾はそれを乗り越えようとしているのではないか。

ここまでが俺の予想だ。

本人に伝える気はないが、沙綾自身もうっすらと感じてきてはいると思う。

「サーちゃん」

「んー？なにー？」

「明日は何処行くか決めてんの？」

「決めてないよー？」

さて、悩み何処だ。

安定のデートスポットを回るべきなのか。反対の思考を持つのなら穴場もありかもしれない。楽器店とか。

……まあ不機嫌そうな沙綾が目蓋の裏に映るよね。

折角だし、遠出もしてみようかと俺が色々と思いを巡らしていると沙綾の俺を抱き締める力が強くなる。

「ソウ君……………」

「サーちゃん……………改まって、どうした？」

「私……………ソウ君の隣に立ててるかな？」

感情の起伏が激しい沙綾。

つまり、それは素直な心情を吐き出しているって言う意味にも捉えられる。

「……………最近のソウ君、あちこちから呼ばれて……………なんだか私から遠くに行っちゃ

気がして……………」

「……………さーちゃん、ちよつと良い？」

俺は沙綾を一度俺から離れるように誘導する。そして、回る椅子を使って沙綾の方へと椅子を回転させる。

両手を大きく広げて沙綾を待つ。

「んっ……………」

素直に俺の胸元へと入り込む沙綾。

沙綾をぎゅつと抱き締めた俺は優しく彼女の背中を擦る。

「心配かけてごめん……………さーちゃんの事もちゃんと考えてるから。俺の隣にはいつもさーちゃんしか居ないって思ってるから」

「……………ほんと？」

「こんな俺好みに可愛い彼女、誰にも渡さない。ずっといてほしいって思つとるから……………」

「うん……………」

それ以降、俺は黙って彼女の頭を撫で続けていた。

◇◇◇

数分後。

「小腹が空いたな……………」

俺の背中に腕を回して離れない沙綾を意識の外に押し出した俺の思考の大半は、お腹が空いた、それだけである。

身動きもまともにも取れない。いい加減離れて欲しいものだが酔ってる沙綾が言うことを聞いてくれる可能性は低い。

「お酒ならリビングにあるよ〜？」

「やっぱり呑んでるやんけ」

「呑んでないもーん。ぐむぐむ」

お腹に顔を擦りつけないでくれ。

「ほら、離れて」

「いや」

「……………さーちゃん、離れて?」

「絶対にいや」

「愛してるから、今は離れて?」

「いや」

甘えモードの次は頑固モードに突入。

こうなると、沙綾は何をしても頑なに拒み続ける。俺には手の打ちようがない。これまでの全戦も、俺がお手上げ状態で片がついているのがその証。

試しに腕を離そうと引つ張るとそれ以上の剛力で締め付けてくる。何処からこんな力が出てくるのか、不思議なぐらいに。

「何か食べたいんやけど」

「……………あるよ」

「何が?」

沙綾の変な答えに俺が聞き返す。

「私」

ようやく離れた沙綾が発した言葉。

俺の全ての動きが一時停止したかのように止まる。

「ソウ君……………私を……………食べて？」

「……………変なこと言つてないでとつとと寝室に行つてこい」

「いや。なら、ずつと抱き付くもん」

再び沙綾は俺に抱き付き腰をがっちりロックする。反攻しようにも俺には先程の沙綾の台詞が脳裏で何度も再生されてしまい、余裕がない。

——私を……………食べて？

つぶらな瞳の上目遣い。パジャマ姿でいる為、男を誘う女性の肌が俺の目にちらつく。そして、何よりその口元は理性を奪う魔性の魅惑を放っていた。

「……………ばか」

◇◇◇

一つ言い忘れていたことがあった。

俺の作曲している新曲について、だ。

……テーマは”結婚”。

そう、俺はこの曲が完成すれば彼女に告白をするつもりでいる。それまではどうか隠さないといけないけど、勘の鋭い沙綾のことだ。慎重に行きたい。

完成がいつになるかは未だ未定。

数か月後なのか、はたまたは数年後になってしまうのか。俺だって想像がつかないのだから文句は受け付けられない。

でも沙綾を離すつもりは絶対ない。

例えばの話。今後、バンドを取るか、または彼女を取るかの究極的な選択肢が出てくるかもしれない。一番最善なのは両方を取ること。だけど、それすら不可能と判断したら、その時の俺は躊躇なく間違いなく沙綾を選ぶ。

バンドの皆には迷惑をかけるのは承知。それでもなお沙綾を選ぶのは俺の人生の大半が彼女に支えられて成り立つものだからだ。

言わずとも俺が出逢った多くの人にも相当支えられてきた。でも、辿り着くその最後にはそこに沙綾の姿が必ずあつたのだ。

——だからこそ、俺は沙綾を人生賭けて幸せにする義務がある。

沙綾本人は俺がここまで没頭しているとは思ってもいないだろう。それでも良い。沙綾が幸せであれば、それが一番なのだから。

「……………ソウ君……………」

隣に寝る幸せそうな彼女の寝顔。

俺は優しく彼女の髪を撫でるのであった。

沙綾大人編——『同棲生活』終

沙綾大人編—2—『早朝対戦』

◇◇◇

寝室。

「ふわぁ……………」

早朝の日差しが眩しい。

上半身をベッドから起こす。腑抜けた体を伸ばそうと両手を組んで天井へ引っ張り上げた。

今日は久々の休日。

全国を一周するライブツアーも先日でラストを迎えた。チケットも全会場で即売り切れとらしく、もう何処も熱量が半端ないぐらいにしか記憶がない。

半年かけた割には怒涛の毎日続き。あつという間という言葉をこれ程痛感する羽目になるとは。

思い出に浸るのも程ほどに。

折角の休みだ。睡魔に従い、二度寝も有りだなと心の悪魔が決定を下した所でふと気付く。

「ん?.....なんだ。沙綾か」

「んにゃ〜」

視線を下に行けば、一人の女の子。

寝顔を存分にさらけ出し、挙げ句の果てにはむにやむにや謎の寝言を呟く始末。

普段のキリツとした顔付きはない。ゆるゆるに緩んだ口元。きつと楽しい夢の中で満喫してるに違いない。

帰宅時には既に就寝していた筈の彼女がいつベッドに入り込んだのか疑惑はさておき、いたずら心に火が付いた。

試しに頬をつついてみる。

「ん.....やあ.....」

なんだこの可愛い生き物は。俺の彼女だ。

存分に味わってやろうと再び、彼女にちよつかいをかけようと試みる。

人差し指を伸ばす。

沙綾の頬つぺたに触れようとした――

「.....ソウくん.....」

「っ?!.....起きた?」

「.....zzzz」

返答はない。ただの寝言か。

びっくりしたせいで瞬時に指を引っ込めてしまった。

何だか気が引いてしまった。

ふと、久しぶりに二人分の朝御飯を作ろうと思いついた。普段は沙綾が担当だがたまには良いだろう。

ベッドを脱出しようとして動き出す。

「……………ソウ君？」

もぞもぞした気配に沙綾の意識がうつすらと目覚めた。

半目を開けて、寝惚けた視線を送る彼女は無言で俺に向けて両手を伸ばす。寝たままの姿勢で。

この行為はハグの要求を意味する。

「取り敢えず、起きなって」

「けーち」

「でも、来るんやね」

素直に指示は従う沙綾。

起きた、とまたしても無言の要求をしてくるが実際はただ上半身を上げただけ。毛布がお腹から足元全体に乗ったまま。

これ以上、文句を言っても無意味。

仕方無しにしてやる的な反応を示しつつ、俺は沙綾の背中に両手を回した。

ポンポンと優しく俺の左肩に乗せた彼女の頭を撫でる。

「おーい。俺の肩で寝るなって」

「はーい……………」

「駄目だ、これ」

片肩が重い。

ずっしりと体重をかけられた。挙げ句の果てには両手を腰に回され、がつつりロックされた。

これは昨晚、沙綾は夜更かしをしたみたいだ。俺が久しぶりに帰ると連絡したから出迎えようとして寝落ちしたパターン。

脳裏に点と点が繋がる感覚。

だから、か。帰宅すればリビングに料理とテーブルに顔を付けて睡眠していた沙綾がいたのは。

「ソウ君の匂いがする……………」

「止めなさい」

「ん？これは……………女の子の匂い？」

「……………」

「まずい。

「ねえ〜」

沙綾が起動した。

理由がまさかの俺に尋問をする為。運が悪すぎるとしか言えない。

「あれだ。飲み会にも *Rosealia* のメンバーもいたからちやうかな……………」

「ロゼリア?……………あゝ、あこちゃんの匂いかな、これ〜」

「まだ寝惚けてんのか」

朝から俺達は何をしてるんだ。

いい加減、せめて自由に身動きだけは取らせて欲しい所。

沙綾の女の子特有の匂い、密着された体と体。感覚は鮮明に機能してしまっている。

「流石に、ちよつと離してくれ」

「ええ〜。離れるのはいや〜」

「何時でも引つ付いて良いから、今だけは勘弁してくれ」

「言ったね」

雰囲気が一変した。

「……………へ?」

「今の台詞、忘れないから」

「さーちゃん……………完全に目が覚めてんな？」

「うん」

「つてことは演技ですか。さいですか。」

「言質を入手したい為の強硬手段に沙綾は出た。相手が許しをこうまでひたすらしがみつくだけ。」

「何がお望みで？」

「今日は私だけのモノになること」

「普段から変わらん気がする」

「へ……………そ、そうじゃなくて!! えつとね……………」

「ようやくロックが外れた。」

「顔を赤らめ、指をぐるぐると回す彼女のその姿を早朝から眺めるのは彼氏ならではの特権。」

「ソウ君に甘えさせてくれないかな……………つて」

「んなの、わざわざ許可を取らんくても。勝手にやれば良いのに」

「本当?」

「ほんと」

「本当の本当？」

「めんどくせえな。俺はさーちゃん、君だけに全てを尽くすよ」

「うん……………ありがと」

言つてて、恥ずかしいな、これ。

恋愛は初心者的沙綾は他人の情報に惑わされ易い。誰かしらに打診でもされたのだらうか。

香澄か、薫辺りが有力候補。

——刹那。

「おっと!!」

沙綾が飛び付いてきた。

ギリギリで彼女を抱き抱えることに成功するのもつかの間、沙綾は大胆な行動に出ってしまった。

反応出来ない自分に大ヒット。

「……………ふはっ」

「……………それはちよつと話が違うんやない？」

「あれ〜？何でも良いって言ったんじゃなかったっけ？」

一言。唇を奪われました。

「そうやけどさ……………」

「もう。男ならシヤキとしないと！」

「分かりましたよ、お嬢様」

満足そうな笑顔。

彼女のそれを見せ付けられると何も反論出来ないのが彼氏の定め。

何とも儂い生き物だろうか。人間とは。

「んで、いつまでこうしてんの？」

「ソウ君はもう起ききたい？」

「さーちゃんの奴隷ですよ、俺は今」

「奴隷って……………なら、私まだ眠たいから寝よ？勿論、一緒に」

「ありや。さーちゃんが二度寝するとは珍しい」

素直に従うけども。

そして、ベッドに再び横になった。

仰向けになり、顔を横に傾ければすぐそこに沙綾の顔がくつきりと映る。子供の頃に比べれば、やはり沙綾も俺も大人に成長した。

今では随分と慣れたが当初は緊張しまくっていたのを思い出す。

「……………ソウ君」

「何？」

「頭撫でて」

「はいはい」

俺の胸元に顔を埋めてきた沙綾。

今日一日は彼女の言いなりだ。黙って、沙綾の髪を優しく撫でていく。

そして――

「おやすみ、さーちゃん」

「うん。おやすみ、ソウ君」

◇◇◇

数分後。

「さー………」

沙綾は起き上がる。狸寝入りは得意だ。

羞恥心で夢の世界に飛べないのも一理あるかもしれないが、それは一時、置いておくとして。

彼と久しぶりに揃っての休日。

ツアー終わりの彼は疲労困憊のはず。なので、今回はその疲労を取っ払いつつ、とことん彼を癒す計画を企てた。

今、思えば相談相手がポピパのメンバーなのはちよつと間違えたかもしれない。

だって――

『なら直接、揉むとか』

『おたえちゃん!? それはちよつと直球かな………つて』

『え? りみ? 肩の話だよ?』

『か、肩………? なんだあ』

『なら、りみはどこを想像したの?』

『へえ!?! い、言えないよ!!』

おたえの案は保留。

『うくん。美味しい物を食べる!!』

『お、意外とマトモな意見だな』

『有咲に褒められた!?!』

『そこまで褒めてない』

『よし!!沙綾をご馳走すれば良い!!』

『それは駄目だ!!』

『うわぁーん!!』

それは前やった。酔って覚えてないけど。

美味しい料理を提供する案は採用した。

『ただ恋人と一緒に寝るだけでも癒しの効果はあるらしいってネットにあつたな』

『へえ、有咲は試したことあるの?』

『ば、馬鹿!!あるわけ無いだろ!!』

『と言いつつ、ほんとは?』

『……………』

『あるんだ』

春が来たらしい有咲の意見も採用。

以上等から、沙綾は色々準備をしつつ、計画を実行しようとした。

度々、計画の範疇を越えてしまいかれられないけど。というか、もう何度か越えてし

まったのは内緒。

「ふふ……大好きだよ」

彼の頬に軽く口づけ。

ライブの時に見せるカッコいい彼の顔とは違い、自分にだけ見れる寝顔はまた貴重であつた。

こつそり抜け出し、ベッドを脱出。

次は彼が起きる時間を考慮して、彼の大好物を作ろう。朝御飯、いや昼御飯になつちやうかもしれないけど。

そして、昼御飯の後は――

「だーめ。今日はソウ君の休日なんだから」

自然と高ぶる期待に沙綾は胸の鼓動を抑えつつ、部屋を後にしたのであつた。

巴大人編—1—『誕生日』

◇◇◇

山吹家。

「ソウ、今日も仕事なのか？」

テーブルでいつもの朝食を摂っていると、巴がエプロン姿で近付いてきた。

巴と一緒に暮らすようになって五年。今では随分、巴のエプロン姿も板についてきたなあと思う。

あの頃は酷かった。

俺も手伝うと言ったものの、自分でやりたいと頑なに譲らないので渋々任じたのが悲劇の始まり。

元々俺は巴が家事をしないのを知っていた。でも、料理とかはレシピ通りにやればまあまあ形にはなるぐらいだと思っていたが。

だがしかし、世間は甘くない。

巴の料理生活初日に漫画で見る真っ黒に焦げた塊をこっそり目撃してしまった過去の俺がアフロの女子力ナンバーワンのひまりに助けを求めるところを即決していたのは

鮮明に覚えている。

「今日は……………下手したら夜まで続くかもしれん」

「そうか……………分かった」

残念そうに落ち込む巴。

俺の仕事は昔と変わらずドラマをやらしてもらっている。

普段なら夕方帰りの俺だが、来週に迫ったライブの打ち合わせや練習がかさ張ってしまっているのが必然と帰りが遅くなる。

「ご馳走さま。美味しかったよ」

「ああ」

空いた皿をシンクへ運ぶ。

出掛ける準備まであと少し余裕があるので巴と一緒に選んだソファへ腰を下ろした。

「あ、パスパレ」

テレビの番組チャンネルをぐるぐる回していると見知った顔がテレビに出ており、俺のリモコンを持つ腕が止まる。

どうやらニュース番組でバンドの紹介をされているようだ。彩ちゃんがライブMCでやらかしているシーンがばっちり流される。

「相変わらずの慌てっぷり」

「これでもだいたいぶマシになったやろ？」

「どうだろ？」

巴が俺の隣に座る。

と、思えば巴が肌と肌が触れ合うぐらいの超至近距離まで密着してきた。

恐る恐る、俺の手を握り始める。

「珍しいね」

「そういう気分なんだ」

「甘えたい気分？」

「……………うん」

俺の肩に頭を乗せる巴。

あまり付き合う当時から自ら甘えるという行為をしてこなかった巴が急にしてきたので俺は心中では驚きつつも冷静に勤め、彼女の頭を撫でる。

「もう時間じゃないか？」

「……………ホントだ」

巴に言われ、壁時計を見た。

仕度の時間も考えれば、これ以上の浪費は避けたい。

巴は俺から離れてテレビを眺めている。

ソファから重い腰をあげて、準備へと向かおうとした俺。ふとあることを思い付いしまったので実行することに。

「どうした？」

「行つてきますのキスはしないのか？」

「んなあ!?!良いから早く行つてこい!!」

「へいへい」

顔を真っ赤に照れてしまった巴。

俺はニヤリと巴に気づかれないように笑みを浮かべる。

「……………巴も相変わらさずやね」

彩が緊張してMCが上手にならないように、巴のこういう照れ屋な所は昔から変わらない。つまり、チャームポイント。

それはそうと今日は大切な1日だ。巴には悪いが暫くは我慢してもらう。早速耐えきれそうにない行動が巴に出ちやつてるが頑張ってもらおう。

兎に角、今日は絶対に無闇に出来ない。

何故かというと——

本日、4月15日。

——巴の誕生日である。

◇◇◇

アタシの今日の予定は以下である。

午前中は病院で定期検診を受けて、そのまま昼頃には羽沢珈琲店で”Aftergr
ow”の誕生日会に参加。

本来、夜には旦那の蒼真と二人つきりで晩酌をする予定であったが、蒼真の仕事が長引くそうなのであまり宛には出来ない。

——はあ………今日がアタシの誕生日って分かってるのか………？

今朝の蒼真は特に何も言ってくれなかった。

来週にドームライブが迫り、忙しいとは分かっているが言葉の一つぐらい欲しかったのが本音。

時刻はもうお昼時。目の前には”close”と書かれた板が吊り下げされた扉が見える。

「あ、巴ちゃん！いらっしやいませ！」

羽沢珈琲店へ入ったアタシを迎えたのは看板娘として働いているつぐみであった。

結婚後も旦那と何度か訪れているので店内は見慣れているはずなのだが今日の雰囲気は全くもって違った。

綺麗に飾り付けをされた店内。今日が貸し切りになつてゐるならではの派手な飾り付け。これら全てが自分の為に用意されたとなると嬉しくなつてくる。

「こつちだよ〜」

ひまりの案内に付いていく。

店のカウンター席のその手前。テーブルが長方形に四つ並べて固めて置かれていた。

そのテーブルの中央に聳え立つのはホールケーキ。

そして、テーブルを囲むように座る三人の人影。

「おつ、来たよー!」

「ようやく主役のご登場ですか〜」

「久しぶり、巴」

ひまり。モカ。蘭。

かつての同じバンドメンバーが勢揃いしていた。全員が社会人の一員となつた今、こうして無事に全員がまた集合するのは珍しい。

アタシの場合はまだ主婦であるので、余裕はある方。だが、モカや蘭はそもそも地元を離れて仕事をしており、滅多な事では連絡すら寄越さない。

「久しぶり、皆。いつ以来だ？」

「うーん……半年ぶり？」

「私とモカとひまりは先週蘭ちゃんの誕生日で集まってるから、巴ちゃんだけ半年ぐらいかな？」

「あー蘭、行けなくてすまん」

「気にしてない。蒼真の地方ライブに付き合ってたんでしょ？そう言えば、巴、送ってくれたプレゼント届いたよ。ありがと」

「おきに召して良かったよ」

懐かしい思い出が一気に甦る。

期間が空けば空くほど、喋りたい話は積もっていくもの。今日、アタシ達の間で話題が尽きることはまずないだろう。

それにしても皆、大人びている。

アタシが見たのは高校生時代の面影を引き継ぎつつも社会人として成長して来た、彼女達の姿であった。

「はーい！一先ず、先に巴ちゃんの誕生日のお祝いをやるよー！」

「いえーい」

羽沢珈琲店ギリギリ看板娘のつぐみが仕切る。

「では私が代表して。復唱の方をお願いします……………こほん」
ひまりがわざとらしく一咳。

一応バンドのリーダーのひまりなりに責任を果たそうとしているのだ。

「巴！お誕生おめでとう!!」

そして、訪れる静寂。

「……………誰も続かない!?!」

◇

誕生日会。終盤。

「新婚生活はどんな感じ?」

ケーキも皆で仲良く食べ終えて、雑談へと入る雰囲気の中で聞いたひまりの視線が
巴へ行く。

「う〜ん……………今まで通りだな」

「それは同棲してた頃と同じってこと?」

蘭も会話に入る。

「おう。結婚したからって生活が激変するわけでもないからな」

「まさに夫婦円満ですかなく？」

「巴ちゃん、良いなあー」

モカのイヤらしい質問とつぐみの羨ましい視線が巴へ突き刺さる。

ここに居る巴を除いた四人は独身。唯一、つぐみがその噂があるものの他の三人は
まったく色沙汰がない。

「なら、夫婦円満の秘訣とかあるの!？」

「そう言われてもな……………」

「まあまあひまりちゃん、落ち着いて」

つぐみがひまりの元へ駆け寄る。

「それでトモちゃん、何かないのく？」

「モカまでもか……………特に何もしてないよ」

「キスとかは？」

「っ!？」

「バツサリ来るな……………まあ……………たまに？」

「「おおー!!」」

何故か起こる拍手。

蘭の真つ赤に染まつた頬が一際目立つ中、巴への追求は続く。

「じゃあ!じゃあさ!蒼真君の何処が好きなの!？」

「ご、ごめんね……………私にはもう抑えきれないかも……………」

ひまりの暴走は止まらない。

「ギャップ……………だな」

「なんと……………!!」

「ライブで観る蒼真は迫力があつて逞しさがあつて正直いつ見ても惚れ惚れするぐらい」

「あれ?今日の巴ちゃん、いつも以上にガンガン言ってる気が?」

「でも家に居る時の蒼真はホントに気が抜けていてほつとくと何をしでかすか分からないぐらい不安なことばっかして……………でも同時にそれが可愛くも思えてきて……………」

「これこそ姉御魂……………」

つぐみがこつそり呟く。

「巴!今日はとことん話して貰うからね!」

「マジか……………」

「ひまり、やるなら六時まで」

「蘭もか!？」

「こーう見えて蘭ちゃんも恋愛に興味が出てきたんだよねー」

「乙女な蘭、可愛い〜」

「……………うるさい、モカ」

本当に六時前まで誕生日会は続いた。

◇◇◇

山吹家。午後六時。

「おっ、お帰り」

アタシが玄関を通り、リビングへ繋がる扉を開けるとキッチンで何かの作業をてきぱきこなしている蒼真の姿があった。

鍵が掛かっていたのに人の気配がしていたので不思議に思っていたがまさか蒼真だとは思ってもみなかった。

「え？仕事はどうした？」

「あーそれね。終わった」

「終わった!?!」

「だって、今日は巴の誕生日やろ？切り上げてきたに決まってるよ」

「……………そ、そうか」

どうにか動揺しつつもイスへと座る。

蒼真がアタシの誕生日をちゃんと覚えていてくれた。そして、早めに帰ってきてくれた。

些細な事かもしれないが、アタシにとって嬉しい気持ち以外浮かんでこない。好きな人なら尚更だ。

「軽めのご飯だけど……………」

そう言って彼がテーブルに置いたのはシンプルに作れる料理。普段はアタシがキッチンに立つ身なので、蒼真の手料理は滅多にない。

「へえ〜上手に出来てるな」

「巴と一緒に暮らす前は自炊してたからな」

「……………もう五年か」

蒼真と同棲を始めたのは大学生生活の終わりに近い頃。プロデビューが近い彼の手助

けをしたくて、ついその頃のアタシは彼の家にお邪魔してそのまま定着してしまった。
「さてと、食べるか」

蒼真に促され、アタシはテーブルに置かれたコップを手取る。蒼真は飲み物を調達するために冷蔵庫へと向かう。

「何呑む？」

「今日は……そうだな、遠慮しとく」

「え？昼に呑んできたんじゃないやろ？自分の誕生日でもあるのに……珍しいな」

冷蔵庫から缶ビールを一つ取り出した蒼真はアタシの向かいに座った。

「んじゃ、巴の誕生日を祝って……乾杯」

「乾杯」

二人の空間にガラスの音が鳴り響いた。



おまけ。

「来年は二人でどっか行きたいね」

「……………」

「ん？巴？どした？」

「来年はあれだ……………二人では行けないな」

「え？」

蒼真が固まった。

完全に彼は勘違いしている。が、お陰で表情が凄いことに。面白いものが見れたと心の中に刻んでおく。

「来年はともかくこれからは三人で……………かな」

「それって……………マジか」

巴大人編—1—『誕生日』
終

あこ大人編―1― 『努力のファイナーレ』



とある飲食店。

「今日のライブ、お疲れ様！かんぱーい！」

リサの声を受け、五つのグラスが上がる。

かちん、と甲高い音が部屋いっぱいに広がっていく光景にリサはたまらず感動してしまった。

「皆、お疲れ様」

「お疲れ様です」

現在“Roselia”はライブ打ち上げの最中である。

「お疲れ様でしたあ!!」

「お疲れ様です……………」

つい数時間前まで彼女達はバンドの聖地とも称される武道館にいた。それも演者として。

ライブのチケットは完売。抽選形式であったが倍率は高く、入手が困難とされる程の

人気ぶりであった。

だけど、ここまでの道のりは苦難の連続。

高校で既に人気もあったRoseelia。それでもプロとして活動していくと公表すると途端に世間から様々な意見が出たのだ。やっていける、応援する物が大半であったが、中には批判的な物も少なくはない。

曰く、――

――ボーカルにメンバーが付いていけない。

――全て歌姫万歳バンド。

” 孤高の歌姫” 友希那の圧倒的存在感。

それがRoseeliaの魅力であり、弱点でもあった。友希那が目立つと他の担当メンバーは逆にそんな彼女に相応しいレベルでないといけない。

遥か上に行く友希那に追い付く。特に苦勞を重ねたのがドラム担当のあこ。最年少ということもあり、経験が一番低いあこはRoseeliaのドラマーとして認められるだけの努力をどれだけしたのか。

そして、ライバルバンドの存在もまた自分達を奮闘させられた理由の一つとしてあるがそれはまた別の話。

グラスを片手にリサはあこの元へ。

「あこく、今日のドラマ良かったよ！」

「本当ですか？」

「ええ。リサの言う通りね、あこ。特にソロが決まってたわ」

「友希那さあくん!!ありがとうございます!!」

「この武道館ライブを通して、完全にあこは世間一般から Roselia のドラマーとして認められていた。」

他にもリサに紗夜に燐子。全員がこうして今までの試練を力を合わせて乗り越えてきたのだ。ただ事では壊れない絆が Roselia にはある。

「それですが、宇田川さん」

「はい? どうしました?」

「一曲目で早速もたつきましたね」

「ぐっ…………ごめんなさい」

容赦なく反省点を指摘してしまう紗夜とうち浸れるあこの光景に絆は本当にあるんだよね? とリサは思った。

「わ、私もあこちゃんのドラマは今日が一番しつくり来たと思うよ……………」

「りんりん〜!!」

「えっ、あこちゃん!?!」

燐子の胸元へ飛び付くあこ。

デビュー当初はガヤガヤして嫌な雰囲気であったがこうして賑やかな打ち上げが出来ているので結果オーライ、全て良し。

「にしても遅いわね」

「ええ、確かに。すぐに合流すると聞いていたのですが」

友希那と紗夜がさりげに店の入り口を気にし始める。

打ち上げに参加するのはこれで全員ではないのだ。予め遅れると連絡があったので Roselia 組は一足先に開始している。

と、リサの視線はあこの表情へ。頬を少し赤らめ、視線を下にキョロキョロするその姿は完全に恋する乙女だ。

「あくこくく?もしかして待ちきれない?」

「そそそそんなこと無いですよ!」

「あこちゃん、それじゃあ説得力ないよ……………」

自分がその立場だとそわそわしてしまう気持ちは分からないこともないとりサは同情するが、からかうとなると話は別だ。

日頃のイチャイチャを見せつけられている鬱憤を晴らす時である。

——その時、貸し切りの個室の扉が開く。

「お待たせだぜ!!」

まず現れたのはアークラのボーカリスト。

彼の背後には同じくアークラのギタリストとベーシストの姿があった。

「アークラも今日はお疲れ〜」

今日のライブの前座をしてくれたのは他でもない”アークラ”の皆であった。

当日まで前座の詳細は不明とあつたにも関わらず、アークラが登場すると会場は一気に熱狂の渦へと巻き込まれた、あの光景はもはや圧巻の一言に尽きる、トリサは後に語る。

——アークラとRoselia。

二つのバンドの関係は一言では語り尽くせないだろう。密接的に、そして運命的な関係で成り立っていると言つても過言ではない。

「あれ?」

あこがアークラを一瞥して疑問を上げる。

「蒼真君は?」

「ああ。蒼真なら用事がまだあつて遅れてくるつてよ」

「っ?!……………がーん」

「よしよし……………」

燐子が落ち込むあこの背中を擦る。

リサは知っていた。あこがアークラのドラム担当「山吹蒼真」に今日のライブでの頑張りぶりを誉めて貰おうとしていたことを。あわよくば、彼に甘えてしまおうと企んでいたことを。

何故かって？ 答えは簡単。自分の好きな人には誉めてもらいたいものだからだ。あここと蒼真はそういう関係である。

「んじゃあ、もう一回乾杯行くよ!!」

追加で来た三人も空いてる席に各々腰を下ろして、グラスを全員持つ。

——蒼真抜きのリブ打ち上げが始まった。

◇◇◇

30分後。

「お待ちせし——」

彼が来た。

その瞬間に動く影が一つ。勿論、あこ。

「蒼真君っ!!」

「ぐはっ!?!」

扉を開けたと同時に蒼真を襲ったのは腹部への衝撃。どうかそれを堪えると、突進してきたあこが両手を背中に回して抱きついていった。

困り顔の蒼真。軽く周りに視線で助けを求めると、前提として誰も顔をそちらへ向けてはいないという蒼真にとって最悪の状況であった。

頼みの綱の燐子は藍斗と会話してる。専ら、ゲーム歓談に違いない。

「ど、どうした? あこ?」

「あこ、頑張ったよ」

「お前なあ……もう二十歳すぎたらろ」

成人へとなったあこは飲酒もしている。今もあこの座るテーブルにはお酒らしきグラスが。

因みにあこはお酒に強い体質だ。少なくともこのメンバーの中では一位、二位の程に酒への耐性がある。

「ソウ」

「姬ちゃん、どうにかしてくれへんかな？これ」

腰にがつつり抱き付くあこ。

蒼真は珍しく酔ってるのかと考えたが、あこの耳が赤く染まっていたのでわざと照れながらもやっていると分かった。

「姬ちゃん——友希那はちらりとあこへ視線を向け、呆れたように首を横に振る。

「無理ね。大人しくされるがままになっておきなさい」

「……………マジかあ」

十中八九、友希那があこの暴走を制止すると見越していた蒼真にとってこの彼女の発言は痛手であった。

飲み会に遅れたとは言え、蒼真はライブを終えてからまだご飯を口にしていない。とても腹が減っていた。

そこに旨そうな料理が。手に届く距離にあるのにあこがそれを止める。

「……………ところで、準備は出来てるの？」

「……………余計な時間喰ったけど何とか」

「そ。私達は何も出来ないから」

友希那の内緒話に蒼真も合わせる。

微かに聞こえる会話。中身が聞き取れないことにあこが反応して顔を上げる。

「蒼真君？友希那さん？」

「何でもないのよ、あこ。私、飲み物取ってきてるわ」

変に硬い友希那に蒼真の不安が増える。

孤高の姫様でも、どうやら芝居は下手なようだ。

流石に変に感じたのか、あこは首を少し傾けるが特にそれ以上の動きは見せない。

「あつ、忘れもんした」

「そんなこと言つて。あこ、絶対に離れないよ」

「なら、あこも来るか？」

「え？」

こここでようやく拘束が解けた。

黙つて抜けるわけには行かず、友希那は席を外しているので蒼真は真つ先に視界に入つた誰かに声をかけることに。

「リサ、あこ借りるな」

「ん？好きにどうぞ。あ、その前にちよつとだけ。あこ、こつちにおいで」
「なーに？」

リサの元へ駆け寄つたあこ。

あこの耳元にリサは口を近づけるとそつと呟く。

「……………ガンバってね」

「うん？どうゆうこと？」

「後で分かるから、ほら！つと！」

意図も分からず、悩むあこにリサは彼女の背中をバン！と力強く叩く。

「うわあ!？」

「あこ、置いてくぞ」

「あつ、うん、分かった!!またね!!リサ姉!!」

「行つてらっしやうい」

——この時、あこは気付いていない。

蒼真、あこ以外の全員が二人の出ていく姿を各々違えど微笑ましく見ていたことに。



武道館。

「蒼真君? どうして此処に? 忘れ物って?」

誰もいない観客席。静寂が包むその空間にあこは居た。

頭上の窓から月明かりが入る。儚く幻想的な景色にあこは謎の緊張感を感じる。

階段上に設置された席。その間の通路を彼は黙々と降りていく。あこの質問に何も答えなかった。

「……………ふう」

やがて彼はゆっくりと中央へと向かう。

あこの視線に目立って移るのはダイヤモンド型に設置されたステージ。

このステージであこはつい数時間前までドラマを叩いていた。真つ暗闇に照らされた何千もの光。それらが視界いっぱい広がる神秘の光景をあこは脳裏に浮かべた。

「あつという間やったな」

「う、うん」

「あこはさ、これからどうしたい?」

「え？ど、どうって？あ、待って！」

あこの返答も待たず、蒼真は数歩進む。

「アークラもRoseliaも昔以上に人気が出てきて、お互い忙しくやってしまったやろ」

「あつ……………そつちの話……………うん」

「来月から俺は全国ツアーで暫くあことは会えない日々が続く」

それはあこにとって承知の情報であった。

だからこそ、今日は存分に彼に甘えたいと気持ちが高まったのだ。

「これはまだ非公開放やけど、それが終わると俺、海外にライブしに行くことになった。半年ぐらい」

「か、海外……………？それって……………これまでよりも蒼真君と会えないってこと……………？」

「そうなるね」

「そんなの……………やだよ」

あこにその知らせは死活問題。

愛しの彼が海を越えてしまう。自分も追いかけていたがRoseliaという居場所も掛け替えのない大切な場所だ。どちらかなんて選べない。

あこは蒼真が大好き。たまに彼にお子様扱いされるのが癪だったけど、高校生で怒濤

の成長期を迎えたあこは大人の色気を身に付けているので最近はなくなつた。

だが肝心の言動は昔と変わらず。彼にそれほど、大人の色気浴びせ効果がなかつたのが少し不満ではあるけど。

彼のドラムを叩くカッコいい姿が好き。なんだかんだ言つて結局は優しくあこの頭を撫でてくれるのが好き。あこのややこしい中二病発言にも付き合つてるのが好き。

——好きになつた切つ掛けはもう覚えていない。

「イヤだよ!!……あこ、蒼真君にドラムを見てほしくて……一緒に居たくて……
Roseliaの皆と頑張つて来たのに……それなのに蒼真君は遠くに行つちやう
んだ……」

「ああ」

——隠していた気持ち爆発。

あこはじつと我慢していた。他の女性達と仕事を優先するとは言え関係を築いていく蒼真につい嫉妬してしまつたり、折角の二人きりに蒼真が何も相手をしてくれないことに葛藤を覚えたり。

最悪の果てには彼はあこを愛していない、なんて嘘な感情も心の中で芽生えたりした。

それでもどうにか二人は協力しあつて、話し合つて、ぶつかりあつて、それらを乗り

越えて来て、やがてはラブラブなカップルと変わらない生活を続けていた。

両者のファンからも祝福の声を数多く貰った時は感極まりない何かにあこがどつと心を打たれたこともあった。

「だからさ……少し早いけど」

そして、彼は小さな箱を懐から取り出す。

あこは見ただけでそれが何なのか分かってしまった。たまらず涙腺が緩み、口元を隠してしまう。

そつと彼は箱を開けた。

——指輪だった。

片膝を着いた蒼真。

武道館中央のダイヤモンドステージ。そのさらにと真ん中に二人はいる。

あこは理解が追いつかない。ただ目に写るのは彼の覚悟を決めた瞳と純粋に輝く指輪だけ。

「どんなに離れていても俺はあこが大切で、あこを愛してるという事は変わらない。君を愛するこの気持ちに嘘偽りは無い。もし、あこが良ければ、その証としてこれを受け取って欲しい」

この時、あこは涙が止まらなかった。

「宇田川あこ。私、山吹蒼真と……………」

”嬉しい”。その一言すら迪々しい。

「——結婚してください」

「……………はいっ!!」

——努力が実った瞬間だった。

大人あこ編——1——『努力のフィナーレ』 終

あこ大人編—2—『会見のマーチ』



蒼真とあこの家。

「本当に構わんのか？あこ」

俺は彼女に問う。

テーブルの席に座り、そつとお腹を撫でた彼女は小さく頷いた。

「うん。ロゼリアの皆からもちやんと了承は貰ったよ」

「なら、良かった」

「でも…………蒼真君のバンドの方があこにとっては迷惑なんじゃ…………」

「前にも言ったやん。元からその予定はあったんやって。時期が少し早まっただけ。あ

こが気にすることじゃない」

「うん…………」

あこはまだ納得した様子ではない。

「なら、あこはその分をそのお腹の子の為に費やしてくれ。俺とあこの愛の結晶やろ？」

「…………分かった。頑張る」

「不安になったら、俺がいつでも側についてやる。二人で一緒に頑張ろうな」

「うん。愛してるよ、蒼真君」

「……………俺も」

そして、彼女の額に軽くキスをした。



『アークラ、活動休止!?!』

前代未聞の一報に世間はざわめく。

大人気ロックバンドの第一前線を優雅に躍り出るバンドが急遽発表したのだ。

そして、また別に——

『Roseliaのドラム担当、あこが産休に入る!!』

油に火を注ぐ勢いで。

加えて、同タイミングでガールズロックバンドのドラマーの報告。

そして――

「では、今から記者会見を行います」

とある会場により。

正確な情報の提示を行う為に急遽、記者会見を開いた。

全体の進行を担当する人がアナウンス。

そして、カメラに人が埋め尽くす前に姿を見せたのは二人のミュージシャン。

―― ”アークラ” の ”山吹蒼真”。

―― ”Roselia” の ”湊友希那”。

二人は並んで一礼。席に座る。

友希那に視線を送りつつも頷いた蒼真はテーブルに置かれたマイクを手に取り立ち上がった。

「バンド”アークラ”のドラムを担当しています、山吹蒼真です。この度はいきなりの活動休止を発表し、ファンの皆さんを筆頭にご混乱を招いた事、お詫び申し上げます」
友希那も立ち上がる。

蒼真からマイクを貰った彼女はゆっくりと口を開く。

「加えて、Roseliaのメンバーの一人”宇田川あこ”も暫くの間、産休を理由に活

動を控えさせて貰う事を発表させて貰いました。困惑させてしまったファンの皆様、関係者各位、急なご報告となった事、謝罪致します」

二人は着席。

ここからこと細やかに情報の開示となるのだが如何せん今回は二つの会見が同時進行となつている。

一から全部を話すとすると、それはもうややこしい。

「と言いつつ、折角やし質問形式でも有りやな。それで構わんかな？ 姫さん」

「ええ、問題無いわ」

一見、正式な会見かと思いきや。

会場にいるメディアの大半が蒼真、友希那もしくはバンドメンバーと関わりを持つ者。

ちよつとぐらい緩んでも笑つて誤魔化せるぐらい、ふんわりした会見なのだ。

「では、質問のある方は挙手をお願い致します」

多くの手が上げられる。

蒼真は適当に当ててくれと指示を送り、進行担当は一人の男性を当てた。

「先程言われました二つの発表に關しまして、関係性はどのようにありますのでしょうか？」

「ふむ……………まあ順番に話すか」

「まずは私から。質問の答えとして、そうね。結論から言えば大有り。事の初めは……………あこが妊娠したことかしら？」

あこと蒼真が恋人関係。

それは既に世間に承知の事実なので、あこの妊娠はむしろ大歓迎される程に喜ばしい。

「ライブ等は特に問題なくこなしてきた彼女だけど、最近になってそろそろ活動に限界が来るようになってしまったわ。そうなれば、あこには休んで貰うしか選択肢がないよ」

「やけど、Roseliaにはこれからもライブの予定がたくさん有り。しかも、どれも無下にはキャンセル出来ないよね」

「そうよ……………有りがたいことに」

「んでだ。あこにはゆつくりと産休に入るのは決定として、その空いた穴をどうするか問題となり、解決策として——」

会場が沈黙に包まれる。

「俺が入る事になった。責任を夫が取れと言わんばかりにね」

「当たり前よ。元はと言えば、貴方があこをタブラからこうなってしまうのだか

ら」

「めっちゃ言い方に棘ありますやん……まあ俺も勿論アークラでのライブがあるからして。でも、奇跡的にあこの代役として Rose lia のライブに出ることは実現不可能ではなかった。日頃からあこに Rose lia の曲は聴かされていたから、曲の暗記もほぼ完了済みやったし」

「ソウの他にあと肩を並べられるドラマーは存在しないと私は考えている。もし彼が承諾していなければ、実質私達も活動休止となっていたかもしれないわね」

「そうなたっちゃやうとあこが罪悪感で悲しんじゃうんだよな……」

「自業自得じゃないかしら？」

「ノーコメントで」

質問権は次の者に託される。

「と、なればアークラも活動休止まで急ぐ必要はなかったのでは？」

「確かに。俺の忙しさを無視すればの話やけど。そもそもアークラの活動休止の件についてはメンバーの中でも話題に上がっていたから、反対意見は特になかったな」

「詳しくお願いします」

「勿論。最近、アークラのメンバー達はライブ以外にも活動や仕事が多くなってきた。

藍斗は俳優業、ルーズは芸能活動、光はプロデューズ、と言った風に。」

四人で鍋を囲いつつ話し合った結果、時期を見てはライブ活動に一旦幕を引こうって形で落ち着いた」

「落ち着いた所で悪いけど、ソウにはあこの分も働いて貰うのよ」

「つてな感じで R o s e l i a からサポートの話が舞い込んできてな。丁度良いからアークラは活動休止にして個人活動に専念しようかってなった。以上」

「あ、ありがとうございます……」

質問した記者は着席する。

と、また別の者が立ち上がった。

「活動再開の目処はあるのでしょうか？」

「そうやね。取り敢えずはウチの嫁が無事に出産を終えるまでかな。そこから子育てに時間は盗られると思うけど、頃合いを見てライブをしていきたいと考えてる」

「私達も基本的には同じよ。今あるライブが終わり次第、R o s e l i a も活動を控えるめになると思うけど、あくまでそれはあこがちゃんと戻るまでの話。頂点を五人で目指す。R o s e l i a の目標はそれだけよ」

「お二方………お時間が来ました」

「え? もう?」

「本当みたいね」

「なら、締めに……今回は個人的な事情により、関係者やファンの方々に多大なるご迷惑をお掛けしたこと、申し訳ございません。ですが、ご理解頂きたい。あくまで、自分達が次のステージに進む為の選択に過ぎないことを」

そして――

「私達もまた今回の件は次なるステージへ歩む為に必要なステップの一つだと考えてるわ。栄誉ある頂点を目指し続ける、この熱い思いだけはきつと未来永劫……消えさせはしない」

◇◇◇

会見後。帰宅。

「ただいま〜」

我が家の玄関をくぐる。

今日も一日存分に働いてもらった靴を脱いでると、バタバタと慌ただしい物音がリビングの方から聞こえる。

出迎えに姿を見せたのはあこだった。

「お帰り！蒼真君！」

エプロン姿。料理の途中だったようだ。

確かにうつすらとだが香ばしい香りが鼻孔をくすぐる。

これは肉じゃが、だろうか。

「テレビ見てたよ。案外、どうにかなるもんだね！」

「いや、そうやけどさ。あこもまた今度にでもちゃんと挨拶回りしとけよ」

「うん、分かってる。分かってるから、今はほら！」

髪をのけ、額をくいと上げる。

目をつぶったあこは何かを求めるかのように静かに時を待つ。

——いつものアレね。

俺はそつと近づき――

「いったあゝい!!」

デコピン、発射。

「てか、あこ。俺、前にも言ったよな? 料理関連は暫く禁止つて。その格好、現在進行形でやってるよな?」

「あつ………で、でも! ただ待つてるだけじゃ蒼真君に悪いし………」

「今はあこの体の健康が第一。無理な負担にならないように大人しくしとけ」

「むう〜」

あこはお腹に生命を蓄えている。

出産予定日も徐々に近付いてきた現在、体調不良等で倒れでもしたら………そんな心配が日々尽きない。

でも、あこは性格上じつと出来ない。

こんな風に隙有らばすぐ動こうとする。気持ちは嬉しいが、この先も続いていくとなると、気持ちが悪いやられる。

「そう言えば、お姉ちゃんが来てるよ」

「ん? なんや。巴も来とるんか」

妹の手助けに姉はよく家に来る。

社会人の奴隷と化した巴に自身の恋ばなは無縁の存在らしい。その証拠に最近はずっと家に入り浸る日々が続いている。

巴の関心はむしろ、産まれてくる赤ちゃんだ。服や玩具を既に完備するぐらい、一番赤ちゃんの誕生を楽しみにしてる。

ちよつとは男付き合いの助言もしてやられねば。

——バチン。

「痛つたい!?なんで!?!」

「だとしたら余計、その格好駄目やん。巴が来たのは晩飯を作りに来るためやのにそれをあこが奪うのは不味い」

「はっ!!……………初めての失敗料理とかけて、ご馳走しに来たのに妊婦にその座を盗られた姉とかけます。その心は……………どちらも不味い!!」

「(うら)」

「ぐへえ!?!……………おでこが痛いよお」

「余計なこと言つとる場合か。そうやな……………今はこれぐらいで我慢しとけ」

「へへへ。蒼真君の撫で撫でだ」

優しくあこの頭を撫でる。

本来の目的は不達成なのだが本人的には大満足らしく、ニヤニヤとしている。

飴には鞭を。もう一発デコピンしてやろうかと思ったが、このあこの元気の貰える笑顔には勝てない。

と、気付けばリビングに繋がる廊下の扉から人影がちらつと「……………あの二人、いつまで玄関でイチヤつくつもりなんだ？」

巴の視線が少し痛い。

大人あこ編―2―『会見のマーチ』終

花音大人編—1—『Misunderstanding』

◇◇◇

羽沢珈琲店。

「蒼真君が構ってくれない……………ね」

溜め息を吐いた千聖。

芸能活動も波に乗り、毎日が忙しい中での折角の休日。初めは家でのんびり過ごそうかと考えていた千聖だったが、親友からの連絡を受けて、此処、羽沢珈琲店にいた。

約束通りの時間帯に親友さんは現れ、建前を全てふっ飛ばしてのいきなり本題に入ったらこれだ。

「ほ、本当に困ってるんだから!!」

「でもね?花音、私にそれを相談するのはちよつと違うと思わない?」

「どうして?」

「ど、どうしてって……………」

相談相手・松原花音の疑惑の視線が千聖へと迷いなく突き刺さる。

花音によろやく彼氏が出来て、大人の道へ一歩ずつ確実に成長したと思っていたがこ

ういう所は未だに変わらないと千聖は結論付けた。

「……………まあいいわ。で、さっきのはどうということよ?」

「それが……………蒼真君が最近、全然私と会ってくれなくて……………」

「あ、そう」

「千聖ちゃん!?!」

花音の相談内容は正直、芸能界一筋の千聖にとつて微塵も興味がない話題ではあった。花音で無ければ、即座に蹴っていたことだろう。

「そんなこと言われてもね?花音と蒼真君、二人だけの間の問題に私が関与出来るわけがないじゃない」

「そ、そんな事……………ないよ?」

「はあ……………」

「お願い!!千聖ちゃんだけが頼りだから!!」

千聖の中で何かが引つ掛かる。

「もしかして……………他の人にも相談したの?」

「あ……………う、うん……………彩ちゃんとか……………」

「……………だからなのね」

「どうしたの?」

「ううん、こっちの話よ」

数日前に気味が悪いほど彩がニヤニヤしていた日があり、不思議に思っていた千聖だったが此所で原因が判明した。

十中八九、彩は相談を受ける建前として、本音で花音と蒼真、二人のイチャイチャ話を聞きまくったに違いない。

「彩ちゃんはどう答えたの？」

「当たって砕けろって………どういう意味か、分かるかな？千聖ちゃん」

「え、ええ………」

花音の相談事が最後の自分に回ってきた理由を悟った。花音の人選チョイスにも多少、理由が含まれる事だけは確かである。

これはもう答えるまで逃れられない、と諦めた千聖は仕方ない、そう花音の幸せの為に仕方がないのだと心に言い聞かせる。

「要はあれね。蒼真君に相手をしてほしい………つまり、思う存分に甘えても良い許可的な何かか欲しいのね？」

「う、うん………そこまで言ったかな………？」

「蒼真君がここまで彼女さんを放っておく理由は分からないけど………そうね。私がぱっとすぐに思い付く原因は——」

花音が息をそつと飲む。

「そもそも仕事が忙しい」

「た、確かに……………」

蒼真は現在、プロのドラマーとして全国の会場でライブを繰り広げている。加えて、バンドの作曲も同時進行でしている。その仕事量は計り知れない。

「次に蒼真君の性格上、花音から自然と甘えてほしいのかもしれないわね」

「は、恥ずかしいよ」

「何年付き合ってるのよ、あなた達。いい加減慣れなさい」

「千聖ちゃんが厳しい……………」

ぼそつとした呟きが聞こえてくる。でも、我慢だ。

千聖でも何となく分かるが、蒼真は音楽には積極的だが恋愛となると消極的になってしまう性格のはず。

そして、花音の恥ずかしがり屋。言わずとも常に奥手な花音はつい押されると黙ってしまう。とは言え、蒼真と恋人の関係になったみたいにする時にはやる女の子だ。

二人の性格が重なりあうとすれ違いも出てくるだろう。

「そして、これは殆んど無い可能性だけど……………蒼真君が花音に飽きてしまったパターン」

「ふええ……………」

花音に渾身のダメージが入る。

「何も変なことじゃない。世間のカップルによくあるマンネリ化つて現象ね」

「千聖ちゃん、詳しいね……………」

「……………そんなこと無いわよ」

花音の指摘に頬を赤く染める千聖。

「こういう細かい所にも目をつける花音の観察眼には頭が上がらない。」

「兎に角！ 普段の貴方じゃない貴方を蒼真君に見せつけるのよ！ それで万事解決」

「どうい……………」

「蒼真君をメロメロにしたいのでしょ？」

「メロメロ……………っ!？」

「私に任せてくれれば、きっと大丈夫。心配しないで、花音。私も女優なのよ。好きな男のハートを掴む極意ぐらいい……………ね？」

「ん!? ん—!!」

ぶんぶん、と首を振る花音。

だがしかし。スイッチが入ってしまうと制御できない幼馴染みを花音は知っている。寧ろ、花音のこの行動は千聖の魂に火を付けてしまうのではないか。

無慈悲にも花音のその予感当たること。

「やるの？やらないの？」

ドン！と眼前に迫る千聖。

花音の思考が渦を巻く。蒼真と今まで以上の深い関係を目指すか。それとも、このまま少し彼と離れたままの生活に満足するのか。

「蒼真君のこと……好きでしょ？」

—— 答えはすぐに決まった。

「……………や、やります」



蒼真の家。玄関。

「お、お帰り……………なさい」

家に帰ると彼女がいた。非日常の光景だ。

普段の彼女は実家暮らし。そして俺は一人暮らし。でも、彼女から料理等の家事で世話を焼きたいと懇願された、かつ俺の帰宅に毎回合わせるのも面倒なので以前に合鍵を渡したこともある。

なので、まだ彼女・松原花音が俺の帰宅を出迎えてくれるのは納得できる。むしろ、他の男には味わえない彼女の魅力を独り占め出来るのだ。最悪、天に昇天してしまうレベル。

「そ、蒼真君……………!!」

「あ、ああ……………花音、ただいま」

「ただいま!?……………ふわああ……………」

どうにか口にすると、花音も顔を真っ赤にしてしまい、互いに言葉が出なくなってしまう。

仕掛ける側と仕掛けられた側、両方の思考が混乱してしまうという、第三者視点では全くもって意味不明な状況に陥る。

「(っ、(っ)飯にしますっ?」

と、花音が再び仕掛けてくる。

「お、お、お、お風呂にしますっ?」

呂律が崩壊しているぐらい緊張するのなら、わざわざやらなくても。

黙って聞いていた俺の感想はそんな感じ。

「それとも……………」

まあ定番の展開だろう。

無論、この後の台詞を男である俺は知っている。だが、俺からそれを誘うのはまた話が違うからして、どうすべきか。

完全にオーバーヒートした様子の花音。ぶしゅー、と頭上から大量の水蒸気が出てしまいそうな勢い。

「てか、花音さん」

「ふえ!?ど、どうしたの!?!」

呼ぶと凄じ慌てた様子で返された。

何を勘違いしたのかは知らないが、俺が呼んだ理由は其処まで重大な事でもない。

「その髪型……………どした?」

「あ、これ?たまには気分転換で変えようかなって……………」

ツインテールだ。

何時もはサイドテールって髪型で固定していた花音が兎のように高めで髪を二つに括っていた。控えめに言うのと天使だ。

追撃のように、花音は私服姿にエプロンを付けているのもまたポイントが高い。

以上の観点より、保護欲が爆発しそう。いや、する。

「可愛いね」

「ふえ!?!……………ありがとうございます」

萎縮してどんどん縮こまる花音。

「んじゃ、俺は荷物置いてくるから」

これ以上はなんか不味い。

俺はそんな予感がして、とつとつその場を切り上げた。

「あつ……………」



蒼真の部屋。

「……………作業が進まん」

ヘッドホンを耳から外す。

どうも作曲に意識が集中しない。最近は特に進みが悪いが今日は何れでも最低ランクの進行具合だ。

おおよその原因は分かる。花音だ。

さつきまで彼女の手作り料理を堪能しており、のんびりとした食事風景であったが、その前のあれのインパクトが強すぎて脳裏からこびりついて離れない。

俺の彼女があそこまで大胆に出るなんて珍しい。ここのところ、二人の時間が取れない自覚があったものの、花音にとってそれほど重症になっていたとは。

——もう言ってしまうえば早いかな。

「蒼真君」

声がして、ぱつと俺は振り向いた。

扉を開けたのは花音。風呂上がりなので、まだ髪全体が湿っており、ポカポカと暖気が全身から漏れている。

パジャマを着ているものの、夏場の今ではかなりそれも薄い。本人に悪気が無いとは言え、かなり危ない。

「どうしたん?」

「えっと……特には……」

「そ。なら、俺も風呂に行つてくるわ」

「その、あのね？ちよつと話良いかな……………」

「ん？」

花音に呼び止められ、俺はその足を止める。

「蒼真君……………浮気してない？」

「え？」

——俺が浮気？誰と？

仕事の関係上、女性とはよく知り合いになる。が、共通してプライベートの連絡先は教えていないし、それを知つてる人は花音とも友達の間係を持つ人が大抵である。

花音は視線を逸らして、ぼそつと呟く。

「最近全然会つてくれないから……………私に内緒で誰かと会つてるんじゃないかって

……………」

「……………」

「蒼真君のことだから、私の勘違いかもしれない……………でも、やっぱり私、嫌われちゃつたかもつて不安で何も考えられなくて……………」

「だから今日はあんな事を？」

「……………うん」

小さく頷いた花音。

「はあ……………もういいや」

俺は溜め息を吐いた。

内緒にして、サプライズしようと思っていたが彼女を不安にさせてしまう逆効果をもたらすのなら即座に中止だ。

俺は俯いた花音の頭を荒々しく撫で始める。

「そ、蒼真君!」

「俺がここ一ヶ月忙しいのは仕事の休みを纏めて貰うためであつて、他意はないから」
「休み?」

「ああ。この前にふと思つたんやけど、俺ら二人で旅行に行つたこと無かつたやろ?」

「そうかな?」

「日帰りはあるけど……………泊まり掛は……………ね?」

「え?なら……………帰りが遅いのも……………」

「休みを空けたせいなのか、スケジュールの調整の余波が一気に来ててな? 怒涛に忙しくなつた」

「ふええ……………」

花音の肩の力が抜けた。だいぶ不安になってしまつたらしく、もはや涙目になりつつ

ある花音を俺は優しく抱き締める。

——ついにそれが止めとなってしまった。

「良かったつくろ!!蒼真君のバカあ!!ややくしいよ!!」

「それはすまんつて。ああ!?!折角、花音、風呂入ったのに」

「知らないもん」

「ありやま………よしよし」

小さなズレ。

それはどんな深い関係にあらうと生じる絶対的な物。家族であらうと、恋人同士であらうと。

だけど、脅える必要はない。

人は正直に打ち明けたら良い。あくまで俺は俺、彼女は彼女のままであり、他人の気持ちや完全に読み取るのは不可能。

恐怖も多少ある。嫌われたら立ち直れない。それでも、言わない後悔をするのは何よりも後悔だし、それに最大の理由は俺の目の前にある。

「ふふーん♪」

——彼女の笑う姿だけでも見ていたい。

「んで、何処に行ってみる?」

「うくん……………今は蒼真君に甘えたいかな」

「よし……………なら、今はドライヤーで髪乾かそうか？」

「うん」

花音大人編——『Misunderstanding』 終

麻弥大人編—1—『ライブ報告』

◇◇◇

ライブ会場。

「ありがとー!!!」

彩の精一杯の感謝の言葉に、観客の何万人が答えようとして手持ちのライト棒をピンクに照らして振り続ける。

それにより、真つ暗に浮かび上がるピンクの光はまるで絨毯の如く会場を埋め尽くす。

「また会おうな!!」

そして彩の隣に立つ藍斗の声はマイクを伝わり、会場一体に響き渡る。やがて、わーと大音量の歓声が返ってくる。

年齢や出身に性別。全てが同じではない人達が集まっている此処ではそれらは無関係と変わる。

心は一つとなっていた。

——”Pasttle*Palette”vs”アークラ”。

12月25日。会場、東京ドーム。

クリスマスに開催されたこのライブは今では音楽界トップを走り抜ける二つの人気バンドによる対バンであった。

普通の対バンとはうって変わって、ステージは二ヶ所設置されており、本番では二、三曲ずつ曲を交代で披露されたというガチの対決形式。

予定されたプログラムも無事に全てが終了。現在の会場では演奏を全力でやり遂げたパスパレ、アークラのメンバー達に向けた終わらない拍手や歓声が轟いていた。

「ありがとうー!!」

「また来るからあー!!」

「彩ちゃーん!!」

興奮が押さえきれない。全てを吐き出すかのごとく叫び続ける人も多く見られた。

パスパレ側のステージで手を振っていた彩もやがて手を下ろし、深く頭を下げて一礼。

他のメンバーも全てステージから降りており、隣にいたアークラメンバー最後の藍斗も既にステージ裏へと歩みを進めていた。

「ありがとう……皆あ……」

頭を上げた。涙声になりながもはつきりと彩は口にする。

そして彩はステージを後にする。

最高の演奏を魅せてくれたステージが今ではやり遂げたお陰か置かれている楽器も誇らしげに見える。

——…アンコール!!アンコール!!

ふと始まった。

一体何処から。そんな疑問は余所に、心は一つとなった皆がすることは最早決まっていた。

『アンコール!!アンコール!!アンコール!!アンコール!!アンコール!!』

初めは小さな声。徐々に、徐々に周りの人々が一緒になって声を出していく。数秒もすれば、怒濤の音量へと変貌する。

誰もが、望んでいた。これで終われないと心が叫んでいた。

——刹那、全ての光が消えた。

アンコールの声が一気に鎮まる。

何かが始まる。そんな予感がして、うずうずしてしまふ。

観客の期待を答えるかのようにスポットライトがある場所を照らし出す。

一つはパスパレステージのある上手。

一つはアークラステージのある下手。

二つのスポットライトはゆっくりと動き出す。目指すは二つのステージが交わる中央部分。日菜とアークラのギターがソロの時に立ってギターを弾いた場所。

スポットライトに照らされながら、姿を現したのは他でもない今回のライブで最大のキーパーソンでもある二人のミュージシャン。

「山吹蒼真」と大和麻弥。

蒼真は目の前の麻弥を見て、そつと微笑む。ライブをやり遂げた二人はくたくた疲労困憊になっており、汗びっしょり。

控えて着替えてきたとは言え、まだまだ熱気や興奮は収まることを知らない。

「いよいよやね、麻弥」

「そうですね、蒼真さん」

そして、二人は自然とその手を繋ぐ。

蒼真は会場で販売されるシャツを着ていた。麻弥もまた彼とは別タイプのシャツを着ている。

二人が目にしたのはまるで浮島の如く会場のど真ん中に設置されている特設ステージ。ライブの途中にあるアコースティック演奏でも使われた。

その時に使われた機材は長年お世話になったスタッフによって撤去されており、特設ステージには何も無い。

二人は特設ステージに向けて、ステージ同士を繋ぐ通路へと一緒に足をつけた。

「おめでとおー!!」

「羨ましいぞおー!!」

「麻弥ちゃん、綺麗だよおー!!」

男性陣からは嫉妬を含む雄叫び。女性陣からは祝いの言葉を授かりながらも二人は歩みを進める。

二人だけが出てきた理由はある物を見ればすぐに分かる。

——左薬指にあるお揃いの指輪が光った。

特設ステージへと着いた二人。

マイクスタンド一つが其処には置かれていた。何ともあつさりしたものだ。

「あーあー。出とう?」

蒼真がマイクを空いていた手に取る。

観客の反応でしっかりマイクの音声が届いていると確認した蒼真はゆっくりと喋り始める。

「さて……………今日と言う日を迎えられる俺は大変嬉しい……………この一言に尽きます。今までもこう……………胸に来るライブは何度かあったんやけど、ここまで辛く、そして嬉しいライブが出来たのは初めてのことでした」

ぎゅつ、と強く握られる手。

隣を見てみると、眼鏡をかけていない麻弥が優しく見守ってくれていた。

「今日のライブでは今まで培った全てを出しきり、最高の時間を味わわせてもらいました。それも含めて、俺が此処にこうして立てているのは応援してくれるお前らがいてくれたお陰であり、そして………」

会場は無音に包まれた。

「麻弥がいたからです」

……それは爆発であつた。

蒼真の言葉を切つ掛けに外へ放たれたのは祝いの言葉達。何万と言う数のそれが蒼真、そして麻弥の耳へと届く。

「実は出会った当初の俺はさ、麻弥を勝手にライバルとして接してきたんよ。それがこうして見れば、今、俺と生涯一緒に歩んでくれることになるとは………人生分かんもんやな」

ひゅーと誰かが囃し立てる。

「でも、これだけは言える。将来の全てを使つてでも、全人類を敵に回してもさえ、俺は麻弥を最後のその日まで守りきり、泣かせたりはせず、幸せにしてみせる。そして——一人の女性として麻弥を未来永劫愛する、と」

蒼真の決意を嘲笑う者などここにはいない。

全員が二人の味方であった。

「麻弥もなんか喋る？」

「え？ええつと……………そ、そうですね……………」

急にマイクを向けられた麻弥はもたつきながらそれを手に取ってしまった。

「ジブン、一応アイドルの身分であるにも関わらず、こういう挨拶の機会を設け貰えたことには感謝しかありません。ありがとうございます」

——そんなことないよ——

——可愛いよ——麻弥ちゃん。

観客からたくさん届く優しい声援に思わず涙腺が緩んでしまう麻弥であったがどうにか堪える。

「……………本当にありがとうございます。ジブンもちゃんと蒼真さんと一緒に人生を歩いていきたいと思っています。あ、でも、パスパレもアークラ共々まだまだ未熟な部分を直して、もつと良いライブをしていきたいとも思っています……………あれ？何言ってるのか無茶苦茶になってますね。あはは……………ジブンが言いたかったのはこれではなくて、えつと……………」

「麻弥、ごめんな。後で文句は聞くから」

「え？蒼真さ——」

そして、麻弥の唇が蒼真の唇で塞がる。

数秒後には、鮮明に頬を赤へと染め上げた麻弥が中継カメラに映し出されていた。

「落ち着いた？」

「は、はい。ありがとうございます……」

蒼真が照れる麻弥の頭を優しく撫でる。

唐突なイチヤイチャに、あちこちから黄色い声が飛び交った。然り気無く、ステージ裏からも。

「最後にこれだけ言います。ジブンも蒼真さんのこと……愛してます……思ってた以上に恥ずかしいですね、これ……」

「もう今更遅い」

「……なので、そういう訳です。ジブンと蒼真さんのこと、これからも末永くよろしくお願います」

「よろしくお願います」

麻弥は頭を下げ、蒼真もそれに続く。

二人に対して祝福の拍手が送られ、会場は祝福ムードに包まれていた。

——と、次の瞬間だった。

「……………なあ麻弥」

円型の特設ステージ。その中心辺りの足場が下がっていく。打ち合わせにないその仕様に蒼真の本音が漏れる。

しばらくして再び上がってきた足場。

そこに鎮座していたのは二つのドラムセット。それぞれ蒼真と麻弥が愛用しているドラム達だ。優秀すぎるスタッフも別の意味で困ってしまう。

「これは、聞いてないですね……………」

「よな……………」

麻弥も事前の打ち合わせでは耳にしていない。明らかに裏の誰かの意図が働いている。

観客からしたらそんな事情を知る訳もなく、ドラム叩いてー！と声が次々上がっている。

「蒼真さん、どうします?」

「やるしかないやろうなー」

会場のムードは最早それ一択。

「麻弥、いつも通りのセッションでいこう」

「了解です」

ドラムの近くに寄ると、円の外側に向けて置かれている事が分かる。スネアにはそつとスティックが添えられている。

蒼真と麻弥が二人同時に観客の前でドラムを叩くのは初めての事だ。それを考慮して、こんなサプライズを今仕掛けられたのだろうか。そんなことを蒼真は考えていた。渋々と言った感じで蒼真が椅子に座り、麻弥が後から別の椅子に座る。

「後で犯人懲らしめと……」

「程ほどにしておいてくださいいね？ジブンは今ワクワクしてますし……蒼真さんはもっとこうやってドラムを叩いたりして一緒にいてくれないと駄目です。じゃないと、ジブンが拗ねちゃいますので」

「ふっ……麻弥も言うようになったな」

「もう勝負は始まっていますから」

背中合わせの二人。

この先、二度とお目のかかる事のないであろう特別なコラボによる二人の最初で最後のセッションに心が自然と踊ってしまおう。

「よし、いくか——」

蒼真のハイハットのカウントで。

——いざ、始まる。

◇
◇
◇

” Pasttle*Palette” vs” アークラ”。

対バン形式、ツーマンライブ。

202X年。12月25日。東京ドーム。

” Happy Wedding Universal Live”。

—— for ” 山吹蒼真” and ” 大和麻弥”。

「…………チケットは即完売。ライブも大盛況で終わり、メインイベントである二人の結婚もテレビや新聞で大々的に報道される。さらに同時にリリースされた新曲はオリコ

ンランキング一位を独走中……………凄い人気だな……………」

「さらにだよ！お姉ちゃん！アイドルの結婚にも関わらず、特にファンからも目立った反対はなく、二人はラブラブな結婚生活を送るだろう……………だって！」

「うん。ライブ、すごかったもん。あれを見せられちゃ反対しようとしてた人も口出し出来ないね」

そつと、それを閉じる。

「……………おめでとう、二人とも」

麻弥大人編——『ライブ報告』 終

麻弥大人編—2—『ライブ配信』

◇◇◇

収録スタジオ。

「さて……………観ている皆さん、お久しぶりです」

こほん、と一咳置いた麻弥。

其処は今も昔も変わらない麻弥がいつも使っているスタジオ。椅子に座る麻弥の背後には彼女が愛用するドラムが鎮座している。

「本日は特別回。いつもよりも時間を延長してお送ります。では行きましょう」

恒例となっているコールへ。

「毎週夜8時からお送りしています！」ドラム凶鑑！今日の司会進行はパスパレのドラム担当”山吹麻弥”です！」

——『やまぶき……………だとお！』

——『結婚おめでとー!!』

——『おお！結婚しても、これはやるんですね！』

麻弥の結婚発表で世間は騒ぐ。彼女達を祝福する記念ライブも先週やり遂げた麻弥

であったが、この番組は通常運転で始まっていた。

画面上では麻弥を祝つたり、夫を妬む、もしくは普通に出てきた麻弥に驚きの声を上げるコメントが流れ出る。

「では、参りましょう！今日のゲストはこの方！」

「へーい、毎度お馴染みの麻弥の夫です」

カメラ外から入ってきたのは蒼真。

麻弥からは視線を少し逸らせば見えていたので、特に驚くこともない。

特別回とのことなので、大まかな予想は視聴者側でも付いていたのかコメントには。

—— 『夫婦回ですね』

—— 『拝みます』

—— 『今回はドッキリしないんですねー』

時々触れてはいけない物も流れる。

ある程度纏めると、麻弥へのドッキリがなくてがっかりした、との意見が大半だ。

「ちゃんと自己紹介してください」

「ぐつ………山吹蒼真です。”アークラ”のドラマーです」

「はい、よく出来ました」

時は同じく、スタジオでは夫婦のやり取りが繰り広げられていた。メディアでは滅

多に取り上げられないその光景に多くのファンが感激している事を当の本人達が知る由はない。

こてんぱんの如く、嫁に叱られた蒼真は反撃とばかりに不敵な笑みを浮かべる。

「ところで、麻弥」

「はい？何でしょう？」

「誰が今日のゲストは俺だけだと言った？」

「え？」

——『出た!!後ろ!!』

はっ、と気づくも時既に遅し。

「であえー!!」

まさかの江戸時代、到来。

「ひゃっ!!」

背後からの巨大な叫び声に麻弥の悲鳴が飛び上がる。にやにや、とした蒼真は麻弥の背後の人物と目を会わせ頷き合う。

「やったね」

「いえーい！蒼真君！上手くいったよ！」

その人物は蒼真とハイタッチ。

ピンク髪に周りを自然と笑顔へ移行させる笑顔の持ち主。そして、パスパレのボーカリスト。

「……………彩さん、ですか」

「ごめんね、麻弥ちゃん。私、こういうのやってみたくて♪
てへぺろ、と舌を出す彩。

「皆、観てる？ パスパレピンク担当！ 真ん丸お山に彩りを！ 丸山彩です！ 今日最後まで楽しんでいきましょー！」

事態を飲み込めない麻弥を余所に彩は画面に向かって自己紹介。これも彼女が芸能活動で培ってきた成果である。

—— 『おお、神よ。私はまた見れた。』

—— 『彩ちゃんだ!! 可愛い!!』

—— 『期待を裏切らないソウさん。流石』

コメント欄でも彩の登場を喜ぶ声が多数上がる。そして、再び麻弥の可愛い悲鳴が飛び出した光景を見た人は歓喜を、逃してしまった人は残念さを己のコメントに入れた。
いた。

少し頬を赤らめた麻弥は不機嫌そうな空気をポンポンとばかりに放ち出す。

「え？ 彩さん？ どうしているんです？ 今日撮影の筈では？」

「ええつとね……………麻弥ちゃん。あのね、撮影は真つ赤な嘘です♪麻弥ちゃんを安心させるための作戦です♪」

「……………」

「それで、何故来ちゃったかと言うとね、今日のドラム凶鑑は山吹夫婦を徹底的に質問攻めにしよう！ってテーマだって。その進行を私が麻弥ちゃんの代わりにするために呼ばれたって感じだね！」

彩の言い分に麻弥は無反応。

「蒼真さんはこれをどこ存じで？」

「俺が仕組んだことに決まってるやろ」

蒼真はどや顔で言い切った。

「……………蒼真さん」

「おっ？おっと……………これは……………」

「あの？……………私は？」

じりじりと迫る麻弥。後ずさる蒼真。

—— 『修羅場来たあああ!!』

—— 『www麻弥ちゃん強しwww』

—— 『おろおろしてる彩ちゃん可愛い』

これは流石にやり過ぎたのか、と蒼真の脳裏をよぎる。最悪の展開も予期して置かなくてはならなかった。

徐々に間を詰めた麻弥はゆっくりとその言葉を口に告げる。

「お詫びに……………そうですね……………キスでもしてください」

「ふえ?……………ここですか!? 配信中やけど!?!」

「しないのなら、明日から蒼真さんのご飯は作りません」

「マジですか……………それはやばい」

麻弥が暴走した。

「え?…え?…麻弥ちゃん?」

「男は覚悟が肝心。恥は一瞬……………」

「蒼真君!?!あの……………流石に冗談だよな?え?とつてもお顔が近い気が……………思いつき

り撮られてるよ!?!——あ」

次の瞬間。

二人を映していた画面が番組お馴染みの静止画へと切り替わるのであった。

収録スタジオ。

◇◇◇

「……………大変お見苦しい所をお見せいたしました」

切り替わる画面に突如映るのは謝罪姿の麻弥と俺。

夫婦の営みは時と場所を考えろ、と嫁共々裏でマネージャーからこつてり搾られていた。何故、俺まで巻き込まれるのか不思議だが、麻弥の夫だろうが、と一言で片付けられた。

無論、視聴者は誰一人として気にしていない気配。むしろ、もつとやれと大歓迎ムードに近いのだが、けじめはけじめである。

「それでは、お二人ともお座りください」

「……………彩さん」

「はい？麻弥ちゃん、どうされました？」

「司会、似合わないっすね」

「まさかのいきなりの辛辣なご指摘!？」

台本を片手にクールに進行する彩。

普段の慌てぶりが彼女の大半を印象付けているので、今の姿は確かにカッコつけてる感がプンプンしてる。

麻弥と俺はスタツフに用意された椅子へと腰を下ろした。

「まず、お二人様、結婚おめでとうございます」

「うん、ありがとう」

「ありがとうございます」

結婚発表かつ記念ライブ以来、こうやって二人で何らかのメディアに出演するのは初めてである。

人気アイドルバンドと人気ロックバンドのドラマー同士が結ばれたので、一時期多くのネットやニュースで取り上げられ、世間は騒然とした。だが、それも一瞬で収まり、徐々に歓迎雰囲気一択になったのは俺にとつてありがたい展開であった。

あまりにもすんなりいく理由を俺は何気なく調べたことがあるが、どうやら俺と麻弥の関係性については元より互いのファン同士で考察を議論していたようなのだ。

そして、まさかの結論が”静かに見守ろう”という。平和的過ぎるまさかの解決方法に俺はその時、静かにパソコンを閉じたのであった。

気づくと、彩は静かに目を閉じていた。

「そんな新婚ほやほやのお二人に質問を募集しようかと考えてましたが………」
「が？」

「既に私の手元に質問が書かれた紙がこのとおり！沢山来てますよ！」

「そりゃあ………良かったな」

彩が漫然の笑みでひらひらと見せつける紙にひきつる蒼真の頬。

「では、行きましょう！」

「——プロポーズはどっちから!？」

「一発目から随分と慌てんな」

「蒼真君、ちゃんと答えてくださーい」

「バレてら………俺からやね」

「ですね。ジブンもその時は急だったので緊張する暇もなかったっす」

「どういうシチュエーションだったの？」

「彩さん、もう口調が戻ってますよ」

「え!?!あつ、ごめんなさい!!」

「もうこの際やし、いつも通りで良いよ。俺らもやりにくいし」

「そ、そうかな？なら、いつも通りで行くね」

「その方が良いって。ほら、彩ちゃん、次の質問」

「あつ、うん。そうだね……………つて！ちゃんと私の質問にも答えてよ!!」

「くつ、無理やったか……………」

「駄目でしたね」

「二人とも？」

悔しそうにする俺。話の路線を変えようと試みたが惜しい所で彩に気づかれてしまった。

麻弥は俺の企みにただただ苦笑い。

だったら、別の方法で誤魔化す。

「そう……………あれは一昔前のこと——」

「リビングで夜、二人きりで呑んでたときつすね」

「麻弥ちゃん……………!?!」

「蒼真君、思ったより夢がないね」

「分かってらー!!会話の成り行きでそうなたんやい!!」

「ジブンも嬉しかったことには変わりなかったんすけど、あまりにもあつさりしちゃっ

たので……妥協案として指輪と誓いの言葉を先月の記念ライブで貰いました」

「あれ、凄かったね!! 見てるこっちも恥ずかしいぐらいだった」

「そんなにか?」

「ちらり、とコメントを確認。」

「—— 『私もあんなポーズしてほしい!!』」

「—— 『普通、何万人の前で言えねえよ……』」

「—— 『裏で指輪渡してたんですね』」

「ふむ、そうか。そういうものか。」

「私、指輪渡す所は見えないけどいつ渡したの?」

「アンコールの前にちよっとね」

「彩さん、最後までステージに居ましたから、時間的に遅かったつすね。イヴさんや日菜

さんとは指輪を嵌める最中のジブンとがつつり目が合いましたよ」

「嘘お……」

「ははは、残念やったな!!」

「次の質問、行くね……」

「彩さん、落ち込みすぎですつて」

「指輪の贈呈なんて人生で一度として見れるかどうかだよ!? それを見逃してたなんて

……」

2——結婚式はするの？

「するね」

「しますよ」

「あの頃の皆と会えるって事かあ………楽しみ〜」

「おい、司会者。思い出に浸ってる場合かい」

「具体的な日程や場所は言えませんが、ジブんと蒼真さんの仕事の関係者や友人、ご家族を年内までには結婚式に招待しますよ」

「えっ!? 麻弥ちゃん!! ウエディングドレス着るの!？」

「そ、そうなんですよ〜!!」

只の雑談と化している。

スタッフサイドから何も出てこないと言うことは問題なしで宜しいのだろうが、普段通り過ぎて配信中とは思えない空気ぶり。

——『むっさ、行きたい!!』

——『行きたい!! 見たい!!』

そんなコメントが大多数。

麻弥と結婚に至るまでに悩むことも多かったがこうやって人々に祝福されるのを聞

近に感じて、俺は選択を間違えずに済んで良かったと安心していた。

「あ、視聴者の皆さんも安心してな。パスパレの番組が密着に入るみたいやから、いずれ結婚式の様子も放送されると思うし」

「うん。私かもしくはパスパレの麻弥ちゃん以外の誰かがカメラを片手に密着するかも」

「それ、仕事になるんやろうか」

「……………」

彩と麻弥は黙って目を逸らした。

3——バンドは続けますか？

「勿論、続けるね。アークラはフェスとかからも多く出演の声がかかってるし」

「パスパレもまだまだジブンは止めないですよ。彩さんの歌声、ジブン大好きっすから」

「つくつく!!麻弥ちゃん!!」

「ちよつ!!飛びかからないでください!!」

「私もパスパレのドラマは麻弥ちゃんじゃなきゃだ!!」

「まあ……………時がくればあれっすけど」

「つ?!?がーん……………」

「自分で言うのね」

頬をほっこり赤く染めた麻弥と青ざめた表情の彩。これが現在のパスパレだ。時、つてのはあれだ。結婚の次に欲しくなるあれを言っている。やることはやってるのだがまだ互いに気不味い。

4——幸せですか？

「愚問やね」

「ジブン、最高に幸せです。蒼真さんとは些細な出会いから始まり、こうして二人結ばれた。それだけでも満足出来るはずでしたが、ファンの皆さんにもおめでどうのお声をたくさん下さって……本当に幸せです」

「パスパレファン、特に麻弥ファンの男には悪いけど麻弥と結婚して良かったと思って。麻弥には色々な面で支えられてきた。そして、これからも俺はその恩返しって感じじゃないんやけど麻弥と一緒に、幸せにしていきたいと思つとるね」

「はい、お待ちしておりますよ」

「蒼真君!!」

「ん?」

”Pasttle*palettes”からメンバー代表として丸山彩が尋ねます!!
山吹蒼真君!!麻弥ちゃんを今後一生幸せにする覚悟はありますか?」

「……………ああ勿論」

「よろしい!! もしもの事があれば、私達の中でも特に千聖ちゃんが黙ってないからね!!」
「彩さん、それは流石に怒られますよ?」

「や、やつぱり?」

謎の茶番劇が始まる。事実、俺はパスパレの一人を我が物にしてしまうのだ。少しぐらい付き合わないとな。

「結構喋ったな」

「そうっすね」

「私は全然話し足りないよ」

「彩さん、元気っすね」

「もうそろそろ休憩を挟む感じか」

カンペにも締めをするよう指示が。

「……………あつ、私だった」

完全に役割を忘れていた彩。

誤魔化そうと笑顔を浮かべているが、全てを映す配信では無駄な足掻きである。

「で、では、皆さま。ドラマ凶鑑放送50回記念スペシャルも一旦休憩となりま〜す。

この後はあの記念ライブのスピノフ映像などもあるそうなので首を長くしてお待ちください。ではでは、皆、またね!!」

——ライブ配信は終了しました。

麻弥大人編 | 2 | 『ライブ配信』 終

麻弥大人編—3—『ストーリー事件』



これはまだ俺と麻弥が結婚する前の話。

二人の恋人関係がまだ世間に公になっていない頃に起きた一連の事件の概要だ。

発端は麻弥が俺へと話した相談。

その内容はアイドルという芸能に身を置く麻弥がパスパレを通して、世間一般で有名になりすぎた。その代償で発生してしまったかもしれない問題の解消もしくは改善。

これから語られるはその全容の一部始終。

そして、俺と麻弥の関係が一步進展する切っ掛けとなった事件である。



マンションのとある部屋。

「……………それは厄介だな」

麻弥と同棲生活して早カ月。

久しぶりに二人揃つての晩飯だ。互いに仕事で忙しい時期なのでほんとに久しぶり。

でも、ご飯を食べてる時に俺は麻弥が空元気に振る舞っている事に気づいた。

悩みがあるなら話してくれと問いたただす俺に麻弥は頑なに首を横に振る。

粘りに粘つて——結果、一時間。

麻弥の本人の口から語られたのは俺の予想とは全く違う有名人ならではの問題だった。

「まさか、ストーリーカーとは……………それもここ最近になるにつれて、そんなに酷くなつてるんか？」

「はい……………最初は人の視線を何処かで感じる程度だったのですけど、今は同一人物を何度も視界に捉える程度になりました」

「ふむ」

酷いもんだ。

視線などはアイドル業の麻弥には慣れもある。でも、何回も怪しい人を見掛けるとなるとそれはもう確信犯。

熱心なファンという可能性もまたある。

だが、それはそれ。そいつは麻弥の帰り道に出没するらしい。ファンだとしても、これはやりすぎだ。

「マネージャーさんには？」

「それとなく……………だけです。パスパレメンバーのスケジュール調整に手がいっぱいいっぱい余計に負担をかける訳には……………」

「そっか、麻弥も立派にアイドルやってんだな」

「自分をどんな風に見てるんですか？ 蒼真さくん」

「俺の可愛い彼女さん」

「……………もう。そういうのは今は勘弁してくださいです」

「照れたな」

「照れてません」

「顔、真つ赤やのに其所は否定すんのね」

「……………本当に照れてませんから」

「はいはい。俺の敗けで良いよ、もう」

さて、茶番もここまで。

「ん……………下手にそいつに注意しても、逆に麻弥愛好魂に火に油を注いで悪化しちゃうしな……………取り扱いには繊細さが必要か」

「何ですか、その……………愛好魂って」

「言葉通りやけど？一応、そのストーカーも麻弥が好きって部分だけは俺と同じやし、そこだけは勘弁してやる」

「複雑ですね……………」

「でも、珍しいよな。パスパレの中でもまさかの麻弥を選ぶなんて」

「むう……………少しは自分にもファンの方は居ますよ、蒼真さん。流石に彩さんや千聖さんには負けますけど」

人気急上昇、アイドルバンド。

” Pastle*Palettes”。

一番目立つボーカリストの彩。女優としても有名な千聖。独特なキャラが話題の言葉。元モデルとして注目を浴びるイヴ。

だがしかし。

麻弥だけがこれと言った肩書きを持たず。

バンド加入以前はスタジオミュージシャンとして活動していた。でも、これでは世間一般に名は広まらない。

眼鏡っ子の機材オタク。そして普段の丁寧口調と控えめな性格。

これが麻弥の決まり文句

人気になり始めたのはそれを凌駕するドラムの技術。演奏中の無双するその姿の魅力さがファンに浸透したお陰となる。

でも時間がかかりすぎた。元々、ファンを獲得していた他メンバーとは一步出遅れたスタート。ましてや、リズム隊としてライブはステージの後部に陣取るので観客からも視線が遠い。

ファンを増やすのも一苦労だ。

「取り敢えず今は無闇に関わんな。もしまた出沒したんなら、すぐ俺か、誰にでも良いから連絡するのが最善かな」

「はい……………」

「ん？麻弥？」

「ふと思ったのですけど……………自分と蒼真さんの関係を公表すれば、諦めてくれるのでは、と思いまして……………」

アイドルと恋人関係。

俺の現状をなす言葉がこれ。麻弥とは高校卒業前からそういう関係にある。

知るのにはパスパレとアークラのメンバー。両バンドのマネージャー。そして、両者とも付き合いの長いスタッフも該当する。

互いのファンには秘密。そう簡単に曝け出す物ではない。

「ダメやろ。それこそ逆効果やって。最近は熱愛スクープばっか取り上げられてるし、向こうは何考えてるか分からん。下手に賭け事はしてられん」

「……………ですよね」

しよんぼりする麻弥。

「分かつとるよ。麻弥とはこうやって、家に一緒にいるぐらいしか出来ひんのは。どっかデートスポットにでも二人で行ければ良いんやけどな」

家デート。それが及第点。

蒼真の借りるマンションの一室に麻弥がお忍びで訪問するのが限界であった。

二人きりで観光地に出掛けて、その瞬間を写真に収められてしまうと一気にアイドルの熱愛発覚とされてしまう。

そうなれば、パスパレ関係者全員に多大な迷惑をかけてしまう。それだけは避けなければいけない。

「そんなこと無いです。自分は蒼真さんと一緒にいるだけで幸せですから」

ふへへ、と麻弥は笑う。

一見、何事もないアイドルの隙を見せた笑顔。だけど、俺にはその笑顔が悲しそうに見えてしまった。

◇◇◇

帰り道。

「蒼真さんと一緒に歩く……」

「そっか。久しぶりだもんな」

今日の仕事を終えて。

珍しくお互いに時間もびったりかつ場所も近かかった為、俺と麻弥は帰り際に合流した。

私服姿にマスクの麻弥。軽い変装したまま俺の隣を歩いている。

こうして第三者から見てみれば、全盛期アイドルが普通に隣にいるなんて信じられないだろう。

「あつ折角ですし、公園に寄りませんか？」

「ん？そやな」

最寄り駅から徒歩で十分。

その道中には子供達の集会所的な公園が存在する。この辺では、近所の皆さんは優し
いのできつと大丈夫。

公園に入る頃、日が沈みそうだった。

ちやうど休憩出来そうなベンチがあったので一先ずは其所に。

「蒼真さん、飲み物いりますか？」

「お、欲しいな。麻弥はここで待つとつてくれ。近くの自販で買ってくるよ」

「い、いえ!!ジブンが買いに行きますんで蒼真さんは待つててください!!」

「そ、そう……?なら、頼むけど」

「はい!!」

あまりにも必死の形相で、つい任せてしまった。そこまで喉が乾いていたのだろうか。

麻弥が早走りで飲み物を調達しに行った。

アイドルにパシリなど随分と贅沢だ。

「……………暇だな」

無人の公園。

普段なら小学生のちび達がぎゃーぎゃー騒ぐ声が側を通る度に聞こえてくるのだが、今日はやけに静かだ。

……………さい!!

「ん?」

麻弥の声が微かに聞こえた。

ベンチへ戻ってくるのにはもう少し時間がかかる筈。

でも、でも、だ。稲妻の如く脳裏を過ぎる。

最近、麻弥との会話で話題に上がったストーカーの件。それが今まさに、彼女本人に危険な行為を仕掛けているとすれば——

「麻弥?!」

声の方へ駆け寄る。

自動販売機のある公園の入り口付近。人影が見える。そして、俺はとんでもない光景を目撃してしまった。

「止めてください!!」

「五月蠅いぞ!!黙ってこっちにこい!!」

一人の覆面男。

そいつが麻弥の腕を掴んで、連れていこうとしていたのだ。

「麻弥!!」

「蒼真さん!!」

非常に不味い。

「てめえ!!麻弥に何やってんだあ!!」

もう何も考えられない。

麻弥を助ける。その一心しかない。

「つち、見られたか。おい!!こっちだ!!」

「いやっ!!蒼真さん!!」

男は女性にとって脅威の力で麻弥を無理矢理にでも連行しようとしていた。

公園を出てすぐの道路。駐車された一台の車。あれに乗せられてしまえば、行方を追

えない。

「その人!!助けてくれ!!」

まるで男の背後に通行人が偶然いた。俺が助けを求めたかのように仕向けた。

これに騙され、少しでも時間を稼げれば。

男が後ろを振り向いた。誘導が効いた証だ。

「はあ?!聞いてないぞ?!」

「……………聞いてない?」

麻弥の元へ走る。

男の意味深な発言に若干引つ掛かるが、考えるのは後だ。

麻弥が抵抗する。お陰ですぐに彼女の手まで届きそう。

後、もうちょい——

「麻弥っ!!こっちに!!」

俺の手を伸ばす。男も俺が来た事で諦めたのか逃げの体勢へ移ろうとしたのを確認した。

「と……………どく!!」

最後の一步を大きく踏み出し、彼女の伸ばした掌をしっかりと掴もうとして——

刹那——足元の地面が崩壊。

「え?」

視界が真つ暗へと染まった。



巨大な穴。

「なっ……どうゆうこと？」

身体が宙に浮かぶ感覚。その直後に落下したのだけはどうか理解した。
だけど、こんな公園にそんな場所なんて——

「じゃーん!!蒼真君!!」

頭上から。

視線を上げると、見えたのは夕焼けに染まった空と一人の少女。

身体を動かさそうとする。そして、気付いた。落下の衝撃を緩和させる小さいクツションが大量にあったのだ。

まるで仕組まれたかのよう。丁寧に落下者が怪我をしないように配慮、設置されていた。

「なんと!!ドッキリでした!!」

「……………はっ?」

「だ〜か〜ら〜!!ドッキリだって!!」

——まん丸お山に彩りを。

”丸山彩”が『ドッキリ大成功』と書かれた看板を片手に俺のいる穴を覗いていた。

つまり、俺は落とし穴に嵌まったのか。

でも腑に落ちない部分が多い。麻弥の無事がどうなったのか。何処までがドッキリなのか。

「ネタバラシしたいけど…………その前に蒼真君を引き揚げないとね」

彩とスタッフの方々に穴から救助された。

その時に気付いたが、パスパレスタッフ以外にもまさかのアークラススタッフが数人紛

れていた。

今回のドツキリ。ターゲットは俺。

パスパレ側だけでなく、アークラ側も全面協力したとなるのか。分かるぞ、スタッフ全員、絶対にノリノリで参加しただろうな。

なんだか、とつても悔しい。

「何処から説明しようか？」

「全部」

「あれ？怒って……………ます？」

こちとら真剣なんだぞ。

「えつと……………まず、麻弥ちゃんが蒼真君に話したストーリーカーの件だけど、あれは全部嘘です」

「なんだ、嘘なんか……………つて!?!まさか!?!麻弥もそっち側!?!」

「うん。というか、知らないのは蒼真君だけだよ」

「マジか……………」

俺は頭を抱えた。

これは一本取られた。麻弥の相談も全て演技だったという訳なのか。

「蒼真君、滅多にドツキリに引つ掛からないからこつちもそれなりに沢山、試行錯誤して

挑んだんだからねー！」

「へえ……………そうなんやあ」

「やっぱり、怒ってるよね……………?」

お好きに解釈はどうぞ。

「さっきのストーカー役は番組のスタッフさん。勿論、麻弥ちゃんは無事。すぐに此処に戻ってくるはずだよ」

「番組? てか、番組なのか?」

「うん。私達パスパレがメイン番組のスペシャル回に放送予定」

「良いのか?」

「え?」

「俺と麻弥のやり取り、全部撮ってるって事だよな?」

「う、うん」

隠してきた秘密が全てカメラのレンズに。

恋人関係を内密にしてきたのは彩だって知っている筈。それを無下にするような行為に出るなど考えられない。

「そこからは私が代わりに説明するわ」

会話を乱したのは千聖。

側には麻弥が付いていた。彩の言う通り、無事みたいで良かった。申し訳無さそうにする彼女の姿しかなかった。

「そもそもこのドッキリをすることになったのは他でもない麻弥ちゃんの提案からなのよ」

「……………そうなのか？麻弥」

「はい。番組でドッキリ企画をする、と話を聞いたとき、自分から言い出しました」

「なんで？」

「……………今の生活も十分満足してます。パスパレのバンド活動に蒼真さんと過ごす時間。どれも大切にしていきたいと思ってます。」

でも、不思議とこのままで満足してはいけけない。そう思うようにもなりました」

「私達も麻弥ちゃんの意見を尊重しようと考えたの。でも、蒼真君の事だからそう易々と麻弥ちゃんの決めた改革に協力してくれるとは限らない」

「それは……………言ってみないと分からんだろ」

「いいえ。貴方は確実に拒否するはず。麻弥ちゃんはパスパレとアークラのファン皆さんに蒼真君と正式なお付き合いをさして頂いていると言うつもりだったのよ？」

「……………なるほどね」

確信にしたのはこの前の会話の中。

麻弥が告げた、ストーカーを諦めさせるのにむしろ自分達の関係を公にすれば良いのではないかと。

そして、俺はそれを一蹴した。

「勿論、蒼真君の考えも理解出来るわ。というよりむしろアイドルとしてはそちらが正解なのかもしれないわね」

千聖は告げた。

「でも、麻弥ちゃんや私達はアイドル以前に一人の女の子でもあるの。女の子には幸せを求めるものなら例え、全てを犠牲にする覚悟だつてあるんだから」

「……………その結果が、これ」

「ええ。そしてファンの皆さんに認めて貰うにはまず普段の貴方達の姿を見せる必要があった。それに蒼真君本人にも承諾して貰わなくては話にならない」

「全てを一重に可能にしようと思つたのがこのドッキリつてことです……………すみません、蒼真さん」

麻弥が謝罪する。

本当にこれで良かったのか。自分の愛しい人にここまでやらせてしまって、男としてはどうなのだろうか。

——良いわけがなからうよ。

「OK。宣言する。俺は麻弥のこと、好きだ」

「そ、蒼真さん……………!!?」

「むしろ、愛してる」

「っ!?……………ふへへへへへ」

「ひゅー!!ひゅー!!」

「彩ちゃん、五月蠅いわよ」

「千聖ちゃん!?そんなあ……………」

外野が騒々しい。無視、決定。

どうせ全てを白状させられるのなら吹っ切れてやる。なんなら、盛大に宣言でもかましてやろうか。

カメラは何処に……………あつた、あれか。

「視聴者の皆さん、喜ばしいことになると正式に許可が降りました。つまり、パスパレドラム担当の麻弥は俺が個人的に頂くことになった訳なんで……………ファンの皆様、お疲れ様です」

「蒼真君が暴走した!!」

「これは……………蒼真君も色々溜まっていた物があったのね」

「蒼真さん!!恥ずかしいので止めてください!!」

——以上より。

後日、俺と麻弥の交際は番組の放送を機にネットやニュースの話題に上がることになる。

観た人の反応は様々であった。祝福の声を上げる者、興味のない者、逆に二人に関心を寄せ始める者。

でも、意外な事に炎上する、なんてのはなかった。

むしろ、今更かよ的な雰囲気があちこちで流れていたらしい。元々隠していたつもりが共演した時の会話シーンなどで薄々分かっていた、とのこと。

——まさかの努力が無念へ。

とまあ、ダラダラと並べたものの。

今では羨ましい芸能人カップルランキング上位にランクインする程、麻弥との恋人生活は上手くいっている。

「蒼真さくん、ご飯出来ましたよ〜」

「分かった。すぐ行く」

”ストーカー事件”。

ならぬ”パスパレ麻弥のストーカーカードッキリ告白”は大成功で幕を閉じるのであった。

麻弥大人編―3―『ストーリーカー事件』終

コラボ編—1—『Rhodanthe』



ライブハウスCiRCLE。受付前。

「ローダンセ?.....ですか?」

習慣の個人練習の帰り際。会計を済ませて、いざ退散と意気込んだその時。まりなさんの口から出た言葉に俺は聞き覚えがないので尋ね返していた。

英語の類いだろうか。それともドイツ語?

どちらにせよ、俺にとってあまり耳にしたことがない言葉に変わりはない。

まりなさんはしつかり頷く。

「うん。バンドの名前」

「.....あんまし知らんのですけど」

「あれ?聞いたことない?」

まりなさんの反応からして、どうやらその名前は巷では有名らしい。俺、そんなに世間知らずだったのだろうか。

「数年前にコンテストとかで大暴れしていたバンド。今の蒼真君達ぐらいには賞を総嘗

めしてたかも」

「数年前だと……俺がまだ此処に来てなかった時期ですな」

二代目アークラもまだメンバーすら集まっていない頃だ。そりゃあ俺が知らない訳である。

「え？あゝそういえばそうかも。と言うよりも蒼真君が来たのは去年ぐらい？あれ？ちよつと分かんなくなってきた……」

「んで、まりなさん、なんでそんなバンドの名前が今？」

「それがね？そのバンドが活動してから一年ぐらいで解散しちゃって……」

「あー……よくある音楽性の違いって奴ですかね？」

「そこら辺の詳しい事情は本人達に聞いてもらうとして、でね！最近またRhodan theが活動再開となったのよ！」

まりなさん、俺の質問に辛辣過ぎやしませんか。そんな心を抉るような質問を本人に聞けるわけが無いでしょ。にしても声から表情から見ても、随分と嬉しそうですね。

そのバンドの解散理由の詳細は闇に紛れたままだが、まりなさん談だとその理由も解消され再びバンドとして始動したとのこと。

「今度、彼女達が企画するライブをすることになってね。そこに蒼真君のバンド”アークラ”もゲスト枠としてどうかかって？」

「ライブの誘いはありがたいんですけど、良いんですかね？多分、俺以外の奴らもまったく知りませんよ？」

「そこは大丈夫よ。私からの推薦だし、それに——」

「それに？」

「ベースの大空ちゃん、此処で働いていてね、同じ職場の蒼真君のこと知りたいという本人たつての希望ということで」

「……………ここで働いてる？マジですか。会った記憶がないんですけど」

「蒼真君が全然ソフト入れないってなった時期にちょうど大空ちゃんが新しく引き受けてくれたからかな？基本的には大空ちゃんの休みに蒼真君が仕事に入ってるね」

「へえ〜」

初耳だ。

よく考えれば、俺が仕事に出なくなる分の埋めを誰かが担当しているのは当然のこと。

挨拶ぐらいはしておきたい。あわよくば、助言も貰えれば完璧。

「にしてもローダンセ……………ですか。どんなバンドなのか全然想像が出来ないですね……………」

「あ！もしかしてだけど……………Rhodantheのドラマーなら蒼真君に分かるかも

「知らない！」

「誰です？」

「富里 葉津陸ちゃん」

「……………うーん」

「駄目？」

「いや、どつかで聞きましたね……………」

特に下の名前。

——葉津陸さん。

この妙にしっくりと胸に残る感覚がある。だとすれば、絶対に俺はこの人の存在を生で一度は耳にした記憶があるのだ。

絞り出すように思考を巡り合わせるが、答えは出てこない。駄目だ。思い出すにしては材料が少なすぎる。

「それでライブの方はどうするの？」

「……………出させて貰えるならやりたいかと」

「他の子達には相談しなくても良いの？」

「面倒なんで良いです。最近、ライブでやってみたい曲も貯まってきたので丁度良い機会かと。それに……………」

「ん？」

「いえ、もし日程の都合上で出れなくなったら、すぐに知らせますから」

「なら、私から取り合えず連絡しとくね」

—— Rhodanthe。

どうやら俺らがそのバンドの後釜ポジションらしい。そこまで拒絶感があるという訳ではないが、得たいも知れないそれに似ていると言われて、あまり気分は良くない。

でも、お相手の実力はもうお墨付きだそうだ。

自然と俺は両手をぎゅつと拳に握っていた。

——……：……久しぶりやな。こんなにライブする前から気持ち昂るなんて。

俺はC i R C L Eを後にしたのであった。



ライブ当日。会場。

「おはようございませう」

挨拶は基本。

リハーサルの為、遅めの朝から現場入りした俺達、アークラはスタッフとの顔合わせを着々と済ましていく。

今回のライブ会場はアークラの本拠地とも呼べるライブハウスだ。スタッフの人達も顔馴染みのある面子ばかりなので気も楽になる。

「蒼真、俺達は先に楽屋に行っておくぞ」

「分かった。これも適当に楽屋に置いておいてくれ」

「おー了解」

藍斗にツインペダルのケースを渡した。

音響や照明を担当する人に、今日のライブのセットリストやこちらから纏めた照明の要望を予め知らせておきたい。その用紙がスタッフ曰くあるらしいので此処でメンバーと別行動をして、俺はそれを取りに向かう。

探し物はすぐに見つけた。後はペンで記入すれば良いのだが、肝心のペンを俺は持ってきていないことを思い出す。

真面目なベースの彼なら持つてるだろうと俺は考え、ステージ前を横切り楽屋へと足を運んだ。

——その時だった。

「はあはあ………やつと着いたあ!!」

「少しは息を整えてから話さないな」

「確かに結構な時間、歩いたね」

他のバンドだろうか。

兎も角今は軽くお辞儀だけはしておいてそそくさと退散しよう。どっちにしろ全てのリハーサルが終了次第、バンド全体の顔合わせもある。

基本、其処でお互いのバンドやメンバーの顔を知ると言った感じ。

「あつ………今の」

「大空?どうしたの?」

「ううん、何でもない。僕達も楽屋に行こうか」

俺は彼女達の存在に気付くべきだっただろうか。今回のライブに出るバンドは限られていて、ある程度どのバンドか想像が付いたことを。

そして、一人の視線が俺の背中にながちり定まっていたことを。

まあ………初邂逅は案外呆気ない物だ。



——ライブ開始、15分前。

「麻弥ちゃん？いつもよりもそわそわしてるけど大丈夫？」

「そ、そうですかね、彩さん……………」

「ワタシ、楽しみです!!今日のライブは天と地の争いですから!!」

「えーと、そうなるかどうかは天なんだろう?まあどっちでもいいや。るん!つてきたほうが勝つだろうし」

「日菜ちゃん、勝ち負けなんて今日はないのよ……………にしても本当に麻弥ちゃん、大丈夫なの?」

「……………あのRhodanttheの皆さんと蒼真さん率いるアークラが対バン……………これを落ち着いていられるわけじゃないじゃないっすか!!」

「ついに麻弥ちゃんが壊れた!? 落ち着いてえ!!」

——” Pasttittle*Paletttes”、会場到着。

「それにしてもこの二つのバンドが対バンするなんて……ソウ君凄いなあ……」

「今思えば意外な組み合わせ」

「どっちもコンテスタに出れば優勝間違い無しレベルのバンドだしな……香澄? お前、何してんの?」

「え? 勿論、そらさんかソウ君を探してるよ!!」

「香澄ちゃん? 流石に楽屋に居て、会えないと思うけど……」

「ああっ!! いたあ!!」

「「えっ!? どっ!?」」

——” Poppin’ Party”、到着。

「初めて来たけど此処も良いわね! 次こそは私達の番よ!!」

「夢い……」

「見てみて! あっちでドリンク交換出来るみたい!!」

「ちよつと、今日はあまり目立たないようお願いしますよ。私達、観客で来てるんですから」

「美咲ちゃん」

「どうしました？花音さん？」

「私、喉乾いちやって……………」

「ど、どうぞ？あ、花音さん、真っ直ぐにあちですから」

「うん。ありがとうね」

——”ハロー、ハッピーワールド!”、到着。

「らーん、飲み物何が良い？」

「何でもいい」

「そんなこと言うと、モカはとんでもない物を持つてくるぞ」

「……………やっぱ自分でいく」

「蘭ちゃん、緊張してるみたい」

「今日のバンドはどっちも蘭にとつて因縁深いバンドだからねー。巴は？」

「アタシ？どっちかって言うと興奮してる。いつでも準備はバッチしだけ」

「……………こっちはこっちでヤバイかも」

——”Aftergrow”、到着。

「人、多い……………!？」

「りんりん？大丈夫？」

「白金さん、宇田川さん。ドリンク券は落とさないようにしてくださいよ」

「はい」

「……………はい」

「友希那？さつきから静かだけど、何かあった？」

「……………何でもないわ」

「そっか……………今度は私達が向こう側のステージに立とうね」

「……………ええ」

——”Roselia”、到着。

ライブ開始まで残り5分を切った。

決して交わらないその思いを抱えたまま、時は一刻と進むのであった。



ライブが始まった。

『さあ行くよー!!』

エンディングを飾るのは過去に賞を総嘗めした経歴の持つ実力派バンド”Rhodanthe”の皆さんによる演奏だ。

演奏の順番は当日の公平な籤引きによって決定される。アークラはリーダーの運の引きの強さにより一発目、オープニングアクトを任命された。

緊張はしていなかった。場数を越えたこいつらにとつて最後の主役は手慣れたも同然。特に弱音等は吐かず、呑気に頑張ろうと拳をコツンと合わせていたぐらい。

そして、俺を含むアークラのメンバー全員はラストライブ開始頃には楽屋にいた。小さな中継テレビを覗ようと、各自ソファや椅子等の好きな所に座り、ライブの様子を観ている。

「……………上手いな」

「ガールズバンドのレベルじゃないよね」

ボーカルとギターがそう話す。

二人の言いたいことは十二分に俺に伝わる。

ギタリストさんは余裕を持ってギターを弾いてる姿が印象的。その分、周りのケアもしつかり行うから縁の下の力持ちばりに活躍していることを意味する。

——あの人は、岩井星渦さんだったかな。

そして、次にキーボードの存在感よ。

鍵盤関連は全くもって初心者の俺だけど、リズム感覚のセンスなら多少は分かる。

あのキーボードを弾いている人が奏でる音色には一切のズレと迷いが無い。その影にはきつと努力の積み重ねがあったのだろう。努力の影が滲み出る程の正確性の高いキーボード演奏はまさに目を離せない物へとバンドの地位をまた一段と昇格させる。

——彼女の名前は、柳戸美海さん。

一見、社会人の象徴のOLさんにしか見えないのだが、ステージに立つ姿はバンドマンの背中、熟年者が出すあの背中にしか見えなくなつた。

ふと視線の注目はど真ん中へ。

「ボーカルさん、暴走してんな」

「なあ……オレもあれぐらい良いか?」

「お前はもつと別の意味で酷いな」

「誉め言葉として受け取ってやろう」

こちらのボーカルはあれとして、あちらのボーカルさんは元気洩刺な歌声が特徴的。かつ変幻自在に音を変えるその繊細な技術は彼女本来の独創的な世界を造り上げる。

ふと、ベースの彼の目がこちらに。

「蒼さん」

「ん？」

「……………あいつと似てますね」

「……………そうやね」

その眩きは俺も感じていた。

ベースの彼と俺は無意識に彼女の歌う姿に昔出会った別の人と面影を重ねてしまっているらしい。

そんなボーカリスト、”岩井屋渦”さんは声優を生業としていらっしゃるらしく声の扱いに関しては群を抜いている。また、女子にも関わらず声量が半端ない。

さて、次は——”富里葉津陸”さん。

撫子少女の象徴とも取れる黒髪の大人びた可憐なスタイルが印象的なドラマーさん。俺のドラムスタイルは繊細かつ迫力満点と称される事がありがたい事に多い。対して、葉津陸さんは俺の意見としては大胆なのに清楚な音でドラムを叩くドラマーさんだ。

彼女のドラムを叩く姿はどこか幻想的なオーラを醸し出す。なのに、演奏だけを見れば高等テクニクも幾つか多用し、演奏全体のレベルをごっそり持ち上げているのだ。分かる人には分かる。彼女が叩いてるドラムがあるからこそ、Rhodanthéの

他のメンバーが安心して自らの役目に没頭していると。

と、ここで俺はデジャブを感じた。まるで似たような感想を誰からか聞いたような、そんな曖昧で不確かな感覚みたいな——

「あ、思い出した」

「何が？」

「ドラムの人。さつきまでどつかで名前に聞き覚えがあつたけどどうしても思い出せんくてな……確か、麻弥ちゃんが尊敬してたドラマーだ」

そして——最後はベース。

” 明原大空 ” さん。まりなさん情報だとバンド解散原因の張本人の一人である。彼女の性格は控えめで真面目だと俺は聞いていたが……。

ライブでのベースを持つ彼女は無茶苦茶ぐいぐいと前へ来ている。もはや喧嘩腰にも近いその姿勢にベースとギターのポジション、逆じゃないのか疑惑が俺の脳内で浮上した。

あれが真面目とか控えめなんて冗談だろう。ほら、今だつてベースのソロパート完璧にこなしちやつた。

まりなさんが俺に嘘を教えたようには思えない。だとすれば、あの大空さんつて人は楽器を持つと軽く性格が変貌してしまうタイプの可能性もある。

ライブも終盤。これでラスト宣言をした曲も大盛況の内に演奏を終えてしまい、完全にセトリを全てこなした彼女達ができるのは最後の締め。

『今日はありがとねー!!!』

その一言を最後にライブは幕を閉じた。

——アンコール？あの盛り上がり具合だとあるに決まってるね。はつきりとは知らんけど。

◇◇◇

出演者の楽屋。

「お疲れ様です」

俺はそう声をかけた。

その声に反応した一人の女性がこちらへ振り向く。

「あ、お疲れ様です」

彼女は“明原大空”さん。

今回の主役のバンド“Rhodanthé”でのベースを担当していた人だ。

ライブでの印象と打って変わって今の彼女はとても落ち着いていた印象があった。マカロン食べてたし。

「これ、来月のシフト表になりますよ。まりなさんからです」

「はい？あー……………ありがとうございます」

一瞬、ポカンとした反応をする大空さん。

俺だって、いきなり知らない人から関係者のみに配布される物が渡されたら同じ反応になっちゃおうだろう。

「もしかして……………蒼真さん……………ですか？」

「はい。アークラのドラムをさせて貰ってる山吹蒼真です」

「やっぱり……………ご存知かもしれないですが、僕はRhodanthéのベースをさせてもらってます、明原大空です」

「明原さん、よろしくお願ひします」

「大空で良いですよ。こちらこそよろしくお願ひします」

挨拶は大事。

ここから俺は事前によりなさんから聞いていた話題から話を広げていく作戦に出る。

「今更ですけど、C i R C L Eではいつも俺の代わりだとか？でなんやかんや仕事を任せちやつてなんかすみません」

「いえいえ、そんな事はないですよ？むしろ感謝してると言いますか……蒼真さんのことはまりなさんからお話だけは聞いていましたので……まさかこんな対バン相手として出会えるとは予想外でしたけど」

「案外、世間は狭いもんです」

「その通りですね」

この人、ホントにライブの時とは別人だ。

二重人格と説明されてもすんなり納得してしまうぐらいの豹変ぶり。

「自分、年下なんでタメ口でも全然OKですよ」

「そう？なら、お言葉に甘えようかな」

「はい、遠慮なくどうぞ。今回のライブを見て、大空さんの凄い迫力とのギャップに驚いてる最中ですから」

「あはは……よく言われる。蒼真さんこそ、ドラムの音には自然と惹き付けられるよ
うな気がして、つい夢中になってた。まだ高校生なのに凄いね」

「まあ……………練習してますから余裕です」

「そこは遠慮するとこじやないかな〜?」

彼女はにっこりと微笑む。

そこから俺は大空さんと共通する話題で言葉を交わしあった。

CIRCLEを拠点とするガールズバンドの子達だとか。特に騒がしい猫耳少女&お金持ち暴走少女の対処方法や癖の強い子達との接し方など。

同じ仕事をする上での困り事や余談も語るに尽きないレベルで盛り上がる。俺も他に仕事の愚痴を言える相手が居なかつた事もあつて、つい口が開いてしまった。

——数分後。

「あ、こんな時間。もう行かないと」

「ん? あー俺の方もそうですね」

「最後になるけど今日は対バンしてくれてありがとう。僕達”Rhodanthe”にアークラの演奏はとて刺激になったよ」

「こちらこそです。Rhodantheさんの昔から変わらず、更に演奏を磨きを上げてくる部分にはアークラの奴等も闘争心に火が付いたと思いますから」

「あはは、やっぱり蒼真さん達を誘つて良かった。また別の機会にも誘つて良いかな?」

「勿論ですよ。なんなら主役を奪いに行くつもりで参戦させてもらいますから」

「それは楽しみかな。それじゃあ、僕は先に失礼するね」

「はい。今日はお疲れ様でした」

「うん、お疲れ様でした」

そうやって、大空さんは楽屋を後にした。

数分と言う短い間のみの会話であつたが、俺の収穫した物は期待以上の成果であつたから満足している。

暫くして、アークラのメンバーが楽屋へ戻ってくる。俺はいつもの日常へ戻るのであつた。

——”アークラ”と”Rhodanthé”。

本来、交わる事なき二つのバンド。

果たして、また俺らは彼女達と再会する日は来るのだろうか。

その一期一会の出会いこそ、音楽をやる上での醍醐味の一つでもある、と俺は思っている。

コラボ編—2—『有咲の受難』

◇◇◇

有咲家。蔵。

「何してんだよ………」

ポピパの恒例練習。

今日の練習は新曲の調整に大忙しの筈だと腹を括っていた有咲の目に映るのは楽器よりも別の方に興味が移るメンバー達。

香澄やたえならまだ許す。いや、本来許しては駄目だがこの二人に限っては諦めの境地に踏み行っている。

一方で、問題なのは——りみだ。

真面目でおっとりした性格。

普段の練習もきちんとかこなすが故に有咲も余計な負担はかからず、素直に信頼を置く人物の一人。

そんな彼女もまた練習の開始時刻になってもソファから動こうとはしていなかった。

「りみりん……これは？」

「これは……潤君の寝顔かな？正直、どうして撮ったのか私もあまり覚えてないけど……」

「可愛い!!」

「確かに。可愛い。これだとオツちゃんの良い勝負になるかも」

「この油断しきった表情が良い……っ!!普段の潤君だと全然私に甘えてくれないから……」

「くう〜!!りみりんだけズルい!!」

——深く息を吐く。

そして、またこのパターンかと思った。

あの奥手そうに見えるりみに驚くことなかれ、恋の青春が訪れたのだ。話題の彼はピパ全員と顔見知りでもある。

有咲の監視の目が届かなくなれば、香澄がぐいぐいと二人の関係について問答無用にて問いただし、たえがその手助けに入る。

加えて、りみもりみで満更でもない笑みで答えてしまうものだから、第三者からはどうしようもない。

「あー有咲〜!」

まるで猫の如く。

びよこびよこ動く香澄の猫耳が有咲の気配を即座にキャッチする。逃げ道を失い、渋々と有咲は近寄った。

テーブルに置かれた一つのスマホ。

女の子が持つ可愛らしいデコレーションがなされたスマホ画面には此処とはまた別の景色を写し出していた。

会話からも分かっていたが、どうやらりみの彼氏について団欒していたようだ。

——潤君。

りみの彼氏。

最近二人はそういう関係になった。知り合ってから数日もしない内に怒濤の勢いで惹かれ合った。

一目惚れ。そんな恋の入り口もまたある。

有咲にとつて、恋とは無縁の存在。故にりみの感じた恋心を完全に理解出来るとは思っていない。

「それで？ さつきから何見てるんだ？」

「潤君の写真集!!」

「香澄ちゃん!! そんな大声だと、恥ずかしいよお………」

「有咲も見る？」

有咲はおたえの手元をじっと見る。

ポピパ全員と彼だけで撮った集合写真。りみと彼を中心に笑顔が満ちている。

少し———気恥ずかしくなった。

「て、てか！沙綾はどうした!?!」

「さーや?」

「沙綾ちゃん? そう言えば、さつきから姿が見えないけど……」

「あつ、沙綾だったら」

「ん?」

おたえが階段を指差す。

視線を向ければ、絶妙のタイミングで階段を下る沙綾の姿がそこにあった。

「え? 何々? 私の噂でもしてたの?」

面白いネタを見つけたかのような沙綾。

私も会話に入らせると、ソファに接近。おたえの横に腰を下ろす。

「りみの惚れ惚れする話を聞いてた」

「へえ。最近のりみ、ずっと彼氏さんに夢中だもんね」

「そ、そうかな……?」

「うん。端から見ても気になるぐらいには」

迷いなく断言する沙綾。

やはり女子となると恋ばなは興味津々な事例らしい。

「正直……羨ましいかな」

ぼそつと漏れた沙綾の本音。

自然とそれは有咲の耳にも届いた。だからこそ、一つの疑問が有咲の胸の中で生まれる。

「そういう沙綾はどうなんだ？」

「へ？私？」

「有咲の言う通りだよ。さーやもソウとは最近、どうなの？」

案外、恋沙汰が多いポピパ。

羨ましそうにりみの惚れ話を見守る沙綾もどちらかと言えば有咲の知らない世界へ踏みいつている。

「聞いちやう……？」

「おー？さーや、ソウ君と何かあったの？」

「うん。聞いてくれる……？」

不安そうに揺れる沙綾の瞳。

有咲は即座に理解する。これは重要案件だ。下手をすれば、今後ポピパの存続に直結

する程には。

有咲はゆつくりと瞼を閉じる。

「ここは——私の出番だ。」

「香澄」

「ありしゃ?」

「おたえ」

「有咲?」

「ちよつとそこ、どいてくれ」

有咲が堂々とソファの前に。

「りみと沙綾。そこに座りなさい」



蔵の地下。

「では!!第……何回?何回でもいいや!ポピパ女子会パーティーを始めたいと思いまーす!!」

パチパチパチパチ。

「今回のテーマはなんと”彼氏と上手くいく付き合い方”。その所、香澄はどう思う?」

「うーん、仲良く一緒に歌うとか?」

「私はウサギと一緒に飼えば良いと思うんだ」

「え〜!」

勝手に盛り上がる二人。

対して、一方的に取り残された三人はどんな様子かというと――

「有咲が仕切るなんて……珍しいね」

「うん。でも、私としてはちよつと嬉しいかも」

「どうして?」

「有咲ちゃんは私と沙綾ちゃんを指名したでしょ。私と沙綾ちゃんに共通する事って言

えば……………」

「えっ？あつ……………彼氏がいる、かな」

「確証はないけど、多分そうだと思う。有咲ちゃん、そういうのは苦手というか嫌ってるイメージがあつたから……………」

「りみりん」

「な、何？」

「聞こえちゃつたみたいだよ」

「え？」

ちらりと有咲を見る。

顔を真っ赤に染め上げ、視線が迷いに迷うという乙女な反応を有咲は見せてくれた。

「そ、そんな訳ねえし……………ただ気になった——」

「有咲も好きな人出来たの？」

「ななな!!なんでそうなるんだよ!!」

「だつてね〜？りみりん」

「うん。有咲ちゃん、こういうのには全然興味を示してくれないから」

沙綾やりみと違つて。

有咲に異性との付き合いは皆無に近い。過去においても、クラスメイトですら話す機

会は全くないまま過ごしてきた。

だがしかし。

有咲も今では思春期真っ盛り、花の女子高生。恋に興味がないと言えば、嘘となつてしまふ多感な時期なのだ。

「興味がない訳じゃないし……むしろ、あるって言うか、ないって言うか……沙綾が悩んでるそうだったから友達として相談に乗りたかったっていうか……」

「今の有咲、とつても可愛い」

「ふふ、可愛いね」

「うるさい!!」

照れ隠しに叫ぶ有咲。

沙綾とりみの二人もまた有咲の好意には素直に甘える事にした。滅多にない恋人について語る機会でもあるが、シンプルに有咲の気遣いが嬉しかったのもある。

わざとらしい咳でどうにか場を戻す有咲の姿につい微笑ましくなる二人であった。

「ああもう!話を戻す!二人とも、最近の調子はどうなんだ?」

「あれ?何の調子の事かな?」

「そ、それはだな……かかか彼氏つ……!!」

一つのワードにフリーズした有咲。

「沙綾ちゃん、あんまり有咲ちゃんを弄っちゃうと……流石に」

「そうだね。ごめんね、有咲」

「う、うん」

りみの仲介に沙綾は大人しく従う。

顔を真っ赤にした有咲もまた素直に沙綾の謝罪を受け入れていた。

「私と潤君はいつも通りだよ。帰りにチョココロネも沢山買ってきてくれるし」

「ああ……確かに。潤君、店に来ると必ずって言って良いほど買っていつてくれるから」

そつと視線を逸らす沙綾。

「言えない。自分がりみの彼氏をチョココロネを餌にからかって楽しんでるだなんて。」

「沙綾ちゃんは？」

「私とソウ君もいつも通りだと思うよ」

「なら、さっきのあれは何なんだ？ソウさんとも順調なら、特に」

有咲はそう告げる。

喧嘩とかそういう類いの悩みなのかと有咲はてつきり思っていたが沙綾の反応をみるなり、完全な的外れらしい。

「ううん、有咲。私が言いたいのはそのじゃない」

沙綾は首を横に振る。

「——いつも通り過ぎちやう」

「は？」

沙綾は重い口を開く。

根本的な要因は二人の付き合いの長さであつた。

りみと潤は知り合つてまだ浅い。互いの接する関係がくつきり定着しないままの付き合いが続いたことで、両者共に新鮮な気持ちで恋愛に挑めた。

ただし、沙綾の場合だと事情が異なる。

沙綾の彼氏、蒼真と沙綾は幼い頃から知り合つた仲。これまで一緒に過ごした時間は膨大で、長年培つた絆はそう簡単には壊れない。

だが、その代償として現れたのは互いの関係性の固定化。沙綾が蒼真に対する接し方は頼りがいのある兄、蒼真が沙綾に対する接し方は無駄に頑固な妹というイメージが浸透してしまっている。

今更、恋人になつたから接し方も変える、なんて展開はもつての他。結局は普段と同じ日常に戻つてしまうのがオチ。

本当にそれで良いのだろうか。

彼とは更にもう一步進んだ關係を望む沙綾にとつて、これは尚更無視出来ない死活問題であつた。

「私と潤君は友達という期間が殆どないまま恋人になつちやつたけど、沙綾君とソウさんは小さい頃からの幼馴染みだもんね……………」

「うん。私の性格のせいかもしれないけど、やっぱりソウ君と一緒に居ても付き合う前と同じ感じになつちやう」

「關係を変えるのは難しいもんね……………特に好きな人なら尚更……………」

「分かるの？りみりん」

「うん。何となくだけ……………」

そつとりみは己の手を握る。

胸の中にあるモヤモヤとした不透明な気持ち。理由は違えど、経験のあるりみだからこそ汲み取れる思いもまたある。

そんな中——

「別にどつちでも良いだろ。今のままでも」

有咲ははつきりと口にした。

「有咲……………ちゃん？どうしてそんなこと……………」

りみが驚きの表情で見つめる。

沙綾もまた口には出さないものの、驚きで動きが固まってしまっていた。

「いや、悪い意味で言ったんじゃない。人間ってのはそう易々と境界線を跨げる程、度胸が据わってる訳がないってだけ。沙綾だってソウさんともっと知りたいと思う反面、現状で満足してしまってる部分もあるだろ？」

「う、うん……言われてみれば」

「そういうもんだよ、恋愛なんて。変わろうと思えば思うほど、変われなくて……自分が不本意だと思う場面で肝心のその瞬間が訪れたりする」

有咲の語りは止まらない。

「なら、私はどうすれば良いの？」

「それは……私には分からない。沙綾とソウさんだけにしか分からない。でも、沙綾が一步進みたいって思うのならきつといつかその瞬間は訪れる筈」

「そ、そうなんだ」

普段の有咲からは想像がつかない。

あのツンデレで他人に対してアドバイスするだけでも己で苦戦苦闘するあの有咲がするすらと口にしたのだ。

沙綾だけでなく、隣に座るりみも困惑きみになってしまった。

「やっぱり恥ずかしいな……慣れない事をするのは……」

「ねえねえ有咲？」

「ん？おたえ？どうした？」

有咲の肩をつついたおたえが一冊の小説を取り出す。

「今の台詞つてき、この付箋が付いてある所に書いてあつ——」

「ちよつ!!おまつ!!それだけは!!返せつ!!」

「えっ、やだ」

有咲が本を取り返そうと必死な形相に。

だが、おたえは有咲の猛攻撃をひらりと避けてから追いかけてきたから逃げる精神で逃走を開始。

一気に部屋が騒がしくなる。

「あはははは!!」

「沙綾ちゃん!!」

「だ、ダメだ………つ!!笑つちやう………!!」

そして、いきなり笑う沙綾。

香澄も置いてけぼりは寂しいのか有咲の後を追い掛ける始末だし、なんだか悩んでた自分が馬鹿らしく思えてきた。

笑いすぎて零れた涙を拭きつつ、沙綾は秘めた思いを言葉にする。

「私、決めたよ」

「うん」

「今を全力で楽しむ。ポピパと過ごす時間、ソウ君と過ごす時間。どれも私にとってはかけがえのない時間だから」

「私も沙綾ちゃんと同じ。この空間がいつまでも続くとは限らないから」

「りみりん。今の私達つてさ、あれだよね」

「あれ?……あつ、うん!」

二人はせーの、と息を合わせ——

「幸せ……!!」

—2—『有咲の受難』—完—

短編集——1——

◇◇◇

『ワンタムですか？ ツータムですか？』

◇◇◇

とあるアプリの履歴から。

蒼真『犯人は名乗りを上げなさい』 19：28

——蒼真が写真を送信しました。

あこ『あああ!! あこのおおですう!!』 19：32

蒼真『やつばあちゃんか。スタジオに置きつばやったよ。今は受付にあるからまた

今度取りにおいて』 19：34

あこ『先輩、ありがとうございます!!』 19：34

花音『それ、チューニングキー?』 19：36

あこ『そーですよー』 19：40

沙綾『凄い形してるね』 19：41

麻弥『それは! もしかして!!』 19：41

あこ『自慢ではないですが………なんと限定品です!!』19:42

花音『あこちゃん、ツーバスだから使う機会多そうだね』19:42

沙綾『ツーバスかあ………難しくない?』19:42

あこ『ツーバス楽しいですよ!!』19:42

麻弥『ジブンもたまに使いますが、慣れたらファイルインの幅も広がって楽しいですもんね』19:43

花音『蒼真君と巴ちゃんもしてるの?』19:44

とも『アタシはツーペダでやってますね』19:45

蒼真『俺もツーペダ派やな』19:45

あこ『えー!!ソウマ先輩もやりましょうよー!!』19:45

蒼真『セツティングがめんどい』19:46

沙綾『ソウ君、ワンタムでもあるもんね』19:47

花音『蒼真君、ワンタムなんだ』19:47

蒼真『基本的にライブではそうやね。練習時とかは左寄りのツータムにすることもあ
るけど』19:48

とも『因みに蒼真先輩以外、全員ツータム?アタシはツータム』19:49

沙綾『うん』19:51

花音『私もツータム』19:52

あこ『あこもー』19:54

麻弥『皆さんと同じつすね』19:55

蒼真『くつ……ワンタムさん、此処までらしいつすわ』19:56

沙綾『そういうの良から』19:56

蒼真『そんなあ……せめてお慈悲だけでも』19:58

花音『個性が出て、良いんじゃないかな?』19:59

とも『だな。ちょっとやってみたい』19:59

あこ『ソウマ先輩!!どんまいです!!』20:01

蒼真『速報。我、ツータムのスパイなり』20:03

沙綾『だから、そういうの良から』20:04

『男子会く女子いたら社会的に死ぬく』

◇◇◇

◇◇◇

藍斗『貧乳より巨乳だわ』 2 3 : 2 8

ルー『以上同文』 2 3 : 2 8

蒼真『急になんやねん』 2 3 : 3 0

光ん『いつも通りじゃないですか』 2 3 : 3 1

蒼真『それもそうやな』 2 3 : 3 1

ルー『二人とも酷いねー』 2 3 : 3 2

藍斗『光はどっち?』 2 3 : 3 3

光ん『どっちでも良いです』 2 3 : 3 4

ルー『あー!!興味ない振りして、やり過ぎそうしてる』 2 3 : 3 4

光ん『そんなことはないですよ?そもそもそんな機会に恵まれたとしまして、その時
!相手の大きさにつべこべ言える立場に僕達はあるのですか!?!つてお尋ねしたい』 2

3 : 3 6

藍斗『俺、言うけどね』 2 3 : 3 6

蒼真『彼女さんに殴られないか？それ』 2 3 : 3 7

藍斗『おう。殴られた』 2 3 : 3 8

光ん『…………アホは別としてですよ』 2 3 : 3 8

藍斗『おお!?』 2 3 : 3 8

ルー『確かに…………光の言う通りかもしれない。でも!!夢見ても良いじゃないか!!僕

達は男だ!!』 2 3 : 4 0

蒼真『好きにしとけよ』 2 3 : 4 1

ルー『そんな蒼真はどうなのさ!?!』 2 3 : 4 2

蒼真『程よい感じで良い』 2 3 : 4 5

藍斗『無難だ』 2 3 : 4 5

光ん『どちらにも逃げられる答えを出すとは』 2 3 : 4 6

ルー『他の皆に報告ものだね』 2 3 : 4 6

蒼真『止める。命が足りない』 2 3 : 4 6

藍斗『おー。モテる男はやっぱり違いますねー』 2 3 : 4 8

蒼真『さてと…………』 2 3 : 5 0

- 藍斗 『何か恐怖のメッセが来たんやけど!!』 23 : 54
- 蒼真 『んなことより、良いのか?』 23 : 55
- 藍斗 『何が?』 23 : 56
- 蒼真 『明日、小テスト^トやぞ』 23 : 56
- ルー 『What's^{!!??}』 23 : 56
- 光ん 『僕達は明後日[!]ですよ』 23 : 57
- ルー 『それでもだよ!!』 23 : 57
- 藍斗 『ちよつくら逝ってくる』 23 : 57
- 蒼真 『早いな笑』 23 : 58
- ルー 『Good Night』 23 : 58
- 光ん 『もう一名追加です』 23 : 58
- 蒼真 『ずっと思ってたんやけどさ』 23 : 58
- 光ん 『はい』 23 : 59
- 蒼真 『藍斗の彼女ってそんなにあれよね』 23 : 59
- 光ん 『死にたくないの、黙秘です』 23 : 59
- 蒼真 『やね』 23 : 59

『シンバルって可愛くない?』

◇◇◇

◇◇◇

麻弥 『皆さんにご相談があるのですが』 21:25

あこ 『はい!!何ですか?』 21:28

蒼真 『あこちゃん』 21:29

あこ 『はい?』 21:29

蒼真 『相手はかのプロ様だ。生半可にかかると痛い目に遭うぞ』 21:30

麻弥 『いや』 21:30

あこ『そ、そんな……!!』 21:30

あこ『恐れ多いことを致しました』 21:30

花音『こらこら、ダメでしょ』 21:31

沙綾『麻弥先輩、馬鹿は無視で大丈夫ですよ。それで、相談と言うのは?』 21:3

1

麻弥『分かりました。では、まずはこちらを』 21:32

——麻弥が写真を送信しました。

——麻弥が写真を送信しました。

麻弥『皆さんのどちらがお勧めなのかお訊きしたく』 21:34

蒼真『またマニアックな代物や』 21:34

とも『これは、どちらもチャイナですよね?』 21:35

麻弥『はい。そうですよ』 21:35

あこ『あこは上かなく』 21:35

花音『どうして?』 21:35

あこ『カッコいいから!!』 21:36

花音『う、うん。そうだね』 21:38

沙綾『どう違うの?』 21:39

蒼真『前者はチャイナでも音の響きが顕著に鋭く表現されており、後者はふんわりした音が特徴的だと思うね』21:40

麻弥『そういうのが欲しかったです!!ありがとうございます!!』21:41

蒼真『どうもどうも。因みに俺は前者と同じメーカーを愛用しておる。つてことでそっちお薦め』21:42

沙綾『高そう』21:42

麻弥『確かに両方とも高校生では少し手が出しづらい値段ですね』21:43

とも『アタシはどっちも欲しいな』21:44

あこ『あこも!!』21:44

沙綾『バンドの曲調からして、私も少しは使ってみたいかな。どっちかって言われると分らないけど』21:44

花音『私はまだ買えるだけの余裕がない……』21:45

麻弥『なるほど』21:45

麻弥『皆さんのご意見、大変参考になりました!!』21:45

蒼真『にしても、好みが別れるな』21:46

とも『セッティングだけでも個性が出るのが凄い』21:46

花音『例えば、スタンドの高さとか?』21:47

あこ『それにタムやシンバルの配置とかですわね!!』21:47

沙綾『巴、この前にポンポン鳴るやつ使ってなかった?』21:49

巴『カウベルのことか?』21:51

沙綾『あれ、何処にあるの?』21:52

巴『バスドラの上に組み込んであるぞ』21:53

沙綾『そんなところに……』21:54

蒼真『マイ機材だと愛着沸くよね』21:55

あこ『分かります!!』21:55

麻弥『あ、全員が何かしらの機材を持っている感じですか?』21:56

あこ『チャイナやペダルとかある!!』21:56

花音『私はスネアかな』21:57

とも『ツーペダ』21:58

とも『あ、カウベルも』21:58

沙綾『私もペダルがあるけど』21:59

麻弥『ジブンもシンバルにペダルとか。何かと多いですねー』21:59

沙綾『ソウ君は?』22:00

蒼真『チャイナとツーペダとスネア、カウベルも一応』22:03

- とも『うわ。アタシ達の分、全部持つてる』22:04
- 蒼真『まだまだだ。他にも、穴あきシンバルとかスプラッシュもある』22:04
- 沙綾『いいなー』22:05
- 麻弥『多すぎても持ち運ぶのが大変で実際はそんなに使わないですよ?』22:06
- とも『そうなんですね』22:06
- あこ『蒼真先輩、シンバルが好きなんですか?』22:07
- 蒼真『まあね。特に』22:09
- 花音『特に?』22:10
- 蒼真『スプラッシュって世界最強に可愛いくね?』22:10
- 蒼真『おーい』22:12
- 蒼真『あれ?』22:15
- 蒼真『……誰も反応してくれへん』22:22